# 國譯禪學大成

第二十二卷

# 國譯禪學大成第二十二卷凡例

一、本大成第二十二卷には、大燈國師語錄二卷及び白隱禪師息耕錄開筵普說一卷の二部三卷を收載せり。

一、以上の中、大燈國師語錄は京都紫野大德禪寺の開山、特賜大燈國師宗峯妙超和尙一代の語要を輯錄したるものなり。本錄は、彼の大應語錄と共に、由來、我が臨濟門下の眼睛と稱せられ、我が國、禪宗の語錄中、宗旨を究明する點に於て、最も緊要なるものなり。其の內容は、大德寺住山語錄を初め、太宰府の崇福寺語錄、大德寺再住語錄及び頌古、拈古、行狀などより成り、何れも國師の思藻と禪風とを窺ふには好箇の資材たり。而して本錄の舊版は應仁の兵火に燒失して、現今殆んど世に傳はらず。今次國譯するに際しては、德川時代元和七年、江月和尙の再刊本に據れり。但し江月の再刊大燈錄は一帙三卷より成り、其の中の一卷は參詳語要なり。今次の國譯には都合によつて之を除きたり。

一、白隱禪師息耕錄開筵普說は、略して單に『息耕錄開筵普說』とも謂ふ。我が近代禪林の巨擘、正宗國師白隱和尙が、元文五年の春、一衆の請に應じて虛堂錄を開講するに

當り、參學の徒を提誨したる普說一篇を、寛保三年に上梓したるものにして、猶ほ卷末には禪師の息耕錄評唱剩語一篇を附せり。而して其の輯錄者は侍者の東胡、開版者は駿州原驛松蔭寺の文忠なり。息耕とは支那徑山の虛堂和尙の尊稱にして、息耕錄は卽ち虛堂錄の別稱なり。而して本書は寛保開板以後、安政七年には再版を見、又白隱廣錄、禪學大系などにも收錄せられて行はるゝのみならず、又我が臨濟門下、到る所に於て提唱せられつゝあり。今次、國譯するに際しては、寛保初刊本に據れり。

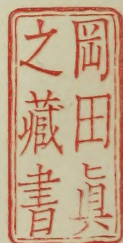
一、以上の中、大燈錄は彼の大應錄と共に、我が臨濟禪の眞髓を窺ふには是れに過ぎたる資料はなく、息耕錄開筵普說は、白隱が直截爲人の方法を遺憾なく吐露したる古今未發の言句にして、禪師の機鋒と其の惡手脚とを知るには最も便なるものなり。

昭和五年九月

編者　黃楊道人識す

# 國譯禪學大成　第二十二卷

## 目　次

# 國譯大燈國師語錄

## 解題

大燈國師妙超和尚は彼の大應國師南浦和尚の衣鉢を嗣ぎ、大いに宗風を擧揚し、一代五十六年間に京の雲居寺、大德寺及び筑前の崇福寺などに住し、多くの學者を打出し、就中、關山、徹翁、虎溪、白翁、海岸、金剛、直庵等は孰れも一時の名衲たり。而も其の末流は益々繁興して、我が臨濟禪界を二大分するに至れり。本錄は實に斯る大宗師の遺錄なれば、其の接化度生の手段方法なども、亦自ら他と異なる所ありて、錄中至る所、臨濟の禪風を宣揚し、雲門の機關を碎破し、以て其の極所に到つては山嶽を穿ち石壁を貫通して、鼻孔血淋漓たるものあり。寔に是れ臨濟禪の最高潮を宣ぶるものと謂ふも、敢て過當に非ざるなり。編者は何れも國師の侍者性智、宗貞、惠眼等にして、本錄第一卷には、嘉曆元年冬大德寺住山後の法語を收め、第二卷には筑前國太宰府崇福寺住山後の語要と大德寺再住後の法語並びに頌古、拈古及び禪興作の行狀等を收めたり。而して本錄、元和再刊本の卷末に左の識語あり。

開山大燈國師語錄板行、値ニ應仁世亂壞劫一時燒失矣。今既逮ニ百五十餘歲一。十一世之子系宗玩、以ニ衣盂資一再刊。三帙錄不ㇾ直ニ半文錢一。若遂他昭覽、則人謂ニ家醜向ㇾ外揚一矣。實元和七辛酉

年七月日、奉三寄二附于大德雲門庵一。

と。以て本錄の如何にして再刊せられしかを知るに足るべし。

國師の傳を案ずるに、諱は妙超、號は宗峯、播州揖西郡紀氏の子、弘安五年を以て生る。父母嘗て本州書寫山の觀音に禱つて吉夢を蒙つて師を生む。幼より神童と稱せられ、十一歲にして書寫山に登り、戒信律師に師事して天台を學ぶ。一日歎じて曰く「假使ひ九流三藏百家異道の書を究むるも、豈に不立文字直指單傳の宗に若かんや」と。卽ち出でて京都及び相州に至り、諸尊宿に歷參し、遂に鎌倉の萬壽寺に佛國國師高峯和尙に謁し、與に語りて機契ふ。一夕、僧堂に坐して、僧の百丈の語「靈光獨り耀いて逈かに根塵を絕す、體露眞常文字に拘らず」と頌するを聞いて、驀然として省あり、直に室に到つて所解を呈す。高峯之を頷く。嘉元二年、大應國師(紹明)、詔に應じて筑前の崇福寺より京都の韜光庵に入るや、師其の手段辛辣なるを聞いて、京に往いて大應に謁す。師卽ち問訊して曰く「學人遠く化下に來る、請ふ師一接せよ」と。大應曰く「老來力なし、且く坐して喫茶せよ」と。問答數番の後、大應深く鉗鎚を加ふ。爾より晝參暮請、敢て退轉せず。大應 詔を承けて京の萬壽寺に住するや、師之に從うて巾缾に侍す。大應、示すに「翠岩の眉毛ありや」、「雲門の「關」の字を以てす。師屢々下語す、國師曰く、「儞能く關の字に於て精彩を著けよ、他時別に須らく生涯あるべし」と。師力を盡して日夜精究す。德治二年、大應、相州に赴いて建長寺に住するや、師乃ち隨ひて彼の地に到り、一日、鑰鎖を案上に放

在するに當つて、忽然として大悟す。流汗背を浹し、急に方丈に趨つて、下語して曰く、「即今、幾んど和尙と趣を同じうす」と。大應大いに愕いて云く、「夜來、夢に雲門大師、吾が室に入ると見る、儞今日關字を透る、儞は是れ雲門の再來なり」と。師耳を掩うて出づ。翌日、投機の二偈を呈す、其の一に曰く、「雲關を透過して舊路無し、靑天白日是れ家山、機輪通變人の到り難し、金色の頭陀手を拱して還る」と。大應大いに喜び、筆を援つて自ら其の後に書して云く、「儞既に明投暗合す。吾れ儞に如かず。吾が宗、儞に到つて大いに世に興らん。只だ是れ二十年長養して、後人をして吾が證明を知らしめよ」と。師時に年二十六、德治二年なり。

延慶元年十二月、大應國師寂す。師、心喪既に畢つて京に歸り、洛東雲居寺に卜居し、衲子纔かに六七輩と刻苦自厲す。幾もなくして雲居寺を去り、京の北郊紫野に移つて庵居す。輦下の緇素、參扣するもの踵を接す。時に赤松圓心及び則祐、深く師の道價に歸依し、巨資を投じて堂宇を建て、龍寶山大德禪寺と稱し、師を請じて開山始祖となす。嘉曆元年十二月、師、大德に進んで開堂演法す。斯の時に當つて、玄惠法印等、儒者九名と偕に、朝に奏して禪宗を破却せんと欲し。且つ來つて師に難詰す。師一一之を論破し、諸儒皆稽首して遂に弟子の禮を執る。就中、玄惠最も心服して入室參禪し、其の第宅を施して大德の方丈となす。今の雲門庵是れなり。花園上皇、師の道風を聆いて詔を下して宮中に召し、法要を問ひ、奏答旨に愜ひて玄談時を移せり。是を以て、特に興禪大燈國師の號を賜ふ。且つ勅して大

德寺を以て朝廷第一祈禱所となさしむ。後醍醐天皇、又師に勅を下して淸凉殿に就いて陞座說法せしめ、恩寵益々渥し。是れより屢々禁掖に召されて勅問に奏對す。天皇、大いに喜んで、黃金・緋帛及び庄田を下し賜ひ、勅して高照正燈國師の號を加賜せらる。正中年間、南禪寺の席を空しうするや、三度勅を下して之を董さしめんとし給ふ。師固辭して竟に赴かず。建武元年、綸旨を下し、大德寺を陞して南禪寺と同格に列せしめ給ふ。筑前太宰府の大友賴尙、師を請じて崇福寺に住せしむ。師、先師大應國師開法の地たるを以て忻然として之に赴く。住持朞年ならずして又大德寺に歸り、德望一世を覆ふ。同四年（卽ち延元二年）の冬、師微疾を示す。後事を徹翁に付囑し、十二月二十一日夜、諸徒を遺誡して曰く、「我が滅後、火化して骨を丈室に置いて、別に塔を造ること勿れ」と。二十二日午時、胡床に端坐して寂を示さんと欲す。師、足疾有るを以て結跏趺坐すること能はず、首座此を以て憾となす。師自ら兩手を以て無理に左足を右股の上に加ふ、左膝傷折し、血流れて衣を染む。辭世の偈を書して曰く、「截二斷佛祖一、吹毛常磨、機輪轉處、虛空咬レ牙」と。筆を擲つて逝く。世壽五十六、僧臘三十四。門弟子遺命を奉じて靈骨を丈室の中に藏む。額を賜うて靈光といふ。嗣法十有五人、語錄二卷、假名法語一卷、祥雲夜話一卷あり。貞享三年、靈元天皇、勅して大慈雲匡眞國師の號を加賜せらる。猶ほ詳しくは本錄卷末の行狀を參看せられよ。

# 國譯大燈國師語錄

## (イ)龍寶開山(ロ)特賜興禪大燈高照正燈國師語錄

侍者性智編す

師、(ハ)嘉暦元年十二月八日に於て(ニ)開堂、衣を拈じて云く、「(ホ)千尺は丈六に過ぎず、(ヘ)雞足は大德に如かず。何が故ぞ。」衣を擧して云く、「頂戴して之を披す、誰か正色を辨ぜん。」

(ト)陞座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に(チ)爇向して、恭しく爲に、

(リ)今上(ヌ)皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。

(ル)陛下、恭しく願はくは、

(ヲ)龍圖永く固く、玉葉彌芳しからんこと

(イ)龍寶は後醍醐天皇賜ふ所の大德寺の山號なり。

(ロ)興禪大燈は花園上皇の特に賜ふところ。高照正燈は後醍醐天皇の加へ賜はりたる國師號なり。

(ハ)按ずるに、後醍醐天皇の正中三年丙寅春、嘉暦と改元す。

(ニ)祖庭事苑に、「開堂は譯經院の儀式なり、毎歲誕節必ず新經を譯し、上進一人の壽を祝す、前兩月二府皆集り以て譯經を觀る、之を開堂と謂ふ云云。」今宗門長老住持に命じ、演法の初め亦之を開堂と謂ふは、佛祖の正法眼藏を演べ、上天算を祝し、又以て四海生靈の福たるなり。

(ホ)佛說彌勒下生經に曰く、「其の城中大婆羅門主有り、名けて妙梵婆羅門と曰ふ、身の長千尺、胷の廣さ三十丈云云。」

を。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に、㋻太上天皇聖躬億萬歲を祝延したてまつる。恭しく願はくは、上德を千載に超え、㋕風聲を後昆に樹てたまはんことを。」

又香を拈じて云く、「此の一瓣の香、㋵金紫光祿大夫㋟黃門侍郎の爲に、祿算を增崇したてまつる。伏して願はくは、松栢の壽、㋹甫申の幹、㋞國家に柱石として、生民を撫育したまはんことを。

此の一瓣の香、法筵を光重する諸尊官、洎び滿朝の文武百僚の爲に、祿算を增崇し奉る。伏して願はくは、國を安んじ民を利すること、㋡伊周の古轍に齊しく、乃ち忠に、乃ち孝に、㋥思軻が正範に稱はんことを。

---

㋬阿育王經に云く、「七迦葉法藏を結び、竟に雞足山に入る云云。」

㋣百丈曰く、「上堂陞座、主事徒衆、雁立聆を側つ、賓主問醻、宗要を激揚し、法に依つて住することを示す。」此れ其の深意なり。

㋠爇は燒なり。

㋷史記孝武本紀第十二太史公自序に、今上本紀に作る、又其の事を述ぶるに、皆今上。今天子と云ふ。

㋦禮記謚法に曰く、「德天地を象る、帝と稱す、皇は君なり、美なり大なり、天の美大を惣稱するなり。」白虎通に、「德天地に合する者帝と稱し、仁義と合する者王と稱す、優劣を別つなり。」

㋸陛は階なり、由つて堂に升る所なり。天子必ず近臣有り、兵を執つて陛側に陳し、以て不虞を戒む。之を陛下と謂ふは、群臣天子と言ふ、敢て天子を指斥せず、故に陛下に在る者を呼んで之に告ぐ、卑に因つて尊に達するの意なり。

㋾天子龍を以て稱するは、易乾の九五に、「飛龍天に在り、大人を見るに利し。」正義に曰く、「九五は天子の象なり。」圖は版圖を謂ふなり、玉葉は猶ほ奕葉、累世と言ふがごとし、大燈徑山錄に「玉葉金枝萬萬春。」

㋻漢の高祖、父を尊んで太上皇と曰ふ、玆は花園上皇を指し奉る。

㋕詩經國風註に、「風は以て其の上の化を被り、以て言有り、而も其の言、又以て人を感ぜしむるに足る、物、風の動くに因つて以て聲有るが如し、而も其の聲、又以て物を動すに足るなり。」

此の香、雲門の關裏に在つて、久しく衲僧の鎭口訣と爲る。曾て鎌倉縣畔巨福山頭に拾ひ得て、和氣靄然たり。囊藏すること二十年來、香風隱せば彌露る。今日拈出して爐中に爇向して、㋟前住建長禪寺勅謚圓通大應國師南浦大和尙に供養して、用て法乳の恩に酧ゆ。」

師、座に就いて大衆を顧視して云く、「便ち恁麼に相見するも、早く㋹五須彌を隔つ。若し也た口を開くことを待たば、三生六十劫、還つて个の中の事を知る底有り麼、出で來つて衆に對して決擇せよ、看ん。有り麼有り麼。」僧問ふ、「雪山雪寒うして吾が佛成道、法堂功成つて和尙開堂、法幢を建て宗旨を立するは、正に此の時に在り、諸官筵に臨む、請ふ師提唱せよ。」師云く、「國淸うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」

---

㋦事物紀原に云く、「魏晉以來、左右光祿及び光祿大夫有り、皆銀印靑綬、重き者には詔して金章紫綬を加へ、因つて金紫光祿大夫と稱す、後周以て散官と爲す。」又職原鈔に云く、「正三位、唐には金紫光祿大夫と名く。」

㋸事物紀原に云く、「秦に黃門侍郞有り、歷代改めず、侍中と俱に門下の衆事を管す。凡そ禁門黃闥、故に黃門と號す、其の官黃闥內に給事す、故に云ふ。」

㋾詩經崧高篇に云く、「崧として高く、維れ駿に天に極り、維れ嶽神を降し甫と申とを生む、維れ申と甫と維れ周の幹なり、四國于に蕃し四方于に宣ぶ。」註に、「宣王の舅申伯出でて謝に封ぜらる、而して尹吉甫詩を作りて以て之を送る。言ろは嶽山高大にして其の神靈を降し、和氣以て甫侯申伯を生む、實に能く周の楨幹爲り、屛蔽として其の德澤を天下に宣ぶるなり。」左傳昭公七年に、「禮は人の幹なり云云。」

㋻史記霍光傳に云く、「將軍は國の柱石爲り。」師古曰く、「柱は梁下の柱石、柱を承くるの礎なり。」

㋕史記殷本紀に云く、「伊尹名は阿衡、湯に干かんと欲して由無し、乃ち有莘氏の媵臣と爲り、鼎俎を負ひ、滋味を以て湯を說き、王道を致す。」同魯周公世家に云く、「周公旦は周の武王の弟なり、文王在りし時より旦、子と爲りて孝、篤仁群子に異なり。」

㋵史記列傳に云く、「孟軻は鄒人なり、業を子思の門人に受く。」

㋟大應國師、諱は紹明、字は南浦、駿州郡の巨族藤氏の子、

僧云く、「直に一句無心の法を將つて、仰いで萬國泰平の瑞を祝す。」師云く、「滿口に道著す。」僧云く、「記得す、慈明開堂、僧有り問ふ、『錦を（ム）攢めて花を簇らすことは卽ち問はず、如何なるか是れ本來の面目。』明云く、『一言已に出づれば駟馬も追ひ難し』と、此の意如何。」師云く、「石は空裏より立ち、火は水中に向つて焚く。」進んで云く、「僧云く、『明明たり（ワ）三際の曉、皎皎として一輪孤なり。』明云く、『一輪底亦作麼生』と、意那裏にか在る。」師云く、「魚龍穴下盤根闊く、日月輪邊氣象深し。」進んで云く、「僧云く、『泊んど放過すべし』と、明便ち喝す、如何が端的を辨せん。」師云く、「（ヰ）劫石は消し易く、村話は改め難し。」進んで云く、「上來一一指示を蒙る、只だ和尚今日開堂說法するが如きんば、當機覿面如何が人を接せん。」師云く、「眉毛厮結び睢上厮拄ふ。」僧云く、「作家の宗師天然在ると有り。」便ち禮拜す。師云く、「且緩緩。」又云く、「更に問話の者有りや。」又僧有り、問ふ、「記得す、（ノ）龐居士、（オ）藥山を辭す、居士空中の雪を指して云く、『好雪片片別處に落ちず』と、意旨如何。」師云く、「（ク）提撥し難き處、轉た則有り。」僧云く、「時に全禪客といふもの有り、云く、『什麼の處にか落在す。』士打つこと一掌す、

幼にして本州建穏寺浄辯師に事へて出世の法を學ぶ、年十五、剃染具戒を受け、建長蘭溪隆和尚に參ず、正元の間大宋に入り、徧く諸方を叩く、時に虚堂愚和尚、淨慈に據り、道風高峻、學者敢て其の門に登る無し、師往いて謁す、機鋒相契ふ、遂に虚堂の法を嗣ぐ。傳は扶桑禪林僧寶傳に詳なり。

（ラ）觀無量壽佛經に云く、「阿難當に知るべし、佛身百千萬億夜摩天閻浮檀金の色の如し、佛身高さ六十萬億那由他恒河沙由旬、眉間白毫右旋宛轉、五須彌山の如し云云。」

（ム）攢は簇に同じ。

（ワ）三際は名義集に、「如來聖教、歳を三時と爲す、正月十六日より五月十五日に至る、熱時なり、五月十六日より九月十五日に至る、雨時なり、九月十

又作麽生。」師云く、「八角の(ヤ)磨盤空裏に走る。」僧云く、「全云ふ、『居士也た(マ)草草なることを得ざれ。』士云く、『汝恁麽に禪客と稱す、人の汝を放さゞること在る有らん』と、如何が(ケ)委悉せん。」師云く、「(フ)牙關を咬定す。」僧云く、「全云く、『居士作麽生』と、士又打つこと一掌す、意那裏にか在る。」師云く、「多に添へ少に減す。」僧云く、「虛堂祖翁云く、『則ち是れ兩掌すと雖も、其の間(コ)擡有り搦有り收有り放有り』と、如何か辨別せん。」師云く、「此に到つて大いに行はる。」僧云く、「上來已に慈悲を蒙る、向上宗乘の事如何が(エ)提唱せん。」師云く、「千峯雪白く、萬壑風寒し。」僧云く、「老師果して是れ人天の大導師。」便ち禮拜す。師云く、「爾に許す衆に歸し去れ。」

乃ち云く、「(テ)我れ本、心に希求する所有ること無し。氷瀑泉を鎖して聲細碎、今此の寶藏自然にして至る。風寒木を搖して影攣拳、泥んや我が宗印禪者、海南の(ア)檀越と、穹谷を冒し幽林を攀ぢて、親しく巨材を擇ぶ。山に堆く岳に積んで、溪水を控へて海と通ず。鯨波嶮しき處、獨り透路を解す。(サ)白牛を露地に驅り、軌を百里に結ぶ。(キ)成風を大野に鳩め、斧を一城に響す。或は(ユ)郊外の丁夫を費し、或は山中の普請を勞す。雲間の朱

---

六日より正月十五日に至る、寒時なり。」又過去現在未來を三際と云ふ。

(ヰ)劫石は大藏一覽に、「石廣さ一由旬、厚さ半由旬、兜率天人一百年に六銖衣を以て一拂し、石銷し盡くるに至り以て一劫と爲す。」

(ノ)傳燈八に云く、「襄州居士龐蘊は衡陽縣の人なり、字は道玄、世々儒を以て業と爲す、法を馬祖一に嗣ぐ。」

(オ)傳燈十三に云く、「澧州藥山惟儼禪師は絳州の人、姓は韓氏、法を石頭遷に嗣ぐ。」

(ク)提は「ひつさげ」、撥は「とる」なり。

(ヤ)磨盤は石臼なり。

(マ)草草は「いそがはしく」、叮嚀ならざるを云ふ。

(ケ)委悉は、委細、悉皆と[illegible]して一切殘さず知得することを[illegible]

(フ)牙關を咬定すとは、齒をくひ

堂を樹て、五彩の橑椽を布く。㋱燈王の廣座を安じ、㋯三道の寶階を莊る。區區役役、今日開堂、高く君臣に答へ、徧く過現未來に報ず。大覺海中一切の聖賢、生生參見する所の諸善知識、衆中衣鉢の道友、師僧、父母一切の恩門、一切の含靈、便ち是れ自然にして至ると爲んか、復た是れ功從りして成ると爲んか。諸人此に於て會得し去らば、山僧必ずしも解說せず、若し也た會せずんば曲げて務めて速かに說かん。」拂子を擧つて云く、「所以に前釋迦前ならず、後㋛彌勒後ならず、無邊の刹境、自他毫端を隔てず、十世古今、始終當念を離れず。一毛頭上に寶王刹を現じ、一彈指頭に大法輪を轉ず。然も是の如しと雖も、猶ほ是れ建化門中の事なり。向上宗乘の事、又作麼生。」又一拂子を擧つて云く、

しばること。

㋵擡は擧げる、搊はおさへ付けること。

㋓提唱は宗旨の大要を提起して說法するを云ふ。

㋢法華信解品に云く、「世尊是の時云々、窮子父の此の言を聞き、即ち大歡喜未曾有なることを得て而も此の念を作す、我れ本、心に希求する所有ること無し、今此の寶藏自然にして至る、世尊大富長者則ち是れ如來。」

㋐法界次第に云く、「檀那、秦には布施と言ふ、若し內に信有り外に福田有る者財物有り、三事和合の時心捨法を生じ、能く慳貪を破る、是れを檀と爲す。」

㋚法華譬喩品に云く、「是の時長者、諸子等安穩に出づることを得、皆四衢道中露地に於て坐し、復た障礙無きを見る、云云、諸の華纓を垂れ、綩綖を重敷し、丹枕を安置し、駕するに白牛を以てす。」

㋖莊子八徐無鬼篇に云く、「莊子葬を送り、惠子の墓を過ぎ、顧みて從者に謂つて曰く、郢人堊を其の鼻端に漫す、蠅翼の若し、匠石をして之を斲らしむ、石斤を運らして風を成し聽いて之を斲る、堊を盡して鼻傷かず、郢人立つて容を失はず。」

㋴爾雅に邑外を郊と曰ふ、丁は韵會に唐志に男子二十を丁と爲す、一說に二十以上を丁と爲す、人壽百年を期と爲す、一幹十年則ち丁四十強壯の時に當る、故に丁と曰ふ。

㋱維摩經不思議品に云く、「東方三十六恒河沙國に度りて世界有り、須彌相と名づく、其の佛須彌燈王と號す、今現在す、其の佛身長八萬四千由旬、其

「意氣有る時は意氣を添へ、風流を得る處且つ風流。小比丘妙超、忝く君聖に臣賢なるに遇ふ。(ヱ)靈山の付囑を忘れず、太平路を得て此の梵刹を成す。正法眼藏を敷揚し、聖壽無疆を祝延したてまつる。山河大地、草木叢林、情と無情と同じく光輝を蒙り、(ヒ)恭み力めて拜手す。妙超、下情、感激(モ)屏營の至りに勝へず。」

復た云く、「昔日世尊六年、雪を戴いて頭上に頂を安ず、(セ)明星忽ち現じて眼皮横に綻ぶ。是れより端無く大地の含識、个の(ス)如來の智慧德相を具すと謂ふことを解す。大衆若し是れ大地の衆生ならば、各各自ら生涯有らん。旦より暮に至り、步より步に至つて、每日起坐(イ)經行、一是一非、(ロ)瞥[illegible]、並に是れ他家活脫の生涯なり。何ぞ必ずしも如來の智慧德相を貴ばん。」

---

の獅子座の高さ八萬四千由旬嚴飾第一。」

(ミ)維摩經阿閦佛品に云く、「三道の寶階、閻浮提より忉利天に至る、此の寶階を以て諸天來下悉爲、無動如來を禮敬し、經法を聽受す。」

(シ)彌勒は經說に、「未來五十六億七千萬歲後に、此の土に出現し、釋尊に代つて衆生を濟度す」と云ふ。

(ヱ)南本涅槃經三壽命品に云く、「如來今無上正法を以て、諸天大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷に付囑す云云。」

(ヒ)字彙に共は恭と同じ、正考父三命じて益共し。力は强なり勸なり、書に穡を力むと。史記に學を力むと。

(モ)屏營は旁皇措を失ふの貌。

(セ)太子瑞應本起經に云く、「所作已に成じ、智慧已に了ず、明星出づる時廓然大悟、無上正眞道を得る云云。」

(ス)華嚴五十一出現品に云く、「爾の時如來無障碍、淸淨智眼を以て、普く法界一切衆生を觀て、是の言を作す、奇なる哉奇なる哉、此の諸の衆生、云何如來の智慧德相を具す。」

(イ)經行は坐禪の時、坐屈、或は睡眠を除く爲め、一定の時間に步行するを云ふ。

(ロ)瞥は字典に目を過ぐるなりとあれば「ちらりと、見る」こと。

(ハ)圓覺經に云く、「四善男子、末世の衆生成道を希望して悟た求めしむる無し、惟だ多聞を益し我見を增長す。」

(ニ)孟子梁の惠王篇に云く、「若のごとく爲す所を以て若のごとく欲する所を求むる、猶ほ木に緣つて魚を求むるがごとし。」

(ホ)法華方便品に云く、「所以は何

後代の兒孫、者の老漢に惑亂せらるゝことを得たり。往往に安禪靜慮、腦を刺して膠盆に入る。㋩悟を以て望と爲せば、㋥木に緣つて魚を求むるに似たり。之を望上心足らすと謂ふ、大いに須らく㋭世尊出世の本志に㋬辜負すべし。且く諸人に問ふ、上來既に道ふ、後代の兒孫他に惑亂せらるると。今也た便ち道ふ、大いに須らく佗の出世の本志に孤負すべしと。是れ世尊を褒するか、是れ世尊を貶するか、若し讃嘆すと道はゞ、甚に因つてか惑亂の言有る、若し誹謗すと道はゞ、亦何ぞ孤負の詞有らん。或は褒貶時に隨ふと道はゞ、未だ免れず語に隨つて解を生ずることを。更に㋣褒貶施さずと道はゞ、古佛の家風を失却す。直饒ひ總に㋠不恁麼と道ふも、明かに知る㋷莽莽鹵鹵にし去ることを、畢竟意那裏にか在る。所以に山僧曾て一頌有り、「明星を一見して雪重ねて白し、眼裏の㋦瞳人毛骨寒し、大地如し此の節を知ること無くんば、釋迦老子出頭すること難からん。」只だ眼裏の瞳人毛骨寒しと道ふが如きんば、是れ什麼の時節ぞ。若し能く恁麼にし去らば、日用㋸四威儀の中、壁立萬仞、㋾孤迥迥峭巍巍、天の普く覆ふが如く、地の普く載するが如し。虛空の含容するが如く、日月の照耀するが如し。

---

となれば、諸佛世尊唯だ一大事因緣を以ての故に、世に出現し玉ふ。舍利弗云く、何ぞ諸佛世尊唯だ一大事因緣を以ての故に、世に出現すと名づく、諸佛世尊衆生をして佛智見道を開かしめんと欲する故に。」

㋬孤負、俗に辜に作るは非なり、背くことを云ふ。

㋣褒は「ほむる」、貶は「おとす」なり。

㋠不恁麼は「さうでない」と譯す。

㋷莽は草莽の地、鹵はやせ地なり、事を爲す粗略にして心を用ひざるを云ふ。

㋦瞳人は「ひとみ」なり。

㋸行、住、坐、臥を四威儀と云ふ。

㋾孤迥迥は寥遠なり、峭はけはしきなり、巍巍は高大の貌。

㋻宋史に云く、「太宗神功聖德文

甚に因つてか此の如くなる。今日臘月八。」

擧す、㋻太宗皇帝、因に僧朝見す、帝、坐を賜うて問うて云く、「卿甚れの處よりか來る。」僧奏して云く、「㋕廬山の臥雲庵。」帝云く、「臥雲深き處天に朝せず、甚に因つてか者裏に到る。」僧對無し。師、驀に拄杖を拈じて云く、「太宗威容嚴肅、機晤宏遠、者の僧㋵寢默俛仰、其の禮を失はず。只だ後來雪竇明覺大師、代つて云く、『至化を逃れ難し』といふが如きんば、又作麼生。」卓拄杖一下して云く、「四海而今鏡よりも清し、㋟三邊誰か敢て封疆を犯さん。」

正旦、兩班を謝する上堂、僧問ふ、「日暖に風和して萬物新に相逢ふ。」便ち拜して又相賀す、「㋹三乘五性は問ふことを用ひず、應節の一句如何が擧揚せん。」師云く、「分明に記取して諸方に擧似せよ。」僧云く、「記得す、㋞僧趙州に問ふ、『如何なるか是れ趙州。』州云く、『東門南門西門北門』と、此の意如何。」師云く、「黑漆桶裏に墨汁を洗ふ。」進んで云く、「僧云く、『這个を問はす。』州云く、『儞趙州を問ふ』と、意那裏にか在る。」師云く、「㋡烏龜壁を鑽す。」進んで云く、「某甲、趙州を問はず、又老師を問はず、只だ是れ一問有

---

武皇帝諱は炅、初の名は匡、宣宗第三子なり、母を昭憲皇后杜氏と曰ふ。」

㋕一統志に云く、「南康府廬山は府の西北二十里に在り、古、南障と名づく、世傳ふ、周の武王の時、匡俗兄弟七人廬を結んで此に隱居す、故に名づくるなりと。」

㋵寢は容貌の揚らざるなり、俛は俯と同じ。

㋟班固曰く、「武帝廣く三邊を開く。」邊は遠邊なり。

㋹三乘は聲聞、圓覺、菩薩、五性は聲聞性、圓覺性、菩薩性、不定性、外道性。

㋞此の話は碧巖錄第九則にあり。

㋡擊節錄第一則圜悟下語に云く、「烏龜破壁を鑽る。」烏龜は黑色の龜なり。

㋤按するに、本邦貞享庚寅を建て正と爲す、之を孟春と謂ふ

り、請ふ、師答話せよ。」師云く、「那僧の背後に向つて問訊すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち大衆恩に霑ふ、學人禮謝せん。」師云く、「只だ實に與麼地に到らんことを要す。」進んで云く、「重重に相爲にすることを領す。」師云く、「領ずる底作麼生。」進んで云く、「也た是れ空しからず。」師云く、「今日の節に因らず。」

乃ち横に拄杖を拈じて云く、「⑨寅朝乍ち臨んで正景新に至る、梅梢瑞氣を呼べ、宥鳥賀音を報ず。左右保愛の節を壯にし、東西納祐の門を開く。當堂歩入つて祥麟穩かに、海樹飛び來つて白鳳閑なり。」拄杖を卓して下座。

⑩元宵上堂、僧問ふ、「昔日西天の⑪迦葉初めて燈を傳ふ、未審し如何なるか是れ初傳底の燈。」師云く、「⑫夜半正に明かに天曉露れず。」進んで云く、「迦葉已に之を傳ふ、⑬龍潭甚と爲てか吹滅す。」師云く、「倒に牛に騎つて佛殿に入る。」進んで云く、「後來僧有り、⑭香林に問ふ、『如何なるか是れ室内一盞の燈。』林云く、『三人龜を證して鼈と作す』と、是れ迦葉底を答ふるか、龍潭底を答ふるか。」師云く、「⑮壺中の天地、別に日月有り。」進んで云く、「只だ三人龜を證して鼈と作すと道ふが如きんば、作麼生か端的を辨

---

なり、故に寅朝は猶ほ歳朝と言ふがごとし。

⑩史記樂書に云く、「漢家太一を祀る、昏時を以て祀り明に到る、今人正月望日夜遊燈を觀る、是れ其の遺事。」

⑪名義集に云く、「迦葉此に飲光と云ふ、二萬歲の時出でゝ正覺を成す。」

⑫會元洞山章に云く、「師因に曹山辭す、遂に囑して曰く、吾れ雲岩先師の處に在つて、親しく寶鏡三昧を印し、事的要を窮む、今汝に付す、詞に曰く、是くの如きの法佛祖密付、云々、夜半正に明に天曉露れず、物の爲に則と作る。」

⑬聯燈一に云く、「天皇道悟禪師の法嗣、澧州龍潭崇信禪師は、本渚宮賣餅家の子、未だ氏を詳にせず。」

⑭聯燈二十六に云く、「雲門文偃禪師の法嗣、益州香林澄遠禪

せん。」師云く、「石人相耳語す。」進んで云く、「忽ち人有り、如何なるか是れ室内一盞の燈と問はゞ、聻。」師云く、「㋔紫羅帳裏に眞珠を撒す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち㋗動地放光、放光動地」といつて便ち禮拜す。師云く、「大家白知せよ。」

乃ち云く、「燈燈無盡の燈、光明千萬里、捏聚すれども也た卽かず、放開すれども也た離れず、一片虛凝にして宇宙寬し。知らず㋳燃燈誰が爲にか記す。」拂子を以て禪牀を擊つこと一下して、便ち下座。

二月旦上堂、僧問ふ、「春色高下無く、花枝短長有り。花枝の短長は人人知る、如何なるか是れ春色底。」師云く、「山聳げ海浸す。」僧云く、「記得す、㋮仰山、僧に問ふ、『近離甚れの處ぞ。』僧云く、『廬山』と、此の意如何。」師云く、「笑を解する底も也た少し。」進んで云く、「仰山云く、『曾て五老峰に遊ぶや。』僧云く、『曾て遊ばず』と、又作麼生。」師云く、「㋘邯鄲唐步を學ぶ。」進んで云く、「仰山云く、『闍黎曾て遊山せず』と、如何が端的を辨ぜん。」師云く、「黃金の賤しきは泥土の貴きには如かず。」進んで云く、「雲門大師云く、『此の語皆慈悲の爲の故に、落草の談有り』と、意那裏にか在る。」師云く、

---

師は漢州綿竹の人、姓上官氏の子。」

㋼後漢書七十二方術傳に云く、「費長房は汝南の人なり、曾て市掾と爲る、市中老翁有りて藥を賣る、一壺を肆頭に懸け、市罷むに及んで輙ち壺中に跳り入る、市人之を見る莫し、唯だ長房樓上に於て之を覩、之を異とす。」

㋔羅は羅縠「ウスモノ」ゆゑ、外から眞珠の光は、見えすくなり、心底を殘さず、打ち出して見せるの喩へなり。

㋗法華序品に云く、「普佛世界六種震動云々、爾の時佛眉間白毫相光を放つて、東方萬八千世界を照す、周徧せずと云ふこと靡し」。

㋳金剛經に云く、「須菩提若し法有りて、如來阿耨多羅三藐三菩提を得玉ふ者ならば、燃燈佛則ち我が與に授記せじ。」

「聽教あれ兩頭に走ることを。」僧云く、「若し樓に登つて望まずんば、焉ぞ滄海の深きことを知らん。」便ち禮拜す。

師乃ち云く、「春風㋫浩浩、春鳥㋙喃喃、春雲㋓冉冉、春水㋢漫漫。時なる哉時なる哉、時何ぞ孤負せん、諸人の東看西看するに一任す。忽ち个の漢有つて出で來り、老和尚只だ其の時を知つて其の節を知らず、今朝天寒く雪の下ること冬の如しと道はゞ、山僧佗に向つて道はん、我れ一件の事を餘して儞が一問を引き得たりと。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「春色依依として花木芳菲、㋐雙樹甚に因つてか一榮一枯なる。」師云く、「古今興麼に見る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち人天悉く㋚世尊所入の三昧を見ること莫しや。」師云く、「泥人眼赤し。」進んで云く、「記得す、㋖德山一日齋晩し、老子托鉢して方丈より下り來ると、此の意如何。」師云く、「歩歩荊棘を生ず。」進んで云く、「㋴雪峰云く、『鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに、老子托鉢して什麼の處に向つてか去る』と、又作麼生。」師云く、「相見得易きは好し。」進んで云く、「德山低頭して方丈に歸ると、如何が端的を辨せん。」師云く、「闇室に燈を藏す。」進んで云く、「岩頭開

---

㋮此の話は碧巖錄三十四則にあり。

㋘邯鄲唐歩を學ぶとは、方語に兩處功を失す。漢書班氏叙傳に云く、「昔し歩を邯鄲に學ぶ者有り、曾て未だ其の彷彿たることを得ず、又復た其の故歩を失ふ、遂に匍匐して歸るのみ。」

㋫浩浩は徧く行きわたるなり。

㋙喃喃は口多きなり、「ぺちや、ぺちや」と譯す。

㋓冉冉は雲の動く貌。

㋢漫漫は水の廣きなり。

㋐大般涅槃後分に云く、「爾の時世尊娑羅林下寶牀に寢臥す、其の中夜に於て第四禪に入る、寂然として聲無し、是の時頃に於て便ち般涅槃大覺世尊涅槃に入り已る、其の娑羅林東西二雙合して一樹と爲り、南北二雙合して一樹と爲り、寶牀を垂覆して如來を蓋

いて云く、『大小の德山未だ末後の句を會せざること在り』と、還つて諦當すりや否や。」師云く、「斷絃は須らく是れ鸞膠にして續ぐべし。」進んで云く、「德山云く、『爾老僧を肯はざる那』と、意旨作麽生。」師云く、「誰か知らん、只だ是れ璧を受くる心有ることを。」進んで云く、「岩頭密に其の意を啓すと。」師云く、「瀟湘の景を覽盡して、船に和して畫圖に入る。」進んで云く、「德山、次の日陞堂、果して尋常に迥に殊なりと、如何が理會せん。」師云く、「(ス)法出でて姦生る。」進んで云く、「岩頭掌を拊つて大衆に謂つて云く、『且喜すらくは老漢末後の句を會せり』と、意那裏にか有る。」師云く、「事久しうして變多し。」進んで云く、「學人今日小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「兩肩に擔ひ將ち歸り去れ。」

乃ち云く、「世尊入涅槃に臨んで、(セ)手を以て胸を摩して普く大衆に告げて云く、『汝等諦かに我が紫磨金色の身を觀よ』と。」驀に拄杖を竪起して云く、「者个は是れ大德が拄杖子、阿那个か是れ金色の身。諸人一見便見せば、妨げず一得永得なることを。其れ或は未だ然らずんば、山僧諸人を謾じ去らん。百億の須彌、百億の日月、恒沙の國土、恒沙の諸佛、盡く拄杖頭上に

---

ふ、其の樹慘然白に變ず、白鶴の如し。」

(サ)大般涅槃後分に機感茶毘品に云く、「時に大迦葉五百の弟子と耆闍崛山に在り、拘尸城を去る五十由旬、身心寂然三昧に入る、正受中に於て倏爾、心驚き擧身顫慄す、定中より出でゝ諸山を見る、地皆震動す、即ち如來已に涅槃に入り玉ふことを知る云云。」

(キ)傳燈十五聯燈三十に云く、「鼎州德山宣鑑禪師は劍南周氏の子なり、法を龍潭に嗣ぐ。」

(コ)雪峰義存禪師は法を德山宣鑑に嗣ぐ。

(ス)前漢書禮樂志に云く、「今漢秦の後を繼ぐ、之を治めんと欲すと雖も、奈何ともす可き無し、法出でゝ姦生じ、令下りて詐起る。」

(セ)大般涅槃後分上遺敎品に云く、「爾の時世尊師子座に於て

在つて、金色の身光を增添し、涅槃の妙相を莊嚴す。諸人還つて見るや、若し尙ほ未だ見ずんば、」拄杖を卓して云く、「年年二月花猶藉。」

三月半上堂。僧問ふ、「春風を得ずんば花開かじ、花の開くことは須らく春風の力を藉るべし。知らず春風什麼の力か有る。」師云く、「還つて腦門の冷かなるを覺ゆるや。」僧云く、「㊀馬大師、百丈と行く次で、野鴨子の飛び過ぐるを見て大師云く、『是れ什麼ぞ』と、意旨如何。」師云く、「此の門に遇ふこと罕なり。」僧云く、「丈云く、『野鴨子。』大師云く、『什麼の處にか去る』と、又作麼生。」師云く、「之を爭ふに足らず。」僧云く、「丈云く、『飛び過ぎ去る。』大師遂に百丈の鼻頭を扭る、如何が識取せん。」師云く、「驢を打つて馬の知るに聽す。」僧云く、「丈、忍痛の聲を作す、大師云く、『何ぞ曾て飛び去らん』と。」師云く、「飯を嚼んで嬰兒を餵ふ。」僧云く、「大師次の日陞堂、衆纔かに集る、百丈出でて席を卷く。意那裏にか在る。」師云く、「金、金に博へず。」僧云く、「大師便ち方丈に歸つて百丈に問ふ、『我れ適來上堂、未だ曾て說法せず、儞什麼としてか便ち席を卷卻す』と、如何が商確せん。」師云く、「樂むときは則ち共に樂む。」僧云く、「丈云く、『昨日和尙に鼻孔を扭得せられて痛む』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「風吹けども入らず。」僧云く、「大師云く、『儞昨日甚れの處に向つてか心を留む』と、此の意如何。」師云く、「遊子乍ち聞いて征袖濕ふ。」僧云く、「丈云く、『今日鼻頭又

---

眞金手を以て、身に著くる所の僧伽梨衣を却け、紫磨黃金師子胸臆を顯出し、普く大衆に示して言く、汝等一切天人大衆應當に深心我が紫磨黃金色の身を看るべし。爾の時四衆一切、大覺世尊眞金色の身を瞻仰し目暫くも捨てず。」

㊀馬大師野鴨子の話、碧巖錄第五十三則にあり。

痛まず』と、也た如何が理會せん。」師云く、「水酒げども着かず。」僧云く、「大師云く、『儞深く今日の事を知る』と、是れ何の道理ぞ。」師云く、「貴く買うて賤く賣る。」僧云く、「丈乃ち禮を作して卻つて侍者寮に歸つて哭す、意又作麼生。」師云く、「攢簇し得ず。」僧云く、「同事の侍者、問うて云く、『儞哭して什麼をか作ん。』丈云く、『儞去つて和尚に問取せよ』と、如何が辨別せん。」師云く、「那咤、帝鐘を撲つ。」僧云く、「侍者遂に去つて大師に問ふ、大師云く、『儞去つて佗に問取せよ看ん』と、意什麼の處にか在る。」師云く、「從來个の老を疑著す。」僧云く、「侍者卻つて寮に歸つて、百丈に問ふ、丈卻つて呵呵大笑す。如何が委悉せん。」師云く、「瓦解冰消。」僧云く、「侍者云く、『儞適來哭す、而今什麼と爲てか卻つて笑ふ。』丈云く、『我れ適來哭す、如今卻つて笑ふ』と、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「九を唱へて十と作す。」僧云く、「謂つ可し、親言は親口より出づと。」師云く、「禮拜の好きには如かず。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「桃花は紅に李花は白し、（一四）靈雲玄沙阡陌に立つ、祖道を相爭ふて敢て休せず、（一五）其の勢生きず（一六）韜略多し。春雨自ら斷和の句を知る、濛濛として洒ぎ去つて空しく蕭索。兩兩三三根に歸することを解す、四維上下尋覓し難し。既に尋覓し難し、甚に因つてか大地

（一四）聯燈に云く、「靈雲は長慶大安禪師の法嗣、福州靈雲志勤禪師なり、福州玄沙師備禪師は本州謝子の子なり。初めて雪峰に謁す。」玄沙錄に云く、「靈雲、玄沙に到る云々、靈雲曰く、三十年來劍客を尋ね、幾回か葉落し、幾たびか枝を抽んづ、桃花を一見してより後、直に如今に至つて更に疑はず、沙曰く。甚だ桑梓の能を生ず、雲曰く、向に道ふ、故に外物に非ずと、沙曰く、如是如是、雲曰く、不敢不敢。沙曰く、諦當なることは甚だ諦當、敢て保す、老兄の未徹

も截せ起すことを得たる。」喝一喝して云く、「一著を放過す。」

㋝龍藏主を謝する上堂、「山僧が拂子三種の禪を說く。」忽ち拂子を竪起して云く、「此れは是れ佛祖の眼睛を換却する底の禪。」亦一圓相を打して云く、「此れは是れ人天の性命を指出する底の禪。」禪牀を撃つこと一下して云く、「此れは是れ雲雨の大用を發する底の禪。然も是の如くなりと雖も、若し是れ一氣一藏を轉得する底の人に非ざるよりんば、爭か能く多少の風を消得せん。」

㋜佛生日上堂、僧問ふ、「世尊今日降下、未だ地に至らざるに、㋑九龍水を吐いで金軀を洗ふ、早く是れ一場の敗缺。和尚屈を雪がんと要するも也た是れ泥裏に土塊を洗ふ。」師云く、「狗、赦

---

在なることを、雲曰く、和尚還つて徹するや也た未だしや、沙曰く、與麼にして始めて得ん。」

㋪史記廉頗藺相如列傳に云く、「相如功の大なるを以て、拜して上卿と爲す、位廉頗の右に在り、廉頗曰く、我れ趙將と爲り、攻城野戰の大功有り、而して藺相如徒に口舌を以て勞と爲し、而も位我が上に居る、且つ相如素賤人、吾れ羞づ之れが下爲るに忍びず。宣言して曰く、我れ相如を見ば必ず之れを辱めん。相如聞き肯て與に會せず、相如朝する時、毎に常に病と稱して廉頗と列を爭はず、已にして相如出で望見し、車を引いて避け匿る、是に於て舍人相與に諫めて曰く、親戚を去つて君に事ふる所以の者は、徒に君の高義を慕へばなり、今君廉頗と列を同じうし、廉君惡言を宣して君之を畏れ匿る、恐懼殊に甚だし、且つ庸人すら尚ほ之を羞づ、況んや將相に於てをや、臣等不肖請ふ辭し去らん。藺相如固く之を止めて曰く、公の廉將軍を視る、秦王と孰れぞ、曰く、若かざるなり、相如曰く、夫れ秦王の威を以て而も相如廷にして之を叱し、其の群臣を辱かしむ、相如駑なりと雖も獨り廉將軍を畏れんや、顧み吾れ之を念ふに、彊秦の敢て兵を趙に加へざる所以の者は、徒吾が兩人在るを以てなり、今兩虎共に鬪ふ、其の勢倶に生きず、吾れ之れが爲にする所以の者は、以て國家の急を先にして私讎を後にするなり。廉頗之を聞き、相如の門に至り、罪を謝して曰く、鄙賤の人將軍寬なること此に至るを知らずと。卒に

書を銜む。」進んで云く、「天を指し地を指して金蓮足を捧ぐ、甚に因つてか脚下紅絲線斷えざる。」師云く、「山上の路を知らんと要せば、須らく去來の人に問ふべし。」進んで云く、「(ロ)韶陽老人、正令方に行ず、諸方未だ免れず錯を將つて錯に就くことを。」師云く、「夜行白を踏むこと莫れ、水にあらざれば定んで是れ石。」進んで云く、「老師の點發に因らずんば、容易に慈顏を瞻難し。」師云く、「月は中峰に到つて猶ほ未だ歸らず。」進んで云く、「三十年後、此の話大いに行はれん。」師云く、「馬に千里無きも謾に追風。」

乃ち云く、「本曾て上天せず、何ぞ下天を論ぜん。本曾て託胎せず、誰か出胎と說かん。所以に道ふ、淨法界身本出沒無しと。既に然り、是の如し、甚に因つてか東家は杓柄長く、西家は杓柄短き。會得せば各各惡水驀頭に潑がん。然らざれば之を齊しうするに禮を以てす。」

結夏小參、僧問ふ、「『德山小參、答話せず、問話の者有らば三十棒』と、佗家親切の處如何が識得せん。」師云く、「來者は來らず去者は去らず。」進んで云く、「『趙州小參、答話を要す、問話の者有らば、一問を置き將ち來れ』と、又作麼生。」師云く、「買價大例を破る。」進んで云く、「風は虎に從ひ雲は

---

相與に驟んで刎頸の交を爲す。」

(モ)文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜之れを六韜と謂ふ、太公望の兵法なり。上畧、中畧、下畧之れを三畧と謂ふ、黃石公の兵法なり。

(セ)龍藏主は、正燈世譜に云く、「横岳派崇福十二世雲川宗龍を出す」と、蓋し是れならん乎。

(ス)修行本起經上菩薩降神品に曰く、「四月八日夫人出遊、流民樹下を過ぐ、衆華開敷、明星出づる時、夫人樹枝を攀づ、便ち右脅より生れて地に墮ち行くこと七步、手を擧げ住つて言く、天上天下唯我獨尊と。」

(イ)普曜經二に云く、「生ぜんと欲する時、三十二瑞應品、天帝釋梵忽然として來り下り、雜名香水菩薩を洗浴し、九龍上に在りて香水を下し、聖尊を洗浴す。」

龍に從ふ。豈に是れ用處一般なること莫しや。」師云く、「且喜すらくは沒交渉。」僧云く、「學人今夏和尚に依附す、未審し、作麼生か手脚を下さん。」師云く、「鎖つて擧することを莫れ。」

乃ち云く、「西天鵝護の限、聖制臘人の期、衲子慧身の時、吾が家禁足の節。[illegible]月輔明清風匝地、看雲亭邊竹影階を拂ふ。此の圓覺の伽藍に於て四聖六凡を聚集し、此の平等性智に於て、情と無情とを安居せしむ。只だ七[illegible]の三處に夏を度るが如きんば、還つて這裏を出得するや也た無や。若し[illegible]人若し點檢し得出づれば、九十日の內敢て虫豸に孤負せじ。若し也た點檢し得ずんば、」拄杖を卓して云く、「金剛の眼睛十二兩。」

復た擧す、世尊一日陞座、文殊白槌して云く、「諦觀法王法法王法如是。」世尊便ち下座す。師拈じて云く、「大湖月を浸し長橋波に颺す。若し高吟大嘯するに非ずんば、爭か能く此の時の情を賞せん。然も風流觀つん可しと雖も、其れ便宜を得る處、便宜に落つるを奈せん。具眼の禪流、請ふ、緇素を辨じて看よ。」

其の日上堂、僧問ふ、「衲僧箇箇氣宇王の如し、今朝甚に因つてか(ヘ)區宇

---

(ト)雲門老人云云は、雲門廣錄中に云く、「擧す、世尊始めて降生、一手は天を指し一手は地を指し、周行七步、四方を目顧して云く、天上天下唯我獨尊と。師曰く、我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫却せしめん、貴ぶらくは天下太平を圖らんと。」

(ヘ)區宇は寰區、此れ王の統ぶる所、諸國土有るが如し、故に區と曰ふ、區別なり、皆一天覆ふ所、故に宇と曰ふ。

(ニ)魏志二十二列傳に曰く、「盧毓、字は子家、涿郡涿の人なり云云、帝即ち詔して曰く、其の人を得ると否とは盧生に在るのみ、選擧名有るを取る莫れ、名は地に畫ける餅を作るが如し、啖ふ可らず云云。」

(ホ)圓覺經に曰く、「即ち道場を建つ、當に期限を立つべし、若し長期を立てば、百二十日、

に坐在す。」師云く、「(ニ)畫餠飢に充つ。」進んで云く、「若し也た此の事を論せば、靑天白日の如し、更に甚れの處に向つてか(ホ)剋期取證せん。」師云く、「路(ヘ)桃源に入つて深うして更に深し。」進んで云く、「慈明黃龍に問ふ、『雲門三頓の棒、洞山喫す可きか喫す可からざるか』と、意那裏にか在る。」師云く、「兩鏃の蒺蔾。」進んで云く、「黃龍云く、『喫す可し』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「直饒ひ山岳も也た藏し難し。」進んで云く、「明云く、『終日鴉鳴鵲噪、幾棒をか喫す』と、意旨作麼生。」師云く、「(ト)一種是の聲限り無き意、聽くに堪へたる有り、聽くに堪へざる有り。」僧便ち禮拜す。

師乃ち擧す、(チ)五祖云く、「今日結夏、大衆に供養す可き無し。一家の宴を作して諸人を管待

---

中期百日、下期八十日、淨居に安置す。」

(ヘ)事文後集、陶潛桃花源記に曰く、「晉の大元中、武陵の人、魚を捕ふるを業と爲し、溪に緣つて行き、路の遠近を忘る、忽ち桃花林岸を夾んで數百步中、雜樹無きに逢ふ、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚だ之を異とす、復た前み行き、其の林を窮めんと欲す、林盡き水源、便ち一山を得たり、山に小口有り、髣髴として光有るが若し、便ち舟を捨て口より入る、初めは窮めて狹く、纔に人を通す、復た行くこと數十步、豁然開朗、土地平曠屋舍儼然、良田美池桑竹の屬有り、阡陌交通雞犬相聞ゆ、其の中往來の種作男女、衣着悉く外人の如し、黃髮垂髫並んで怡然として自ら樂む、漁人を見て乃ち大に驚いて從り、來る所を問ふ、具に之を答へ、便ち家に還らんことを要す、爲に酒を設け雞を殺し食を作る。村中此の人有るを聞き、咸く來り問訊して自ら云く、先世秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐ絕境に來りて復た出でず、遂に外人と間隔す。問ふ、今是れ何の世ぞ、乃ち漢有るを知らず、魏晉を論ずる無し云云。」

(ト)五祖錄角を聞くの頌に云く、「幽幽寥角孤城を發す、十里山頭漸く杳冥、一種是の聲限り無き意、聽くに堪へたる有り聽くに堪へざる有り。」

(チ)續燈廿、聯燈十六、會元十九に曰く、「白雲端の法嗣、蘄州五祖法演禪師は綿州鄧氏の子云云。」

(リ)輟耕錄、和曲院本名目の中に賀貼萬年歡有り。

(ヌ)首座、書記、藏主は敕修淸規下

せん。」遂に手を擧して云く、「囉囉招、囉囉逕、囉囉逕。怪しむこと莫れ空疎なることを、伏して惟れば珍重。」師云く、「五祖老人與麽の家宴、謂つ可し管待千足し、百味缺くること無しと、然も是の如しと雖も、只だ是れ一時の慶快有り。大德今日結夏、也た箇の家宴有り、坐者立者倶に(リ)萬年の歡を成し、見者聞者同じく太平の歌を唱ふ。且く道へ、其の中の節拍、又作麽生。」拂子を以て禪牀を擊つこと一下して云く、「薰風自南來、殿閣生微凉。」

(ヌ)首座、書記、藏主の秉拂を謝する上堂、「(ル)西來師に呈して靈樹の待遇を厚うし、(ヲ)脚底驢の如くにして慈明の堂奧を踏む、法系其の時に於て人焉んぞ廋さんや。後の今を視ること今の古を視るが如し、何ぞや。智藏光を發するこ

---

に云く「前堂首座は叢林を表率し人天の眼目、分座說法後昆を開鑿す、後堂首座は位後版に居り宗風を輔贊し、軌則莊端衆の模範爲り、蓋し衆多きを以ての故に前後に分つ。書記は即ち古規の書狀なり、職文翰を掌る、凡そ山門榜疏書問祈禱詞語悉く屬す、蓋し古の名宿多く朝廷の徵召を奉ず、及び名山大刹凡そ聖旨勅黃を奉じ、住持は即ち謝表を具す、示寂に遺表有り、或は賜ふ所の所問倶に表を奉る、而して住持專ら大法に柄にして文字を事とする無し、元戎幕府の署記室參軍の名を取り、禪林に於て特に書記を請じ以て之を職らしむと云云。藏主は職經藏を掌り、兼ねて義學に通ず、凡そ看經する者經藏に入るときは、先づ堂主に白し、藏主に到り相看る、遂歸位に按じ、對觸一拜するは此れ古規なり、今各僧看經する者は多く衆寮に就く。」

(ル)會元十五に云く、「韶州雲門山光奉院文偃禪師は嘉興の人なり。姓は張氏、法を雪峯に嗣ぐ。師睦州に參ず、州纔に來るを見て、便ち門を閉却す、師乃ち門を扣く、州曰く、誰ぞ、師曰く、某甲、州曰く、甚麽をか作す、師曰く、己事未だ明めず、乞ふ師指示せよ、州門を開き、一見して便ち閉却す、師是くの如くすること連つて三日、第三日に至る、州門を開く、師乃ち拶入す、州便ち擒住して曰く、道へ道へ、師擬議す、州便ち推し出して曰く、秦時の轆轢鑽と、遂に門を掩ふ、師足を損す、師此れより悟入す。州指して雪峯に見えしむ、初め知聖靈樹に住する二十年、

とは鞭影に資る。」拂子を擊つて下座。

良和典座を謝する上堂、擧す、金牛每日齋時に、自ら飯を將つて、僧堂前に於て舞を作して呵呵大笑して云く、「菩薩子喫飯來」と。師云く、「金牛和尙務めて細嚼飢ゑ難きに在れども、只だ是れ㋻衆口調へ難し。大德今夏、屋裏人有ることを得たり、一衆自然に㋕吾が臂の酸なることを聞かず。諸人此の人を知らんと要すや。」拄杖を卓して云く、「㋵發して節に當る、之を和と言ふ。」

㋟端午上堂、僧問ふ、「文殊、善財をして藥を採らしむ。善財云く、『盡大地是れ藥ならざる者有ること無し』と、此の意如何。」師云く、「靴を穿つて水上に立つ。」僧云く、「文殊云く、『是れ藥なるもの採り將ち來れ』と、意那裏にか在る。」

---

首座を請せず、常に云く、我が首座生ぜり、我が首座牧牛せり、我が首座行脚せり、一日鐘を擊たしめ、三門外に首座を接す、衆出でて迓ろ、師果して至る、直に請じて首座寮に入り、包を解かしむ。」

㋻會元十七に云く、「黃龍南禪師法を慈明圓に嗣ぐ、師福嚴賢に謁す、賢命じて書記を掌らしむ、俄に賢卒す、郡主慈明を以て之を補ふ、既に至る、其の諸方を貶剝し、件件數々邪解を爲すを目し、師之が爲に氣索し、遂に其の室に造る、明曰く、書記徒を領じて遊方す、借使ひ疑有らば坐して商略す可し、師哀懇愈切なり、明曰く、公雲門の禪を學ぶ、必ず其の旨を善くせん、洞山三頓の棒を放つと云ふが如きんば、是れ棒を喫するの分有るか、棒を喫するの分無きか、師曰く、棒を喫するの分有り、明色を莊にして曰く、朝より暮に至る、鵲噪鴉鳴皆應に棒を喫すべし、明即ち端坐、師の炷香作禮を受く、明復た問ふ、趙州道く、臺山の婆子我れ汝が爲に勘破し了れりと、且く那裏にか是れ他婆子を勘破する處、師汗下り答を加ふる能はず、次の日又明に詣る、詬罵已まず、師曰く、罵豈に慈悲法施にあらずや、明曰く、儞罵の會を作すや、師言下に於て大悟、頌を作りて曰く、叢林に傑出す是れ趙州、老婆勘破來由有り、而今四海鏡の如く淸し、行人路に與へて讎を爲す莫れ。慈明に呈す、明之を領ず、室中常に僧に問うて曰く、人人盡く生緣有り、上座生緣何れの處にか在る、却つて復た手を伸して曰く、我が手何ぞ佛手に似たると、

師云く、「(レ)六雙の骰子一時に赤し。」僧云く、「善財地上に於て一莖草を拈じて文殊に度與す、意旨作麼生。」師云く、「(ソ)舌を吐いて頂相に至る。」僧云く、「文殊云く『此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活す』と、如何が識得せん。」師云く、「猫兒筋斗を打す。」僧云く、「病に應じて藥を與ふ、是れ古來の家風、和尙作麼生か無病の人を醫せん。」師云く、「黑蛇漆甕に入る。」僧云く、「與麼なる則は大法緊要の處、誰か敢て驢駝藥を假らん。」師云く、「波斯、江を過ぎず。」

乃ち云く、「端午天中の節、諸方盡く土を呪し壁に書して、以て妖怪を消す、採藥の模樣を認めて百草頭上に伎倆を做す。我が者裏箇箇石人の機、箇箇鐵漢の用、水洒げども著かず、風吹けども入らず。」驀に拄杖を拈じて卓一下して

---

却つて復た脚を垂れて曰く、我が脚何ぞ驢脚に似たると、三十年此の三問を示す、學者其の旨を契する有る莫し、若し酬ゆる者有るも、師未だ嘗て可否せず、叢林之を目して黃龍の三關と爲す。」

(ワ)折疑論に曰く、「至味衆口を調へ難く、大音群耳に合はず。」

(カ)林間錄に曰く、「六祖、石を以て腰を墜す、牛頭糧を負ふて衆に供す、今少年茲務、鉢を擎げ鑒額して曰く、吾が臂酸なり。」

(ヨ)中庸に曰く、「喜怒愛樂未だ發せざる之を中と謂ひ、發して節に中る之を和と言ふ云云。」

(タ)荊楚歲時記に曰く、「五月五日四民竝に百草を蹋み、又百草を鬪はすの戲有り、艾を採り以て門戶上に懸け、以て毒氣を禳ふ。」五雜俎警露篇に曰く、「唐の玄宗八月五日を以て千秋節と爲す、張九齡太衍曆を上りて序して曰く、謹んで開元十六年八月端午を以て之を獻す、又宋璟表して云く、月維れ仲秋端午に在りと。」然らば則ち凡そ月の五日皆端午と稱す可きなり。謂らく古人午五二字通用、端は始なり、端午は猶ほ初五と言ふがごときのみ。

(レ)事文前集四十三、博塞古今事實下に云く、「博陵は采の名なり、陳思王雙陸局を製す、骰子二を置く、唐末に至りて葉子の戲有り、遂に骰子を加へて六に至る。」骰合は投に作るべし、投擲の義、今骰に作る非なり。

(ソ)摩訶般若經二舌相品に曰く、「爾の時世尊舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ふ、其の舌相より無量色光明を出し、普く十方恒沙等の如き諸佛世界

云く、「森森たる夏木杜鵑啼く。」

上堂、僧問ふ、「記得す、良禪客、欽山に問ふ、『一鏃破三關の時如何。』山云く、『關中の主を放出せよ看ん』と、意旨作麼生。」師云く、「水底に傀儡を弄す。」進んで云く、「良云く、『恁麼ならば則ち過を知つて必ず改めん。』山云く、『更に何れの時をか待たん』と、如何が領略せん。」師云く、「一字、點を著けず。」進んで云く、「良云く、『好箭放つて所在を著けず』といつて便ち出で去る。未審し還つて出身の處有りや也た無や。」師云く、「楚山、漢水に入る。」進んで云く、「山云く、『且來闍黎。』良首を囘す、山、把住して云く、『一鏃破三關は即ち且く止く、試みに欽山が與に箭を發せよ看ん』と、意那裏にか在る。」師云く、「天、惡を保せず。」進んで云く、「良擬議す、山打つこと七棒して云く、『且く聽す、這の漢疑ふこと三十年せよ』と、誵訛什麼の處にか在る。」師云く、「古殿坐する者少なり。」進んで云く、「學人若し箇の節に逢はずんば、爭か敢て箇の事を知らん。」便ち禮拜す。師云く、「實に須らく與麼地に到るべし。」

乃ち云く、「法法本來法、心心無別心、日午三更の後、相喚んで樹陰を賞

---

を照す。」

㋨甘泉山は西安府涇陽縣の西北一百二十里に在り、亦石鼓原と名づく、甘泉出づる所、漢の甘泉宮其の上に在り。

㋔晉書九十二列傳に曰く、「羅含字は君章、桂陽耒陽の人、含幼にして孤なり、叔母朱氏の爲に養はる、少にして志尙し、嘗て晝臥す、一鳥文彩常に異なり、飛んで口中に入ると夢む、因つて起つて驚き、之を朱氏に說く、曰く、鳥文彩有り、汝後必ず文章有らん、此れより藻思日に新なり云云。」

㋗禮記月令第六に曰く、「始めて雨水す、桃始めて華さく、倉庚鳴く、鷹化して鳩と爲る。」注して云く、「此れ卯月の候を記す、倉庚は黃鸝なり、鳩は布谷なり。」王制に曰く、「鳩化して鷹と爲る。」秋時なり、此れ鷹化して鳩と爲るを言ふ、

す。㋡甘泉の景を話り盡して、㋧羅岔が吟を聯成す、㋤鷹鳩の變を品藻して、耳德の音を嘉唱す。手を拍つて笑呵呵、眞鑰、金に博へず。」喝一喝して云く、「侍者我が與に茶を點じ來れ。」

半夏上堂、「半夏以前の事、諸人知つて山僧知らず、半夏已後の事、山僧知つて諸人知らず。正當今日半夏、知ることは則ち共に知る、知らざることは則ち共に知らず、還つて會すや。」良久して云く、「三段同じからず、收めて上科に歸す。」

上堂、僧問ふ、「世界恁麼に熱す、宇宙炎炎、知らず什麼の處に向つてか囘避することを得ん。」師云く、「淸機掌を歷たり。」僧云く、「㋶王常侍、一日臨濟を訪ふ、濟と同じく僧堂前に在つて乃ち問ふ、『這の一堂の僧、還つて看經すや。』濟云く、『看經せず』と、意那裏にか在る。」師云く、「石壓して笋斜に出づ。」僧云く、「侍云く、『還つて禪を學すや。』濟云く、『禪を學せず』と、意旨作麼生。」師云く、「崖懸つて花倒に生ず。」僧云く、「侍云く、『經も又看せず、禪も又學せず、畢竟箇の什麼をか作す。』濟云く、『總に伊をして成佛作祖し去らしむ。』者裏に到つて如何が領略せん。」師云く、「㋰調達背ふことを得ず。」僧云く、「侍云く、『金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。』濟云く、『將に爲へり、儞は是れ箇の俗漢』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「疎田水を貯へず。」僧云く、「若し恁麼に來らずんば、爭か恁麼

---

生育氣盛んなるを以て、故に鷹鳥之に感じて變ずるのみ。孔子云く、「化反舊形に歸するの謂、故に鷹化して鳩と爲る。」

㋶會元九に曰く、「潙山祐禪師の法嗣、襄州王敬初常侍。」

㋰名義集二に曰く、「提婆達多亦調達と名づく。」

に去ることを得ん。」師云く、「且く脚下を看よ。」

乃ち云く、「㋨一法若し有なれば、毘盧も凡夫に墮在す、萬法若し無なれば、普賢も其の境界を失す。拄杖を拈じて云く、「者箇か是れ大德が拄杖子、阿那箇か是れ有無、道ひ得ると道ひ得ざると、朝打三千、暮打八百。」拄杖を擲下して下座。

七月旦上堂、僧問ふ、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ。時節因緣相謾せず、如何が是れ箇の中の事。」師云く、「大家生機多し。」進んで云く、「記得す、僧、雲門に問ふ、『不起一念還つて過有りや也た無や。』門云く、『須彌山』と、作麼生か領會せん。」師云く、「莫敎あれ平出することを。」進んで云く、「僧有り、虛堂老師に『此の意如何』と問ふ、虛堂云く、『鐵を買うて金を得る』と、意、那裏にか在る。」師云く、「也た是れ可惜許。」進んで云く、「今日和尙に不起一念、還つて過有りや也た無やと問はゞ、未審し、如何が祇對せん。」師云く、「三生六十劫。」進んで云く、「與麼ならば則ち昔日の雲門、今日の和尙」といつて便ち禮拜す。師云く、「禮拜し得て始めて得ん。」

乃ち云く、「昨は垂楊の綠なるを見、今は落葉の黃なるを看る。祖門擡搦の事、物物隱藏せず。者箇の葛藤は卽ち且く致く、針筒鼻孔裏に向つて、倒に一句を道將し來れ。若し人の道ひ得る無くんば、山僧儞が爲に說破することを聽取せよ。」

㋨會元十五に曰く、「靈山護國和尙上堂曰く、一法若し有なれば、毘盧も凡夫に墮在し、萬法若し無なれば、普賢も其の境界を失はん、諸上座作麼生か理論せん。」

解夏小參、僧問ふ、「和尚一夏以來、衆の爲に手脚を勞す、未審し什麼邊の事をか成し得たる。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「恁麼ならば則ち誰か敢て和尚に辜負せん。」師云く、「儞に放す、殘生を保つことを。」進んで云く、「記得す、臨濟、衆に示して云く、『赤肉團上に一無位の眞人有り、常に汝等諸人の面門より出入す。未だ證據せざる者は看よ看よ』と、意旨如何。」師云く、「多きを較べず。」進んで云く、「時に僧有り、出でゝ問ふ、『如何なるか是れ無位の眞人。』濟、禪床を下つて把住して云く、『道へ道へ』と、又作麼生。」師云く、「㊂若し瑕を道はずんば、爭か珠の轉ずることを得ん。」進んで云く、「其の僧擬議す、濟托開して云く、『無位の眞人是れ什麼の乾屎橛ぞ』といつて便ち方丈に歸る。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「半開又半合。」又僧有り、問ふ、「記得す、僧、雪峰に問ふ、『乞ふ師指示せよ。』峰云く、『是れ什麼ぞ』と、如何が承當せん。」師云く、「劈腹剜心。」進んで云く、「其の僧言下に於て大悟す、也た是れ什麼の道理をか見る。」師云く、「長を捨て短に就く。」進んで云く、「雲門云く、『雪峰伊に向つて什麼とか道ひし』と、未審し節文甚麼の處にか在る。」師云く、「㊃錮鏴生鐵を著く。」進んで云く、「古德底は且く置く、和尚直下作麼生か指示せん。」師云く、「速退速退、佗の別人の請問を妨ぐ。」進んで云く、「今日の節に因らずんば誰か敢て恁麼に

㊂史記藺相如列傳に曰く、「相如璧を奉じて秦王に奏す、秦王大いに喜び、傳へ以て美人及び左右に示す、左右皆萬歳を呼ぶ、相如秦王趙城を償ふに意無きを視る、乃ち前んで曰く、璧に瑕有り、請ふ王に指示せんと、王璧を相如に授く、乃ち其の從者をして徑道より亡げ、璧を趙に歸さしむ云云。」

㊃説文に錮は鑄塞なり、同じく諧字、篇海に金鏴は周輪なり。

し去らん。」師云く、「更に露柱の在る有り。」
乃ち云く、「法歳周圓、聖制已に滿つ、我が者裡荒涼、爽氣最も容與。取證の淺深を論ぜず、賞勞の輕重を分たず、白雲を攀ぢて高く捲き、秋風を追ふて長に嘯く。爾汝東西情に任せて逍遙して、草鞋跟寛し、活路にあらずといふこと無し。若し(オ)崑崙山頭に逗到して、佗の(ク)喬尸迦忽ち相逢うて驀劄の一句を問過せば、只だ隔手底を將つて祗對せよ。然らずんば(ヤ)五門の猛獸爾を欺くこと在らん。」
復た擧す、翠岩夏末、衆に示して云く、「一夏已來、兄弟の與に東說西話す、看よ翠岩が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る人心虚なり。」長慶云く、「生ぜり。」雲門云く、「關。」師云く、「諸方盡く謂ふ、倶に隻手を出して宗風を扶竪すと。殊に知らず、巨鼇、三山を戴き去ること莫れ、吾れ蓬萊頂上に行かんと欲す。」
次の日上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ解制自恣の辰、知らず何れの處か是れ衲僧遊戲の場。」師云く、「來鋒路有り。」進んで云く、「恁麽ならば則ち(マ)十洲三島草鞋底、(ケ)鴈蕩天台拄杖邊。」師云く、「也た何ぞ妨げん。」進んで云く、

(オ)經律異相に曰く、「三崑崙は則ち閻浮提地の中心なり、山皆寶石周匝、五百窟有り、窟皆黄金、常に五　羅漢有りて之に居す。」
(ク)經律異相に云く、「喬尸迦は忉利天須彌山頂に居し、三十三天宮に有り、王を釋提桓因と名づく。」
(ヤ)山海經十一に云く、「崑崙下面に九門有り、門に開明獸有り、之れを守る。」
(マ)海内十洲記に云く、「祖洲、瀛洲、炎洲、玄洲、長洲、元洲、流洲、生洲、鳳麟洲、聚窟洲なり。」三島は方壺、瀛洲、蓬萊なり。
(ケ)一統志四十八に云く、「溫州府鴈蕩山は樂清縣東九十里に在り、此の山天下の奇秀、又同じく南鴈蕩山有り、平陽縣西南一百里に在り。」同四十七に

「僧、雲門に問ふ、『初秋夏末、前程忽ち人有りて問はゞ、如何が祇對せん。』門云く、『大衆退後』と、作麼生か領會せん。」師云く、「邪に因つて正を打す。」進んで云く、「僧云く、『過什麼の處にか在る。』門云く、『我れに九十日の飯錢を還し來れ』と、意、那裏にか在る。」師云く、「大慈小慈を妨ぐ。」進んで云く、「今日忽ち人有りて問著せば、作麼生か祇對せん。」師云く、「三句前兩句後。」

乃ち擧す、㊁臨濟道く、「一人有り、劫を論じて途中に在つて家舍を離れず、一人有り、家舍を離れて途中に在らず、那箇か人天の供養を受くべき」と。師云く、「諸人、者裏に向つて道取せんと要せば、須らく那裏に向つて透過すべし。若し是れ人天の供養ならば、秋風渭水を吹けば、落葉長安に滿つ。」

進退兩班を謝する上堂、「衲僧家尋常の用ふる底、豈に止だ虎視龍望、世の爲に推さるゝのみならんや。一歩を進むる則んば威音王已前に突出し、一歩を退く則んば爍迦羅眼裏に身を藏す。甚に因つてか是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「天際日上り月下る、檻前山深ければ水寒し。」



云く、「台州府天台山は天台縣西一百十里に在り、山上台星に應じ、超然として秀出す、八重有り、之を視れば一帆の如し、高さ一萬八千丈、周圍八百里、天を去る遠からず、路扁溪に田し、水險にして清く、前に石橋有り、廣さ尺に盈たず、長さ數十丈、下に絕澗に臨む云云。」

㊁傳燈十二に云く、「鎭州臨濟義玄禪師は曹州南華の人なり、姓は邢氏、法を黃檗運禪師に嗣ぐ。」

㊂金湯編七に曰く、「帝諱は亨、玄宗の第三子、靈武に即位し、至德と改元す。」傳燈五に曰く、「西京光宅寺慧忠國師は越州諸曁の人なり、姓は冉氏。」

㊃大般若五百六十八に曰く、「佛最勝天子に告げて言く、當に知るべし諸菩薩摩訶薩、深般若波羅密多を行じ能く如來十

八月旦上堂、僧問ふ、「槿花露を凝し梧葉秋に鳴る、此の中現成の事如何が提唱せん。」師云く、「答も猶ほ未だ了せず。」進んで云く、「幾人か與麽にし去ることを得たる。」師云く、「只だ阿彌一箇に許す。」進んで云く、「㋙肅宗皇帝、忠國師に問ふ『如何なるか是れ㋓十身調御。』國師云く、『檀越、毘盧頂上を蹈んで行け』と、意、那裡にか在る。」師云く、「妨げず脚下紅絲線斷えざることを。」進んで云く、「帝云く、『寡人不會。』國師云く、『自己清淨法身と認むること莫れ』と、又作麼生。」師云く、「主山、案山に騎る。」進んで云く、「忽ち人有り、如何なるか是れ十身調御と問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「背短く胷長し。」進んで云く、「恁麼ならば則ち西風一陣來、落葉兩三片。」師云く、「三十年後。」

乃ち云く、「秋風秋雲を弄し、秋色秋水に蘸す。氣清うして時の淸きが如く、道泰かにして情の泰かなるに似たり。禪者の雅興、道人の嘉景、頭頭上に顯露し、物物上に現成す。」拄杖を卓して云く、「是なることは則ち是、三十年後、人の㋢勸沮を加へ去ること有らん。」

中秋上堂、僧問ふ、「㋐靈山に月を話り、曹溪に月を指す、者裏に到つ

---

身差別を得たり、云何が十身と爲す、一には平等身、二には清淨身、三には無盡身、四には善修身、五には法性身、六には離尋身、七には不思議身、八には寂靜身、九には虛空身、十には妙智身。」

㋢淮南子に云く、「假眞訓世を擧げて之を譽むれども、勸を加へず、世を擧げて之を非すれども沮を加へず。」

㋐會元七に云く、「玄沙備禪師曰く、且く吾が正法眼藏有り、大迦葉に付囑すと道ふが如きんば、我れは道はん、猶ほ月を話るが如し、曹溪拂子を竪つ、還た月を指すが如しと。」

㋚紀原三寶錄に云く、「大帽は野老の服なり、今重れて三山の帽大袖衫と云ふ、是れ本野夫巖叟の服、唐には皂穀を以て之を爲り、以て風塵を隔つ。」

㋖古尊宿錄に曰く、「大鑑下二世

て如何が端的を辨せん。」師云く、「㋚三山の帽大袖衫。」僧云く、「㋖馬大師月を翫ぶ次で、㋒西堂百丈、南泉に問うて云く、『正當與麼の時如何。』西堂云く、『正好供養』と、意旨作麼生。」師云く、「波斯、尙書を讀む。」僧云く、「百丈云く、『正好修行』と、又作麼生。」師云く、「地を拂つて鋼瓶を添ふ。」僧云く、「南泉拂袖して便ち行く、意那裏にか在る。」師云く、「席を起つて坐することを謝せず。」僧云く、「大師云く『經は藏に歸し禪は海に歸す、只だ普願のみ有つて物外に超ゆ』と、如何が委悉せん。」師云く、「㋱神箭三たび匝つて白猿號ぶ。」僧云く、「古人誵訛の處、和尙巳に呈露す、和尙誵訛の處、未審し何人か點檢せん。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「恁麼の問に因らずんば、爭か恁麼の事を識らん。」師云く、「更に須らく草鞋を買ふべし。」僧云く、「深沈たる滄海恩波濶く、皎潔たる秋空氣象高し。」師云く、「如し道著せば須らく用著すべし。」

乃ち云く、「秋中の秋、月中の月、四萬二千の淸光、五十由旬の靈闕、明明重ねて明明、皎潔又皎潔、指と話と俱に敗缺を納る。敗缺を納る、還つて照絕、㋯物の比倫に堪へたる無し、我れをして如何が說かしめん。」

---

馬祖大寂禪師は諱は道一、漢州什邡の人なり、俗姓は馬氏、江西の法嗣天下に布く、時に馬祖と號す。」

㋒傳燈七に曰く、「虔州の西堂智藏禪師は虔化の人なり、姓は廖氏、法を馬祖一に嗣ぐ。」古尊宿錄一に曰く「大鑑下三世百丈懷海禪師は福州長樂の人なり。」傳燈八に曰く「池州南泉普願禪師は鄭州新鄭の人なり、法を馬祖一に嗣ぐ。」

㋱淮南子說山訓に曰く「楚王白猨有り、王自ら之を射るとき、則ち矢を搏つて戲むる、養由基をして之を射せしむ、始め弓を調へ矢を矯む、未だ發せざるに而も猨、柱を擁して號ぶ、中るに先つて中る者有ればなり。」

㋯寒山詩に曰く「我が心秋月に似たり、碧潭淸うして皎潔、物の比倫に堪へたる無し、我

上堂、僧問ふ、「雲門因に僧問ふ、『如何なるか是れ法說。』門云く、『大衆久立速禮三拜』と、意旨作麼生。」師云く、「我れに話頭を還し來れ。」進んで云く、「如何なるか是れ隨意說。門云く、『晨時粥有り、齋時飯有り』と、又作麼生。」師云く、「亂咬するに一任す。」進んで云く、「如何なるか是れ(シ)隨宜說。門云く、『(ヱ)三德六味施佛及僧』と、如何が理會せん。」師云く、「薤園裡に葱草を賣る。」進んで云く、「如何なるか是れ(ヒ)方便說。門云く、『是れ汝が鼻孔重きこと三斤半』と、意那裏にか在る。」師云く、「露柱退後。」進んで云く、「如何なるか是れ大悲說。門云く、『歸依佛法僧』と、如何が端的を辨ぜん。」師云く、「儞に三十棒を放す。」進んで云く、「雲門一一答話す、畢竟箇の什麼邊の事をか明め得たる。」師云く、「南地の竹、北地の木。」進んで云く、「夜來の鴈に因らずんば、爭か海門の秋を見ん」といつて便ち禮拜す。師云く、「錯つて擧することを莫れ。」

乃ち云く、「(モ)功は二儀より高うして而も仁ならず、明は日月を踰えて而も彌昏し。肇公只だ事中より得ることを知つて、事上より得ることを知らず。且く道へ、事上より得る底作麼生。」良久して云く、「殘葉、題を賦し

---

なして如何が說かしめん。」

(シ)思益梵天所問經一に如來五力說品有り、一には言說、二には隨宜說、三には方便說、四には法門說、五には大悲說。隨宜は衆生の所宜に隨順するなり、謂く、如來所說種種の諸法、或は偏或は圓、或は頓或は漸、皆是れ衆生の機に隨順し、其の根器に稱ひ開解せしむるなり。

(ヱ)三德とは金光明經に云く、「法身、般若、解脫是れを三と爲す、常樂我常是れを德と爲す。」六味とは義楚六帖二十倶舍云く、「苦、醋、鹹、淡、甘、辛。」

(ヒ)方便は猶ほ善巧と言ふが如し。

(モ)肇論般若無智論に云く、「夫れ聖人、功二儀より高うして而も仁ならず、明は日月を逾えて而も彌昏し云云。」

て紅片片、遠山望を供して碧層層。」

㋝重陽上堂、僧問ふ、「九九の佳節之を重陽と謂ふ、只だ者裏に向つて領じ去らば、是れ第幾機ぞ。」師云く、「什麼の處よりか收拾し得たる。」進んで云く、「與麼ならば則ち㋜人に逢うて、須らく三分の話を說くべし、未だ全く一片の心を拋つ可からず。」師云く、「六脚の蜘蛛飯牀に上る。」進んで云く、「豈に是れ和尙、人を出すの妙手にあらずや。」師云く、「儞什麼に因つてか與麼の地に到ることを得る。」進んで云く、「東西南北歸去來。」師云く、「猢猻、仙菓を摘む。」

乃ち云く、「只だ菊花の槳蘂を發するを愛して、㋑彭祖が術を聞くを喜ばず。只だ秋露の赤萸に凝るを愛して、㋺稚川が說を忘るゝことを憂へず。憂へず喜ばず、善い哉个の重九の節。」拂子を擊つて下座。

上堂、雲門云く、「㋩許多の大栗子、幾箇をか喫却す。」人有り、三箇を喫得せば、韶陽五箇を吐却せん。人有り、五箇を喫得せば、韶陽十箇を吐却せん。者箇の些子、緇素辨得出せば、山僧半院を分つて儞に與へん。」

閏月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「一切諸佛、及び諸佛の阿耨多羅三藐

---

㋝荊楚歲時記に云く、「九月九日四民並に野に藉し飮宴す。」又續齊諧記に云く、「汝南桓景費長房に隨つて遊學す、長房之に謂つて曰く、九月九日汝南當に大災有るべし、急に家人をして囊を縫ひ茱萸を盛り、臂上に繫け山に登り、菊花の酒を飮まば、此の禍消す可しと、景言の如く家を擧げて山に登り、夕に還つて見れば、雞犬牛羊一時に暴死す、長房之を聞いて曰く、此れ代る可きなりと。今九日高に登りて飮酒し、婦人茱萸の囊を帶ぶ、蓋し此に始まる。」

㋜禪林寶鑑省心篇五に云く、「陳孔璋、魏の文帝に謂つて曰く、人に逢うて須らく三分の話を說くべし、未だ全く一片の心を拋つ可らず、人[illegible]へに我と相好からず、花鎭へに春と盛に開かず、昨友は今日の寃讎、

三菩提の法は、皆此の經より出づ。」拄杖を卓すること一下して云く、「看よ看よ、大德が拄杖子、儞諸人の爲に、此の經の科分細大の義理、一一指注することを。而るに諸人を見るに、猶ほ不知不了。高聲に唱へて云く、四時土節を禁ず、三年一閏有りと。」又卓一下す。

上堂、「黄葉地に滿ち塞鴈空に横はる、彼此出家彼此行脚、佛手も遮ること得ず、人心等閑に似たり。更に如何と問はんと擬せば、當頭霜夜の月、任運前溪に落つ。」

開爐上堂、僧問ふ、「柯を辭する黄葉已に堆を成す、圍爐を整頓して地に就いて開く、時節の一句如何が體會せん。」師云く、「莫敎あれ㊁山帔を擁することを。」進んで云く、「人有り、刹那に去らば亦如何。」師云く、「前言後語に副はず。」進んで云く、「趙州、衆に示して云く、『三十年前、南方の火爐頭に个の無賓主の話有り、直に而今に至るまで人の擧著する無し』と、意、那裏にか在る。」師云く、「三箇の柴頭品字に燒く。」進んで云く、「未審し甚麼の擧著し難きことか有らんや。」師云く、「之に近けば面門を燎却す。」進んで云く、「學人進前退後、自由自在、是れ擧著するか擧著せざるか。」師云く、「且

---

昨花は今日の塵埃。」

㋑列仙傳一に曰く、「彭祖錢鏗は帝顓頊の玄孫、殷の末世に至り、年已に七百歲にして衰へず、恬靜を好み惟だ神を養ひ生を治するを以て事と爲すと云云、四十九人の妻を喪ひ、五十四人の子を失ふ。」

㋺列仙傳四に曰く、「葛洪字は稚川、句容の人、神仙道術を好み、祖玄に從つて道を學び、仙を得たり云云。」

㋩雲門廣錄下に曰く、「師行く次で、一僧後に隨ふ、師拳を竪起して曰く、如許の大栗子幾箇をか喫得す、僧曰く、和尚錯ること莫れ、師曰く、是れ汝錯る、僧曰く、莫た歷して賤と爲す莫れ、師曰く、靜處娑婆訶。」

㊁帔は裙なり、「すそ」と訓ず。祖英集頌に曰く、「巖寶夜寒うして山帔を擁す。」「そでなしばおり」なり。

く者邊を過し著よ。」進んで云く、「便ち是れ兩彩一賽底。」師云く、「大いに人の點頭する有らん。」進んで云く、「虎穴に入らずんば爭か虎子を得ん。」便ち禮拜す。師云く、「相識天下に滿つ。」

乃ち云く、「㋭法昌十六の高人、寒を怕れて剃るに懶し鬔鬆たる髮。趙州無賓主の話、暖を愛して頻に添ふ榾柮柴。大德門下終に針頭に向つて鐵を削らざることは何ぞや。今日十月一、開爐帽子を免す。」

㋬監收維那を謝する上堂、「之を齊しうするときんば、則ち泥土天顏を舒べ、之を約するときんば則ち水滴も以て通じ難し。恁麼に並び務めて、各各をして其の方圓の器に投じ、其の上下の居を安んぜしむることを致す。是れ之を紀綱清嚴に、收放則有りと謂ふ。其の端由を究むるに及んで、豈に止だ還丹の一粒、鐵を點じて金と成すのみならんや。」

上堂、拄杖を卓して云く、「拄杖子、若し相當らずんば、是れ什麼物にか相當らざることを得ん。」便ち下座。

冬至小參、僧問ふ、「一氣潛に通じて萬彙發生す、時節に涉らず、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「鼻孔占却す三畝の地。」進んで云く、「㋣潙山、仰

---

㋭會元十六に云く、「洪州法昌倚遇禪師は漳州林氏の子なり、法を北禪賢に嗣ぐ。上堂曰く、法昌今日開爐、行脚の僧一箇も無し、唯だ十八高人のみ有りて口を緘し、爐を圍み打坐、是れ規矩嚴ならず、是の諸人の話頭を免れ難し、直饒ひ口秤鎚に似たるも、未だ免れず燈籠に勘破せらるゝことを。」

㋬緇門警訓六、長蘆慈覺頤禪師龜鏡の文に云く、「是れを以て衆僧を開示する故に長老有り、衆僧を表する故に首座有り、衆僧を荷負する故に監院有り、衆僧を調和する故に維那有り、衆僧を供養する故に典座有り。」

㋣聯燈七に曰く、「百丈海禪師の法嗣、潭州大潙靈祐禪師は福州長谿趙氏の子。」聯燈八に曰く、「遠州仰山慧寂禪師は韶州懷化葉氏の子、法を潙山禪師

山に問ふ、『仲冬嚴寒年年の事、晷運推し移る事若何。』仰山近前叉手して立つ、意旨如何。」師云く、「一字公門に入れば、九牛車けども出でず。」進んで云く、「潙云く、『誠に知る、子が者の話に答へ得ざることを』と、又作麽生。」師云く、「人の富貴を見ては常に歡喜す。」進んで云く、「時に香嚴至る、潙山前話を擧す、嚴云く、『某甲、偏に者の話に答へ得ん。』潙復た問ふ、嚴亦近前叉手して立つ、如何が領略せん。」師云く、「婆が裙子を借つて婆年を拜す。」進んで云く、「潙云く、『賴に寂子が不會に遇ふ』と、畢竟如何。」師云く、「鷄鳴時を著けず、隣人半夜に行く。」進んで云く、「今日人有つて、仲冬嚴寒年年の事、晷運推し移る事若何と問はゞ、未審し和尙如何が祇對せん。」師云く、「夜は祭鬼の皷を聞き、朝には樂神の歌を聽く。」進んで云く、「與麽ならば則ち來日一陽生ず。」便ち禮拜す。師云く、「記取するに一任す。」

乃ち云く、「陰魔消盡して、陽氣發する時硬地無く、(チ)律管先づ知る、壠頭梅綻ぶ不萠の枝。直に得たり(リ)皓老の布裩、麻線通じ易く、(ヌ)鏡淸の臥單、緋揥開け難きことを。縱饒ひ(ル)陰陽不測なる所以の者は、空洞として象無く、(ヲ)造化不宰なる所以の者は、潛微幽隱なりと道ふに迄るも、未だ是れ(ワ)書

---

に嗣ぐ。」

(チ)叙事帋記楊景記に曰く、「立春の日宜陽金門山の竹を取りて管と爲し、河内の葭草灰を以て陽氣を候ふ。」

(リ)會元十五に曰く、「北塔廣祚師の法嗣、荊門軍玉泉承皓禪師は姓は王氏、眉州丹稜の人なり、大力院に依つて出家す、登具の後、遊方し、北塔に參す、心要を發明して大自在三昧を得たり、犢鼻裩を製し、歷代祖師の名字を書して乃ち曰く、唯だ文殊普賢些子に較れり、且く帶上に書すと、故に叢林目して皓老の布裩と爲す。」

(ヌ)傳燈十七白水本仁章に云く、「鏡淸行脚して到る、師之に謂つて曰く、時寒し、道者淸曰く、不敢、師曰く、還た臥單の蓋を得る有るや否や、曰く、設け有るも亦展ぶる底の工夫

雲の令節を出でず。是の故に山僧只だ望むらくは、(カ)五日を以て一候と爲し、半月を以て一氣と爲すの流をして、箇の仲冬嚴寒の事、物物對偶の機を漏泄せんことを。其れ或は阿房、衣を曳く底に似たらば、(ヨ)東山水上行。」

復た(タ)慈明冬至の牓を擧す、師拈じて云く、「(レ)東弗于代は日下の東、西瞿耶尼は(ソ)月氏の西、笑を解する者は多く、哂を解する者は少し。若し也た今晩放參ならば、一冬二冬、叉手當胸。」

雪に因つて寺齋乘拂を謝する上堂、「(ツ)普賢信口の偈を演出して、拏げ來る(ネ)香積無盡の飯、兩彩一賽の處を知らんと要すや。」拄杖を卓して一下して云く、「吽吽、什麼の饆饠䭔子か有らん、快かに下し將ち來れ。」

兩班を謝する上堂、「諸佛光明を放つて實相の義を助發す。釋迦老子但だ當年の益のみに非ず、且つ吾が沙門をして(ナ)五濁惡世の中、鬪諍堅固の時に於て、人我の擔子を拋却し、高下の情謂を除卻し、互に主伴と作つて、箇の實相無相、微妙解脫の法門、久しく世間に住して寰の利濟を全うせしめんと要す。實相の義は且く致く、如何なるか是れ諸佛の放光明。」良久して云く、「東山手を拍てば西山舞ふ。」

---

無し、師曰く、直饒ひ道著滴水滴凍なるも、亦他事に干らず。」莊子外篇に曰く、「駢拇枝指性に出づる哉、而も德に侈る。」希逸曰く、「拇は足の大指なり、指は手の指なり、駢は合なり、駢拇枝指皆病なり。」

(レ)易に曰く、「陰陽不測之を神と謂ふ。」

(ヲ)老子經載營魄章に云く、「長うして不宰、是れを玄德と謂ふ。」

(ワ)書雲は左傳に曰く、「僖公五年辛亥朔日南至公既に朔を視、遂に觀臺に登り以て望み、而して書するは禮なり、凡そ分至啓閉必ず雲物を書して備と爲す故なり。」注して云く、「雲物とは氣色災變なり、素妖祥を察し、逆に之が備を爲す。」

(カ)鮑景翔云く、「五日一候とは、一月六候、五六三十日なり、五日を候と爲し、三候を氣と

雪に因つて上堂、「危木風寒く空山雪白し、龐蘊枝頭に身を藏し、象骨巒鳩氣索たり。㋵往往他人の住處我れ住せず、他人の行處我れ行かず。是れ人と共に聚り難きがためにあらず、大都て緇素分明ならんことを要す。」喝一喝。

臘八上堂、僧問ふ、「㋟釋迦老子半夜に城を逾えて、雪山六年一麻一麥、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「針鋒頭上に筋斗を翻す。」僧云く、「正當明星現ずる時、忽然として悟り去る。還つて端的なりや無や。」師云く、「地の山を擎げて山の孤峻なることを知らざるに似たり。」僧云く、「㋹只だ一人眞を發して源に歸するが如きんば、大地の衆生什麼の處にか在る。」師云く、「金剛腦後三斤の鐵。」僧云く、「釋迦老子顚言倒語して云く、『奇なる哉一切衆生、悉く如來の智慧德相を具す』と、旣に是れ風無きに浪を起す、如何か太平を得去らん。」師云く、「寒雨空に灑ぎ、寒風地を匝る。」僧云く、「學人今日小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「手を撒して那邊に去れ。」

乃ち云く、「半夜に城を逾えて直に雪山に上る、旣に是れ道士漏卮を擔ふ。更に說く明星現ずる處に於て忽然として悟り去ると、大いに目を捏つて空

---

爲し、六氣を時と爲し、四時を歲と爲す。」

㋵雲門廣錄に曰く、「僧問ふ、如何なるか是れ諸佛出身の處、門曰く、東山水上行。」

㋟禪林類聚十四に云く、「慈明圓禪師冬至の日、僧堂前に榜して此の相を作る ○○○ ☰ 東四、刃才 其の右に題して曰く、若し人識得せば、四威儀の中を離れず。首座一見、衆に謂つて云く、和尚今日放參。」

㋹西域記に云く、「海中居す可き者、大畧四洲有り、東毗提訶洲舊弗婆提と曰ひ、又弗于逮と曰ふ、訛なり、南贍部洲、西瞿陀尼洲舊瞿耶尼と曰ふ、北狗盧洲。」[illegible]に云く、「若は[illegible]丞相の後に[illegible]、我れは[illegible]の東に在す。」

㋞史記百二十[illegible]に云く、「[illegible]は大[illegible]の[illegible]に[illegible]。」

㋡大般若經難信品に云く、「普賢

花を見るに似たり。大德未だ嘗て(ヰ)烏頭、雀兒を養ふことを解せずんばあらず。」拄杖を卓して云く、「南斗は七、北斗は八。」

歲旦雪下る上堂、（除夜大風吹く、）「昨夜舊年の風、今朝新歲の雪、雪は舊年の寒を帶び、風は新歲の節を和す。阿呵呵我が家の(ノ)好騙儺、向後災禍を絕せん。災禍を絕す、東西南北皆可可、龍寶玆れより爐竈大なり。」

上堂、「意到つて句到らず、一二三四五六七、句到つて意到らず、七六五四三二一。忽然として意句俱に到る時、又作麼生。」良久して云く、「花の開くことは栽培の力を假らず、自ら春風の伊を管待する有り。」

三月旦上堂、「煙霞影の裏、春風聲の中、山桃紅綻び、岸柳翠濃なり。限り無き幽情遮掩し叵し、莫教あれ舞蝶一蘂蘂。」

三月半上堂、僧問ふ、「祖令當行、十方坐斷することは則ち問はず、只だ春風拂拂たる時節に於て、願はくは親切の一句を聞かん。」師云く、「處處の綠楊馬を繫ぐに堪へたり。」進んで云く、「長沙一日遊山して門首に歸る、首座問うて云く、『和尚什麼の處にか去來す。』沙云く、『遊山し來る』と、意旨如何。」師云く、「家家の門路長安に透る。」進んで云く、「首座云く、『什麼の處

---

菩薩雲の興るが如く二百問、普賢菩薩瓶を瀉ぐが如く二千酬。」

(ネ)維摩經香積品に云く、「四十二恒河沙の佛土を度り國有り、衆香と名づく、佛を香積と號す、是に於て香積如來、衆香鉢を以て香飯を盛り滿て、菩薩に與化す。」

(ナ)法華方便品に云く、「劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁。」

(ラ)以下四句、白雲端和尙の頌、會元十九に出づ。

(ム)費長房歷代三寶紀一に云く、「僖王八年壬子年十九、四月八日夜半城を踰えて出家す。」

(ウ)楞嚴九に云く、「汝等一人眞を發して元に歸すれば、此の十方空悉く皆消殞す。」

(ヰ)烏頭は俗に草烏頭と云ふ、汁を取り曬して毒藥と作し、禽獸を射る、故に射罔の稱あり。

(ノ)後漢書禮儀志に云く、「臘に先

にか到り來る、』沙云く、『始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐ふて回る』と、如何か領略せん。」師云く、「落霞孤鶩と齊しく飛ぶ。」「首座云く、『大いに春意に似たり。』沙云く、『也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり』と、端的那裡にか在る。」師云く、「春水長天と共に一色。」進んで云く、「『答話を謝す』と、如何か委悉せん。」師云く、「一畝の地、三蛇九鼠。」進んで云く、「古人恁麼の酧唱、飈の如く電の如し、只だ恐らくは通變未だ全からざらんことを。和尙今日別に提唱有ること莫しや。」師云く、「崑崙生鐵を嚙む。」進んで云く、「（オ）楊得意に因らずんば爭か馬相如を識らん。」便ち禮拜す。師云く、「咦。」

乃ち擧す、「僧、（ク）風穴に問ふ、『語默離微に涉る、如何か不犯に通ぜん。』穴云く、『常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し』と、諸人風穴を見んと要すや、只だ常憶の兩字を識取せよ、（ヤ）其れ如し未だ然らずんば、離微體淨品。」

四月旦上堂、僧問ふ、「鵲噪いで柳絲亂れ、龜遊んで荷蓋傾く。此の中現成の事、未審し如何が提唱せん。」師云く、「青青として時の人の意に入ら

---

つて一日、大儺之れを逐疫と謂ふ、其の儀、中黄門子弟十歳以上十二、以下百二十人を選んで、皆赤幘、皂製大鼗を執る。」

（オ）史記司馬相如列傳に云く、「文君乃ち相如と成都に歸り、田宅を買ひ富人と爲り、居ること之を久しうす、蜀人楊得意狗監と爲り、上に侍す、上、子虛賦を讀んで之を善しとして曰く、朕獨り此の人と時を同じうすることを得ざるかな、得意曰く、臣が邑人司馬相如自ら此の賦を爲ると言ふ、上驚いて乃ち召して相如に問ふ。」

（ク）廣燈十五聯燈十一に云く、「南院顒禪師の法嗣汝州風穴延沼禪師は、餘杭劉氏の子なり。」

（ヤ）寶藏論離微體淨品に云く、「其れ離に入り其れ微に入る、離に入るを知れば外塵依る所無

す。僧云く、「㋵潙山、衆に示して云く、『有何無何は藤の樹に倚るが如し』と、意旨作麼生。」師云く、「八十の翁翁牙根堅し。」僧云く、「㋟疎山云く、『忽ち樹倒れ藤枯るゝに遭はゞ、句何れの處にか歸す』と、又作麼生。」師云く、「之を見て取らずんば、之を思ふこと千里。」僧云く、「潙山泥盤を放下して呵呵大笑すと、意、那裏にか有る。」師云く、「黄連は未だ是れ苦からず。」僧云く、「㋞獨眼龍云く、『潙山をして笑轉た新ならしむ』と、如何が委悉せん。」師云く、「屎裏に楊州を濺ぐ。」僧云く、「疎山言下に歸を知つて乃ち云く、『潙山笑中に元來刀有り』と、還つて端的なりや無や。」師云く、「誰か知る席帽下、元是れ昔愁人なることを。」僧云く、「上來一一指示を蒙る、向上の宗上又如何。」師云く、「拄杖頭上日月を挑ぐ。」僧云く、「尊貴の路を行かずんば爭か上頭の關を踏まん」といつて便ち禮拜す。師云く、「好し脚下を看るに。」

乃ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「人有り、者箇に似たらば、觸處に築著礚著、人有り、者箇に似ずんば、物に隨つて七穿八穴。且く道へ、諸訛甚れの處にか在る。」良久して云く、「滿地の落花春已に過ぐ、綠陰空しく鎖す舊莓苔。」又卓一下す。

く、彼を出づるを知れば内心爲す所無し、内心爲す所無ければ諸見移す能はず、外塵依る所無ければ萬有羈する能はず、想慮染雜せず、諸見移す能はず、寂滅不思議、所謂本淨性自ら離欲なり云云。」

㋟會元四に云く、「福州長慶大安禪師は福州の陳氏の子、懶安と號す、法を百丈海に嗣ぐ。」此の緣、禪林類聚十九に見ゆ。

㋹傳燈十七續燈二十二に云く、「洞山良价禪師法嗣撫州疎山匡仁禪師は吉州新淦の人。」

㋞獨眼龍は即ち婺州明招德謙禪師なり、羅山の印記を受け、一隅に滯らず、玄旨を擧揚す、人皆其の敏捷を畏れ、敢て鋒に當るもの鮮し、左目を失ふを以て遂に獨眼龍と號す。

佛誕生上堂、僧問ふ、「世尊初めて降生し、天を指し地を指し、周行七步して云く、『天上天下唯我獨尊』と、意旨如何。」師云く、「日出でて乾坤輝く。」僧云く、「雲門云く、『我れ當初若し見しかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん』と、端的那裏にか在る。」師云く、「恩を知つて方に恩を報ずることを解す。」僧云く、「雪竇云く、『我れ當初若し見しかば、便ち與に禪床を掀倒せん』と、又作麼生。」師云く、「鬼、漆桶を爭ふ。」僧云く、「只だ今朝諸方手を出して、金軀を灌沐するが如きんば、二大老の用處と是れ同か是れ別か。」師云く、「千年の田八百の主。」僧云く、「千峯の勢は岳邊に到つて止り、萬派の聲は海上に歸して消す」といつて便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

㊀圓覺經下に云く、「欲界、色界、無色界の三界、共に二十八天有り、天毎に各一王有り、共の號を云云。」

乃ち云く、「㊀三界二十八天を將つて箇の佛頭と作し、金輪水際を將つて箇の佛脚と作し、四大州を將つて箇の佛身と作し、一切の情と無情とを將つて、个の佛の脾胃肝膽と作す。是の如くなるときは則ち諸人盡く箇の佛の肚裏に在つて起坐經行。若し也た肚裏に在らば、爭か能く淨智莊嚴功德身を灌沐せん。若し灌沐妨げ無しと道はゞ、甚れの處に向つてか安身立命せん。」拂子を擊つて下座。

結夏小參、僧問ふ、「烏兎馳するが如く、聖制已に臨む。正當恁麼の時、請ふ師提唱せよ。」師云く、「好し只だ與麼にし去れ。」僧云く、「如何なるか是れ圓覺伽藍。」師云く、「虚空に逼塞す。」僧云く、「如何

なるか是れ平等性智。」師云く、「月白く風淸し。」僧云く、「畢竟如何が安居せん。」師云く、「直饒ひ恁麼たるも也た未だ眞ならず。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、和尙別に結制底の一句有ること莫しや。」師云く、「前三三後三三。」僧云く、「謂つ可し石は長ず無根の樹、山は藏す不動の雲」といつて便ち禮拜す。師云く、「道ひ得て始めて得ん。」

乃ち云く、「古來一段の事有り、常時明明として日の如し、之に向へば千里を隔て、之に背けば目前に在り。得て收め難く通じて親み難し。所以に西天三月九旬の中に於て、四聖六凡を聚集し、大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心、平等性智を安居す。寶山今夏也た例に隨つて箇の聖制を結ぶ、粥飯の精麤を見ず、茶湯の淸釅を分たず、根機の忍耐に隨ひ、肚皮の大小に任せて、手脚を整頓し黑柱を護惜す。只だ是れ堆堆地なることを許して、慧身を成就することを許さず。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「鼻孔元來上脣に掛く。」

復た擧す、古德道く、「若し是れ全く宗乘を擧揚せば、儞等諸人甚れの處に向つてか領會せん。所以に古今獨露、隱顯無方なり。」師拈じて云く、「古德大いに㊀王母七枚の神桃を獻じて、彩雲の聳えたる

㊀漢武內傳に云く、「元封元年正月甲子、嵩山に登り、道宮を起し、帝齋すること七日云云。唯だ王母紫雲の輦に乘じ、九色の斑龍に駕するを見る云云。又侍女に命じて桃花を索む、須臾にして玉盤を以て僊桃七顆を盛り、以て王母に呈す、母四顆を以て帝に與へ、三顆自ら食ふ、桃味甘美口盈味有り、帝食ひ輙ち其の核を收む、母帝に問ふ、帝曰く、之を種ゑんと欲す、母曰く、此の桃三千年一たび實を生ず、中夏地薄うして之を種うるも生ぜずと。帝乃ち止む云云。」

に乘じ、明月に和して去るに似たり。」

次の日上堂、僧問ふ、「一峯雲片片、雙澗水潺潺。是れ二千年前の消息なること莫しや。」師云く、「認著せば卻つて不是。」進んで云く、「古者道く、『護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居。箇の中の意を會得せば、鐵船水上に浮ぶ、意旨如何。」師云く、「能く幾箇か有る。」進んで云く、「如何なるか是れ護生は須らく是れ殺すべき。」師云く、「何ぞ必ずしも恁麼ならん。」進んで云く、「如何なるか是れ殺し盡して始めて安居。」師云く、「一向無孔の鐵鎚。」進んで云く、「如何なるか是れ箇の中の意。」師云く、「豈に獨り孤負せんや。」進んで云く、「鐵船水上に浮ぶと、又作麼生。」師云く、「下載の淸風誰にか付與せん。」進んで云く、「只だ朝に西天に行き、暮に東土に歸るが如きんば、還つて禁足底の道理有りや也た無や。」師云く、「路途好しと雖も家に在るには如かず。」進んで云く、「恁麼ならば則ち十洲三島鶴の乾坤、四海五湖龍の世界。」師云く、「身を兩處に分つて看ん。」

乃ち云く、「經行及び坐臥常に其の中に在り、旣にして是の如くならば、今朝甚に因つてか別に規矩を立てゝ禁足護生する、還つて會すや。」良久して云く、「大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心、平等性智に安居す。」

首座、書記、藏主の秉拂を謝する上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「風穴云く、『若し一塵を立せば家國興盛し、野老嚬蹙す。』雪竇頌して云く、『野老從敎あれ眉を展べざることを。且く圖る家國の雄

基を立することを。『山僧拂子を與へて其の人に知らしめんと要すれども、㋢雲門の兒孫、三句の體調有るには如かじ。』又拄杖を卓して下座。

五月旦雨下る上堂、「霏霏たる梅雨危層に洒ぐ、五月山房氷よりも冷かなり。雪竇老老大大として、諸人面前に向つて筋斗を翻す。若し人見得せば拖泥帶水。」

端午上堂、僧問ふ、「和尙從來个の節に應ず、箇の時作麼生か人に與へて看せしめん。」師云く、「肯て儞が爲にせず。」進んで云く、「既に能く恁麼に會し去らば、一生參學の事了畢すや也た無や。」師云く、「㋐骩臀を合取著せよ。」進んで云く、「記得す、文殊、善財をして藥を採らしむ、善財云く、『盡大地是れ藥ならざる者有ること無し。』此の意如何。」師云く、「相去ること多少ぞ。」進んで云く、「文殊云く、『是れ藥なるもの採り將ち來れ』と。善財一莖草を拈じて文殊に度與す、意、那裏にか在る。」師云く、「一時不生を少き、一時不死を剩す。」進んで云く、「大家鐵團圞、一箇の病有ること無し。未審し文殊誰が爲にか藥を要す。」師云く、「專ら七佛の爲なり。」進んで云く、「善財甚に因つてか錯を將つて錯に就く。」師云く、「家に小使無ければ君子と成らず。」進んで云く、「和尙、與麼の答話、是れ文殊善財の與に屈を雪ぐと爲んか、復た是れ古今一路に行くと爲んか。」師云く、「岸谷風無うして徒に掌を展ぶるに勞す。」進んで云く、「若し今日の節に因らずんば、

㋢會元德山圓明章に云く、「函蓋乾坤の句、衆流截斷の句、隨波逐浪の句、之を雲門の三句と謂ふ。」

㋐玉篇に骩は骪の誤り、骨曲るなり、又一に古委の字、臀は尻なり。

爭か作家の體裁を知らん」といつて便ち禮拜す。師云く、「吽」
乃ち云く、「今朝是れ五月五、㋚桃符白澤を用ひず、只だ佛祖至靈の大神咒を諷誦して、一切の障難を消滅し、一切の吉事を成熟す。且く道へ、那个の神咒ぞ。」威を振つて喝一喝す。

上堂、僧問ふ、「今朝法の爲に大衆雲の如く集る、未審し和尚个の什麼の法をか說く。」師云く、「家家觀世音。」進んで云く、「正與麼の時、學人如何が領略し去ることを得ん。」師云く、「簸箕を拈起して別處に舂く。」進んで云く、「記得す、僧、趙州に問ふ、『狗子に還つて佛性有りや也た無や。』州云く、『無』と、此の意如何。」師云く、「髑髏裏を穿過す。」進んで云く、「一切の蠢動含靈皆佛性有り、甚と爲てか狗子に還つて佛性無き。州云く、『佗業識性有るが爲の故なり』と、作麼生か端的を辨ぜん。」師云く、「身を藏して影を露す。」進んで云く、「上來分明に指示を蒙る、今日狗子に還つて佛性有りや也た無やと問ふもの有らば、和尙如何が祗對せん。」師云く、「去れ、儞が境界に非ず。」進んで云く、「恁麼ならば則ち昔日の趙州、今日の和尙」といつて便ち禮拜す。師云く、「能く知つて始めて得ん。」
乃ち云く、「久雨已に晴れて處處皮草を曬晾す。皮草を曬晾することは卽ち且く致く、明かに天日を見るの一句、試みに道ひ來れ看ん。若し人の道ひ得る無くんば、山僧今日失利。」拂子を擊つて下座。

㋚桃符は、風俗通八桃梗下黄帝書に曰く、「上古の時、荼と鬱壘の兄弟二人有り、桃樹の下百鬼を執へ、縛するに葦索を以てし、虎に食はしむ、是に於て縣官一に臘除夕を以て桃人を飾り、葦索を垂れ、虎を門に畫く、皆前事を追效し、冀はくは以て凶を衞る也云云。」

半夏上堂、僧問ふ、「結制已に半を過ぐ、九夏炎炎の日、木人汗輟まず、如何が清凉を生ぜん。」師云く、「鶻臭布衫を脱却せよ。」進んで云く、「與麽なるときんば則ち六月松風を賣らば、人間恐らくは價無からん。」師云く、「箇箇形山に秘在す。」進んで云く、「記得す、龐居士、江西の馬祖に參問して云く、『萬法と侶爲らざる者是れ什麽人ぞ』と、意旨作麽生。」師云く、「咽喉氣を出し得るや也た未だしや。」進んで云く、「祖云く、『汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、卽ち汝に向つて道はん』と、意那裏にか在る。」師云く、「聲に騎つて耳に入る。」進んで云く、「居士、言下に於て頓に旨を領ずと、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「早く知る、第二機に落つることを。」進んで云く、「謂つ可し、親言は親口より出づと。」師云く、「且く退け、且く退け。」

乃ち云く、「日月に約して晝夜を知り、晝夜に約して時節を知ることは箇箇常情なり。只だ天地未だ剖れず、文彩未だ彰れざる已前の如きんば、還つて今日を喚んで半夏と作さんか卽ち是、半夏と作さざらんか卽ち是。」拄杖を卓して云く、「六月熱せざれば五穀結ばず。」

上堂、僧問ふ、「南山雲を起し北山雨を下す、此の中親切の處、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「千里萬里轉た霶霈。」進んで云く、「恁麽ならば則ち要津を把斷し去らん。」師云く、「水を打てば魚頭痛む。」進んで云く、「㊉仰山、香嚴に謂つて云く、『如來禪は師兄の會することを許す、祖師禪は未だ

㊉會元九に云く、「鄧州香嚴智閑禪師は靑州の人なり、法を潙山祐に嗣ぐ、仰後に師に見えて曰く、和尚、師弟の大事を發明するを讃歎す、儞試みに

夢にだも見ざること在り』と、未審し、意、那裏にか在る。」師云く、「蝿何ぞ血を見ん。」進んで云く、「如何なるか是れ如來禪。」師云く、「靜處娑婆訶。」進んで云く、「如何なるか是れ祖師禪。」師云く、「鐵輪石を碎く。」進んで云く、「如來禪と祖師禪と相去ること多少ぞ。」師云く、「湘の南潭の北。」進んで云く、「者箇は則ち且く置く、作麼生か是れ和尙の禪。」師云く、「須彌頂上に大坐す。」進んで云く、「樵子の徑に因らずんば、爭か葛洪が家に到らん」といつて便ち禮拜す。師便ち喝す。

乃ち拄杖を横へて云く、「若し者裏より便ち去らば、山河大地齊しく稽顙せん。」卓拄杖一下して云く、「若し者裏より便ち去らば、森羅萬象盡く光を放たん。」又畫一畫して云く、「者裏より去る底亦作麼生。請ふ各各寮舍に歸つて自ら摸索して看よ。」

七月旦上堂、僧問ふ、「落梧一葉天下秋を報す、箇の中の端的若爲が相酬いん。」師云く、「釋迦彌勒退後三千。」進んで云く、「今日方に知る、眉毛眼上に横へ、口稜鼻下に在ることを。」師云く、「驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作す。」進んで云く、「記得す、雲門上堂云く、『一言纔に擧すれば千差轍を同じうす、微塵を該括するも猶は是れ化門の說。若し是れ

說いて看よ、師、前頌を擧す、仰曰く、此れは是れ夙習記持して成る、若し正悟有らば別に更に說いて看よ、師又頌を成して曰く、去年の貧は未だ是れ貧ならず、今年の貧は始めて是れ貧、去年の貧は猶ほ卓錐の地有り、今年の貧は錐も也た無し。仰曰く、如來禪は師弟の會することを許す、祖師禪は未だ夢にだも見ざること在り。師復た頌有り、我れに一機有り、瞬目伊れを視る、若し人會せずんば、別に沙彌と喚ばん。仰乃ち潙山に報じて曰く、且喜すらくは閑師弟、祖師禪を會することをと。」

衲僧ならば合に作麼生かすべき』と、意、那裏にか在る。」師云く、「水を擔つて河頭に賣る。」進んで云く、「若し祖意佛意を將つて這裏に商量せば、曹溪の一路平沉せん。還つて人の道ひ得る有りや、道ひ得る底出で來れと、意旨作麼生。」師云く、「河裏に錢を失して河裏に撈す。」進んで云く、「時に僧有つて問ふ、『如何なるか是れ超佛越祖の談。』門云く、『餬餅』と、如何が端的を辨せん。」師云く、「㋙胡猻露柱に繫ぐ。」進んで云く、「僧云く、『這箇什麼の交渉か有る。』門云く、『㋱酌然として什麼の交渉か有らん』と、此の意如何。」師云く、「贓に和して款を納る。」進んで云く、「古人底は且く留く、祖意佛意を容れず、乞ふ、師曹溪の一路を指出せよ。」師云く、「壁立萬仭。」進んで云く、「既に佛祖を放下す、猶は是れ六祖を用ふることを爭奈何せん。」師云く、「且く去つて前語を圓にせよ。」進んで云く、「㋯天目の近きに因らずんば、爭か斗牛の寒きを識らん。」師云く、「噫。」

乃ち云く、「暑氣未だ去らず嫩涼初めて生ず。秋意未だ深からざるに白雲淸淡。德山臨濟甚と爲てか平地に喫咬す、會すや。」良久して云く、「㋛蘇武漢節を持して歸る。」

---

㋙廣雅に云く、「一名狙、一名王孫、一名胡孫。」

㋱酌、諸錄多く灼に作る。

㋯大明一統志に云く、「天目山は臨安縣の西五十里に在り、山下の兩湖左右の目の如し、故に名づく。」

㋛史記列傳に云く、「蘇武字は子卿、杜陵の人、武帝の時、中郎將を以て節を持し、匈奴に使す、單于之を降さんと欲す、迺ち武を幽して大窖中に置き、絕えて飲食せしめず、天雪を雨す、武臥して雪と旃毛とを嚙み、並に之を咽み數日死せず、匈奴以て神と爲す、乃ち武を北海上に徙し、羝を牧はしむ、武、漢節を杖き羊を牧ふ、臥起操持す、節旄盡く落つ、昭帝立つ、匈奴漢と和親す、漢、武等を求む、匈奴詭りて武死すと言へり、常惠

解夏小參、僧問ふ、「聖制已に圓にして秋風面に滿つ、正與麼の時如何が履踐せん。」師云く、「何ぞ別に問はざる。」僧云く、「恁麼ならば則ち意氣有る時意氣を添へ、風流ならざる處也た風流。」師云く、「南海の波斯、鼻孔麤なり。」僧云く、「記得す、㋓三聖、雪峰に問ふ、『網を透る金鱗何を以て食と爲ん』と、意旨如何。」師云く、「到らば卽ち點ぜず。」僧云く、「峰云く、『汝が網を出で來るを待つて、汝に向つて道はん』と、又作麼生。」師云く、「點せば卽ち到らず。」僧云く、「聖云く、『一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず』と、意、那裏にか在る。」師云く、「限り無き村僧、之を摸して則と爲す。」僧云く、「峰云く、『老僧、住持事繁し』と、如何が委悉せん。」師云く、「鴆羽水に落ちて魚皆死す。」僧云く、「若し人有つて網を透る金鱗、何を以てか食と爲んと問はゞ、未審し和尚作麼生か祇對せん。」師云く、「㋪呂望が權、任公が犗。」僧云く、「恁麼ならば則ち學人、今日小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「人を誣ふることは卽ち得たり。」

乃ち云く、「四月十五、一衆端無く㋲牛角に投入す、東西辨せず南北分たず。七月十五、諸人快活に布袋を解開す。脚頭脚底、通霄路有り、㋝萬

---

使者をして言はしむ、天子上林中に射て、雁を得たり、足に帛書を係る有り、言く、其澤中に在りと。是れに由つて還ることを得たり。」

㋓傳燈十二に云く、「鎭州三聖院慧然禪師は法を臨濟玄に嗣ぐ。」

㋪六韜一に云く、「文王將に渭陽に田して、卒に太公の茅に坐して以て漁するを見る、王勞ふて之に問うて曰く云云、公曰く、釣に三權有り云云。」莊子外物篇に云く、「任公子大鉤巨緇を爲り、五十犗牛以て餌と爲す云云。」

㋲五代史六十五南漢世家に秦王玢初云く、「吾が子孫不肖、後世鼠の牛角に入るが如し、勢當に漸小たるべきのみ云云。」

㋝洞山价衆に示して曰く、「初秋夏末兄弟東去西去、直に須らく萬里無寸艸の處に向つて始

里寸草無し。抖擻す多年の穿破衲、門を出づれば便ち是れ草。襤褸一半雲を逐うて飛ぶ。有佛の處住することを得ず、㋜舜に卓錐の地無し、無佛の處急に走過す、禹に十戸の聚無し。直に得たり把住放行、觸處現前、撥捌褒貶、物に隨つて主と作ることを。正與麼の時、龍寶別に賞勞の在る有り。」拂子を擧つて云く、「西風一陣來、落葉兩三片。」

復た擧す、五祖演和尚云く、「牛窓櫺を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚と爲てか出づることを得ざる。」師拈じて云く、「五祖老子只だ其の出づる底を見て、其の出でざる底を見ず。何が故ぞ。何の官にか私無く、何の水にか魚無からん。」

次の日上堂、僧問ふ、「三月安居、㋑羚羊角を掛く、九夏自恣、猛虎林を出づ。正與麼の時如何が欺かざることを得去らん。」師云く、「甚人にか付與す。」僧云く、「洞山云く、『兄弟初秋夏末、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし』と、意旨作麼生。」師云く、「餓狗枯髏を嚙む。」僧云く、「石霜云く、『何ぞ門を出づれば便ち是れ草と道はざる』と、又作麼生。」師云く、「鑿を把つて衙に投ず。」僧云く、「洞山聞いて云く、『大唐國裏能く幾人か有る』

---



めて得べし。又曰く、只だ萬里無寸艸の處の如きんば、作麼生か去らん、後に僧有り、石霜に擧似す、霜曰く、何ぞ門を出づれば便ち是れ艸と道はざる、僧回つて師に擧似す、師香を焚いて石霜を望んで拜して曰く、大唐國裏能く幾人か有る。」

㋜前漢書枚乘傳に云く、「舜は立錐の地無けれども以て天下を有ち、禹は十戸の聚無けれども以て天下に王たり。」

㋑王安石字說を按ずるに、鹿は則ち比類、而して環角外向く、以て自ら防ぐ、麢羊は則ち獨棲み、角を木上に懸け以て害を遠ざく、謂つ可し靈也と、故に子鹿に從ひ靈に從ふ、文を省いて後人羚に作る。

㋺班は列なり、次なり、序は序を次で位階を分別する所以、禮經に毎に東序西序と云ふ者

と、意、那裏にか在る。」師云く、「也た須らく人の點檢に遭ふべし。」僧云く、「古德の垂示は且く置く、和尙如何が人に敎へ去らん。」師云く、「坡を下つて走らざれば、快便逢ひ難し。」僧云く、「靑山綠水草鞋底、明月淸風拄杖頭。」師云く、「錯。」

乃ち云く、「會するときんば則ち途中受用、身を移して步を移さず。會せざるときんば則ち世諦流布、步を移して身を移さず。卽便ち恁麼にし去るも、未だ山僧行履の處に到らず。何ぞや。雨來つて層翠殘暑を消し、風過ぎて林頭滿院凉し。」

兩班侍者を謝する上堂、「山に登らば須らく杖に倚るべし、海を渡らば須らく船に上るべし。若し法門を扶竪せんと要せば、必ず須らく㊁班序の褫有つて、溫柔なることは一手擡、剛硬なることは兩拳搦を得て始めて得べし。既に其の人を得て後、亦作麼生。」良久して云く、「佛に獻ずることは香の多きに在らず。」

上堂、拄杖を橫へて云く、「山僧昨夜三更㊀瞌睡三昧に入る、者箇の拄杖子趁り前んで言つて曰く、『某甲些子の禪を會す、且つ來日初一、一句子を說いて諸人に布施し去らんと要す。伏して望むらくは和尙慈悲、此の願を奪ふこと莫くんば以て幸と爲さん。』山僧云く、『也た何ぞ妨げん、儞作麼生か說かん。』」

皆此れを謂ふなり、褫は席なり。

㊀首楞嚴十阿難に云く、「彼の善男子三摩提を修し、想陰盡くれば是の人平常の夢想消滅、寤寐恒一。」疏に云く、「想陰若し存せば、寤は卽ち想像、寐は卽ち夢と作る、今想陰盡くれば卽ち夢有ること無し、想陰是れ夢の元なるを以ての故に。寤寐恒一とは、寤寐有りと雖も想無きを以て故に寤亦寐の如く、寐亦寤の如し、故に恒一と云ふ。」

拄杖子云く、『八月一日天中節、赤口白舌時に隨つて滅す。』山僧云く、『阿儞實に好く言を知れり、只だ此の一句子を以て、食輪法輪並び轉じ、佛道祖道共に昌ならん。』他便ち禮拜して去る。諸人且く道へ、喚んで山僧が說と作んか卽ち是、喚んで拄杖子が說と作んか卽ち是。若し拄杖子が說と作さば、山僧今朝說く、若し山僧が說と作さば、拄杖子昨夜說く。若し能く定當せば、雲は碧洞に歸り、露は蘭叢に滴つ。其れ如し未だ然らずんば。」卓拄杖一下す。

中秋上堂、「尋常驚怪す禪和家、中秋の節に到るに及んで、浮雲を陰晴に卜し、强ひて天上の月を貪り觀る。其の中吟眸の句を問著すれば、十箇五雙有り。便ち道ふ、月皎うして夜星稀なりと。是れ惟だ才に龍寶が堂に陞つて、也た未だ龍寶が室に入ることを得ず。何が故ぞ。滿船の明月一竿の竹、家は五湖に在り歸去來。」

上堂、「聖を去ること時遙かにして、人懈怠多し、逆ふときんば則ち瞋を生じ、順ふときんば則ち愛を生ず。且く道へ、作麼生か是れ懈怠無く瞋愛無き處、嶺上の白雲、巖前の綠水。」

重九上堂、「一句新に一句新なり、汾陽の一句又重ねて新なり。靖節相逢うて相識らず、重陽九日菊花新なり。」

開爐上堂、僧問ふ、「法昌今日開爐、行脚の僧一箇も無し、泥像を聚めて說法す、山川觀を改むと。還つて恠力亂神なること莫しや。」師云く、「㊀一點

---

㊀事文前集四十に云く、「張僧繇、金陵安樂寺に於て四龍を畫き睛を點ぜず、每に云く、

の水墨兩處に龍と作る。」進んで云く、「ホ丹霞木佛を燒く、什麼の憑據か有る。」師云く、「趙州東院の西。」進んで云く、「龍寶今朝開爐、泥像を聚めず木佛を燒かず、行脚の僧幾箇か有る。」師云く、「普天普地。」進んで云く、「凡夫を轉じて賢聖と爲し、賢聖を抑へて凡夫と爲すことは則ち和尙無きにあらず、者の二途を離れて、請ふ師端的。」師云く、「將に知る、前話を圓にせざることを。」進んで云く、「潙山火に向ふ次で、仰山に問ふ、『終日火に向つて甚に因つてか暖氣無き。』仰、火に向ふ勢を作す。潙云く、『子只だ物の體を得て能所は未在』と、意旨作麼生。」師云く、「家醜外に揚げんことを要す。」進んで云く、「仰云く、『某甲は只だ此の如し、和尙作麼生。』潙亦火に向ふ勢を作す。仰云く、『和尙只だ物の體を得て能所未在。』潙云く、『如是如是』と、如何がヘ甄別し去るや。」師云く、「錯つて此の機に墮す。」進んで云く、「世を擧げて盡く言ふ、父子唱和、兩口一舌無しと。」師云く、「ト龍象の蹴蹈は驢の堪ふる所に非ず。」進んで云く、「若し人有り、終日火に向ふ、甚に因つてか暖氣無しと問はゞ、和尙他に對して作麼生か道はん。」師云く、「手を炙つて熱を助く。」進んで云く、「和尙と古人と止だ一般なること莫しや也た無

---

之を點ずれば卽ち飛び去らんと、人以て誕妄と爲す、因つて其の一を點ず、須臾にして雷電壁を破り、一龍天に上る、一龍眼を點ぜざる者見在す。」會元十七、「鄂州黃龍智明禪師、胡巡檢と公安の二聖に到る、胡問ふ、達磨梁の武帝に對して曰く、廓然無聖と、公安甚麽と爲してか却つて二聖有る、師曰く、一點の水墨兩處に龍と成る。」

ホ類聚佛像門に云く、「丹霞天然禪師嘗て洛京惠林寺に到つて天寒に値ひ、遂に殿中に於て木佛を取り、火に燒いて向ふ。」

ヘ甄は察なり、明なり。

ト維摩經不思議品に云く、「所以は何となれば、不思議解脫に住するの菩薩威德力有るが故に、逼迫を行じ諸の衆生に是の如き難事を示す、凡夫下劣

や。」師云く、「大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」進んで云く、「與麼ならば則ち三冬古木の花、九夏寒巖の雪。」師云く、「生薑終に辣きことを改めず。」進んで云く、「火を覓めては烟に和して得、泉を擔つては月を帶びて歸る」といつて便ち禮拜す。師云く、「叱。」

乃ち云く、「人人箇の火種有り、只だ是れ深く冷灰に埋んで之を用ふることを得ず。今朝風頭稍硬し、且く諸人の爲に撥起せん。」拄杖を以て畫一畫して云く、「會と不會と各各煖處に歸つて商量せよ。」

上堂。「昨日人有り、面前に筋斗を打す、今日人有り、背後に問訊を作す。親に似て親に非ず、疎に似て疎に非ず、爾等諸人作麼生か辨別せん。」

冬至小參、僧問ふ、「覿面相見多端に在らず、龍蛇は辨じ易く衲子は瞞じ難し。如何なるか是れ衲子端的の眼。」師云く、「(チ)禾山の鼓、雪峰の毬。」進んで云く、「機輪轉ずる處作者猶ほ迷ふ。」師云く、「切に忌む(リ)頭に上り面に上ることを。」進んで云く、「記得す、慈明今日牓を出して三圓九卦を書して云く、『若し人會得せば四威儀の中を離れず』と、意、那裏にか在る。」師云く、「頂上に骨無く頷下に鬚有り。」進んで云く、「首座一見して云く、『和尙今

---

力勢有ること無し、是くの如く菩薩を逼迫する能はず、譬へば龍象の蹴踏は驢の堪ふる所に非ざるが如し。」

(チ)禾山の鼓は會元六、福州禾山無殷禪師の章に見ゆ。雪峰の毬は會元七雪峰章に、玄沙師に謂つて曰く、菜甲如今大用し去る、和尙作麼生。師三箇の木毬を將つて、一時に拋出す、沙斫牌の勢を作す、師曰く、爾親しく靈山に在り、方に是の如きを得たり、沙曰く、也た是れ自家の事。

(リ)虛堂寶林錄上堂僧曰く、「學人這裏に到りて大に胡孫の生鐵を咬むに似たり、師曰く、爾只管上頭上面すること莫れ。」

(ヌ)玉篇に睥は埤の誤字、埤は城上の女牆、卽ち姫垣なり。大慧書に云く、「未だ著力工夫有らず、只だ遮して睥避し得ざる處。」

晩放參』と、又作麽生。」師云く、「阿誰か此の節を知らん。」進んで云く、「千峯の勢は嶽邊に到つて止り、萬派の聲は海上に歸して消す。」便ち禮拜す。師云く、「好く領取著せよ。」

乃ち云く、「徧界曾て藏さゞる處、方に是れ時の人㋦躱避し難き時節、恰も半夜烏鷄を放つに似たり、左之右之甚れの處に向つてか辨明せん。直に得たり陰去り陽來り、雪寒く氷冷じきことを。吾が家の大用觸處に繁興することを。豈に敢て㋸洞山の熱鬧を圖る底の狂解を逐はんや。然も是の如くなりと雖も、諸人且く道へ、其の耳を貴ぶは其の眼を貴ぶに孰與ぞ。」拄杖を卓すること一下す。

次の日上堂、「㋾否極り泰來れり、㋻坎去り離到る底の事、彼彼一齊に用ひ得て最も妙なり。只だ無陰陽の地のみ有つて人の蹈著すること少なり。忽然として蹈著せば、妨げず雪に和して泥を蹈むことを。」

秉拂を謝する上堂、「臨濟賓主の句子を了じ、㋕香嚴瀑布の重吟を續ぐ。看來れば他は是れ曠蕩として、也た巴鼻有り也た來由有り。且つ一代藏敎の中、還つて者箇の時節有りや。」拄杖を卓して云く、「㋵我れ寶塔を現す、

---

㋸傳燈洞山章に云く、「師冬夜菓子を喫する次で、泰首座に問ふ、一物有り、黑うして漆に似たり、常に動用中に在りて動用中に收め得ず、過甚麽の處にか在る。泰曰く、過動用中に在り。山侍者をして菓卓を撥り退けしむ。」

㋾否極泰來は䷋天地否、䷊地天泰、易傳否の序卦に曰く、「泰は通なり、物以て終通す可らず、故に之を受くるに否を以てす、夫れ物理往來通泰の極は、則ち必ず否す、否、泰に次ぐ所以なり、卦たる天上地下、天地相交り陰陽和暢すれば、則ち泰と爲る、天上に處り地下に處る、是れ天地隔絶相交通せず、否と爲る所以なり。」

㋻坎去離到は☵坎を水と爲す、☲離を火と爲す、易坎の序卦に曰く、「物以て終過

當に證明を爲すべし。」

上堂、僧問ふ、「學人山を見て山と言はず、水を見て水と言はざる時如何。」師云く、「三歩は易かる可く、五歩は應に難かるべし。」進んで云く、「和尚只だ恁麼ならば、何ぞ諸方に異ならん。」師云く、「頑石瓦礫も之を聞かば必ず汗せん。」進んで云く、「一句進まず兩句退かず、誰有つてか等閑に我れを籠罩し來らん。」師云く、「㋟汨たる梁下の尾生、奚ぞ抱道の士と言はん。」進んで云く、「若し是れ老師に遇はずんば、幾乎ど一生を賺過せん」といつて便ち禮拜す。師云く、「直饒ひ實に與麼なるも、放過せば卽ち不可。」

乃ち云く、「㋹一滴水一滴凍、曹溪路上相逢ふこと少なり。㋞寒山掌を拍てば拾得笑ふ、南山炭を燒けば北山紅なり。」拂子を擊つて下座。

佛成道上堂、僧問ふ、「菩薩今夜成道、之を號して如來と名づく、只だ明星を見るが如きんば、未審し什麼邊の事をか明む。」師云く、「青寥寥白的的。」進んで云く、「是れ他一隻眼に在れば、空花亂墜すること莫しや。」師云く、「孃生幾箇の舌頭ぞ。」進んで云く、「學人若し此に向つて去らば、和尚還つて許さんや也た無や。」師云く、「山僧は拄杖に如かず。」進んで云く、「甚

---

す可からず、故に之れを受くろに坎を以てす、坎は陷なり、理過ぎて已まざる無くんば、過の極は則ち必ず陷る、坎大過に次ぐ所以なり云云。」

㋕碧岩十一則黃檗噇酒糟の話評に云く、「太中香嚴閑禪師の會下に在り、後剃度沙彌と爲る、一日智閑と遊方して廬山に到る、因に閑瀑布に題して曰く、『雲を穿ち石を透して勞を辭せず、地遠くして方に知る出處の高きことを。』閑此の兩句を吟じ佇思之を久しうし、他の語脈を釣り如何と看んと欲す。太中續いで曰く、『溪澗豈に能く留むれども住むることを得ん、終に大海に歸して波濤と作る。』閑方に知る是れ尋常の人にあらざるを、乃ち默して之を識る、後、隱官宮中に到りて太中を請じて書記と作す。」

に因つてか昔日を背ふて今日を背はざる。」師云く、「只だ兩頭に走るが爲なり。」進んで云く、「若し此の語無くんば爭か老子の端的を辨せん。」師云く、「我れ儞に辨倒せらる。」進んで云く、「心人に負かざれば面に慙づる色無し。」便ち禮拜す。師云く、「古今惟れ多し。」

乃ち云く、「澄月映徹して衆星燦朗たり、箇の中釋迦無し、阿誰か當に成道すべき。」拄杖を卓して云く、「屎上更に尖を加ふ。」

上堂、「臘雪天に連つて白く、寒風戸に逼つて寒し。口を失却することは儞に問はず、鼻孔を拈得し來れ看ん。如し人の拈得する無くんば、」拂子を擊つて云く、「忽然として撞著す來時の路、始めて覺ゆ從前眼に瞞せらるゝことを。」

除夜小參、僧問ふ、「舊年送れども去らず、新歲迎ふれども來らず。新舊本、無情、去來豈に擬す可けんや。」師云く、「我れ且つ儞が㋞下閣頭上に向つて行くことを愛す。」進んで云く、「記得す、僧、香林に問ふ、『萬頃の荒田是れ誰か主と爲る。』林云く、『看よ看よ、臘月盡く』と、意旨、作麽生。」師云く、「鐵券分付し難し。」進んで云く、「來日定めて是れ大年朝、何の祥瑞か

㋵法華見寶塔品に云く、「十方國土法華を說く處有り、我が之の塔廟是の經を聽くが爲の故に其の前に涌現し、爲に證明を作す、讚して言く、善哉。」

㋟史記十六蘇秦傳に云く、「尾生女子と梁下に期するが如し、女子來らず水至れども去らず、橋を抱いて死す。」

㋹會元十七黃龍南禪師章に云く、「師衆に示して曰く、江南の地、春寒秋熱、近日已來滴水滴凍、僧問ふ、滴水滴凍の時如何、師曰く、未だ是れ衲僧分上の事にあらず、曰く、如何なるか是れ衲僧分上の事、師曰く、滴水滴凍。」

㋞傳燈錄寒山傳に云く、「或る時は叫噪空を望んで寺僧を慢罵し、枝を以て逼逐し、身を翻し掌を拊し大笑し去る。拾得傳に云く、寺主問ふ、汝名は拾得、豐干汝を拾ひ得歸る、

有る。」師云く、「家家の爆竹、處處の燒錢。」

乃ち云く、「日日日は東に出で、日日日は西に入る。一出一入自ら循環、臘月三十日に逗到す。村裏に祭鬼の鼓を打し、山塢に樂神の歌を唱へて、人人淳素の風を帶び、箇箇太平の時を稱す。況んや衲僧家半夜に日頭を見、阿誰か新舊を辨ぜん。只管に大坐當軒、眼眼相照して分歲す。然も荒涼にして鳳髓を烹ずと雖も、其の中の清味佗の金臠に勝れり。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「雪は北嶺に寒く、梅は南枝に香し。」

復た擧す、雪竇、拄杖を拈じて云く、「頭上は是れ天、脚下は是れ地、眼前は綠水、背後は青山、衲僧我れ會せりと道はん。忽ち驢に騎つて爾が鼻孔裏に入り、牛を牽いて爾が眼睛の中に入らば、又作麽生か商量せん。」師云く、「當年若し人有り、衆を出でゝ老和尚と喚び、雪竇才に頭を擡げんを待つて、更に㋔函丈に詣せんと道つて、便ち衆に歸し去らば、直饒ひ方を以て規に投ずるとも、自然に函蓋相應せん。」

正旦上堂、僧問ふ、「元正啓祚、萬物咸く新なり、好箇の時節、願はくは法要を聞かん。」師云く、「相逢うて共に賀す萬年の慶。」進んで云く、「喚んで新年頭の事と作んか、亦是れ自己の消息なるか。」師

汝畢竟姓は箇れ什麽ぞ、何れの處に在りて住す。拾得掃帚を放下し、叉手して立つ、寺主測る罔し、寒山胸を槌つて云く、蒼天蒼天。拾得卻つて問ふ、汝什麽をか作す、豈に道ふことを見ずや、東家の人死すれば西家哀を助くと。二人舞を作して笑つて出づ。」

㋨史記歷書、巳落下閎運算轉歷とあり。又耆舊傳に云く、「閎字は長公明、天文を曉り落下に隱る云云。」又孝要に云く、「落下或は姓なり。又、落下に作る。」

㋔函丈は禮記曲禮上に見ゆ。

云く、「一に多種有り、二に兩般無し。」進んで云く、「恁麽なるときんば則ち大德四海に播き、龍寶一天に滿つ。」便ち禮拜す。師云く、「闔國咸く知る。」

乃ち云く、「日暖に風和し鳥啼き花笑む。大機と大用と家家に繁興す。何ぞや。」拄杖を卓して云く、「㊉月建寅を首とす、斗柄戌を指す。」

元宵雪下る上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「一燈百千燈、明暗雙雙底の時節。」又卓一下して云く、「百千燈一燈、夜深けて共に看る千巖の雪。所以に道ふ、有る時は前照後用、有る時は後用前照、有る時は照用同時、有る時は照用不同時。」又卓一下して云く、「且く道へ、是れ照か是れ用か、各各自ら辨別せよ。」

上堂、「龍寶伎倆無し、只だ是れ目前の機を喪せず。忽ち氷消し雪霽るゝことを得ば、自然に梅腮柳面の奇なるを見ん。之を喚んで以て禪道佛法と作さば、處處の春山應に子規を聽くべし。參。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「世尊云く、『我れ若し滅度と謂はゞ我が弟子に非ず、我れ若し不滅度と謂はゞ亦弟子に非ず』と、畢竟如何が領略し去らん。」師云く、「醉後郎當として人を愁殺す。」僧云く、「恁麽なるときは則ち(十一)今日は則ち有、明日は卽ち無なること莫しや。」師云く、「恩を知る者は少く、恩に負く者は多し。」僧、坐具を提起して云く、「學人只だ者箇を喚んで世尊と作

㊉貞享曆を按ずるに、寅を建つるを以て正と爲す、故に斗柄寅を建つると謂ふなり、此に斗柄戌を指すと曰ふは九月なり。

(十一)大般涅槃後分上遺敎品に云く、「爾の時阿泥樓豆、阿難を

す、和尚者箇を喚んで是れ有と爲んか復た是れ無と爲んか。」師云く、「狗、赦書を銜む。」

乃ち云く、「釋迦老子、奇花茂葉の中に於て、㋰唯一堅密身を藏し得て、之を名けて涅槃眞常の樂と爲す。若し人一榮一枯の處に向つて相見せば、何ぞ㋒波旬纓袖の長きに如かん。然りと雖も㋕迦葉、豈に是れ儞羅國の人にあらずや。」

佛誕生上堂、「❶毘嵐園中無憂樹下、金蓮地に生じて丘墟平坦たり。甚に因つてか天台山は高く華頂峰は低き。會得せば我今灌沐諸如來、會せずんば淨智莊嚴功德聚。」拂子を擊つて下座。

結夏小參、「二千年前靈山百萬の大衆、見地只だ野椸を打することを解するが爲に、世尊一箇の膠盆子を拈出して、箇箇腦を刺して打入して、身心を澄濾し慧身を成熟せしむ。之を禁足護生剋期取證と謂ふ。二千年後中華扶桑、類例攀ぢ來つて彌よ繁く彌よ昌なり。而も時のトする所を觀るに、杓頭の窄きを嫌ひ、炊巾の廣きを擇ぶ。古より今より遐邇自ら別なり。龍寶英傑の徒、九夏道聚の義、恰も勺水龍を象ふに似たりと雖も、自ら

---

安慰して之に語げて言く、「唯哉、何爲れぞ愁苦す、如來涅槃時至る、今日有りと雖も、明日則ち無し。」

㋰華嚴如來現相品偈に曰く、「唯一堅密身、一切塵中に見す、無相亦無相、善く諸國に現す。」

㋒大般涅槃上に魔王佛所に來り、世尊涅槃に入らんことを勸請す。世尊即ち答へて言く、善哉善哉、往昔、連禪河の側に在りて、已に自ら汝に許す、四部衆未だ具せざるを以て故に今に至る、今已に具足す、卻後三月當に般涅槃すべし。是の時魔王佛の此の語を聞いて歡喜踊躍還た天宮に歸る。

㋕會元二尊者章に云く、「迦葉尊者は摩竭陀國の人なり。」大集月藏經九に、「爾の時世尊摩儞羅を以て善擇天子十千眷屬に付囑す云云。」蓋し儞羅國は摩

是れ一件透不過の事有り、小小に同じからず。纔に進前退後せば、坑に墮ち塹に落つ。且く道へ、是れ那一件の事ぞ。」拄杖を卓すること一下す。

復た擧す、(オ)洞山因に僧問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。」師云く、「洞山老漢、小慈大慈を妨ぐ。若し是れ德山臨濟の門下ならば、終に驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作す可からず。」

次の日上堂、僧問ふ、「猿、子を抱いて靑嶂の後に歸り、鳥、花を銜んで碧巖の前に落つ。伊れ結制安居底の道理有りや也た無や。」師云く、「豈に道ふことを見ずや、大圓覺を以て我が伽藍と爲すと。」進んで云く、「恁麼なるときは則ち頭頭是れ圓覺の伽藍、物物即ち平等性智。」師云く、「直饒ひ與麼にし去るも(ク)蛉蛢の子と作す。」進んで云く、「記得す、雲門垂語して云く、『十五日已前は爾に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ』と、意旨作麼生。」師云く、「半幅全封。」進んで云く、「正當十五日、請ふ、師指示を垂れよ。」師云く、「月白く風淸し。」進んで云く、「只だ日日是れ好日と道ふが如き

---

媧陀園のことならん。

(ノ)過去現在因果經に云く、「是に於て夫人即ち寶輿に昇り藍毘尼園に往く、爾の時夫人既に園に入り已り、諸根寂靜、十月滿ち四月八日日初めて出づる時に於て、夫人彼の園中に一大樹有るを見る、名を無憂と曰ふ、色香鮮に枝葉分布、即ち右手を擧げて牽いて、之を摘まんと欲す、菩薩漸漸右脇より出づ、時に樹下亦七寶七莖の蓮華を生ず、大いさ車輪の如し、菩薩即ち蓮華上に墮す云云。」

(オ)傳燈十五に云く、「潭州前雲巖曇晟禪師の法嗣洞山良价禪師なり。」

(ク)玉篇に蛉蛢は行正しからざるなり。法信解品に「吾れを捨て逃走伶俜辛苦五十餘年。」文選潘岳寡婦の賦に曰く「少うして伶俜して偏孤なり。」

んば、千差を坐斷する底有ること莫しや。」師云く、「韶陽儞を得て風規に墮せず。」進んで云く、「此れは是れ古人爲人の處、古今に渉らず如何が商量せん。」師云く、「八十の翁翁杖を拄へて行く。」進んで云く、「千峰の勢は嶽邊に到つて止り、萬派の聲は海上に歸して消す。」便ち禮拜す。師云く、「親しく會して始めて得ん。」

乃ち云く、「龍寶百味の珍羞有り、尋常敢て之を拈出せず。今日方に是れ結制、須らく諸人に布施し去るべし。之を以て㋳休糧の方と爲して以て九旬の空蹤を願ふ。」喝一喝して云く、「切に忌む崑崙に呑むことを。」

秉拂夏齋を謝する上堂。「天に三光有り、其の明高遠にして群機に被らしむ。地に㋮五味有り、其の徳廣大にして以て萬有を保んず。諸人其の功の歸する所を知らんと要すや。」良久して云く、「禾山の打鼓、雪峰の輥毬。」

上堂、僧問ふ、「目前に法無し、門外の車馬鬧浩浩。意目前に在り、屋頭の松竹冷青青。」師云く、「時節逢ひ難し。」進んで云く、「記得す、雲門衆に示して云く、『拄杖子、化して龍と爲つて乾坤を呑却し了れり。山河大地何れの處よりか得來る』と、意、那裏にか在る。」師云く、「莫教あれ皴皴鱗鱗たることを。」進んで云く、「已に乾坤を呑却し了れり、拄杖子甚と爲してか和尚の手裏に落在す。」師云く、「物は

---

㋳會元五澧州藥山惟儼禪師章に云く、「僧問ふ、學人鄕に歸らんと擬する時如何。師曰く、汝の父母徧身紅爛、荊棘林中に臥在す、汝何れの處にか歸らん。曰く、恁麼ならば則ち歸り去らじ。師曰く、汝却つて須らく歸り去るべし、汝若し鄕に歸らば、汝に箇の休糧の方子を示さん。」

㋮五味とは、鹹、苦、酸、辛、甘を曰ふ。

有主に歸す。」進んで云く、「昔日の雲門と今日の和尚と相去ること多少ぞ。」師云く、「天外に出頭して看よ、誰か是れ我れ般の人。」進んで云く、「始めて知る、一條の拄杖、兩人扶ることを。」師云く、「人を誣ふるの罪。」

乃ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「恁麼恁麼、空裏に橛を打するが如し。」又卓一下して云く、「不恁麼不恁麼、水中に月を捉ふるに似たり。」兩處に功を收めんと要せば、天晴れて日頭出づ。」又卓一下す。

重午上堂、僧問ふ、「文殊、善財をして藥を採らしむ。財云く、『盡大地是れ藥ならざる者無し』と、此の意如何。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「善財一莖草を拈じて文殊に度與す、殊云く、『此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活す。』拈驗那裏にか在る。」師云く、「㋘黃蘗樹上に木蜜を生ず。」僧云く、「學人通身是れ病、作麼生か醫せん。」師云く、「病み得て須らく愈ゆべし。」僧云く、「直饒ひ與麼なるも猶ほ圓覺の㋾四病に墮在す。作麼生か獨脫無依なることを得去らん。」師云く、「早く知る、爾病み得ること能はざることを。」僧云く、「快なる哉快なる哉、今朝天中の節、時淸く道泰かに、門安く戸靜なり。」師云く、「爾に許す、一句相當り去ることを。」

㋘黃蘗は苦く、木蜜は甘きもの。

㋾四病とは、一には作病、我が本心に於て種種の行を作して圓覺を求めんと欲するを云ふ、二には任病、我れ等今は生死を斷ぜず、涅槃を求めず、涅槃生死起滅の念無し、彼の一切に任せ、諸法の性に隨つて圓覺を求めん欲するを云ふ、三には止病、我れ今、自心永く諸の念を息め、一切の性を得、寂然平等圓覺を求めんと欲するを云ふ、四には滅病、我れ今、永く一切煩惱を斷じ、身心畢竟空にして所有無し、何ぞ況んや根塵虛妄の境界、一切永寂、圓覺を求めんと欲するを云ふ。

乃ち云く、「今日端午の節、諸人直に須らく明德を明め得て、天行の百怪を消殞し、佛病祖病を除却すべし。蓋し只だ是れ㈠妖は德に勝たざる所以なり。且く道へ、如何なるか是れ明德。」拂子を擊つて云く、「歸依佛法僧。」

半夏上堂。僧問ふ、「九旬已に半を過ぎて雲山翠色深し、現成公案回避するに處無し。此の景此の時願はくは法要を聞かん。」師云く、「爾に三十棒を放す。」進んで云く、「古人一則の因緣有り、學人の咨參を許さんや也た無や。」師云く、「佛、衆生の願を奪はず。」進んで云く、「臨濟因に半夏黃檗に上る、和尚の看經するを見て、濟云く、『我れ將に謂へり、是れ箇の人と、元來是れ㈡揞黑豆の老和尚』と、意旨作麼生。」師云く、「水上に胡盧子を推す。」進んで云く、「濟、住すること數日、乃ち辭し去る。檗云く、『汝夏を破つて來り、夏を終へずして去る』と、未審し、如何が端的を辨せん。」師云く、「慇勤に別を送る瀟湘の岸。」進んで云く、「濟云く、『某甲、暫く來つて和尚を禮拜す。』檗、遂に打して趁ふて去らしむ、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「令、虛に行ぜず。」進んで云く、「濟行くこと數里にして、此の事を疑ふて却回して夏を終ふ、意、那裏にか在る。」師云く、「古今能く幾人か有る。」進んで云く、「一人は途中に在つて家舍を離れず、一人は家舍に在つて途中を離れず、

㈠十八史略一、殷の太戊下に云く、「亳に祥有り、桑穀共に朝に生ず、伊尹曰く、妖は德に勝たず、君其れ德を修めよ、太戊先王の政を修む、二日にして祥桑枯死す、殷道復た興り、號して中宗と稱す。」註に孔安國曰く、「祥は妖怪なり、二木合生不恭の罰。」

㈡揞一に晻に作る、揞は藏なり、手を以て覆ふなり、手と眼と文字黑相を覆藏するを以て放下せざるの義か。

是れ甚麽の道理ぞ。」師云く、「鐵牛擎げ出す黃金の角。」進んで云く、「與麽なる則は達磨東土に來らず、二祖西天に行かず。」師云く、「能く知る者は須らく能く用ふべし。」

乃ち云く、「結制已に半を過ぐ、水牯牛、鼻孔數寸長し。諸人只だ與麽に去らば、便ち知る、二六時中了に走作せざることを。儻し或は離跂攘臂せば、桁楊の用ふべき無し。參。」

上堂、僧問ふ、「六月十五、天下毒熱、一機一境盡く今時に落つ。脣吻に涉らず如何が津を通せん。」師云く、「退後退後。」進んで云く、「瓜を浮べ李を沈め、雪を積んで山を爲す。見成公案、迥に多端を絕す、豈に是れ淸凉世界にあらずや。」師云く、「心人に負かざれば面に慚づる色無し。速かに道へ速かに道へ。」進んで云く、「黃龍三關の語有り、還つて咨參を許さんや也た無や。」師云く、「華嶽連天の色を劈開す。」進んで云く、「我が手何ぞ佛手に似たると、意旨如何。」師云く、「拳を開けば掌と作る。」進んで云く、「我が脚何ぞ驢脚に似たると、又作麽生。」師云く、「屐齒蒼苔に印す。」進んで云く、「如何なるか是れ學人生緣の處。」師云く、「㊀岣嶁峯頭神禹の碑。」進んで云く、「和尚一一祇對、的的分明、只だ箇の三關、一と爲るか三と爲るか。」師云く、「儞が答話を謝す。」進んで云く、「與麽なる則は三を會して一と成すことは易く、一を會して三と成すことは難し。」師云く、「將に謂へり、事を問ふ漢と。」進んで云く、「恩、大にして酧い難し。」便ち禮拜す。師云く、「錯。」

㊀岣嶁山上に禹の碑有り。

乃ち拄杖を横へて云く、「炎炎たる六月紛紛として雪下る、只だ箇の好時節、覰著すれば眼花を生ず。然も是の如くなりと雖も、」拄杖を卓して云く、「❼射鵰の手に因らずんば、誰か李將軍を識らん。」

七月旦上堂、僧問ふ、「暑雲空に散じ涼氣秋に滴つ、好箇の時節、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「劈腹剜心。」進んで云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「車横に推さず。」進んで云く、「向上の全提鐵壁銀山、線路を放開すれば坑に墮ち塹に落つ。」師云く、「直に須らく上頭の關を踏むべし。」進んで云く、「乾峰、衆に示して云く、『法身に三種の病二種の光有り、一一透得して始めて是れ穩坐』と、意、那裏にか在る。」師云く、「舊路に人に逢ふことを喜ばず。」進んで云く、「雲門、衆を出でて云く、『庵内の人、甚に因つてか庵外の事を見ざる』と、又作麼生。」師云く、「己が爲に鎖す者は多く、他の爲に鎖す者は少し。」進んで云く、「夜來の鴈に因らずんば、爭か海門の秋を見ん。」便ち禮拜す。師云く、「好く看よ好く看よ。」

乃ち云く、「雨炎威を洗ふて秋意清く滴り、風梧桐に到つて豪を擊つこと最も的かなり。的的人焉んぞ廋さんや。閃電の機霹靂を轟す。」禪牀を擊つこと一拂子。

解夏小參、僧問ふ、「秋風颯颯遍界淸涼、時節已に至れば其の理自ら彰る。此の節此の景如何なる

❼史記李廣傳に云く、「天子中貴人をして廣に從ひ兵を勒習し、匈奴を擊たしむ、中貴人騎數十を將ゐ、縱に匈奴三人に見え、與に戰ふ、三人還つて射て中貴人を傷け、其の騎を殺し且つ盡く、中貴人廣に走る、廣曰く、是れ必ず鵰を射る者なり。」

か是れ其の理。」進んで云く、「與麼なる則は現成公案、逈に商量を絶す。」師云く、「依稀として曲れるに似て纔に聽くに堪へたり。」進んで云く、「記得す、僧、雲門に問ふ、『初秋夏末、前程忽ち人有つて問はば、如何が祇對せん。』門云く、『大衆退後』と、意旨作麼生。」師云く、「眼裏に筋無ければ一世貧し。」進んで云く、「僧云く、『過什麼の處にか在る。』門云く、『我れに九十日の飯錢を還し來れ』と、意、那裏にか在る。」師云く、「午に對して琴を彈ず。」進んで云く、「恁麼の時節、若し人有り、前程の事を問はゞ、和尚作麼生か他に指示せん。」師云く、「一雙の草鞋、兩文錢。」進んで云く、「尊貴の路を行かずんば、爭か上頭の關を踏まん。」便ち禮拜す。師云く、「且く脚下を看よ。」

乃ち云く、「立制期滿ちて、(サ)殿最功齊し、取證則有り、賞勞時至る。何ぞ妨げん、人人(キ)朗風に上つて鳥のごとくに騰り、个个虚無に跨つて神遊することを。踏著すれども瞋らず、樂著すれども礙らず、好箇の道伴誰か肩を交へざる。然も是の如くなりと雖も、門を出づること三歩、箇の十字街頭向背無き底に撞著せば、知らず那箇の一句子を將つてか他の端的を辨得せん。若し辨不得ならば、」拄杖を卓して云く、「君に勸む此の一杯の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

復た擧す、大隋因に僧問ふ、「金鴈書を附す、什麼と爲てか翼を露さゞる。」隋云く、「虛信を通ぜず。」

(サ)字彙に、上功を最と曰ひ、下功を殿と曰ふ。

(キ)朗恐らくは閬ならん、楚辭離騷に、「閬風に登りて緤ぐ。」註に、「閬風は山の名、崑崙の上に在り。」

師拈じて云く、「大隋古佛其の機を善くすと雖も、鎖を打し枷を扣くに及んで、恐らくは此の作無からん。若し人有り、山僧に金鴈書を附す、什麼と爲てか翼を露さゞると問はゞ、只だ他に對して道はん、鬧破了也と。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か、具眼の禪流、請ふ緇素を辨じて看よ。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家牙劍樹の如く、眼銅鈴に似たり。四月十五、他を結すること得ず、七月十五、他を解くこと得ず、畢竟如何が一路を指南せん。」師云く、「答話を謝す。」進んで云く、「恁麼なる則は西天此土草鞋底、日月星辰拄杖頭。」師云く、「人心等閑に似たり。」進んで云く、「記得す、翠巖、衆に示して云く、『一夏兄弟の爲に東語西話す、看よ翠巖が眉毛在りや』と、此の意如何。」師云く、「逈に化下に人有ることを想ふ。」進んで云く、「保福云く、『賊と作る人心虛る』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「豈に道ふことを信ぜずや。」進んで云く、「長慶云く、『生ぜり』と、試みに委悉せよ看ん。」師云く、「手を淨めて香を裝ふ。」進んで云く、「雲門云く、『關』と、如何が透得せん。」師云く、「洎乎ど鎖斷す。」進んで云く、「此の三大老、各隻手を出して翠巖を扶樹す、用處止だ一般なること莫しや。」師云く、「❶官差自由ならず。」進んで云く、「虛堂老子道く、『只だ心を同じうすることを解して、志を同じうすること能はず』と、又作麼生。」師云く、「吉凶、卦に上さず。」進んで云く、「寶山今夏兄弟の爲に東語西話す、眉毛梵天を拄ふ、翠巖と相去ること多少ぞ。」師云く、「嶽秀でて靈芝異なり。」進んで云

❶大慧廣錄八、上堂に曰く、「鐵輪天子寰中の勅、須らく信ずべし官差自由ならざることな。」差は「つかひ。」

く、「一句逈に超ゆ千聖の外、松蘿は月輪と齊しからず。」便ち禮拜す。師云く、「咦。」乃ち拄杖を橫へて云く、「有佛の處住することを得ず、無佛の處急に走過せよ。」拄杖を卓すること一下して云く、「趙州老漢に孤負すること莫れ、然らずんば靜處娑婆訶。」

上堂、拄杖を卓して云く、「若し者箇を識得せば、三世の諸佛之れを呵せん、若し者箇を識得せずんば、歷代の祖師之れを叱せん。何ぞや。風は八月より涼し。」拄杖を靠けて下座。

中秋上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「昨夜十四此の月有り、今宵十五此の月有り。昨夜世人此の月を嫌ふ、此の月猶ほ以て缺くる所有ればなり。今宵世人此の月を賞す、此の月圓にして以て缺くる所無ければなり。此の月圓缺の心有ること無し、世人圓缺を將つて分別す、分別取相泯すること能はず。造に隨ひ作に隨つて自ら生滅す。若し生滅を遠離することを得んと要せば、無相光中須らく休歇すべし。且く道へ、無相光中作麼生か休歇せん。」拄杖を擲下して下座。

上堂、「塞鴈翠微を度り、巖葉庭際に落つ。幾回か老瞿曇、爲に㋱脚頭の債を償ふ。然りと雖も沒交涉。更に人有り、眼裏に須彌を著け去ること在らん。」

㋱興起行經に、「佛弟子等と乞食して城市に至る、木槍有り、佛を逐ふて高きこと一仞、佛前に於て立つ。佛便ち心に念へらく、是の槍我が宿に自ら造る、當に之れを償ふべし。即ち大衣を疊り、四疊之れを躡み、還つて本座に坐す、佛便ち右足を以て躡ぶれば、木槍便ち足趺より上下して入り、徹過して地に入ると云云。」

㋯正燈世譜に、「江州東林、禪海崖了義」とあり、崖を岸に作る。

重陽 (ミ)海崖の義を謝する上堂、「九日東籬の下、菊花酒仙を賞す。(シ)汨羅獨醒の者、過英賢を求むるに在り。何が故ぞ。豈に止だ麒麟の海嶼に登るのみならんや、須らく知るべし義は豐年より出づることを。」拂子を擊つこと一下す。

開爐上堂、擧す、潙山、仰山に問ふ、「終日火に向ふ、甚として暖氣無き。」仰山火に向ふ勢を作す。師云く、「潙仰父子妨げず、冷處に把火を著くることを。寶山門下只だ箇箇暖氣相洽からんことを要す。何が故ぞ。死柴頭を拈起して、且つ無烟火に向ふ。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「(ヱ)彌勒眞の彌勒、分身千百億。」拄杖を卓して云く、「時時時の人に示す、時の人自ら識らず。」拄杖を靠けて下座。

十二月旦、(ヒ)英都寺を謝する上堂、「寒風地を匝る、寒鴈空に橫ふ。(モ)玉を辨じて正按し、(セ)塼を磨して旁提す。頭頭都べて顯露、物物總に現成す。何が故ぞ。蓋し是れ英靈の衲子、只だ事上に向つて見るが爲なり。」

雪に因つて上堂、「(ス)少林に立ち (イ)黛山に坐す、相逢うて相知らざるが爲なり。(ロ)趙老は臥し (ハ)龐公は指す。只だ要す、知つて故に犯すことを。若

---

(シ)楚辭七漁父の章に云く、「衆人皆醉へり、我れ獨り醒めり、是を以て放たれたり。」

(ヱ)會元二布袋和尙偈に曰く、「彌勒眞の彌勒、分身千百億、時時人に示す、時人自ら識らず。」

(ヒ)英都寺は傳未詳。都寺は以て庶務を總ぶる役なり。

(モ)拂玉は會元一、達磨の章に見ゆ。

(セ)磨塼は會元三、南嶽章に出づ、塼は甎に同じ、瓦なり。

(ス)會元一、達磨の章に出づ。

(イ)會元七、雪峰の章に出づ。

(ロ)傳燈十趙州章に云く、「師一日雪中に於て倒れて曰く、相救へ相救へ、僧有り、便ち身邊に去り臥す、師便ち起き去る。」

(ハ)碧岩四十二則に云く、「龐居士藥山を辭す、山十人の禪客に命じ、相送つて門首に至らしむ、居士空中の雪を指して云

し是れ我が這裏ならば、直饒ひ銀椀裏に盛り將ち來るも、也た是れ老鼠生薑を引く。參。」

冬至小參、僧問ふ、「冬至前後、砂飛び石走る、頭頭轍に合ひ、處處原に逢ふ。學人上來、請ふ師指的せよ。」師云く、「覿機改路無し。」進んで云く、「與麼なる則は、石笋枝を抽んで、鐵樹花を生ず。」師云く、「大家好く看よ。」進んで云く、「只だ諸方、今夜盤に堆く滿ちて飣ふるが如きんば、是れ同か是れ別か。」師云く、「黃金自ら黃金の價有り。」進んで云く、「德山、小參答話せず、問話の者有らば三十棒と、此の意如何。」師云く、「儞若し來り得ば、棒頭に眼有り。」進んで云く、「趙州、小參答話を要す、問話の者有らば一問を致し將ち來れと、又作麼生。」師云く、「是れ寃家にあらずんば頭を聚めず。」進んで云く、「和尚、小參答話を要するか答話を要せざるか。」師云く、「是れ人と共に聚り難きにあらず。」進んで云く、「畢竟二大老の用處と和尚の用處と、止だ一般なるを莫しや。」師云く、「粘じて一堆と作すこと莫れ。」進んで云く、「學人今夜、小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「好し去れ、好し去れ。」

乃ち云く、「㋥六爻既に窮り、陰魔自ら殄く。一陽來復して吾が道大いに亨る。直に得たり釋迦老ず、鼻孔遼天、㋭樓至如來脚跟地を踏むことを。驀忽に相逢うて合掌擎拳して、互に相慶賀して道く、

---

く、好雪片々、別處に落ちず」と。

㋥☷☳地雷復、易傳に曰く、「復の卦たる、一陽五陰の下に生じ、陰極まりて陽復するなり云云。」

㋭名義集に云く、「樓至此に啼泣と譯す、又盧遮と名づく云云。」

「亞歲の令節、萬物重ねて新なり、未徹の者は徹し、未到の者は到る、伏して惟れば人人起居萬福」と。大衆若し者箇の說話を聽き得ば、青色光明雲、若し者箇の說話を擧し得ば、白色光明雲。且く道へ、兩處倶に通ずる底亦作麼生。」拂子を擊つて云く、「來日定めて是れ青雲の節ならん。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ法身。」門云く、「六不收。」拈じて云く、「諸人一向に與麼に領ずるも、相逢うて手を出さず。其れ或は未だ然らずんば、前頭更に雪の在る有り。」

次の日上堂、拄杖を拈じて云く、「只だ箇の片田地、四時消長せず。古今此の如くなるが爲に、今古一陽生ず。」卓拄杖一下す。

雪に因つて上堂、「諸人未だ者裏に來らざるに、山僧が爲人の句子を記得す、者裏に到來するに及んで、問著すれば箇箇忘却す。甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「只だ雪上に霜を加ふるに因る。」

上堂、「巖寶脊寒うして山薇を擁す、月高うして枯木霜禽睡る。明覺是れ一代の龍門爲りと雖も、爭奈せん無事甲裏に坐在することを。何ぞや。」良久して云く、「臘月苦寒風雪吹く、急急に身を抽づるも已に是れ遲し。」

除夜小參、僧問ふ、「新底は舊底の已に往くことを知らず、舊底は新底の已に來るを知らず、新舊相知らず、物物正に對偶す。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「❶三十三天、❶二十八宿。」進んで云

く、「爆竹未だ鳴らざる已前に向つて、更に一條の活路を開くが如きんば、又作麼生。」師云く、「山門頭に合掌す。」進んで云く、「如何なるか是れ轉身の處。」師云く、「佛殿裏に燒香す。」進んで云く、「昔日北禪、露地の白牛を烹て分歲す、和尚今夜什麼を將つてか諸人と分歲せん。」師云く、「細嚼蜜に似て甘し。」進んで云く、「恁麼ならば則ち大衆德に飽き去る。」便ち禮拜す。師云く、「也た好し金毛の獅子。」

乃ち云く、「舊年今夜去り、去去都べて是れ舊曆日。新年今宵來る、來來齊しく是れ新鮮の年。交頭結尾、家家の生涯是れ別なり。因緣時節、處處大用現前。便ち見る龍寶山頂、之を仰げば際無く、大德門下、之を瞻るに限り無きことを。豈に啻乎時淸く道泰かなるのみならんや、自然に和氣靄然たることを得ん。正當恁麼の時、諸人と保愛底の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「臘雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し。」

復た擧す、「香林因に僧問ふ、『萬頃の荒田是れ誰か主と爲る。』林云く、『看よ看よ、臘月盡く』と。山僧は然らず、若し人有り、此の問を致し來れば、只だ他に對して道はん、大坐當軒と。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か、具眼の禪流、請ふ緇素を分て。」

（ヘ）淨名疏に云く、「帝釋昔し迦葉佛滅時、一女人有り、發心塔を修す、復た三十二人有り、發心修を助く、修塔の功德に依つて忉利天主と爲り、其の修を助くる者輔臣と爲る、君臣之れを合せて三十三天と名づく。」

（ト）二十八宿は星の分野なり、東方、角、亢、氐、房、心、尾、箕。北方、斗、牛、女、虛、危、室、壁。西方、奎、婁、胃、昴、畢、觜、參。南方、井、鬼、柳、星、張、翼、軫。

歳旦上堂、僧問ふ、「鏡清因に僧問ふ、『新年頭還つて佛法有りや也た無や。』清云く、『有り』と、此の意如何。」師云く、「天高うして萬象正し。」進んで云く、「㊀明教は又無と答ふ、優劣有りや也た無や。」師云く、「海闊うして百川朝す。」進んで云く、「如何なるか是れ新年頭の佛法。清云く、『元正啓祚、萬物咸く新なり』と、如何が委悉せん。」師云く、「南地の竹、北地の木。」進んで云く、「鏡清は有と道ひ、明教は無と道ふ、和尚又作麼生。」師云く、「意氣有る時は意氣を添へ、風流を得る處也た風流。」

乃ち拄杖を拈じて云く、「鳳暦開元の日、王春肇始の時、祥雲空に翻り、瑞雪地に滿つ。佛祖の大機を發揮し、人天の性命を成熟す。諸人盡く是れ此の中の人、妨げず物に隨つて主と作り、處に隨つて祐を納るゝことを。」卓拄杖一下す。

㊁上元上堂、僧問ふ、「人間の燈、天上の月、明有り暗有り、圓有り缺有り、請ふ師端的。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「龍潭紙燭を吹滅すれば、德山大悟す。未審し見處明中に在るか暗中に在るか。」師云く、「狗、赦書を啣む。」進んで云く、「與麼なるときは則ち光輝を發し去れり。」師云く、「阿誰か恩を承けざらん。」

---

㊀會元十五に、「雲門偃禪師法嗣隋川雙泉山師寬明教禪師云云。」類聚に、「智門寬禪師、僧問ふ、新年頭還つて佛法有りや也た無や、師曰く、無し、云く、日日是れ好日、年年是れ好年、甚麼としてか却つて無き、師云く、張公酒を喫すれば李公醉ふ、僧云く、老老大大、龍頭蛇尾、師曰く、明教今日失利。」

㊁上元は正月十五日なり。史記樂書に、「漢家太一を祀る、昏時を以て祠り、明に到る。」開元遺事に云く、「上東都に在り、正月望夜に過ふ、仗を上陽宮に移し、大いに燈影を陳し庭燎を設け、禁より殿庭に

乃ち云く、「朶朶金蓮を放ち、重重珠網を懸く、㋦紙撚油無き底は㋸壁を鑿つて光を偸むこと莫れ。」拂子を擊つて下座。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「滅と謂はゞ弟子に非ず、不滅と謂はゞ弟子に非ずと、如何が見得して佛弟子と爲さん。」師云く、「杜鵑啼く處花狼藉。」進んで云く、「今日は則ち有、明日は則ち無、今日既に有と道はゞ何れの處に向つてか世尊を見ん。」師云く、「山僧に問ふに一任す。」進んで云く、「與麼なるときは則ち明日何ぞ無なる。」師云く、「妨げず阿儞に答ふることを。」進んで云く、「四衆各啼泣す、雲門甚麼と爲してか打殺せんと道ふ。」師云く、「㋾狗の其の主を守るが爲なり。」進んで云く、「㋻之を愛しては其の生きんことを欲し、之を惡んでは其の死なんことを欲す、和尚又作麼生。」師云く、「常に其の機を用ふ。」進んで云く、「恩大にして酧い難し。」便ち禮拜す。師云く、「吽。」

乃ち云く、「槨に雙趺を出して日の明かなるが如し、人間天上、詎ぞ藏韜せん。時流若し波旬が眼を具せば、舞袖猶ほ須らく柳梢に在るべし。」喝一喝して下座。

---

至り、皆蠟炬を設け連屬絕えず。」

㋦會元十五、「洞山初禪師因に僧問ふ、如何なるか是れ正法眼、師曰く、紙撚無油底。」

㋸西京雜記に曰く、「衡、學を勸む、燭無し、鄰舍燭有つて逮ばず、衡乃ち壁を穿ち、其の光を引いて之れを讀む。」匡衡、字は稚圭、東海承の人なり、傳は前漢書八十一列傳にあり。

㋾前漢書四十五蒯通傳に云く、「狗、おのおの其の主に非ざるを吠ゆ。」

㋻論語顏淵第十二に曰く、「之れを愛しては其の生を欲し、之れを惡んでは其の死を欲す、既に其の生を欲し、又其の死を欲す、是れ惑ひ也。」

三月半、遊山して回る首座・維那幷に龍翔の塔主を謝する上堂。擧す、長沙一日、遊山して門首に歸る、首座問ふ、「和尙什麽の處にか去來す。」沙云く、「遊山し來る。」座云く、「什麽の處にか到り來る。」沙云く、「始めは芳草に隨ひ去り、又落花を逐うて回る。」座云く、「大いに春意に似たり。」沙云く、「也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり」と。師云く、「奇なる哉怪なる哉、兩口一舌、山僧數日來遊山して回り來る、首座必ずしも問ふことを要せず、山僧必ずしも他を誣ひず、是れ其の卜意無きにあらず、只だ綱令の人有ることを愼む。何が故ぞ。祥を爲し瑞を爲す、龍驤り鳳翔る。」

上堂、拂子を竪起して云く、「西天の四七、東土の二三、盡く龍寶が拂子頭上に向つて筋斗を打す、諸人還つて見るや。若し也た見得せば、妨げず雨中に杲日を見ることを。其れ若し未だ然らずんば、」拂子を擊つて云く、「㋕德山の羅漢。」

佛誕生上堂、僧問ふ、「老胡今日母胎を出づ、未審し本來の面目。」師云く、「東山西嶺靑し。」僧云く、「恁麽ならば則ち雨洗ひ風磨して自ら鮮新、一盆の香水誰が爲にか潑ぐ。」師云く、「此の深心を將つて塵刹に奉ず、是れを則ち名けて佛恩を報ずと爲す。」僧云く、「世尊下生、枝を牽き蔓を引く、如何なるか是れ直截根源の一句。」師云く、「薰風自南來、殿閣生微涼。」僧坐具を提起して云く、「爭奈せん者箇有ることを。」師云く、「有は則ち有、儞に到つて無。」僧坐具を放下して云く、「還つて端的なりや也た

㋕德山の羅漢は方語に曰く、「且く門外に在り、」又曰く、「驗得して骨出づ。」

無や。」師云く、「三十年後面熱し汗出でん。」
乃ち云く、「黄金采を讓り、琉瑠翠を凝す。龍寶が手裏杓柄有り、當日温涼の水に同じからず。」拂子を擊つこと一下す。
結夏小參、僧問ふ、「聲前の一句常機に墮せず、禁足護生當に何事をか圖る。」師云く、「鳳は竹實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず。」進んで云く、「㋵西天の蠟人氷、東土の鐵彈子は之を束ねて高く閣く、和尚今夏一百二十日、何を以てか驗と爲ん。」師云く、「僧堂の裏、佛殿の前。」進んで云く、「㋟資福の刹竿を望み見て便ち回るも、脚跟下好し三十を與ふるにと、此の意如何。」師云く、「車、橫に推さず。」進んで云く、「㋹雪峰を望み見て、便ち主事に參ずと、又作麽生。」師云く、「㋞庭禽勇を養ふて、終に人を驚かさんことを待つ。」進んで云く、「畢竟還つて結制安居底の時節有りや。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「和尚今日小參、舊規を守るが爲なり、別に新條有りや。」師云く、「崑崙劈けども開けず。」
乃ち云く、「㋡但薩阿竭廣大の規範有り、二千年前百萬の㋧鳳毛の爲にす。後代の兒孫基本を忘れず、之を力めて以て箇の漆器を呈す。苟も其の人を

---

㋵會元十二長慶慧達の章、「問ふ、長期道に進む、西天蠟人を以て驗と爲す、未審し此の間何を以てか驗と爲ん、師曰く、鐵彈子、曰く、意旨如何、師曰く、大底は大、小底は小。」
㋟會元九に云く、「吉州資福貞邃禪師、法を資福寶に嗣ぐ、上堂曰く、江を隔てゝ資福の刹竿を望み見て、便ち回り去るも、脚跟下好し三十棒を與ふるに、況んや江を過ぎ來るをや。」
㋹會元七に曰く、「大原の孚上座、初め雪峰に參ず、門を跨いで纔に雪峰を見て便ち主事に參ず、次の日却來し、禮拜して曰く、昨日和尚に觸忤す、峰曰く、是の般の事を知らば便ち休す。」
㋞庭禽云々は史記滑稽傳に見ゆ。

得れば則ち圓覺伽藍に踞せず、平等性智を恭まず、手鐵山を碎き、足巨海に跨る。格外の玄機を盡し、衲僧の作略を用ふるも、未だ分外と爲さず。若し也た个の㋤孜孜兢兢底の漢有つて、長期一百二十日の內、眼胮謾に開かず、脚板謾に踏まず、阡陌を以て非塹と爲し、聚落を以て茅坑と爲して、函蓋相應じ、方圓相投す。乃ち是れ列刹の撰ぶ攸、吾が門の優曹なり。敢て諸人に問ふ、此の兩種の禪和、那箇か親しく、那箇か疎なる。」拂子を擊つて云く、「道ひ著ると道ひ著ざると、且く三條椽下に於て摸索せよ。」

復た擧す、雲門因に僧問ふ、「如何なるか是れ淸淨法身。」門云く、「花藥欄。」僧云く、「便ち恁麽にし去る時如何。」門云く、「金毛の獅子」と。師云く、「者の僧若し是れ作禮して去らば、須らく雲門人を出すの全機を見るべし。然も是の如くなりと雖も、黃金自ら黃金の價有り、終に沙に和して人に賣與せず。」

次の日上堂、僧問ふ、「竺土の老子他の命を害せんことを恐れて、渠が爲に結制す、之を禁足と謂ふ。豈に个の一著巧を弄して拙と成すに非ずや。」師云く、「鳳林吒之。」進んで云く、「須彌那畔大洋海底、一時に走徧して、當に此の漢有つて出で來らば、和尙如何が他をして制禁せしめん。」師云く、「且坐喫茶。」進んで云く、「記得す、雪峰衆を領じて㋶浮江に到り、問うて云く、『二百の僧を寄せて夏を過さんと欲す、得るや否や。』浮江、拄杖を以て畫一畫して云く、『著不得』と、還つて端的なりや也た無や。」師云

㋡修行本起經上に曰く、「汝能く怛薩阿竭爲り」と、本起を說くか。
㋧鳳毛の故事、南史二十九に見ゆ。
㋤孜孜はつとむるなり、兢兢は戒愼なり、萬事の微を戒愼するを言ふ。
㋶台州浮江和尙、法を長慶安に嗣ぐ。此の緣、會元四に出づ。

く、「寃家結び得たり。」進んで云く、「一畫底。」聻。」師云く、「舌頭地に拖く。」進んで云く、「著不得と、又作麼生。」師云く、「力を勞すること少からず。」進んで云く、「一人有り、二百の衆を寄せて夏を過さんと道はゞ、未審し和尙他に容さんや也た無や。」師云く、「淨地上に向つて屙すること莫れ。」進んで云く、「如何なるか是れ和尙の一句子。」師云く、「退後退後。」

乃ち云く、「衲僧家、氣宇王の如し、祖佛倶に容れず。今朝甚に因つてか二千年前の影子裏に坐在する。」拄杖を卓して云く、「池を鑿つて月を待たざれども、池成れば月自ら來る。」

端午上堂、拄杖を拈じて云く、「文殊藥を要すれば善財藥を採る、其の機に通ずと雖も、爭か我が這裏の箇箇大安樂なるに似かん。」拄杖を卓して云く、「切に忌む、無病の藥を求むることを。」拄杖を靠けて下座。

上堂、之を得れば蹉過し、之を得ざれば及ばず。然も是の如くなりと雖も、三十年後、此の語大いに行はれて始めて得ん。」拂子を以て禪床を擊つて下座。

半夏上堂、「今朝相逢うて等閑に問過すれば、人人道ふことを解す、今日半夏と、㊄阿呵呵阿呵呵。山僧與麼に道ふ、是れ諸人を褒するか、是れ諸人を貶するか。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月松風を賣らば、人間恐らくは價無からん。」

上堂、擧す、㊆菩薩樹下に於て坐す、天龍八部・梵釋四王悉く以て歡喜し、空中に於て踊躍讃嘆

㊄阿は發聲の助語、呵呵はからからと笑ふ貌。

㊆此の緣、過去現在因果經三に出づ。

す。時に第六天の魔王、宮殿自然に動搖し、心大いに懊惱す。乃ち念言すらく、「沙門瞿曇、今樹下に在りて端坐思惟す、久しからずして廣く一切を度し、我が境界を超越せん。今往いて之を壞亂せん」といつて、乃ち無量の眷屬と倶に菩薩を圍繞し、大惡聲を發して天地を震動す。菩薩心定つて顏異相無く、怡然として動せず、驚かざること猶ほ獅子の鹿群に處るが如し。是に於て諸魔自然に散壞す。師云く、「大衆、世尊降魔は無きにあらず、只だ是れ如來禪を用ふるが故に、其の力全からず。吾が衲僧家、祖師禪を用ひて衆魔を降伏す、又作麼生。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して云く、「看よ看よ、諸魔盡く膽裂け、道光忽ち超昇することを。」

上堂、「至道無難、唯嫌揀擇。」忽ち拄杖を拈じ、卓一下して云く、「者箇は是れ龍寶が拄杖子、至道と揀擇と什麼の處にか在る。」又卓一下して云く、「但だ憎愛莫ければ洞然として明白なり。」

上堂、「世界恁麼に熱す、什麼と爲てか看雲亭上、炎威到ることを得ざる。若し人、者箇の道理を識得せば、三十年後、一日頭白きことを免れ得ん。」

七月旦上堂、一葉落ちて天下秋なり、一塵起つて大地收る。時節遇ひ難し、提撥し難き處、轉た風流。」拂子を擊つて下座。

解夏小參、僧問ふ、「昨は垂楊の綠を見、今は落葉の黃なるに逢ふ。聖制周圓の事、願はくは更に舉揚を聞かん。」師云く、「意氣有る時は意氣を添ふ。」進んで云く、「兄弟一夏、法令を犯さず、來日期滿ち

て東去西行、賞勞言薦、又作麼生。」師云く、「家家の門路、長安に通る。」進んで云く、「潙山、仰山に問ふ、『子一夏上來せず、下面に在つて箇の什麼をか作し得たる。』仰云く、『一片畬を鉏得し、一籮の粟を種ゑ得たり』と、意、那裏にか在る。」師云く、「父子、火を取つて夜遊す。」進んで云く、「潙云く、『子虚しく一夏を過さず』と、意旨作麼生。」師云く、「末後を初めと爲す。」進んで云く、「仰云く、『和尙箇の什麼をか作し得たる。』潙云く、『日間一食、夜後一寢』と、如何が端的を辨ぜん。」師云く、「兩口一舌。」進んで云く、「仰云く、『和尙も亦虚しく一夏を過さず』と道ひ了つて舌を吐く。聻。」師云く、「㊀跪乳の禮を知る。」進んで云く、「潙云く、『子何ぞ自ら己命を復することを得たる』と、如何が領略せん。」師云く、「得て戮せず。」進んで云く、「忽ち人有り、和尙に今夏の事を問著せば、又如何が祇對せん。」師云く、「徐に行いて踢斷す流水の聲、縱に觀て寫し出す飛禽の跡。」進んで云く、「夜來の鴈に因らずんば、爭か海門の秋を見ん」といつて便ち禮拜す。

師乃ち云く、「秋風玉管を吹く、知音靑霄の外に住せず、秋月冰輪を礙る、光輝塵刹を盡して照絕す。全放全收、古路誰有つてか踏著せん。一擒一縱、動容聲色威儀あり、矧んや亦諸人一百二十日、終に虚しく匙を拈じ筯を放たず。來日期滿ちて聖制周圓、各各脚跟下に從つて去ることを得ん。妨げず須彌を踢倒し、滄溟を立乾することを。然も是の如くなりと雖も、忽ち若し娑竭海を出で龍宮震ふことを見

㊀公羊傳に何休云く、「羔其の贄に取るも鳴かず、之れを殺すも嘷えず、乳必ず跪いて之れを受く、義に死し禮を生ずる者、此れ羔羊の德なり。」說文に「羔は羊の子なり」と。

ば、切に(の)多地夜他を誦すること莫れ。何が故ぞ。抖擻す多年の穿破衲、襤褸一半雲を逐うて飛ぶ。」

復た擧す、「翠巖夏末、衆に示して云く、『一夏已來、兄弟の與に東說西話す、看よ翠巖が眉毛在りや。』保福云く、『賊と作る人心虛る。』長慶云く、『生ぜり。』雲門云く、『關。』」父の羊子證す。三大老各隻手を出すと雖も、奈何せん未だ翠巖の關棙子を出でざることを。只だ他の(オ)圈䙡に落ちざる一句の如きんば、又作麼生。一峯雲片片、雙澗水潺潺。」

次の日上堂、僧問ふ、「長期已に滿ちて布袋頭開く。月白く風高し、秋色に非ずといふこと無し。」師云く、「洞房深き處私情を說く。」進んで云く、「學人便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「雨過ぎて夜塘秋水深し。」進んで云く、「與麼ならば則ち直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし。」師云く、「程を貪ること太だ速かなり。」進んで云く、「謂つ可し、一夏虛しく光陰を度らずと。」師云く、「(の)赤土簸箕を畫く。」進んで云く、「一聲雷震ふて清飈起る、天上人間知んぬ幾幾ぞ。」便ち禮拜す。師云く、「何れの處か清涼ならざる。」

乃ち云く、「一夏禁足安居、諸人と取證す。山僧多くは是れ昏沈、今朝布袋を解開して諸人と遨遊す。山僧渾べて是れ走作す。所以に道ふ、佛手も遮ること得ず、人心等閑に似たり。村草步頭に到つて錯

(ノ)大月集藏經に「呪を說く、皆上に多地夜他の四字有り。」

(オ)圈䙡は「わな、てくだ」と譯す。

(の)會元四に云く、「大隋眞和尚、因に僧問ふ、如何なるか是れ和尚の家風、師曰く、赤土簸箕を畫く、曰く、未審し此の理如何、師曰く、簸箕唇有り、米跳つて出です。」

つて擧すること莫れと。」

中秋上堂、僧問ふ、「靈山に月を話り、曹溪に月を指す、意旨如何。」師云く、「牛頭沒し馬頭囘る。」進んで云く、「寒山子底、又作麼生。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「玄沙什麼と爲てか道ふ、生死岸頭の事と。試みに甄別せよ看ん。」師云く、「盤に和して推し出す夜光の珠。」進んで云く、「恁麼ならば則ち天上人間、未だ此の光影の中を出でず。」師云く、「(ヤ)商音を把つて羽音と作すこと莫れ。」僧坐具を提起して云く、「者箇是れ光影の中を出づると爲んか、未だ光影の中を出でざるか。」師云く、「扁舟已に過ぐ洞庭湖。」

乃ち云く、「(マ)藥嶠雲を披いて笑ひ、王老拂袖して行く。寒山口稜無きことを愁へず、(ケ)長沙私路に行くに由無し。檢點し將ち來れば、盡く是れ光影裏に在つて活計を作す。何ぞや。中秋三五今宵の月、爽氣遠く浮んで銀漢淸し。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「當に色中に於て色體を失せず、無相の中に於て有を碍らざるべし。故に達磨師祖、端無く走つて東勝昇州に到り、却つて還た山僧が手裏に向つて身を藏す。諸人若し見得せば、上大人丘乙巳、若し見不得ならば、化三千七十士。」拄杖を卓すること一下す。

---

(ヤ)樂經に、「商音は稍や濁なり、感嘆の音有り、羽音は最も淸なり、悽思の音有り。」

(マ)會元五に云く、「藥山和尚、一夜山に登りて經行す、忽ち雲開いて月を見る、大嘯一聲す、澧陽東九十里許に應ず、居民盡く謂ふ東家なりと、明晨迭に相推問して直に藥山に至る、徒衆曰く、昨夜和尚山頂に大嘯す。」

(ケ)會元五に云く、「長沙岑禪師、一夕仰山と月を翫ぶ次で、仰

重陽上堂、「今朝重九の節、東籬菊已に花さく、景に對して陶令を思ひ、高きに登つて孟嘉を憶ふ。且く道へ、其の中の意又作麼生。」拂子を擊つて云く、「相逢うて共に賞す紫萸の茶。」

上堂、「空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る。傅大士平生の伎倆を用ひ盡して、只だ胡兒無鬚底の句を道ひ得たり。山僧嘗て牛頭を按じて草を喫せしむることを要せず、莫致あれ巖葉霜飛んで秋意深し。」

開爐上堂、擧す、趙州、衆に示して云く、「三十年前、南方火爐頭に箇の無賓主の話有り、直に而今に至るまで人の擧著する無し。」師云く、「咄、儞只だ手を炙つて熱を助けんことを要す、誰が家の竈裏に火に烟無からん。」拄杖を卓すること一下す。

上堂、「是の法、法位に住す、世間相常住」と。驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「者箇は是れ龍寶が拄杖子、喚んで是法と作さば、地獄に入ること箭の如く、喚んで是法と作さずんば、亦地獄に入ること箭の如し。是の故に世尊、苦口に便ち住法位の三字を道ひ得たり。然も是の如くなりと雖も、」又拄杖を卓すること一下して云く、「寒風敗葉凋む、且喜すらくは故人の歸ることを。」

冬至小參、僧問、「群陰剝盡して一陽復た生ず、正與麼の時、衲僧如何が轉身せん。」師云く、「鐵輪石を碎く。」進んで云く、「陰陽代謝して四序變遷することは且く致く、只だ卦文未だ分れず風塵未だ動

曰く、人人盡く這箇の在る有り、祇だ是れ用不得。師曰く、恰も是れ汝が倩ふて用ひ去らん。仰曰く、儞作麼生か用ひん。師乃ち一踏に踏倒す。仰起き來つて曰く、師、直下に箇の大蟲に似たり。」

せざる時の如きんば、又如何。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「恁麼ならば則ち一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」便ち禮拜す。師云く、「人に逢うて錯つて擧すること莫れ。」

乃ち云く、「物有り、天地に先だつ、鐵鎚擊てども碎けず、象無うして本寂寥、夜は合して晝は開く。能く萬象の主と爲つて、之を擁すれども聚らず、四時を逐うて凋まず、之を撥へども散ぜず。恁麼恁麼、㋑雪嶺泥牛吼え、不恁麼不恁麼、雲門木馬嘶く。金、金に博へず、水、水を洗はず。且く置く書雲の令節、箇箇保愛、時に順つて祐を納るる底の一句、又作麼生。」拂子を擊つて云く、「律管知る處、繡紋線長し。」

復た擧す、僧、㋺古德に問ふ、「如何なるか是れ冬來の事。」德云く、「京師に大黃を出す」と。師拈じて云く、「巖竇宵寒うして山帔を擁し、月高うして枯木霜衘睡る。賓山此の兩句を著けて、賓の爲に力を竭し、主の爲に力を竭す。具眼の禪和、請ふ端的を辨せよ。」

次の日上堂、「時亞歲に臨み、節書雲に屆る、一氣言はず鐵樹花を開く、初爻象無うして萬彙蠢く、彰る。正與麼の時、活脫の衲僧如何が受用し去らん。」拄杖を卓すること一下して云く、「一冬と二冬と相逢うて手を出さず。」

㋑雲門廣錄卷の上に云く、「師因に僧問ふ、如何なるか是れ雪嶺泥牛吼ゆ、師曰く、山河走る、曰く、如何なるか是れ雲門の木馬吼ゆ、師曰く、天地黑し。」

㋺古德は疎山匡仁禪師なり、會元十三に出づる上堂の語なり。

㋓祐德禪寺佛堂供養の陞座、師、香を拈じて云く、「此の香、天より生ずる所に非ず、地より生ずる所に非ず、虛空より生ずる所に非ず、檀主の信心より生ず。根苗、大明の表に蟠り、條乾至陽の清きに茂す。爐中に爇向して仰いで帝道の遐昌を祝し、俯して香花の敷榮を祈る。」

師、座に就いて云く、「聲前に旨を領ずるも已に祖令を犯す、句後に承當するも法相饒さず。二途に涉らず問を解する底有ること莫しや。」僧問ふ、「㋢甘蔗、苗を流へて刹塵に應ず、覺場高く發す利生の因。」師云く、「誰か恩を承けざらん。」進んで云く、「㋻卓犖たる雄機、隨處に阻て無し。古今肯重の事、請ふ師一句を惜まざれ。」師云く、「一問に騎り來る。」進んで云く、「直下に構得して更に頭を回さすと、亦作麼生。」師云く、「寶杖夜鳴る寒嶠の月。」進んで云く、「㋚昔日須達、獨園精舍を建て、世尊を屈して群生の爲に法を說かしむ。今日檀越、祐德禪寺を造つて、和尚を請じて四衆の爲に演法せしむ、其の益、還つて優劣有りや也た無や。」師云く、「優劣有ること無し。」進んで云く、「今日檀越、此の禪苑を造る、昔日須達、彼の梵刹を建つると其の功、又多少有りや也た無や。」師云く、「多少有ること無し。」進んで

---

㋓正燈世譜に云く、「大德開山宗峰妙超禪師出世、祐德寺を但州に創す。」

㋢普曜本行經に云く、「大茅草王、王儲と成ることを得て、壽命極めて長老、行くこと能はず、時に諸弟子出でて飲食を求む、籠を以て儲を盛り、樹枝の上に懸く、獵師遙に見て謂らく、鳥ならんと、便ち射る、血地に滴って二甘蔗を生ず、日炙いて開剖す、一は童男を出し、一は童女を出す、相師に占はしめ、男を立てゝ善生と名け、即ち其の頂に灌いで甘蔗王と名づく、女を賢と名づけ、第一妃爲り。」釋迦氏譜に、「佛姓を明す、一に瞿曇、二に甘蔗、三に釋迦、五に日種。」

㋻韻會に卓犖は超絕なり。

㋚須達長者精舍を建つるの緣、經律異相三に詳かなり。

云く、「正法末法、時異に、佛法僧法、名殊なり。甚と爲てか其の功、等同なることを得るや。」師云く、「洞中の山色四時好く、雲外の溪聲一樣寒し。」進んで云く、「與麼なるときは則ち生生頂奉して、心鏡輝く、廓に塵勞を照して信餘り有り。」便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

乃ち云く、「千聖の靈機、列祖の命脈、嶺上の白雲、巖前の綠水、古に亘り今に亘る、色を透り聲に騎る。靑寥寥白的的、提掇し難き處轉た是れ風流。德山棒を行じ、臨濟喝を行じ、雪峰の輥毬、禾山の打鼓に迄るまで、齊しく是れ恁麼の時節、只だ目前の些子を露す。所以に山僧、山を歷水を渡り、得得として來つて開堂演法す。大檀信の爲に運を開き德を添へ、壽を增し福を增すも、亦者箇を出でず。且く道へ、畢竟其の功何れの處にか歸す。」拂子を擊つて云く、「國淸うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」(敍謝、錄せず。)

又云く、「至道曠遠、幽致虛凝、佛佛之を以て匡持し、祖祖之を以て保護す。其の要只だ群有を利度して、處に隨つて主と作つて脫體現成し、物に隨つて能く轉ずる在り。苟も其の人を得るときは、則ち啻に自ら靈然を得るのみに匪ず、慈悲中に動いて菩薩の行願に隨順するが爲に、本有の光明藏を豁開して、㊉五趣の貧兒を賑濟す。高低普く應じ、前後虧くること無く、緣に遇うては宗に卽す、一隅に滯ること無し。所以に大檀越、廣大の知見を具し、堅固の信力有り、自己の家珍を運出して、奇麗

㊉五趣とは、一には天、二には人、三には地獄、四には餓鬼、五には畜生。趣は到なり、善惡の業に隨つて、其の苦樂の地に到るを云ふ。

の禪苑を建立し、佛僧を安置して法寶を紹隆す。五濁惡世の中、人の至信無き時に丁つて、無比の大願を發して、見聞の巨益を成じ、能く蛉螟の依託と爲り、最も漂沈の要津と作る。集むる所の功課を以て二親の幽靈に酧ゆ。蓮(注)上品に開くことを薦め、遠く山僧を請じ來つて、其の功德を贊揚せしむ。若し其の功德を論ぜば、山僧未だ口を開かざる已前に、其の功廣く施し其の德偉に被る。矧んや亦雪巒山を裹んで、以て淨刹の勝境を儼にし、風寒木を拂つて念法の妙音を唱ふ。正當與麼の時、箇箇無盡、刹刹塵塵、悉く是れ無量壽佛の慈顏を展べ、不可說不可說、頭頭物物、信心不二の全體を現ず。一心多心、一劫多劫、(注)三身四智を圓にし、(注)八解六通を徧うして、(注)五眼融通、處として鑑みずといふこと無く、(注)十力滿足、邪として摧けずといふこと無し。一切を具足し、(注)菩提を攝受す。智智清淨、無別無斷、深く(注)大陀羅尼の妙門に入つて、大不可思議の境界に住す。是の如きの作用、是の如きの奇特、是の如きの威光、是の如きの吉祥有つて、山河大地、草木叢林、情と無情と、因中と果上と、高無く下無く、大機大用を發して、大安大樂を得せん。諸人此の事を見んと要すや、竹に上下の

---

(注)觀無量壽經に云く、「佛、阿難及び韋提希に告ぐ、上品上生とは若し衆生有り、彼の國に生ぜんことを願へば、三種心を發して即ち往生せん、何等をか三と爲す、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心。三心を具する者必ず彼の國に生ぜん。」

(注)三身とは、一には法身、二には報身、三には應身なり、四智とは、一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智なり。

(注)八解脫とは一に內有色相外觀色、二に內無色相外觀色、三に淨背捨身作證、四に虛空處背捨、五に識背捨、六に無所有處背捨、七に非有想非無想處背捨、八に滅受想背捨、八解脫、亦八背捨と名づく。背は違背、捨は棄捨なり。大智

節有り、松に古今の青無し。」

擧す、世尊初め成道、㊆普光寶殿に於て道樹を離れずして、須彌山頂帝釋宮に上る。帝釋一寶坊を化作して、爲に十住の法門を説かしむ。師拈じて云く、「世尊は半夜に日頭出で、帝釋は日午に三更を打す。若し是れ山僧が開堂底ならば、天平に地平なり。」拄杖を卓すること一下して、便ち下座。

上堂、拄杖を拈じて云く、「拄杖子、三件の長處有り、第一に疾程、朝に西天に到り、暮に東土に歸る。第二に妙言、一句截流、萬機寢削す。第三に巧通、變じて龍と作つて天に上り、蛇と作つて草に入る。若し人善く識得せば、我れに話頭を還し來れ。」

佛成道、上堂、僧問ふ、「我が佛、萬乘の尊榮を弃てゝ六年の饑凍を受く、忽ち明星を覩て豁然として成道すと、未審し何の道をか成ず。」師云く、「鼻孔、上唇に掛く。」僧云く、「世尊説法、大梵天王、金色の波羅花を以て獻ずと、此の意如何。」師云く、「恩を報ずることは須らく是れ恩を知る人に還すべし。」僧云く、「世尊拈起して大衆に顯示す、惟だ迦葉尊者のみ有つて破

---

度論に曰く、「此の淨潔五欲に背き、此の著心を捨つ、故に背捨と名く云々。」六通とは、一に神鏡、二に天耳、三に他心、四に宿命、五に天眼、六に漏盡。

㊄五眼は肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼。

㊅十力とは、如來證得の智なり、一切に了達して能くこれを壞する者無き故に力と云ふ。一に是處非處を知る、二に過現未來の業報を知る、三に諸禪解脱三昧を知る、四に諸根の勝劣を知る、五に種々の解を知る、六に種々の界を知る、七に一切至處の道を知る、八に天眼無礙を知る、九に宿命無漏を知る、十に永斷習氣を知る、故に佛を十力と稱するなり。

㊆菩提は梵語、智、道、覺等と譯す、佛陀正覺の智慧を云ふ、

顔微笑すと、意旨作麼生。」師云く、「二虎爭ふ時、其の勢生ぜず。」僧云く、「世尊云く、『吾れに正法眼藏有り、摩訶大迦葉に分付す』と、又作麼生。」師云く、「愁人に説向すれば人を愁殺す。」僧云く、「今日和尚説法、人有りて、花を獻せば、未審し如何が顯示せん。」師云く、「也た爭奈せん破顏の人を得ざることを。」

乃ち云く、「㋜吉祥の座に坐して、切に木槵子を覓めて眼睛を換へんと要す。明星を見るに及んで、果然として錯を將つて錯に就く、此れより定を起つて大地を賣弄す。山僧直に得たり暗地裏に點頭することを。諸禪德、儞如し點頭を解する底ならば、取次に敢て㋑牛畔の供を背はず。」

雪に因つて上堂、「譬へば大地一片の雪の如し、見る底は之を白と謂ひ、踏む底は之を冷と謂ふ。只だ見ざる踏まざる底の如きんば、又作麼生か道はん。」拂子を以て禪床を擊つこと一下す。

除夜小參、僧問ふ、「一年三百六十日、交頭結尾別に生涯有り、如何か大用現前することを得ん。」師云く、「頂上に骨無く頷下に鬚有り。」進んで云く、「北禪今夜露地の白牛を烹て分歲す、檢點し將ち來れば正に是れ殘盃冷肉。和尚什麼を將つてか大

卽ち佛果なり。

㋲陀羅尼は、能持、能遮、總持等と譯す。こゝには總、或は智と通稱するものにして、智慧能く無邊の事理を究め、恆河沙の法門を總攝するが故に名づく。

㋝華嚴昇兜率天宮品に曰く、「爾の時世尊復た神力を以て此の菩提樹下及び須彌頂夜摩天宮を離れずして、兜率天一切妙寶所莊嚴殿に往詣す。」

㋜吉祥の座、觀佛三昧海經觀相品に見ゆ。略に云く、「卽ち天帥清淨柔輭なるを把つて名けて吉祥と曰ふ、菩薩受け已つて、地に鋪いて坐す。」

㋑佛出山の時、身形消瘦、尼連禪河の畔に於て一の牧牛の女人乳糜を供養するの故事あり。詳かに釋迦譜三に出づ。

衆に施設せん。」師云く、「大家這裏に在り。」進んで云く、「三陽交泰萬彙亨る、定めて是れ來年蠶麥熟せん。」便ち禮拜す。師云く、「妨げず道著することを。」

乃ち云く、「年窮り歲盡く、結角羅紋、木馬飛んで天に上り、泥牛走つて海に入る。誰か陰陽の變化、氣候の遷謝を管せん。大底鼻孔下に向つて垂る、多年曆日相干らず。所以に道ふ、日日是れ好日、時時是れ好時と。交頭結尾別に生涯有り。」拂子を擊つて云く、「天淨うして知らず雲の去る處、地寒うして留め得たり雪の多き時。」

正旦上堂、僧問ふ、「元正啓祚、萬物咸く新なり、衲僧門下何の祥瑞か有る。」師云く、「方袍圓頂。」進んで云く、「與麼なるときは則ち年年是れ好年、日日是れ好日、什麼と爲てか還つて新有り舊有ることを得る。」師云く、「一回拈出すれば一回新なり。」進んで云く、「謂つ可し堯風舜日和氣藹然、樵唱漁歌共に豐年を樂むと。」便ち禮拜す。師云く、「方に知る儞は是れ其の言を識ることを。」

乃ち云く、「日暖に風和して百花競ひ發く、人傑に地靈にして色觀る可きに足れり。且く道へ、其の中慶賀の事作麼生。」卓拄杖、「伏して惟れば箇箇道體、起居萬福。」

元宵上堂、「我見燈明佛、本光瑞如此。眼中の瞳子面前の人、寶山未だ嘗て會と不會とを說かず。个个燈影裏に向つて身を轉ずること莫れ。」拂子を擊つて下座。

佛涅槃上堂、「㊀無邊身の供を許さず、工巧の㊁和羅飯を喫す。胡亂に賣

㊀佛、無邊身菩薩の供養を受くるの因縁、大涅槃經壽命品に

節して其の時を知るに非ず。鳴伊鳴伊、年年二月是れ仲春。」

三月旦上堂、「甘草は先に生じ苦草は後に生ず。好し蠶麥熟す天平に地平なり。忽ち此の漢有つて出で來つて、和尙與麼の說話、是れ佛法と爲んか是れ世法とせんかと道はゞ、山僧他に向つて揶揄して道はん、㊂三月三卯無きも田家必ず飽くと。」

上堂、「春山は青く春水は綠なり、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ず。且く道へ、畢竟是れ什麼ぞ。」拂子を擊つて云く、「常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」

# 大德寺語錄　終

---

川づ。

㊁和羅飯は方語に曰く、家常飯なり。

㊂五雜俎田家四時占候諺語に云く、「三月三卯無ければ川家米飽かず、三月初三雨ふれば桑葉人の取る無し、三月初三晴るれば桑上銀瓶を掛く。」

# 筑州太宰府萬年㋑崇福禪寺語錄

侍者　宗貞　編す

㋺山門、「門頭の實地、个个踏著す。甚に因つてか諸人、我れに隨つて入得す。」喝一喝す。

佛殿、「前佛後佛、隱顯一に非ず。咄。新長老が證明に因らずんば、知んぬ他一對の無孔鐵。」

土地堂、「護法先づ須らく主人公を識得すべし。阿誰か是れ主人公。」齒を扣くこと三下して云く、「東西南北、一等の家風。」

祖師堂、「者の一隊の老漢、惜しい乎者裏に坐在することを。」㋩坐具を提起して云く、「若し此の令を行せずんば誰か敢て扶起することを得ん。」

㊁方丈、㋭拄杖を横へて云く、「關中の主、能く㋬本分の草料を與ふることを解す。烏觜薄舌、㋣胡亂に欵を供し去ること莫れ。」拄杖を靠く。

拈帖、「溫潤の文、格調の氣、直饒ひ衲被蒙頭なるも、奚ぞ讓を以て之れ

---

㋑崇福開山は大應國師、元、太宰府に在りしを、黑田長政入國の後、現今の東公園千代の松原に移せしなり。大燈國師行狀に、「元弘元年辛未太宰府小貳藤居士、名は賴尙、其の父妙慧居士と橫岳山崇福寺に住せんことを請ふ、師住すること一期にして本寺に歸る。」

㋺山門は三門なり、佛地論に云く、「大宮殿あり、三解脫門を所入の處と爲す、大宮殿は法空涅槃に喩ふ。」三解脫門とは、謂く、空門、無相門、無作門なり。今寺院は是れ持戒修道して涅槃に至るを求むる

が義と爲さん。」

山門の蹤、「言を語に成し、語を言に成す、如何如何。官には針をも容れず。」

法座、「諸人喚んで高廣の座子と作す、山僧喚んで者箇の座子と作す、何が故ぞ。」一歩して云く、「只だ與麼の地に到るが爲なり。」

師、陞座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して恭しく爲に今上皇帝聖躬萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、龍圖永く固く、玉葉彌芳しからんことを。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、征夷大將軍の爲に祿算を增崇し奉る。伏して願はくは、高く域中の德を賛け、長く塞外の令を提げんことを。」

又香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、大檀主筑州の(チ)大空門消ひ(リ)都督司馬の爲に、祿算を增崇し奉る。伏して願はくは、威風を千歲に扇ぎ、佛日を萬世に輝さんことを。」

香を拈じて云く、「此の香、爐中に爇向して、前住(ヌ)巨福名山建長禪寺、

---

人、之れに居す、故に三門に由つて入るなり。

(ハ)梵語に尼師壇、坐具と譯し、又は隨坐衣と義譯す、僧侶六物中の一にして座下に敷くものなり。

(ニ)祖庭事苑に、「今禪林の正寢を以て方丈と爲す、蓋し則を毘耶離城維摩の室に取り、一丈の室を以て能く三萬二千の師子の座を容る、不思議の妙事有るが故なり。」

(ホ)拄杖は僧の携ふる杖なり。

(ヘ)本分は己の守るべき分限の意にて、草料の料は牛馬の食ふ所の芻豆、即ち「まぐさ」のこと、師家の學者を接する手段を云ふ。

(ト)胡亂は曖昧の意。事物起源に「胡亂とは總書に曰く、五胡、華を亂るの日、漢人の兵を避くる者、事倉卒にして完備する能はず、則ち相率ゐ胡亂且

先師敕諡圓通大應國師南浦和尚大禪師に供養し、用つて法乳の恩に酧ゆ。」師衣を斂めて座に就いて云く、「明鏡臺に當り、明珠掌を歷、妍醜を分たんと要する者は、直下に來つて相見せよ。有りや有りや。」時に僧有り問ふ、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」師云く、「時節逢ひ難し。」僧云く、「和尚、帝里を辭すれば、皇帝之を留むと、更に甚れの處に向つてか一路を通じ來る。」師云く、「鐵船水上に浮ぶ。」僧云く、「寰中は天子の敕と。寧。」師云く、「誰か恩を承けざらん。」僧云く、「與麼ならば則ち杲日天に麗しく、清風地を匝る。」師云く、「大方外無し。」僧云く、「記得す、(ル)保壽開堂、三聖一僧を推し出す、意旨如何。」師云く、「白雲深き處金龍躍る。」僧云く、「壽便ち打つ、又作麼生。」師云く、「碧波心裏玉兎驚く。」僧云く、「若し忽ち人有つて一僧を推し出さば、如何が祗對せん。」師云く、「風光愛しつ可し。」僧云く「者箇は且く置く、今日還つて禁足安居底の道理有りや。」師云く、「大家者裏に在り。」僧云く、「十五日結制は則ち問はず、卽今一時に結し去れ看ん。」師云く、「處處の綠楊馬を繫ぐに堪へたり。」僧云く、「恩大にして酧い難し。」師云く、「能く幾人か有る。」僧禮拜す。

---

く罷むと云ひて、一時の急に備ふ、今人、事苟且なる者を胡亂と稱するは此に始まる。」

(チ)大空門は蓋し妙慧居士を云ふか。智度論に曰く、「涅槃に三門有り、一に空門、二に無相門、三に無作門。」空門と謂ふは諸法を觀じて我我所無く、諸法因緣より生じて作者受者無し、是れを空と名づく、今出家の人、此の門より涅槃の宅に入る、故に空門子と號す。

(リ)職原抄に、「筑州太宰帥、唐名都督少卿。」蓋し都督は賴尙を云ふか。

(ヌ)關東五山第一相州鎌倉巨福山建長興國禪寺は、後深草院建長元年平時賴之れを建創す、開山勅諡大覺禪師、諱は道隆、蘭溪と號す、法を宋國無明慧性禪師に嗣ぐ。

(ル)鎭州保壽沼禪師、鎭州三聖院

師乃ち云く、「世尊拈花、迦葉微笑、君子財を愛す、之を取るに道有り。正法眼藏此れより流通す、遞代傳持して虚を受け響を接す。㋾激揚鏗鏘古今を坐斷す。珠囘り玉轉じて八面玲瓏、其の大機圓應、大道無方なるに迄つては、一賓一主、擒縱擡搦、收放明暗、電轉じ星飛ぶ。㋻窮するときは則ち變じ、變ずるときは則ち通ず。㋕藍よりも青く、水よりも寒じ。聽敎あれ威音那畔に挺拔し、空劫已前に蕭然たり。況んや亦淸風明月雅興多く、白雲流水詩緣寬し。四海九州雷動き風行く、漁歌樵唱共に太平を賀す。正當與麼の時、人人禁足護生、人人剋期取證、皇恩佛恩一時に報じ了る底の事、又作麼生。」拂子を擧つて云く、「版圖遠く奏して堯天濶し、萬物祥を呈して聖情を樂ましむ。」

復た擧す、㋵三聖道く、「我れ人に逢へば卽ち出づ、出づるときは則ち人の爲にせず。」興化道く、「我れ人に逢ふときは則ち出です、出づるときは卽便ち人の爲にす。」師云く、「二大老、謂つ可し㋟漆の隱す處は黑く、朱の隱す處は赤しと。若し是れ山僧底ならば、天平に地平なり。」卓拄杖下座。

當晚小參、僧問ふ、「三月安居、九旬禁足は則ち問はず、遠く華洛を離れて親しく岳峰に到る一句如何。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」僧云く、「和尚此の山に住す、何を以てか衆を安せん。」師云く、

---

慧然禪師と同じく臨濟玄に嗣ぐ。

㋾臨濟錄に云く「夫れ至理の道の如きんば、諍論に非ずして求め、激揚鏗鏘以て外道を摧く。」宇彙に鏗鏘は金玉の聲。

㋻以下二句、易經繫辭傳の語。

㋕荀子一勸學篇に「青は藍より出でて藍より青く、氷は水より生じて水よりも寒し。」

㋵會元十一三聖の章に見ゆ。

㋟家語に云く「丹の藏する所の者は赤く、漆の藏する所の者は黑し、是を以て君子は必ず其與り處る所の者を愼む。」

「山色夕陽の時、泉聲中夜の後。」僧云く、「與麼ならば則ち大衆德に飽き去らん。」師云く、「限り無き淸風來つて未だ休せず。」僧云く、「德山小參答話せず、『問話の者有らば三十棒』と、意旨如何。」師云く、「去り得て來ること得ず。」僧云く、「趙州小參答話を要す、『問話の者有らば一問を置き將ち來れ』と、又作麼生。」師云く、「來り得て去ること得ず。」僧云く、「今夜小參答話を要するか、答話を要せざるか。」師云く、「天外に出頭して看よ、誰か是れ我れ般の人。」僧云く、「三大老の用處、止だ一般なること莫しや。」師云く、「爾をして休せしむれども也た肯て休せず。」僧云く、「若し此の如くならば、則ち一即ち三、三即ち一。」師云く、「吽吽。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「手を那邊に撒し去れ。」

乃ち云く、「今夜大衆と箇の識面の話有らんことを要す、各各切に宜しく起倒分明なるべし。(レ)陵王溪畔此君亭邊、諸人有ることを知れども未だ主と做ることを得ず。崇福區宇件件の數目、山僧主と做つて未だ大毫を辨せず、既に其の居を一にす、甚と爲てか受用同じからざる。還つて會すや。所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし、明朝賴に是れ結制安居の辰、箇箇慧身を成熟し、坐底立底(ノ)築著礚著、自然に者箇に孤負することを得ず。」便ち拄杖を卓すること一下す。

(レ)陵王溪、此君亭、皆崇福の境なり、陵王の故事詳にせず、此君は東坡の詩に「此君那ぞ知らざらん。」註に「王子猷竹を愛す、嘗て曰く、何ぞ一日も此の君無かる可けんと。」按ずるに此の亭竹林に近し、故に名づくるか。

(ノ)築著礚著は、到る處つきあたること、「がつつりこつつり」と譯すべし。

復た擧す、雲門因に官有りて問ふ「佛法は水中の月の如しと、是なりや也た無や。」門云く、「清波透路無し。」師拈じて云く、「答を以て問を見れば、問最も可なり、問を以て答を見れば、答未だ奇ならず。且く道へ、誵訛甚れの處にか在る、具眼の禪流、請ふ緇素を辨じて看よ。」

或る日上堂、「我が个の一乘尋常と同じからず、金剛圈を跳出し、栗棘蓬を吞透す。激電の神機雲の如くに飛び、飈の如くに到る。既にして此の如し、今朝甚に因つてか行かんと要して行かず、住せんと要して住せず、還つて會すや。」拂子を擊つて云く、「塌薩阿竭二千年。」

五月旦上堂、僧問ふ、「聲前に薦得するも未だ是れ作家にあらず、喝下に承當するも猶ほ是れ鈍漢と、什麼と爲てか此の如くなる。」師云く、「石壓して笋斜に出で、岸懸つて花倒に生ず。」進んで云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」師云く、「鳳林吒之。」進んで云く、「記得す、僧、投子に問ふ、如何なるか是れ十身調御。投子禪床を下つて立つ、意旨如何。」師云く、「頂上に骨無し。」進んで云く、「又問ふ、凡聖相去ること多少ぞ。投子亦禪床を下つて立つ、意那裏にか在る。」師云く、「頷下に鬚有り。」進んで云く、「若し人有つて、如何なるか是れ十身調御と問はゞ、如何が祇對せん。」師云く、「眼中の童子、面前の人。」進んで云く、「上來一一指示分明、爲人底の一句、又作麼生。」師云く、「三十年後自ら悔い去るも亦定らず。」

乃ち云く、「崇福に三訣有り、若し第一訣に參得せば、儞に許す拄杖頭上に日月を挑ぐることを。

若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打することを。若し第三訣に參得せば、我れ且く爾に問はん、山前麥熟すや也た未だしや。」

端午檀家の補寺齋を謝する上堂、僧問ふ、「今朝五月端午、符を書し土を咒することを用ひず、請ふ師現量法門の一句、直下に至論せよ。」師云く、「一峰雲片片、雙磵水潺潺。」進んで云く、「家に白澤の圖無くんば、又作麼生。」師云く、「將に謂へり、問話を要する漢と。」進んで云く、「善財、文殊に撞著する底の時節は且く置く、(の)天澤の三轉語還つて學人が咨參を許さんや也た無や。」師云く、「(ね)之を鑽ゑも是、之を仰ぐも是。」進んで云く、「己眼未だ明めざる底、甚に因つてか虚空を將つて布袴と作して著く。」師云く、「脛に毛無く股に肉無し。」進んで云く、「地を劃して牢と爲す底、甚に因つてか者箇を透り過ぎざる。」師云く、「脚下荊棘深きこと數丈。」進んで云く、「海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ。」師云く、「爾が鼻孔を築著することを覺ゆるや。」進んで云く、「恁麼ならば則ち金殿も禪を譚じて大いに皇情を悅ばしめ、嶽峰道を聲して衲子を奔走せしむるも、也た未だ分外と爲さざることを在り。」師喝して云く、「阿爾が境界に非ず。」進んで云く、「錦上に花を鋪く、又一重。」師云く、「嗄。」乃ち云く、「(十)端午天中の節、諸方盡く土を咒し、壁に書して以て妖怪を消す。藥を採る模樣を認

(の)虛堂錄十行狀に云く、「師雨朝恩遇の寵に感じ、賜ふ所の帑帛を將つて、小庵を望雲亭の東に創し、扁して天澤と曰ふ云々。」

(ね)論語子罕篇に曰く、「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し」とあり。

(十)事文前集に云く、「九、五の月五日午時天中節と爲す。」

めて、落草以て伎倆を作す。爭か如かん、我が者裏、靈山の付囑を忘れざるの人有つて、忽ち妙術の手を展べて、貧を拔いて富と做す。一衆个个石人の機、鐵漢の用、風吹けども入らず、水灑げども著かず、諸人此の人を見んと要すや。」拄杖を卓して云く、「切に忌む、當面に諱却することを。」

㋶和泉和尚至る上堂、僧問ふ、「長松嶺頭風颼颼、飛瀑岸前水潺潺。現成公案、大難大難、如何が履踐せん。」師云く、「好し大難の處に向つて履踐するに。」進んで云く、「恁麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「㋰驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作す。」進んで云く、「和尚に三訣有り、一一咨參を許さんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」進んで云く、「若し第一訣に參得せば、儞に許す、拄杖頭上に日月を挑ぐることを」と、意旨作麼生。」師云く、「虛空迸裂す。」進んで云く、「若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打することを」と、又如何。」師云く、「山嶽起つて舞ふ。」進んで云く、「若し第三訣に參得せば、我れ且く儞に問はん、山前麥熟すや也た未だしやと、意那裏にか在る。」師云く、「㋒眼睛烏律律。」進んで云く、「者箇の三訣、畢竟什麼邊の事をか明め

㋶和泉和尚の傳未だ詳にせず。

㋰驢鞍橋は驢馬の背骨のこと。會元十一に「谷隱蘊聰禪師曰く、驢鞍橋を認めて、阿爺の下頷と爲すこと莫れ、他の妄想を認めて、自己の佛性と爲すこと莫れ」の意なり。

㋒眼睛は日の玉、烏律律、又烏莑葎に作る、漆黑の意。

㋼鐵崑崙は、又、渾崙に作る、正字通に「圓にして未だ剖散せざるものを渾崙と云ふ。」

㋨聯燈錄に云く「師、同參の來るを見て、法堂に上る、師便ち喝す、僧亦喝す、行くこと三五步、師又喝す、僧亦喝す、師近前棒を拈す、僧又喝す、師云く、儞看よ瞎漢猶ほ主と作る在り、僧擬議す、師便ち打つて直に法堂を下る、時に僧有り、問ふ、者の僧甚の和尚に觸忤すること有りや、師

得る。」師云く、「金香爐下の㋼鐵崑崙。」

乃ち㋨興化、同參の來るを見て喝する底の㋔公案を擧して、師云く、「古人只だ價の高き處に就くことを要して、其の管賞の義を篤うすることを缺く。崇福今日和泉和尚の光訪を得て、事事自然に㋗函蓋相應す。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「火を覓めては煙に和して得、泉を擔つては月を帶びて歸る。」

退院上堂、「衲子從來定迹無し、天涯海角情に任せて遊ぶ。一毫頭上に華洛を辭し、三鼓聲中九州を出づ。」

# 崇福寺語錄 終

云く、是れ伊れ適來也た權有り、也た實有り、也た照有り、也た用有り云々。」

㋔公案は公界定むる所の法式案文なり、例へば今の民法、刑法等の如きもの即ち是れなり。禪林寶訓音義に云く「乃ち公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所は而も正道治まれり、公とは乃ち聖賢一期の轍と、天下通途の理なり、案とは聖賢の正文なり、凡そ天下を有つ者は、未だ嘗て公府無くんばあらず、未だ嘗て案牘無くんばあらず、蓋し取つて法と爲して、天下の不正を治するなり、夫れ佛祖の機緣を目づけて公案と曰ふものは、亦之れに由るのみ云々。」

㋗函は「はこ」なり、蓋は「ふた」なり。函と蓋と相契合して少しの間隙無き樣子なり。

# 洛陽龍寶山大德禪寺語錄　①横岳を退き本寺に歸る

侍者　憲眼　編す

七月旦上堂、「秋雲清淡、秋水清冷、東西と南北と、觸處嫩涼生ず。且く道へ、其の中の事作麼生。」拄杖を卓して云く、「四海隆平にして煙浪靜に、斗南長く見る㋺老人星。」

解夏小參、「隨處に主と作る、聖制を横嶽山頭に結び、立處皆眞なり、賞勞を龍寶峰頂に解く。此の事相謾せず、時人に孤負せず。破衲雲を逐ふて飛び、草鞋路に隨つて轉ず。左足先づ應ずる處、脚頭是れ通宵。何ぞ必ずしも㋩臺山驀直の途轍に落ち、流儕背はざるの道伴を慕はんや。然も是の如くなりと雖も、山僧親切の一句子有り、各各分明に善爲せよ。處處忘却することを得ず」といつて、便ち拄杖を卓すること一下す。

復た文殊、三處に夏を度る公案を擧して、師云く、「文殊、當年列聖の眉毛裏に於て渾身を藏し得ると雖も、二千年後、未だ免れず人の點檢に遭ふ

---

①横岳は崇福寺の山號なり、行狀に「纔に百日の主と作りて退を告げ、大德に迂歸す」とあり。

㋺老人星は史記天官書に云く、「南極老人、」注正義に曰く、「老人一星、弧南に在り、一に老極と曰ふ、人主の壽命延長の應と爲り、常に秋分の曙を以て景に見はる、春分の夕丁に見はる、國の長命を見る、故に之れを壽昌と謂ふ、天下安寧人主の壽を見ざるなり。」又「老人見はるれば治安、兵の起るを見ず。」

㋩會元四趙州章に云く、「臺山路

ことを。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は礀底に流れて太忙生。」

次の日上堂、「風梧葉に到り露槿花に凝る、無寸草の地其の多きを較べず。莫敎あれ語默人の對するに逢ふことを。首を回せば忽然として是れ月華。」

八月旦上堂、「八月初一日、天下太平の節、人人無爲を樂み、箇箇災難絕す。且く道へ、箇の什麼に因つてか是の如くなる。」拄杖を卓すること一下して云く、「㋥分一節。」

中秋上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋭靈山に者个を指し、曹溪に者个を話る。我が者裏指さず話らず、還つて親疎有りや也た無や。」又卓一下して云く、「人の此の意を知る無し、我れをして南泉を憶はしむ。」

臘八上堂、「澄月映徹して衆星粲朗たり、箇の中悟處無し、世尊何をか悟道す。」拄杖を卓すること一下して云く、「二千年前二千年後。」

除夜㋬小參、「日一上月一上、晝一上夜一上、窮めて一十二箇月に到り、數へて三百六十日に到る、之を新舊交頭除夜結尾と謂ふ。諸人若し身をして舊年に在らしめば、新定の機を發せず。也た心をして新年に在らしめば、

---

上に一婆子有り、凡そ僧有りて問ふ、臺山の路甚麼の處に向つてか去る、婆云く、驀直に去れ、僧纔に行くこと三五步すれば、婆云く、好箇の師僧、又與麼に去ると、後に僧有り、趙州に擧似す、州云く、待て我れ去りて儞が爲に這の婆子を勘過せん、明日便ち去りて亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸りて衆に謂つて云く、臺山の婆子、我れに勘過し了らる。」

㋥碧巖十五則雪竇の頌に云く、「倒一說、分一節云々。」竹を二つに切りて、合するを分一節と云ふ。

㋭傳燈十八、玄沙備禪師、衆に示して曰く、「且つ吾が正法眼藏、大迦葉に付囑すと道ふが如きんば、我が道猶ほ月を話るが如し。」曹溪拂子を竪つ、月を指すに還す。

本來の用を失却せん。所以に北禪、露地の白牛を烹、祖翁、半宵の燈を挑ぐ。然も是の如くなりと雖も、山僧終に與麼の窠窟に入らず。何が故ぞ。臘雪天に連つて白く、春風戸に逼つて寒し。」

復た擧す、僧、香林に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、臘月盡く。」師拈じて云く、「此れ箇の時節、最も是れ愛しつ可し、來日定めて大年、一衆須らく保愛すべし。」

正旦上堂、「鳳曆開元の日、王春肇始の時、雪は北嶺に寒く、梅は南枝に香し。好箇の好時節、龍天須らく匡持すべし。且く道へ、何を以てか驗と爲ん。」拄杖を卓すること一下して便ち下座。

元宵上堂、僧問ふ、「今朝上元の節、⓮處處燈毬を掛く、意旨如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「只だ此の正言を將つて、以て天下の春を祝す。」師云く、「言を知るの漢。」進んで云く、「記得す、僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室內一盞の燈』と、此の意如何。」師云く、「言鋒、冰よりも冷じ。」進んで云く、「林云く、『三人龜を證して鼈と作す』と、又作麼生。」師云く、「利舌、鐵よりも硬し。」乃ち云く、「燈燈相續、燈燈窮り無し。處處夜光の珠を列ね、頭頭夜明符を莊る。只だ此の光輝底、都べて這裏より普し。」拂子を擊つこと一下す。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「今宵夜半、世尊涅槃に入る、兒孫何を以てか法乳に酧いん。」師云く、「杜鵑啼

⓭事苑八に、禪門請旦陞堂、之れを早參と謂ひ、日晡念誦、之れを晩參と謂ひ、非時說法之れを小參と謂ふ。

⓮會元十二、石霜の章に見ゆ。

き斷えて月晝の如し。」進んで云く、「與麼ならば則ち恩を知つて、恩を報ずることを解す。」師云く、「也た何ぞ妨げん。」進んで云く、「世尊昔靈山會上に在つて一枝の花を拈起す、此の意如何。」師云く、「萬里一條の鐵」進んで云く、「迦葉獨り微笑す、意、那裡にか在る。」師云く、「金、金に博へず。」

乃ち云く、「我れ若し滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、我れ若し滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ず。當年若し人有つて、生靈終に辣きことを改めずと道はゞ、但だ釋迦老子を救ひ得るのみに非ず、也た須らく一會の列聖を扶け得べし。何が故ぞ。」良久して云く、「紅霞碧靄高低を籠む、芳草野花一樣の春。」

三月旦上堂、「(チ)山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。堅固法身太だ端無し、大龍何れの處にか心肝を露す。諸人見得すること無きにあらず、甚に因つてか擧し得ることを解せざる。」拂子を擊つて云く、「又流鶯を逐ふて短墻を過ぐ。」

上堂、「(リ)一卽ち一切、一切卽ち一。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「三祖大師、端無く柳巷を穿つて花街に入る。忽然として幽鳥語喃喃、雲を辭して亂峯に入るに逢著す。合掌低頭して道く、掲諦掲諦と、是れ什麼の道理ぞ、諸人各辨別せよ。」又拄杖を卓して下座。

佛生日上堂、僧問ふ、「釋迦老子、今日初めて閻浮に下る、四衆筵に臨む、願はくは法要を聞かん。「

(チ)會元八、鼎州大龍山智洪弘濟禪師、得法白兆圓禪師問ふ、「色身敗壞如何なるか是れ堅固法身、」師曰く、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。」

(リ)三祖鑑智禪師の信心銘の語なり。

師云く、「斧頭元是れ鐵。」進んで云く、「薔薇露を滴して楊柳烟を籠む、是れ畢竟の眞面目なること莫しや。」師云く、「驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作すこと莫れ。」進んで云く、「世尊初生下の時、周行七歩、一手は天を指し一手は地を指す、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「天上天下唯我獨尊と稱す、是れ傍若無人なるにあらずや。」師云く、「他後、雲門一棒の有る在り。」進んで云く、「雲門の棒頭、還つて相當るや也た未だしや。」師云く、「焦塼打著す連底の凍。」

乃ち云く、「地を指し天を指して獨尊と稱す、顚言倒語卒に論じ難し。金容萬德誰有つてか看ん、徧界堂堂として常に獨り存す。然も是の如くなりと雖も、一杓の惡水更に放過し難し。」拂子を以て禪床を擊つこと一下す。

結夏小參、僧問ふ、「結制已前月白く風淸し、豈に是れ慧身を成就する底の時節にあらずや。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「結制已後風淸く月白し、甚麼の處に向つてか剋期取證せん。」師云く、「三生六十劫。」進んで云く、「今夜小參緊要の一句、結制の前後に落ちず、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「和尙漫天の網子を布いて衲子を籠絡す。忽ち如し金剛圈を透得する底の漢有らば、亦作麼生か他を羅籠し得ん。」師云く、「森森たる夏木杜鵑啼く。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、隨處に主と作れば、立處皆眞なり」といつて便ち禮拜す。師云く、「且く地に坐して商量せよ。」

乃ち云く、「鵝護の雪嶺人の冰、古今結制の榜樣、衲子禁足の風規、三月九旬の內、七尺單前に於て身心を澄濾し本智を成熟す。情と無情と一齊に安居、前無く後無く、同時に寂定、之を大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心、平等性智を安居すと謂ふ。若し其れ境を逐ふて走作し、物に隨つて紛拏せば、此の處り有ること無けん。正與麼の時、本色行脚の師僧此の㊇保社に入るか、此の保社に入らざるか。」拂子を擊つて云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。」

復た擧す、「僧、雲門に問ふ『如何なるか是れ諸佛出身の處。』門云く、『東山水上行。』韶陽只だ箇箇鐵壁を以て、戶牖と爲し去らんことを要す。山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ諸佛出身の處と問はゞ、便ち佗に對して道はん、鷲峰の山色青更に青と。且く道へ、那箇か親、那箇か踈、分明に辨別して看よ。」

㊇山谷、元明に寄する詩に云く、「本、江鷗と保社を成す。」保社は保伍同社の義なり。

次の日上堂、僧問ふ「樹頭紅稀に林下綠暗し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「恁麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微凉。」師云く、「之を見て取らざれば、之を思ふこと千里。」進んで云く、「今朝盡く是れ護生安居、當に何事をか圖るべき。」師云く、「黑衣を著け黑柱を護る。」進んで云く、「朝には西天に行き、暮には東土に歸るが如きんば、還つて禁足の分有りや。」師云く、「我が者裏、喚んで走作の漢と作す。」進んで云く、「學人今夏和尚に依附す、何の方便か有る。」師云く、「只だ此の一問何れよりか來る。」進んで云く、「若し樓に登つて望まずんば、焉んぞ滄海の深きこ

とを知らん」といつて便ち禮拜す。師云く、「何ぞ必ずしもせん。」

乃ち云く、「今日是れ結制、一衆各禁足、眼睛重きこと千斤、堂裏兩脚を伸ぶ。是れ个の什麼の道理ぞ。三條椽下に摸索せよ。」

上堂、僧問ふ、「學人心猿未だ穩かならずして意馬奔馳す、願はくは方便を示せ。」師云く、「鐵鎚孔無し。」進んで云く、「與麼ならば則ち要津を把斷し去れり。」師云く、「又與麼にし去るや。」進んで云く、「記得す、巖頭、德山に問ふ、『是れ凡か是れ聖か』と、意、那裏にか在る。」師云く、「石は空裡より立つ。」進んで云く、「山便ち喝すと、如何が理會せん。」師云く、「火は水中に向つて焚く。」進んで云く、「若し人有つて、和尚に是れ凡か是れ聖かと問はゞ、聻。」師云く、「九九八十一。」

乃ち擧す、「僧、洞山に問ふ、『寒暑到來、如何が回避せん。』山云く、『何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。』僧云く、『如何なるか是れ無寒暑の處。』山云く、『寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。』山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ無寒暑の處と問はゞ、只だ他に對して道はん、靜處薩訶と。且く道へ、那箇か親、那箇か疎、諸人各辨別せよ。」

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、家家艾虎を掛け、處處香湯を浴す。和尚節に應ずる一句、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「黃鶴樓前鸚鵡洲。」進んで云く、「恁麼ならば則ち山は自ら青く、水は自ら綠なり。」師云く、「㋸隨後婁搜の

㋸隨後婁搜は、人の後へに隨つてかきさがす義なり。婁は搜

漢。」進んで云く、「記得す、文殊、善財をして藥を採らしむ。財云く、『手に信せて採り來るに、是れ藥ならざるは無し』と、此の意如何。」師云く、「瞎漢、亂統して什麼をか作ん。」進んで云く、「善財一莖草を拈じて文殊に度與す、文殊云く、『此の藥亦能く人を殺し亦能く人を活す』と、又作麼生。」師云く、「上は是れ天、下は是れ地。」

乃ち云く、「今朝端午の節、妖も無く亦怪も無し。善財の藥を假らず、人人自ら慶快。」拂子を擊つて下座。

半夏上堂、僧問ふ、「一夏已に半を過ぐ、崑崙生鐵を嚼む。半夏已後又如何が履踐し去らん。」師云く、「晨朝は粥、齋時は飯。」進んで云く、「已前已後は且く置く、正當今日直に指示を聞かん。」師云く、「頭、天を頂き脚、地を履む。」進んで云く、「記得す、僧、❼智門に問ふ、『蓮華未だ水を出でざる時如何。』門云く、『蓮華』と、意旨作麼生。」師云く、「水洒げども著かず。」進んで云く、「僧云く、『水を出でて後如何。』門云く、『荷葉』と。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「水を出づると水を出でざると、相去ること多少ぞ。」師云く、「何ぞ老僧に向つて問ひ將ち來らざる。」進んで云く、「花を移しては蝶の至るを兼ね、石を買うては雲を得ること饒し」といつて便ち禮拜す。師云く、「吽。」

と同じく取るなり。

❼續燈二に云く、「隨州智門光祚禪師は久しく香林に參じ、大いに心印を悟る云々。」

乃ち拄杖を拈じて云く、「六月熱せざれば五穀熟せず、今日諸人の爲に之を熱し之を熟せしむ。」卓拄杖一下して云く、「已に熱し已に熟して後如何。」拄杖を擲下して云く、「天平に地平なり。」

上堂。僧問ふ、「火雲空を燒き普天炎熱、什麼の處に向つてか正に回避することを得ん。」師云く、「迦葉門前風凜凜。」進んで云く、「學人今日㋺鶻臭布衫を脫却し去れり。」師云く、「淨倮倮地の一句、作麼生か道はん。」進んで云く、「記得す、馬大師、一日陞堂、百丈出でて席を捲く、意那裡にか在る。」師云く、「㋩方木圓孔に投ず。」進んで云く、「大師便ち下座、方丈に歸る、又如何。」師云く、「清風步に隨つて生ず。」進んで云く、「和尚今日上堂、人の席を捲く無し、豈に是れ無事にし去るにあらずや。」師云く、「子を養つて父に及ばざれば、家門一世に貧し。」進んで云く、「席を捲くと席を捲かざると、那箇か是れ親、那箇か是れ疎。」師云く、「苦なる哉佛陀耶。」

乃ち云く、「㋥大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。既に是れ坐道場、甚に因つてか佛法現前せざる。」拂子を擊つて云く、「千里萬里一條の鐵。」

上堂、「一葉落ちて天下秋なり、是の處風流ならずといふこと無し。若し箇の時節を記得せば、終に語默を將つて酧いず。且く道へ、是れ阿誰が分上の事ぞ。」大衆を喚んで云く、「還つて頂門に獨立することを覺ゆるや。」

㋺鶻臭布衫は汚れて惡臭ある麻の衣と云ふこと。
㋩方木は四角なる木、圓孔はまるいあなのこと。
㋥以下不得成佛道に至る、法華化城喩品の文。

解夏小參、僧問ふ、「學人一夏已來、㋺波波挈挈として過ぎ了る。㋛剋期取證の事、請ふ師爲に證明せよ。」師云く、「嫩涼秋意簾櫳に入る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し光陰虚しく度らずと。」師云く、「直饒ひ彌實に度るも也た何ぞ是ならん。」進んで云く、「記得す、雲門因に僧問ふ、『初秋夏末、前程忽ち人有つて問はゞ、如何が祇對せん。』門云く、『大衆退後』と、意旨作麼生。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「僧云く、『過什麼の處にか在る。』門云く、『我れに九十日の飯錢を還し來れ』と、又作麼生。」師云く、「平出。」進んで云く、「前程問過の事は卽ち且く置く、卽今和尙如何が勘過せん。」師云く、「一拶を消せず。」進んで云く、「楖栗横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る」といつて便ち禮拜す。師云く、「脚下泥深し。」

乃ち云く、「秋初夏末、季熱未だ散せず、自恣賞勞、箇箇缺くこと無し。時に隨ひ節に應じて漏逗せずといふと無く、理に就き事に就いて現前せずといふと無し。明かに知んぬ會するときんば則ち途中受用、龍の水を得るが如く、會せざるときんば則ち世諦流布、羝羊の藩に觸るるに似たり。畢竟與麼にし去るも、歩歩清風起る、佛手も遮ること得ず。人心等閑に似たり、路頭踏著して曾て瞞らず。萬里の神光頂後の相、然も是の如くなりと雖も、只だ雲門の我れに九十日の飯錢を還し來れと道ふが如きんば、是れ阿誰が分上の事ぞ。」拂子を擊つて

㋺波波は奔走して安からざるの貌、挈挈は引きまはして忙がしきなり。
㋛剋は刻と同意、定むること、日數を限り、其の期間中に、大事の證明を取らんと欲するなり。

云く、「樵子の徑に因らずんば、爭か葛洪が家に到らん。」

復た翠巖夏末、徒に示す公案を擧して、師拈じて云く、「一畝の地、三蛇九鼠。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家四月十五、他を結することを得ず、七月十五、他を解することを得ず、畢竟什麼の處に向つてか安身立命せん。」師云く、「須彌南畔の閻浮樹。」進んで云く、「與麼ならば則ち西風一陣來、落葉兩三片。」師云く、「矮子、戲を看る。」進んで云く、「昔 老宿有り、一夏師僧の爲に說話せず、僧有り、嘆じて云く、『我れ只麼に空しく一夏を過す、敢て和尚の佛法を說くことを望まず、◉正因の二字を聞くことを得ば也た得てん』と、意旨如何。」師云く、「黃金を抛却して碌甎を拈ぐ。」進んで云く、「老宿聞いて云く、『闍梨、聲速すること莫れ、若し正因を論ぜば道一字も也た無し』と道ひ了つて、齒を扣いて云く、『我れ端無く恁麼に道ふ』と、又作麼生。」師云く、「三千八百。」進んで云く、「隣壁に又老宿有り、聞いて云く、『好一釜の羹、兩顆の鼠糞に汚却せらる』と、意那裏にか在る。」師云く、「同病相憐む。」進んで云く、「和尚一夏已來、什麼の法を說いてか人の爲にす。」師云く、「山青く水綠なり。」進んで云く、「◉長河を攪いて酥酪と爲し、大地を變じて黃金と作す。」便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

◉金剛明經玄義に、一に正因佛性とは正に中正を謂ふ云々。

◉宗鏡錄二に云く、「若し自心を了ぜば頓に佛慧を成ぜん、謂つ可し百川を會して一濕と爲し、衆塵を搏つて一丸と爲し、鐶釧を融して一金と爲し、酥酪を變じて一味と爲すことなと。」

乃ち擧す、趙州因に僧辭す、州云く、「有佛の處住することを得ざれ、無佛の處急に走過せよ。三千里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ。」僧云く、「與麼ならば則ち去らじ。」州云く、「㊟摘楊花摘楊花。」師云く、「趙州若し後語無くんば、須らく是れ人の點檢に遭ふべし。何が故ぞ。風は八月より涼しく、月は七月より明かなり。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「月月初一、雨無きを吉と爲し、今月初一、雨有るを吉と爲す。且く道へ、吉甚れの處にか在る。」拄杖を卓すること一下して云く、「吉吉、吾れは道はん最も吉と。」拄杖を靠けて下座。

上堂、「西風一陣來、落葉兩三片。錮鑪生鐵を著く、佛祖渾べて辨せず。辨せず辨せず、諸人且く那邊に過ぎよ。」

重陽上堂、僧問ふ、「今朝是れ九九の日、諸方盡く佳辰を賞す。衲僧門下常機に墮せず、節に應ずる一句、願はくは法要を聞かん。」師云く、「秋晩頭に寒し、个个萬福。」進んで云く、「只だ菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る底の如きんば、未審し和尚如何が證明せん。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「古德云く、『重陽九日菊花新なり』と、又是れ什麼の道理をか呈す。」師云く、「答話を謝す。」

乃ち云く、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。靖節只だ其の愛することを知つて、其

㊟摘楊花は、支那の俗、人の旅行を送りて別るゝ時、柳の枝を折り、行く人に渡すことあり。玆は「さらばさらば」と譯すべし、訣別の詞なり。

の用ひることを知らず、今日重九、作麼生か用ひ得ん。」拂子を擊つて云く、「二三三、三三二。」

上堂、擧す、官有り、雲門に問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや不や。」門云く、「清波透路無し。」官云く、「和尚何れよりか得たる。」門云く、「再問復た何れよりか來る。」官云く、「正與麼の時如何。」門云く、「重疊たり關山の路。」師云く、「雲門、官には針をも容れず、官人私に車馬を通ず。點檢し將ち來れば、兩り倶に失利。何ぞや。㊉賢聖の法に從つてより來、未だ嘗て殺生せず。」拄杖を卓して下座。

開爐上堂、「無賓主の話、十八の高人、一回擧し來れば一回是れ新なり。其の意旨を問ふに及んで、大半便ち道ふ、知らざる最も親しと。阿呵呵、只だ爐下煖かにして春に似んことを要す。」

上堂、「南山の松北嶺の雪、夜雨晝晴、太平節を得たり。達磨東土に來り二祖西天に行く。行脚の禪和子、目前を失却すること莫れ」といつて、喝一喝す。

上堂、「㊀一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ」と。忽ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

㊉增一阿含經に曰く、「殃崛、城に入り、乞食して還り來りて佛に白して云く、我れ向きに城に入り乞食す、婦の重妊を見て我れ是の念を作す、衆生苦を受く、何ぞ斯に至る。佛言く、汝往いて婦人に告げて言へ、我れ賢聖の法に從つてよりこのかた、未だ嘗て殺生せず、此の至誠の語を持す、此の母人をして他無きを得せしめんと。殃崛敎の如くす、母人聞き已つて胎み、解脫することを得たり。」

㊀一切諸佛云々、金剛經の文。

冬至小參、僧問ふ、「葭管灰を飛し、繡紋線を添ふ。陰陽造化に渉らず、願はくは法要を聞かん。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち岸柳未だ眼を開かず、庭梅先づ花を發く。」師云く、「好し與麼にし去れ。」進んで云く、「記得す、僧、百丈に問ふ、『如何なるか是れ奇特の事。』丈云く、『獨坐大雄峰』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「要津を把定して凡聖を通せず。」進んで云く、「僧禮拜すと、又作麼生。」師云く、「頂上を撥破せず。」進んで云く、「丈便ち打つと、如何が理會せん。」師云く、「令に依つて行ず。」進んで云く、「古人は則ち且く置く、即今和尙に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、如何が祇對せん。」師云く、「三十年後、面熱し汗出でん。」進んで云く、「虎穴に入らずんば、爭か虎子を得ん」といつて、便ち禮拜す。師云く、「我が爲に將ち得來れ看ん。」

乃ち云く、「六陰謝し盡して一氣方に生ず、鐵樹花を開き、石笋條を抽んづ。衲僧家若し者裏に向つて轉身し來らば、自然に枯枯燥燥、得失是非一時に放却せん、也た是れ㊤省錢飽き易き底の事。古柰淨㊥悄悄地なるも、之を爭ふに足らず、何ぞ須ひん歩を運んで㊦阿伽門を念ずることを。而今多くは是れ時を知つて節を知らず、猶ほ妨げず東西南北烏飛び兎走ることを。直饒ひ山僧が背後に向つて問訊するも、也た山僧敢

㊤虛堂錄九運庵忌拈香に云く、「松源の省錢を使はず、衲僧の鎖口訣を用ふるに慣る。」侯鯖錄に云く「五代周の太祖の時、王章財賦を掌る、舊、出入皆八十を以て陌と爲す、章始めて入る者は八十、出づる者は七十七を以て之れを省陌と謂はしむ。」

㊥詩經說約二邶風に「憂心悄悄羣小に慍らる。」註に「悄悄は憂への貌。」

㊦阿伽は梵語、清淨水、功德水等の譯あり。

て横に點頭だもす可からず。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「國淸うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」

復た擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「儞趙州を問ふ」と。拈じて云く、「機を以て機を奪ひ、毒を以て毒を攻むることは、趙州老漢之れ無きにあらず。其れ奈何せん八十行脚の事、猶ほ未だ全く用ひざること在り、若し全く用ひ去ることを得ば、兒孫滿堂今に至るまで繁興せん。」

次の日上堂、僧問ふ、「霜大野に飛び風林丘を戒しむ、普天普地寒威凜然、更に什麼の處に向つてか回避し去ることを得ん。」師云く、「陽氣發する時硬地無し。」進んで云く、「璇璣未だ動ぜざるに全機顯露、眹兆纔に分れて覿體現成。時節に涉らず言薦を借らず、親切の一句願はくは擧揚を開かん。」師云く、「家家觀世音。」進んで云く、「慈明牌を掲げ、皓老布裩を洗はず。點檢し將ち來れば、早く是れ劍去つて久し。寶山今日別に條章有ること莫しや。」師云く、「一冬二冬、叉手當胸。」

乃ち云く、「瑞雪地に滿ち、祥雲天に翻る。龍寶山頂和氣靄然、好箇の時節君が爲に報じて知らしむ。一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」

---

(ノ)輟畊錄七に云く、「骨咄犀は蛇角なり、其の性至毒にして而も能く毒を解く、蓋し毒を以て毒を攻むるなり、故に蠱毒犀と曰ふ。」

(オ)璇璣は天文を揆るの器械なり。

(ク)眹兆は物の生ぜんとする「きざし」なり。

(ヤ)覿は見と同じ。

(マ)楞嚴六疏に云く、「梵音阿那婆婁吉底輸、此に觀世音と曰ふ、能所境智に從ひ、以て名を立つる也、佛に値ひ法を親す、皆、其の師とする所、師資相承相違無し、耳聞思修慧諸行

進退兩班を謝する上堂、「竿頭に一歩を進めて大千沙界に全身を現ず、歩を退いて已に就く、萬が中一箇も失はず。蓋し是れ與麼の人にして與麼の㋗行履を作す者なり、大衆此の人を見んと要すや。雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は澗底に流れて太忙生。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老子六年冷坐、臘八の夜に逗到して始めて方に開悟し去る。未審し个の何事をか悟り得たる。」師云く、「鼻孔、上脣に掛く。」進んで云く、「未だ明星を見ざる時、已に雪山雪白く、明星を一見して後、又雪山雪白し。這裏端的の事、和尚如何が甄別せん。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「只だ一人有り、眞を發して源に歸するが如きんば、大地の衆生何れの處に向つてか去る。」師云く、「爾が眼睫上に向つて去る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、劫外一壺の春、更に好し優曇花綻びて普天香し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「道ふことは卽ち道ひ得たり。」

乃ち云く、「盡く謂ふ、世尊臘月八夜成道と、是なることは則ち是、敢て諸人に問ふ、如何なるか是れ成ずる底の道。若し是れ識得せば、恩を報ず

---

の通途なり、一佛の音聲を以て群品を化せざる有る無く、一機の耳根より敎を聞き解悟せざる有る無し、是に由つて彼の佛此れ從り入らしむ。」

㋘呂氏春秋十五に云く、「楚人江を涉る者有り、其の劍舟中より水に墜つ、遽に其の舟を刻んで曰く、是れ吾が劍の墜つる所と、舟止つて其の刻む所より水に入り、之れを求む、舟已に行く、而して劍行かず、劍を求むる此くの若き、惑はずや。」

㋗行は躬行、履は履踐なり。

㋙法華序品に云く、「初善、中善、後善、其の義深遠、其の語巧妙。」徐注に云く、「初め頓敎大乘七善を開くなり、初中後は卽ち頓敎、序正、流通なり、此れを時節善と名づく、其の義深遠則ち頓敎了義の理、此れを名づけて義善と爲す、其

るに分有らん、若し也た識不得ならば、」拂子を擊つて云く、「㋒初中後三大劫。」

除夜小參、僧問ふ、「舊歲今宵去る、甚れの處に向つてか去る。」師云く、「頭上一堆の塵。」進んで云く、「新年明日來る、甚れの處よりか來る。」師云く、「脚下三尺の土。」進んで云く、「還つて新舊に涉らざる底有りや也た無や。」師云く、「有り。」進んで云く、「如何なるか是れ新舊に涉らざる底。」師云く、「大底鼻孔向下に垂る。」進んで云く、「記得す、㋓感首座、法昌に問ふ、『昔日北禪分歲、露地の白牛を烹る、和尙今夜分歲、何の施設か有る。』昌云く、『臘雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し』と、意旨作麼生。」師云く、「兩口一舌無し。」進んで云く、「感云く、『大衆如何が喫せん。』昌云く、『嫌ふこと莫れ冷淡にして滋味無きことを。一飽能く萬劫の飢を消す』と、此の意如何。」師云く、「鬼、漆桶を爭ふ。」進んで云く、「感云く、『是れ何人か置辨す。』昌云く、『無慚愧の漢、來處も也た知らず』と、又作麼生。」師云く、「彼此出家兒。」進んで云く、「古人は卽ち且く置く、和尙今夜分歲、何の施設か有る。」師云く、「且く待て、㋢童行有つて報じ去らん。」進んで云く、「大衆如何が喫せん。」師云く、「鼻よりして入る可からず。」進んで云く、「是れ何人か置辨す。」師云く、「衣鉢閣中常に相逢ふ。」進んで云く、「和尙與麼の施設、古人と是れ同

---

の語巧妙卽ち頻伽八音の吐く所なり、理を會し直に善開心を說く、此れを語善と爲す云云。」

㋓會元十六に云く、「北禪賢の法嗣法昌倚遇禪師、感首座と歲夜湯を喫する次で、座曰く、昔日云々。」

㋢南海寄歸傳に云く、「白衣、苾芻の所に詣りて、專ら佛典を誦し、落髮を求むるを童子と號す」と。卽ち行者の屬なり。

か是れ別か。」師云く、「爾に許す、疑ふこと三十年せよ。」進んで云く、「鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起る一潭の氷」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

乃ち云く、「今宵臘月三十夜、家家爆竹結尾を賞す。或は歌吹の音を操り、或は鐘鼓の響を促して、來日新年の吉を祝し、萬歲松栢の操を壽す。龍寶山頂の人、未だ必ずしも點頭せずんばあらず。只だ是れ終に悄然の機に墮せず、豈に等閑の風味を將つて、以て合山の龍象に供養せんや。然も是の如くなりと雖も、衆と分歲、各各須らく飽足すべし。」拂子を擧つて云く、「趙州の喫茶、雲門の胡餅。」復た擧す、僧、古德に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」德云く、「看よ看よ、臘月盡く。」師云く、「大衆此の僧を見んと要すや、當頭霜夜の月。古德を知らんと要すや、任運前溪に落つ。然も是の如くなりと雖も、❼靜處娑婆訶。」

❼靜處娑婆訶とは、靜かなる處で誦呪するの意。

正旦上堂、僧問ふ、「瑞草嘉運に生じ、林花早春に結ぶ。好箇の時節願はくは擧揚を聞かん。」師云く、「箇箇道體、起居萬福。」進んで云く、「恁麼ならば則ち元正啓祚、萬物咸く新なり。」師云く、「一句に道著す。」進んで云く、「正當今日大年朝、如何なるか是れ新年頭の佛法。」師云く、「風暖かにして鳥聲碎け、日高うして花影重る。」進んで云く、「僧、雲門に問ふ、『如何なるか是れ淸淨法身。』門云く、『花藥欄』と、意旨作麼生。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「僧云く、『便ち恁麼にし去る時如何。』門云く、『金毛の獅子』と、又作麼生。」師云く、「兩重の公案。」進んで云く、「卽今和尙に問ふ、如何なるか

是れ清淨法身。聾。」師云く、「千峰雪色寒じ。」

乃ち云く、「今日大年朝、山僧渾べて道ふことを解す、大衆箇箇道體、起居萬福。且く道へ、是れ佛法か是れ世法か。」拄杖を卓して云く、「東西南北、吾が道大いに亨る。」

元宵上堂、僧問ふ、「今宵處處燈を揭げて萬民共に樂む、和尚人の爲に心燈を剔起し來れ看ん。」師云く、「天晴れて日頭出づ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、光明寂照徧河沙と。」師云く、「妨げず道著することを。」進んで云く、「僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室內一盞の燈。』林云く、『三人龜を證して鼈と作す』と、意、那裏にか在る。」師云く、「便宜に遇ふこと罕なり。」進んで云く、「與麼ならば則ち昔日の香林、今日の和尚」といつて、便ち禮拜す。師云く、「去ることを好くし、用ふることを好くす。」

乃ち云く、「燈燈相續いで燈燈已むこと無し。且く道へ、此の燈何れの處よりか來る。」卓拄杖一下して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂。僧問ふ、「春山亂青を疊み、春水虛碧を漾はす。好箇の時節、願はくは法要を聞かん。」師云く、「雪竇の背後に向つて問訊すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち日は自ら暖かに、風は自ら和す。」師云く、「老僧が背後に向つて問訊することを休めよ。」進んで云く、「趙州、一庵主を訪うて云く、『有りや有りや。』主、拳頭を豎起す。州云く、『水淺うして是れ舟を泊むる處にあらず』と、意旨作麼生。」師

云く、「蠅、血を見る。」進んで云く、「州又一庵主を訪うて云く、『有りや有りや。』主、拳頭を竪起す。州便ち禮拜讃歎す、如何が委悉せん。」師云く、「鶻、鳩を提ぐ。」進んで云く、「問答已に一般、甚と爲てか一人を肯ひ一人を肯はざる。」師云く、「兩頭に落ちざることを看取せよ。」進んで云く、「若し人有つて、有りや有りやと問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「且去喫茶。」

乃ち擧す、三祖大師道く、「一卽ち一切、一切卽ち一。」忽ち拄杖を拈じて云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ一。」拄杖を卓すること一下して云く、「只だ能く此の如くならば、何ぞ終らざることを慮らん。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「法身無爲諸數に墮せず、釋迦老子甚に因つてか涅槃の相を示す。」師云く、「涅槃の諸數に墮せざるが爲なり。」進んで云く、「古德道く、『十方㊟薄伽梵、一路涅槃門』と、且く道へ、如何なるか是れ涅槃門。」師云く、「日は東に出で夜西に落つ。」進んで云く、「五通仙人、世尊に問うて云く、『世尊に六通有り、我れに五通有り、如何なるか是れ那一通。』世尊、『五通仙人』と召す、意旨作麼生。」師云く、「平生の肝膽人に向つて傾く。」進んで云く、「仙人便ち應喏す、世尊云く、『那一通儞我れに問ふ』と、如何が理會せん。」師云く、「依稀として曲れるに似て纔に聽くに堪へたり。又風に別調の中に吹かる。」進んで云く、「後來雪竇、著語して云く、『老胡、元那一

㊟薄伽梵は、衆德を總攝し、至尊の義、佛の敬稱なり、これに四義又は六義を具す。四義とは一に有德に名づけ、二に巧に諸法を分別するに名づけ、三に名聲あるに名づけ、四に能く婬怒痴を破るに名づくと。六義とは一に自在、二に熾盛、三に端嚴、四に名稱、五に吉祥、六に尊貴。かく多義を含むが故に五種不翻の一なり。

通有ることを知らず、却つて邪に因つて正を打す』と、意、那裏にか在る。師云く、「無影樹下の合同船。」進んで云く、「卽今和尙に如何なるか是れ那一通と問はゞ、未審し如何が祇對せん。」師云く、「三跳後。」

上堂、擧す、雲門云く、「我れ諸人を看るに、二三の機中尙ほ㊉搆得すること能はず、空しく衲衣を披して何の益かある。」師云く、「山僧は然らず、我れ諸人を看るに、悉く是れ大機大用の人、剛ひて作佛を要して何の益かある。住みね住みね。一做さゞれば二休せず、風流ならざる處也た風流。」

上堂、「春山は靑く春水は綠なり、春雲片片、春鳥喃喃。敢て諸人に問ふ、吾が宗門中是れ放開か是れ捏聚か。个个寮舍に歸つて摸索して看よ。」

四月旦上堂、驀に拂子を竪起して云く、「西天の二十八祖、東土の六祖、盡く拂子頭上に在つて、心と說き性と說き、玄と論じ妙と論ず。山僧忍俊不禁にして、怪を見て笑ふこと一聲、箇箇面熱し汗出づ。諸人還つて見るや、若し也た見ずんば、」拂子を擊つこと一下して云く、「滿地の落花春已に過ぐ、綠陰空しく鎖す舊莓苔。」

佛生日上堂、「天を指し地を指して⑪尊貴に墮す、滿目の靑山笑つて點頭す。雲門令を行じてより

㊉字典に搆は成なり「しをふせる」義。こゝは手に入れると譯すべし。

⑪人天眼目曹山三種墮の章に曹山云く、凡情聖見は須らく三種墮を具すべし。一には披毛戴角、二には不斷聲色、三には不受食。稠布衲問ふ、披毛戴角は是れ甚麼の墮ぞ、曰く、是れ類墮、問ふ、不斷聲色は是れ什麼の墮ぞ、曰く、是れ隨墮、問ふ、不受食は是れ什麼の墮ぞ、曰く、是れ尊貴墮なり。六根門頭見聞智覺に就いて、只だ是れ他に汚染せられざるを將に墮と爲す云々。

後、風流ならざる處也た風流。諸人者裏に向つて會得せば、妨げず恩を報ずるに分有らん。其れ如し未だ然らずんば、靜處娑婆訶。」

結夏小參、僧問ふ、「看雲亭上月明明、古巖松下風拂拂。見成公案遮欄を絕す、言詮に涉らず、願はくは法要を聞かん。」師云く、「九九八十一。」進んで云く、「恁麼ならば則ち山は自ら青く、水は自ら綠なり。」師云く、「隨後婁搜の漢。」進んで云く、「九旬禁足、剋期取證は則ち問はず、七尺單前、三條椽下、學人一夏、如何が履踐せん。」師云く、「眼睥重きこと千斤。」進んで云く、「古德道く、『參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし』と、如何なるか是れ實參。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「實悟底又如何。」師云く、「何ぞ必せん。」進んで云く、「實參實悟、畢竟作麼生。」師云く、「心人に負かざれば、面に慙づる色無し。」

乃ち云く、「言前句後、舌根裏に身を藏し難し、向上向下、驀に[メ]葫蘆子を撥挨す。背面終に好手に落ちず、首尾何れの處にか萬類を該ねん。遠く象外に超え迥に天眞を脫す。是の處雲山目に溢る、[ミ]鬧市の大蟲、誰か見ることを解せざらん。見ることは卽ち見る、甚に因つてか文殊の頭は黑く普賢の頭は白し。會得せば三月安居、九句禁足。規に

[メ]葫蘆は瓢簞なり。
[ミ]韓非子九に云く、「龐恭太子と邯鄲に質たり、魏王に謂つて曰く、今一人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや、曰く信ぜず、二人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや、曰く信ぜず、三人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや。曰く寡人之れを信ず。龐恭曰く、夫れ市の虎無き明か也、然り而して三人言つて虎と成す、今邯鄲の魏を去るや、市に遠し、議臣三人に過ぐ、願はくは王之れを察せよ。」大蟲は虎なり。

循ひ矩を守つて脚底五色の索を帶びず。其れ如し未だ然らずんば、靜處娑婆訶。」

復た臨濟、衆に示して云く、「一人は孤峰頂上に在つて出身の路無く」の公案を擧して、師拈じて云く、「古來作者、嶮を弄して草に落つ、等しく是れ禁じ難し。只だ是れ人人背後に在つて、點頭せんことを要須す。大衆還つて會すや。㊁鬱頭藍已に全身を定す、何ぞ假らん周行して七歩に跨ることを。」

次の日上堂、僧問ふ、「如來の聖制、禁足護生、衲僧朝に西天に游び暮に東土に歸る。學人此間禁足卽ち是か、游歸卽ち是か。」師云く、「南番の㊂大舶主、本、此土の商人。」進んで云く、「已に道ふ禁足安居と、甚に因つてか文殊、三處に夏を度る。」師云く、「曲終つて人見えず、江上數峰青し。」進んで云く、「記得す、雲門、衆に示して云く、『十五日已前は爾に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ』と、意旨作麼生。」師云く、「什麼の處にか去る。」進んで云く、「自ら代つて云く、『日日是れ好日』と、又作麼生。」師云く、「倒退三千。」進んで云く、「和尚若し韶陽の垂示に逢はゞ、他に向つて如何が道はん。」師云く、「法堂上寸草生せず。」

乃ち云く、「今朝是れ結制、敢て諸人を謾却せず、只だ現量に因つて以て正法眼藏を擧揚せん。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「者箇は是れ龍寶が拄杖子、阿那箇か是れ正法眼藏。若し也た會せずんば、雨過ぎて遠山綠なり」といつて、拄杖を靠けて下座。

㊁大般涅槃經後分上遺教品に曰く、佛復た阿難に告げ玉はく、吾れ未だ成佛せざるとき、鬱頭藍弗外道法中に入り、四禪八定を修學し、其の教を受行す。吾れ成佛し來つて、其の法を毀訾し漸漸誘進す。

㊂字彙に舶は海中の大船と。

解夏小參、「三月安居、九旬禁足、山色夕陽の時、泉聲中夜の後、圓覺伽藍、平等性智。竹に上下の節有り、松に古今の青無し。个の裏取證無し、誰か慧身を成熟せん。正與麼の時節、衲僧活脫の處、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。東西南北遮障有ること無く、運奔執捉全く象外に超ゆ。諸人一夏、眉を結び肩を交ふ、今日何ぞ必ずしも苦口叮囑せん。然も此の如くなりと雖も、」拂子を擊つて云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

復た翠巖、夏末、衆に示す公案を擧して、師拈じて云く、「翠巖、衆の爲に力を竭すこと少からず、只だ个の三枚把不住の老凍膿を得たり。若し(七)中郞が鑑有らば、何ぞ野舍の薪に同じからん。」

上堂、「眞空は有を礙へず、眞空は色に異ならず。」忽ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「且く道へ、是れ有か是れ不有か、是れ色か是れ色にあらざるか。若し是れ伶利の衲僧ならば、水に和して乳を喫せん。其れ或は躊躇せば、拄杖鼻孔を穿卻せん。」又卓一下す。

大王上將、山に入つて百味の佳齋を下し、合山の供養を伸ぶるを謝し奉る上堂、僧問ふ、「日月輪邊氣象高く、魚龍穴下蟠根固し。」師云く、「好し。」進んで云く、「上將忽ち山に入つて奇齋を下し來つて、大衆に供養す。未審し和尚什麼の法を說いてか此の恩を報ずることを得ん。」師云く、「風行けば草

(七)後漢書五十蔡邕が傳に曰く、「吳人薪を燒き以て爨く者有り、邕火烈の聲を聞き、其の良木なるを知り、因つて請ふて裁ゐ琴を爲る、果して美音有り、而して其の尾猶ほ焦く、故に時人名づけて焦尾琴と曰ふ。」

偃す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「好し也た與麼にし去れ。」進んで云く、「只だ達磨未だ來らざる已前の如きんば、還つて這箇の消息有りや也た無や。」師云く、「銀山鐵壁。」進んで云く、「來つて後又如何。」師云く、「鐵壁銀山。」進んで云く、「來と未來とは且く置く、如何なるか是れ這箇の消息。」師云く、「鐵壁鐵壁、銀山銀山。」進んで云く、「學人今日小出大遇」といつて、便ち禮拜す。師云く、「手を撒して那邊に去れ。」

乃ち拄杖を横へて云く、「㋲大士三十二應身、天大將軍最も是れ眞、諸障を摧蕩して慶快を與へ、百福を提持して窮貧を救ふ。大衆者箇の大機大用を會せんと要すや。」拄杖を卓して云く、「看よ看よ、㋝巍巍堂堂、㋜煒煒煌煌。四海九州、威風凜凜。」

材木採り用つて歸る普請並に㋑善源の雲和尚を謝する上堂、拄杖を拈じて云く、「萬仭峰前千磵の底、者邊那邊良材を撰ぶ。斧頭用ひ得たり諸人の力、集めて此に大成して相呼んで囘る。正與麼の時作麼生。」拄杖を卓すること一下して云く、「行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」

上堂、驀に拄杖を横へて擧す、肇法師云く、「㋺近うして見る可からざる者は物の性のみ。」拄杖を卓

㋲首楞嚴六に云く、「爾の時觀世音菩薩卽ち座より起つて、佛足を頂き、而も佛に白して言く、云々、世尊我れ觀音如來を供養するに由つて、彼の如來、我れに如幻聞、熏聞、修金剛三昧を授けらる、佛如來と慈力を同じうする故に、我が身三十二應と成り、諸の國土に入らしむ。」

㋝巍巍は山の聳ゆる貌、堂堂は威儀の盛なる貌、容貌威儀の盛にして犯すべからざる形容詞なり。

㋜文選注に、「煒煒煌煌は、皆、光色亂動、目眩曜して定らざるなり。」

㋑善源の雲、未だ詳にせず。

㋺肇論物不遷論の文。

して云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ物の性。」又拄杖を卓して云く、「一槌兩當、蓋覆し將ち來る。」

宗持禪尼(へ)逆修拈香、「當陽突出して迥に根塵を脫す、天を薰じ地を炙る。擧體全眞、乃佛乃祖、佗に由つて氣を出し、衲僧の巴鼻此れ從り方に親し。況んや是れ宗持大姉、山僧が手を借つて拈出するをや。等閑に一見便見せば、自然に一得永得。生生の正果を感じ、世世の正因を結ぶ。馥郁たる香風徧界に淸く、靄然たる和氣恰も春の如し。」

除夜小參、「年窮り歲盡く、黑漆桶裏に墨汁を盛る。交頭結尾、半夜烏雞飛んで天に上る。所以に師僧家、空劫已前威音那畔より、一日、日未だ嘗て一日を逐はず、一時、時未だ嘗て一時に隨はず。墻壁瓦礫、露柱燈籠、背後面前、眞珠燦爛たり。然も是の如くなりと雖も、今夜諸人と分歲、其の中國の爲にする一句作麼生。」拂子を擊つて云く、「村裏盡く好く儺を驅る、來年定めて是れ熟年ならん。」

復た擧す、香林因に僧問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、臘月盡く」と。師云く、「山僧は然らず、若し人有つて此の問を發せば、便ち佗に答へて道はん、昨日相見の人と。忽ち是れ何人ぞと問はゞ、劈口に便ち摑せん。」

(へ)逆は預なり、預め供養を修することを逆修と云ふ。灌頂隨願往生一方淨土普廣菩薩所問經に詳かに出づ。

正旦上堂、僧問ふ、「年年是れ好年、日日是れ好日。正與麼の時、請ふ師祝聖せよ。」師云く、「萬年松下に茯苓有り。」進んで云く、「恁麼ならば則ち萬民業を樂み謳歌を唱ふ。」師云く、「好音耳に在り、人皆聞く。」進んで云く、「記得す、僧、古德に問ふ、『新年頭、還つて佛法有りや也た無や』と、意、那裏にか在る。」師云く、「舌頭骨無し。」進んで云く、「德云く、『元正啓祚、萬物咸く新なり』と、的當なりや也た無や。」師云く、「藕絲孔裏に大鵬に騎る。」進んで云く、「只だ古人の祗對するが如きんば、如何か辨別し去らん。」師云く、「風暖にして鳥聲碎く。」進んで云く、「一句了然として百億を超ゆ。」師云く、「富んでは千口も少しと嫌ふ。」進んで云く、「但だ學人のみに非ず、四衆咸く恩に霑ふ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

乃ち云く、「今朝大年朝、東廊下にも相賀し、西廊下にも相賀す。喚んで佛法底と作さば、拂子他の與に點頭せん、喚んで世法底と作さば、拄杖他の與に點頭せん。且く道へ、諸人阿那箇の點頭に孰與ぞ。若し此に於て會得せば、便ち山僧が適來个个道體、起居萬福と道ふことを解せん。」

二月旦、村木を出すが爲に大衆を勸下する上堂、「梅腮柳面香を吐き榮を競ふ、春山春水綠を湛へ藍を疊む。衲子清興、時なる哉時なる哉、爾に許す始めは芳草に隨ひ去り、又須らく後に落花を逐うて回るべし。忽ち回り來る時如何。箇箇萬福萬福。侍者、急手に个の好茶を點じ將ち來れ。」

佛生日上堂、僧問ふ、「㊀青春已に去り、朱夏初めて臨む。瞿曇今日降生、此れは是れ現成底、請

ふ師別に擧揚せよ。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「二月十五曾て滅せず、甚に因つてか鶴林中に雙趺を示す。」師云く、「天上の星、地下の木。」僧云く、「四月八日曾て生ぜず、甚と爲てか九龍、水を吐いて金軀を灌沐す。」師云く、「九九八十一。」僧云く、「天を指し地を指して、天上天下唯我獨尊と道ふ。聻。」師云く、「芍藥花開く菩薩の面。」僧云く、「雲門云く、『我れ當時若し見しかば、打殺して狗子に與へて喫卻せしめん』と、意旨作麽生。」師云く、「邪に因つて正を打す。」僧云く、「雪竇云く、『我れ若し見しかば、便ち與に禪牀を掀倒せん』と、意、那裏にか在る。」師云く、「手を把つて相共に高峯に上る。」僧云く、「二大老の用處、是れ同か是れ別か。」師云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」僧云く、「上來一一指示を蒙る、向上宗乘の事、又如何。」師便ち喝す。

乃ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「淨法界身、天を撐へ地を拄ふ、本出沒無し、瓜を種ゑて瓜を得たり。便ち恁麼に領じ去らば、恩を報ずるに分有らん。其れ如し未だ然らずんば、二龍溫涼の水。」

結夏小參、僧問ふ、「綠暗く紅稀にして孟夏漸く熱す。應節の一句願はくは提唱を聞かん。」師云く、「薰風自南來、殿閣生微涼。」僧云く、「禁足安居、誰か我れに似たる、角を掛くる羚羊、蹤を露さず。」師云く、「路の上る可き有れば、高きも人更に行く。」僧云く、「朝に西天に到り、暮に東土に歸る。是れ什麽人の分上の事ぞ。」師云く、「是れ安居底の分上の事。」僧云く、「恁麽ならば則ち一聲の黃鳥靑山の

㈠爾雅釋天に、「春を青陽と爲す、氣青くして溫陽、夏を朱明と爲す、氣赤くして光明。」

外、風光を占斷して主人と作る。那裏よりか與麼地なることを得たる。」僧云く、「松源に三句有り、咨參を許さんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」僧云く、「大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さゞる。」師云く、「草鞋露に和して重し。」僧云く、「口を開くこと甚に因つてか舌頭上に在らざる。」師云く、「牙齒一具の骨を見す。」僧云く、「明眼の衲僧、甚に因つてか脚跟下紅絲線斷えざる。」師云く、「脚頭也た脚底。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「人に向つて作麼生か擧せん。」

乃ち云く、「西天の嚴規、東土の嚴令、齊しく箇の劍利の漢、大坐當軒底の事有ることを知らんことを要す。苟くも此の事を得れば、三月安居、九旬禁足、天も覆ふこと得ず、地も載すること能はず。日用四威儀の中、全く聲色堆上に坐して、專ら聲色堆の主宰と做る。箇の中領覽有れば、都べて魔界に墮す。所以に道ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心平等性智に安居すと。瞥喜瞥瞋、理會無し、新羅夜半日頭明かなり。然も是の如くなりと雖も、諸人切に忌む腦を刺して膠盆に入ることを。何が故ぞ。」良久して云く、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」

復た德山小參答話せず、問話の者有らば三十棒といへる公案を擧して、師拈じて云く、「盡く謂ふ、口を開けば卽ち錯り、舌を動ずれば卽ち乖くと。殊に知らず九曲の黃河、底に泥じて流る。」

次の日上堂、僧問ふ、「西天の舊令、東土共に遵ふ。諸方樣に依つて葫蘆を畫く。龍寶門下の標格、

作麽生。」師云く、「山僧に孤負すること莫れ。」進んで云く、「綠水青山元來安居、露柱燈籠終日禁足、衲僧家甚に因つてか別に規矩を立す。」師云く、「嚴師、好弟子を出す。」進んで云く、「恁麽ならば則ち行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」師云く、「更に須らく子細にすべし。」進んで云く、「記得す、乾峰、衆に示して云く、『法身に三種の病、二種の光有り、須らく是れ一一透得して始めて穩坐地を解すべし、』意那裏にか在る。」師云く、「緬に想ふ、會裡に人有ることを。」進んで云く、「雲門便ち衆を出でて云く、『庵內の人、什麽と爲てか庵外の事を見ざる』と、意旨作麽生。」師云く、「果然。」進んで云く、「峰呵呵大笑すと、又如何。」師云く、「身を藏すに路無し。」進んで云く、「門云く、『猶ほ是れ學人が疑處在り、』如何が委悉せん。」師云く、「㋭爭臣有るときは則ち君不義に落ちず。」進んで云く、「古人底は且く置く、作麽生か是れ正當今日の法要。」師云く、「水到れば渠成る。」

乃ち拄杖を卓して云く、「二千年前此の制有り、四聖六凡都べて者箇を出でず。二千年後其の例を擧づ、五湖の衲子大家者裏に在り。」又拄杖を卓して云く、「出と不出と在と不在と、且喜すらくは靜處娑婆訶。」

五月旦上堂、僧問ふ、「松竹陰陰として夏日長し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「三十年後

㋭經に云く、「天子、諍臣七人有れば、無道と雖も其の天下を失はず、諸侯、諍臣五人有れば無道と雖も其の國を失はず、大夫諍臣三人有れば、無道と雖も其の家を失はず、士、諍友有れば則ち令名を離れず、父、諍子有れば則ち身不義に陷らず。」爭或は諍に作る。

錯つて商量すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち黄鶴樓中玉管を吹く、江城五月落梅花。」師云く、「人遠き慮無きときは必ず近き憂有り。」進んで云く、「只だ大地を變じて黄金と作し、長河を攪いて酥酪と爲すことは則ち無きにはあらず。和尚且く道へ、如何なるか是れ向上宗乘の事。」師云く、「南斗は七、北斗は八。」進んで云く、「向下又作麼生。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「畢竟如何が領略し去らん。」師云く、「阿儞舌を全うし去らば亦可ならん。」

乃ち擧す、(へ)鼓山、新羅の僧に問ふ、「山に上り來つて什麼をか作す。」對へて云く、「和尚を禮拜す。」鼓山云く、「盡世不標、什麼の處に向つてか禮拜せん。」對へて云く、「不標の處に向つて禮す。」鼓山云く、「儞は是れ新羅の人なることを念ふて、儞に二十棒を放す。」師云く、「者の僧、若し『盡世不標、什麼の處に向つてか禮せん』といふところに於て、左右を摸著するの勢を作さば、鼓山を拜し得ん。鼓山若し『不標の處に向つて禮せん』といふところに於て、(ト)亞身合掌せば、者の僧を接得せん。二り倶に莽鹵。儞師僧家、什麼の救處か有る。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して下座。

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、昔日善財、藥を採り來る憑據、如何が領會せん。」師云く、「一著を放過す。」進んで云く、「將に佳辰に逢

(へ)此の問答は禪林類集禮拜の部に見ゆ。

(ト)韻會說文に、亞は醜なり、人の背を局するの形に象ると。又廣韻に就なりと。

(チ)文殊尸利、佛集を見んと欲して到ることを得る能はず、諸佛各の本處に還る、文殊便ち諸佛の集る處に到れば一女人有り、佛に近いて定に入る。文殊、佛に白して言く、何ぞ

ふ底、盡大地是れ藥ならざること莫しや。」師云く、「何ぞ必せん。」進んで云く、「恁麼ならば薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「謂つ可し、諸侯道を避くと。」進んで云く、「記得す、㋠文殊當年、女子の定を出すこと得ざる、意旨作麼生。」師云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹。」進んで云く、「下方の罔明甚と爲てか却つて出し得る。」師云く、「水は澗底に流れて太忙生。」進んで云く、「文殊神力無しと爲んか、罔明神力有りと爲んか。」師云く、「釣魚船上の謝三郎。」進んで云く、「尊貴の路を行かずんば、爭か上頭の關を踏まん」といつて便ち禮拜す。師喝して云く、「且く脚下を看よ。」

乃ち云く、「強ひて菖蒲を切ることを用ひず、剛ひて㋷靈符を掛くることを要せず。衲僧家別に長處在り、盡天下の妖怪を消殞し去る。」拄杖を卓して云く、「頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ。相對して無語獨足にして立つ。」

上堂、僧問ふ、「綠樹陰濃を布き、薔薇晩香を吐く。正に好し看雲亭下暑を避くる處、佳景を賞するの句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「㋦閻浮樹下笑呵呵。」進んで云く、「無寒暑の田地の如きんば、如何が踏著せん。」師云く、

---

此の女人佛に近いて坐することを得て而も我れ得ざると。佛言く、汝此の女を覺し、汝自ら之れに問へ。文殊卽ち彈指之れを覺せども、而も覺めず、文殊、佛に白して言く、我れ覺さしむることを得ずと。是の時一菩薩有り、棄諸蓋と名く、卽時に下方より來り、佛所に到り立つ、佛、棄諸蓋に告げ玉はく、汝此の女人を覺せと。蓋彈指すれば、此の女人三昧より起つ、文殊、佛に白す、何の因緣を以て、我れ此の女を起たしむる能はざるに、蓋、彈指すれば便ち三昧より起つ。佛言く、汝此の女に因つて菩提心を發し、是の女人、棄諸蓋に因つて菩提心を發す、故に汝能はざるのみ。諸佛要集經下文に詳かなり。

㋷事言要玄に抱朴子曰く、「五月

「坑に墮ち壍に落つ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち處處の綠楊、馬を繋ぐに堪へたり。」師云く、「蹉過するも也た少からず。」進んで云く、「記得す、古人云く、『大用現前、軌則を存せず』と、如何なるか是れ大用現前底の時節。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「與麼ならば則ち謂つ可し隨處に主と作れば、立處皆眞なりと。」師云く、「雪上に霜を加ふ。」進んで云く、「學人今日親しく法要を聞く、如何が保任せん。」師云く、「疎田水を貯へず。」

乃ち擧す、趙州因に僧問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「儞趙州を問ふ」と。師云く、「山僧は然らず、若し如何なるか是れ趙州と問ふこと有らば、只だ他に向つて道はん、石橋南より來るや也た未だしやと。這箇を問はずと道はゞ便ち道はん、山を下り去るを待つて、腋裏に汗出でんと。且く道へ、古人の道ふ底と、那箇か親、那箇か疎。請ふ各辨別して看よ。」

半夏上堂、僧問ふ、「山嵩嶺に連り、地洛川に近し、一機一境勝槩ならずといふこと無し。唇吻に渉らず如何が津を通せん。」師云く、「心人に負かざれば面に慙づる色無し。」進んで云く、「九旬已に半を過ぐ、諸人自ら時を知る。當頭與麼の時節、學人如何が領略せん。」師云く、「且く者邊に過ぎよ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち杲日天に麗しく、清風地を匝る。」師云く、「放下著。」進んで云く、「僧、智門に問

---

五日を以て、赤靈符を作り、心前に著く。」

(ヌ) 醒世錄一に云く、「大海の北に大樹王有り、名づけて閻浮樹と曰ふ、周圍七十由旬、根、地に入ること二十由旬、高さ百由旬、云々、枝葉四面に垂る、四復た五十由旬。」

ふ、『蓮花未だ水を出でざる時如何。』門云く、『蓮花』と、此の意如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「僧云く、『水を出でて後如何。』門云く、『荷葉』と、又作麼生。」師云く、「水洒げども著かず。」進んで云く、「蓮花、水を出づると未だ水を出でざると相去ること多少ぞ。」師云く、「秦何幾人か踏著す。」

乃ち云く、「半夏已前、我れ諸人の爲に隱す、隱せば彌〻露る。半夏已後、我れ諸人の爲に顯す、顯せば露れず。正當今日半夏隱さず顯さず、我れ諸人の爲に說破せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月已に熱す、五穀好く熟せん。」

寺莊等公據を賜ふ上堂、拄杖を拈じて云く、「自家の田地觸處全く彰る、公驗一回手に入ることを得て、百劫千生曾て荒れず。正與麼の時作麼生。」拄杖を卓して云く、「皇風と祖風と、鎭に扇ぎ、帝道と佛道と遐に昌なり。」又卓すること一下して便ち下座。

重九上堂、「茱萸露を帶び金菊花を發く、大用現前軌則を存せず。諸禪德若し箇の中の意を識らば、南山東籬一家家。」

二月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「雪霽れて千山綠正に濃なり、梅腮柳面轉た㊟縱容。君が爲に箇の中の意を報せんと擬すれば、幽鳥喃喃として亂峯に入る。」拄杖を卓すること一下す。

㊟縱容、又從容に作る、禮記注に云く「縱容は優游迫らざるの貌。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「滿街の楊柳綠絲の煙、畫き出す長安二月の天。節に應ずる一句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「寥寥たる天地の間、獨立して望何ぞ極らん。」僧云く、「瞿曇今日般涅槃に入る、未審し什麼の處に向つてか去る。」師云く、「人人の鼻孔裏に向つて去る、還つて覺ゆるや。」僧云く、「恁麼ならば則ち哭底便ち是か、笑底便ち是か。」師云く、「將に謂へり、個是れ領話せずと。」僧云く、「若し我れ滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、若し我れ滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ずと、意旨作麼生。」師云く、「黃河の點魚。」僧云く、「今日の節に因らずんば、餘日實に逢ひ難し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「向後人に向つて錯つて擧すること莫れ。」

乃ち橫に拄杖を按じて云く、「雙趺槨を出す事親しみ難し、有も也た人を累し、無も人を累す。贍部州中休すること得ず、年年二月㋑萍蘋を費す。」

喝一喝、拄杖を擲下して下座。

龍翔正眼の二塔主至る上堂、「寶山に一句子有り、只だ人の聽くことを許して人の擧することを許さず。已に是れ人の聽くことを許す、甚に因つてか人の擧することを許さゞる。」拂子を擧つて云く、「龍蛇を辨ずる眼俱に正しく、虎兕を擒ふるの機也た全し。」

上堂、拄杖を卓して云く、「百億の須彌、百億の日月、恒沙の諸佛、恒沙の國土、盡く拄杖頭上に在り。諸人見得せば、妨げず一生參學の事了畢せん。其れ如し未だ然らずんば、眼を開いて瞌睡せ

㋑左傳隱公三年に云く「苟も明信有れば、澗溪沼沚の毛、蘋蘩薀藻の菜、筐筥錡釜の器、潢汙行潦の水、鬼神に薦むべし。」

ん。」又卓一下して下座。

四月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「此の事去來無し、甚に因つて昨日春去り今朝夏來る。㋺物の性一世に住すと道ふに迄つては、肇公也た是れ盲龜空谷に入る。衲僧家牙劍樹の如く、口血盆に似たり、者裏に到つて作麽生か道著せん。若し人の道著する無くんば、」拄杖を以て畫一畫して云く、「喜。」

結夏上堂、僧問ふ、「今日是れ結制、結する底是れ何物ぞ。」師云く、「猛虎路に當つて坐す。」僧云く、「恁麽ならば則ち官池水深く、看雲亭高し。」師云く、「吾れ常に此に於て切なり。」僧云く、「只だ老師の兩句子を將つて、七十員の禪佛に布施せん。」師云く、「只だ阿儞のみ有つて呑吐不下。」

乃ち云く、「是れ箇の水牯牛、山邊水邊、賴に自ら無事。今日端無く欄裏に逗入して、鼻貫索頭全く別人の手裏に在り。行かんと要すれども也た能はず、臥せんと要すれども也た能はず。才に情を恣にせんと擬すれば、痛く鞭策を加へて道ふ、叱、者の畜生と。嗚呼嗚、只だ自知す可し。」拂子を擊つこと一下す。

上堂、拄杖を卓して云く、「人情若し者箇に似たらば孔丘、顏囘を打殺せん。道情若し者箇に似たらば、達磨、少林を失却せん。」便ち下座。

端午上堂、僧問ふ、「文殊小男、誰が爲にか藥を要す。」師云く、「古佛廟前自ら顛蹶す。」進んで云く、「善財童子採り來る、何の草ぞ。」師云く、「無根滿地、無葉普天。」進んで云く、「父子便を得る處、千古

㋺肇論物不遷論の說なり。

撿點に遭ふ。」師云く、「爾老成の勢有り。」

乃ち云く、「端午天中の節、土を咒し壁に書することを用ひず、只だ一神咒を以て一切の妖怪を消殞し、佛病祖病を除却す。且く道へ、是れ那箇の神咒ぞ。」便ち威を振つて一喝す。

上堂、擧す、三祖云く、「一卽ち一切、一切卽ち一」と。驀に拄杖を拈じて云く、「二祖大師、非非想天に在つて、一箇の木橛子を擲下して、諸人の眼睛を換却す。忽爾として下り來つて旋轉舞蹈す、恰も獨り樂むが如し。而も諸人の見ず知らざるを見て、高聲に唱へて云く、龜毛長きこと三尺、兎角長きこと七尺と。」拄杖を卓すること一下して云く、「參。」

上堂、橫に拄杖を按じて擧す、㋐芭蕉、衆に示して云く、「爾に拄杖子有らば、我れ爾に拄杖子を與へん、爾に拄杖子無くんば、我れ爾が拄杖子を奪はん」と。拈じて云く、「芭蕉與奪は無きにあらず、只だ是れ擒縱未在。山僧尋常皴皴鱗鱗地に向つて人を出さんと要す。猶ほ一半を救ひ得ざること在り、豈に況んや山形邊の事を吐出するをや。太だ遠くして遠し。」拄杖を卓すること一下す。

㋐傳燈十二にいふ、「郢州芭蕉山慧清禪師は新羅國の人なり、法を南塔涌に嗣ぐ。」

解夏上堂、僧問ふ、「三通鼓罷んで四衆筵に臨む、好箇の時節、請ふ擧揚を聞かん。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「九旬期已に滿つ、衲僧脚頭闊し。正當恁麼の時、如何なるか是れ自恣の一句。」師云く、「楖栗橫に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」進んで云く、「記得す、洞山云く、

進んで云く、「秋初夏末、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし』と、意旨如何。」師云く、「歩歩清風起る。」進んで云く、「石霜云く、『門を出づれば便ち是れ草』と、又作麽生。」師云く、「草鞋露に和して重し。」進んで云く、「和尚恁麽の答話、是れ古人の與に氣を出すと爲んか、復た古人の與に屈を雪ぐと爲んか。」師云く、「平蕪盡くる處是れ靑山。」進んで云く、「與麽ならば、則ち一言別路無し、萬世盡く歸を同じうす。」師云く、「傍觀分有り。」進んで云く、「只だ老師の四五轉話を將つて、甘つて九夏賞勞の功に當つ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「謂つ可し南北東西皆可可と。」

乃ち擧す、翠巖夏末、徒に示す、「一夏已來兄弟の爲に東說西話す、看よ翠巖が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る人心虛る。」長慶云く、「生ぜり。」雲門云く、「關。」師云く、「三大老、倶に隻手を出して翠巖の家風を扶樹す。龍寶今夏兄弟の爲に說話せず、看よ眉毛箭鋒の如く長きこと數寸、只だ是れ人の覷破することを缺く。然も是の如くなりと雖も、落霞と孤鶩と齊しく飛び、秋水長天と共に一色。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「向上の一路千聖不傳、八月初一龍寶山前。」拄杖を卓して下座。

中秋上堂、擧す、長沙、仰山と月を翫ぶ次で、仰山月を指して云く、「人人盡く這箇有り、只だ是れ用ひ得ず。」長沙云く、「恰も爾を倩ふて用ひんや。」山云く、「爾試みに用ひよ看ん。」長沙一蹈に蹈倒す。仰山起き來つて云く、「爾大いに箇の大蟲に似たり」と。師云く、「仰山起き來つて、果然として用不得と道はゞ、長沙脚を擡げ起さゞることを見盡さん。然も恁麽なりと雖も、月は中秋に到つて滿ち、

風は八月より涼し。」拂子を擊つこと一下す。

九月旦、太上法皇、種種の㊂剪采を惠むに因つて上堂、須菩提、巖中晏坐、帝釋花を雨らす話を擧して、師云く、「天帝釋花を雨らして地を動ずると、太上法皇此の花を惠みたまふと、是れ同か是れ別か。若し別と謂はゞ眼裏に筋無し、若し同と謂はゞ其の意作麼生。」良久して云く、「住みね住みね、秋色登平楓葉の序、西風轉た冷かなり草花の天。」拂子を擊つこと一下す。

重陽上堂、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。㊃靖節阿轆轆の處、衲僧一重の關と作る。且く道へ、他は是れ俗漢の陋韻、甚と爲てか衲僧一重の關と作る。」喝一喝して云く、「參。」

上堂、「山僧卽今須彌頂上に在つて說法す、諸人也た是れ鐵輪峰頂に在つて聽法す。坐底立底、賓主歷然、還つて會すや。會得せば盡十方界乾坤大地、諸人の眼睫上に在つて大光明を放つ。其れ如し未だ然らずんば、樹頭老い山顏醉ふ。」拂子を擊つこと一下す。

開爐上堂、擧す、趙州、衆に示して云く、「三十年前、南方の火爐頭に箇の無賓主の話有り、直に而今に至るまで人の擧著する無し」と。師云く、「趙老面皮厚きこと三寸、手を炙つて熱を助けんことを要須す。其れ爐下春に似たるを如何せん。直饒ひ而今人の擧著する有るも、方に知る三箇の枯柴、品字に燒く。」

㊂剪采は造花なり。
㊃排韻氏族に、「陶元亮、晉に在つて淵明と名づけ、宋に在りて潛と名づく、世靖節先生と號す。」

上堂、「一句去り一句來つて、儞が一平生を慶快す。忽然として傾湫倒岳、那裏にか入り那裏にか出でん。昨夜三更牛を失却す、天曉起き來つて火を失却す。」拄杖を卓すること一下す。

上堂、擧す、㊀盤山云く、「向上の一路千聖不傳。」慈明云く、「向上の一路千聖不然。」師云く、「二大老、只だ鬼、漆桶を爭ふことを解す。山僧は便ち道はん、向上の一路千聖齊しく行くと。」

㊀幽州盤山寶積禪師は、馬祖道一禪師の法嗣なり、傳は聯燈四にあり。

# 大德寺語錄 終

## ㋑頌古

㋺淨居窟牖の中に於て叉手す

㋩玉囦の鑑月秋を期せず、夜靜にして方に知る波浪の別なることを、此れより相逢うて路迷ふに似たり、崔嵬たる檀特硬きこと鐵の如し。

㊁爾の時迦葉諸の比丘に告ぐ、「佛已に荼毘、金剛の舍利は我れ等が事に非ず、我れ等宜しく當に正法を㋭結集して斷絶せしむること無かるべし。」

㋬列三析半信何ぞ通せん、㋣首を回せば白雲眼力空し、㋠鷄足峰前未だ歸り去らず、㋷多羅葉上悲風を動かす。

㋦行思禪師、㋸希遷に問うて云く、「汝

---

㋑頌古は古則を頌揚するの意にて、佛祖の問答商量せられたる古則に就いて、韻語の偈頌を以て宗意を發揮したるものを云ふ。宋の天禧年間に、汾陽昭覺禪師、頌古一百則を作る、是れ頌古の初めなり。

㋺釋迦太子たりし時、世間、老、病、死の慘狀を見て、畏怖の情に堪へず、獨り出家の法、生死を脫得すると聞き、即ち深く尊信すと說いて佛本行經に詳かなり。又經に據るに、老、病、死、出家、以上四等の事を見て、心に悲喜有り、是の夜一人の天人有り、名けて淨居と曰ふ、窓牖の中に於て叉手して言く、「出家時至れり云云。」

㋩囦は古文、淵に同じ。第一句、佛の內鑑自ら冷然として盡十方を照破し、廣大圓明皆遺虛凝、涅槃の求むべき無きが故に正覺を成ぜんことを期せずとの意なり。第二句、如來本覺の內證より無緣の大悲を發して、正位に讓を取り玉はざるの玄旨を演ぶ。夜靜にして方に知るとは、所謂實際理地一塵を受けず、眞如法界自無く他無しと雖も、隨緣差別の幻境の上には生死有り涅槃有り、凡有り聖有り、大慈善巧の願輪に非ずんば、誰れか此の患難を救はん。波浪の別とは、生死千差の苦域を指す。

什麼の處よりか來る。」云く、「曹谿より來る。」思乃ち拂子を擧して云く、「曹谿に還つて這箇有りや。」云く、「但だ曹谿のみに非ず、西天にも亦無し。」思云く、「子曾て西天に到ること莫しや否や。」云く、「若し到らば卽ち有り。」思云く、「未在、更に道へ。」云く、「和尙也た須らく一半を道取すべし、全く學人に靠ること莫れ。」思云く、「汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、人の承當すること無けん。」

㋾明暗雙雙對揚を絕す、㋻愁人未だ說かざるに愁腸斷ゆ、㋕金毛の獅子踞地を解す、㋵寃苦蒼天又一場。

僧、㋟大隨に問ふ、「劫火洞然として大

---

第三句、太子既に淨居の奨臾に隨つて下化衆生の願海に入り、曠劫不變の願輪に鞭ちて方便有餘の化行を行ず、恰も初發心地の行人迷倒昏愚なるに似たるを云ふ。第四句は太子既に檀特山に入りて苦修錬行し、次ぎに雪山に入りて端坐六年、千辛萬苦の體裁、難信難解の樣子なり。

㋥爾の時迦葉云々、會元釋迦章に見ゆ。

㋭結集とは佛の敎說を結合編集するの意。

㋬列三析半とは展演開敷縱橫羅列の義なり、言ろは、縱ひ貝葉金文大いに敷演し大いに展開すと雖も、猶ほ是れ能見所見を出でず、豈に眞の正法を結集すと云ふに足らんやと。

㋣此の經を得る者を佛祖聖賢と名づけ、此の經を失ふ者を六趣の衆生と言ふ。此の經纔に出現する時、上下四維三世古今、全く些毫有ることを見ず、空寥寥、廓落落、初めて信ず楞嚴に所謂、淨極り光通達して寂照虛空を含む、却り來りて世間の事を觀ずれば、猶ほ夢中の事に似たりとの意也。

㋠雞足は卽ち迦葉尊者を指す、迦葉既に衆に首たり、故に雞足を言ふときは、則ち畢波羅窟裏、結集會上八百八萬の大衆同時に擧ぐ。

㋷貝多羅は樹の名、印度にては紙の代用として書寫に用ゐらる。言ふ意は、多少の大阿羅漢、眞に如來の祕經の義に入り得せず、故に空しく八敎の說相、五時の遺音を執して、以て如來の正法眼藏なりと爲して、不去來の處に去來の相を見、不生滅の地に生滅の悲を懷くをいふ。

㋦吉州靑原山行思禪師は法を曹

千倶に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」隨云く、「壞。」僧云く、「與麼ならば則ち他に隨ひ去る。」隨云く、「他に隨つて去る。」

㋹劫火他に隨つて喚べども回らず、㋞遠く西蜀を離れて去つて還た來る、㋡大千總に者の僧の眼に等し、㋨古佛光中笑口開く。

㋤百丈の懷海、一日衆に謂つて云く、「佛法は是れ小事にあらず、㋶老僧昔し馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾し眼暗きことを。」黃檗擧するを聞いて舌を吐く。丈云く、「子已後、馬祖に承嗣すること莫しや。」檗云く、「然らず、今日師の擧するに因つて、馬祖の大機大用を見ることを得たり。然



溪の六祖大師に嗣ぐ。傳燈五に詳に出づ。

㋸石頭希遷禪師は法を青原行思禪師に嗣ぐ、師沙彌たりし時、曹溪の六祖大師に參ず、祖の遺命に隨つて遂に青原に見ゆ、原其の來るを見て即ち問ふ「汝什麼の處よりか來る。」

㋾第一句、青原父子相見唱拍鼓舞の間、明頭に暗有り、暗頭に明有り、恰も兩鏡相照して中心影像無きに似たるを云ふ。

㋻第二句、父子情思相通じ、志氣相投ず、恰も愁人と愁人と陝路に相逢ふて、未だ片言を交へず、目擧の間、中腸先づ回轉するが如きを云ふ。

㋕第三句、鵠林禪師云く「作麼生か是れ踞地の獅子、青原底と謂はんか、石頭底と爲んか。」

㋵第四句、鵠林禪師云く「青原曰ふ、未在更に道へと、此の時心膽を傾盡し、肝膽を吐出す、更に者の什麼を道つて、恁麼に逼拶し將ち來る、恰も枯骨を壓して汁を搦らんと欲する者に似たり。」

㋟大隨眞和尚は法を大安禪師に嗣ぐ。此の問答、傳燈十一に出づ。

㋹第一句、鵠林云く「大隨他に隨つて去るの一語、一代藏經も詮註し及ぼさず、明眼の衲僧も摸索不著、擬議するときは、快鷹趁へども及ばず、千牛挽けども回らず、所以に道ふ。」

㋞其の僧、大隨の落處を知らず却つて此の問を持して、直に舒州の投子山に往いて前話を擧似す。投子香を焚いて禮拜して云く、西蜀に古佛有り、出世す、爾且つ速に回れと。其の僧復た回つて大隨に到

も且つ馬祖を識らず、若し馬祖に嗣がば我が兒孫を喪はん。」丈云く、「如是如是。」

(ム)一喝耳聾して天地黑し、(ウ)當機舌を吐いて荆棘を生ず、(ヰ)虛を承け響を接いで意論じ難し、(ノ)兩兩三三好し動著するに。

(オ)保福、長慶、遊山する次で、福、手を以て指して云く、「只だ這裏便ち是れ(ク)妙峰頂。」慶云く、「是なることは則ち是、可惜許。」雪竇著語して云く、「今日這の漢と遊山して什麼をか圖る。」復た云く、「百千年後無しとは道はじ、只だ是れ少し。」後鏡淸に擧似す、淸云く、「若し是れ(ヤ)孫公に不ずんば、便ち髑髏野に徧きことを見ん。」

---

ろ、隨旣に遷化す、二句故に云ふ。

(ツ)第三句は、今時諸方の宗師、天下の禪流を指す。

(ネ)古佛光中は、投子の所謂西蜀に古佛有りの語より來る、笑口開くとは、面前者の僧及び今時の人の行履を見るに、寔に一場の笑具のみ。

(ナ)百丈懷海は馬祖の法嗣なり。

(ラ)此の因緣、碧巖十一則の評に詳に出づ。

(ム)此の句、百丈、馬祖の一喝を聞いて耳聾し眼瞎す、從來大地黑漫漫、從前多少の得力の處を打失して、覺えず佛祖の堂奧に入りし樣子を頌す。

(ウ)此の句、黃檗大師如上の因緣を聞いて、忽ち魂飛び魄散じて覺えず舌を吐く、此れより大機大用を發し、佛祖難入萬仞參天の荆棘を栽ゑしことを頌す。

(ヰ)此の句、諸方相似の禪徒、末代小果の瞎流の得て論量すべからざることを云ふ。

(ノ)此の句、今時紙傳拂傳、虛を承け響を接ぐ底の瞎緇、此に兩兩、彼に三三、從上師資相承の惡冤を聞いて心神驚動することを云ふ。

(オ)此の因緣、碧巖二十三則に出づ。保福、長慶、鏡淸、總に雪峰の法嗣なり。

(ク)華嚴に云く、「昔善財童子妙峰頂上に行いて德雲比丘を見んと欲す、七日にして逢はず、一日別峰に在りて相見す。」蓋し善財童子は行人辨道、進趣の一念子なり、妙峰とは第八賴耶無分別識なり。德雲比丘とは根本無作平等の大智なり、七日にして逢はずとは、七識摩耶傳送識なり。

(ヤ)孫公は長慶の俗姓なり。

(マ)鵠林云く、「國師今經義を取

㋮妙峰孤頂人到り難し、只だ看る白雲飛んで又歸ることを、松檜蒼蒼幾歳をか歷たる、莫教あれ巖畔鳥聲の稀なることを。

㋘僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る。」

㋫提婆宗分節し難し、誰か道ふ銀椀裏に雪を盛ると、大地山河一等の風、人間天上蕭洒絕。

㋙盤山、垂語して云く、「三界無法、何れの處にか心を求めん。」

㋓千峰雨霽れて露光冷じ、月は落つ松根蘿屋の前、等閑に此の時の意を寫さんと擬すれば、一溪雲鎖して水潺潺。

㋢巖頭、僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「西京より來る。」頭云く、

---

らず、特に雪峰門下諸老の唱和諸方に超卓し、古今に獨步するを嘆賞す、時人總に其の門閫を窺ふこと能はず、就中保福長慶遊山の因緣、天に留る赤土の流星劍、泉に徹する黑火の無底坑、鬼神も亦喪身失命し去らん、是れ所謂孤峰人到り難き者なり、其の千態萬狀譬へば孤雲の空に浮ぶに似て、乍ち獸の如く乍ち鳥の如く、或は奇峰の如く、或は傘蓋に齊うして全く定度無し、或は萬仞の巖壁に等うして、遙に松杉の鬱密深沈たるを望み、終に斧斤の聲を聞かず、百千歳を歷て蒼蒼鬱鬱たるのみ、如上孤絕の峰猿鳥飛んで迷らず、獸走りて跡を斷つ、此の話に到つて明眼の衲僧飽參の上士も亦手脚を挾むことを得ず、百鳥花を啣むに路無く、外道潛に覷ふも見えず、任他あれ巖畔鳥聲の稀なることを。」

㋘巴陵の鑑禪師は法を雲門大師に嗣ぐ。此の問答、碧巖十三則に出づ。

㋫十五祖迦那提婆尊者、法を龍樹大士に嗣ぐ、大に外道を摧伏して弟子と爲す、宗風大いに振ふ、當時稱して提婆宗と曰ふ。後來江西の馬大師、楞伽經に所謂佛語心を宗と爲し無門を法門と爲すと云ふを擧して云く、「大凡そ言句有れば是れ提婆宗。」

㋙盤山寶積禪師は法を馬祖に嗣ぐ。聯燈四に傳あり。

㋓鶴林云く、「此の頌、全篇一團の大火聚の如く、一條の熱鐵橛に似たり、如何が手脚を著けん、誰れか知らん國師も亦頌じ得て喪身失命し、盤山も亦說き得て喪身失命し了ることを。」

「(ワ)黄巣過ぎて後、還た劍を收得すや。」僧云く、「收得す。」頭、頸を引いて近前して云く、「(カ)㘞。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」頭、呵呵大笑す。僧後に雪峰に到る、峰問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「巖頭より來る。」峯云く、「何の言句か有りし。」僧、前話を擧す、雪峰打つこと三十して趁ひ出す。

(ヨ)黄巣過ぎて後劍收め難し、(タ)提げ去り提げ來つて手を傷つて憂ふ、(レ)是れ山藤三十下せずんば、(ソ)梵天の餘血五湖に流れん。

(ツ)雲門、垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」

---

(ラ)鄂州の巖頭和尚、字は全奯、泉州柯氏の子なり、法を德山に嗣ぐ。此の因緣、碧巖六十六則に出づ。

(ワ)黄巣は人の名なり、通鑑に「僖宗乾符二年、黄巣亦衆千餘人を聚めて王仙芝に應ず、巣少かりし時、仙芝と皆私鹽を販るを以て事と爲す、巣騎射を善くし、任俠を喜び、粗々書傳を渉る、屢々進士に擧がれども第せず、遂に盜を爲す、仙芝と州縣を攻剽して山東に橫行す云々。」

（㘞は玉篇に船を牽く聲なり、唐音「おう」、重きものを牽くゆゑ、思はず「おう」と聲が出るなり。

(ヨ)第一句、者の僧岩頭の意を會せず、大いに蹉過し了る、而るを却つて自ら謂らく、黄巣の劍を收得して甚だ痛快にし去れりと。

(タ)第二句、こゝに於て一枚巖頭の頭を荷負し來つて處處に行いて敗闕を納る、殊に知らず早く是れ鋒を犯して手を傷ることを。

(レ)第三句、雪峰三十棒して趁ひ出すを云ふ。

(ソ)第四句、若し雪峰の棒無くんば、此の僧空しく巖頭の頭を荷擔して、四天下を遶つて處處の叢林血穢狼藉せんと。

(ツ)韶州雲門山文偃禪師は法を雪峰に嗣ぐ。此の垂語、碧巖八十三則にあり。

(ネ)鶻林評して云く、「此の語極めて難入難解、學者をして理盡き詞窮り、心死し意消する處に到りて、我が法二空の暗谷を超過し、生佛一如の金網を打脱せしむ、見地不脫の禪者曾て夢にだも見ると能はず、所以に言ふ、古佛光中人の知ること少れなりと。」

㋙古佛光中第幾機ぞ、南山雲外人の知ること少なり、千溪日は晩る樵歌の路、歸去來兮來去歸。

㋪仰山、三聖に問ふ、「汝名は什麼ぞ。」聖云く、「慧寂。」山云く、「慧寂は是れ我れ。」聖云く、「我が名は慧然。」仰山、呵呵大笑す。師、著語して云く、「什麼の處にか去る。」

㋲煦日影の中雪の霽るゝ春、梅腮柳面芳を鬪して新なり、詩緣風興限り無き意、獨り許す苦吟野外の人。

㋝雲門、垂語して云く、「㋜乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在す。燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す。」

---

㋪袁州の仰山慧寂禪師は法を潙山に嗣ぐ、三聖慧然禪師は法を臨濟に嗣ぐ。此の因緣、廣燈十二、三聖の章に載す。

㋲此の頌、道人潛修功積り、密參力充つるときは八識頼耶の暗谷を踏飜して、大圓鏡光の惠日乍ち展出して、有爲住相の積雪乍ち解く。これより四句の願輪に鞭ち益々進んで退かざるときは、眞如平等の堅氷を擊碎し、法性一枚の層氷を消融し、眞如不二の聖境に遊戲し、明暗雙雙底の寶溪に逍遙して、百華叢裏に遊ぶが如し、佛祖も手を挾むことを得ず。然、寂二老の如き、總に是れ者般の人、其の唱拍鼓舞、恰も春花の春暖を得て紅紫を鬪はしむるに似たるを云ふ。

㋝此の話、碧巖六十二則にあり。

㋜以下祕在すまで、肇法師寶藏論の中一段の說話なり。

㋑鵠林云く、「此の頌極めて精密密地、此の頌極めて孤峻峻地、却つて絲毛卓竪することを覺ゆや。」一寶は則ち人人本具の性、形山は卽ち四大五蘊の空屋なり。

㋺此の話碧巖四十四則にあり、吉州禾山の無殷禪師、法を九峰虔禪師に嗣ぐ、習學云云の語は肇公寶藏論の中の一段の說話なり。議者の曰く、「生死卽涅槃と說くを聞いて之れを信ずるは聞位なり、習學して生死を恐れず、涅槃を求めずと信ずるは是れ絕學位なり、絕學は道に近き故に隣と言ふなり、生死涅槃平等にして、聞隣の二を離る、是れ眞の無上道なり、故に眞過と云ふ、過は所謂透過の義なり」と。禾山此の一段の敎意を拈じ來

㋑宇宙乾坤同一寶、燈籠佛殿形山の中、靑松雪霽れて岩勢晩れ、寒月風淸うして溪畔空し。

㋺禾山、垂語して云く、「習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ。此の二を過ぐる者、是れを眞過と爲す。」僧出でゝ問ふ、「如何なるか是れ眞過。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「如何なるか是れ眞諦。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「向上の人來らば如何が接せん。」山云く、「解打鼓。」

㋩天上の星地下の木、觀機那ぞ背て㋥離微に渉らん、明明たる歷世別物無し、猛烈の身心更に疑はず。

㋭仰山、僧に問ふ、「㋬近離甚れの處ぞ。」僧云く、「㋣盧山。」仰山云く、「曾て㋠五老峰に遊ぶや。」僧云く、「曾て遊ばず。」仰山云く、「闍梨曾て遊山せず。」雲門云く、「此の語皆慈悲の爲の故に落草の談有り。」

㋷看よ看よ落草遊山せず、的信何ぞ通せん千里の關、敲唱當鋒禪悅を見

---

りて以て探竿影草と爲す、僧有り、果然として一釣に上り來りて即ち問ふ、「如何なるか是れ眞過。」山云く、「解打鼓」と、鐵鎚擊碎す黃金の骨。大凡そ四箇の解打鼓有り、此れを禾山の四打鼓と曰ふ。

㋩鵠林評して曰く「此の頌亦是れ國師肝膽を傾け盡す底、縱使ひ舊參の上士も密密參取すべきの聖作なり。」

㋥離は離脫の意、微は隱るゝの意、離は一切の繫縛を離れ、前境の外に獨立すること、微は萬物に隱れて萬物と一體となること。

㋭此の因緣、碧巖三十四則にあり。

㋬近離は、近く甚れの處を離ると訓讀す、「どこより來たか」の意。

㋣盧山は南康府の西北二十里に在り。

る、一圓空裏二三三。

㋦外道、佛に問ふ、「有言を問はず無言を問はず。」世尊良久、外道讃歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむ。」外道去つて後、阿難佛に問うて云く、「外道何の所證有つてか而も得入と言ふ。」佛云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」

㋸有言異道の事を問はず、㋾鐵山當面勢崔嵬、㋻孤峰雲散す千溪の月、

㋕鞭影追風直下に來る。

㋵魯祖山の寶雲禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ言不言。」雲云く、「汝の口什麼の處にか在る。」僧云く、「口無し。」雲云く、「什麼を將つてか飯を喫す。」僧對無し。㋟洞山代つて云く、「他飢ゑず、什麼の飯をか喫せん。」

㋹超然の一句錯つて流布す、㋞強ひて爪牙を弄するも未だ作家ならず、

㋡箭後の路頭端的別なり、㋧誰か知らん高處に風波有ることを。

㋤潙山、因に仰山問ふ、「如何なるか是れ西來意。」潙云く、「大好燈

---

㋠五老峰は廬山に在り、五峰五老相連るが如し、故に名づく。

㋷鵠林云く、「學者此の頌を解せんと欲せば、先づ須らく此の話を參決すべし、此の話を透過せずして此の頌を見んと要せば、空谷に入りて谷神を捉へんと欲するが如し。」

㋦此の因緣、碧巖六十五則にあり。外道とは、西竺の聰明利智の種族、常に好んで書を讀んで常に論議を好む、未だ眞正中道の諦理を明めず、故に外道なり。學んで非有非無非斷非常の處に到る、智明了ならず心休歇せず、兩肩に擔ひ來りて即ち問ふ。

㋸第一句、異道は則ち外道を指す、有言を問はず無言を問はずの所問の全體を拈起する者なり。有言即ち異道なりと道ふにはあらず。

㋾第二句は、世尊良久の當體、

籠。」仰云く、「只だ這箇便ち是なること莫しや。」潙云く、「這箇是れ什麼ぞ。」仰云く、「大好燈籠。」潙云く、「果然として不識。」

㋶機意交馳して何れの處にか去る、陣雲千里重關を鎖す、大家問著すれば相識らず、笑ふに堪へたり古風匝地寒きことを。

㋰江州龍雲の臺禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」臺云く、「老僧㋒昨夜欄裏に牛を失却す。」

昨夜欄裏牛を失却す、㋼風流[illegible]ざる處也た風流、㋨枯禪限り無[illegible]喚び得作す、祖意西來特地に酧ゆ。

㋔南泉、一日東西の兩堂猫兒を爭ふ、南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば

言詮道絶し、情量力及ばざる端的を頌す。

㋻第三句、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむと云ふを述ぶ。

㋕結句は、世尊許可の一語を言ふ。

㋵池州磐祖山寶雲禪師、法を南岳懷讓禪師に嗣ぐ。傳燈七に傳あり。

㋟洞山良价禪師なり。

㋹鵠林云く、「儞ぢ看よ、何れの處か是れ超然の一句、寶雲云く、儞什麼を將つてか飯を喫せんと、是れ超然の一句なりや、洞山云く、他飢ゑず、什麼の飯をか喫せんと、二大老の說話、萬仞の龍門、黑雲の鎖すに似たり。如何なるか是れ錯りて流布する底、今時往往に言ふ、他は是れ人人本具底本來の面目坊、他形相無く肚脾無し、飢うること無く飽くこと無し、更に什麼の飯を喫せんと。」

㋞第二句言ふこゝろは、二大老、面前縱ひ熱喝瞋拳、惡罵毒話、英雄を逞しうし、嶮峻を恣にし去るも、者裏に到つて未だ作家と稱するに足らずと。

㋡第三句、二大老の用處恰も神箭の長空を過ぐるが如く、全く處所無く、全く蹤迹無し、沒蹤跡の處、蹤跡的的分明、只だ恨む、時の人親しく見得出する底無きことを。

㋧第四句、高處の風波とは、寶雲の什麼を將つてか飯を喫せん、洞山の他飢ゑず、什麼の飯をか喫せんの語を指す。

㋤潭州潙山靈祐禪師は法を百丈に嗣ぐ、袁州仰山の慧寂通禪師は法を潙山に嗣ぐ。此の話會元九、傳燈九に出づ。

㋶此の頌、鵠林評して曰く、「潙仰父子、各の龍蛇の陣勢を張

即ち斬らず。」衆對無し、南泉猫兒を斬却して兩段と爲す。南泉復た前話を擧して趙州に問ふ、州便ち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ。泉云く、「子若し在りしかば、恰も猫兒を救ひ得ん。」

㋗兩堂爭ふ處南泉斷つ、王老放つ時趙老收む、㋳頭上の草鞋多少か重き、白雲流水共に悠悠。

㋮僧伽難提、衆生の慢を知つて乃ち曰く、「世尊在日世界平正、丘陵有ること無し。江河溝㋘洫、水悉く甘美、草木滋茂、國土豐盈、㋫八苦無く㋙十善を行ず。㋓雙樹に滅を示してより八百餘年、世界丘墟樹木枯悴し、人至信無し。正念輕微、眞如を信せず。唯だ神力

りて、互に奇正の精兵を馳せ機を以て意を奪ひ、意を以て機を奪ふ、孫吳も股戰き信越も膽震ふ、宜なる哉、大家聞著すれば、總に相知らず、笑ふに堪へたり古風匝地寒きことを。作麼生か是れ古風、四七二三の聖賢只だ者の些子を傳へ、世尊拈華以來、從上の諸聖密密潜修、軀命を顧みざる者は、此れ是の秘訣を傳へんと欲すればなり。」

㋰江州龍雲の臺禪師、法を百丈の海禪師に嗣ぐ。聯燈七に之れを載す。

㋒古來生佛一如、淨穢不二、畢竟無分曉の理體を演ぶるときは則ち盡く言ふ、昨夜三更牛を失却す、今朝天明火を失却す、半夜烏鷄を放つ、白馬蘆花に入る、黑漆桶裏に墨汁を盛る等と。總に是れ平等不二底を說き將ち來る。

㋾鵠林云く、「僧恁麼に問ひ、龍雲恁麼に答ふ、那處か是れ風流ならざる處、既に是れ祖師西來意、若し平等不二底の泥團子を以て捏合して以て答へ得ると爲ば、他の經論家の老奴も亦西來意を續ぎ得て乏しきこと無けん、豈に祖祖相傳底の秘訣と稱するに足らんや、什麼の風流の處か有らん、誰れか知る此の語、大いに節角誵訛の處有ることを。」

㋨三四の二句は、世間限り無き二空の暗谷裏にある枯禪者流、徒に龍雲の欄裡に牛を失却すと云ふを聞いて、邪解憶惻を逞しうするを云ふ。

㋔南泉普願禪師は法を馬祖の道一禪師に嗣ぐ。此の話、碧巖六十三則にあり。

㋗第一、二句鵠林評して云く、「試みに道へ、王老箇の什麼をか放出し、趙州箇の什麼を

を愛す。」言ひ訖つて右手を以て漸く展べて地に入り、㋢金剛輪際に至る、甘露水を取り、琉璃器を以て持して會所に至る。大衆之を見て、卽時に欽慕悔過して作禮す。師、著語して云く、「拈得すや也た未だしや。」

㋐日暮雲晴れ眼界空し、淸風況んや是れ草離離、㋚松根石上誰が與にか說かん、月中峰に到れども猶ほ未だ歸らず。

㋖迦耶舍多尊者、徒を領じて一舍に到る、舍主鳩摩羅多、問うて云く、「是れ何の徒衆ぞ。」尊者云く、「是れ佛弟子。」羅多、佛號を聞いて心神悚然として卽時に戶を閉づ。尊者良久、自ら其の門を扣く、羅多云く、「此の舍人無し。」尊

---

か收得す。」

㋳第三、四句鵠林評して云く、「言ふこと莫れ、淨穢不二平等一味の受用と、所以に言ふ、白雲流水共に悠悠と。」

㋮會元一に云く、「十七祖僧伽難提尊者は室羅筏城寶莊嚴王の子なり。」此の因緣、會元一、十六祖羅睺羅多尊者の章に出づ。慢は我慢なり。

㋘迦は「ほり」なり。

㋫八苦とは、生、老、病、死の四苦に、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛の四苦を加へて云ふ。怨憎會苦とは、遠離せんと憎惡する人と共に會し居るを云ふ、求不得とは、愛樂を求むれども、之れを得ざるの苦を云ふ、五陰は新譯に五蘊、吾人の身は五蘊和合に依るが故に、生老病死等の苦を聚集するを云ふ。

㋙十善とは、第一不殺生、第二不偸盜、第三不邪婬、第四不妄語、第五不綺語、第六不惡口、第七不兩舌、第八不貪欲、第九不瞋恚、第十不邪見を云ふ。

㋓釋尊、拘尸那城外に入滅し給ひし時、其の四方に雙本の娑羅樹有りたるを云ふ。

㋢金剛輪際とは無限に深きところを云ふ。是れはもと俱舍論に出づる說なり。

㋐此の頌、鵠林評して曰く、「須らく知るべし、悟るときは則ち常に靈鷲に在ることを、如來眞法界の外纖塵有ることを見ず、豈に丘陵有らんや、迷ふときは則ち薪盡き火滅し、空しく艸木瓦石、穢惡充滿の邊土のみを見る、所以に頌に曰く、日暮雲晴れ眼空しと。言ふこゝろは國師旣に大徹透過、面前四維上下、十方法界、半點の形貌無く、纖毫の瑕翳無

者云く、「無しと答ふる者は誰ぞ。」羅多、語を聞き是れ異人なることを知つて、遽に關を開いて延接す。

㋴踏斷す春風千萬峰、蒼苔青蘚靈蹤を鎖す、
落花啼鳥夕陽の裏、雲合し雲開く晩寺の鐘。

㋱梵摩淨德云く、「弟子衰老、師に事ふること能はず、願はくは次の子を捨てて以て出家せしめん。」

㋯己を退き人を進む比す可き無し、㋛百千年後誰有つてか知らん、室羅城畔金水の上、古佛放光動地の時。

㋽不如蜜多、偈を聞き再び祖に啓して云く、「法衣宜しく傳授す可し。」祖云く、「此の衣、難の爲の故に假つて以て證明す。汝が身、難無し、何ぞ其の衣を

---

し、只一片匝地の淸風のみ。」

㋚鵠林曰く、「三四の句、甚だ難透難解、此の語を見徹することを得と掌果を見るが如きことを得ば、乍ち向に所謂拈得すや也た未だしやと云ふを見徹させん。此に於て始めて國師と相見することを得ん。」

㋖此の話、聯燈二、正宗記三に出づ。迦耶舍多尊者は十八祖、鳩摩羅多尊者は十九祖なり。

㋴此の頌、鵠林評して曰く、「二尊者既に道業成熟、見地の山、知障の嶺、多少險難の道路を踏斷して、意路不到、情解不及の處に向つて穩坐す、是の故に言ふ、蒼苔青蘚靈蹤を鎖すと、既に是れ二尊、向上の步驟明暗雙雙、無功用、沒巴鼻の處に於て、賓主、獻酬す、恰も浮雲の無心にして合し、無心にして開くに似たり、所以に言ふ、雲合し雲開く夕陽の裏と。」

㋱梵摩淨德は即ち迦毘羅國の人なり、園樹茸を生ず、味甚だ美也、唯だ長者と第二子羅睺羅多と取りて食ふ、取り了れば隨つて生ず、迦那提婆尊者、其の宿因を知りて即ち偈有り、曰く、「僧と爲りて理に通ぜずんば、身を復して信施を還す、長者八十一にして、其の樹茸を生ぜず。」長者偈を聞いて彌々歎伏す、曰く、「衰老せり願はくは次の子を捨て、師に隨ひ出家せしめん、」祖曰く、「昔し如來此の子を記し玉ふ、第二の五百年に大敎主と爲るべし」と、今の相遇ふこと蓋し宿因に符へり、即ち與に剃髮す、尊者の偈に曰く、「道に入りて理に通ぜざれば、身を復して信施を還す」と。

㋯第一句、弟子衰亡せり師に事ふること能はず、願はくは次

假らん。」蜜多、語を聞いて作禮して退く。

㋪月高うして松頂孤光冷じ、㋲風殘雲を弄して稚意寛し、四海涓涓として百川落つ、琉璃殿上夜遊闌なり。

㋝玄沙、衆に示して云く、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人に遇はゞ、作麼生か接せん。患盲の者は、拈槌竪拂、它又見えず、患聾の者は、語言三昧、它又聞えず、患瘂の者は、伊をして説かしむるも、又説くこと得ず、且く作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法靈驗無し。」僧、雲門に請益す、門云く、「汝禮拜著せよ。」僧禮拜して起つ。門、拄杖

---

子を捨てゝ出家せしめんと云ふを頌す。

㋛以下二、三、四は、後來此の子果して羅睺羅多尊者と稱して大教主と爲り、室羅筏城畔に於て、大法幢を立て大法施を行す、是れ寔に放光動地にあらずや。金水は河の名なり。

㋴二十六祖不如蜜多尊者は南印度天德王の子なり、法を二十五祖婆舍斯多尊者に嗣ぐ、尊者偈有り、曰く「聖人知見と説く、境に當つて是非無し、我れ今眞正を悟る、道無く亦理無し。」以下此の文に同じ。

㋪鵠林曰く「此の頌全篇、秋光一片寥廓爐靜底を賦して、以て人人本具底の眞性、純淸絕點、圓明虛凝なるを演ぶ、豈に特り蜜多大士のみならんや、箇箇大丈夫、一點の障難無く一點の瑕翳無し、所以に言ふ月高うして松頂孤光冷じと、是れ上下四維森羅萬木、總に是れ一團の秋光なるものに非ずや。」

㋲縱ひ生死有り、涅槃有り、佛法有り、王法有り、付鉢有り、傳衣有るも、總に是れ秋風の殘雲を逐ふが如し、この中吉凶無く、榮辱無く、障礙無く、災害無し、所以に言ふ、四海涓涓として百川落つと、謂ふ可し無影樹下の合同船と。琉璃殿上は碧巖十八則無縫塔の話に耽源云く「琉璃殿上に知識無し。」

㋝福州の玄沙師備宗一禪師は法を雪峰に嗣ぐ。此の話、碧巖八十八則にあり。

㋜此の頌、鵠林評して曰く「此の三種病根甚だ深重なり、庸醫の輩、神魂を惱すと雖も、輙く診候すること能はず、豈に病根を拔くことを得んや、特り雲門大師のみ有り、退後進前の際に於て、三指を加へ

を以て摑く。僧退後、門云く、「汝是れ患盲にあらず。」復た近前來と喚ぶ、僧近前す、門云く、「汝是れ患聾にあらず。」乃ち云く、「還つて會すや。」僧云く、「不會。」門云く、「汝是れ患瘂にあらず。」僧此に於て省有り。

㋦盲聾瘖瘂誰か能く接せん、退後近前指下明かなり、多くは珍候沈動の處に向つて、知らず三種一毛病。

㋑翠岩、夏末衆に示して云く、「一夏已來、兄弟の與に東說西話す、看よ翠岩が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る㋺人心虛る。」長慶云く、「生ぜり。」雲門云く、「關。」

㋩偸眼才に開いて先づ手を下す、眉毛生也月方に明かなり、雲門の關子萬重の鎻、直に而今に至つて夜行を絕す。

㋥鹽官、一日侍者を喚んで云く、「我が與に犀牛の扇子を將ち來れ。」侍者云く、「扇子破れ了れり。」官云く、「扇子既に破れば、我れに犀牛兒を還し來れ。」侍者對無し。㋭投子云く、「將ち出づることを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。」雪竇拈じて云く、「我

---

す、九候を察して、診候未發の處に於て、深く三種の病根を見る、謂ふこと莫れ、既に是れ一毛病、元來皮膚疥癬の少病なりと。」

㋑明州翠巖の令參永明禪師、法を雪峰の義存禪師に嗣ぐ。此の話碧巖八則に出づ。

㋺人心虛なりは「びくびく、おぢつく」の意、虛怯なり。

㋩偸は盜、ぬすむなり。此の頌鴻林評して曰く、「四大老の用處、恰も軍中暗號密令の如し、一隊同火の上士は一見して便ち落處を知る、所以に言ふ、眉毛生也月方に明かなりと、試みに言へ、作麽生か是れ明處。雲門の關子萬重の鎻とは此の那一關、綿よりも輭に、鐵よりも堅し、天を照し地を照す、豈に夜行のみならんや。」

㋥杭州鹽官鎭國海昌院齊安禪師は法を馬祖に得たり。傳燈七に詳に出づ。此の話、碧巖四

れ全からざる底の頭角を要す。」(ヘ)石霜云く、「若し和尚に還さば即ち無し。」雪竇拈じて云く、「犀牛兒猶ほ在り。」(ト)資福一圓相を畫して中に於て、一の牛字を書す。雪竇拈じて云く、「適來什麼と爲てか將ち出さゞる。」(チ)保福云く、「和尚年尊し、別に人を請せば好し。」雪竇拈じて云く、「惜む可し、勞して功無きことを。」(ル)破了當

(リ)犀牛の扇子清風起る、(ヌ)清風を坐斷して氣を出すこと難し、

年重ねて用ひ去る、(ヲ)烟に和して搭在す玉欄干。

(ワ)雪峰住庵の時、兩僧有り、來つて禮拜す。峰來るを見て手を以て庵門に托して身を放つて出でて云く、「是れ什麼ぞ。」僧亦云く、「是れ什麼ぞ。」峰低頭歸庵。僧後に岩頭に到る、頭問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「(カ)嶺南より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到るや。」僧云く、「曾て到る。」頭云く、「何の言句か有る。」僧前話を擧す。頭云く、「佗什麼とか道ひし。」僧云く、「佗無語、低頭歸庵。」頭云く、「噫、我れ當初悔ゆらくは佗に向つて末後の句を道はざりしことを。若し伊に向つて末後の句を道はゞ、天下の人雪老を奈

---

十九則にあり。

(ホ)傳燈十五に云く、「翠微無學禪師の法嗣舒州投子山大同禪師は本州懷寧の人なり、姓は劉氏。」

(ヘ)會元五に云く、「潭州石霜山慶諸禪師は法を道吾宗智に嗣ぐ。」

(ト)會元九に云く、「吉州資福如寶禪師は法を西塔光穆に嗣ぐ。」

(チ)保福は法を雪峰に嗣ぐ。會元第七に傳あり。

(リ)鵠林曰く、「作麼生か是れ清風起る。」

(ヌ)又曰く、「作麼生か是れ清風出す底の氣。」

(ル)又曰く、「試みに言へ、當年何人か用ひ得て痛快なる、投子底是か、雪竇底是か、石霜底是か、資福底是か、如何か點檢し去らん。」

(ヲ)又曰く、「此の語頌し得て最妙最玄、最幽絕妙、一則の始末

何ともせじ。」僧夏末に至つて再び前話を擧して請益す、頭云く、「何ぞ早く問はざる。」僧云く、「未だ敢て容易ならず。」頭云く、「雪峯我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず、末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ。」

㋵同條に生ずる處不同死、明頭を拈却して暗頭を收む、此れより身を放つて歸庵し去る、今に至つて簾外鬼神愁ふ。

㋟潙山、五峯、雲岩同じく百丈に侍立す、百丈、潙山に問ふ、「咽喉唇吻を併卻して、作麼生か道はん。」潙山云く、「却つて請ふ、和尚道へ。」丈云く、「我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪はんことを。」復た五峰に問ふ、峰云く、「和尚也た須らく併却すべし。」丈云く、「人無き處斫額して汝を望まん。」又雲岩に問ふ、岩云く、「和尚有りや未だしや。」丈云く、「我が兒孫を喪はん。」

㋹東街の柳色烟に和して翠に、西巷の桃花相映じて紅なり、幾度か春風晩鐘の裏、遊人意を著けて寥空に到る。

---

表裏、摸寫し來て、煥爛たり。」

㋻雪峰義存禪師は法を德山宣鑑禪師に嗣ぐ。此の話、碧巖五十一則にあり。

㋕嶺南は飛猿嶺の南を謂ふ。

㋵此の頌、鵠林評して曰く「今時往往に解し得て道ふ、同條生死の一著の如き、黑漆桶裏に墨汁を盛るに似たり、何れの處にか儞が悟解了知を容れん、所以に言ふ、明頭を拈却して暗頭を收むと、畢竟看來れば巖頭も亦暗頭合、雪峰も亦暗頭合、是の故に身を放つて歸庵し去る、便頭歸庵の端的、縱使ひ佛祖も覰破することを得ず、所以に簾外鬼神愁ふと、錯錯。若し是れ果して此の如くならば、巖頭什麼に依つてか言ふ、我れ當初悔ゆらくは他に向つて末後の句を道はざりしことをと。唯だ透關正眼底の上士のみ有りて、

㋞南泉、百丈の涅槃和尚に參ず、丈問ふ、「從上の諸聖、還つて人の爲に說かざる底の法有りや。」泉云く、「有り。」丈云く、「作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法。」泉云く、「不是心、不是佛、不是物。」丈云く、「說了也。」泉云く、「某甲は只だ與麼、和尚作麼生。」丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、爭か說不說有ることを知らん。」泉云く、「某甲不會。」丈云く、「我れ太煞だ儞が爲に說き了れり。」

㋡從上爲人の事、㋧老胡の知を容さず、㋤寒雲幽石を抱き、霜月清池を照す。

㋶大隨、僧に問ふ、「什麼の處にか去る。」僧云く、「普賢を禮し去る。」隨、拂

---

應に一見して、卽ち落處を知る、若し然らずんば縱使ひ千般の義味有りて、百種の注脚を下し得るも、總に是れ閑妄想、死學解。」

㋟溈山、五峰と共に法を百丈に嗣ぐ、雲巖百丈に侍すること二十年、途に契はず、後來法を藥山に嗣ぐ。

㋹此の頌、鵠林評して曰く、「溈山、五峰潛行功積り、密用力充ちて、恰も群陰剝盡して、百花爭ひ開く時に似たり、父子唱拍の時、謂つ可し柳色黃金嫩く、梨花白雪香しと、特に雲巖のみ有つて、天然の句子未だ得る能はず、夕陽に立ち盡して空しく眉を皺むる者に似たり。」

㋷此の話碧巖二十八則に出づ。會元を按ずるに南泉と問答する者は、卽ち馬祖の法嗣百丈惟政禪師なり、宜しく隨ふべし。

---

㋡第一句、二老の言論往來全篇擧揚し了れり。

㋧第二句、二大老の相見底、縱令ひ默照邪禪の瞎徒、庸常下劣の部類、恰も田夫の階下に立ちて、中書臺上の事を聞くが如し、所以に言ふ、縱ひ老胡も親しく了知することを容さずと。

㋤其の高踏古雅、更に一事の比況に堪へたる無し、若し強ひて等匹を求めば、南泉は第三句の如く、百丈は第四句の如し。

㋶大隨法常禪師は法を長慶大安禪師に嗣ぐ。此の話、傳燈十一、師の章にあり。

㋰鵠林評して曰く、「大隨既に明頭差別の偏位に立ちて遠く聞く、僧も亦明頭差別の偏位に立ちて遠く答ふ、大隨俄に暗頭無差別の正位に入りて近く

子を擧して云く、「文殊普賢、總に這裏に在り。」僧圓相を作して背後に抛向す。乃ち兩手を展ぶ。隨云く、「侍者一帖の茶を取つて、這の僧に與へよ。」

(エ)遠く聞き近く見る一賓主、半暗半明孰與か揭げん、若し是れ箇中全く用ひ去らば、普賢特地に(ウ)亡羊を逐ふ。

(サ)三角の總印云く、「若し此の事を論ぜば、眉毛を貶上すれば早く已に蹉過せり。」麻谷便ち問ふ、「眉毛を貶上することは卽ち問はず、如何なるか是れ此の事。」角云く、「蹉過せり。」谷乃ち禪床を掀す、角之れを打つ、谷無語。

獄天堂(ル)阿剌剌、(オ)機關直下に把るべき沒(ク)姦生り謾多くして却つて得難し、(ヤ)雙放

---

示す、僧も亦暗頭無差別の正位に入りて近く呈す、賓主唱和の間、誰か蹤由を辨ぜん、所以に言ふ、孰か揭げんと、然りと雖も國師の心、竊に謂らく、未だ善盡さず、大隨若し者の僧兩手を展ぶる處に於て本分の草料を行じて、痛く一頓を與へば、縱令ひ六牙の象王も方に迷ひ度を失はん、惜い哉全く用ひ去らざることを。」

(ウ)亡羊は列子の說符篇に云く、「楊子が隣人羊を亡ふ、其の黨を率ゐて之れを追ふ、楊子が曰く、あゝ一羊を亡ふ何ぞ追ふ者の衆きやと云々。」茲は度を失ひうろたえる義なり。

(サ)潭州三角山總印禪師は法を馬大師に嗣ぐ。會元三に此の話を載す。

(ル)阿剌剌は、驚駭の樣子を表はす語にて、俗に「おやおや」と云ふ意。此の句、總印と麻谷と相見し、法戰一場、一往一來、活達脫洒、抑揚褒貶、殺活自在、天上・佛界・魔宮・全く比倫無く、等匹無きを頌す。

(オ)機關は宗師家が學人を接得する巧妙の手段作略を云ふ。此の句、言ふ意は、機關峻峭、豪放不羈、縱ひ佛祖も把著することは能はずと。

(ク)貌摸千態萬狀、隱顯捲舒、明眼の衲僧未だ落處を見ず。

(ヤ)心を擧して向はんと擬すれば兎角龜毛別山を過ぐ。

(マ)維摩詰、秦には淨名と謂ふ、又無垢稱と譯す、釋尊と同時代にして、在家の身を以て菩薩行を修したる人、故に維摩居士とも云ふ。文殊師利は妙吉祥、妙德、妙首等と譯す、智慧第一と稱せらる。此の緣、維摩經不二法門品に出づ。

(ケ)菩薩は梵語、具に菩提薩埵と

雙收新羅を過ぐ。

(マ)維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ(ケ)菩薩の(フ)入不二法門。」文殊師利云く、「我が意の如きんば、一切の法に於て無言無說無示無識、諸の問答を離る、是れを入不二法門と爲す。」維摩に代つて打出す、是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、「我等各自に說き已る、仁者當に說くべし、何等か是れ菩薩の入不二法門。」維摩默然たり。文殊に代つて乃ち喝す。

(コ)不二法門何ぞ再び說かん、(エ)二千三萬一齊に來る、(テ)當年妙吉親しく用ひ去る、(ア)病翁を扶け得て口を開かしむ。

(サ)僧、趙州に問ふ、「初生の孩子還つて

---

云ひ、覺有情と譯す、菩提とは覺智のこと、薩埵とは、衆生のこと、覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名づく、即ち上、菩提を求め、下、衆生を敎化する悲智の二願を具し、自利化他の行を全うする修行者を云ふ。

(フ)入不二法門とは、一に墮せず、二に滯らざる法門を云ふ。

(コ)鵠林評して曰く、「盡大地總に是れ不二法門、此の外更に箇の什麼をか說かん、一毫未發以前既に說き了る。」

(エ)若し強ひて注脚を下さば、佛庵羅樹國に在り、諸の菩薩に命じて疾を問はしむ、是に不二淨名疾を丈方の室に示す、是に不二諸の菩薩辭して德を文殊に推す、是に不二妙吉命に隨つて三萬二千の大衆と與に丈方の室に赴く。

(テ)者裡に到りて片言の演ぶ可き無く隻字の說く可き無し、只だ目を收めて凝坐するのみ、文殊大士、此の極妙究玄の處を用ひ來りて維摩詰に分付す。

(ア)果然維摩詰十成に說き了れり。

(サ)此の緣、碧巖八十則にあり、評に說いて詳かなり。

(キ)六識は、眼、耳、鼻、舌、身、意。

(ユ)古人云く、「譬へば駛流水の如し、水流れて定止無し、各各相知らず、諸法も亦是くの如し」と。

(メ)此の頌、鵠林禪師評して曰く、「國師既に趙州を見徹し、投子を辨得して、親しく此の一偈を打す、甚だ諦當甚だ親切、老僧如何が瞎註脚を下さん、若し人此の話を見る、掌上を見るが如きことを得ば、此の

㋖六識を具するや也た無や。」州云く、「急水上に毬子を打す。」僧復た投子に問ふ、「急水上に毬子を打す、意旨如何。」子云く、「㋒念念不停流。」

㋱六識問ひ來つて識破し難し、趙州老大只麼に問ひ、憐む可し同道實頭の漢、道へ道へ念念不停流。

㋯京兆米和尚、因に老宿有り、問ふ、「月中斷非索、時人喚んで蛇と作す。未審し七師佛を見て、喚んで什麼とか作す。」米云く、「若し佛見有らば即ち衆生に同じ。」宿云く、「千年の桃核。」師、「米和尚に別して驀口に一拳せん。」

㋛斷非索子、月中蛇と爲る、衛氣毒を吐き、踢沫波を馳す、生や佛や齊しく話り難し、多劫

---

頌を見る、掌上を見るが如くならん云々。」

㋯京兆府の米和尚、また七師と謂ふ、法を潙山に嗣ぐ。此の話、傳燈十一師の章に出づ。

㋛鵠林禪師評して曰く「國師此の頌、賓主唱和譎詭の處を見徹して餘蘊無し、塞に貫ぶ可し、所謂斷非索子の一間、塗毒鼓の如く大火聚に似たり、擬議するときは則ち喪身失命せん、所以に言ふ、衛氣毒を吐き、踢沫波を馳す、七師老宿の意會せず、生と説き佛と説くと。所以に齊しく日を同じうして話り難き重病なり。老宿曰く、千年の桃核と、金鎚影動き、寶劍光寒じ、七師曠劫滑遁の窟宅、碎いて微塵と作る、知らず金光天地を照すや也た否や。」

㋒此の話、碧巖八十六則にあり。

㋪鵠林禪師評して曰く「此の頌全篇大師の示衆を述ぶ、情量の及ぶ可きに非ず、知解の挟む可き無し、譬へば十分の秋光の如し、物の比倫に堪へたる無し、我れをして如何が說かしめん、是れ雲淨く星微なるは仲秋滿輪の時に非ずや、此の時、言語道斷、只だ默然として擬坐するのみ。那斯祈は福州の郷談、無分曉の謂ひなり、三門厨庫光明の一語、儞が佛見法見、悟解了知、縱ひ千般の神通妙用を盡すとも終に辨得することを得ず、況んや好事も無きには如かざるの一語、明眼の衲僧も倒退三千、恰も烏雞夜半生鐵を咬むに似たり、縱ひ佛祖も識破すること能はず、再來扶桑の雲門大師に非ずんば、誰か能く頌し得て此に到らん。」

㋲此の話、碧巖第三則にあり。

潛微滅磨に歸す、滅磨せず、紫金光聚山河を照す。

㋽雲門云く、「古人道く、人人盡く光明の在る有り、看る時見えず暗昏昏。作麽生か是れ光明。」代つて云く、「廚庫三門。」又云く、「好事も無きには如かず。」

㋪九天雲淨うして衆星微なり、風興何ぞ一句の詩を餘さん、今夜君と無事にし去る、時人喚んで那斯祈と作す。

三門廚庫是れ光明、見不見の時辨別し難し、好事も無きには如かず、烏鷄半夜生鐵を啄む。

㋲馬大師不安、院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」大師云く、「日面佛月面佛。」

㋝日面佛月面佛、三三兩兩 兩太だ端無し、二

---

㋝鴇林禪師評して曰く、「此の話塞に雖信雖入、此の水邊、彼の林下、三三兩兩、兩兩三三頭を聚め、眉を結んで、千般の智解、百種の神通を運らし去るも其の邊表を窺測するに由し無し、宜なる哉、縱ひ參玄の上士、二三十年千辛萬苦する有るも轉た看れば轉た難し、儞世智辨聰の邪黨叨に陀羅尼の會を作し去り、一喝の會を作し了ることを。」

㋜此の話碧巖七十七則にあり。

㋑鴇林禪師評して曰く、「雲門大師曰く、胡餅儞如何か齒牙を下し得ん、儞纔に擬議思量せば、獼猴の清波に落つるが如し、乍ち喪身失命し去らん、者回黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無しと、古人胡餅の話を頌し得る底、知んぬ幾許ぞ、就中、國師此の頌、古今に獨歩して、最妙最玄最第一なり、儞若し此の頌を見得すること掌上を見るが如くならば、儞に許す胡餅の話を參究することを。更に參ぜよ三十年。」

㋺摩斯吒は名義集二に曰く、或は摩迦吒、或は末迦吒と云ひ、此には獼猴と云ふ。

㋩此の緣、會元に百丈惟政禪師を涅槃和尚と作す。鴇林評して曰く、「古の禪門盛んなりし日、南嶽、馬祖、百丈、黄檗、臨濟、興化、南院、風穴の諸老、每日鼓を鳴らして普請し、搬石、搬土、水汲、菜疏、一日作さゞれば一日食はず、艱辛刻苦の上に於て、各の動中の得力を求む、千態萬狀、盡く是れ宗師爲人の手脚、學人著力の樞要なり、若し兩手を展開する處に向つて、大義を見んと要せば甚だ遲了なり、遠うして遠うし云々。」

十年來苦辛の客、精微を照絶して見ること大いに難し。

(ヌ)僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」門云く、「胡餅。」

(イ)觀面胡餅口を下し難し、(ロ)摩斯吒徒に瀾中に入る、者回黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無し。

(ハ)百丈惟政禪師、一日衆に謂つて云く、「汝我が爲に田を開け、我れ汝が爲に大義を説かん。」僧衆、田を開く、竟に和尙の大義を説かんことを請ふ。百丈便ち兩手を展開す。

(ニ)閃電激し怒雷馳す、眼裏耳裏箇の覰機、昨夜(ホ)三山三跳の後、北辰鬼谷擬議を作す、擬議を作す、七佛の祖師曾て知らず。

(ヘ)平田普岸禪師、因に僧有り、到參す、平田打つこと一拄杖す。其の僧近前して拄杖を把住す。平田云く、「老僧適來造次なり。」僧却つて平田を打つこと一拄杖す。平田云く、「作家作家。」僧禮拜す。平田把住して云く、「是れ闍梨造次なり。」僧大笑す、平田云く、「這箇の師僧、今日大いに敗せり。」

---

(ニ)鵠林禪師評して曰く、「此の頌全篇、百丈兩手を展開する處を賦す、情識の窟宅を碎き、智解の窠臼を破る、怒雷の石壁を劈くが如く、金翅の鯨波を搏つに似たり、天關を廻し地軸を轉ず、天に南斗北辰有り、各の其の位に在り移動せざること車軸の如く、衆星運轉車輪の循環するが如し、夫れ天文を諳じ地理に通ずるとは鬼谷子に越えたるは無し、今夜百丈大用の示衆に依つて乾坤色を失ひ、日月光を吞む、南斗北辰盡く位を失し處を換ふ、大小大の鬼谷、星斗の所在に迷ふ、豈に鬼谷のみならんや、縱ひ文殊大士も他の落處を知らず。」

(ホ)三山は、一に蓬萊、二に方壺、三に瀛州。跳は「をどる」と訓ず。

(ヘ)平田普岸禪師は、法を百丈海

(ト)一向一背親しみ易からず、互換の韜略鼓旗別なり、(チ)干將の劍未だ甲鍪を斷らず、(リ)夏服が箭何ぞ七札を穿たん、鬼哭し神悲しむ、崖崩れ石裂けて還た顚蹶、師僧今日大いに敗缺。

(ヌ)大慈山寰中禪師住庵の時、南泉至り問ふ、「如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「(ル)蒼天蒼天。」泉云く、「蒼天は且く置く、如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「會せば即便ち會せよ、忉忉なること莫れ。」南泉拂袖して出づ。

(ヲ)庵中の主見ること還つて難し、(ワ)句裏身を藏して太だ端無し、(カ)偸眼暫時休すや也た未だしや、(ヨ)夜深うして誰と共にか關山を過ぎん。

(タ)僧、藥山に問ふ、「平田の淺草麈鹿群を成す、如何なるか麈中の麈を射得せ

---

禪師に嗣ぐ。此の緣、聯燈七に載す。

(ト)鵠林禪師評して曰く「此の頌始終賓主相見の間、互換の機有ることを賦す、兩箇機鋒俊利、干將の劍よりも快く、夏服が箭よりも疾し、就中、國師甚だ平田末後、者箇の師僧今日敗缺と道ふを愛す、所以に道ふ、崖崩れ石裂けて還た顚蹶、師僧今日大に敗缺と。」

(チ)干將は劍の名なり、甲は甲冑なり、鍪は首鎧なり。

(リ)文選子虛賦に曰く「夏服の勁箭を右にす」とあり、札は甲葉なり、一葉を一札と云ふ。

(ヌ)大慈山寰中禪師は法を百丈海禪師に嗣ぐ。傳燈七に之れを載す。

(ル)蒼天は悲み嘆く時に發する語にして「あーあー」と云ふ程の意なり。

(ヲ)鵠林禪師、評して曰く「庵中賓主相見の端的、鬼神も測ること能はず、魔外も辨ずることを得ず。」

(ワ)又曰く「句裏に身を藏す底の身、聲聞身なりや、菩薩身なりや、長者身なりや、居士身なりや、儞若し辨別して分明なることを得ば、儞に許す參學の眼を具することを。」

(カ)偸眼は、ちらつと盜み見るなり。鵠林評に曰く「此の句言ふこゝろは、寰中云く、蒼天蒼天、此の話、漢に透り泉に徹す、南泉豈に佗の落處を知らざらんや、故らに此の不聽明を露はして即ち言ふ、蒼天は且く置く、如何なるか是れ庵中の主と、此れ但だ寰中を見點さんと欲するのみ、甚だ賊機有り。」

(ヨ)又曰く「路重疊終日行いて曾て人を見ず、狻虎朝に道內に伸び、魍魎盡虛谷に叫ぶ、南

ん。」山云く、「箭を看よ。」僧、身を放つて便ち倒る、山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ。」僧便ち走る、山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。」雪竇拈じて云く、「三歩には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。」

㋹塵中の塵走り得ること三歩、五歩未だ虎兒を趁ふに堪へず、獵人徒に坤維を覓むること莫れ。

㋞慧忠國師、紫璘供奉と論議し、既に座に升る。供奉云く、「請ふ、師立義せよ、某甲破らん。」忠云く、「立義し竟んぬ。」供奉云く、「是れ什麼の義ぞ。」忠云く、「果然として見ず、公の境界に非ず」といつて便ち下座。

---

泉拂袖して出で去る、方寸の喩峻關山の夜途に過ぎたり、塞に恐る可し。」

㋟澧州藥山の惟儼禪師は法を石頭希遷に嗣ぐ。此の話碧巖八十一則にあり。

㋹塵は鹿の大なる者なり、群鹿之れに隨ひ、皆塵の往く所、塵尾の轉ずる所を視て準と爲す、是れ塵中の王なり。鵠林禪師評して曰く、「是れ死蛇と雖も弄することを解すれば又活く、此の頌甚だ者の僧を扶起するものに似たり、塵中の塵走り得ること三歩、走り得るは寔に好し、五歩豈に虎兒を趁ふことを用ひんや、若し是れ唱和相應じ、全く勝敗無く、全く等差無き底、作麼生か虎兒を趁ふて、何れの處にか蹤跡を留めん、心を擧して向はんと擬すれば、兎角龜毛別山を過ぐ、所以に言ふ、獵人徒に坤維に覓むること莫れと。」

㋞南陽慧忠國師、法を六祖大師に嗣ぐ。傳燈三師の章に之れを載す

㋡鵠林禪師評して曰く、「忠國師既に大智無智の正位に向つて大義を立つ、供養道つて情量意解の小智を逞して、以て大義を破らんと欲するに似たり、恰も蚊虻空裡の猛風を拄へんと欲す、自ら其の量を知らざる者に非ずや、胸海の學解、波浪天を浸して沸蕩して、覺えず自ら頭出頭沒す、國師は大鵬九萬里の羽翮を展開して、長空を蓋ふが如く、供奉は燕雀の籬邊に在りて空しく啾啾たるに似たり。」

㋧啾は小聲なり。

㋤洞山守初禪師、法を雲門の三頓棒下に嗣ぐ。此の話、碧巖十二則にあり。

ツ祖風迥に振つて機輪轉ず、學海瀾忙しうして自ら頭を沒す、大鵬一擧す九萬里、籬邊の燕雀空しく ネ啾啾たり。

ナ僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

木落ちて岩崗鋒骨冷じ、月斜にして禪石曉開け難し、寒雲伴ひ來つて閑不徹、飛瀑從他あれ忽雷を起すことを。

ラ六祖云く、「不思善不思惡、正當恁麼の時、明上座、本來の面目を還し來れ。」

ム五歩は款行三歩は疾し、莫敎あれ正眼頂門に開くことを、悠悠として見ず庾嶺の路、脚後脚前歸去來。

ウ霍山和尙、祕魔岩和尙凡そ僧有り、到つて

---

ラ此の緣、六祖壇經に見ゆ、盧行者既に黃梅の衣鉢を得、夜半江を渉り嶺を越えて、將に嶺南に往かんとす、是に於て黃梅七百の高僧、潮の如く湧き蜂の如く起つて、追つて他の衣鉢を奪はんと欲す、中に明上座なる者有り、もと將軍にして甚だ勇壯なり、衆に先つて走り、上る者半日程、遂に盧行者を見る、行者既に事の急なるを見て、衣鉢を石上に拋つて曰く、「此の衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや」と云つて草莽の中に隱る、明提げ掇るに動かず、乃ち喚んで曰く、「行者、我れ法の爲に來る、衣の爲に來るにあらず。」行者遂に出でて盤石の上に坐す、明卽ち作禮す、盧曰く、「不思善不思惡云々。」

ム此の頌鵠林禪師評して曰く、「惠能曰く、不思善不思惡、正與麼の時、如何なるか是れ明上座本來の面目と、是れ前箭は猶ほ輕く、五歩款行に似たる者なり、自己に返照して看よ、密は還つて汝が邊に在らんと、是れ後箭は猶ほ深し、三歩疾に似たり、是に於て明上座、正眼頂門開く、開いて這の什麼をか看る、豈に庾嶺の路にあらずや、上、諸佛を見ず、下、衆生を見ず、生死涅槃を見ず、煩惱菩提を見ず、此に到りて前佛後佛、先聖後聖、全く一歩を進むことを得ず、總に是れ禹門點額の魚、所以に言ふ、歸去來と。」

ウ霍山景通禪師、法を潙山祐禪師に嗣ぐ、祕魔岩和尙、法を永泰禪師に嗣ぐ。傳燈十一に此の緣を載す。

ヰ此の頌、鵠林禪師評して曰く、「霍山多年參究、得力の處を以て、一提に提起し來つて

禮拜すれば、木叉を以て叉著すといふことを聞いて、霍山一日遂に往いて之を訪ふ。才に見て禮拜せず、直に祕魔懷裏に入る。祕魔霍山の背を拊つこと三下す、霍山起つて手を拍つて云く、「此の老一千里の地、我れを賺し來る」といつて便ち回る。

(ヰ)當機提げ覿面挾し、取次用ひ來る若爲の宗ぞ、箇箇一千應に走卻すべし、草鞋跟斷えて清風起る。

(ノ)梁の武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨云く、「不識。」

(オ)廓然不識幾人か有る、古路横行嶺烟を鎖す、

---

遁拶す、秘寃從前、精錬透關の眼有りて、一見に見殺して排撥す、賓主各の擬議に渉らず、情量を添へず、險なることは伎女の竿を走るが如く、活なることは、市兒の丸を弄するに似たり、縱ひ明眼の衲僧も他の落處を辨ずること能はず、什麼に依つてか斯くの如く幽邃なる、古人撥草瞻風、嶮峻を數千里の外に跋涉し、風霜二十年の間に困苦す、許多の草鞋を踏斷して、始めて此の田地に到る云云。」

(ノ)此の様、碧巖一則にあり、評に說いて詳かなり。

(オ)此の頌、言ふこゝろは、廓然不識の話、四海を一掃して、落處を知らず。譬へば深山岩崖、寒煙古路を埋め、斜霧洞口を鎖す底の人跡不到の處に於て、一人有り、經行坐臥せんに、人更に知ること能はざるが如し、宜なるかな、神光大師、此の向上の秘訣を遜過せんが爲に、審參苦吟、遂に少林深雪に立つに到りて、左臂を截斷して初めて知踪を別つ。

(ク)風穴延昭禪師、法を南院顒禪師に嗣ぐ。此の垂語、廣燈十五に載す。

(ヤ)鷓林禪師評して曰く、「爾看よ、此の頌甚だ天眞甚だ絶妙なることを、風穴の全身を摸寫し來りて、爾諸人の面前に推し出す、還つて相見の分有りや、試みに言へ、嗔拳謳歌、甚麼に依つてか一塵に在る、誰れ人を指してか同生同死底の衲僧と爲ん、就中、轉結兩句甚だ絶妙甚だ窮玄なり、風穴の垂語と並立して最後兩重の關鎖と爲す、兩鏡並照して中心影像無きに似たり云云。」

(マ)玉篇に、嚬蹙は憂愁樂まざる

此れより少林深雪の裏、斷臂刀下に踈親を別つ。

㋠風穴、垂語して云く、「若し一塵を立せば家國興盛し、野老嚬蹙す。若し一塵を立せざれば家國喪亡し、野老謳歌す。」雪竇拄杖を拈じて云く、「還つて同生同死底の衲僧有りや。」

㋳嚬㋵蹙謳㋘歌一塵に在り、同生同死何人にか憑る、紅霞碧靄高低を籠む、芳草野花一樣の春。

㋻南嶽懷讓、一僧をして㋙馬祖の處に到り去らしめて云く、「但だ作麽生と問へ、伊が道ふ底、言語を記し將ち來れ。」僧去つて一に懷讓の旨の如くし、回つて懷讓に謂つて云く、「馬祖云く、胡亂より後三十年、曾て鹽醬を闕かず。」讓之を然りとす。

㋓朝三千暮八百、箇箇㋢一著を放過す、生鐵土壤に和するが如し、大冶も拈却を解く可し。

## 頌古 終

㋵これを誦するを歌と謂ひ、齊しく歌ふを謳と謂ふ。
㋻南嶽懷讓禪師は、法を曹溪六祖惠能大鑒禪師に嗣ぐ。
㋙馬祖は法を南嶽懷讓に嗣ぐ。
㋓此の頌、鵠林禪師評して曰く、「朝三千暮八百、此の兩句恰も馬祖大師一隔の拼眞を見るが如し、面目現在却つて寒毛卓竪することを覺ゆや、馬大師の一語と、又是れ白璧一雙、生鐵土壤に和するが如し、大冶も須らく拈却すべし云々。」
㋢一著を放過すは、「一と手をゆるす」と譯す。

## (イ)拈古

(ロ)擧す、臨濟上堂云く、「一人は孤峯頂上に在つて出身の路無く、一人は十字街頭に在つて亦向背無し。那箇か前に在り那箇か後に在る。維摩詰と作さゞれ、傅大士と作さゞれ。珍重。」(ハ)師云く、「將に謂へり、龍頭蛇尾と、元來只だ是れ蛇尾龍頭。然も是の如くなりと雖も、深く指示を領ず。」

(ニ)擧す、欽山、岩頭・雪峰と同じく德山に到る、乃ち問ふ、「(ホ)天皇も也た恁麼に道ふ、(ヘ)龍潭も也た恁麼に道ふ、未審し德山作麼生か道はん。」德山云く、「汝試みに天皇、龍潭底を擧せよ看ん。」欽山擬議す、德山便ち打つ。欽山、(ト)延壽堂に歸つて云く、「是なることは則ち是、我れを打つこと太煞だし。」岩頭云く、「儞與麼ならば、他後德山に見ゆと道ふこと莫れ。」(チ)師云く、「(リ)可惜許。」

(ヌ)擧す、雲門上堂云く、「人に遇ふときは卽ち(ル)鼻孔遼天。」(ヲ)師云く、「笑ふに堪へたり這の老漢、(ワ)赤脚にして刀山に上り、毛を拔して火聚に入る

---

(イ)拈古は、古則則ち古德が大法を商量問答せられたる機緣を拈評するの義。

(ロ)此の上堂、臨齊錄並に傳燈十二、師の章に之れを載す。

(ハ)以下、國師拈古の語なり。

(ニ)此の緣、聯燈二十二に載す。

(ホ)會元七に云く「荊州天皇道悟禪師は、婺州張氏の子、法を石頭遷に嗣ぐ。」

(ヘ)龍潭崇信禪師は、其の家、餠を賣るを以て業とす、當時道悟天皇寺に住す、師の家寺の側にあるを以て、常に寺に行きて、道悟に餠を贈れり、遂に道悟に依つて出家し玄旨を悟る、後、澧陽龍潭に詣つて庵を結んで居る。

こゝを。其れ笑を解する底も也た少なることを爭奈せん。」

㋕擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ透法身の句。」門云く、「北斗裏に身を藏す。」㋵師云く、「衆生若し法身に非ずんば、卽ち衆生に非ず、法身若し衆生に非ずんば、亦法身に非ず、透の一字誰に因つてか致し得ん。直饒ひ是れ北斗裏に身を藏すも、謂つ可し首羅の三目、伊字に似たりと。」

㋟擧す、雪竇、衆に示して云く、「譬へば二龍珠を爭ふが若し、爪牙有るものは得ず。或は衲僧有り、既に是れ爪牙有るものは什麼としてか得ざると問はゞ、請ふ大衆、雪竇が爲に一轉語を下せ。」㋹師云く、「其れ貧しうして儉を學ばず、富んで奢を學ばず、此れは是れ俗漢の陋韻、卻つて言を知れりと謂つ可し。且く諸人に問ふ、二龍の爪牙、雪竇の爪牙と孰與れ。他既に珠を爭うて之を得ず、這の老、箇の什麼を爭うてか得ざる。請ふ各〻一點語を下せ。」

㋞擧す、趙州、投子に問ふ、「大死底の人、卻つて活する時如何。」投子云く、「夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。」㋡師云く、「趙州は歩を移して身を移さず。投子は身を移して歩を移さず。然も虛を孑　響を接すと雖も、爭奈せん他後擧し得る者少なることを。」

---

㋣延壽堂は病僧寮なり。
㋠以下國師の拈古なり。
㋷可惜許の許字、語助なり。
㋦此の上堂、會元師の傳に載せす、本錄にこれを出す。
㋸遼は掠なり「かすめる」と訓す、氣宇王の如く、衝天の勢あるを云ふ、又自負高慢の意にも用ふ。
㋾以下は國師の拈語。
㋻赤脚は「すあし」なり。
㋕此の問答、傳燈十九にこれを載す。
㋵以下、國師の拈語。
㋟此の示衆、師の本錄に載す。
㋹以下、國師の拈語。
㋞此の話、傳燈十五投子章に載す。
㋡以下、國師の拈語。

㋧擧す、臨濟、侍者をして德山に傳語せしむ、侍者云く、「德山人を打することを要す。」濟云く、「汝但だ去れ、伊が棒を拈ずるを待つて接住して、一送を與へば、汝を打せざることを管取せん。」侍者敎ふる所に依る、果然として打せず。歸つて臨濟に擧似す、濟云く、「我れ從來、者の漢を疑著す。」㋤師云く、「蓋し是れ作者の動止、鬼神も測り難し。一人は海枯れて終に底を見る處に向つて、千聖の頂顙に坐斷し、一人は人死して心を知らざる處に向つて、衲子の眼睛を瞎却す。咦、貴ぶ可し賤む可し。」

㋶擧す、雪竇一日、僧に問ふ、「汝浴すや未だしや。」僧云く、「某甲此の生浴せず。」竇云く、「爾浴せず、箇の什麼をか圖る。」僧云く、「今日和尚に勘破せらる。」竇云く、「賊は貧兒の家を打せず。」㋰師拈じて云く、「雪竇老漢、才文武を兼ね、出でては將、入つては相、今日一口の鉛刀子を拈出せられて、高く降旗を竪つるに遭ふ。諸人雪竇を識らんと要すや。一種是の聲限り無き意、聽くに堪へたる有り、聽くに堪へざる有り。」

㋒擧す、風穴因に僧問ふ、「如何なるか是れ淸涼山中の主。」穴云く、「一句無著の問に違あらず、今に至るまで猶ほ野盤の僧と作る。」㋼師云く、「古人恁麼に答ふ、淸涼の主を褒するか淸涼の主を貶するか。若し是れ褒すと道はゞ、什麼に因つてか無著の問に違あらざるの句有る、若し也た貶すと道はゞ、他箇の什麼の過か有る。褒せず貶せずと道はゞ、風穴何ぞ必ずしも恁麼の語話有る。端無く觸著すれ

㋧此の緣、臨濟錄勘辨に見ゆ。
㋤以下、國師の拈語、
㋶此の話、雪竇錄にあり。
㋰以下、國師の拈語。
㋒此の話、廣燈錄十五にあり。
㋼以下、國師の拈語。

ば獅子哮吼す。」

(ノ)擧す、(オ)臺山路上、一婆子有つて接待す。凡そ僧有つて、臺山の路甚麽より去ると問へば、婆云く、「驀直に去れ」と。僧才かに去れば、婆云く、「好箇の師僧、又與麽にし去る。」是の如くなること既に久し。游僧傳へて趙州に到る、州聞き得て云く、「待て、我れ去つて他を勘破せん。」遂に去つて臺山の路を問ふ、婆例に隨つて云く、「驀直に去れ。」州才かに行く、婆又云く、「好箇の師僧、又與麽にし去る」と。州回つて云く、「我れ婆子を勘破し了れり。」師云く、「盡く謂ふ、日下に孤燈を挑ぐと、殊に知らず失錢遭罪なることを。」

(ク)擧す、臨濟上堂云く、「一人有り、劫を論じて途中に在つて家舍を離れず、一人有り、家舍を離れて途中に在らず、那箇か人天の供養を受くべき」といつて便ち下座。(ヤ)師云く、「這の老漢、威容嚴肅、衲子到る者其の擧措を失はず。大家寢默俛仰、日を過ぎて道を見ず。衆人の唯唯は、一士の諤諤に如かず。若し是れ人天の供養ならば、一人を擇び取らんことを要す。」

(ノ)此の話、聯燈錄六、趙州章にあり。

(オ)五臺山、世傳へて北方文殊師利所居の地と云ふ、淸涼山即ち是れなり。

(ク)此の話、臨濟錄にあり。

(ヤ)以下、國師の拈語。

拈古 終

# (イ)大燈國師行狀

(ロ)大應國師、臨濟の宗旨を(ハ)横嶽・萬壽・建長に唱ふると幾乎ど四十年、其の間、(ニ)摳衣者幾何といふことを知らず、師は其の一なり。師諱は妙超、宗峰は其の號なり。播州に生る、揖西縣紀氏の子なり。父母本州書寫山如意輪觀音に禱り、母夢みらく、一僧手に白花の五葉を開くを携へて之に與ふ、妊むこと有り。妊んで後寐ぬるが如くにして寤めず、其の誕の時に至つて熟睡して知らざるなり。保母俄に(ホ)呱地一聲を聞き、往いて之を見る。未だ(ヘ)澡浴せずして肌體瑩潔、(ト)克く岐に克く嶷に、頂骨聳立、(チ)伏犀額を挿み、目光人を射る　面前の人に隨つて能く顔目を轉す。五歳の時、人の刀を(リ)硎に發するを見て云く、「何の爲にして作すや。」云く、「貴ぶらくは快利を圖る。」云く、「不快利の處、快利有り、爾還つて知るや。」其の人測ること罔し、師呵呵として大笑す。事に觸れ言を以て人を(ヌ)折挫す、若し比親族諫めて之を住めしめんと欲する者有れば、棒を拈じて便ち打つ、郷

(イ)行狀は身の行ひ振りと云ふこと、國師一生の言行、履歴を記したる文書なり。
(ロ)大應國師の傳、最初大德開堂法語の下に註す。
(ハ)筑前横嶽山萬年崇福禪寺、京都の九重山萬壽禪寺、鎌倉巨福山建長禪寺なり、大應錄にその法語あり。
(ニ)摳衣者は、侍衣侍者と云ふに同じ、摳は「かゝぐ」と訓す。
(ホ)呱地は小兒の啼く聲。
(ヘ)澡浴は產湯なり。
(ト)嶷本嶷に作る、小兒の知有るを云ふ、詩の大雅に「克く岐に克く嶷に」とあり、箋に「岐は識なり、其の貌嶷々然とし

黨稱して神童と爲す。十有一歲、師書寫山戒信律師に事ふ、毎に靜處に屏坐して、志俗塵を厭ふ、經書日を過ぐれば誦を成す。一日慨然として云く、「假使ひ(ル)九流三藏、百家異道の書を究むるも、爭か若かん(ヲ)不立文字直指單傳の宗に入らんには。」未だ剃染せずして、發足して(ワ)京城並に相州に至り、諸尊宿に參問す。尊宿氣佛祖を呑む底と雖も、敢て其の鋒に嬰らず。建長長老に謁し、問うて曰く、「路に死蛇に逢うて打殺すること莫れ、(カ)無底の籃子に盛り將ち歸る、意旨如何。」老曰く、「(ヨ)放下着、者般底直下に便ち看取せよ。」師云く、「只だ直下に便ち看取せよと道ふが如きんば如何。」老擬議す、師乃ち喝す。萬壽に造つて佛國禪師に問うて曰く、「佛法多子無し、着衣喫飯の處卽ち是れ。纔に(タ)恁麼の理會を作さば、早く是れ不是にし了れり。」國云く、「未だ恁麼の事を知らず、以前と而今と如何が區別せん。」師云く、「區は則ち區、別は則ち別ならず。」國云く、「試みに區別せよ看ん。」師、(レ)露柱を指して云く、「者箇を喚んで露柱と作さば、則ち昔時と逈に區なり、者箇を喚んで露柱と作さゞれば、則ち而今已に別なり。」國云く、「豈に是れ佛法にあらざらんや。」師云く、「和尚、好箇の時節。」國云く、

---

て能く知り能くうがつ所あるなり」と。

(チ)圓機活法に「三犀は角、一は鼻にあり、一は額にあり、角に粟文有り」とあれば、蓋し、伏は伏在の義にして、額の眞中に「ほくろ」のありしを云ふならんか。

(リ)砥石にて研ぐを云ふ。

(ヌ)折挫は「やりこめる」こと。

(ル)九流百家は、諸子百家と云ふが如し。三藏は經、律、論なり、一切藏經と云ふに同じ。

(ヲ)達磨の宗旨なり。

(ワ)京城は京都、相州は鎌倉。

(カ)底の無きかご。

(ヨ)放下着の着は助字にして、手を放して下に置くの意なり。

(タ)恁麼はかくの如きと云ふに同じ。

(レ)露柱は大黑柱と云ふに同じ。

(ソ)毘盧遮那佛の頂きと云ふこと。毘盧遮那は梵語、譯して

「只だ與麼の受用、老僧と別なり。」師云く、「若し和尙、某甲有りと見ば、佗日悔い去らん。」國云く、「平生日用の處、直下に道ひ來れ看ん。」師云く、「歩歩踏着す ㋨毘盧頂、言言勘破す ㋨維摩詰。」次の日、又來り問うて云く、「昨日と今日と、請ふ師辨別せよ。」國師云く、「什麼の昨日とか說かん、直に今日の事を道へ。」師云く、「雲は龍に從ひ風は虎に從ふ。」國云く、「雲未だ起らず、風未だ來らざる時如何。」師云く、「天上天下唯我獨尊。」國云く、「雲門云く、『我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん』と、如何。」師曰く、「㋧一口に吞却了也。」國、横に點頭して曰く、「此の語敢て肯はず。」師乃ち喝す、國亦喝す、師又喝して出で去る。國從つて門を出でゝ曰く、「我れ多少の學者を見るに、未だ嘗て公の如き ㋤俊底に逢はず、宜しく ㋶祝髮披衣して吾が道に棟梁たるべし。」師、翌日重ねて佛國に參ず、國來るを見て曰く、「古人云く、大用現前、軌則を存せざる時如何。」師曰く、「和尙未問以前、已に現前すること久し。」國云く、「甚麼の處にか在る。」師曰く、「夜來狂風吹く、門前一枝の松を折る。」師、手中の扇子を搖かす、國休し去る。師云く、「狂風豈に是れ扇子にあらざらんや。」國、大笑して云く、「纔に相似を見て却つて也た ㋰蹉過す。」師此に於て ㋨服膺す。自ら歎じて曰く、「人身得難く、佛法遇ひ難し、賤に遇うては則ち貴し、豈に丈夫の志ならん」

光明徧照、或は徧一切處、大日徧照とも云ふ。
㋨維摩居士なり。
㋧一口に吞んでしまつたと云ふこと。
㋤俊底は俊發の漢と云ふこと。
㋶祝髮は剃髮するを云ふ。
㋰蹉過は踏みすべるなり。
㋨服は著くるなり、膺は胸なり、これを心胸の間に著けて能く守るなり。中庸に「拳々服膺して、之れを失はず」とあり。

と。遂に㋼落髪受具、旦夕心を此の事に留む。一夕、僧堂に坐す、僧の壁を隔てゝ百丈の語を誦するを聞くに、云く、「靈光獨り耀いて迥に根塵を絶す。體露眞常、文字に拘らず」と、驀然として省有り。夜半門を扣いて其の見解を呈す。國云く、「既に是れ眞正の見解なり、宜しく法幢を建て宗旨を立すべし。」厥の後、大應國師、詔に應じて横岳より京師に來り、韜光庵に館す。師、相州に在つて其の手段辛辣なるを聞いて、京に趨つて徑に其の室に詣す。問うて云く、「學人遠遠、化下に來る、請ふ師一接せよ。」師云く、「老來力無し、㋨且坐喫茶。」師云く、「恁麼に用ひ去らば、只だ恐らくは肯はじ。」國師云く、「儞は是れ㋔新到、爭か這裏の事を知らん。」師云く、「㋗千里同風、豈に是れ君子ならずや。」國師云く、「室中の物色、儞試みに指出せよ看ん。」師云く、「七九六十三。」國師云く、「㋳無慚愧の漢、來處も也た知らず。」師云く、「謹んで老師の學人を以て、梵天に托上するを謝す。」國師云く、「今日㋮自領出去、明日の事、儞作麼生。」師云く、「天際日上り月下る、檻前山深ければ水寒し。」師云く、「一死再活せず。」師便ち休す。國師便ち問ふ、「五祖の演、佛眼に示して云く、『牛、窓櫺を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚に因つて出づることを得ざる。』儞試みに一轉語を下して看よ。」師云く、「曲心已に露はる。」國師云く、「如何なるか是れ曲心。」師云く、「天を拄へ地を拄ふ。」國

㋼時年二十有三なり。
㋨且坐喫茶は、「まあまあ、すわつて、お茶でもあがれ」と云ふこと。
㋔新到は新參者と云ふに同じ。
㋗君子は千里同風の古語より來ろ。
㋳無慚愧の漢は、愧知らず奴と云ふこと。
㋮自領出去は、「自己の罪は自己が背負ふて出で去れ」と云ふこと。

師大笑して云く、「與麼に空しく過さば、他日悔有らん。」三日の後、師、下語して曰く、「(ク)杓卜虚聲を聽く。」國師云く、「方に相似を得たり。」爾れより晝參暮請、敢て退轉せず。國師時に疾に臥し、旬を經たり、方丈の戸を閉ぢ、學者の參問を止む、唯だ師のみ參請を許さる。國師云く、「儞は是れ天然の(ヤ)衲子なり、是れ一兩生、參學の士にあらず。」國師詔を承けて、京城の萬壽に住す、師之に從ひ、(コ)巾瓶に侍す。國師示すに、「(エ)翠岩眉毛在りや。」雲門云く、「關」の語を以てす。師、下語して云く、「錯を將つて錯に就く。」國師曰く、「是なることは則ち是なり、儞能く關の字に於て精彩を着けよ、他時、別に須らく生涯有るべし。」(テ)德治丁未、國師、相州に赴き、建長に住す。師乃ち參隨彼に至り、未だ十日を經ざるに、案上鎖子を放在するに因つて、忽然として關字を打透す。圓融無際、眞實諦當、大法現前の處に到り了る、汗流背に浹る。急に方丈に趨り、下語して曰く、「幾乎ど同路。」國師大いに愕いて云く、「夜來夢に雲門、吾が室に入ると見る、儞今日關字を透る、儞は是れ雲門の再來なり。」師、耳を掩ふて出づ。翌日二偈を呈して云く、「一回雲關を透過し了つて、南北東西活路通ず、夕處朝遊賓主沒し、脚頭脚底淸風を起す。雲關を透過して舊路無し、青天白日是れ家山、(ア)機輪通變人到り難し、(サ)金色の頭陀手を拱して還る。」

---

(ク)祖庭事苑に、「風俗に杓を拋つて吉凶をトす、これを杓卜と謂ふ」とあり。又鬼谷子には、「手鍋水を撥き、杓を水上に置け、自ら旋つて杓の指す所に隨ふ、以て一歳の吉凶をトす」とあり。

(ヤ)衲子は禪僧と云ふに同じ。

(コ)巾は手巾、瓶は水瓶なり、師の側に侍し、手巾、水瓶を捧げて事ふるを云ふ。

(エ)翠岩夏末の因緣、碧岩錄八則にあり。

(テ)德治は後二條天皇の年號、丁未は德治二年なり。

妙超が胸懷是の如し、若し師の意に㋖孤負せずんば、伏して望むらくは一言を賜へ、近ごろ故都に歸らんと擬す、尊意を惜むこと莫くんば以て大幸と爲すのみ。」國師筆を援つて自ら其の後に書して云く、「爾既に㋴明投暗合、吾れ爾に如かず、吾が宗爾に到つて大いに立し去らん。只だ是れ二十年長養して、人をして此の證明を知らしむ矣、妙超禪人の爲に書す。巨福山南浦紹明、㋱延慶戊申臘月。」國師滅を示す、㋯心喪既に畢る。京に歸つて居を㋛洛水の東に卜す、衲子纔に六七輩、刻苦自厲す、寒飢を忘るゝに至る。㋾一夕夢に六人の僧有り、狀羅漢の若し、第一位に居る僧の云く、「出世の時至れり、何ぞ出でざるや。」師云く、「仁義は盡く貧處より斷ゆ。」僧卽ち頷ひて竹針を以て腦後を㋪挑破して云く、「爾が爲に貧肉を抉り出す。」覺めて後、頭腦尙ほ痛む。幾ならずして雲居を去り、㋲城北の紫野に徙居す。佛殿を立てず、唯だ㋝法堂を樹つ。㋜洗心子玄惠法印、儒者九人と偕に朝に奏して、禪宗を破らんと欲す。「禪宗若し奇特の事有らば、吾が儕豈に敢てせんや、」諸儒㋑徵詰。」諸方の禪將、意に當る者有ること無し。諸儒、師の名を聞いて特に來り問うて云く、「禪宗の手段如何。」師云く、「㋺虛僞を

---

㋐機は「からくり、」輪は運轉の義、故に働きを云ふ。
㋚金色の頭陀は、摩訶迦葉を云ふ。拱は玉篇に「兩手大指相拄ふなり」とあれば、叉手するなり。
㋖集韻に孤は負なりと。負は「そむくと」訓す。
㋴明暗雙雙底の境界に至るを云ふ。
㋱延慶戊申は花園天皇卽位の元年なり、臘月は十二月なり。
㋯心喪は喪期已に滿ちて喪服を脫するも、尙ほ心中に喪をなすを云ふ。
㋛東山雲居庵に栖止すること殆んど十年。
㋾此の時、文保二年の冬なり。
㋪挑は撥なり、撥は「のぞく」と訓す。
㋲後醍醐天皇元應元年の春、本州赤松圓心、黃金若干を寄贈

以て眞實を示す。」儒云く、「聖人虚言有りや否や。」師云く、「有り。」云く、「既に是れ聖人、甚の虚言か有らん。」師云く、「見ずや、㋩孟子に之れ有り、象已に舜を殺すと謂ひ了つて宮に入る。舜の床に在つて琴ひくを見る、舜、象の來るを見て喜ぶ、豈に是れ虚僞にあらずや。」其の間、㋥激揚鏗鏘、問答罷んで、儒却つて師に問うて云く、「畢竟如何が此の義を決斷し去らん。」師云く、「舜却つて象を殺し了れり。」諸儒皆㋭稽顙して弟子の禮を執る。就中洗心子、入室參禪、造詣淺からず、崇信の至りに勝へず、第宅を施して大德方丈と作す、今の雲門庵是れなり。師、氣宇王の如し、人の㋬近傍すること少なり。數年檀越外護爲る者あること罕なり。一旦㋣萩原法皇、其の風を聞いて召して入內せしむ。上、中使を遣し、師に告げて道服を披して一重の坐席を除き、談話せんと欲す。師、再三袈裟を着けて對坐せんと乞ふ、一一之を許す。帝、勅して云く、「佛法不思議、王法と對坐。」師奏して云く、「王法不思議、佛法と對坐。」上、龍顏を動す。一日、上、勅問して云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ。」師、手中の扇子を搖して云く、「皇風永く扇ぐ。」一日面り勅有り、云く、「朕、大德寺を以て朝廷第一の祈禱處と

---

し、因つて一小院を紫野に造る、師こゝに移居す。

㋠法堂は說法堂の義、大法を闡揚し、宗旨を演說する等、一切の法式を行ふ處を云ふ。

㋷洗心子は、一人一首に云く、「玄惠は儒家にして台宗に歸す、而後還俗、然も髮無うして身を終る、博識を以て世に聞ゆ、法印の位に叙す、作る所太平記、庭訓往來等今尙ほ存す、玄惠自ら洗心子と號し、又健叟と號す、軒號を獨清と曰ふ。」

㋑徴詰は「なじり問ふ」なり。

㋺虚僞は方便なり。

㋩孟子卷の九、萬章上に出づ、象は舜の異腹の弟にして、父母と計り、舜を殺さんとす、或る時井を浚はしむ、舜之れを察し、井の中より拔け路を作る、父の瞽瞍と象とは之を知らず、上より土を拚ひ埋

爲し去らんと欲す。」師、命を受けて云く、「唯唯。」後醍醐天皇卽位、前の勅する所の如く禮敬彌敦く、寵恩益渥し。帝、弟子僧を召して入內せしめ、帝、問うて云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麽人ぞ。」僧起つて(チ)鞠躬す。僧却つて奏して云く、「萬法と侶爲らざる者、什麽人ぞ。」上、手中の珪を以て劃一劃して云く、「(リ)這箇。聻。」師、法語を上つて云く、「億劫相離れて相離れず、盡日相對して相對せず。不審是れ什麽物ぞ、請ふ(ヌ)綸言を聽かん。」帝、御筆紙尾に書して云く、「昨夜(ル)三更露柱、和尙に向つて道ひ了れり。」上、投機の頌を書して師に賜うて云く、「二十年來辛苦の人、春を迎へて換へず舊風烟、着衣喫飯恁麽にし去る、大地那ぞ曾て一塵有らん。」又紙尾に書して云く、「弟子个の悟處有り、何を以て朕を驗せん。」師又書して云く、「老僧、恁麽に驗す。聻。」又御筆、古人の(ヲ)節角誵訛の則の語を書して師に問ふ、師謹んで紙に書し、奏對す、勝げて計ふ可からず。(ワ)洞院都護に勅して師を請じて禁掖に入り、五節所に就かしむ。俄に法座を設け、師の(カ)陞座を請ふ。面前に百丈禪師の頂相を懸く、帝亦法座の右側に於て御榻を設け、天聽を側つ。(ヨ)月卿雲客、皆左右前後に在り、拈香祝聖罷ん

---

め、殺せしものと思へり。

(ニ)激揚鏗鏘は、問答の形容、鏗鏘は玉の鳴る聲。

(ホ)稽顙は、釋氏要覽に「顙は額なり、額を屈して地に至るをいふ」と。

(ヘ)近傍は近かよるなり。

(ト)萩原法皇は花園上皇なり。

(チ)鞠は曲「かゞまる」なり、躬は身なり、屈んで敬意を表する貌。

(リ)這箇は「これ」、聻は物を指示する時の語、俗に、「それ見よ」、「それだ」と云ふが如し。

(ヌ)綸言とは天子の勅を云ふ、禮記緇衣篇に、「王言綸の如く、其の出づる綍の如し」と、是れ綸言の出處なり。

(ル)三更は夜半、露柱は大黑柱。

(ヲ)節角誵訛は「入りくんで、むづかしきこと」を云ふ。

(ワ)洞院は仙洞卽ち花園上皇が指

で、師、法座を下る、帝亦御榻を下る。師、奏して云く、「臣僧、適來許多の鄙俚言說、功何れの處にか歸す。」帝、百丈の眞を指して云く、「百丈禪師證明を爲す。」師云く、「此の外、更に人の證明を作す有る無しや。」帝便ち拳頭を竪起す、師云く、「與麼ならば則ち南山北闕に朝し、夜夜明星を見る。」帝、㋟瞬目して祇揖す、師、鞠躬して出で去る、皇情大いに悅ぶ。次の日㋹兼金縑帛等を賜ふ、兩朝特に興禪大燈高照正燈國師の號を賜ふ。賜ふ所の庄田、濃州長森、播州小宅三職方、幷に浦上、總州遠山方、御厨、信州伴野、紀州高家、仍つて官府宣を下さる。㋞正中年中、南禪席を虛しうす、詔下つて師を請すること再三す、竟に赴かず。㋡建武の初め綸旨を下して云く、「大德禪寺は宜しく五山の一に處るべきなり。」師却つて之を受けず、又㋧詔を下して云く、「宜しく南禪淨刹に相並ぶべし。」萩原法皇、後醍醐天皇親しく㋤宸翰して、一流相承、他門の住を許さず、涇渭流を殊にし、言を龍華に貽すの御製有り、之を臨し之を刊して、塔額の左右に懸けらる。萩原法皇自ら御髮を剪り、小塔を造り、其の中に安じて靈光塔の左邊に置在せらる。蓋し大燈と當今來世香火の緣を結ばんが爲なり。筑州

---



し奉る。

㋕陞座說法なり。

㋵月潤雲客は公卿なり。

㋟瞬目は目禮なり。

㋹兼金は黃金、縑帛は絹なり。

㋞正中は後醍醐天皇の年號。

㋡建武は後醍醐天皇の年號、此の綸旨の下りしは、元弘三年十月一日なり。

㋧この綸旨のありしは正に元弘四年正月廿八日なり。

㋤蓋し按ずるに、去歲天皇京師を退いて、而も北朝舊政を用ひず、故に此の擧有りしならん。宸翰に云く、「大德寺は特に曹溪の正脈を稟け、專ら少林の遺風を煽ぐ、寔に斯れ叢林の規範なる者か、宜しく禪苑を劫石に比し、法席を龍華に傳ふべし、一流相承、它門を住せしむる勿れ、豈に是れ人我の情を縱にするものならんや、宗派涇渭を別つの故な

の太宰府都督司馬少卿、帖を師に上つて、橫岳山崇福禪寺に住せんことを請ふ。闕に詣して此の事を以て奏す、帝堅く之を留む。重ねて敷奏するに師翁行道の地と云ふを以てす、帝乃ち之を允す。纔に百日の主と作つて退を告げ、大德に㋶遷歸す。三轉語を垂れて衆に示して云く、「朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何ぞ似たる。露柱盡日往來、我れ甚に因つてか動かざる。若し箇の兩轉語を透得せば、一生參學の事、了畢せん。」㋰建武丁丑冬一夕、㋻首座（德禪開山徹翁和尚なり、）を召して曰く、「我れ化緣已に盡く、衣法幷に本寺末寺住持職事、悉く爾に付與す、克く子孫をして接續せしめて斷絶せざらしめよ。」未だ幾ならずして疾を得たり、臘月二十一日夜書す、亨首座、相從ふこと久し、悟徹既に人皆之を知る、語つて焉れを授く。又遺誡を諸弟子に示して云く、「我れ行いて後、骨を㋼丈室に置いて別に塔を造る莫れ、其れ以有るなり、夫れ汝等宜しく委悉すべし。」二十二日午の時、胡床に端坐して滅を示さんと欲す、而して久しく足の疾有り、㋨結跏趺坐すること克はざるを患ふ。首座出でゝ此を以て憾と爲して語ぐ、師自ら兩手を以て左の足を右の股の上に加ふ、左の膝傷折し、血流れて衣を霑

り、嚴誡を將來に垂る、敢て違失する勿れ。建武四年八月二十六日。」

㋶遷は還なり。

㋰建武は二年にて終る、三年改元して延元と云ふ、蓋し丁丑は延元二年なり。

㋻徹翁名は義亨、出雲の人、俗姓は藤氏、初め京都建仁寺鏡堂圓和尚に依り出家し、十九歳にして受具す、南禪寺にて大光和尚に謁し、後、雲居庵にて宗峰妙超に參じ、遂に印可を受く、晩年に德禪寺を興す。

㋼丈室は方丈の室なり。

㋨結跏趺坐は、坐禪の正則にして、右の足を以て、左の股の上に安じ、左の足を以て、右の股の上に安ずるなり。

㋔吹毛の名劍なり。

㋗大鑑禪師は諡號にして、號は淸拙、名は正澄、支那福州の

す、今に至つて血痕尙ほ存す。乃ち辭世の偈を書して云く、「佛祖を截斷して、㋭吹毛常に磨す、機輪轉ずる處、虛空牙を咬む。」筆を擲つて逝す。㋗大鑑禪師、時に南禪に住す、人有り、遺偈を傳誦す、鑑聞いて大いに驚いて云く、「意はざりき、日本明眼の宗師有らんとは。平生會面せんと欲して、人皆沮んで之を止む、遺恨少からず。」㋳茶毗に赴かんと欲すれども、而も朝廷祈禱の事有るに緣つて能はざるなり。且く僧人を遣し、茶毗の時を伺はしむ、至り馳せ歸つて之を告ぐ。乃ち大衆を率ゐて山門頭に出で諷經し、侍者二人を遣し、瓣香を贈らしむ。(溫中和尙、正翁和尙の二人なり。)瓣香今に至つて寺の什物爲り。世壽五十六、僧臘三十四、門人悉く遺誡に遵ふ。親しく印可を承け、其の法を嗣ぐ者、妙心の㋮關山和尙、興德の海岸、池寺の白翁、野州の了翁、長福の璧峰、金剛の日山、貞庵主、可監寺、和典座、各一方に據り、學者を接引す。師、平居物と春爲り、町畦無し。夫の陞堂して拂子を秉り、開室して竹篦を握るに迄つては、機を以て機を攻む、張良が足を躡んで韓信を封ずるが如し、是れ賊、賊を知る。孫子が竈を減じて龐涓を敗るが若し。㋘阿脩羅王㋫三有の大城に托動し、

---

人、我が朝の嘉暦元年六月、國請を受けて、我が國に來り、建長寺に住す、後、淨智、圓覺、建仁、南禪等の諸寺に移る。

㋳茶毗は梵語、譯して焚燒と云ふ。

㋮關山、名は慧玄、信濃の人、高梨氏の子、二十一歳にして、東傳啓和尙に建長寺に謁して、出家受具す。國師滅後、花園帝の勅に依り、正法山妙心寺を開く。

㋘阿修羅は梵語、非天、不端正と譯す、三面六臂にして、手に鬪諍の器を執り、忿怒の形相をなす、其の居所を修羅界、修羅道と云ふ。

㋫三有は欲界、色界、無色界なり。

㋙此れ雲門廣錄に載する遺誡中の語句なり。

㋓此の遺表は廣主劉王に遺せしものか、これ雲門廣錄にある

金翅鳥王、娑竭羅海を擘破す。談笑して臨濟を已に仆れたるに起し、叱咤して雲門の機關を破る。極處に到つて山を穿ち石壁に透る、鼻孔血淋淋。語錄三帙有り、一帙は雪竇の着語を錄す、自ら來る有り。按ずるに夫れ雲門の遺誡に云く、「㋙吾れ滅後、吾れを方丈の中に置け、上或は塔の額を賜はゞ、祇だ方丈に懸け別に營作すること勿れ。」又㋓遺表して云く、「聯りに鳳詔を叨りにして、累りに龍庭に對す、繼いで宣を頒つことを奉る。重疊の慶賜。」師、遺誡を示すに、雲門の故事に准じ、骨を方丈に置く、塔に靈光の額を賜ふ。㋢兩朝の寵光優渥に沐す。足の疾患に嬰る、大應、雲門の再誕の語、絲髮も爽はざる也。大應滅後十有九白、㋐嘉曆元年詔を奉じて大德の法堂を開く、一香大應に供す。二十年長養の㋚記莂、㋖符節を合せたるが若し。入滅纔に九十年、夫れ何ぞ門庭冷落、子孫寢く微なる。所謂㋴强弩の末勢、魯㋱縞を穿つこと能はざる者か、寔に歎息するに足れり。

㋯應永三十三年龍丙午に集る九月日、㋛德禪遠孫小比丘禪興謹んで㋽梗槩を狀して、以て大方尊宿名公、塔に銘するの目に備ふと云ふ。

---

遺表中の一節なり。

㋢花園、後醍醐の兩朝。

㋐本錄、最初に開堂の法語を撿す。

㋚備は將來、斯くあるべしと豫言するを記莂と云ふ、大應國師、妙超禪人の爲に書する文中「只だ二十年長養して人をして此の證明を知らしむ」の語あり。

㋖符節は割り符なり。

㋴强弩は强き石弓なり。

㋱縞は白絹なり。

㋯應永は稱光天皇の年號。

㋛德禪寺は大德寺塔頭に在り。

㋽梗も槩も「おほむね」と訓ず、なほ大略と云ふが如し。

國譯大燈國師語錄　終

# 大燈國師語錄

## 龍寶開山特賜興禪大燈高照正燈國師語錄

侍者　性智　編

師於嘉曆元年十二月八日開堂、

拈衣云、千尺不過丈六、雞足不如大德、何故、擧衣云、頂戴披之、誰辨正色。

陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲。

陛下恭願、

龍圖永固、玉葉彌芳。

次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

太上天皇聖壽億萬歲、恭願超上德於千載、樹風聲於後昆。

又拈香云、此一瓣香、奉爲金紫光祿大夫黃門侍郎、增崇祿算、伏願松栢之壽、甫申之幹、柱石

國家、撫育生民。

此一瓣香、奉爲光重法筵諸尊官、泊滿朝文武百僚、增崇祿算、伏願安國利民、齊伊周之古儁、乃忠乃孝、稱思軻之正範。

此香在雲門關裏、久爲衲僧鎖口訣、曾拾得於鎌倉縣畔巨福山頭、和氣藹然、蘊藏二十年來、香風隱而彌露、今日拈出爇向爐中、供養前住建長禪寺、勅謚圓通大應國師南浦大和尚、用酬法乳之恩。

師就座顧視大衆云、便恁麼相見、早隔五須彌、若也待開口、三生六十劫、還有知個中事底麼、出來對衆抉擇看、有麼有麼、僧問、雪山雪寒吾佛成道、法堂功成和尚開堂、建法幢立宗旨、正在此時、宣官百寮、請師提唱、師云、國清才子貴、家富小兒嬌、僧云、直將一句無心法、仰祝萬國泰平、師云、滿口道著、僧云、記得、慈明開堂、有僧問、攢錦簇花郎不問、如何是本來面目、明云、一言已出、駟馬難追、此意如何、師云、石從空裏立、火向水中焚、進云、僧云、明明三際曉、皎皎一輪孤、明云、一輪藏亦作麼生、意在那裏、師云、魚龍穴下蟠根闊、日月輪邊氣象深、進云、僧云、泊合放過、明便喝、如何辨端的、師云、劫石易消、村話難改、進云、上來一一蒙指示、只如和尚今日開堂說法、當機覿面如何接人、師云、眉毛厮結、準上厮挂、僧云、作家宗師天然有在、便禮拜、師云、且緩緩、又云、更有問話者麼、又有僧問、記得、龐居士辭藥山、居士指空中雪云、好雪片片不落別處、意旨如何、師云、難提掇處轉有則、僧云、時有全禪客云、落在什麼處、士打一掌、又作麼生、師云、八角磨盤空裏走、僧云、全云、居士也不得草草、士云、汝恁麼稱禪客、有人不放汝在、如何委悉、師云、咬定牙關、僧云、全云、居士作麼生、士又打一掌、意在那裏、師云、多添少減、僧云、虛

堂祖翁云、雖則是兩掌、其間有擡有搦、有收有放、如何辨別、師云、到此大行、僧云、上來已蒙慈悲、向上宗乘事、如何擧唱、師云、千峰雪白、萬壑風寒、僧云、老師果是人天大導師、便禮拜、師云、許個歸衆去、

乃云、我本無心有所希求、氷鎖瀑泉聲細碎、今此寶藏自然而至、風搖寒木影攣拳、況我宗印禪者、焉海南檀越、冒穹谷攀幽林、親擇巨材、堆山積岳、挖溪水焉海通、鯨波嶮處、獨解透路驅白牛於露地、結軌於百里、鳩成風於大野、響斧於一城、或費郊外丁夫、或勞山中普請、樹雲間之朱堂、布五彩之榱椽、安燈王之廣座、莊三道之寶階、區區役役、今日開堂、高答君臣、徧報過現未來、大覺海中一切聖賢、生生所參見諸善知識、衆中衣鉢、道友師僧、父母一切恩門、一切含靈、爲便是自然而至、爲復是從功而成、諸人於此會得去、山僧不必解說、若也不會、曲務速說、擊拂子云、所以前釋迦不前、後彌勒不後、無邊刹境、自佗不隔於毫端、十世古今、始終不離於當念、一毛頭上現寶王刹、一彈指頃轉大法輪、雖然如是、猶是建化門中事也、向上宗乘事、又作麼生、又擊一拂子云、有意氣時添意氣、得風流處且風流、小比丘妙超、忝遇君聖臣賢、不忘靈山付囑、太平得路成此梵刹、敷揚正法眼藏、祝延　聖壽無疆、山河大地、草木叢林、情焉無情同蒙光輝、共力拜手、妙超下情、不勝感激屏營之至。

復云、昔日世尊六年、戴雪頭上安頭、明星忽現眼皮橫綻、從此無端、解道大地含識、具个如來智慧德相、大衆若是大地衆生、各各自有生涯、從旦至暮、從少至老、每日起坐經行、一是一非、瞥喜瞥瞋、並是佗家活脫生涯也、何必貴如來智慧德相、後代兒孫、得被者老漢惑亂、往往安

禪靜慮、剌腦入膠盆、以悟爲望、似緣木求魚、謂之望上心不足、大須辜負世尊出世本志、且問諸人、上來既道、後代兒孫、被佗惑亂、今也便道、大須孤負佗出世本志、是褒世尊、是貶世尊、若道讚嘆、因甚有惑亂之言、若道誹謗、亦何有孤負之詞、或道褒貶隨時、未免隨語生解、更道褒貶不施、失却古佛家風、直饒道總不恁麼、明知莽莽鹵鹵去、畢竟意在那裏、所以山僧曾有一頌、明星一見雪重白、眼裏瞳人毛骨寒、大地如無知此節、釋迦老子出頭難、只如道眼裏瞳人毛骨寒、是什麼時節、若能恁麼去、日用四威儀中、壁立萬仭、孤迥迥峭巍巍、如天普覆、如地普載、如虛空含容、如日月照耀、因甚如此、今日臘月八。

擧、太宗皇帝因僧朝見、帝賜坐問云、卿甚處來、僧奏云、廬山臥雲庵、帝云、臥雲深處不朝天、因甚到者裏、僧無對、師驀拈拄杖云、太宗威容嚴肅、機略宏遠、者僧寢默俛仰、不失其禮、只如後來雪竇明覺大師、代云、難逃至化、又作麼生、卓拄杖一下云、四海而今淸似鏡、三邊誰敢犯封疆。

正旦、謝兩班上堂、僧問、日暖風和、萬物新相逢、便拜、又相賀、三乘五性不用問、應節一句如何擧揚、師云、分明記取、擧似諸方、僧云、記得、僧問趙州、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、此意如何、師云、黑漆桶裏洗墨汁、進云、僧云、不問這个、州云、爾問趙州、意在那裏、師云、烏龜鑽壁、進云、某甲不問趙州、又不問老師、只是有一問、請師答話、師云、莫向那僧背後問訊、進云、恁麼則大衆霑恩、學人禮謝、師云、只要實到與麼地、進云、領重重相爲、師云、領底作麼生、進云、也是不空、師云、不因今日節。

乃橫按拄杖云、寅朝乍臨正景新至、梅梢舒瑞氣、幽鳥報賀音、左右壯保愛之節、東西開納祐之門、嵩渉步入祥麟穩、海樹飛來白鳳閑、卓拄杖下座。

元宵上堂、僧問、昔日西天迦葉初傳燈、未審如何是初傳底燈、師云、夜半正明天曉不露、進云、迦葉已傳之、龍潭爲甚吹滅、師云、倒騎牛入佛殿、進云、後來有僧問香林、如何是室內一盞燈、林云、三人證龜作鼈、是答迦葉底、答龍潭底、師云、壺中天地、別有日月、進云、只如道三人證龜作鼈、作麼生辨端的、師云、石人相耳語、進云、忽有人問如何是室內一盞燈、師云、紫羅帳裏撒眞珠、進云、恁麼則動地放光、放光動地、便禮拜、師云、大家自知。

乃云、燈燈無盡燈、光明千萬里、捏聚也不即、放開也不離、一片虛凝宇宙寬、不知燃燈爲誰記、以拂子擊禪床一下、便下座。

二月旦上堂、僧問、春色無高下、花枝有短長、花枝短長人人知、如何是春色底、師云、山聳海浸、僧云、記得、仰山問僧、近離甚處、僧云、廬山、此意如何、師云、解笑底也少、進云、仰山云、曾遊五老峰麼、僧云、不曾遊、又作麼生、師云、邯鄲學唐步、進云、仰山云、闍黎不曾遊山、如何辨端的、師云、黃金賤不如泥土貴、進云、雲門大師云、此語皆爲慈悲之故、有落草之談、意在那裏、師云、聽敎兩頭走、僧云、若不登樓望、焉知滄海深、便禮拜。

師乃云、春風浩浩、春鳥喃喃、春雲冉冉、春水漫漫、時哉時哉、時何孤負、一任諸人東看西看、忽有个漢出來、道老和尙只知其時不知其節、今朝天寒雪下如冬、山僧向佗道、我餘一件事、引得儞一問。

佛涅槃上堂、僧問、春色依依花木芳菲、雙樹因甚一榮一枯、師云、古今與麼見、進云、恁麼則人天悉莫見世尊所入三昧麼、師云、泥人眼赤、進云、記得、德山一日齋晚、老子托鉢自方丈下來、此意如何、師云、步步生荊棘、進云、雪峰云、鐘未鳴鼓未響、老子托鉢向什麼處去、又作麼生、師云、相見易得好、進云、德山低頭歸方丈、如何辨端的、師云、闇室藏燈、進云、岩頭開云、大小德山未會末後句在、還諦當否、師云、斷絃須是鸞膠續、進云、德山云、爾不肯老僧那、意旨作麼生、師云、誰知只是有受璧心、進云、岩頭密啓其意、聾、師云、覽盡瀟湘景、和船入畫圖、進云、德山次日陞堂、果與尋常迥殊、如何理會、師云、法出姦生、進云、岩頭拊掌謂大衆云、且喜老漢會末後句、意在那裏、師云、事久多變、進云、學人今日小出大過、便禮拜、師云、兩肩擔將歸去、乃云、世尊臨入涅槃、以手摩胸普告大衆云、汝等諦觀我紫磨金色身、驀竪起拄杖云、者个是大德拄杖子、阿那个是金色身、諸人一見便見、不妨一得永得、其或未然、山僧讓諸人去、百億須彌、百億日月、恒沙國土、恒沙諸佛、盡在拄杖頭上、增添金色身光、莊嚴涅槃妙相、諸人還見麼、若尚未見、卓拄杖云、年年二月花狼藉。

三月半上堂、僧問、不得春風花不開、花開須藉春風力、不知春風有什麼力、師云、還覺腦門冷麼、僧云、馬大師與百丈行次、見野鴨子飛過、大師云、是什麼、意旨如何、師云、罕遇此門、僧云、丈云、野鴨子、大師云、什麼處去、又作麼生、師云、爭之不足、僧云、丈云、飛過去也、大師遂扭百丈鼻頭、如何識取、師云、打驢聽馬知、僧云、丈作忍痛聲、大師云、何曾飛去、聾、師云、嚼飯餵嬰兒、僧云、大師次日陞堂、衆纔集、百丈出卷席、意在那裏、師云、金不博金、僧云、大師便歸方丈、問百丈、我

適來上堂、未曾說法、儞爲什麼便卷卻席、如何商確、師云、樂則共樂、僧云、丈云、昨日被和尙扭得鼻孔痛、還端的也無、師云、風吹不入、僧云、大師云、儞昨日向甚處留心、此意如何、師云、遊子作開徃袖濕、僧云、丈云、今日鼻頭又不痛、也如何理會、師云、水洒不着、僧云、大師云、儞深知今日事、是何道理、師云、貴買賤賣、僧云、丈乃作禮、卻歸侍者寮哭、意又作麼生、師云、攢簇不得、僧云、同事侍者問云、儞哭作什麼、丈云、儞去問取和尙、如何辨別、師云、那吒撲帝鐘、僧云、侍者遂去問大師、大師云、儞去問取佗看、意在什麼處、師云、從來疑著个老、僧云、侍者卻歸寮問百丈、丈卻呵呵大笑、如何委悉、師云、瓦解冰消、僧云、侍者云、儞適來哭、而今爲什麼卻笑、丈云、我適來哭、如今卻笑、是什麼心行、師云、唱九作十、僧云、可謂親言出親口、師云、不如禮拜好、僧便禮拜。

師乃云、桃花紅李花白、靈雲玄沙立阡陌、相爭祖道不敢休、其勢不生、多韜略、春雨自知斷和句、濛濛洒去空蕭索、兩兩三三解歸根、四維上下難尋覓、旣難尋覓因甚得、大地載起喝一喝云、放過一著。

謝龍藏主上堂、山僧拂子說三種禪、忽豎起拂子云、此是換卻佛祖眼睛底禪、亦打一圓相云、此是指出人天性命底禪、擊禪床一下云、此是發雲雨大用底禪、雖然如是、若是自非一氣轉得一藏底人、爭能消得多少風。

佛生日上堂、僧問、世尊今日降下、未至地、九龍吐水洗金軀、早是一場敗缺、和尙要雪屈、也是泥裏洗土塊、師云、狗喞赦書、進云、指天指地金蓮捧足、因甚腳下紅絲線不斷、師云、要知山上

路、須問去來人、進云、韶陽老人正令方行、諸方未免將錯就錯、師云、夜行莫踏白、不水定是石、進云、不因老師點發、容易難瞻慈顏、師云、月到中峰猶未歸、進云、三十年後、此話大行、師云、馬無千里謾追風。

乃云、本不曾上天、何論下天、本不曾託胎、誰說出胎、所以道、淨法界身本無出沒、既然如是、因甚東家杓柄長、西家杓柄短、會得各各惡水驀頭潑、不然齊之以禮。

結夏小參、僧問、德山小參不答話、有問話者三十棒、佗家親切處如何識得、師云、來者不來、去者不去、進云、趙州小參、要答話、有問話者、置將一問來、又作麼生、師云、買價破大例、進云、風從虎雲從龍、豈莫是用處一般麼、師云、且喜沒交涉、僧云、學人今夏依附和尚、未審作麼生下手腳、師云、莫錯舉。

乃云、西天鵝護之限、聖制臘人之期、衲子慧身之時、吾家禁足之方、明月軒畔淸風匝地、看雲亭邊竹影拂階、於此圓覺伽藍、聚集四聖六凡、於此平等性智、安居情與無情、只如七佛祖師三處度夏、還出得這裏也無、諸人若點檢得出、九十日內、不敢孤負虫豸、若也點檢不得、卓拄杖云、金剛眼睛十二兩。

復舉、世尊一日陞座、文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是、世尊便下座、師拈云、大湖浸月長橋臥波、若非高吟大嚼、爭能賞此時情、雖然風流可觀、其奈得便宜處落便宜、具眼禪流、請辨緇素看。

次日上堂、僧問、衲僧箇箇氣宇如王、今朝因甚坐在區宇、師云、畫餅充飢、進云、若也論此事、如

青天白日、更向甚處覓、剋期取證、師云、路入桃源深更深、進云、慈明問黃龍、雲門三頓棒、洞山可喫不可喫、意在那裏、師云、兩鏃蒺藜、進云、黃龍云、可喫、還端的也無、師云、直饒山岳也難藏、進云、明云、終日鴉鳴鵲噪喫幾棒、意旨作麼生、師云、一種是聲無限意、有堪聽有不堪聽、僧便禮拜。

師乃擧、五祖云、今日結夏、無可供養大衆、作一家宴管待諸人、遂擧手云、囉囉招、囉囉遙、囉囉送、莫怪空疎、伏惟珍重、師云、五祖老人與麼家宴、可謂管待千足、百味無缺、雖然如是、只是有一時之慶快、大德今日結夏、也有箇家宴、坐者立者、俱成萬年歡、見者聞者、同唱太平歌、且道、其中節拍、又作麼生、以拂子擊禪床一下云、薰風自南來、殿閣生微凉。

謝首座・書記・藏主秉拂上堂、西來呈師厚靈樹待遇、脚底如驢踏慈明堂奥、法絲於其時、人焉廋乎、後之視今如今之視古、何也、智藏發光資鞭影、擊拂子下座。

謝良和典座上堂、擧、金牛每日齋時、自將飯、於僧堂前作舞呵呵大笑云、菩薩子喫飯來、師云、金牛和尚務在細嚼難飢、只是衆口難調、大德今夏、屋裏得有人、一衆自然不聞吾臂酸、諸人要知此人麼、卓拄杖云、發而當節言之和。

端午上堂、僧問、文殊令善財採藥、善財云、盡大地無有不是藥者、此意如何、師云、穿靴水上立、僧云、文殊云、是藥採將來、意在那裏、師云、六雙骰子一時赤、僧云、善財於地上拈一莖草度與文殊、意旨作麼生、師云、吐舌至頂相、僧云、文殊云、此藥亦能殺人亦能活人、如何識得、師云、猫兒打筋斗、僧云、應病與藥、是古來家風、和尚作麼生醫無病人、師云、黑蛇入漆甕、僧云、與麼則

大法緊要之處、誰敢假驢駝藥、師云、波斯不過江。

乃云、端午天中節、諸方盡咒土書壁、以消妖怪、認採藥模樣、百草頭上倣伎倆、我者裏箇箇石人之機、箇箇鐵漢之用、水洒不著、風吹不入、驀拈拄杖卓一下云、森森夏木杜鵑啼。

上堂、僧問、記得、良禪客問欽山、一鏃破三關時如何、山云、放出關中主看、意旨作麼生、師云、水底弄傀儡、進云、良云、恁麼則知過必改、山云、更待何時、如何領略、師云、一字不著點、進云、良云、好箭放不著所在、使出去、未審還有出身處也無、師云、楚山入漢水、進云、山云、且來闍黎、良回首、山把住云、一鏃破三關卽且止、試與欽山發箭看、意在那裏、師云、天不保惡、進云、良擬議、山打七棒云、且聽、這漢疑三十年、請訛在什麼處、師云、古殿坐者少、進云、學人若不逢箇節、爭敢知箇事、便禮拜、師云、實須到與麼地。

乃云、法法本來法、心心無別心、日午三更後、相喚賞樹陰、話盡甘泉之景、聯成羅含之吟、品藻鷹鳩之變、嘉唱耳德之音、拍手笑呵呵、眞鍮不博金、喝一喝云、侍者與我點茶來。

半夏上堂、半夏已前事、諸人知而山僧不知、半夏已後事、山僧知而諸人不知、正當今日半夏、知則共知、不知則共不知、還會麼、良久云、三段不同、收歸上科。

上堂、僧問、世界恁麼熱、宇宙炎炎、不知向什麼處得回避、師云、清機歷掌、僧云、王常侍一日訪臨濟、同濟在僧堂前、乃問、這一堂僧、還看經麼、濟云、不看經、意在那裏、師云、石壓筍斜出、僧云、侍云、還學禪麼、濟云、不學禪、意旨作麼生、師云、崖[illegible]花倒生、僧云、侍云、經又不看、禪又不學、畢竟作箇什麼、濟云、總敎伊成佛作祖去、到者裏如何領略、師云、調達不得背、僧云、侍云、金屑雖

貴、落眼成翳。濟云、將爲爾是箇俗漢。還端的也無。師云、疎田不貯水。僧云、若恁麼不來爭得恁麼去。師云、且看脚下。

乃云、一法若有、毘盧墮在凡夫。萬法若無、普賢失其境界。拈拄杖云、者箇是大德拄杖子。阿那箇是有無。道得與不道得、朝打三千、暮打八百。擲下拄杖下座。

七月旦上堂。僧問、暑退涼生、樹凋葉落、時節因緣不相謾。如何是箇中事。師云、大家多生機。進云、記得、僧問雲門、不起一念還有過也無。門云、須彌山。作麼生領會。師云、莫教平出。進云、有僧問虛堂老師此意如何。虛堂云、買鐵得金。意在那裏。師云、也是可惜許。進云、今日問和尚不起一念還有過也無。未審如何祗對。師云、三生六十劫。進云、與麼則昔日雲門、今日和尚。便禮拜。師云、禮拜得始得。

乃云、咋見垂楊綠、今看落葉黃。祖門擡搦事、物物不隱藏。者箇葛藤卽且致。向鼻孔裏倒道將一句來。若無人道得、聽取山僧爲爾說破。

解夏小參。僧問、和尚一夏以來、爲衆勞手脚。未審成得什麼邊事。師云、崑崙嚼生鐵。進云、恁麼則誰敢辜負和尚。師云、放爾保殘生。進云、記得、臨濟示衆云、赤肉團上有一無位眞人、常從汝等諸人面門出入。未證據者看看。意旨如何。師云、不較多。進云、時有僧出問、如何是無位眞人。濟下禪床把住云、道道。又作麼生。師云、若不道、爭得珠轉。進云、其僧擬議、濟托開云、無位眞人是什麼乾屎橛。便歸方丈。還端的也無。師云、半開又半合。又有僧問、記得、僧問雪峰、乞師指示。峰云、是什麼。如何承當。師云、劈腹剜心。進云、其僧於言下大悟。也是見什麼道理。師云、搭其

就短、進云、雲門云、雪峰向伊道什麽、未審節文在甚麽處、師云、鋼鐵著生鐵、進云、古德底且置、和尚直下作麽生指示、師云、速退速退、妨佗別人請問、進云、不因今日節、誰敢恁麽去、師云、更有露柱在。

乃云、法歲周圓、聖制已滿、我者裏荒凉、爽氣最容與、不論取證淺深、不分賞勞輕重、攀白雲而高捲、追秋風而長嘯、儞汝東西任情逍遙、草鞋跟寬、無不活路、若逗到崑崙山頭、佗喬尸迦忽相逢、問過夏割一句、只將隔手底祇對、不然五門猛獸欺儞在。

復舉、翠巖夏末示衆云、一夏已來、與兄弟東説西話、看翠巖眉毛在麽、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關、師云、諸方盡謂、俱出隻手扶豎宗風、殊不知、巨鼇莫戴三山去、吾欲蓬萊頂上行。

次日上堂、僧問、今朝正是解制自恣之辰、不知何處是衲僧遊戲之場、師云、來鋒有路、進云、恁麽則十洲三島草鞋底、鴈蕩天台拄杖邊、師云、也何妨、進云、僧問雲門、初秋夏末、前程忽有人問、如何祇對、門云、大衆退後、作麽生領會、師云、因邪打正、進云、僧云、過在什麽處、門云、還我九十日飯錢來、意在那裏、師云、大慈妨小慈、進云、今日忽有人問著、作麽生祇對、師云、三句前兩句後。

乃舉、臨濟道、有一人、論劫在途中、不離家舍、有一人、離家舍不在途中、那箇合受人天供養、師云、諸人要向者裏道取、須向那裏透過、若是人天供養、秋風吹渭水、落葉滿長安。

謝進退兩班上堂、衲僧家尋常用底、豈止乎虎視龍望、爲世所推、進一步則突出威音王已前、

退一步則爍迦羅眼裏藏身、因甚如是、擊拂子云、天際日上月下、檻前山深水寒。

八月旦上堂、僧問、槿花凝露、梧葉鳴秋、此中現成事、如何提唱、師云、答猶未了、進云、幾人得與麼去、師云、只許阿儞一箇、進云、肅宗皇帝問忠國師、如何是十身調御、國師云、檀越蹈毘盧頂上行、意在那裏、師云、不妨脚下紅絲線不斷、進云、帝云、寡人不會、國師云、莫認自己清淨法身、又作麼生、師云、主山騎案山、進云、忽有人問如何是十身調御、未審和尚如何祇對、師云、背短僧長、進云、恁麼則西風一陣來、落葉兩三片、師云、三十年後。

乃云、秋雲弄秋風、秋色蘸秋水、氣清如時清、道泰似情泰、禪者之雅興、道人之嘉景、頭頭上顯露、物物上現成、卓拄杖云、是則是、三十年後、有人加勸沮去。

中秋上堂、僧問、靈山話月、曹溪指月、到者裏如何辨端的、師云、三山帽大袖衫、僧云、馬大師翫月次、問西堂百丈南泉云、正當與麼時如何、西堂云、正好供養、意旨作麼生、師云、波斯讀尚書、僧云、百丈云、正好修行、又作麼生、師云、拂地添銅瓶、僧云、南泉拂袖便行、意在那裏、師云、起席不謝坐、僧云、大師云、經歸藏、禪歸海、只有普願獨超物外、如何委悉、師云、神箭三匝白猿號、僧云、古人誵訛處、和尚已呈露、和尚誵訛處、未審何人點檢、師云、天高蓋不盡、僧云、不因恁麼問、爭識恁麼事、師云、更須買草鞋、僧云、深沈滄海恩波濶、皎潔秋空氣象高、師云、如道著須用著。

乃云、秋中秋、月中月、四萬二千清光、五十由旬靈闕、明明重明明、皎潔又皎潔、指與話俱納敗缺、納敗缺還照絕無物堪比倫、教我如何說。

上堂、僧問、雲門因僧問、如何是法說、門云、大衆久立、速禮三拜、意旨作麼生、師云、還我話頭來、

進云、如何是隨意說、門云、晨時有粥、齋時有飯、又作麼生、師云、一任亂咬、進云、如何是隨宜說、門云、三德六味、施佛及僧、如何理會、師云、薤園裏賣葱草、進云、如何是方便說、門云、是汝鼻孔重三斤半、意在那裏、師云、露柱退後、進云、如何是大悲說、門云、歸依佛法僧、如何辨端的、師云、放儞三十棒、進云、雲門一一答話、畢竟明得箇什麼邊事、師云、南地竹、北地木、進云、不因夜來風、爭見海門秋、便禮拜、師云、莫錯擧。

乃云、功高二儀而不仁、明逾日月而彌昏、肇公只知從事中得、不知從事上得、且道、從事上得底作麼生、良久云、殘葉賦題紅片片、遠山供望碧層層、

重陽上堂、僧問、九九佳節謂之重陽、只向者裏領去、是第幾機、師云、什麼處收捨得、進云、與麼則逢人須說三分話、未可全拋一片心、師云、六脚蜘蛛上飯床、進云、豈不是老和尚出人妙手、師云、儞因什麼得到與麼地、進云、東西南北歸去來、師云、猢猻摘仙菓、

乃云、只愛菊花發紫蘂、不喜聞彭祖之術、只愛秋露凝赤萸、不憂忘稚川之說、不憂不喜、善哉箇重九節、擊拂子下座。

上堂、雲門云、許多大栗子、喫却幾箇、有人喫得三箇、韶陽吐却五箇、有人喫得五箇、韶陽吐却十箇、者箇些子、緇素辨得出、山僧分半院與儞。

閏月旦上堂、拈拄杖云、一切諸佛、及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法、皆從此經出、卓拄杖一下云、看看、大德拄杖子、爲儞諸人、此經科分細大義理、一一指注、而見諸人、猶不知不了、高聲唱云、四時禁土節、三年有一閏、又卓一下。

上堂、黃葉滿地塞鴈橫空、彼此出家彼此行脚、佛手遮不得、人心似等閑、更擬問如何、當頭霜夜月、任運落前溪。

開爐上堂、僧問、辭柯黃葉已成堆、整頓圍爐就地開、時節一句如何體會、師云、莫敎擁山被、進云、有人、刹那去亦如何、師云、前言不副後語、進云、趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭有箇無賓主話、直至而今、無人擧著、意在那裏、師云、三箇柴頭品字燒、進云、未審有甚麼難擧著麼、師云、近之燎却面門、進云、學人進前退後、自由自在、是擧著不擧著、師云、且過者邊著、進云、便是雨彩一賽底、師云、大有人點頭、進云、不入虎穴爭得虎子、便禮拜、師云、相識滿天下。

乃云、法昌十六高人、怕寒懶剃鬢鬆髮、趙州無賓主話、愛煖頻添榾柮柴、大德門下終不向針頭削鐵何也、今日十月一、開爐免帽子。

謝監收維那上堂、齊之則泥土舒天顏、約之則水滴難以通、恁麼並務、致令各各投其方圓之器安其上下之居、是謂之紀綱淸嚴、收放有則、及乎究其端由、豈止還丹一粒、點鐵成金。

上堂、卓拄杖云、拄杖子若不相當、是什麼物得不相當、便下座。

冬至小參、僧問、一氣潛通、萬彙發生、不涉時節、願聽提唱、師云、鼻孔占却三畝之地、進云、潙山問仰山、仲冬嚴寒年年事、晷運推移事若何、仰山近前叉手而立、意旨如何、師云、一字入公門、九牛車不出、進云、潙云、誠知子答者話不得、又作麼生、師云、見人富貴常歡喜、進云、時香嚴至、潙山擧前話、嚴云、某甲偏答得者話、潙復問、嚴亦近前叉手而立、如何領略、師云、借婆裙子拜婆年、進云、潙云、賴遇寂子不會、畢竟如何、師云、鷄鳴不著時、隣人半夜行、進云、今日有人、問仲

冬嚴寒年年事、晷運推移事若何、未審和尚如何祗對、師云、夜聞祭鬼皷、朝聽樂神歌、進云、與麼則來日一陽生、便禮拜、師云、一任記取。

乃云、陰魔消盡、陽氣發時無硬地、律管先知、壠頭梅綻不萠枝、直得皓老布裩、麻線易通、鏡清臥單、絣㧊難開、縱饒迄于道、所以陰陽不測者、空洞無象、所以造化不宰者、潛微幽隱也、未是出書雲分節、是故山僧只望、以五日爲一候、以半月爲一氣之流、漏泄箇仲冬嚴寒事、物物對偶機、其或似阿房曳衣底、東山水上行。

復舉、慈明冬至牓、師拈云、東弗于代日下東、西瞿耶尼月氏西、解笑者多、解哂者少、若也今晚放參、一冬二冬、叉手當胸。

因雪謝寺齋秉拂上堂、演出普賢信口偈、拏來香積無盡飯、要知兩彩一賽處麼、卓拄杖一下云、吽吽、有什麼饆饠䭔子、快下將來。

謝兩班上堂、諸佛放光明、助發實相義、釋迦老子非但當年之益、且要使吾沙門於五濁惡世中、開靜堅固時、拋卻人我擔子、除卻高下情謂、互作主伴、箇實相無相、微妙解脫法門、久住於世間、全億劫利濟、實相義且致、如何是諸佛放光明、良久云、東山拍手西山舞。

因雪上堂、滴水風寒、空山雪白、龐蘊枝頭藏身、象骨巒塢氣索、往往佗人住處我不住、佗人行處我不行、不是與人難共聚、大都緇素要分明、喝一喝。

臘八上堂、僧問、釋迦老子半夜逾城、雪山六年一麻一麥、是什麼心行、師云、針鋒頭上翻筋斗、僧云、正當明星現時、忽然悟去、還端的也無、師云、似地擎山不知山之孤峻、僧云、只如一人發

眞歸源、大地衆生在什麽處。師云、金剛腦後三斤鐵。僧云、釋迦老子顚言倒語云、奇哉一切衆生、悉具如來智慧德相、旣是無風起浪、如何得太平去。師云、寒雨洒空、寒風匝地。僧云、學人今日小出大遇。便禮拜。師云、撒手那邊去。

乃云、半夜逾城直上雪山、旣是道士擔漏巵、更說於明星現處、忽然悟去、大似揑目見空花。大德未嘗不解烏頭養雀兒。卓拄杖云、南斗七、北斗八。

歳旦雪下上堂。（除夜大風吹）昨夜舊年風、今朝新歳雪、雪帶舊年寒、風和新歳節、阿呵呵我家好驢騾、向後絕災禍、絕災禍、東西南北皆可可、龍寶從玆爐竈大。

上堂、意到句不到、一二三四五六七、句到意不到、七六五四三二一、忽然意句俱到時、又作麽生、良久云、花開不假栽培力、自有春風管待伊。

三月旦上堂、煙霞影裏、春風聲中、山桃紅綻、岸柳翠濃、無限幽情叵遮掩、莫敎舞蝶一蘂蘂。

三月半上堂、僧問、祖令當行、十方坐斷則不問、只於春風拂拂時節、願聞親切一句。師云、處處綠楊堪繫馬。進云、長沙一日遊山歸門首、首座問云、和尙什麽處去來、沙云、遊山來、意旨如何。師云、家家門路透長安。進云、首座云、到什麽處來、沙云、始隨芳草去、又逐落花回、如何領略。師云、落霞與孤鶩齊飛。首座云、大似春意、沙云、也勝秋露滴芙蕖、端的在那裏。師云、春水共長天一色。進云、雪竇著語云、謝答話、如何委悉。師云、一畝之地三蛇九鼠。進云、古人恁麽酬唱、如颺如電、只恐通變未全、和尙今日莫別有提唱麽。師云、崑崙嚼生鐵。進云、不因楊得意、爭識馬相如。便禮拜。師云、咦。

乃舉、僧問風穴、語默涉離微、如何通不犯、穴云、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香、諸人要見風穴麼、只識取常憶兩字、其如未然、離微體淨品。

四月旦上堂、僧問、鵲噪柳絲亂、鶯遊荷蓋傾、此中現成事、未審如何提唱、師云、青青不入時人意、僧云、溈山示衆云、有句無句如藤倚樹、意旨作麼生、師云、八十翁翁牙根堅、僧云、疎山云、忽遇樹倒藤枯、句歸何處、又作麼生、師云、見之不取、思之千里、僧云、溈山放下泥盤呵呵大笑、意在那裏、師云、黃連未是苦、僧云、獨眼龍云、教溈山笑轉新、如何委悉、師云、屋裏鬻揚州、僧云、疎山言下知歸乃云、溈山笑中元來有刀、還端的也無、師云、誰知席帽下、元是昔愁人、僧云、上來一一蒙指示、向上宗乘又如何、師云、拄杖頭上挑日月、僧云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師云、好看脚下。

乃拈拄杖卓一下云、有人似者箇、觸處築著磕著、有人不似者箇、隨物七穿八穴、且道、誵訛在甚處、良久云、滿地落花春已過、綠陰空鎖舊莓苔、又卓一下。

佛誕生上堂、僧問、世尊初降生、指天指地、周行七步云、天上天下唯我獨尊、意旨如何、師云、日出乾坤輝、僧云、雲門云、我當初若見、一棒打殺與狗子喫、貴圖天下太平、端的在那裏、師云、知恩方解報恩、僧云、雪竇云、我當初若見、便與攛倒禪床、又作麼生、師云、鬼爭漆桶、僧云、只如今朝諸方出手、灌沐金軀、與二大老用處、是同是別、師云、千年田八百主、僧云、千峰勢到嶽邊止、萬派聲歸海上消、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、將三界二十八天作箇佛頭、將金輪水際作箇佛脚、將四大州作箇佛身、將一切情與無

憒、作箇佛脾胃肝膽、如是則諸人盡在箇佛肚裏起坐經行、若也在肚裏、爭能灌沐淨智莊嚴功德身、若道灌沐無妨、向甚處安身立命、擊拂子下座。

結夏小參、僧問、烏兎如馳、聖制已臨、正當恁麼時、請師提唱、師云、好只與麼去、僧云、如何是圓覺伽藍、師云、逼塞虚空、僧云、如何是平等性智、師云、月白風淸、僧云、畢竟如何安居、師云、直饒恁麼也未眞、僧云、者箇則且置、和尚莫別有結制底一句麼、師云、前三三後三三、僧云、可謂石長無根樹、山藏不動雲、便禮拜、師云、道得始得。

乃云、古來有一段事、常時明明如日、向之隔千里、背之在目前、得而難收、迎而難親、所以西天於三月九旬中、聚集四聖六凡、以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、寶山今夏也隨例、結箇聖制、不見粥飯精麤、不分茶湯淸釅、隨根機忍耐、任肚皮大小、整頓手脚、護惜黑柱、只是許堆堆地、不許成就慧身、何故、卓拄杖云、鼻孔元來掛上唇。

復擧、古德道、若是全擧揚宗乘、爾等諸人向甚處領會、所以古今獨露、隱顯無方、師拈云、古德大似、王母獻七枚神桃、乘彩雲之聳、和明月而去也。

次日上堂、僧問、一峰雲片片、雙澗水潺潺、莫是二千年前消息麼、師云、認著卻不是、進云、古者道、護生須是殺、殺盡始安居、會得箇中意、鐵船水上浮、意旨如何、師云、能有幾箇、進云、如何是護生須是殺、師云、何必恁麼、進云、如何是殺盡始安居、師云、一向無孔鐵鎚、進云、如何是箇中意、師云、豈獨孤負、進云、鐵船水上浮、又作麼生、師云、下載淸風付與誰、進云、只如朝行西天、暮歸東土、還有禁足底道理也無、師云、路途雖好、不如在家、進云、恁麼則十洲三島鶴乾坤、四海

五湖龍世界、師云、分身兩處看。

乃云、經行及坐臥、常在於其中、既而如是、今朝因甚別立規矩、禁足護生、還會麼、良久云、以大圓覺為我伽藍、身心安居平等性智。

謝首座・書記・藏主秉拂上堂、拈拄杖卓一下云、風穴云、若立一塵、家國興盛、野老嚬蹙、雪竇頌云、野老從教不展眉、且圖家國立雄基、山僧要與秉拂子知其人、不如雲門兒孫、有三句體調、又卓拄杖下座。

五月旦雨下上堂、霏霏梅雨洒危層、五月山房冷似冰、雪竇老老大大、向諸人面前翻筋斗、若人見得、拖泥帶水。

端午上堂、僧問、和尚從來應箇節、箇時作麼生與人看、師云、不肯為儞、進云、既能恁麼會去、一生參學事了畢也無、師云、合取骫臂著、進云、記得、文殊令善財採藥、善財云、盡大地無有不是藥者、此意如何、師云、相去多少、進云、文殊云、是藥採將來、善財拈一莖草度與文殊、意在那裏、師云、少一時不生、剩一時不死、進云、大家鐵團圞、無有一箇病、未審文殊為誰要藥、師云、專為七佛、進云、善財因甚將錯就錯、師云、家無小使不成君子、進云、和尚與麼答話、為是與文殊善財雪屈、為復是古今一路行、師云、岸谷無風徒勞展掌、進云、若不因今日節、爭知作家體裁、便禮拜、師云、吽。

乃云、今朝是五月五、不用桃符白澤、只須諷誦佛祖至靈大神咒、消滅一切障難、成熟一切吉事、且道、那箇神咒、振威喝一喝。

上堂、僧問、今朝爲法大衆雲集、未審和尚說箇什麼法、師云、家家觀世音、進云、正與麼時、學人如何得領略去、師云、莫起籌算別處春、進云、記得、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、此意如何、師云、穿過髑髏裏、進云、一切蠢動含靈、皆有佛性、爲甚狗子還無佛性、州云、爲他有業識性在、作麼生辨端的、師云、藏身露影、進云、上來分明蒙指示、今日有問、狗子還有佛性也無、和尚如何祇對、師云、去、非干境界、進云、恁麼則昔日趙州、今日和尚、便禮拜、師云、能知始得。

乃云、久雨已晴、處處曬眼皮草、曬眼皮草即且致、明見天日一句、試道來看、若無人道得、山僧今日失利、擊拂子下座。

半夏上堂、僧問、結制已過半、九夏炎炎日、木人汗不輟、如何生清涼、師云、脫却鶻臭布衫、進云、與麼則六月賣松風、人間恐無價、師云、箇箇秘在形山、進云、記得、龐居士參問江西馬祖云、不與萬法爲侶者、是什麼人、意旨作麼生、師云、咽喉出氣得也未、進云、祖云、待汝一口吸盡西江水、即向汝道、意在那裏、師云、騎聲入耳、進云、居士於言下頓領旨、還端的也無、師云、早知落第二門、進云、可謂親言出親口、師云、且退且退。

乃云、日月知晝夜、約晝夜知時節、箇箇常情也、只如天地未剖、文彩未彰已前、還喚今日作半夏即是、不作半夏即是、卓拄杖云、六月不熱五穀不結。

上堂、僧問、南山起雲、北山下雨、此中親切處、願聽擧揚、師云、千里萬里轉霧霈、進云、恁麼則把斷要津也、師云、打水魚頭痛、進云、仰山謂香嚴云、如來禪許師兄會、祖師禪未夢見在、未審意旨如何、師云、蠅何見血、進云、如何是如來禪、師云、靜處婆婆訶、進云、如何是祖師禪、師云、鐵

輪碎石、進云、如來禪與祖師禪相去多少、師云、湘之南潭之北、進云、者箇則且置、作麼生是和尚禪、師云、大坐須彌頂上、進云、不因樵子徑、爭到葛洪家、便禮拜、師便喝、

乃横拄杖云、若從者裏便去、山河大地齊稽顙、卓拄杖一下云、若從者裏便去、森羅萬象盡放光、又畫一畫云、從者裏去底亦作麼生、請各各歸寮舍、自摸索看。

七月旦上堂、僧問、落梧一葉天下報秋、箇中端的若爲相酬、師云、釋迦彌勒退後三千、進云、今日方知、眉毛横眼上、口稜在鼻下、師云、認驢鞍橋作阿爺下頷、進云、記得、雲門上堂云、一言纔舉、千差同轍、該括徹塵、猶是化門之說、若是衲僧合作麼生、意在那裏、師云、擔水河頭賣、進云、若將祖意佛意這裏商量、曹溪一路平沉、還有人道得麼、道得底出來、意旨作麼生、師云、河裏失錢河裏摝、進云、時有僧問、如何是超佛越祖之談、門云、餬餅、如何辨端的、師云、胡孫繫露柱、進云、僧云、這箇有什麼交涉、門云、酌然有什麼交涉、此意如何、師云、和贓納款、進云、古人底且置、不容祖意佛意、乞師指出曹溪一路、師云、壁立萬仞、進云、既放下佛祖、猶是爭奈用六祖何、師云、且去、圓前語、進云、不因天日近、爭識斗牛寒、師云、噫。

乃云、暑氣未去、嫩涼初生、秋意未深、白雲淸淡、德山臨際爲甚平地喫咬、會麼、良久云、蘇武持漢節而歸。

解夏小參、僧問、聖制已圓、秋風滿面、正與麼時、如何履踐、師云、何不別問、僧云、恁麼則有意氣時添意氣、不風流處也風流、師云、南海波斯鼻孔鑿、僧云、記得、三聖問雪峰、透網金鱗以何爲食、意旨如何、師云、到即不點、僧云、峰云、待汝出網來向汝道、又作麼生、師云、跕即不到、僧云、聖

云、一千五百人善知識、話頭也不識、意在那裏、師云、無限村僧、模之爲則、僧云、峰云、老僧住持事繁、如何委悉、師云、鴆羽落水魚皆死、僧云、若有人問透網金鱗以何爲食、未審和尚作麼生祗對、師云、呂望權、任公犗、僧云、恁麼則學人、今日小出大過、便禮拜、師云、誣人即得。

乃云、四月十五、一衆無端投入牛角、東西不辨南北不分、七月十五、諸人快活解開布袋、脚頭脚底、通霄有路、萬里無寸草、抖擻多年穿破衲、出門便是草、襤毿一半逐雲飛、有佛處不得住、舜無卓錐地、無佛處急走過、禹無十戸聚、直得把住放行、觸處現前、擡搦褒貶、隨物作主、正與麼時、龍寶別有賞勞在、擧拂子云、西風一陣來、落葉兩三片。

復擧、五祖演和尚云、牛過窓櫺、頭角四蹄全出、尾巴爲甚出不得、師拈云、五祖老子、只見其出底、不見其不出底、何故、何官無私、何水無魚。

次日上堂、僧問、三月安居、羚羊掛角、九夏自恣、猛虎出林、正與麼時如何得不歟去、師云、付與甚人、僧云、洞山云、兄弟初秋夏末、直須向萬里無寸草處去、意旨作麼生、師云、餓狗嚙枯髏、僧云、石霜云、何不道出門便是草、又作麼生、師云、把髻投衙、僧云、洞山聞云、大唐國裏能有幾人、意在那裏、師云、也須遭人點檢、僧云、古德垂示且置、和尚如何教人去、師云、下坡不走、快便難逢、僧云、青山綠水草鞋底、明月淸風拄杖頭、師云、錯。

乃云、會則途中受用、移身不移步、不會則世諦流布、移步不移身、卽便恁麼去、未到山僧行履處、何也、雨來層翠消殘暑、風過林頭滿院涼。

謝兩班侍者上堂、登山須倚杖、渡海須上船、若要扶豎法門、必須得有班序之儀、溫柔一手擡、

剛硬兩拳搦始得、既得其人後、亦作麽生、良久云、獻佛不在香多。

上堂、橫拄杖云、山僧昨夜三更、入瞌睡三昧、者箇拄杖子趁前言曰、某甲會些子禪、要且來日初一、說一句子布施諸人去、伏望和尚慈悲、莫奪此願以爲幸、山僧云、也何妨、儞作麽生說、拄杖子云、八月一日天中節、赤口白舌隨時滅、山僧云、阿儞實好知言、只以此一句子、食輪法輪並轉、佛道祖道共昌、佗便禮拜去、諸人且道、喚作山僧說即是、喚作拄杖子說即是、若作拄杖子說、山僧今朝說、若作山僧說、拄杖子昨夜說、若能定當、雲歸碧洞、露滴蘭藂、其如未然、卓拄杖一下。

中秋上堂、尋常驚恠禪和家、及乎到中秋節、卜浮雲於陰晴、强貪觀天上月、問著其中吟眸句、十箇有五雙、便道、月皎夜星稀、是惟才陞龍寶堂、也未得入龍寶室、何故、滿船明月一竿竹、家在五湖歸去來。

上堂、去聖時遙、人多懈怠、逆則生瞋、順則生愛、且道、作麽生是無懈怠無瞋愛處、嶺上白雲幾前綠水。

重九上堂、一句新一句新、汾陽一句又重新、靖節相逢不相識、重陽九日菊花新。

開爐上堂、僧問、法昌今日開爐、行脚僧無一箇、聚泥像而說法、山川改觀、還莫恠力亂神麽、師云、一點水墨兩處作龍、進云、丹霞燒木佛、有什麽憑據、師云、趙州東院西、進云、龍寶今朝開爐、不聚泥像、不燒木佛、行脚僧有幾箇、師云、普天普地、進云、轉凡夫爲賢聖、抑賢聖爲凡夫、則不無和尚、離者二途、請師端的、師云、將知不圓前話、進云、潙山向火次問仰山、終日向火因甚無

暖氣、仰作向火勢、潙云、子只得物體能所未在、意旨作麼生、師云、要家醜揚外、進云、仰云、某甲只如此、和尚作麼生、潙亦作向火勢、仰云、和尚只得物體能所未在、潙云、如是如是、如何甄別去也、師云、錯墜此機、進云、擧世盡言、父子唱和、兩口無一舌、師云、龍象蹴踏非驢所堪、進云、若有人、問終日向火因甚無暖氣、和尚對佗作麼生道、師云、炙手助熱、進云、和尚與古人莫止一般也無、師云、大海若知足、百川應倒流、進云、與麼則三冬古木花、九夏寒嵓雪、師云、生薑終不改辣、進云、覓火和煙得、擔泉帶月歸、便禮拜、師云、叱。

乃云、人人有箇火種、只是深埋冷灰、用之不得、今朝風頭稍硬、且爲諸人撥起、以拄杖畫一畫云、會與不會、各各歸煖處商量。

上堂、昨日有人、面前打筋斗、今日有人、背後作鬪訊、似親非親、似疎非疎、爾等諸人作麼生辨別。

冬至小參、僧問、覿面相見不在多端、龍蛇易辨、衲子難瞞、如何是衲子端的眼、師云、禾山皷、雪峰毬。進云、機輪轉處作者猶迷、師云、切忌上頭上面、進云、記得、慈明今日出牓書三圓九卦云、若人會得、不離四威儀中、意在那裏、師云、頂上無骨、領下有鬚、進云、首座一見云、和尚今晚放參、又作麼生、師云、阿誰知此節、進云、千峰勢到嶽邊止、萬派聲歸海上消、便禮拜、師云、好領取著。

乃云、徧界不曾藏處、方是時人難避時節、恰似半夜放烏鷄、左之右之、向甚處辨明、直得陰去陽來、雪寒氷冷、吾家大用觸處繁興、豈敢逐洞山圖熱鬧底之狂解、雖然如是、諸人且道、貴

其耳、孰與貴其眼、卓拄杖一下。

次日上堂、否極泰來、坎去離到底事、彼彼一齊用得最妙、只有無陰陽之地、少人踏著、忽然踏著、不妨和雪踏泥。

謝秉拂上堂、了臨濟賓主句子、續香嚴瀑布垂吟、看來佗是曠蕩、也有巴鼻也有來由、且一代藏教之中、還有著箇時節麼、卓拄杖云、我現寶塔、當爲證明。

上堂、僧問、學人見山不言山、見水不言水時如何、師云、三步可易、五步應難、進云、和尚只恁麼、何異諸方、師云、頑石瓦礫開之必汗、進云、一句不進、兩句不退、有誰等閑籠罩我來、師云、汨梁下尾生、笑言抱道士、進云、若不是遇老師、幾乎賺過一生、便禮拜、師云、直饒實與麼、放過卽不可。

乃云、一滴水一滴凍、曹溪路上少相逢、寒山拍掌拾得笑、南山燒炭北山紅、擊拂子下座。

佛成道上堂、僧問、菩薩今夜成道、號之名如來、只如見明星、未審明什麼邊事、師云、青寥寥白的的、進云、莫是佗一翳在眼、空花亂墜麼、師云、娘生幾箇舌頭、進云、學人若向此去、和尚還許也無、師云、山僧不如拄杖、進云、因甚肯昔日不肯今日、師云、只爲兩頭走、進云、若無此語、爭辨老子端的、師云、我被儞辯倒、進云、心不負人、面無慚色、便禮拜、師云、古今惟多。

乃云、澄月映徹、衆星燦朗、箇中無釋迦、阿誰當成道、卓拄杖云、屎上更加尖

上堂、臘雪連天白、寒風逼戶寒、失却口不問儞、拈得鼻孔來看、如無人拈得、擊拂子云、忽然撞著來時路、始覺從前被眼瞞。

除夜小參、僧問、舊年送不去、新歲迎不來、新舊本無情、去來豈可擬、師云、我且愛儞向下閣頭上行、進云、記得、僧問香林、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看、臘月盡、意旨作麼生、師云、鐵券難分付、進云、來日定是大年朝、有何祥瑞、師云、家家爆竹、處處燒錢。

乃云、日日日東出、日日日西入、一出一入自循環、逗到臘月三十日、村裏打祭鬼鼓、山塢唱樂神歌、人人帶淳素之風、箇箇稱太平之時、況衲僧家半夜見日頭、阿誰辨新舊、只管大坐當軒、眼眼相照分歲、雖然荒涼不烹鳳髓、其中淸味勝花金齏、何故、擊拂子云、雪寒北嶺、梅香南枝。

復擧、雪竇拈拄杖云、頭上是天、脚下是地、眼前綠水、背靠靑山、衲僧道我會也、忽騎驢入儞鼻孔裏、牽牛入儞眼睛中、又作麼生商量、師云、當年若有人出衆喚老和尙、待雪竇才擡頭、道更詣函丈、便歸衆去、直饒以方投規、自然函蓋相應。

正旦上堂、僧問、元正啓祚、萬物咸新、好箇時節、願聞法要、師云、相逢共賀萬年慶、進云、喚作新年頭事耶、亦是自己消息、師云、一有多種、二無兩般、進云、與麼則大德播四海、龍寶滿一天、便禮拜、師云、闔國咸知。

乃云、日暖風和、鳥啼花笑、大機與大用繁興於家家、何也、卓拄杖云、月建首寅、斗柄指戌

元宵雪下上堂、拈拄杖卓一下云、一燈百千燈、明暗雙雙底時節、又卓一下云、百千燈一燈、夜深共看千巖雪、所以道、有時前照後用、有時後用前照、有時照用同時、有時照用不同時、又卓一下云、且道、是照是用、各各自辨別。

上堂、龍寶無伎倆、只是不喪目前機、忽得氷消雪霽、自然見梅腮柳面奇、喚之以作禪道佛法、

處處春山應聽子規參。

佛涅槃上堂。僧問、世尊云、我若謂滅度、非我弟子、我若謂不滅度、亦非弟子、畢竟如何領略去也、師云、醉後郎當愁殺人、僧云、與麼則莫今日卽有、明日卽無麼、師云、知恩者少、負恩者多、僧提起坐具云、學人只喚者箇作世尊、和尚喚者箇爲是有爲復是無、師云、狗啣赦書。乃云、釋迦老子、於奇花茂葉之中、藏得唯一堅密身、名之爲涅槃眞常樂、若人向一榮一枯處相見、何如波旬舞袖長、雖然迦葉、豈不是偸羅國人乎。

佛誕生上堂、毗嵐園中無憂樹下、金蓮生地丘墟平坦、因甚天台山高華頂峰低、會得我今灌沐諸如來、不會淨智莊嚴功德聚、擊拂子下座。

結夏小參、二千年前、靈山百萬大衆、見地只爲解打野榸、世尊拈出一箇膠盆子、箇箇刺腦打入、澄濾身心、成熟慧身、謂之禁足護生、剋期取證、二千年後、中華扶桑、類例攀來、彌綮彌昌、而觀時之所卜、嫌杓頭窄、擇炊巾廣、自古自今遐邇自別、龍寶英傑之徒、九夏道聚之義、恰雖似勺水袋龍、自是有一件透不過事、不同小小、纔進前退後、墮坑落塹、且道、是那一件事、卓拄杖一下。

復擧、洞山因僧問、寒暑到來、如何回避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、師云、洞山老漢小慈妨大慈、若是德山臨濟門下、終不可認驢鞍橋作阿爺下頷。

次日上堂、僧問、猿抱子歸靑嶂後、鳥啣花落碧巖前、伊有結制安居底道理也無、師云、豈不見

道、以大圓覺為我伽藍、進云、恁麼則頭頭是圓覺伽藍、物物即平等性智、師云、直饒與麼去、作蛤蜊之子、進云、記得、雲門垂語云、十五日已前不問、十五日已後道將一句來、意旨作麼生、師云、半幅全封、進云、正當十五日、請師垂指示、師云、月白風清、進云、只如道日日是好日、莫有坐斷千差底麼、師云、韶陽得不墮風規、進云、此是古人為人處、不涉古今、如何商量、師云、八十翁翁拄杖行、進云、千峰勢到嶽邊止、萬派聲歸海上消、便禮拜、師云、親會始得。

乃云、龍寶有百味珍羞、尋常不敢拈出之、今日方是結制、須布施諸人去、以之為休糧方、以願九旬空跡、喝一喝云、切忌崑崙吞。

謝秉拂夏齋上堂、天有三光、其明高遠、以被群機、地有五味、其德廣大、以保萬有、諸人要知其功所歸麼、良久云、禾山打鼓、雪峰輥毬。

上堂、僧問、目前無法、門外車馬鬧浩浩、意在目前、屋頭松竹冷青青、師云、時節難逢、進云、記得、雲門示衆云、拄杖子化為龍、吞却乾坤了也、山河大地、何處得來、意在那裏、師云、莫教皴皴鱗鱗、進云、已吞却乾坤了也、拄杖子為甚落在和尚手裏、師云、物歸有主、進云、昔日雲門與今日和尚相去多少、師云、出頭天外看、誰是我般人、進云、始知一條拄杖兩人扶、師云、誣人之罪。

乃拈拄杖卓一下云、恁麼恁麼、如空裏打橛、又卓一下云、不恁麼不恁麼、似水中捉月、要兩處收功、天晴日頭出、又卓一下。

重午上堂、僧問、文殊令善財採藥、財云、盡大地無不是藥者、此意如何、師云、崑崙嚼生鐵、僧云、善財拈一莖草度與文殊、殊云、此藥亦能殺人、亦能活人、拈驗在那裏、師云、黃蘗樹上生木蜜、

僧云、學人通身是病、作麼生醫、師云、病得須愈、僧云、直饒與麼猶墮在圓覺四病、作麼生得獨脫無依去、師云、早知、儞不能病得、僧云、快哉快哉、今朝天中節、時清道泰、門安戸靜、師云、許儞一句相當去。

乃云、今日端午節、諸人直須明得明德、消殄天行百怪、除却佛病祖病、蓋只是所以妖不勝德且道、如何是明德、擊拂子云、歸依佛法僧。

半夏上堂、僧問、九旬已過半、雲山翠色深、現成公案、無處回避、此景此時、願開法要、師云、放儞三十棒、進云、古人有一則因緣、許學人咨參也無、師云、佛不奪衆生願、進云、臨濟因半夏上黄蘗、見和尚看經、濟云、我將謂、是箇人、元來是揞黑豆老和尚、意旨作麼生、師云、水上推葫蘆子、進云、濟住數日、乃辭去、蘗云、汝破夏來、不終夏去、未審如何辨端的、師云、般勤送別瀟湘岸、進云、濟云、某甲暫來禮拜和尚、蘗遂打趁令去、是什麼心行、師云、令不虛行、進云、濟行數里、疑此事、却回終夏、意在那裏、師云、古今能有幾人、進云、一人在途中不離家舍、一人在家舍不離途中、是甚麼道理、師云、鐵牛擊出黄金角、進云、與麼則達磨不來東土、二祖不行西天、師云、能知者須能用。

乃云、結制已過半、水牯牛鼻孔數寸長、諸人只與麼去、便知二六時中丁不走作、儻或離跛擺臂、無析楊可用、參。

上堂、僧問、六月十五、天下毒熱、一機一境、盡落今時、不涉唇吻、如何通津、師云、退後退後、進云、浮瓜沈李、積雪爲山、見成公案、逈絶多端、豈不是清涼世界、師云、心不負人、面無慚色、速道速

道、進云、黃龍有三關語、還許咨參也無。師云、劈開華嶽連天色。進云、我手何似佛手、意旨如何。師云、開拳作掌。進云、我脚何似驢脚、又作麼生。師云、履齒印蒼苔。進云、如何是學人生緣處。師云、岣嶁峰頭神禹碑。進云、和尚一一祗對、的的分明、只箇三關爲一爲三。師云、謝你答話。進云、與麼則會三成一易、會一成三難。師云、將謂問事漢。進云、恩大難酧。便禮拜。師云、錯。

乃橫拄杖云、炎炎六月紛紛雪下、只箇好時節、覷著生眼花、雖然如是、卓拄杖云、不因射鵰手、誰識李將軍。

七月旦上堂。僧問、署雲散空、涼氣滴秋、好箇時節、願聞提唱。師云、劈腹剜心。進云、便恁麼去時如何。師云、車不橫推。進云、向上全提鐵壁銀山、放開線路墮坑落塹。師云、直須踏上頭關。進云、乾峰示衆云、法身有三種病二種光、一一透得始是穩坐、意在那裏。師云、不喜舊路逢人。進云、雲門出衆云、庵內人因甚不見庵外事、又作麼生。師云、爲己鎖者多、爲佗鎖者少。進云、不因夜來鴈、爭見海門秋。便禮拜。師云、好看好看。

乃云、雨洗炎威秋意淸滴、風到梧桐擊蒙最的的的人焉廋哉、閃電之機霹靂、擊禪床一拂子。

解夏小參。僧問、秋風颯颯、遍界淸涼、時節已至、其理自彰、此節此景如何是其理。師云、三十年後此話大行。進云、與麼則現成公案、迥絕商量。師云、依稀似曲纔堪聽。進云、記得、僧問雲門、初秋夏末、前程忽有人問、如何祗對。門云、大衆退後。意旨作麼生。師云、眼裏無筋一世貧。進云、僧云、過在什麼處。門云、還我九十日飯錢來。意在那裏。師云、對牛彈琴。進云、恁麼時節、若有人問

前程事、和尚作麼生指示佗、師云、一雙草鞋兩文錢、進云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師云且看脚下。

乃云、立制期滿、殿最功齊、取證有則、賞勞時至、何妨人人上朗風鳥騰、箇箇踏虛無神遊、踏著不瞋、築著不得、好箇道伴誰不交肩、雖然如是、出門三步、撞著箇十字街頭無向背底、不知將那箇一句子辨得佗端的、若辨不得、卓拄杖云、勸君盡此一杯酒、西出陽關無故人。

復舉、大隋因僧問、金鵬附書、爲什麼不露翼、隋云、不通虛信、師拈云、大隋古佛雖善其機、及乎打鎖扣枷、恐無此作、若有人問山僧金鵬附書爲什麼不露翼、只對佗道、勘破了也、且道、與古人是同是別、具眼禪流、請辨緇素看。

次日上堂、僧問、衲僧家牙如劍樹、眼似銅鈴、四月十五、結佗不得、七月十五、解他不得、畢竟如何指南一路、師云、謝答話、進云、恁麼則西天此土草鞋底、日月星辰拄杖頭、師云、人心似等閑、進云、記得、翠巖示衆云、一夏爲兄弟東語西話、看翠巖眉毛在麼、此意如何、師云、迥想化下有人、進云、保福云、作賊人心虛、還端的也無、師云、豈不信道、進云、長慶云、生也、試委悉看、師云、淨手裝香、進云、雲門云、關、如何透得、師云、洎乎鎖斷、進云、此三大老各出隻手扶樹翠巖、用處莫止一般麼、師云、官差不自由、進云、虛堂老子道、只解同心不能同志、又作麼生、師云、吉凶不上卦、進云、寶山今夏與兄弟東語西話、眉毛拄梵天、與翠巖相去多少、師云、嶽秀靈芝異、進云、一句迥超千聖外、松蘿不與月輪齊、便禮拜、師云、咦。

乃橫拄杖云、有佛處不得住、無佛處急走過、卓拄杖一下云、莫孤負趙州老漢、不然靜處娑婆

訶。

上堂、卓拄杖云、若識得者箇、三世諸佛呵之、若不識得者箇、歷代祖師叱之、何也、風從八月涼、靠拄杖下座。

中秋上堂、拈拄杖卓一下云、昨夜十四有此月、今宵十五有此月、昨夜世人嫌此月、此月猶以有所缺、今宵世人賞此月、此月圓以無所缺、此月無有圓缺心、世人將圓缺分別、分別取相不能泯、隨造隨作自生滅、若要得遠離生滅、無相光中須休歇、且道、無相光中作麼生休歇、擲下拄杖下座。

上堂、塞鴈度翠微、巖葉落庭際、幾囘老瞿曇、爲償脚頭債、雖然沒交涉、更有人眼裏著須彌去在。

重陽謝海崖義上堂、九日東籬下、菊花賞酒仙、汨羅獨醒者、過在求英賢、何故、豈止麒麟登海嶼、須知義出自豐年、擊拂子一下。

開爐上堂、擧、潙山問仰山、終日向火、爲甚無暖氣、仰山作向火勢、師云、潙仰父子、不妨冷處著把火、寶山門下只要箇箇暖氣相洽、何故、拈起死柴頭、且向無烟火。

上堂、拈拄杖云、彌勒眞彌勒、分身千百億、卓拄杖云、時時示時人、時人自不識、靠拄杖下座。

十一月旦、謝英都寺上堂、寒風匝地、寒鴈橫空、辨玉正按、磨塼旁提、頭頭都顯露、物物總現成、何故、蓋是英靈衲子、只爲向事上見。

因雪上堂、少林立鷲山坐、爲相逢不相知、趙老臥龐公指、只要知而故犯、若是我這裏、直饒銀

椀裏盛將來、也是老鼠引生薑、參。

冬至小參、僧問、冬至前後、砂飛石走、頭頭合轍、處處逢原、學人上來、請師指的、師云、觀機無改路、進云、與麼則石笋抽枝、鐵樹生花、師云、大家好看、進云、只如諸方今夜堆盤滿飣、是同是別、師云、黃金自有黃金價、進云、德山小參不答話、有問話者三十棒、此意如何、師云、儞若來得、棒頭有眼、進云、趙州小參要答話、有問話者致將一問來、又作麼生、師云、不是寃家不聚頭、進云、和尙小參、要答話不要答話、師云、不是與人難共聚、進云、畢竟二大老用處與和尙用處、莫止一般麼、師云、莫粘作一堆、進云、學人今夜小出大過、便禮拜、師云、好去好去。

乃云、六爻既窮、陰魔自殄、一陽來復、吾道大亨、直得釋迦老子鼻孔遼天、樓至如來脚跟踏地、慇懃相逢合掌攀擧、互相慶賀道、亞歲令節、萬物重新、未徹者徹、未到者到、伏惟人人起居萬福、大衆若聽得者箇說話、青色光明雲、若擧得者箇說話、白色光明雲、且道、兩處俱通底亦作麼生、擊拂子云、來日定是書雲節。

復擧、僧問雲門、如何是法身、門云、六不收、拈云、諸人一向與麼傾、相逢不出手、其或未然、前頭更有雪在。

次日上堂、拈拄杖云、只箇片田地、四時不消長、古今爲如此、今古一陽生、卓拄杖一下。

因雪上堂、諸人未來者裏、記得山僧爲人句子、及乎到來者裏、問著箇箇忘却、因甚如此、良久云、只因雪上加霜。

上堂、巖竇宵寒擁山皷、月高枯木霜禽睡、明覺雖是爲一代之龍門、爭奈坐在無事甲裏、何也、

良久云、臘月苦寒風雪吹、急急抽身已是遲。

除夜小參、僧問、新底不知、舊底已往、舊底不知、新底已來、新舊不相知、物物正對偶、還端的也無、師云、三十三天、二十八宿、進云、如向爆竹未鳴已前、更開一條活路、又作麼生、師云、山門頭合掌、進云、如何是轉身處、師云、佛殿裏燒香、進云、昔日北禪烹露地白牛分歲、和尚今夜將什麼與諸人分歲、師云、細嚼似蜜甘、進云、恁麼則大衆飽德去也、便禮拜、師云、也好金毛獅子。

乃云、舊年今夜去、去去都是舊曆日、新年今宵來、來來齊是新鮮年、交頭結尾、家家生涯是別、因緣時節、處處大用現前、便見龍寶山頂、仰之無際、大德門下、瞻之無堺、豈啻乎時清道泰、自然得和氣靄然、正當恁麼時、與諸人保愛底一句、作麼生道、擊拂子云、臘雪連天白、春風逼戶寒。

復擧、香林因僧問、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看、臘月盡、山僧不然、若有人致此問來、只對佗道、大坐當軒、且道、與古人是同是別、具眼禪流、請分緇素。

歲旦上堂、僧問、鏡清因僧問、新年頭還有佛法也無、清云、有、此意如何、師云、天高萬象正、進云、明敎又答無、有優劣也無、師云、海闊百川朝、進云、僧云、如何是新年頭佛法、清云、元正啓祚、萬物咸新、如何委悉、師云、南地竹、北地木、進云、鏡清道有、明敎道無、和尚又作麼生、師云、有意氣時添意氣、得風流處也風流。

乃拈拄杖云、鳳曆開元日、王春肇始時、祥雲翻空、瑞雪滿地、發揮佛祖大機、成熟人天性命、諸人盡是此中人、不妨隨物作主、隨處納祐、卓拄杖一下。

上元上堂、僧問、人間燈天上月、有明有暗、有圓有缺、請師端的、師云、萬里一條鐵、進云、龍潭吹滅紙燭、德山大悟、未審見處在明中在暗中、師云、狗啣赦書、進云、與麼則發光輝去也、師云、阿誰不承恩。

乃云、朶朶放金蓮、重重懸珠網、紙撚無油底、莫鑿壁偷光、擊拂子下座。

佛涅槃上堂、僧問、謂滅非弟子、謂不滅非弟子、如何見得爲佛弟子、師云、杜鵑啼處花狼藉、進云、今日則有、明日則無、今日旣道有、向何處見世尊、師云、一任問山僧、進云、與麼則明日何無、師云、不妨答阿彌、進云、四衆各啼泣、雲門爲甚麼道打殺、師云、爲狗守其主、進云、愛之欲其生、惡之欲其死、和尚又作麼生、師云、常用其機、進云、恩大難酬、便禮拜、師云、吽。

乃云、擲出雙趺如日明、人間天上詎藏韜、時流若具波旬眼、舞袖猶須在柳梢、喝一喝下座。

三月半、遊山回、謝首座・維那幷龍翔塔主上堂、擧、長沙一日遊山歸門首、首座問、和尚什麼處去來、沙云、遊山來、座云、到什麼處來、沙云、始隨芳草去、又逐落花回、座云、大似春意、沙云、也勝秋露滴芙蕖、師云、奇哉怪哉、兩口一舌、山僧數日來遊山回來、首座不必要問、山僧不必誣花、不是無其卜意、只愼綱令有人、何故、爲祥爲瑞、龍驟鳳翔。

上堂、豎起拂子云、西天四七、東土二三、盡向龍寶拂子頭上打筋斗、諸人還見麼、若也見得、不妨雨中見杲日、其若未然、擊拂子云、德山羅漢。

佛誕生上堂、僧問、老胡今日出母胎、未審本來面目、聻、師云、東山西嶺靑、僧云、恁麼則雨洗風磨自鮮新、一盆香水爲誰潑、師云、將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩、僧云、世尊下生、牽枝引

蔓、如何是直截根源一句、師云、薰風自南來、殿閣生微涼、僧提起坐具云、爭奈有者箇、師云、有則有、到爾無、僧放下坐具云、還端的也無、師云、三十年後、面熱汗出。

乃云、黃金讓采、琉瑠凝翠、龍寶手裏有杓柄、不同當日溫涼水、擊拂子一下。

結夏小參、僧問、聲前一句不墮常機、禁足護生、當圖何事、師云、鳳非竹實而不食、非醴泉而不飮、進云、西天蠟人冰、東土鐵彈子、束之高閣、和尚今夏一百二十日、以何爲驗、師云、僧堂裏佛殿前、進云、望見資福刹竿便回、脚跟下好與三十、此意如何、師云、車不橫推、進云、望見雪峰便參主事、又作麼生、師云、庭禽養勇終待驚人、進云、畢竟還有結制安居底時節麼、師云、鐵丸無縫罅、進云、和尚今日小參、爲守舊規別有新條耶、師云、崑崙劈不開。

乃云、怛薩阿竭、有廣大規範、二千年前爲百萬鳳毛、後代兒孫不忘基本、力之以是箇漆器、苟得其人則不踞圓覺伽藍、不恭平等性智、手碎鐵山、足跨巨海、盡格外玄機、用衲僧作略、未爲分外、若也有箇孜孜兢兢底漢、長期一百二十日內、眼眸不讓開、脚板不讓踏、以阡陌爲井塹、以聚落爲茅坑、函蓋相應、方圓相投、乃是列刹攸撰、吾門優曹也、敢問諸人、此兩種禪和、那箇親那箇疎、擊拂子云、道著道不著、且於三條椽下摸索。

復擧、雲門因僧問、如何是淸淨法身、門云、花藥欄、僧云、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、師云、者僧若是作禮而去、須見雲門出人全機、雖然如是、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人。

次日上堂、僧問、竺土老子恐他害命、爲渠結制、謂之禁足、豈非箇一著弄巧成拙、師云、鳳林吒之、進云、須彌那畔大洋海底、一時走徧、當有此漢出來、和尚如何教他制禁、師云、且坐喫茶、進

云、記得、雪峰領衆到浮江、問云、欲寄二百僧過夏、得否、浮江以拄杖畫一畫云、著不得、還端的也無、師云、冤家結得、進云、一畫底、蘄、師云、舌頭拖地、進云、著不得、又作麼生、師云、勞力不少、進云、有人道、寄二百衆過夏、未審和尚、容他也無、師云、莫向淨地上屙、進云、如何是和尚一句子師云、退後退後。

乃云、衲僧家氣字如王、祖佛俱不容、今朝因甚坐在二千年前影子裏、卓拄杖云、鑿池不待月、池成月自來。

端午上堂、拈拄杖云、文殊要藥、財善採藥、誰通其機、爭似我這裏箇箇大安樂、卓拄杖云、切忌、求無病藥、靠拄杖下座。

上堂、得之而蹉過、不得之而不及、雖然如是、三十年後、此語大行始得、以拂子擊禪床下座。

半夏上堂、今朝相逢等閑間過、人人解道、今日半夏、阿呵呵阿呵呵、山僧與麼道、是褒諸人、是貶諸人、卓拄杖一下云、六月賣松風、人間恐無價。

上堂、舉、菩薩於樹下而坐、天龍八部・梵釋四王、悉以歡喜於空中踴躍讚嘆、時第六天魔王宮殿自然動搖、心大懊惱、乃念言、沙門瞿曇、今在樹下端坐思惟、不久廣度一切、超越我境界、今往壞亂之、乃俱無量眷屬圍繞菩薩、發大惡聲震動天地、菩薩心定顏無異相、怡然不動、不驚猶如師子處鹿群、於是諸魔自然散壞、師云、大衆、世尊降魔不無、只是用如來禪故、其力不全、吾衲僧家、用祖師禪降伏衆魔、亦作麼生、以拂子擊禪床一下云、看看、諸魔盡膽裂、道光忽超昇

上堂、至道無難、唯嫌揀擇、忽拈拄杖卓一下云、者箇是龍寶拄杖子、至道與揀擇在什麼處、又卓一下云、但莫憎愛洞然明白。

上堂、世界恁麼熱、爲什麼看雲亭上、炎威到不得、若人識得者箇道理、三十年後、免得一日頭白。

七月旦上堂、一葉[illegible]天下秋、一塵起大地收、時節難遇、難提掇處轉風流、擊拂子下座。

解夏小參、僧問、昨見垂楊綠、今逢落葉黃、聖制周圓事、願更聞舉揚、師云、有意氣時添意氣、進云、兄弟一夏、不犯法令、來日期滿、東去西行、賞勞言薦、又作麼生、師云、家家門路通長安、進云、溈山問仰山、子一夏不上來、在下面作得箇什麼、仰云、鉏得一片畬、種得一籮粟、意在那裏、師云、父子取火夜遊、進云、溈云、子不虛過一夏、意旨作麼生、師云、末後爲初、進云、仰云、和尚作得箇什麼、溈云、日間一食、夜後一寢、如何辨端的、師云、兩口一舌、進云、仰云、和尚亦不虛過一夏、道了吐舌、潼、師云、知跪乳之禮、進云、溈云、子何得自復己命、如何領略、師云、得而不戮、進云、忽有人問著和尚今夏事、又如何祇對、師云、徐行踏斷流水聲、縱觀寫出飛禽跡、進云、不因夜來鴈、爭見海門秋、便禮拜。

師乃云、秋風吹玉管、知音不在青霄之外、秋月碾冰輪、光輝盡塵剎而照絕、全放全收、古路有誰踏著、一擒一縱、動容聲色威儀、矧亦諸人一百二十日、終不虛拈匙放筯、來日期滿、聖制周圓、各各得從脚跟下去、不妨踢倒須彌、立乾滄溟、雖然如是、忽若見娑竭出海、龍宮震、切莫誦平地夜他、何故、抖擻多年穿破衲、襤襂一半逐雲飛。

復舉、翠巖夏末、示衆云、一夏已來與兄弟東說西話、看翠巖眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、饒却業茸氈、長慶云、生也、車不橫推、雲門云、關、父羊子證、三大老各雖出隻手、奈何未出翠巖關棙子、只如不落他圈繢一句、又作麼生、一峰雲片片、雙磵水潺潺。

次日上堂、僧問、長期已滿、布袋頭開、月白風高、無非秋色、師云、洞房深處說私情、進云、學人便恁麼去時如何、師云、雨過夜塘秋水深、進云、與麼則直須向萬里無寸草處去、師云、貪程太速、進云、可謂一夏不虛度光陰、師云、赤土畫簸箕、進云、一聲雷震清飈起、天上人間知幾幾、便禮拜、師云、何處不清凉。

乃云、一夏禁足安居、與諸人取證、山僧多是昏沈、今朝解開布袋、與諸人遨遊、山僧渾是走作、所以道、佛手遮不得、人心似等閑、到村草步頭莫錯舉。

中秋上堂、僧問、靈山話月、曹溪指月、意旨如何、師云、牛頭沒馬頭回、進云、寒山子底、又作麼生、師云、崑崙嚼生鐵、進云、玄沙爲什麼道、生死岸頭事、試甄別看、師云、和盤推出夜光珠、進云、恁麼則天上人間、未出此光影中、師云、莫把商音作羽音、僧提起坐具云、者箇是爲出光影中、未出光影中耶、師云、扁舟已過洞庭湖。

乃云、藥嶠披雲笑、王老拂袖行、寒山不慈無口稜、長沙無由私路行、檢點將來、盡是在光影裏作活計、何也、中秋三五今宵月、爽氣遠浮銀漢淸。

上堂、拈拄杖云、當於色中不失色體、於無相中不礙有、故達磨師祖無端走到東勝昇州、却還向山僧手裏藏身、諸人若見得、上大人丘乙已、若見不得、化三千七十士、卓拄杖一下。

重陽上堂、今朝重九節、東籬菊已花、對景思陶令、登高憶孟嘉、且道、其中意又作麼生、擊拂子云、相逢共賞紫萸茶。

上堂、空手把鋤頭、步行騎水牛、傅大士用盡平生伎倆、只道得胡兒無鬚底句、山僧不會要按牛頭喫草、莫教巖葉霜飛秋意深。

開爐上堂、擧、趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭有箇無賓主話、直至而今無人擧著、師云、咄、儞只要灸手助熱、誰家竈裏火無煙、卓拄杖一下。

上堂、是法住法位、世間相常住、驀拈拄杖卓一下云、者箇是龍寶拄杖子、喚作是法入地獄如箭、喚不作是法亦入地獄如箭、是故世尊苦口便道得住法位三字、雖然如是、又卓拄杖一下、云、寒風凋敗葉、且喜故人歸。

冬至小參、僧問、群陰剝盡、一陽復生、正與麼時、衲僧如何轉身、師云、鐵輪碎石、進云、陰陽代謝、四序變遷且致、只如卦文未分、風塵未動時、又如何、師云、萬里一條鐵、進云、恁麼則一氣不言含有象、萬靈何處謝無私、便禮拜、師云、逢人莫錯擧。

乃云、有物先天地、鐵鎚擊不碎、無象本寂寥、夜合而晝開、能爲萬象主、擁之而不聚、不逐四時凋、撥之而不散、恁麼恁麼、雪嶺泥牛吼、不恁麼不恁麼、雲門木馬嘶、金不博金、水不洗水、且置書雲令節、箇箇保愛、順時納祐底一句、又作麼生、擊拂子云、律管知處、繡紋線長、

復擧、僧問古德、如何是冬來事、德云、京師出大黃、師拈云、巖竇宵寒擁山幘、月高枯木霜禽歷、寶山著此兩句、爲賓竭力、爲主竭力、具眼禪和、請辨端的。

次日上堂、時臨亞歲、節屆書雲、一氣不言鐵樹開花、初爻無象萬彙盡彰、正與麼時、活脫衲僧如何受用去、卓拄杖一下云、一冬與二冬相逢不出手。

祐德禪寺佛堂供養陞座、師拈香云、此香非從天所生、非從地所生、非從虛空所生、從檀主信心生、根苗蟠大明之表、條幹茂至陽之清、爇向爐中仰祝　帝道遐昌、俯祈香花敷榮。

師就座云、聲前領旨已犯祖令、句後承當法不相饒、不涉二途、莫有解問底麼、僧問、甘蔗流苗應刹塵、覺場高發利生因、師云、誰不承恩、進云、卓犖雄機、隨處無阻、古今肯重事、請師不恡一句、師云、騎一問來、進云、直下構得更不回頭、亦作麼生、師云、寶杖夜鳴寒嶠月、進云、昔日須達建獨園精舍、屈世尊爲群生說法、今日檀越造祐德禪寺、請和尚爲四衆演法、其益還有優劣也無、師云、無有優劣、進云、今日檀越造此禪苑、與昔日須達建彼梵刹、其功又有多少也無、師云、無有多少、進云、正法末法時異、佛法僧法名殊、爲甚其功得等同麼、師云、洞中山色四時好、雲外溪聲一樣寒、進云、與麼則生生頂奉輝心鏡、廓照塵勞信有餘、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、千聖靈機、列祖命脈、嶺上白雲、巖前綠水、亘古亘今、透色騎聲、青寥寥白的的、難提掇處轉是風流、迄于德山行棒、臨際行喝、雪峰輥毬、禾山打鼓、齊是恁麼時節、只露目前些子、所以山僧歷山渡水、得得而來開堂演法、爲大檀信開運添德、增壽增福、亦不出者箇、且道、畢竟其功歸何處、擊拂子云、國清才子貴、家富小兒嬌。(敍謝不錄。)

又云、至道曠遠、幽致虛凝、佛佛以之匡持、祖祖以之保護、其要只在利度群有、隨處作主脫體現成、隨物能轉、苟得其人則匪啻自得靈然、爲慈悲動於中、隨順菩薩行願、豁開本有光明藏、

賑濟五趣之貧兒、高低普應、前後無斷、遇縁卽宗、無滯一隅、所以大檀越具廣大知見、有堅固信力、運出自己家珍、建立奇麗禪苑、安置佛僧、紹隆法寶、丁于五濁惡世中、人無至信時、發無比之大願、成見聞之巨益、能爲蟾蜍之依託、最作漂沈之要津、以所集功課酧二親之幽靈、薦蓮開於上品、遠請山僧來、贊揚其功德、若論其功德、山僧未開口已前、其功廣施、其德偉被、矧亦雪裏楳山、以儼淨剎之勝境、風拂寒木而唱念法之妙音、正當與麼時、箇箇無盡、剎剎塵塵、悉是展無量壽佛之慈顏、不可說不可說、頭頭物物、現信心不二之全體、一心多心、一劫多劫、圓三身四智、徧八解六通、五眼融通、無處而不鑑、十力滿足、無邪而不摧、具足一切、攝受菩提、智智清淨、無別無斷、深入大陀羅尼妙門、住大不可思議境界、有如是作用、如是奇特、如是威光、如是吉祥、山河大地、草木叢林、情與無情、因中與果上、無高無下、發大機大用、得大安大樂、諸人要見此事麼、竹有上下節、松無古今青。

舉、世尊初成道、於普光寶殿不離道樹、上須彌山頂帝釋宮、帝釋化作一寶坊、爲說十住法門、師拈云、世尊半夜日頭出、帝釋日午打三更、若是山僧開堂底、天平地平、卓拄杖一下便下座。

上堂、拈拄杖云、拄杖子有三件長處、第一疾程、朝到西天暮歸東土、第二妙言、一句截流、萬機寢削、第三巧通、變作龍上天、作蛇入草、若人善識得、還我話頭來。

佛成道、上堂、僧問、我佛弃萬乘尊榮、受六年饑凍、忽覩明星、豁然成道、未審成何道、師云、鼻孔掛上唇、僧云、世尊說法、大梵天王、以金色波羅花獻、此意如何、師云、報恩須是還知恩人、僧云、世尊拈起顯示大衆、惟有迦葉尊者破顏微笑、意旨作麼生、師云、二虎爭時、其勢不生、僧云、世

尊云、吾有正法眼藏、分付摩訶大迦葉、又作麼生、師云、說向愁人愁殺人、僧云、今日和尚說法、有人獻花、未審如何顯示、師云、也爭奈不得破顏人。

乃云、坐吉祥之座、切要覓木橛子換眼睛、及乎見明星、果然將錯就錯、從此起定賣弄大地、山僧直得瞎地裏點頭、諸禪德儞如解點頭底、取次不敢肯牛畔之供。

因雪上堂、譬如大地一片雪、見底謂之白、踏底謂之冷、只如不見不踏底、又作麼生道、以拂子擊禪床一下。

除夜小參、僧問、一年三百六十日、交頭結尾、別有生涯、如何得大用現前、師云、頂上無骨、頷下有鬚、進云、北禪今夜烹露地白牛分歲、撿點將來、正是殘盃冷肉、和尚將什麼施設大衆、師云、大家在這裏、進云、三陽交泰萬彙亨、定是來年蠶麥熟、便禮拜、師云、不妨道著。

乃云、年窮歲盡、結角羅紋、木馬飛上天、泥牛走入海、誰管陰陽變化、氣候遷謝、大底鼻孔向下垂、多年曆日不相干、所以道、日日是好日、時時是好時、交頭結尾、別有生涯、擊拂子云、天淨不知雲去處、地寒留得雪多時。

正旦上堂、僧問、元正啓祚、萬物咸新、衲僧門下有何祥瑞、師云、方袍圓頂、進云、與麼則年年是好年、日日是好日、爲什麼還得有新有舊、師云、一回拈出一回新、進云、可謂堯風舜日、和氣靄然、樵唱漁歌共樂豐年、便禮拜、師云、方知儞是識其言。

乃云、日暖風和、百花競發、人傑地靈、色足可觀、且道、其中慶賀事作麼生、卓拄杖、伏惟箇箇道體起居萬福、

元宵上堂、我見燈明佛、本光瑞如此、眼中瞳子面前人、寶山未嘗說會與不會、箇箇莫向燈影裏轉身、擊拂子下座、

佛涅槃上堂、不許無邊身之供、喫工巧之和羅飯、胡亂貢峭非知其時、嗚伊嗚伊、年年二月是仲春。

三月旦上堂、甘草先生、苦草後生、好蠶麥熟、天平地平、忽有此漢出來、道和尚與麼說話、爲是佛法是世法邪、山僧向佗揶揄道、三月無三卯、田家必飽。

上堂、春山青春水綠、不是目前機、亦非目前事、且道、畢竟是什麼、擊拂子云、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香。

大德寺語錄 終

# 筑州太宰府萬年崇福禪寺語錄

侍者　宗貞　編

山門、門頭實地、箇箇踏著、因甚諸人、隨我入得、喝一喝。

佛殿、前佛後佛、隱顯非一、咄、不因新長老證明、知佗一對無孔鐵。

土地堂、護法先須識得主人公、阿誰是主人公、扣齒三下云、東西南北、一等家風。

祖師堂、者一隊老漢、惜乎坐在者裏、提起坐具云、若不行此令、誰敢得扶起。

方丈、橫拄杖云、關中主、能解與本分草料、鳥觜薄舌、莫胡亂供款去、靠拄杖。

拈帖、溫潤之文、格調之氣、直饒衲被蒙頭、奚以讓爲之義。

山門疏、成言於語、成語於言、如何若何、官不容針。

法座、諸人喚作高廣座子、山僧喚作者箇座子、何故、一步云、只爲到與麼地。

師陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、

陛下恭願、

龍圖永固、玉葉彌芳、

次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、奉爲征夷大將軍、增崇祿算、伏願、高贊域中之德、長提塞外之

令。

又拈香云、此一瓣香、爇向爐中、奉爲大檀主筑州大宰門泊都督司馬、增崇祿算、伏願、扇威風於千歲、輝佛日於萬世。

拈香云、此香爇向爐中、供養前住巨福名山建長禪寺、先師　勅諡圓通大應國師南浦和尚大禪師、用酧法乳之恩。

師斂衣就座云、明鏡當臺、明珠歷掌、要分姸醜者、直下來相見、有麼有麼、時有僧問、綠樹陰濃夏日長、樓臺倒影入池塘、師云、時節難逢、僧云、和尚辭帝里、　皇帝留之、更向甚處通一路來、師云、鐵船水上浮、僧云、寰中天子敕、韲、師云、誰不承恩、僧云、與麼則杲日麗天、清風匝地、師云、大方無外、僧云、記得、保壽開堂、三聖推出一僧、意旨如何、師云、白雲深處金龍躍、僧云、壽便打、又作麼生、師云、碧波心裏玉兎驚、僧云、若忽有人、推出一僧、如何祇對、師云、風光可愛、僧云、者箇且置、今日還有禁足安居底道理麼、師云、大家在者裏、僧云、十五日結制則不問、卽今一時結去看、師云、處處綠楊堪繫馬、僧云、恩大難酧、師云、能有幾人、僧禮拜。

師乃云、世尊拈花、迦葉微笑、君子愛財、取之有道、正法眼藏從此流通、遞代傳持受虛接響、激揚鏗鏘坐斷古今、珠回玉轉、八面玲瓏、迄于其大機圓應、大道無方、一賓一主、擒縱擡搦、收放明晤、電轉星飛、窮則變、變則通、青於藍、寒於水、聽敎挺拔威音那畔、蕭然空劫已前、況亦清風明月多雅興、白雲流水寬詩緣、四海九州雷動風行、漁歌樵唱共賀太平、正當與麼時、人人禁足護生、人人尅期取證、　皇恩佛恩一時報了底事、又作麼生、擊拂子云、版圖遠奏堯天濶、萬

物呈祥樂　聖情。

復舉、三聖道、我逢人即出、出則不爲人、興化道、我逢人則不出、出即便爲人、師云、二大老、可謂漆隱處黑、朱隱處赤、若是山僧底、天平地平、卓拄杖下座。

當晚小參、僧問、三月安居、九旬禁足則不問、遠離花洛親到岳峰一句如何、師云、八角磨盤空裏走、僧云、和尚住此山、以何安衆、師云、山色夕陽時、泉聲中夜後、僧云、與麼則大衆佗德去也、師云、無限清風來未休、僧云、德山小參不答話、有問話者三十棒、意旨如何、師云、去得來不得、僧云、趙州小參要答話、有問話者置將一問來、又作麼生、師云、來得去不得、僧云、今夜小參要答話、不要答話耶、師云、出頭天外看、誰是我般人、僧云、三大老用處、莫止一般麼、師云、教儞休也不肯休、僧云、若如此則一即三、三即一、師云、吽吽、僧云、學人今夜小出大過、便禮拜、師云、撒手那邊去。

乃云、今夜要與大衆有箇識面之話、各各切宜起倒分明、陵王溪畔此君亭邊、諸人知有未得做主、崇福區宇件件數目、山僧做主未辨大毫、既一其居、爲甚受用不同、還會麼、所以道、欲識佛性義、當觀時節因緣、明朝賴是結制安居之辰、箇箇成熟慧身、坐底立底、築著磕著、自然不得孤負者箇、便卓拄杖一下。

復舉、雲門因有官問、佛法如水中月、是也無、門云、清波無透路、師拈云、以答見問、問最可、以問見答、答未奇、且道、誵訛在甚處、具眼禪流、請辨緇素看。

次日上堂、我箇一衆、與尋常不同、跳出金剛圈、吞透栗棘蓬、激電神機雲飛颷到、既而如此、今

朝因甚要行不行、要住不住、還會麼、擊拂子云、塌薩阿竭二千年。

五月旦上堂、僧問、聲前薦得未是作家、喝下承當猶是鈍漢、爲什麼如此、師云、石壓筍斜出、岸懸花倒生、進云、猶是學人疑處、師云、鳳林吒之、進云、記得、僧問投子、如何是十身調御、投子下禪床立、意旨如何、師云、頂上無骨、進云、又問、凡聖相去多少、投子亦下禪床立、意在那裏、師云、領下有鬚、進云、若有人問如何是十身調御、如何祇對、師云、眼中童子面前人、進云、上來一一指示分明、爲人底一句又作麼生、師云、三十年後、自悔去亦不定。

乃云、崇福有三訣、若參得第一訣、許儞拄杖頭上挑日月、若參得第二訣、不妨拂子頭上打筋斗、若參得第三訣、我且問儞、山前麥熟也未。

端午謝檀家補寺齋上堂、僧問、今朝五月端午、不用書符咒士、請師現量法門一句、直下至論、師云、一峰雲片片、雙磵水潺潺、進云、家無白澤之圖、又作麼生、師云、將謂要問話漢、進云、善財撞著文殊底時節且置、天澤三轉語、還許學人咨參也無、師云、鑽之是仰之是、進云、己眼未明底、因甚將虛空作布袴著、師云、脛無毛股無肉、進云、劃地爲牢底、因甚透者箇不過、師云、脚下荊棘深數丈、進云、入海算沙底、因甚針鋒頭上翹足、師云、覺染著儞鼻孔麼、進云、恁麼則金殿譚禪、大悅　皇情、嶽峰聲道、奔走衲子、也未爲分外在、師喝云、非阿儞境界、進云、錦上鋪花又一重、師云、咦。

乃云、端午天中節、諸方畫咒士、書壁以消妖怪、認採藥模樣、落草以作使儞、爭如我者裏、有不忘靈山付囑之人、忽展妙術之手、拔貧做富、一衆箇箇石人之機、鐵漢之用、風吹不入、水洒不

著、諸人要見此人麼、卓拄杖云、切忌當面諱却。

和泉和尚至上堂、僧問、長松嶺頭風颯颯、飛瀑岸前水潺潺、現成公案、大難大難、如何履踐、師云、好向大難處履踐、進云、恁麼則薰風自南來、殿閣生微凉、師云、認驢鞍橋作阿爺下頷、進云、和尚有三訣、一一許吾參也無、師云、何妨、問將來、進云、若參得第一訣、許儞拄杖頭上挑日月、意旨作麼生、師云、虛空迸裂、進云、若參得第二訣、不妨拂子頭上打筋斗、又如何、師云、山嶽起舞、進云、若參得第三訣、我且問儞、山前麥熟也未、意在那裏、師云、眼睛烏律律、進云、者箇三訣、畢竟明得什麼邊事、師云、金香爐下鐵崑崙。

乃擧、興化見同參來喝底公案、師云、古人只要就價高處、缺篤其管賞之義、崇福今日、得和泉和尚光訪、事事自然、函蓋相應、何故、擊拂子云、覔火和煙得、擔泉帶月歸。

退院上堂、衲子從來無定迹、天涯海角任情遊、一毫頭上辭華洛、三鼓聲中出九州。

崇福寺語錄　終

# 洛陽龍寶山大德禪寺語錄 退橫岳歸本寺

侍者惠眼編

七月旦上堂、秋雲淸淡、秋水淸冷、東西與南北、觸處嫩凉生、且道、其中事作麽生、卓拄杖云、四海隆平煙浪靜、斗南長見老人星。

解夏小參、隨處作主、結聖制於橫嶽山頭、立處皆眞、解賞勞於龍寶峰頂、此事不相謾、時不孤負人、破衲逐雲飛、草鞋隨路轉、左足先應處、脚頭是通宵、何必落臺山驀直之途轍、慕流桊不肯之道作、雖然如是、山僧有親切一句子、各各分明善爲、處處不得忘却、便卓拄杖一下。

復擧、文殊三處度夏公案、師云、文殊當年於列聖眉毛裏、雖藏得渾身、二千年後、未免遭人點檢、何故、擊拂子云、雲在嶺頭閑不徹、水流磵底太忙生。

次日上堂、風到梧葉、露凝槿花、無寸草地、不較其多、莫教語默逢人對、回首忽然是月華。

八月旦上堂、八月初一日、天下太平節、人人樂無爲、箇箇災難絕、且道、因箇什麽如是、卓拄杖一下云、分一節。

中秋上堂、拈拄杖卓一下云、靈山指者箇、曹溪話者箇、我者裏不指不話、還有親疎也無、又卓一下云、無人知此意、令我憶南泉。

臘八上堂、澄月映徹、衆星粲朗、箇中無悟處、世尊何悟道、卓拄杖一下云、二千年前、二千年後。

除夜小參、日一上月一上、晝一上夜一上、窮到一十二箇月、數到三百六十日、謂之新舊交頭除夜結尾、諸人若使身在舊年、不發新定機、也使心在新年、失却本來用、所以北禪烹露地白牛、祖翁挑半宵之燈、雖然如是、山僧終不入與麼窠窟、何故、臘雪連天白、春風逼戶寒、復舉、僧問香林、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看、臘月盡、師拈云、此箇時節、最是可愛、來日定大年、一衆須保愛。

正旦上堂、鳳曆開元日、王春肇始時、雪寒北嶺、梅香南枝、好箇好時節、龍天須匡持、且道、以何爲驗、卓拄杖一下便下座。

元宵上堂、僧問、今朝上元節、處處掛燈毬、意旨如何、師云、風吹不入、進云、只將此正言、以祝天下春、師云、知言之漢、進云、記得、僧問香林、如何是室內一盞燈、此意如何、師云、言鋒冷似冰、進云、林云、三人證龜作鼈、又作麼生、師云、利舌硬如鐵。

乃云、燈燈相續、燈燈無窮、處處列夜光珠、頭頭莊夜明符、只此光輝底、都從者裏普、擊拂子一下。

佛涅槃上堂、僧問、今宵夜半、世尊入涅槃、兒孫以何酧法乳、師云、杜鵑啼斷月如晝、進云、與麼則解知恩報恩、師云、也何妨、進云、世尊昔在靈山會上、拈起一枝花、此意如何、師云、萬里一條鐵、進云、迦葉獨微笑、意在那裏、師云、金不博金。

乃云、我若謂滅度、非我弟子、我若謂不滅度、亦非我弟子、當年若有人、道生薑終不改辣、非但贏得釋迦老子、也須扶得一會列聖、何故、良久云、紅霞碧靄籠高低、芳草野花一樣春。

三月旦上堂、山花開似錦、澗水湛如藍、堅固法身太無端、大龍何處露心肝、諸人見得不、無因甚不解舉得、擊拂子云、又逐流鶯過短墻。

上堂、一即一切、一切即一、拈拄杖卓一下云、三祖大師、無端穿柳巷入花街、忽然逢著幽鳥語喃喃、辭雲入亂峯、合掌低頭道、揭諦揭諦、是什麼道理、諸人各辨別、又卓拄杖下座。

佛生日上堂、僧問、釋迦老子今日初下閻浮、四衆臨筵、願聞法要、師云、斧頭元是鐵、進云、薔薇滴露、楊柳籠煙、莫是瞿曇眞面目麼、師云、莫認驢鞍橋作阿爺下頷、進云、世尊初生下時、周行七步、一手指天、一手指地、是什麼心行、師云、鐵丸無縫罅、進云、稱天上天下唯我獨尊、不是傍若無人麼、師云、佗後有雲門一棒在、進云、雲門棒頭、還相當也未、師云、焦塼打著連底凍。乃云、指地指天稱獨尊、顚言倒語卒難論、金容萬德有誰看、偏界堂堂常獨存、雖然如是、一杓惡水更難放過、以拂子擊禪床一下。

結夏小參、僧問、結制已前月白風清、豈不是成就慧身底時節、師云、刺破眼睛、進云、結制已後風淸月白、向甚麼處剋期取證、師云、三生六十劫、進云、今夜小參緊要一句、不落結制前後、願聞提唱、師云、勘破了也、進云、和尙布縵天網子籠絡衲子、忽如有透得金剛圈底漢、亦作麼生羅籠得佗、師云、森森夏木杜鵑啼、進云、恁麼則可謂隨處作主、立處皆眞、便禮拜、師云、且坐地商量。

乃云、鵝護雪、蔍入冰、古今結制榜樣、衲子禁足風規、三月九旬內、於七尺單前、澄濾身心成熟本智、情與無情一齊安居、無前無後同時寂定、謂之以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、

若其逐境走作、隨物紛拏、無有此處、正與麼時、本色行脚師僧、入此保社、不入此保社、舉拂子云、金屑雖貴、落眼成翳。

復舉、僧問雲門、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、韶陽只要箇箇以鐵壁爲戶牖去、山僧不然、若有人問如何是諸佛出身處、便對佗道、鷲峰山色青更青、且道、那箇親那箇疎、分明辨別看。

次日上堂、僧問、樹頭紅稀、林下綠暗、好箇時節、請師提唱、師云、萬里一條鐵、進云、恁麼則薰風自南來、殿閣生微涼、師云、見之不取、思之千里、進云、今朝盡是護生安居、當圖何事、師云、著黑衣護黑柱、進云、如朝行西天暮歸東土、還有禁足分麼、師云、我者裏喚作走作漢、進云、學人今夏依傍和尚、有何方便、師云、只此一問從何來、進云、若不登樓望、焉知滄海深、便禮拜、師云、何必。

乃云、今日是結制、一衆各禁足、眼睫重千斤、堂裏伸兩脚、是箇什麼道理、三條椽下摸索。

上堂、僧問、學人心猿未穩、意馬奔馳、願示方便、師云、鐵鎚無孔、進云、與麼則把斷要津去也、師云、又與麼去也、進云、記得、巖頭問德山、是凡是聖、意在那裏、師云、石從空裏立、進云、山便喝、如何理會、師云、火向水中焚、進云、若有人問和尚是凡是聖、聻、師云、九九八十一。

乃舉、僧問洞山、寒暑到來、如何回避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、山僧不然、若有人問如何是無寒暑處、只對佗道、靜處薩訶、且道、那箇親那箇疎、諸人各辨別。

端午上堂、僧問、今朝正是端午節、家家掛艾虎、處處浴香湯、和尚應節一句、願聞提唱、師云、黄鶴樓前鸚鵡洲、進云、恁麼則山自青、水自綠、師云、隨後婁搜漢、進云、記得、文殊令善財採藥、財云、信手採來、無不是藥、此意如何、師云、瞎漢亂統作什麼、進云、善財拈一莖草度與文殊、文殊云、此藥亦能殺人亦能活人、又作麼、師云、上是天、下是地。

乃云、今朝端午節、無妖亦無怪、不假善財藥、人人自慶快、擊拂子下座。

半夏上堂、僧問、一夏已過半、崑崙嚼生鐵、半夏已後又如何履踐去、師云、晨朝粥、齋時飯、進云、已前已後且置、正當今日直聞指示、師云、頭頂天脚履地、進云、記得、僧問智門、蓮花未出水時如何、門云、蓮花、意旨作麼生、師云、水洒不著、進云、僧云、出水後如何、門云、荷葉、還端的也無、師云、風吹不入、進云、出水與不出水相去多少、師云、何不向老僧問將來、進云、移花兼蝶至、買石得雲饒、便禮拜、師云、吽。

乃拈拄杖云、六月不熱五穀不熟、今日爲諸人熱之熟之、卓拄杖一下云、已熱已熟後如何、擲下拄杖云、天平地平。

上堂、僧問、火雲燒空普天炎熱、向什麼處正得回避、師云、迦葉門前風凜凜、進云、學人今日脫却鶻臭布衫去、師云、淨躶躶地一句、作麼生道、進云、記得、馬大師一日陞堂、百丈出捲席、意在那裡、師云、方木投圓孔、進云、大師便下座、歸方丈、又如何、師云、清風隨步生、進云、和尚今日上堂、無人捲席、豈不是無事而去、師云、養子不及父、家門一世貧、進云、捲席與不捲席、那箇是親那箇是疎、師云、苦哉佛陀耶。

乃云、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、既是坐道場、因甚佛法不現前、擊拂子云、千里萬里一條鐵。

上堂、一葉落天下秋、是處無不風流、若記得箇時節、終不將語默酧、且道、是阿誰分上事、喚大衆云、還覺頂門獨立麼。

解夏小參、僧問、學人一夏已來、波波挈挈過了、剋期取證事、請師爲證明、師云、嫩涼秋意入簾櫳、進云、恁麼則可謂、光陰不虛度、師云、直饒儞實度也何是、進云、記得、雲門因僧問、初秋夏末、前程忽有人問、如何祇對、門云、大衆退後、意旨作麼生、師云、崑崙嚼生鐵、進云、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、又作麼生、師云、平出、進云、前程問過事即且置、即今和尚如何勘過、師云、不消一撥、進云、榔栗橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、便禮拜、師云、腳下泥深。

乃云、秋初夏末、季熱未散、自恣賞勞、箇箇無缺、隨時應節、無不滿逗、就理就事、無不現前、軒知、會則途中受用、如龍得水、不會則世諦流布、似羝羊觸藩、畢竟與麼去、步步清風起、佛手遮不得、人心似等閑、路頭踏著不曾瞋、萬里神光頂後相、然雖如是、只如雲門道、還我九十日飯錢來、是阿誰分上事、擊拂子云、不因樵子徑、爭到葛洪家。

復擧翠巖夏末示徒公案、師拈云、一畝之地、三蛇九鼠。

次日上堂、僧問、衲僧家四月十五、結佗不得、七月十五、解佗不得、畢竟向什麼處安身立命、師云、須彌南畔閻浮樹、進云、與麼則西風一陣來、落葉兩三片、師云、矮子看戲、進云、昔有老宿、一夏不爲師僧說話、有僧嘆云、我只麼空過一夏、不敢望和尚說佛法、得聞正因二字也得、意旨

如何、師云、抛却黃金捧碌甎、進云、老宿聞云、闍梨莫暫速、若論正因一字也無、道了扣齒云、我無端恁麼道、又作麼生、師云、三千八百、進云、隣壁又有老宿、聞云、好一釜羹、被兩顆鼠糞汙却、意在那裏、師云、同病相怜、進云、和尚一夏已來、說什麼法爲人、師云、山青水綠、進云、攪長河爲酥酪、變大地作黃金、便禮拜、師云、也何妨。

乃擧、趙州因僧辭、州云、有佛處不得住、無佛處急走過、三千里外逢人莫錯擧、僧云、與麼則不去也、州云、摘楊花摘楊花、師云、趙州若無後語、須是遭人點檢、何故、風從八月涼、月自七月明。

八月旦上堂、拈拄杖云、月月初一、無雨爲吉、今月初一、有雨爲吉、且道、吉在甚處、卓拄杖一下云、吉吉、吾道最吉、靠拄杖下座。

上堂、西風一陣來、落葉兩三片、錮鏴著生鐵、佛祖渾不辨、不辨不辨、諸人且過那邊。

重陽上堂、僧問、今朝是九九日、諸方盡賞佳辰、衲僧門下不墮常機、應節一句、願聞法要、師云、秋晚頗寒、箇箇萬福、進云、只如採菊東籬下、悠然見南山底、未審和尚如何證明、師云、刺破眼睛、進云、古德云、重陽九日菊花新、又是呈什麼道理、師云、謝答話。

乃云、採菊東籬下、悠然見南山、靖節只知其愛、不知其用、今日重九、作麼生用得、擊拂子云、二三三、三三二。

上堂、擧、有官問雲門、佛法如水中月、是不、門云、清波無透路、官云、和尚從何得、門云、再問復何來、官云、正與麼時如何、門云、重疊關山路、師云、雲門官不容針、官人私通車馬、點檢將來、兩俱失利、何也、自從賢聖法來、未嘗殺生、卓拄杖下座。

開爐上堂、無賓主話、十八高人、一回擧來、一回是新、及乎問其意旨、大半便道、不知最親、阿呵呵、只要爐下煖似春。

上堂、南山松北嶺雪、夜雨晝晴、太平得節、達磨來東土、二祖行西天、行脚禪和子、莫失却目前、喝一喝。

上堂、一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法、皆從此經出、忽拈拄杖卓一下云、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人。

冬至小參、僧問、葭管飛灰、繡紋添線、不渉陰陽造化、願聞法要、師云、八角磨盤空裏走、進云、恁麼則岸柳未開眼、庭梅先發花、師云、好與麼去、進云、記得、僧問百丈、如何是奇特事、丈云、獨坐大雄峰、還端的也無、師云、把定要津、不通凡聖、進云、僧禮拜、又作麼生、師云、不撥破頂上、進云、丈便打、如何理會、師云、依令而行、進云、古人則且置、即今問和尚如何是奇特事、如何祇對、師云、三十年後、而熱汗出、進云、不入虎穴、爭得虎子、便禮拜、師云、爲我將得來看。

乃云、六陰謝盡、一氣方生、鐵樹開花、石筍抽條、衲僧家若向者裏轉身來、自然枯枯燥燥、得失是非一時放却、也是省錢易他底事、古來淨悄悄地、爭之不足、何須運步念阿伽門、而今多是知時不知節也、猶不妨東西南北烏飛兎走、直饒向山僧背後問訊、也山僧不敢可横點頭、何故、卓拄杖云、國清才子貴、家富小兒嬌。

復擧、僧問趙州、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、僧云、不問這箇、州云、儞問趙州、拈云、以機奪機、以毒攻毒、趙州老漢不無之、其奈何八十行脚事、猶未全用在、若得全用去、兒孫滿堂

至今繁興。

次日上堂。僧問。霜飛大野。風戒林丘。普天普地。寒威凜然。更向什麼處得迴避去。師云。陽氣發時無硬地。進云。璿璣未動。全機顯露。朕兆纔分。觀體現成。不涉時節。不借言薦。親切一句。願聞擧揚。師云。家家觀世音。進云。慈明揭牌。皓老不洗布裩。點檢將來。早是劍去久矣。寶山今日莫別有條章麼。師云。一冬二冬。叉手當胷。

乃云。瑞雪滿地。祥雲翻天。龍寶山頂和氣靄然。好箇時節爲君報知。一氣不言含有象。萬靈何處謝無私。

謝進退兩班上堂。竿頭進一歩。大千沙界現全身。退歩就已。萬中一箇而不失。蓋是與麼人作與麼行履者也。大衆要見此人麼。雲在嶺頭閑不徹。水流澗底太忙生。

臘八上堂。僧問。釋迦老子六年冷坐。逗到臘八夜始方開悟去。未審悟得箇何事。師云。鼻孔掛上唇。進云。未見明星時。已雪山雪白。一見明星後。又雪山雪白。這裏端的事。和尚如何甄別。師云。鐵丸無縫罅。進云。只如有一人發眞歸源。大地衆生向何處去。師云。向儞眼睫上去。進云。恁麼則可謂。劫外一壺春。更好優曇花綻普天香。便禮拜。師云。道卽道得。

乃云。盡謂世尊臘月八夜成道。是則是。敢問諸人。如何是成底道。若是識得。報恩有分。若也識不得。擊拂子云。初中後三大劫。

除夜小參。僧問。舊歲今宵去。向甚處去。師云。頭上一堆塵。進云。新年明日來。從甚處來。師云。脚下三尺土。進云。還有不涉新舊底也無。師云。有。進云。如何是不涉新舊底。師云。大底鼻孔向下

垂、進云、記得、感首座問法昌、昔日北禪分歲、烹露地白牛、和尚今夜分歲、有何施設、昌云、臘雪連天白、春風逼戶寒、意旨作麼生、師云、兩口無一舌、進云、感云、大衆如何喫、昌云、莫嫌冷淡無滋味、一飽能消萬劫飢、此意如何、師云、鬼爭漆桶、進云、感云、是何人置辦、昌云、無慚愧漢、來處也不知、又作麼生、師云、彼此出家兒、進云、古人即且置、和尚今夜分歲、有何施設、師云、且待、有童行報去、進云、大衆如何喫、師云、不可從鼻而入、進云、是何人置辦、師云、衣鉢閣中常相逢、進云、和尚與麼施設、與古人是同是別、師云、許儞疑三十年、進云、鶴飛千尺雪、龍起一潭氷、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、今宵臘月三十夜、家家爆竹賞結尾、或操歌吹之音、或促鐘鼓之響、祝來日新年之吉、壽萬歲松栢之操、龍寶山頂人、未必不點頭、只是終不墮悄然機、豈將等閑風味、以供養合山龍象、雖然如是、與衆分歲、各各須飽足、擊拂子云、趙州喫茶、雲門胡餅。

復擧、僧問古德、萬頃荒田、是誰爲主、德云、看看、臘月盡、師云、大衆要見此僧、當頭霜夜月、要知古德、任運落前溪、雖然如是、靜處婆婆訶。

正旦上堂、僧問、瑞草生嘉運、林花結早春、好箇時節、願聞擧揚、師云、箇箇道體、起居萬福、進云、恁麼則元正啓祚、萬物咸新、師云、一句道著、進云、正當今日大年朝、如何是新年頭佛法、師云、風暖鳥聲碎、日高花影重、進云、僧問雲門、如何是清淨法身、門云、花藥欄、意旨作麼生、師云、刺破眼睛、進云、僧云、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、又作麼生、師云、兩重公案、進云、即今問和尙、如何是清淨法身、聻、師云、千峰雪色寒。

乃云、今日大年朝、山僧渾解道、大衆箇箇道體、起居萬福、且道、是佛法是世法、卓拄杖云、東西南北、吾道大亨。

元宵上堂、僧問、今宵處處揭燈萬民共樂、和尙爲人劃起心燈來看、師云、天晴日頭出、進云、恁麼則可謂、光明寂照徧河沙、師云、不妨道著、進云、僧問香林、如何是室內一盞燈、林云、三人證龜作鼈、意在那裏、師云、罕遇便宜、進云、與麼則昔日香林、今日和尙、便禮拜、師云、好去好用。

乃云、燈燈相續、燈燈無已、且道、此燈從何處來、卓拄杖一下云、我見燈明佛、本光瑞如此。

上堂、僧問、春山疊亂青、春水漾虛碧、好箇時節、願聞法要、師云、莫向雪竇背後問訊、進云、恁麼則日自暖、風自和、師云、休向老僧背後問訊、進云、趙州訪一庵主云、有麼有麼、主竪起拳頭、州云、水淺不是泊舟處、意旨作麼生、師云、蠅見血、進云、州又訪一庵主云、有麼有麼、主竪起拳頭、州便禮拜讃歎、如何委悉、師云、鷂提鳩、進云、問答已一般、爲甚肯一人不肯一人、師云、看取不落兩頭、進云、若有人問有麼有麼、未審和尙如何祗對、師云、且去喫茶。

乃擧、三祖大師道、一卽一切、一切卽一、忽拈拄杖云、者箇是寶山拄杖子、阿那箇是一、卓拄杖一下云、只能如此、何慮不終。

佛涅槃上堂、僧問、法身無爲不墮諸數、釋迦老子因甚示涅槃之相、師云、爲涅槃不墮諸數、進云、古德道、十方薄伽梵、一路涅槃門、且道、如何是涅槃門、師云、日出東夜落西、進云、五通仙人問世尊云、世尊有六通、我有五通、如何是那一通、世尊召五通仙人、意旨作麼生、師云、平生肝膽向人傾、進云、仙人便應喏、世尊云、那一通儞問我、如何理會、師云、依稀似曲纔堪聽、又被風

吹別調中、進云、後來雪竇著語云、老胡元不知有那一通、却因邪打正、意在那裏、師云、無影樹下合同船、進云、卽今問和尙如何是那一通、未審如何祗對、師云、三跳後。

上堂、舉、雲門云、我看諸人、二三機中尙不能構得、空披衲衣何益、師云、山僧不然、我看諸人、悉是大機大用人。剛要作佛何益、住住、一不做二不休、不風流處也風流。

上堂、春山青春水綠、春雲片片、春鳥喃喃、敢問諸人、吾宗門中是放開是捏聚、箇箇歸寮舍摸索看。

四月旦上堂、驀豎起拂子云、西天二十八祖、東土六祖、盡在拂子頭上、說心說性、論玄論妙、山僧忍俊不禁、見怪笑一聲、箇箇面熱汗出、諸人還見麼、若也不見、擊拂子一下云、滿地落花春已過、綠陰空鎖舊莓苔。

佛生日上堂、指天指地墮尊貴、滿目青山笑點頭、自從雲門行令後、不風流處也風流、諸人向者裏會得、不妨報恩有分、其如未然、靜處娑婆訶

結夏小參、僧問、看雲亭上月明明、古巖松下風拂拂、見成公案絕遮攔、不涉言詮、願聞法要、師云、九九八十一、進云、恁麼則山自青、水自綠、師云、隨後婁搜漢進云、九旬禁足、剋期取證則不問七尺單前、三條椽下、學人一夏、如何履踐、師云、眼睛重千斤、進云、古德道、參須實參、悟須實悟、如何是實參、師云、金香爐下鐵崑崙、進云、實悟底又如何、師云、何必、進云、實參實悟、畢竟作麼生、師云、心不負人、面無慚色。

乃云、言前句後、舌根裏藏身、向上向下、驀拶挨葫蘆子、背面終不落好手、首尾何處該萬類、

遠超象外、逈脫天眞、是處雲山溢目、閙市大虫誰不解見、見卽見、因甚文殊頭黑普賢頭白、會得三月安居、九旬禁足、循規守矩、脚底不帶五色索、其如未然、靜處娑婆訶。

復擧臨濟示衆云、一人在孤峰頂上無出身路、公案、師拈云、古來作者、弄嶮落草、等是難禁、只是要須人人在背後點頭、大衆還會麼、鬱頭藍已定全身、何假周行跨七步。

次日上堂、僧問、如來聖制、禁足護生、衲僧朝游西天暮歸東土、學人此間、禁足卽是、游歸卽是、師云、南番大舶主、本此土商人、進云、已道、禁足安居、因甚文殊三處度夏、師云、曲終人不見、江上數峰青、進云、記得、雲門示衆云、十五日已前不問爾、十五日已後道將一句來、意旨作麼生、師云、什麼處去、進云自代云、日日是好日、又作麼生、師云、倒退三千、進云、和尙若逢韶陽垂示、向佗如何道、師云、法堂上寸草不生。

乃云、今朝是結制、不敢讓、却諸人只因現量、以擧揚正法眼藏、驀拈拄杖卓一下云、者箇是龍寶拄杖子、阿那箇是正法眼、若也不會、雨過遠山綠、靠拄杖下座。

解夏小參、三月安居、九旬禁足、山色夕陽時、泉聲中夜後、圓覺伽藍、平等性智、竹有上下節、松無古今青、箇裏無取證、誰成熟慧身、正與麼時節、衲僧活脫處、要行便行、要坐便坐、東西南北無有進障、運奔執捉全超象外、諸人一夏結眉交肩、今日何必苦口叮囑、雖然如此、擊拂子云、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人。

復擧翠巖夏末示衆公案、師拈云、翠巖爲衆竭力不少、只得箇三枚把不住老凍膿、若有中郎鑑、何同野舍薪。

上堂、眞空不礙有、眞空不異色、忽拈拄杖卓一下云、且道、是有是不有、是色是不色、若是俐利衲僧、和水喫乳、其或躕躇、拄杖穿却鼻孔、又卓一下。

奉謝大王上將入山下、百味佳齋、仲合山供養上堂、僧問、日月輪邊氣象高、魚龍穴下蟠根固、師云、好、進云、上將忽入山下、來奇齋、供養大衆、未審和尚說什麼法、得報此恩、師云、風行草偃、進云、恁麼則蘋葉風涼、桂花露香、師云、好也與麼去、進云、只如達磨未來已前、還有這箇消息也無、師云、銀山鐵壁、進云、來後又如何、師云、鐵壁銀山、進云、來與未來且置、如何是這箇消息、師云、鐵壁鐵壁、銀山銀山、進云、學人今日小出大遇、便禮拜、師云、撒手那邊去。乃橫拄杖云、大士三十二應身、天大將軍最是眞、摧蕩諸障與慶快、提持百福救窮貧、大衆要會者箇大機大用麼、卓拄杖云、看看、巍巍堂堂、煒煒煌煌、四海九州、威風凛凛。

材木採用歸謝普請並善源雲和尚上堂、拈拄杖云、萬仞峰前千磵底、者邊那邊擇良材、斧頭用得諸人力、集此大成相呼回、正與麼時作麼生、卓拄杖一下云、行到水窮處、坐看雲起時。

上堂、慈橫拄杖擧、肇法師云、近而不可見者物性耳、卓拄杖云、者箇是寶山拄杖子、阿那箇是物性、又卓拄杖云、一槌兩當、蓋覆將來。

宗持禪尼逆修拈香、當陽突出迥脫根塵、薰天炙地、擧體全眞、乃佛乃祖、由佗出氣、衲僧巴鼻從此方親、況是宗持大姉、借山僧手拈出、等閑一見便見、自然一得永得、感生生正果、結世世正因、馥郁香風清徧界、藹然和氣恰如春。

除夜小參、年窮歲盡、黑漆桶裏盛墨汁、交頭結尾、半夜烏雞飛上天、所以師僧家、自從空劫已

前威音那畔、一日日未嘗逐一日、一時時未嘗隨一時、墻壁瓦礫、露柱燈籠、背後面前、眞珠燦爛、雖然如是、今夜與諸人分歲、其中爲國一句作麼生、擧拂子云、村裏盡好驅儺、來年定是熟年。

復擧、香林因僧問、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看、臘月盡、師云、山僧不然、若有人發此問、便答佗道、昨日相見人、忽問是何人、劈口便摑。

正旦上堂、僧問、年年是好年、日日是好日、正與麼時、請師祝　聖、師云、萬年松下有茯苓、進云、恁麼則萬民樂業唱謳歌、師云、好音在耳、人皆聞、進云、記得、僧問古德、新年頭還有佛法也無、意在那裏、師云、舌頭無骨、進云、德云、元正啓祚、萬物咸新、的當也無、師云、藕絲孔裏騎大鵬、進云、只如古人祇對、如何辨別去、師云、風暖鳥聲碎、進云、一句了然超百億、師云、富嫌千口少、進云、非但學人、四衆咸霑恩、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、今朝大年朝、東廊下相賀、西廊下相賀、喚作佛法底、拂子與佗點頭、喚作世法底、拄杖與他點頭、且道、諸人孰與阿那箇點頭、若於此會得、便解山僧適來道箇箇道體、起居萬福。

二月旦、爲出材木勸下大衆上堂、梅腮柳面、吐香競榮、春山春水、湛綠疊藍、衲子清興、時哉時哉、許儞始隨芳草去、又須後逐落花回、忽回來時如何、箇箇萬福萬福、侍者急手點將箇好茶來。

佛生日上堂、僧問、靑春已去、朱夏初臨、瞿曇今日降生、此是現成底、請師別擧揚、師云、鐵丸無縫罅、進云、二月十五不曾滅、因甚鶴林中示雙趺、師云、天上星地下木、僧云、四月八日不曾生、

爲甚九龍吐水灌沐金軀、師云、九九八十一、僧云、指天指地、道天上天下唯我獨尊、師云、苕藥花開菩薩面、僧云、雲門云、我當時若見、一棒打殺與狗子喫却、意旨作麼生、師云、因邪打正、僧云、雪竇云、我若見、便與掀倒禪床、意在那裏、師云、把手相共上高峯、僧云、二大老用處、是同是別、師云、南山起雲、北山下雨、僧云、上來一一蒙指示、向上宗乘事又如何、師便喝。乃拈拄杖卓一下云、淨法界身、撐天拄地、本無出沒、種瓜得瓜、便恁麼領去、報恩有分、其如未然、二龍溫涼水。

結夏小參、僧問、綠暗紅稀、孟夏漸熱、應節一句願聞提唱、師云、薰風自南來、殿閣生微涼、僧云、禁足安居誰似我、掛角羚羊不露蹤、師云、有路可上、高人更行、僧云、朝到西天、暮歸東土、是什麼人分上事、師云、是安居底人分上事、僧云、恁麼則一聲黃鳥青山外、占斷風光作主人、師云、那裏得與麼地、僧云、松源有三句、許咨參也無、師云、何妨、問將來、僧云、大力量人、因甚擡脚不起、師云、草鞋和露重、僧云、開口因甚不在舌頭上、師云、不見牙齒一具骨、僧云、明眼衲僧、因甚脚跟下紅絲線不斷、師云、脚頭也脚底、僧云、學人今夜小出大遇、便禮拜、師云、向人作麼生舉。乃云、西天嚴規、東土嚴令、齊要知有箇釧利漢、大坐當軒底事、克得此事、三月安居、九旬禁足、天覆不得、地載不能、日用四威儀中、全坐聲色堆上、專做聲色堆主宰、箇中有傾覽、都墮魔界、所以道、以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、瞥喜瞥瞋、無理會、新羅夜半日頭明、雖然如是、諸人切忌刺腦入膠盆、何故、良久云、綠樹陰濃夏日長、樓臺倒影入池塘。

復舉、德山小參不答話、有問話者三十棒公案、師拈云、盡謂、開口即錯、動舌即乖、殊不知九曲

黃河混底流。

次日上堂。僧問、西天舊令、東土共遵、諸方依樣畫葫蘆、龍寶門下標格作麼生。師云、莫孤負山僧。進云、綠水青山、元來安居、露柱燈籠、終日禁足、衲僧家因甚別立規矩。師云、嚴師出好弟子。進云、恁麼則行到水窮處、坐看雲起時。師云、更須子細。進云、記得、乾峰示衆云、法身有三種病二種光、須是一一透得始解穩坐地。意在那裏。師云、緬想會裏有人。進云、雲門便出衆云、庵內人、爲什麼不見庵外事。意旨作麼生。師云、果然。進云、峰呵呵大笑、又如何。師云、藏身無路。進云、門云、猶是學人疑處在、如何委悉。師云、有爭臣則君不落不義。進云、古人底且置、作麼生是正當今日法要。師云、水到渠成。

乃卓拄杖云、二千年前有此制、四聖六凡都不出者箇。二千年後攀其例、五湖衲子大家在者裏。又卓拄杖云、出與不出、在與不在、且喜靜處娑婆訶。

五月旦上堂。僧問、松竹陰陰夏日長、好箇時節、請師提唱。師云、三十年後莫錯商量。進云、恁麼則黃鶴樓中吹玉管、江城五月落梅花。師云、人無遠慮必有近憂。進云、只變大地作黃金、攪長河爲酥酪、則不無、和尚且道、如何是向上宗乘事。師云、南斗七、北斗八。進云、向下又作麼生。師云、金香爐下鐵崑崙。進云、畢竟如何領略去。師云、阿爾全舌去亦可。

乃舉、鼓山問新羅僧、上山來作什麼。對云、禮拜和尚。鼓山云、盡世不標、向什麼處禮拜。對云、向不標處禮。鼓山云、念爾是新羅人、放爾二十棒。師云、者僧若於盡世不標、向什麼處禮、作摸著左右之勢、拜得鼓山。鼓山若於向不標處禮、亞身合掌、接得者僧、二俱莽鹵。爾師僧家、有什麼

救處、以拂子擊禪床一下便下座。

端午上堂、僧問、今朝正是端午節、昔日善財採藥來憑據、如何領會、師云、放過一著、進云、將逢佳辰底、莫不盡大地是藥麼、師云、何必、進云、恁麼則薰風自南來、殿閣生微涼、師云、可謂諸侯避道、進云、記得、文殊當年出女子定不得、意旨作麼生、師云、雲在嶺頭閑不徹、進云、下方罔明爲甚却出得、師云、水流澗底太忙生、進云、文殊爲無神力、罔明爲有神力、師云、釣魚船上謝三郎、進云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師喝云、且看脚下。

乃云、强不用切菖蒲、剛不要掛靈符、衲僧家別在長處、消殞盡天下妖怪去、卓拄杖云、頭長三尺知是誰、相對無語獨足立。

上堂、僧問、綠樹布陰濃、薔薇吐晚香、正好看雲亭下避暑處、賞佳景句、請師提唱、師云、閻浮樹下笑呵呵、進云、如無寒暑田地、如何踏著、師云、墮坑落塹、進云、恁麼則處處綠楊堪繫馬、師云、蹉過也不少、進云、記得、古人道、大用現前、不存軌則、如何是大用現前底時節、師云、勘破了也、進云、與麼則可謂隨處作主、立處皆眞、師云、雪上加霜、進云、學人今日親聞法要、如何保任、師云、疎田不貯水。

乃擧、趙州因僧問、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、僧云、不問這箇、州云、儞問趙州、師云、山僧不然、若有問如何是趙州、只向他道、石橋度來也未、道不問這箇、便道、待下山去、腋裏汗出、且道、與古人道底那箇親那箇疎、請各辨別看。

半夏上堂、僧問、山連嵩嶺、地近洛川、一機一境無不勝槩、不涉唇吻、如何通津、師云、心不負人

面無愧色、進云、九旬已過半、諸人自知時、當頭與麼時節、學人如何領略、師云、且過者邊、進云、恁麼則杲日麗天、淸風匝地、師云、放下著、進云、僧問智門、蓮花未出水時如何、門云、蓮花、此意如何、師云、風吹不入、進云、僧云、出水後如何、門云、荷葉、又作麼生、師云、水洒不著、進云、蓮花出水與未出水相去多少、師云、秦甸幾人蹈著。

乃云、半夏已前、我爲諸人隱、隱而彌露、半夏已後、我爲諸人顯、顯而不露、正當今日半夏不隱不顯、我爲諸人說破、卓拄杖一下云、六月巳熱、五穀好熟。

寺莊等賜公據上堂、拈拄杖云、自家田地、觸處全彰、公驗一回得入手、百劫千生不曾荒、正與麼時作麼生、卓拄杖云、皇風與祖風鎮扇、帝道與佛道遐昌、又卓一下便下座。

重九上堂、茱萸帶露、金菊發花、大用現前、不存軌則、諸禪德若識箇中意、南山東籬一家家。

二月旦上堂、拈拄杖云、雪霽千山綠正濃、梅腮柳面轉縱容、爲君擬報箇中意、幽鳥喃喃入亂峰、卓拄杖一下。

佛涅槃上堂、僧問、滿街楊柳綠絲煙、畫出長安二月天、應節一句、請師提唱、師云、寥寥天地間、獨立望何極、僧云、瞿曇今日入般涅槃、未審向什麼處去、師云、向人人鼻孔裏去、還覺麼、僧云、恁麼則哭底便是、笑底便是、師云、將謂儞是不領話、僧云、若謂我滅度、非我弟子、若謂我不滅度、亦非我弟子、意旨作麼生、師云、黃河點魚、僧云、不因今日節、餘日實難逢、便禮拜、師云、向後向人莫錯擧。

乃橫按拄杖云、雙趺出槨事難親、有也累人無累人、瞻部州中休不得、年年二月費洴蘋、喝一

喝、擲下拄杖、下座。

龍翔正眼二塔主至上堂、寶山有一句子、只許人聽、不許人舉、已是許人聽、因甚不許人舉、擊拂子云、辨龍蛇眼俱正、擒虎兕機也全。

上堂、卓拄杖云、百億須彌、百億日月、恒沙諸佛、恒沙國土、盡在拄杖頭上、諸人見得、不妨一生參學事了畢、其如未然、開眼瞌睡、又卓一下下座。

四月旦上堂、拈拄杖云、此事無去來、因甚昨日春去、今朝夏來、迄乎道物性住一世、肇公也是宜遁入空谷、衲僧家牙如劒樹、口似血盆、到者裏作麼生道著、若無人道著、以拄杖畫一畫云、喜。

結夏上堂、僧問、今日是結制、結底是何物、師云、猛虎當路坐、僧云、恁麼則官池水深、石雲亭高、師云、吾常於此切、僧云、只將老師兩句子、布施七十員禪佛、師云、只有阿爾吞吐不下。

乃云、是箇水牯牛、山邊水邊賴自無事、今日無端逗入欄裏、鼻貫索頭全在別人手裏、要行也不能、要臥也不能、才擬恣情、痛加鞭策、道、叱、者畜生、嗚咿嗚、只可自知、擊拂子一下。

上堂、卓拄杖云、人情若似者箇、孔丘打殺顏回、道情若似者箇、達磨失却少林、便下座。

端午上堂、僧問、文殊小男為誰要藥、師云、古佛廟前自顛蹶、進云、善哉童子採來何草、師云、無根滿地、無藥普天、進云、父子得便處、千古遺檢點、師云、爾有老成之勢。

乃云、端午天中節、不用咒士書壁、只以一神咒、消殞一切妖怪、除却佛病祖病、且道、「那箇神咒」、便振威一喝。

上堂、擧、三祖云、一即一切、一切即一、驀拈拄杖云、三祖大師在非非想天、擲下一箇木楔子、換却諸人眼睛、忽爾下來旋轉舞踏、恰如獨樂、而見諸人不見不知、高聲唱云、龜毛長三尺、兎角長七尺、卓拄杖一下云、參。

上堂、横按拄杖擧、芭蕉示衆云、儞有拄杖子、我與儞拄杖子、儞無拄杖子、我奪儞拄杖子、拈云、芭蕉與奪不無、只是擒縱未在、山僧尋常向皺皺鱗鱗地要出人、猶不救得一半在、豈況吐出山形邊事、太遠之遠矣、卓拄杖一下。

解夏上堂、僧問、三通鼓罷、四衆臨筵、好箇時節、請聞擧揚、師云、崑崙嚼生鐵、進云、九旬期已滿、衲僧脚頭闊、正當恁麼時、如何是自恣一句、師云、榔栗横擔不顧人、直入千峰萬峰去、進云、記得、洞山云、秋初夏末、直須向萬里無寸草處去、意旨如何、師云、步步清風起、進云、石霜云、出門便是草、又作麼生、師云、草鞋和露重、進云、和尚恁麼答話、爲是與古人出氣、爲復與古人雪屈、師云、平蕪盡處是青山、進云、與麼則一言無別路、萬世盡同歸、師云、傍觀有分、進云、只將老師四五轉話、甘當九夏賞勞之功、便禮拜、師云、可謂南北東西皆可可。

乃擧、翠巖夏末示徒、一夏已來、爲兄弟東說西話、看翠巖眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關、師云、三大老俱出隻手扶樹翠嵓家風、龍寶今夏不爲兄弟說話、看眉毛如箭簳長數寸、只是缺人覷破、雖然如是、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色。

八月旦上堂、拈拄杖云、向上一路、千聖不傳、八月初一、龍寶山前、卓拄杖下座。

中秋上堂、擧、長沙與仰山翫月次、仰山指月云、人人盡有這箇、只是用不得、長沙云、恰倩儞用

那、山云、儞試用看、長沙一踏踏倒、仰山起來云、儞大似箇大蟲、師云、仰山起來道、果然用不得、見盡長沙擡脚不起、雖然恁麼、月到中秋滿、風從八月凉、擧拂子一下。

九月旦因。太上法皇惠種種剪采、上堂、擧須菩提巖中宴坐、帝釋雨花話、師云、天帝釋雨花動地、與。太上法皇惠此花、是同是別、若謂別眼裏无筋、若謂同其意作麼生、良久云、住住、秋色登平楓葉序、西風轉冷草花天、擧拂子一下。

重陽上堂、採菊東籬下、悠然見南山、靖節阿轆轆處、作衲僧一重關、且道、他是俗漢陋韻、爲甚作衲僧一重關、喝一喝云、參。

上堂、山僧卽今在須彌頂上說法、諸人也是在鐵輪峰頂聽法、坐底立底、賓主歷然、還會麼、會得盡十方界乾坤大地、在諸人眼睫上放大光明、其如未然、樹頂老山顏酢、擧拂子一下。

開爐上堂、擧、趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭有个无賓主話、直至而今無人擧著、師云、趙老面皮厚三寸、要須失手劫熱、其如爐下似春何、直饒而今有人擧著、方知三个枯柴品字燒、

上堂、一句去一句來、慶快儞一平生、忽然傾湫倒岳、入那裏出那裏、昨夜三更失却牛、天曉起來失却火、卓拄杖一下。

上堂、擧、盤山云、向上一路千聖不傳、慈明云、向上一路千聖不然、師云、二大老只解鬼爭漆桶、山僧便道、向上一路千聖齊行。

# 大德寺語錄　終

# 頌古

淨居於窟臛中叉手

玉函鑑月不期秋、夜靜方知波浪別、從此相逢路似迷、崔嵬檀特硬如鐵。

爾時迦葉告諸比丘、佛已荼毗、金剛舍利非我等事、我等宜當結集正法、無令斷絕。

列三析半信何通、回首白雲眼力空、鷄足峰前未歸去、多羅葉上動悲風。

行思禪師問希遷云、汝什麼處來、云、曹谿來、思乃擧佛子云、曹谿還有這箇麼、云、非但曹谿、西天亦無、思云、子莫曾到西天否、云、若到卽有也、思云、未在、更道、云、和尚也須道取一半、莫全靠學人、思云、不辭向汝道、恐已後無人承當。

明暗雙雙絕對揚、愁人未說斷愁腸、金毛獅子解踞地、寃苦蒼天又一場。

僧問大隨、劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞不壞、隨云、壞、僧云、與麼則隨佗去也、隨云、隨佗去。

劫火隨佗喚不回、遠離西蜀去還來、大千摠等者僧眼、古佛光中笑口開。

百丈懷海、一日謂衆云、佛法不是小事、老僧昔被馬大師一喝、直得三日耳聾眼暗、黃蘗聞擧吐舌、丈云、子已後莫承嗣馬祖、蘗云、不然、今日因師擧得見馬祖大機大用、然且不識馬祖、若嗣馬祖喪我兒孫、丈云、如是如是。

一喝耳聾天地黑、當機吐舌生荊棘、承虛接響意難論、兩兩三三好動著。

保福・長慶遊山次、福以手指云、只這裏便是妙峰頂、慶云、是即是、可惜許、雪竇著語云、今日共這漢遊山、圖什麼、復云、百千年後不道無、只是少、後舉似鏡清、清云、若不是孫公、便見髑髏徧野。

妙峰孤頂難人到、只看白雲飛又歸、松檜蒼蒼歷幾歲、莫教巖畔鳥聲稀。

僧問巴陵、如何是提婆宗、巴陵云、銀椀裏盛雪

提婆宗難分節、誰道銀椀裏盛雪、大地山河一等風、人間天上蕭洒絕。

盤山垂語云、三界無法、何處求心

千峰雨霽露光冷、月落松根蘿屋前、擬寫等閑此時意、一溪雲鎖水潺潺。

巖頭問僧、什麼處來、僧云、西京來、頭云、黃巢過後、還收得劍麼、僧云、收得、頭引頸近前云、囫、僧云、師頭落也、頭呵呵大笑、僧後到雪峰、峰問、什麼處來、僧云、巖頭來、峯云、有何言句、僧舉前話、雪峯打三十趂出。

黃巢過後劍難收、提去提來傷手憂、不是山藤三十下、梵天餘血五湖流。

雲門垂語云、古佛與露柱相交、是第幾機、自代云、南山起雲、北山下雨

古佛光中第幾機、南山雲外少人知、千溪日晚樵歌路、歸去來兮來去歸。

仰山問三聖、汝名什麼、聖云、慧寂、山云慧寂是我、聖云、我名慧然、仰山呵呵大笑、師著語云、什麼處去也。

煦日影中雪霽春、梅腮柳面鬪芳新、詩緣風與無限意、獨許苦吟野外人。

雲門垂語云、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、拈燈籠向佛殿裏、將三門來燈籠上。

宇宙乾坤同一寶、燈籠佛殿形山中、青松雪霽岩勢晚、寒月風淸溪畔空。

禾山垂語云、習學謂之聞、絕學謂之隣、過此二者是爲眞過、僧出問、如何是眞過、山云、解打鼓、問、如何是眞諦、山云、解打鼓、問、卽心卽佛卽不問、如何是非心非佛、山云、解打鼓、問、向上人來如何接、山云、解打鼓。

天上星地下木、覿機那肯涉離微、明明歷世無別物、猛烈身心更不疑、

仰山問僧、近離甚處、僧云、廬山、仰山云、曾遊五老峰麼、僧云、不曾遊、仰山云、闍梨不曾遊山、雲門云、此語皆爲慈悲之故、有落草之談。

看看落草不遊山、的信何通千里關、敲唱當鋒見禪悅、一圓空裏二三三。

外道問佛、不問有言不問無言、世尊良久、外道讚歎云、世尊大慈大悲、開我迷雲令我得入、外道去後、阿難問佛云、外道有何所證而言得入、佛云、如世良馬見鞭影而行。

不問有言異道事、鐵山當面勢崔嵬、孤峰雲散千溪月、鞭影追風直下來、

舉、祖山寶雲禪師、因僧問、如何是言不言、雲云、汝口在什麼處、僧云、無口、雲云、將什麼喫飯、僧無對、洞山代云、他不飢、喫什麼飯。

超然一句錯流布、强弄爪牙未作家、箭後路頭端的別、誰知高處有風波。

潙山因仰山問、如何是西來意、潙云、大好燈籠、仰云、莫只這箇便是麼、潙云、這箇是什麼、仰云、大好燈籠、潙云、果然不識。

機意交馳何處去、陣雲千里鎖重關、大家問著不相識、堪笑古風匝地寒。

江州龍雲臺禪師、因僧問、如何是祖師西來意、臺云、老僧昨夜欄裏失却牛。

昨夜欄裏失却牛、不風流處也風流、枯禪無限喚得作、祖意西來特地酹。

南泉一日東西兩堂爭猫兒、南泉見遂提起云、道得即不斬、衆無對、南泉斬却猫兒爲兩段、南泉復擧前話問趙州、州便脱草鞋於頭上戴出、泉云、子若在、恰救得猫兒。

兩堂爭處南泉斷、王老放時趙老收、頭上草鞋多少重、白雲流水共悠悠。

僧伽難提知衆生慢乃曰、世尊在日世界平正、無有丘陵、江河溝洫、水悉甘美、草木滋茂、國土豐盈、無八苦行十善、自雙樹示滅八百餘年、世界丘墟樹木枯悴、人無至信、正念輕微、不信眞如、唯愛神力、言訖以右手漸展入地、至金剛輪際、取甘露水、以琉璃器持至會所、大衆見之、即時欽慕悔過作禮、師著語云、拈得也未、

日暮雲晴空眼界、淸風況是草離離、松根石上與誰說、月到中峰猶未歸。

迦耶舍多尊者、領徒到一舍、舍主鳩摩羅多問云、是何徒衆、尊者云、是佛弟子、羅多聞佛號心神悚然、即時閉戸、尊者良久、自扣其門、羅多云、此舍無人、尊者云、答無者誰、羅多聞語知是異人、遽開關延接。

踏斷春風千萬峰、蒼苔青蘚鎖靈蹤、落花啼鳥夕陽裏、雲合雲開晩寺鐘、

梵摩淨德云、弟子衰老不能事師、願捨次子以令出家

退、已進人無可比、自千年後有誰知、室羅城畔金水上、山佛放光動地時。

不如蜜多、聞偈再啓、祖云、法衣宜可傳授、祖云、此衣爲難故、假以證明、汝身無難、何假其衣、蜜多聞語作禮而退。

月高松頂孤光冷、風弄殘雲穩意寛、四海涓涓百川落、琉璃殿上夜遊闌。

玄沙示衆云、諸方老宿盡道、接物利生、忽遇三種病人、作麼生接、患盲者拈槌竪拂、它又不見、患聾者語言三昧、它又不聞、患瘂者敎伊說、又說不得、且作麼生接、若接此人不得、佛法無靈驗、僧請益雲門、門云、汝禮拜著、僧禮拜起、門以拄杖挃、僧退後、門云、汝不是患盲、復喚近前來、僧近前、門云、汝不是患聾、乃云、還會麼、僧云、不會、門云、汝不是患瘂、僧於此有省。

盲聾瘖瘂誰能接、退後近前指下明、多向珍候沈動處、不知三種一毛病。

翠岩夏末示衆云、一夏已來、與兄弟東說西話、看翠岩眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關。

偸眼才開先下手、眉毛生也月方明、雲門關子萬重鎖、直至而今絕夜行。

鹽官一日喚侍者云、與我將犀牛扇子來、侍者云、扇子破了也、官云、扇子既破、還我犀牛兒來、侍者無對、投子云、不辭將出、恐頭角不全、雪竇拈云、我要不全底頭角、石

霜云、若還和尚卽無也、雪竇拈云、犀牛兒猶在、賓福畫一圓相於中書一牛字、雪竇拈云、適來爲什麼不將出、保福云、和尚年尊、別請人好、雪竇拈云、可惜勞而無功。

犀牛扇子清風起、坐斷清風出氣難、破了當年重用去、和烟搭在玉欄干。

雪峰住庵時、有兩僧來禮拜、峰見來以手托庵門、放身出云、是什麼、僧亦云、是什麼、峰低頭歸庵、僧後到巖頭、頭問、什麼處來、僧云、嶺南來、頭云、曾到雪峰麼、僧云、曾到、頭云、有何言句、僧擧前話、頭云、佗道什麼、僧云、佗無語、低頭歸庵、頭云、噫、我當初悔不向佗道末後句、若向伊道、天下人不奈雪老何、僧至夏末再擧前話請益、頭云、何不早問、僧云、未敢容易、頭云、雪峯雖與我同條生、不與我同條死、要識末後句只這是。

同條生處不同死、拈却明頭收暗頭、從此放身歸庵去、至今簾外鬼神愁、

潙山・五峯・雲巖同侍立百丈、百丈問潙山、併却咽喉脣吻、作麼生道、潙山云、却請和尚道、丈云、我不辭向汝道、恐已後喪我兒孫、復問五峰、峰云、和尚也須併却、丈云、無人處斫額望汝、又問雲巖、巖云、和尚有也未、丈云、喪我兒孫。

東街柳色和烟翠、西巷桃花相映紅、幾度春風晩鐘裏、遊人著意到寥空。

南泉參百丈涅槃和尚、丈問、從上諸聖還有不爲人說底法麼、泉云、有、丈云、作麼生是不爲人說底法、泉云、不是心、不是佛、不是物、丈云、說了也、泉云、某甲只與麼、和尚作麼生、丈云、我又不是大善知識、爭知有說不說、泉云、某甲不會、丈云、我太煞爲儞

說了也。
從上爲人事、不容老胡知、寒雲抱幽石、霜月照清池。
大隨問僧、什麽處去、僧云、禮普賢去、隨擧拂子云、文殊普賢、總在這裏、僧作圓相拋向背後、乃展兩手、隨云、侍者取一帖茶與這僧。
遠開近見一賓主、半暗半明孰與揚、若是箇中全用去、普賢特地逐亡羊。
三角總印云、若論此事、貶上眉毛早已蹉過也、麻谷便問、貶上眉毛即不問、如何是此事、角云、蹉過也、谷乃掀禪床、角打之、谷無語。
地獄天堂阿剌剌、機關直下沒應把、姦生多變卻難得、雙放雙收過新羅。
維摩詰問文殊師利、何等是菩薩入不二法門、文殊師利云、如我意者於一切法、無言無說無示無識、離諸問答、是爲入不二法門、代維摩打出、於是文殊師利問維摩詰、我等各自說已、仁者當說、何等是菩薩入不二法門、維摩默然、代文殊乃喝。
不二法門何再說、二千三萬一齊來、當年妙吉親用去、扶得病翁使口開。
僧問趙州、初生孩子、還具六識也無、州云、急水上打毬子、僧復問投子、急水上打毬子、意旨如何、子云、念念不停流。
六識問來難識破、趙州老大只麽酧、可憐同道實頭漢、道道念念不停流。
京兆米和尚因有老宿問、月中斷井索、時人喚作蛇、未審七師見佛喚作什麽、米云、若有佛見即同衆生、宿云、千年桃核、師別米和尚驀口一拳。

斷非索子、月中爲蛇、衝氣吐毒、跳沫馳波、生兮佛兮齊難話、多劫潛徽歸滅磨、不滅磨、紫金光聚照山河。

雲門云、古人道、人人盡有光明在、看時不見暗昏昏、作麼生是光明、代云、厨庫三門、又云、好事不如無。

九天雲淨衆星微、風與何餘一句詩、今夜與君無事去、時人喚作那斯祈。

三門厨庫是光明、見不見時難辨別、好事元來不如無、烏鷄半夜啄生鐵。

馬大師不安、院主問、和尚近日尊候如何、大師云、日面佛月面佛

日面佛　面佛、三三兩兩太無端、二十年來苦辛客、照絕精微見大難。

僧問雲門、如何是超佛越祖之談、門云、胡餅

觀面胡餅難下口、摩斯吒徒入瀾中、者回休吐黑雲霧、寥廓天邊無白虹。

百丈惟政禪師、一日謂衆云、汝爲我開田、我爲汝說大義、僧衆開田、竟請和尚說大義、百丈便展開兩手。

閃電激怒雷馳、眼裏耳裏箇觀機、昨夜三山三跳後、北辰鬼谷作擬議、作擬議、七佛祖師曾未知。

平田普岸禪師、因有僧到參、平田打一拄杖、其僧近前把住拄杖、平田云、老僧適來造次、僧卻打平田一拄杖、平田云、作家作家、僧禮拜、平田把住云、是闍梨造次、僧大笑、平田云、這箇師僧、今日大敗也。

一向一背不易親、互換韜略鼓旗別、干將劍未斬甲鎧、夏服箭何穿七札、鬼哭神悲、崖崩石裂還顚蹶、師僧今日大敗缺。

庵中主見還難、句裏藏身太無端、偸眼暫時休也未、夜深誰共過關山。

大慈山寰中禪師住庵時、南泉至問、如何是庵中主、寰云、蒼天蒼天、泉云、蒼天且置、如何是庵中主、寰云、會即便會、莫切切、南泉拂袖而出。

僧問藥山、平田淺草塵鹿成群、如何射得塵中塵、山云、看箭、僧放身便倒、山云、侍者拖出這死漢、僧便走、山云、弄泥團漢、有什麼限、雪竇拈云、三步雖活、五步須死。

塵中塵走得三步、五步未堪趁虎兒、趁虎兒獵人徒莫覓坤維。

慧忠國師與紫璘供奉論議、既升座、供奉云、請師立義、某甲破、忠云、立義竟、供奉云、是什麼義、忠云、果然不見、非公境界、便下座。

祖風迴振機輪轉、學海瀾忙自沒頭、大鵬一擧九萬里、籬邊燕雀空啾啾。

僧問洞山、如何是佛、山云、麻三斤

木落岩崗鋒骨冷、月斜禪石曉難開、寒雲伴來閑不徹、飛瀑從他起忽雷。

六祖云、不思善不思惡、正當恁麼時、還明上座本來面目來

五步款行三步疾、莫教正眼頂門開、悠悠不見庾嶺路、腳後腳前歸去來。

霍山和尙、聞祕魔岩和尙、凡有僧到禮拜、以木叉叉著、霍山一日遂往訪之、才見不禮拜、直入祕魔懷裏、祕魔拊霍山背三下、霍山起拍手云、此老一千里地賺我來、便

回。

當機提覩面疾、取次用來若爲宗、箇箇一千應走卻、草鞋跟斷起清風。

梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝云、對朕者誰、磨云、不識、

廓然不識有幾人、古路横行鎖嶺烟、從此少林深雪裏、斷臂刀下別疎親。

風穴垂語云、若立一塵、家國興盛、野老顰蹙、若不立一塵、家國喪亡、野老謳歌、雪竇拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼。

顰蹙謳歌在一塵、同生同死憑何人、紅霞碧靄籠高低、芳草野花一樣春。

南嶽懷讓遣一僧到馬祖處去云、但問作麼生、伊道底、言語記將來、僧去一如懷讓旨、回謂懷讓云、馬祖云、自從胡亂後三十年、不曾闕鹽醬、讓然之。

朝三千暮八百、箇箇放過一著、生鐵如和土壤、大冶可解拈却。

頌古　終

# 拈古

擧、臨濟上堂云、一人在孤峯頂上、無出身之路、一人在十字街頭、亦無向背、那箇在前那箇在後、不作維摩詰、不作傅大士、珍重、師云、將謂龍頭蛇尾、元來只是蛇尾龍頭、雖然如是、深領指示。

擧、欽山同岩頭・雪峰到德山、乃問、天皇也恁麼道、龍潭也恁麼道、未審德山作麼生道、德山云、汝試擧天皇龍潭底看、欽山擬議、德山便打、欽山歸延壽堂云、是則是、打我太煞、岩頭云、儞與麼、他後莫道見德山、師云、可惜許。

擧、雲門上堂云、遇人卽鼻[illegible]遼天、師云、堪笑這老漢、赤脚上刀山、披毛入火聚、其爭奈解笑底也少。

擧、僧問雲門、如何是透法身句、門云、北斗裏藏身、師云、衆生若非法身卽非衆生、法身若非衆生亦非法身、透之一字因誰致得、直饒是北斗裏藏身、可謂修羅三目似伊字。

擧、雪竇示衆云、譬若二龍爭珠、有爪牙者不得、或有衲僧問、既是有爪牙者、爲什麼不得、請大衆爲雪竇下一轉語、師云、其貧不學儉、富不學奢、此是俗漢之陋韻、卻可謂知言也、且問諸人、二龍爪牙、孰與雪竇爪牙、他既爭珠不得之、這老爭箇什麼而不得、請各下一點語。

擧、趙州問投子、大死底人、卻活時如何、投子云、不許夜行、投明須到、師云、趙州移步不移身、投

子移身不移步、雖然承虛接響、爭奈他後學得者少。

擧、臨濟令侍者傳語德山、侍云、德山要打人、濟云、汝但去、待伊拈棒接住與一送、管取不打、儞、侍依所教、果然不打、歸擧似臨濟、濟云、我從來疑著者漢、師云、蓋是作者動止、神鬼難測、一人向海枯終見底處、坐斷千聖之頂𩕳、一人向人死不知心處、瞎却衲子之眼睛、咦、可貴可賤。

擧、雪竇一日問僧、儞浴未、僧云、某甲此生不浴、竇云、儞不浴、圖箇什麼、僧云、今日被和尚勘破、竇云、賊不打貧兒家、師拈云、雪竇老漢才兼文武、出將入相、今日遭拈出一口鉛刀子高竪降旗、諸人要識雪竇麼、一種是聲無限意、有堪聽有不堪聽。

擧、風穴因僧問、如何是清涼山中主、穴云、一句不違無著問、迄今猶作野盤僧、師云、古人恁麼答、褒清涼主貶清涼主、若是道褒、因什麼有不違無著問之句、若也道貶、他有箇什麼過、道不褒不貶、風穴何必有恁麼語話、無端觸著、獅子哮吼。

擧、臺山路上有一婆子接待、凡有僧問臺山路甚麼去、婆云、驀直去、僧才去、婆云、好箇師僧、又與麼去、如是既久、游僧傳到趙州、州聞得云、待我去勘破他、遂去問臺山路、婆隨例云、驀直去、州才行、婆又云、好箇師僧、又與麼去、州回云、我勘破婆子了也、師云、盡謂日下挑孤灯、殊不知失錢遭罪。

擧、臨濟上堂云、有一人論劫在途中不離家舍、有一人離家舍不在途中、那箇合受人天供養、便下座、師云、這老漢威容嚴肅、衲子到者無不失其擧措、大家寢默俛仰、過日不見道、衆人之唯唯、不如一士之諤諤、若是人天供養、要揀取一人。

## 拈古　終

# 大燈國師行狀

大應國師唱臨濟宗旨於橫嶽・萬壽・建長也、幾乎四十年矣、其間摳衣者不知幾何、師其一也、師諱妙超、宗峰其號也、生於播州揖西縣紀氏子、父母禱於本州書寫山如意輪觀音、母夢、一僧手携白花開於五葉而與之、有妊、妊而後如寐而不寤、至其誕之時、熟睡而不知也、保母俄聞呱地一聲、往而見之、未澡浴而肌體瑩潔、克岐克嶷、頂骨聳立、伏犀插額、目光射人、隨面前人能轉顏目、五歲時、見人發刀於硎云、何爲而作也、云、貴圖快利云、不快利處有快利、爾還知麽、其人罔測、師呵呵大笑、觸事以折挫人、若比親族有諫而欲使往之者、拈棒便打、鄕黨稱爲神童矣、十有一歲而師事於書寫山戒信律師、每屏坐靜處、志厭俗塵、經書過目成誦、一日慨然云、假使究九流三藏百家異道書、爭若入不立文字直指單傳宗、未剃染而發足、至京城幷相州、參問諸尊宿、尊宿雖氣吞佛祖底、不敢嬰其鋒、謁建長長老問曰、路逢死蛇莫打殺、無底籃子盛將歸、意旨如何、老曰、放下着、者般底直下便看取、師云、只如道直下便看取如何、老擬議、師乃喝、造萬壽問佛國禪師曰、佛法無多子、着衣喫飯處卽是、纔作恁麽理會、早是不是了也、國云、未知恁麽事以前與而今如何區別、師云、區則區、別則不別、國云、試區別看、師指露柱云、喚者箇作露柱、則與昔時逈隔、不喚者箇作露柱、則而今已別、國云、豈是佛法、師云、和尙好箇時節、國云、只與麽受用、與老僧別、師云、若見有和尙某甲、佗日悔去、國云、平生日用處、直

下道來看、師云、步步踏着毘盧頂、言言勘破維摩詰、次日又來問云、昨日與今日、請師辨別、國云、說什麼昨日、直道今日事、師云、雲從龍風從虎、國云、雲未起風未來時如何、師云、天上天下唯我獨尊、國云、雲門云、我當時若見、一棒打殺與狗子喫、貴圖天下太平、如何、師曰、一口吞却了也、國橫點頭曰、此語不敢肯、師乃喝、國亦喝、師又喝而出去、國送出門、曰、我見多少學者、未嘗逢如公俊底、宜祝髮披衣棟梁吾道、師翌日重參佛國、國見來曰、古人云、大用現前、不存軌則、時如何、師曰、和尚未問以前、已現前久矣、國云、在甚麼處、師曰、夜來狂風吹、折門前一枝松、國云、如何是狂風、師搖手中扇子、國休去、師云、狂風豈不是扇子、國大笑云、纔見相似却也蹉過、師於此服膺矣、自歎曰、人身難得、佛法難遇、遇賤則貴、豈丈夫志、遂落髮受具、旦夕留心於此事、一夕坐僧堂、聞僧隔壁誦百丈語云、靈光獨耀迥絕根塵、體露眞常不拘文字、豁然有省、夜半扣門呈其見解、國云、既是眞正見解也、宜建法幢立宗旨、厥後大應國師應　詔自橫岳來京師、館于韜光庵、師在相州聞其手段辛辣、趨于京、徑詣其室、問云、學人遠遠來化下、請師一接、師云、老來無力、且坐喫茶、師云、恁麼用去、只恐不肯、國師云、儞是新到、爭知這裏事、師云千里同風、豈不是君子、國師云、室中物色、儞試指出看、師云、七九六十三、國師云、無慚愧漢、來處也不知、師云、謹謝老師以學人托上梵天、國師云、今日自領出去、明日事儞作麼生、師云、天際日上月下、檻前山深水寒、國師云、一死不再活、師便休、國師便問、五祖演示佛眼云、牛過窓櫺、頭角四蹄全出、尾巴因甚出不得、儞試下一轉語看、師云、曲心已露、國師云、如何是曲心、師云、拄天拄地、國師大笑云、與麼空過、他日有悔、三日後師下語曰、杓卜聽虛聲、國師云、方得相

似、自爾晝參暮請、不敢退轉、國師時臥疾、經旬閉方丈戶、止學者參問、唯師見許參請、國師云、爾是天然衲子也、不是一兩生參學士、國師承詔住京城萬壽、師從之侍巾瓶、國師示以翠岩眉毛在麼、雲門云、關之語也、師下語云、將錯就錯、國師曰、是則是、爾能於關字着精彩、他時別須有生涯、德治丁未、國師赴于相州住建長、師乃參隨至彼、未經十日、因案上放在鎖子、忽然打透關字、到了圓融無際、眞實諦當、大法現前處、汗流浹背、急趨方丈下語曰、幾乎同路、國師大愕云、夜來夢見雲門入吾室、爾今日透關字、爾是雲門再來也、師掩耳而出、翌日呈二偈云、一回透過雲關了、南北東西活路通、夕處朝遊沒賓主、脚頭脚底起清風、透過雲關無舊路、青天白日是家山、機輪通變難人到、金色頭陀拱手還、妙超胸懷如是、若不孤負師意、伏望賜一言、近擬歸故都、莫惜尊意、以爲大幸耳、國師援筆自書其後云、爾既明投暗合、吾不如爾、吾宗到爾大立去、只是二十年長養、使人知此證明矣、爲妙超禪人書、巨福山南浦紹明、延慶戊申臘月、國師示滅、心喪既畢、歸京而卜居於洛水東、衲子纔六七輩、刻苦自厲、至忘寒飢、一夕夢有六人僧、狀若羅漢、居第一位僧云、出世時至、何不出也、師云、仁義盡從貧處斷、僧卽領而以竹針挑破腦後云、爲爾抉出貧肉、覺後頭腦尙痛焉、不幾而去雲居、徙居城北紫野、不立佛殿、唯樹法堂、洗心子玄惠法印、偕儒者九人奏於朝、欲破禪宗、禪宗若有奇特事、吾儕豈敢、諸儒徵詰、諸方禪將、無有當意者、諸儒聞師名、而特來問云、禪宗手段如何、師云、以虛僞示眞實、儒云、聖人有虛言否、師云、有、云、既是聖人、有甚虛言、師云、不見孟子有之、象謂已殺舜了而入宮、見舜在床琴、舜見象來而喜、豈不是虛僞、其間激揚鏗鏘、問答罷、儒却問師云、畢竟如何決

斷此義去也、師云、舜却殺象了也、諸儒皆稽顙而執弟子禮、就中洗心子、入室參禪、造詣不淺、不勝崇信之至、施第宅而作大德方丈、今雲門庵是也、師氣宇如王、人少近傍、數年罕有爲檀越外護者、一旦　萩原法皇聞其風而召入內、　上遣中使告師、而欲披道服而除一重坐席談話、師再三乞着袈裟而對坐、一一許之、　帝勅云、佛法不思議、與王法對坐、師奏云、王法不思議、與佛法對坐、　上動龍顏、一日、　上勅問云、不與萬法爲侶者、是什麼人、師搖手中扇子云、皇風永扇、一日面有勅、云、朕欲以大德寺爲朝廷第一祈禱處去、師受命而云、唯唯、　後醍醐天皇即位、如前所勅禮敬彌敦、寵恩益渥、　帝召弟子僧入內、　帝問云、不與萬法爲侶者、是什麼人、僧起而勃跳、僧却奏云、不與萬法爲侶者、什麼人、　上以手中珪劃一劃云、這箇、聻、師上法語云、億劫相離而不相離、盡日相對而不相對、不審是什麼物、請聽、　綸言、帝御筆書紙尾云、昨夜三更露柱、向和尚道了也、　上書投機頌賜師云、二十年來辛苦人、迎春不換舊風烟、着衣喫飯恁麼去、大地那曾有一塵、又書紙尾云、弟子有箇悟處、以何驗朕、師又書云、老僧恁麼驗、聻、又　御筆書古人節角譊訛則語問師、師謹書紙奏對、不可勝計、勅洞院都護、請師入、　禁掖、就五節所假設法座、請師陞座、面前懸百丈禪師頂相、　帝亦於法座右側設御榻、側天聽、月卿雲客皆在於左右前後、拈香祝　聖罷、師下法座、　帝亦下御榻、師奏云、臣僧適來許多鄙俚言說、功歸何處、　帝指百丈眞云、百丈禪師爲證明、師云、此外更無有人作證明麼、　帝便竪起拳頭、師云、與麼則南山朝北闕、夜夜見明星、　帝瞬目而祗揖、師勃跳而出去、　皇情大悅、次日賜兼金縑帛等、兩朝特賜與禪大燈高照正燈國師號、所賜庄田、濃州長

森、播州小宅三職方、幷浦上、綿州遠山方、御厨、信州伴野、紀州高家、仍見下官府宣、正中年中、南禪虛席、　詔下請師再三、竟不赴、建武初、下　綸旨云、大德禪寺宜處五山之一也、師却而不受之、又下　詔云、宜相並南禪淨刹、　萩原法皇、　後醍醐天皇、親　宸翰、有一流相承不許他門住、涇渭殊流、貽言於龍華、　御製、臨之刊之、見懸於塔額左右、　萩原法皇自剪髮、造小塔安於其中、被置在靈光塔左邊、蓋爲結與大燈當今來世香火緣也、筑州太宰府都督司馬少卿、上帖於師、請住橫岳山崇福禪寺、詣闕而以此事奏、　帝堅留之、重敷奏、以師翁行道地、　帝乃允之、纔作百日主而告退、迁歸于大德、垂三轉語示衆云、朝結眉夕交肩、我何似露柱盡日、往來我因甚不動、若透得箇兩轉語、一生參學事了畢、建武丁丑冬、一夕召首座(德禪開山徹翁和尚也、)曰、我化緣已盡、衣法幷本寺末寺住持職事、悉付與爾、克令子孫接續使不斷絕、未幾得疾、臘月二十一日夜書、亨首座相從久矣、悟徹既人皆知之、語而授焉、又示遺誡於諸弟子云、我行而後、置骨於丈室、莫別造塔、其有以也、夫汝等宜委悉、二十二日午時、欲端坐胡床示滅、而久有足疾、患不克結跏趺坐、首座出以此爲憾語、師自以兩手加左足於右股上、左膝傷折、血流露衣、至今血痕尙存焉、乃書辭世偈云、截斷佛祖、吹毛常磨、機輪轉處虛空咬牙、擲筆而逝、大鑑禪師時住南禪、有人傳誦遺偈、鑑聞而大驚云、不意、日本有明眼宗師也、平生欲會而、而人皆沮止之、遺恨不少、欲赴茶毗、而緣有朝廷祈禱事不能也、且遣僧人伺茶毗時、至馳歸告之、乃率大衆出山門頭諷經、遣侍者二人贈瓣香、(溫中和尚、正翁和尚也、)瓣香至今爲寺什物、世壽五十六、僧臘三十四、門人悉遵遺誡、親承印可嗣其法者、妙心關山

和尚、興德海岸、池寺白毫野州了翁、長福璧峰、金剛日山、貞庵主、可監寺、和典座、各據一方接引學者、師平居與物爲春、無町畦也、迄于夫陞堂而秉拂子、開室而握竹篦、以機攻機、如張良躡足而封韓信、是賊知賊、若孫子減竈而敗龐涓、阿脩羅王托動三有大城、金翅鳥王擘破娑竭羅海、談笑而起臨濟於已仆、叱咤而破雲門之機關、到于極處穿山透石壁、鼻孔血淋淋有語錄三帙、一帙雪竇錄着語、有自來矣、按夫雲門遺誡云、吾滅後、置吾於方丈中、上或賜塔額、祇懸於方丈、勿別營作、又遺表云、聯叨鳳詔、累對龍庭、纔奉頒宣、重疊慶賜、師示遺誡、准雲門故事、置骨於方丈、塔賜靈光額、沐兩朝寵光優渥、嬰足疾患、大應雲門再誕語、絲髮不爽也、大應滅後十有九白、嘉曆元年奉　詔開大德法堂、一香供大應、二十年長養記莂、若合符節、入滅纔九十年矣、夫何門庭冷落、子孫寢微、所謂強弩之末勢、不能穿魯縞者歟、寔足歎息、應永三十三年龍集丙午九月日、德禪遠孫小比丘禪興謹狀梗槩、以備大方尊宿名公銘塔之目云、

大燈國師語錄終

# 國譯白隱禪師息耕錄開筵普說

## 解題

息耕錄開筵普說は、櫻町天皇の元文五年の春、正宗國師白隱禪師が五十六歳の壯齡を以て一衆の請に應じて、息耕十會の語錄（卽ち虛堂錄）を開講し、其の開筵の日に丁つて、參學の徒を提誨せるもの、乃ち本普說一篇是れなり。白隱一代の著作、甚だ多しと雖も、此の普說一篇の如きは、實に禪師畢生中の一大雄辯にして、其の博大高明なる眼識を以て古今の衲子を空しうし、以て學者のために其の根源を直截し、古往今來、瞎眼の徒を激勵呵罵して毫も假借する所なく、縱横無盡に論じ來り說き去るあたりは、皆是れ禪師の苦心熱腸の迸る所にして、寔に是れ掣電の機、奔雷の舌、古今未發の口を開いて、普く佛祖不說の法を說き、其の片言隻字と雖も、咸是れ超佛越祖の談ならざるはなく、誠に鵠林の禪風を遺憾なく發揮せるものと謂ふべし。而して編者は師の侍者東胡にして、校訂者は參學原譯なり。猶ほ卷頭には侍者玄軾の印施解と美濃の天啓の序とを冠し、又卷末には禪師の息耕錄評唱剩語を附す。寛保三年秋九月、駿河原驛松蔭寺の參學文忠の開板にして、京都二條高倉吉田三郎兵衞及び駿河沼津驛紀伊國屋藤兵衞の二人をして發行せしめしものなり。

傳を案ずるに、師諱は慧鶴、別に鵠林と號す。駿河國原驛の人、俗姓は杉山氏、鈴木三郎重家の遠裔にして、貞享二年十二月二十五日を以て生る。母は長澤氏、幼名を岩次郎といひ、夙に世相の無常なるを悲しみ、出家得度の志あり、十四歳にして徳源均といふものに就いて禪林句集を讀習し、翌元祿十二年二月二十五日、原驛の松蔭寺に入り、單嶺傳公を拜して落髮受具す。單嶺、資性大度、越格の量あり、師髮を剃除し了るや、嶺、師の背を一打して曰く「梵儀正守すべし」と。道ひ了つて便ち法名を授く。徳源寺の東洲、偈を作りて祝して曰く「善哉眞出家、悲喜佛與ㇾ魔、若欲ㇾ成二斯道一、莫ㇾ忘二三顧摩一」と。師誓つて曰く「若し肉身にして、火も燒くこと能はず、水も漂すこと能はざるの力を獲ずんば、設へ死すとも休まず」と。幾もなくして沼津に往き、大聖寺の息道に隨侍す。同十六年、大聖寺を辭し、清水の禪叢寺に入りて修行し、翌寶永元年、二十歳にして美濃國檜木の瑞雲寺に至り、馬翁に從事す。時方に書を曝す。師堂に登りて之を觀る、則ち內外の典籍架上に積堆す。師進んで禮拜して曰く「儒佛老莊諸家の道、我れ當に何を以てか師とすべき。護法天龍、願はくば我れに正路を示せ」と。瞑目默禱し、手に信せて把著して一小冊を得たり、禪關策進と名づく。頂受して之を開けば、卽ち「引錐自刺」の章に撞著す。師之を閱し了つて、志氣憤激して醍醐を吞むが如し、乃ち其の書を馬翁に乞ひ求めて、常に照心辨道の友となす。五月二十七日母の訃を得て、偈を作りて薦す。翌二年春、瑞雲寺を辭し、同國洞戶の保福寺に至り、南禪に見えて夏を度り、秋、保福を辭し、靈松院に至りて萬休に謁す。復た去

つて美濃の伊自良の東光寺に至り、大功に依つて坐臘す。三年二十二歳、若狭の常高寺に往いて萬里に謁し、尋で伊豫の正宗寺に至り、逸禪の佛祖三經の講席に列る。翌年、備後福山の正壽寺に至り、正宗贊の會を終へて東歸す。行く行く狗子佛性の話に參ず。路、備前岡山城を過ぐ。同友相爭うて、城池の壯麗、風土の勝概を語る、師獨り謂へらく「我が道未だ成らず、何ぞ此の遊觀を事とするの暇あらんや」と。瞑目して視ず。尋で播磨の一山寺に宿し、溪流を見て一偈を賦す。曰く、「山下有二流水一、滾々無二止時一、禪心若如是、見性豈其遲」と。路兵庫に至り、船に投じて颶風に遭ひ、風浪狂暴、船客皆顏色なく、舟子は髻を斷つて海神に祈る。師獨り偃臥熟眠して鼻息齁々たり。舟子罵つて曰く、「咄、この瞳眠漢、昨夜我が船殆んど覆沒せんとするに、子獨り偃臥して之を知らざるものの如し。我れ海上に經ること多年、未だ嘗て子の如き大膽平氣なるものを見ず」と。師之を聞いて始めて前厄を知り、乃ち合掌して曰く、「諸聖の擁護に賴りて、獨り此の患難を免る」と。是れより伊勢に至り、馬翁の重病を聞き、乃ち瑞雲に至つて看護す。五年の春、越後高田の英巖寺に抵り、性徹和尚の人天眼目を講ずるを聽く。講餘毎に、寺後の先侯の墳廟に抵り、日夜、坐禪研究して寢食を忘る。十餘日を經て、一夜恍然として曉に達す。乍ち遠寺の鐘聲を聞き、豁然として大悟す。直に性徹に所見を呈す、性徹の機語峻ならず、師一掌を與へて出づ。是れに由つて所見を負擔し、諸方を併呑す。自ら思ふ、「三百年來、未だ余の如く痛快了徹するものあらじ」と。時に宗格といふものあり、師に言つて曰く、「公は誠に超卓なり、只

だ惜しむらくは、到あり未到あり、公若し吾が老漢を見ば、必ず觀るべき事あらん」と。師其の人、如何を叩く、格曰く「我れは本信陽の人、州の飯山に一庵主あり、名を正受庵慧端といふ。愚堂の孫にして至道庵主手度の子なり、專ら吾が宗、向上の一著を提す、我れ彼の毒手に觸るゝこと多年なり」と。師之を聞き、直に往いて之に見えんと欲す。格曰く「公の器識、他の鉗鎚を受くるに堪ふべし。然れども庵主の門風、只だ眞正の種草を要め、尤も多衆の鬧熱を惡む。公必ず人を伴ふ勿れ」と。師乃ち散筵を待つて、單身、格と俱に飯山に抵る。先づ傳燈錄を閱して、「初祖七歲にして出家得道し、尚ほ般若多羅に侍し、修行すること二十年にして其の蘊奧を盡す」と謂ふに至つて、乃ち惕然として猛省し、慢心稍々滅じ増進智を發す。是に於て宗格に隨つて正受庵に至り、始めて主翁に見えて所解一篇を呈す。翁左手に偈を握つて曰く「這箇は是れ汝が學得底」と。右手を展べて曰く「那箇か是れ見得底」と。師曰く「若し見得底の呈すべきあらば、須らく吐却すべし」と。便ち嘔吐の聲を作す。翁拶して曰く「趙州の無字、作麼生か會す」と。師曰く「趙州の無、何れの處に向つてか手脚を著けん」と。翁指を以て師の鼻頭を抑へて曰く「噫、多少手脚を著けん」と。師是に於て通身汗流る。以後、入室して參請努力して毫も撓まず。刻苦精勵すること八閱月にして、竟に其の蘊奧を究む。時に師年二十五なり。

是の春、單嶺先師の忌齋に値ふ。尋で遠州小山の能滿寺等を經回し、七年二十六歲、京都に上り、白河山中の隱士白幽眞人を訪問して內觀修養の訣を受く。正德二年、師年二十八歲、松蔭寺に於て少室六

門書を講說し、翌三年、伊勢の建國寺に抵り、義海和尚の虛堂錄會に預る。又若狹の闡照寺に往いて鐵道和尚に侍し、夏終つて河内の法雲寺に往き、慧極和尚に謁す。次で和泉の蔭涼寺に鐵心に見え、又美濃の虎溪の幽勝を探り、後、岩瀧山中に一草庵を結んで修行す。享保元年師三十二歲、松蔭寺に還り、檀越、同門の尊宿及び淸見和尚等相謀り、便ち正月十日單嶺先師の忌齋なるを以て強ひて入院せしむ。此の時、松蔭寺頹廢して言ふべからず。一老僕あり、薪を拾ひ菓を採りて僅かに給するのみ。翌二年、父を喪ふ。この年、松蔭寺に於て大慧書を講說し、四來の大衆漸く多きを加ふ。明年、妙心寺の第一座に轉位す。禪客二十人、伴を結んで掛錫を乞ふ。師固く辭して許さず。衆皆庭下に排列して切に請ふこと數日、師已むを得ず、之を許して大慧書を講ず。元文五年、五十六歲虛堂錄を提唱す。闊衆四百餘員、龍潭通首座たり、安養澤副貳たり。六十一歲の時、甲州の自得庵の維摩會の請に赴き、一衆三百餘、忠譯事を掌る。寶曆元年、師六十七歲、備前岡山の少林寺の請に應じ、川老金剛經を講ず。次で井山の寶福寺に到り、四部錄を講ず。歸途、京都を過ぎ、世繼氏に館し、池大雅來參す。尋で妙心寺に登りて碧巖錄を養源院に講ず、寶鏡、光照の兩公主及び皇女淸淨光院、會に臨む。葉室一位、冷泉黃門之に陪侍す。同二年、六十八歲、駿河富士郡比奈の無量寺落成し、開山の儀を擧げ、弟子東嶺圓慈を以て、住持となす。六十九歲、甲府の能成寺の講に赴き、人天眼目を提唱し、會終つて東光寺に赴き、毒語心經を講演す。此の會、正受老人の三十三回忌齋を修す。七十一歲、伊豆の龍澤寺の維摩會に赴く、

大檀越松平防州侯、日々に臨んで法を聽く、敬信殊に篤し。明年春、松蔭寺にありて楞嚴經を講じ、夏四月、州の高林寺に大應國師四百五十年忌齋を設く、師に請うて拈香、且法を說かしむ、乃ち國師の語錄を評唱す。寶暦十年、七十六歳、伊豆龍澤寺の新道場の請に應じて息耕錄會普說を提唱し、兼ねて開山の儀を成す。明和二年師八十一歳、東嶺の江戸の至道庵を再興して師を請ず。翌三年、老病を扶けて江戸に赴き、東北寺及び至道庵に至る。同五年、八十四歳の高齢を以て河西の大乘寺、由井の常圓寺等に優遊し、或ひは三日、或ひは五日、其の心の欲する所に隨つて法施を行ふ。其の常圓にあるや、勞倦劇甚、一僧の勸めて曰く、「暫く法施を輟め、以て自ら保つべし」と、師肯んぜずして曰く、「僧俗の飢を如何にせん」と。十一月、松蔭寺に還る。衰病愈々篤く、四大甚だ調はず。十二月七日、醫古郡氏來り、脈を診して曰く、「脈徵別に異なるなし」と。師呵して曰く、「吾が死、將に三日を出でざらんとす、然るに其の兆を知らず、豈に良醫と謂ふべけんや」と。十日、臥褥に在りて徒弟遂翁を召し、後事を委囑し、十一日の拂曉、且く靜かに高臥し、大叫一聲、末後の句に代へ、右脇して遷化す。壽八十四。十五日津送す。塔を三處に分つ。法を嗣ぐものは東嶺、遂翁、峨山、大龍、東巖等四十餘員あり、白衣の弟子の禮を執るもの其の幾何なるを知らず、法幢の盛んなること前古稀に觀る所、五百年間出の言、洵に臨濟中興の大宗師なり。明和六年六月八日、後櫻町天皇特に褒章を加へ、勅して諡を神機獨妙禪師と賜ふ。又明治十七年五月二十六日、明治天皇、更に正宗國師の徽號を追謚せらる。語錄荊叢毒蘂十卷

あり。外に槐安國語五卷、寒山詩闡提記聞三卷、寒林貽寶一卷、息耕錄開筵普說一卷、寶鏡貽照一卷及び假名法語若干卷あり。皆世に行はる。師は又兼ねて雜畫を善くし、頗る異風あり、道歌を詠じ、畫贊を作りて人を敎導す。又其の窟を闡提と曰ふ。

# 國譯息耕錄開筵 ㋑普說印施解

寛保第三癸亥 ㋺臘八の ㋩齋後、客あり、軾に告げて曰く、「㊁鵠林近ごろ普說の印施あり、諸方往々に師を以て利名を釣る者と爲す。謗熖妬火、將に師を炙かんとす、果して然るか、將た又別に端由あるか。盍ぞ說を作つて、此の蹇を救はざる。」軾が曰く、「嗟、其の事あらん、世の極むること罔きに遭ふて、師獨り此の咎に ㋭離へり矣。師若し者般の醜態有らば、豈に其れ住庵八十箇の燕頷虎頭仰ぎ望んで、世を遺る者ならんや。孰か敬し事へて饑寒を執ることを爲ん。是れ從頭、軾が識破する所の者なり。居れ、吾れ儞に語げん。師、元文第五庚申の春、江湖の諄請に依つて、息耕擊壤の古曲を擊節するもの一場、其の前年己未の冬十月、㋬少林忌の齋後、四顧の住庵數十肩の破袈裟、力を ㋣勠せて籌を定めて、豫め一會の備を營辨す。老屋の傾側せるは扶起し、古井の塡渴せるは鑿開し、㋠戸牖の敗落せるは釘々着、梁棟の朽頽せるは懸掛着。澤徹沙嵩の諸子、精神を振つて

㋑普說。叢林に於ける式法。其の說一定せざれども宋の熙寧、元祐の間、眞淨和尚、洞山歸宗に住して獨特の禪風を孤起して、以て學人を指導するに、大衆をして入室せしめず、專ら普說を以てなしたると云ふに始まると云ふに至つて、諸說一致す。普說は一切世界の諸法を普く說く故に、しか名づくと。又一時の說法萬世に普き故に云ふと。

㋺臘八。臘月八日の略、即ち十二月八日のこと、十二月八日は釋尊が明星を見て佛道を證得し玉ひし翌日なり、禪門寺院にては前日の黄昏より徹夜坐禪して、八日の曉に至りて

困苦す。休は遐方に走つて菽麥を化し、忠は近里を廻つて菜蔬を乞ふ。其の餘は、更々憩ひて互に相輔翼す。晝間夜陰、作務紛絮、師、且く之を避く。純と航とを携へて、走つて白水に遁れ、淹留する者旬餘。次に㋷藤皐に轉じ、石氏が隱處に入る。留滯既に月餘に向とす。其の中間、請に趣き客を接するの外、枕を喚んで甘睡す。鼻雷轟々として屋壁振ひ搖ぎ、塗塵飛び廻る。恰も巴蛇の肉に飽いて偃臥する時の如し、來客皆驚異す。純・航の二子之を患ひて、哀求して曰く、「忠兄附託あり、大師願はくは後學を㋦策進せんが爲に、普說一編を唱へよ。書して歸つて㋸同火に示して、以て此の間の勞倦を慰めん。」師微笑して之を頷く。頷くと雖も果さず、二子更々懇求して、赤子の責むるが如し。此に於て師恬如として、目を收めて唱ふる者、或は五行、或は十行、唱ふるに隨つて、航之を筆記し、純之を訂正す。師、心の浮ぶ所に任せて之を唱ふ、次序を顧みず。航又唱ふるに隨つて書して倦ます。㋾師資共に㋻合殺を忘る。卷いて石氏が隱處に到れば、終に五十來紙を得。居士の曰く、「我れ聞く、㋕萬菴の法語、㋵妙喜の長書、㋟佛眼の普說は天下の三絕と爲す。知らず從上の諸老、枝を添へ蔓

---

坐禪を止め、道場を莊嚴して法要を修す、是れを成道忌と稱す、即ち三佛忌の一なり、每年十二月一日より他の一切の作務を廢して、只管打坐して身心を鍛練す、之を臘八接心と云ふ。

㋩齋後。齋座後の事にして、[illegible]食後の意味なり。

㋥鵠林。白隱禪師の號なり。

㋭離。猶ほ遭の如し、「あへり」なり。

㋬少林忌。達磨忌のこと。

㋣勠。合せてなり。

㋠戶牖。戶窓を云ふ。

㋷藤皐は相州藤澤なり。

㋦策進。鞭策進達の意なり。

㋸同火。同じ鍋の飯を食ふ同輩と云ふ意なり。

㋾師資。師匠と弟子なり、老子に曰く、「善人は不善人の師、不善人は善人の資なり」とあり。

㋻合殺。佛に逢うては佛を殺

を牽いて此の如く叨々縄々たる底あり麼。萬菴の法語か、妙喜の長書か。』相倶に手を拍して大笑する而已。既にして仲冬書雲の前、一日師即ち歸院、茶筵を開いて慰勞す。諸子羅圍して茶話怡悦す。純・航の二子並び坐して、燈下に之を讀む。諸子信受勸踊して、蹈舞を忘るゝ者累日。㋹海會正に散筵に向はんとする頃、闔衆、羅拜して之を梓にせんことを請ふ。師急に丙丁童を呼ぶ、諸子恐畏して卷いて懷にす矣。向後、間暇を得る毎に、㋞從臾する者若干次。師總に顧みざるもの、蓋し玆に三年矣。今歳寬保癸亥の秋、忠・譯の二上座、入室して曰く、「普說の如きは之を梓にするときは、師に二つの患あり矣。之を梓にせざるときは道に一つの害あり、蓋し試みに之を論ぜん。夫れ抱道の士は道の存する所を愛して、文字あることを見ず。文字の人は文字の刁刀のみを點檢して、總に道の存する所を知らず、必ず㋡魚魯の譏を惹かん。是れ向に所謂師の患たる所以の一つなり。吾れ聞く、樹、林に秀づるときは風必ず之を擊ち、行、人より高ければ衆必ず之を憎むと。今若し之を梓にせば、師其れ一頭地を衆に抽づる者なり、衆必ず猜を接ぎ齒を切つて之を妬害せん。是れ向に所謂、師の患たる所以の二つな

---

し、祖を逢うては祖を殺すと云ふが如く兩箇相逢うて、互にしめし合ふ様を云ふなり。卽ち異體同心、二身同念の意なり。

㋕萬菴。大慧宗杲の法嗣、江州東林萬菴道顏禪師、潼川の人なり。

㋵妙喜。大慧宗杲禪師なり。

㋟佛眼。五祖法演の法嗣、龍門清遠佛眼禪師なり。

㋹海會。叢林に聚會する一團の衆僧を海衆と云ふ、諸流一所に歸す、故に之れを大海に譬ふ、此の會合を卽ち海會と云ふ。又云ふ、本名旣に滅して、大海の名のみ存すと、故に海衆と名づくと。

㋞從臾。すゝむること。

㋡魚魯の譏。文字の點畫上の譏にて、文字、又は文章上の譏を云ふ。

㋤輓推。左傳の註に曰く、「前よ

り。若し夫れ之を梓にせざるときは、後生晩輩爭つて之を傳寫して、制すれども休まず、各々筆墨を舐つて、遂に道業を棄廢せん。是れ向に所謂道に害ある所以の一つなり。上頭の二つは師且く忍受せば是れ可なり、後頭の一つは多少の後昆を疲役して、許多の道情を戕賊す、必ず譏を識者に惹かん。初めより說かずんば止みね矣、我が輩、師の爲に大いに嘆惜する所の大故なり。譬へば㋧輓推の車に於けるが如く、之を刻むの功還つて妙喜の一炬に執若ぞ。』師曰く、「予も亦之を知れり、然りと雖も睡後暫時の㋤破讝語、諳記の失あり、㋶焉馬の謬あり、必ず笑を大方に見ん、是れ亦予が忍びざる所なり。待て佗日、博達高明の師の電眸一瞬を歷て、而して後に諸君の需を塞がん矣。』此に於て諸子大いに力を得て、東湖再び之を筆記し、澄譯竊かに之を訂正して、㋰忠菴主が遠の野氏を訪ふ行袖に挾む。野氏隨喜して之を激す。遂に去つて濃東の桂林の丈室を扣いて、展拜して悉に所求を演ぶ。丈室固く辭讓して可かず、三止四請、果して序辭と正鑒とを得、恰も驪珠を頷下に攫むに似たり。又走つて京師に逝く。中路にして㋒隣驛の書肆紀の藤子に奇遇す。精しく終始を告ぐ。藤大いに隨喜して資財を抛つて之を扶く。日ならずして板印成る。忠卽ち羽翰を放つて、東の方我が同火に告ぐ。諸子各々香を焚いて、杳かに濃東を望んで合掌す。嗚呼忠も藤徹つ

---

り引くを輓と云ひ、後より押すを推と云ふ」と、卽ち前より引き後より推すを輓推と云ふなり。

㋤破讝語。卽ちうはごとなり、寢言と云ふ程の意なり。

㋶焉馬の謬。魯魚の誤りに同じ。

㋰忠庵主。白隱の門弟文忠なり。

㋒駿州沼津驛の書林紀伊國屋藤兵衞のことなり。

せば、京師を廻ること縱ひ百千匝すとも、此の光義を成ずること能はず。藤も忠微つせば徒らに聲色を逐ひ、花柳を尋ねて此の正因を結ぶこと能はじ。忠・藤の兩箇、縱ひ多少の㊟丹悃ありとも、明師の高鑑を歷ずんば、此の編を懷いて京師に走る能はず。寔に四美並せる者か。師遙かに此の事を聞知し、驚怖する者累日、使を遣し去つて之を制せんと欲す。我が輩相議して云く、「京洛數日程、況んや長安十萬家の風煙をや。何れの處を指して、忠が所在と爲して之を制せんや。師の命令に於ける、初より聞かざる者に似たり。」師爽然として歎じて曰く、「悔らくは昔日客中錯つて且く航が啼を止む。今其れ臍を噬むことを爲す。嗟我れを知り我れを罪する者は其れ唯だ普說か。」是れ軾が師の傍に在つて、聞見する所の大略なり。」客の曰く、「此の編未だ成らざるに、譏刺將に競ひ起らんとす、吾子盍ぞ其の始末を記して、以て之を救はざる。」軾が曰く、「軀命を顧みずして、師を寶護する者は、是れ侍者の任なり。我れ豈に之を辭せんや」と云ふて、終に之を記す。記して以て㊟解嘲に備ふと爾云ふ。

寬保第三の曆癸亥杪冬佛成道節後　侍者玄軾焚拜記焉

侍者大廣謹書

㊟丹悃。眞心、又は一意專心等の意に用ふ。

㊟解嘲。後漢の成帝の時、蜀郡成都の人楊雄(字は子雲)嘗て太玄、法言の二書を作る、或人之れを嘲る、故に之れを解くための故に、此の解嘲を作ると云ふ。今此の普說を太玄に比するか。

# 國譯白隱禪師息耕錄開筵普說序

夫れ普說は大覺世尊、華嚴會上に在りし日に根據して、㋑眞淨祖師、洞山歸宗に居せし時に肇始す。爾來、宋元明清暨び本邦の禪林、往々に在り焉。大意廣く古人の直截爲人の處を說いて、切に學者をして痛く自ら省發せしめんことを要するのみ。是を以て、息耕老子、告香普說に、深く警む所あり。學者知らずんばあるべからず。玆に駿陽松蔭白隱老禪師あり、早に㋺正受老人に參じて、徧く隱賾を探り、多歲行脚し、到る處の叢林、他を如何ともすること無し矣。後來一夜不合に、正受老人の直截爲人の用處を徹見して、人を接するに常に向上の㋩鉗鎚を用ふ。是の故に胡攢亂撞にして、輕しく諸方の許可を受くる者、每々崖を望んで退く矣。是より先、元文庚申春夏の交、㋥輿請に迫つて息耕十會の語要を評唱す。四遠の㋭毳侶、先を爭ふて至る者、其の幾枚と云ふことを知らず。開筵の日に丁つて、學者を提誨するに、普說一篇あり。頃ごろ禪師輪下の禪客遠く斯の卷を持し來つて曰く、「吾が曹二三

---

㋑眞淨祖師。寶峰の眞淨克文禪師なり。

㋺正受老人。毛道無難の法嗣、道鏡慧端禪師なり。長野縣下水内郡飯山町に正受庵を構へて之れに居る、白隱格外の提撕を受けたりと云ふ。

㋩鉗鎚。鉗は鐵鋏、鎚は鐵鎚、共に金鐵を鍛錬する具、師家の學人を接得する手段のこと。

㋥輿請。衆請に同じ。

㋭毳侶。僧侶に同じ、毳は僧服のことを云ふ、故にしか云ふ。

㋬剞劂氏。版木屋なり、即ち出版屋を云ふ。

予、將に(ヘ)剞劂氏に命じて、京師に布かんとす。然れども師曾て許さずして言ふ、『這般の陳爛葛藤、盍ぞ早く一炬に投せざるや』と。二三子曰く、「吁、否、斯の篇の如き、師が直截爲人、激勵呵罵、文華を假らずして根實を力む。則ち知んぬ皆是れ師の苦心熱腸なることを。請ふ吾が曹參禪の警語と爲して、以て同好の者に公にせば、報恩足りなん矣。縱ひ世、其の隙を十百にすと雖も、何の慊することか之れ有らんや。」師、已むことを獲ずして應ず焉。今、請ふ校閲して之に一語を加へよ」と云ふ。予、確辭して曰く、「禪師掣電の機、奔雷の舌、大いに古今未發の口を發いて、普く佛祖不說の法を說く、片言隻字と雖も、斯れ咸超佛越祖の談なり、豈に世の(ト)絺句繪章、(チ)黄を抽いで白に對するの比ならんや。通篇、其の本色に一任して可なり。何ぞ況んや之に拙語を加へば、予恐らくは光彩を埋沒し去らん。」客曰く、「高論、議を容れ難し、只だ其の論を簡首に書せよ」と。諄々たる請意、再びより三に至る。是に於て、予蕭然として之に應へて曰く、「然らば請ふ、各々先づ意に參じて後に句に參せよ。晝參夜參、是れに由つて參じて斷らずんば、疾く(リ)堯を羹牆に視んこと必せり。其の時に當

(ト)絺句繪章。文辭の精密麗美なるを云ふ。
(チ)黄、白。金銀を云ふ。
(リ)堯を羹牆に視ん。後漢の李固傳に「舜、食すれば則ち堯を羹に視、坐すれば則ち堯を牆に視る」とあり。
(ヌ)缶を縵ふに一任す。缶は瓦製の樂器なり、縵は雜聲の樂に和するものとありて、世の毀譽に耳を藉さぬを云ふ。
(ル)劍去つて久し。史記に「去りて劍を學ぶ又成らず」とあり。最早とつくに濟んでしまつた何をまご〳〵して居るのだと云ふ意を含む。又故事に「楚人江を渉り、劍を水中に墜す、遽に其の舟を刻して曰く、是れ吾が劍の墜つる所なりと、舟を止めて其の刻む所より水に入りて之れを求む、舟は進み劍は動かず、依つて劍を得ること能はず」之によりて出づるか、大道の落所を閑却し

て塔を三處に分つ。遺弟能く法を嗣ぐ者、夬、龍松、東嶺慈、遂翁盧、東巖元となす。白衣弟子の禮を執るもの其の幾何なるを知らず、法幢の盛なる前古稀に覩る所、五百年間出の言、洵に虛ならざるなり。後櫻町天皇特に褒章を加へ、諡を賜ふて神機獨妙禪師と曰ふ、時に明和六年己丑六月八日なり。明治十七年五月廿六日、明治天皇、更に正宗國師の徽號を賜ふ、語錄十卷あり、名けて荊叢毒蘂と曰ふ。其の餘、槐安國語、闡提記聞、息耕錄開筵普說、寒林貽寶、寶鑑貽照及び假名法語等若干卷あり、多く世に行はる。

# 國譯白隱禪師息耕錄開筵普說

侍者　東胡　錄
參學　原　譯校

昔（イ）佛果和尚、（ロ）南宋建炎の初め、澧州の夾山靈泉禪院に住せし時、（ハ）明覺大師の百則の葛藤を把つて、評唱する者數次、（ニ）佛鑑責むるに書を以てす。其の苦諫辛爭、實に骨肉に過ぎたり。佛果領つて休す、寔に貴ぶ可し矣。山野今復た息耕十刹の狐涎を舐つて厚面皮を張り、高廣座を設け、公然として塵拂を秉つて、滿堂の諸老を輕忽する者は何ぞや。予、享保の初め、業風に吹かれて此の破院に住す、單丁なる者二十年、其の中間、江西の雲衲、湖南の海衆、經に錄に評唱を請ひ講議を覓めて、或は數百衆の名銜を裁し、或は數十行の請疏を綴つて、予が瞳眠を妨ぐる者、大凡そ三十度に向とす。其の中間、志氣憤然たる者あり、西東の諸老に訟へ、近遠の檀信に報じて、強ひて力めて之を折らんと欲す。命に隨つて需を塞がんと

（イ）佛果和尚。臨濟下九世五祖法演の法嗣、宋の第八主徽宗皇帝、師の道を慕ひ、特に佛果の號を賜ひ、南宋の高宗、師の德を重んじて、圓悟の號を賜ふ、諱は克勤と云ふ、字は無著、碧巖集の著者なり。

（ロ）南宋建炎。宋亡び南宗の高宗即位の時にして、我が崇德天皇の大治元年なり。

（ハ）明覺大師。雪竇重顯禪師なり、智門光祚の法嗣なり。

（ニ）佛鑑。五祖演禪師の法嗣、舒州大平慧懃佛鑑禪師、本郡汪

欲するに、常住の枯白、庫間の艱酸、東の方奥羽を極め、西の方肥筑を際めて誰か則ち知らざらん。復た恐る、近世道微に法衰へて、不羈の晩進無賴の後生、其の始め到る時は閑雅なる態度、寔に愛しつ可く、善順の志氣寔に貴ぶ可し。將に謂へり、生死を念とし、透過を求むる底の眞正の衲子なりと。既にして未だ一月を經ざるに、㋭龜鏡を泥視し鴻規を塊看し、伴を引き黨を結んで、橫放縱逸、庭階を渉つて喚呼し、廊廡に立つて諷詠す。宗師も伏すること能はず、耆舊も制すること得ず。或は井索を截斬し鐘鼓を推落し、虎闌を窺つて出で、狗竇を穿つて入る。堂前に環列して野舞村歌し、山後に蟻聚して雷同浪拍す。柴刀を暗路に栽ゑ、水瓶を步廊に積む。厠上の板を鋸つて、人をして屎坑に陷墜せしむ。竈下の柴に酒いで、人をして晨爨に困苦せしむ。醜態を茶店に逞しうし、鄙陋を酒肆に盡す。叢祉の中に在つて、精錬刻苦する者は千百人と雖も、九旬門閫を越えざるが故に、人、其の光儀を見ること無し。街市の外に趨つて縱逸醜惡なる者は、兩三輩と雖も、多日㋬露地に在るが故に、誰か其の㋣黑業を知らざらん。噫、亂放を恣にする者は七八箇にして、㋠瑕玷を蒙る者は幾箇ぞや。玉石共に燒かれ金鐵皆爛る。此に於て善信の男女、沙門

氏の子なり。

㋭龜鏡。長蘆慈覺大師、宗賾の述勅修百丈淸規上下十章中の中、第七に收む、叢林に衆僧、長老、首座、監院、維那、典座、直歳、庫頭、書狀、藏主、知客、侍者、案主、堂主、浴主、水頭、炭頭、爐頭、街坊、化主、園頭、磨頭、莊頭、淨頭、淨人等の設けある所以を述べて、其の職の佛祖行にして、皆古教照心の道なれば、等閑疎意なるべからざるの龜鑑を示す文なり。

㋬露地。屋外の意、又十二頭陀行に露地坐あり。

㋣黑業。白業の對、惡業なり。

㋠瑕玷。過(とが)なり。

を賤すること泥猪の如く、僧儀を蔑すること癩狗の如くす。行人の詞鋒に罹り、處士の口碑に銘す。悲しい哉、佛道の嚴威乍ち落ち、法門の德輝俄かに滅す。八千の(リ)夜叉、汝が迹を拂ひ、多少の(ヌ)諸天、汝が籍を削る。將に謂へり、無遮の法施を行じて、古佛の遺敎を隆興すと。誰か知らん不祥の凶徒を聚めて、乃祖の古風を傷害することを。寔に悲しむ可し矣。千態萬狀、亂軍の場に在るが如く、群鹿の野を見るに似たり。(ル)飛廉も之が爲に膽冷え、惡來も之が爲に牙戰ぐ。七憍慢八狂亂、先輩を輕蔑し後昆を凌奪し、法幢を踏倒し淸衆を分離して、而して後に飽き足る者の如し。是れを剃頭の闡提と名づけ、是れを方袍の外道と稱す。肉身の(ヲ)魔羅と謂はんか、地行の(ワ)波旬と爲んか。縱ひ汝死し得て、叫喚衆合、黑繩(カ)無間の中に墮ち、無量の苦楚を受け盡すとも、終に懺悔を容るゝ所なけん。汝が師長父母、許多の鞋錢を與へて、汝を放つて行脚せしむ。若し汝が今の醜態を見ば、將た喜ばんか將た悲しまんか。屬者、予が同火の兄弟七八輩、法會を成辨せんが爲に、拽石搬土、水薪菜蔬、饑寒を經盡し、艱嶮を喫盡して、霧を拂つて出で星を戴いて入る。寮舍井竈浴室東司、幾千辛ぞ歟、幾萬苦ぞ歟。見る者肌汗し、聞く者涙浮ぶ。顧ふに夫

---

(リ)夜叉。薬叉、閲叉とも書く、梵音「ヤクシヤ」の音譯、勇健、暴惡と譯す。八部鬼衆の一なり、又捷疾鬼とも云ふ。

(ヌ)諸天。密教に所謂天部の諸神をいひ、また印度に所謂上界の諸神を云ふ。天は梵語提婆の譯、光明の義、希臘、羅馬等に所謂神と云ふに同じ。

(ル)飛廉。蜚飛、廉頗なり。又呂氏春秋には、「飛廉は風伯なり」と、前者是なるに似たり。

(ヲ)魔羅。梵語なり、魔に等し。

(ワ)波旬。播裨、又は波卑夜と云ふ。梵語「パーピーヤス。」惡、殺者と譯す。魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を成就す、又僧を擾し、人の慧命を斷つと云ふ。

れ何れの處の叢林か、此の勞倦なからん、豈に其れ容易ならん哉。而るを汝が輩、手脚を沾さずして入り來つて、多少の狼藉を打す。是れ什麽の心行ぞや。龍天も悲み哭し、地祇も嗔り恨む。古來、者般の流類を見るに、一箇も終を全うする者なし。人禍あらざれば必ず天刑あり。㋵三叉路口豈に其れ遠からんや、寔に恐る可し。我れ平生此等の輩を憎んで、捉へ得ば必ず殺いて飡はんと欲す。者般の惡賊、縦ひ日に七八箇を打殺すとも何の過かあらん。是れ只だ祖庭荒蕪し、法苑凋落して我が祖宗門下、透過す可きの重關あり、超出すべきの棘林あることは、夢にも曾て知らざるが爲なり。諸方高德の諸老、罷參の宗師、數百衆を領じて屑しとせざるも、跡を晦し光を韜んで、自ら㋟賸扇にし去り、自ら㋹芻狗にし去つて、縦ひ眞正辨道の衲子あつて、百端を極めて懇禱哀求すれども容れず、枯淡を甘ひ饑寒を忘れて、徒爾として一生を過ぎ了つて、丘壑に衰朽すること、寔に宜なり。㋷法幢を蠹害し、眞風を戕賊する者は此れ等の部類なり。予亦之を惡んで顧みざること久し。頃ごろ遐方の碩德、近隣の諸老、志を同じうし籌を定めて辱く予が緩怠を責むるを見、此に於て四垂の㋡龍象大いに力を得て、蜂の如くに起り

㋕無間。大熱地獄の第八、閻浮提の下二百由旬にある極苦の所なり。
㋵三叉路口。猶ほ三途と云ふが如し。
㋟賸扇。無用の義なり。
㋹芻狗。芻狗に作る、藁でこしらへしいぬ、福をもとむることに用ひる。淮南子の齊俗の註に、「芻狗は芻を束ねて狗と爲し、以つて過を謝し、福を求む」とあり、此所にては唯だ矢張り無用のものと云ふ樣に見るが宜し。
㋷法幢。法旆とも云ふ。說法のある處に幢幡を建てゝ之れが標榜となす、故に演法開暢するを建法幢といふ。
㋡龍象。偉宿、又は力量ある僧のこと、僧に對する敬稱。

蟻のごとくに攻む。或は赤子の母に求むるが如くなる者あり、或は黒吏の民を御するに似たる者あり、之を辭するに策なく之を拒むに力を失す、擧措決することなく、進退維れ谷まる。熟々予が平生を顧ふに、惜む可きの聲名なく、貴ぶ可きの操履なし。詩も亦知らず、禪も亦會せず、百懶千懶、放蕩㋧蘿苴、恣に噇眠し、起き來つて亦春睡す。一箇も宗師の態に似たるなく、一滴も後昆の範に擬すべきなし。予も亦之を知つて常に甚だ之を憎むと雖も、手脚の著く可きなし。這般醜惡の破瞎禿、今時の魔黨に障碍せられて、㋤七支八離、破夏分散し了らば、人を傭ふて其の迹を掃除し了つて、罷講齋を關して、舊に依つて噇眠せんのみ。何の患ふる所かあらん。若し復た舊參の諸君の輔翼に依つて、一夏を全うするも惟れ可なり。是れ又強ひて喜とするに足らず。評唱も亦吾が願に非ず、高牀も亦吾が願に非ず、欲する所は諸方の碩德、同參の諸老、予が放懶を卑棄せられず、兩箇三箇影向せらるゝことを得ば、相俱に薪を拾ふて煎茶し、閒を偸んで靜に舊話を打し、一月二月共に枯淡を樂まんのみ。且つ又江湖參玄の衲子に對して、告報す可きの事一兩件あり。吾れ始め瞻撥の時、㋶魑魅に引かれ、魍魎に導かれて、㋰飯顆山頭、樵澤の深林に入つて、一箇の破庵主に見ゆ、號して正受

㋧蘿苴。守操なきを云ふ。

㋤七支八離。莊子に支離疏あり。又支離滅裂等の意に同じ、破夏分散、夏は家なり。

㋶魑魅、魍魎。山澤の怪を魑と曰ひ、宅舍の怪を魅と曰ひ、木石の怪を魍魎と云ふ。此れ等の精怪、影有りて形なし、總じて世人伶俐にて自ら備み又他を惱ましむるに譬ふ。又曰ふ、魍魎は形三歳許りの小兒の如くにして、赤黑色を帶び、耳長く目赤し、人聲を發して人を惑はすと云ふ。

㋰飯顆山頭。信州水内郡飯山なり。

㋒大圓。潙仰宗の祖たる潙山靈

老人と道ふ。老人諱は祖端、㋒大圓を祖とし㋭無難を父とす、眞正惡毒の瞎老漢なり。平生垂語して云く、「我が此の禪宗は南宋の末に衰廢し、傳へて大明に到つて底を拂ふて滅絶す。餘毒殘つて日域に在りと雖も、纔かに日裏に斗を見るが如し。汝が輩、臭瞎禿破凡夫、夢にも曾て之を知らん哉。」又云く、「汝等、相似の漢、禪に似て禪も亦會せず、教に似て教も亦果さず、律に似て律も亦成せず、儒に似て儒も亦得ず。總に箇の什麽にか似たる、衣架飯囊。」又云く、「玆に一箇の重關あり。關東列り坐して各々其の所能を試みて、而して後に其れをして透過せしめんに、㋨輪扁と稱する者あり、輪を斲つて推し出して卽ち去る。畫工と稱する者あり、戯畫一紙を拂ひて推し出して卽ち去る。妓兒は高歌一聲し去り、淨家は高聲念佛し去らん。特り禪徒と稱する者のみ、作麽生か是れ諸佛頂上の禪と問はれて、目㋔瞠し口㋗呿して、茫然として柴立して、只だ兩腋の汗を見ん。是に於て胡亂の賊奴なりと爲して、終に關外の窮鬼と爲らん、寔に悲む可し。」又云く、「汝輩、佗時一員の㋳長老と爲つて、請に㋮檀家に赴かんに、衆を領じ徒を隨へて、幾枚の蒲團を重ね、幾種の珍膳を例ねて、公々然として坐し、

---

祐禪師なり。

㋭無難。臨濟宗、武藏國澁谷東北寺開山至道無難禪師なり、法を大仙愚堂國師に受く。

㋨輪扁。莊子に曰く、「昔の桓公堂上に書を讀む、輪扁堂下に輪を斲る、便ち錐鑿を釋てゝ上りて曰く、公の讀むところの書は何の書ぞ、公曰く、聖人の書なりと、輪扁曰く、聖人今在りやと、曰く、死せり矣、曰く、然らば公の讀む所のものは古人の糟粕のみ」と、之に出づ。蓋し輪は輪人、車大工にて、扁は名なり、それより車大工を云ひしものなり。

㋔瞠。みつむ、みはる、驚きみつむるを云ふ。莊子に「夫子奔軼絶塵して、而して回や後へに瞠若たり」と、若は助辭なり。

㋗呿。くちをあくなり。

抗々乎として浴し了つて、高談朗笑せんに、一箇あり。衲僧、眉を皺むる底の話頭を把つて、輕々に拶著せん時、如何が祗對し去らん。恐らくは胸喘ぎ肌汗して、滿地一場の愁を見ん。然らば則ち禪門に在つて、參禪苦學せざれば、恥辱を暗地裏に種うる者に非ずや。何の時か此の患難に逢はんも未だ知る可からず、寔に恐る可し。」又云く、「近世の衲子、(ケ)狗子佛性の話を把つて、實參純工せん者、一箇半箇透過を得ずと云ふこと無し、纔かに少しく透過するときんば、自ら得たりと爲し自ら悟れりと爲して、高談大口す。是れ只だ生死の大兆にして、己見を栽培し我見を增長す、如何せん祖庭猶ほ天涯を隔つることを。眞正安樂の田地に到らんと欲せば、轉た悟れば轉た擧せよ、轉た了ぜば轉た參ぜよ。果して祖師最後の因緣を見ること、掌上を見るが如けん。何が故ぞ燈下に爪剪らざる。」又信陽に富家あり、累代、富、國司を壓す、(フ)鐘を鳴らし鼎に食む、時々に貴賓高客の來往するを見る而已。常に寥々として胡爲の家業と云ふことを知らず。近日、奴を添へ(コ)婢を增す、水磨列り鳴り、轂車轟き過ぐ。其の繁興前日に十倍せり。聞く、日々に酒萬斛を釀すと、一老人あり、曰く、「已んぬるかな、富家其れ久しからざらんか、是れ不祥の兆なり。內、衰ふるときは外必ず張る。穀肆も亦設けん乎、藥店も亦開かん乎、久しからずして

(ヤ)長老。道德、衆に長じ、年臘亦他に老大なるを示す語、又住持和尙を稱する敬語となすなり。

(マ)檀家。寺院に屬する信徒の稱。檀は檀那の略にして、布施主の義なり。

(ケ)狗子佛性。趙州の狗子に就いて、佛性の有無を裁判せし有名なる公案なり。

(フ)鐘を鳴らし鼎に食む。唐の王勃が滕王閣序に曰く、「鐘を鳴らし鼎に食むの家」と、蓋し驕奢を謂ふなり。

(コ)婢。下女なり。

其れ貴らん乎。」師聞いて慘然として曰く、「噫、其の事あらん乎。宋明の末、祖宗衰へて禪徒、衆態を成す、今其れ何にか似たる歟。」言ひ畢つて涙痕落つ。平生怒罵呵咄す。其の餘の嗟悼し慨念する所の數段の因緣、憶持し記持する者、大畧之を記す。

㋓乾峯和尚の示衆に曰く、「㋢法身に㋐三種の病二種の光あり。汝等諸人還つて委悉す麼。」時に㋚雲門、衆を出でゝ曰く、「庵內の人甚麼としてか庵外の事を知らざる。」峯呵々大笑す。門云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峯曰く、「汝是れ甚麼の心行ぞ。」門云く、「和尚も亦委悉せんことを要す。」峯曰く、「汝恁麼にして始めて穩坐地を得べし」と。若し人、息耕錄を見んと欲せば、先づ須らく此の話に參ずべし。二大老の說話、見徹分曉ならば、汝に許す、親しく息耕老人を見ることを。汝に許す、參玄の衲子と稱することを。若し然らずんば、縱ひ汝㋖五派七流の秘訣を諳じ得、千七百個の玄旨を透過するも、閑妄想、死學解、何の用を爲すにか堪へん。況んや諸方死郎當の老漢の妄談臆解を取つて、抄錄し記寫し、及び彼の錄中に塗糊して、口辯を逞しうし、胸臆を恣にするをや。近歲、大明崇禎の間、皷山の元賢・永覺大師、杜撰の判斷あり。但だ乾峯を蹉過するのみに非ず、却つて雲門を屈辱す。諸方講錄の阿師、息耕の頌中に揑合して、以

㋓洞山良价禪師の法嗣、越州乾峰禪師なり。

㋢法身。佛三身の一、法身佛なり。無形、無身の佛陀の靈覺を云ふ、又本覺、眞如、佛性、或は吾人の靈智、靈覺なども云ふことあり。

㋐三種の病とは未到造作、已到住著、透達無依の三を云ふ。二種の光とは能取光、所取光なり、此の光透達せざれば兩般の病ありと、又之れを雲門の兩病と云ふ。

㋚雲門。青原下第六世雪峰義存の法嗣、雲門宗の祖なり。

㋖五派七流。五宗、七宗を云ふなり。

て盡せりと爲し、書して以て諸子に授く。江湖㊀瞎眼の諸子、是れ己靈を埋沒するの泥土、慧命を傷害する戈戟なることを知らず。爭か傳寫藏秘して、人をして見せしめず、或は此れを小箋に記寫し、彼の餘巾に納著して、以て情解の助と爲す、寔に笑ふ可し。予偶々彼の小箋を得て一見するに、禪餘內集第四臘八普說に云く、「乾峯云く、『法身に三種の病二種の光あり。』更に須らく向上の一竅あることを知るべし。老僧、今日眉毛を惜まず、諸人の爲に註破せん。凡そ山河大地、明暗色空、一切萬象、眼光を窒礙す。皆法身の障と爲す、是れを一種の病と謂ふ。或は諸法の空を見て隱々地に法身の理あることを見る、是れを法執忘れずと謂ふ、亦是れ一種の病なり。或は法身を透得すと雖も、簡點し將ち來れば、或は依據すべき處なきことを覺え、或は主張すべき處なきことを覺え、或は指示すべき處なきことを覺ゆ。亦是れ法執忘せず、是れを最後一種の病と謂ふ。前の一種の病は是れ一種の光、透脫せざるなり。後の二種の病も亦是れ一種の光、透脫せざるなり。學者若し能く向上の一竅を透るときんば、三種の病二種の光、一揑と消せずして破せん。始めて之を參學の事畢んぬと謂ふなり。」鶴林云く、「嗟吁、是れ何の閑學解ぞや、是れ何の妄分別ぞや、讀んで此に到つて覺えず卷を掩うて驚疑し、眼を閉ぢて悲恐す。恁麼の瞎註脚、詳解し得て諦當なりと爲せば、雲門大師曰く、『庵內の人甚麼としてか庵外の事を知らざる』と。是れ又甚麼の道理をか說く。如何か註解し去らん。謂ふこと勿れ、乾峯底は透過著、雲門底は會不得なりと。二

㊀瞎眼。盲目なり、あきめくらなり。

大老の說話、一雙天に倚る長劍、惡虎の牙の如く、(メ)鴆鳥の尾の如く、象王の鼻の如く、獅子の乳の如く、塗毒鼓の如く、大火聚の如し。纔かに擬議するときんば、髑髏野に遍し、是れを法窟の爪牙と名け、是れを奪命の神符と道ふ。須らく知るべし、萬古叢林の(ミ)榜樣なることを。吾れ聞く、永覺大師は壽昌無明和尚の的嗣、(シ)洞上の英豪にして大いに(ヱ)新豐の宗旨を中興し、專ら(ヒ)曹溪の眞風を扶起すと。今の人其の名を聞くときんば、襟を正し容を改む、寔に一代の龍門なりと。何ぞ圖らん、其の說話是の如く醜陋に、是の如く麁野ならんとは。若し內集果して永覺の手に出づるとせば、永覺の得處怪しむ可し。願ふに、夫れ杜撰の禪和、亂に自ら胸臆の凡解を鈔錄して、名を永覺に借つて、信を後昆に取らんと欲して、竊かに彼の錄中に添入する者ならん乎。嗟、其れ者般の情識の妄解を以て、參學の事了畢すと爲せば、夢にも曾て乾峰老人及び雲門大師を見んや。或は恁麼にして善知識と稱して可ならん乎。謂ふ莫れ、一揑と消せずと。千揑萬揑千百億揑も、亦空しく力を勞せんのみ。祖師血滴々の示衆を把つて、教家初心の議論にだも及ばざらしむ、寔に悲む可し矣。古へ(モ)不落の兩字五百生、野狐窟裡に墮在す。若し一句子の話を以て、錯つて註解し了つて、參玄衲

---

(メ)鴆。說文に鴆は毒鳥なりと、又鴆は大さ鶚の如く、紫綠色の毒あり、頸の長さ七八寸、蛇腹を食ふ。此の毒を以て殺すを鴆殺と云ふ。

(ミ)榜樣。標識なり。後漢書に「共に相標榜して天下の名士を指し、之れを稱號を作る」と。又史記長耳傳に「榜笞數千、身擊つ可き所なし」とあり、鞭撻の標的をも云ふ。

(シ)洞上。洞上悟本大師の唱へられたる宗旨のこと、此は曹洞宗の意に用ふ。

(ヱ)新豐の宗旨。新豐は地名なり、唐大中の末、洞山良价禪師此の山に住して、洞上綿密の宗風を舉揚す。卽ち此の宗旨な

子の眼目を瞎却せば、罪過十方諸佛の身血を出すに勝へん。吾れ今、人我を逞しうし胸臆を恣にするに非ず、恨むる所は多少情識の邪解、展轉流行して、佗の後昆の悟門を妨碍し、古人眞正の宗旨を染汚することを。叢林の衰弊、祖庭の荒涼、一に此れ等の邪說に依れり。是れ何の心ぞや。吾れ聞く、大明國裡、禪苑敗蕪し、眞風滅絕すと、信なる哉。吾が日域、宗門の頽朽すること旣に亦此の極に至るや、寔に恐る可し矣。謹んで參玄の上士に白す、乾峯の示衆、大難々々、容易の見を生ぜざれ、㋝如上の狐涎を舐らざれ、但だ單々に參究せよ。一旦不合に咬著して、通身白汗流るれば、爆然として乾峯說き得て徹困なることを見ん。雲門和し得て高古なることを覺せん。息耕頌し得て諦當なることを了せん。永覺解し得て妄誕なることを知らん。鶴林判じ得て親切なることを領はん、豈に快ならずや。」古人云く、「舊參の宿將、發足超方すれども、打頭に惡辣手段底の宗匠に遇はざるが爲に、見地に坐在す。縱ひ甘心して志を枯し形を忘れ、㋜之を鑽り之を仰ぎ、之を淘し之を汰すと雖も、但だ己見を裝重する而已。㋑鶻臭布衫を脫去すること能はず。一旦時緣成稔し、出で來つて人の爲にするとも、取與の間、應機未だ妙ならざることは、蓋し殊勝

云ふなり。悟本大師に同じ。

㋣曹溪。韶州府城の東南三十里にあり、六祖慧能大鑑禪師の寶林寺を營まれし所、轉じて六祖大師のことをも云ふ。

㋲不落の兩字云々。有名なる百丈懷海禪師の公案なり。無門關第二則に出づ。

㋝如上の狐涎。卽ち永覺大師の禪餘內集に云々とあり。

㋜之れを鑽り云々。鑽仰は學德を慕ひ學ぶこと。論語に「顏淵喟然として歎じて曰く、之れを仰げば彌々高く、之れを鑽れば彌堅し、之れを瞻るに前にあり、忽焉として後にあり」と。之れを淘し之れを汰しは共に洗ふの意にて、其の粃糠垢穢を去るなり。

㋑鶻臭。乳臭と云ふが如し。

境界の中より得て、人に蓋覆し將ち來られて、便乃ち佗を辨じ出さず。」此の語、此れ等の人の爲に設くるならん乎。今時、諸方一片湛寂の死水裡に浸殺せられて、卽ち言く、「話頭を看ること莫れ、話頭は是れ自性を埋沒するの泥土、文字を顧みること莫れ、文字は是れ己靈を縛殺する葛藤なり」と。怪しいかな汝が謂ゆる自性は胡爲の物ぞ哉。既に是れ縛殺せらる、將た是れ狐兎に類する者か。怪しいかな汝が謂ゆる己靈は胡爲の物ぞ哉。既に是れ埋沒せらる、將た是れ芋栗に似たる者か、知らず誰が家の滯貨ぞ、何處の舊肆上より者般の奇怪の物を求め得來るや。顧ふに是れ將た㊃長沙の謂ゆる識神を認得する底の窮鬼子と爲さん乎。將た㊅應庵の謂ゆる深山の古廟裏、無轉知の大王と爲さん乎。佗日、危亡を顧みざる底の衲子あつて、一句子の話頭を把つて、面前に抛向して云く、「是れ甚麼の道理ぞ」と。此の時、汝泥土と作し得てん麼、葛藤と作し得てん麼。只だ恐らくは瞋ることも亦瞋り果さず、泣くことも亦泣き果さざらんことを。今時、一般世智辯聰の種族あり、其の部屬に敎へて曰く、「從上の佛祖大いに言句を恐るゝは何ぞや、汝が慧命を浸殺する底の瀾漫たる雜毒の海岸なればなり。彼の話頭を參決し、宗旨を究明することは、㊁五葉分離の後、七花開敷の頃、權に施設する底の門庭の說話なり。實に佛祖堂奧の

㊃長沙。南泉普願の法嗣、招賢大師なり。偈に曰く、「學道の人眞を知らず、只だ從來識神を認むるが爲に、無始劫來生死の本、痴人喚んで本來の人と」と。機鋒峻烈、天下皆其の舌頭に伏す。

㊅應庵。初め水南遂の侍者となり、亭で虎丘隆下の維那となり、機識ならずして大事を了す、後法を妙最に開く、語錄十卷あり。

㊁五葉七花。卽ち五家七宗を謂ふ。

㋭玄賾に非ず」と。此に於て頑陋無智無頼禿奴の族、大いに嘉運を開いて、奴郎辨ぜず玉石分たず、碌々として頭を聚め、堆々として列り眠りて、以て高蹈の風標と爲して、佛祖を睨視し、諸方を幷呑す。㋬鸞鳳は飢ゑて彷徨たり、鴟鴉は飽いて腲腇たり焉。儞若し見性の眼なくんば、點滴も亦消せじ、盡く是れ地獄の衆生なることを。所以に道ふ、「儞と爲つて理に通せざれば、身を反して信施を還す」と。汝知らずや、㋣五千四十八卷一字々、雜毒の海岸、四七二三の賢聖、一箇々雜毒の全身なることを。其の毒浪天を浸して、日月も亦輝を吞み、星宿も亦光を失して、目前に昭々たりと雖も、而も汝が輩、了知し覺得せざることは、㋠鴟鴞の晝出でて目を瞋して、大山を見ざるが如し。大山豈に鴟鴞を惡んで、身を隱す者ならん哉、罪、鴟鴞に在る而已。汝、縱ひ耳を掩ひ眼を鎖して、此の毒焔を避くるも、行雲流水、墜葉飛花如何が廻避することを得ん。縱ひ汝、彼の捷疾夜叉を傭ふて、恣に飯を喫せしめ錢を與へて、彼の背後に跨つて盡天下を遶ること兩三匝すとも、寸土も身を藏す處なけん矣。願ふ所は、一箇半箇、宿に靈骨を挾む底の癡鈍の漢あつて、憤然として歸り來つて、彼の毒焔の裡に向つて投入して、乍ち大死一回せん焉。一回し起き來つて、過量の大杪頭を擔ふて、四天下を遶つて眞正の衲子を見る時、臂を張り手に唾して、大杪頭を展べて毒焔を酌み將ち來つて、

㋭玄賾。玄幽、又は玄深などと同じく幽妙の義なり。

㋬鸞鳳云々。賢者は野に飢ゑ、奸者は鼓腹悠々たるを云ふ。

㋣五千四十八卷。南無秘密大藏尊經五千四十八卷、四百五十二億二萬一千八百十八字とあり、卽ち一切經の部數なり。

㋠鴟鴞。ふくろふなり、楊雄の文に「鴟鴞を以て鳳凰を笑ふ」とあり、此の鳥晝盲夜明なり。

驀頭に即ち酒がん。酒いで伊をして㋷放身捨命せしめば、豈に痛快ならずや。一般あり、平生垂語して曰く、「諸子、錯つて外に向つて馳求すること莫れ。但だ一向無念無作にし去り、不修不證にし去れ。無念無作は頓證の直諾、不修不證は實相の眞理、是の故に十力の調御、之を稱して㋦無上正等正覺と爲す」と。是に於て徒侶盡く意を妨げ、情念を除いて、誓つて無作を成さんと欲す。殊に知らず、此れは是れ多少の造作なることを。若し人㋸見性せずして、經卷を探り師友を訪ねて、種々の行業を作さば、總に是れ妄情の所爲、生死の大兆なり。終日無作を學んで終日造作を打し、終日無爲を求めて終日有爲を打す。若し又一回見性し去らば、終日有爲を行ずれども即ち是れ無爲、終日造作を打すれども直に是れ無作、蛇牛、一器の水を喫して、乳毒遙かに殊なるが如し。是の故に、血脈論に曰く、「若し見性せずして、一切時中擬して無作の想を作す、是れ大罪人、是れ大癡人なり。㋾無記空中に落ちて昏々として、醉人の好惡を辨せざるが如し。若し無作の法を修せんと擬せば、先づ須らく見性して緣慮を息むべし。若し見性せずして無爲を成さんと欲せば、是の㋻處あることなし。」東林の㋕常總照覺禪師、㋵黃龍に嗣ぐ。尋常、垂語して曰く、「㋟晦堂・眞淨同門の諸

---

㋷放身捨命。佛法のため即ち身命を捨つることなり。

㋦無上正等正覺。梵語阿耨多羅三藐三菩提、佛陀の智德圓滿を稱する一名にして、佛は絕對の德者なるが故に、無上といひ、眞如實際に周徧するが故に、正徧といひ、正覺ともいふ。又「さとり」の境涯を現すに此の語を用ふ。

㋸見性。直指人心見性成佛の見性なり。

㋾無記。善にもあらず、惡にもあらぬ中間の性のこと、即ち三性の一なり。善惡二性は調和不調和の性を別ち、又可愛不可愛の果を記別することを得れども、非善非惡の性に對

老、祇だ先師の禪に參得して、先師の道を得ず」と。㋹大慧曰く、「蓋し昭覺、平常無事、知見解會を立せざるを以て道と爲して、更に妙悟を求めず、卻つて諸佛諸祖、㋞德山・臨濟・曹洞・雲門、眞實頓悟見性の法門を將つて建立と爲す。楞嚴經中の所說、山河大地皆是れ妙明眞心の中の所現の物なりと云つて、膈上の語亦是れ建立と爲す。古人、玄を談じ妙を說くを以て禪と爲して、先聖を誣罔し後昆を聾瞽す。眼裡に筋皮なく皮下に血なきの流、例に隨つて顚倒して恬然として覺えず、眞に憐憫す可し。」圓覺經に曰く、「末世の衆生、成道を希望し、悟を求めしむること無く、唯だ多聞を益さば我見を增長す。」又云く、「末世の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇ふて未だ正悟を得ず、是れを名けて外道の種性と爲す、邪師の過謬なり、衆生の咎に非ず」と。豈に虛語のみならん哉。所以に㋡眞淨和尙の小參に云く、「今時一般の漢あり、箇の平常心、是れ道と云ふを執して以て極則と爲す、天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗、大盡三十日、小盡二十九、並に是れ依草附木、不知不覺一向に迷ひ將ち去る。忽ち若し佗に我が手何ぞ佛手に似たると問はゞ、便ち道ふ、是れ和尙の手。我が脚

しては、いづれも記別する能はざるを以て無記といふ。

㋷處。理に同じく「ことわり」なり。

㋕常總照覺禪師、蘇東坡の師なり。

㋵黃龍。石霜楚圓の法嗣、即ち黃龍派の祖なり。曾て趙州勘婆の話を聽いて大悟す、後黃龍に住し、三關を以て人を接し、接化甚だ擧ふ。

㋟晦堂。洪州黃龍晦堂寶覺祖心禪師なり。

㋹大慧。圓悟克勤禪師の法嗣。大慧語錄、大慧武庫、正法眼藏などの著者なり。

㋞德山。青原下四世の祖、龍潭崇信の法嗣。

㋡眞淨。黃龍慧南禪師の法嗣、寶峰克文禪師なり。

何ぞ驢脚に似たる、便ち道ふ、是れ和尚の脚。人々箇の生緣あり、那箇か是れ㋭上座が生緣、便ち道ふ、某は是れ某州の人事なりと。是れ何と言ふことぞや。且つ錯つて會すること莫れ、凡百の施爲祇だ平生の一路子を要して、以て穩當なりと爲して、定め將ち去り、合し將ち去つて、更に敢て別に一歩を移さず、坑塹に墮落せんことを怕る。長時一に生盲底の人の路を行くに、一條の杖子寸歩も拋ち得ず、緊く把著して憑み將ち去るに似たり」と。(以上眞淨和尚の語)。晦堂和尚、學者に謂つて曰く、「爾㋤廬山の無事甲裏に去つて、坐地に去れ」と。而るに今、子孫死灰の如し、良に歎ず可し。㋶南堂の靜禪師曰く、「見性は須らく掌上を見るが如く、了々分明にして一々田地穩密なるべし」と。爾參玄の上士に勸む、大丈夫兒、猛く精彩を著けて一回見性せんことを要せよ。纔かに見性分明なることを得ば、捨て去つて箇の難透の話頭を參決せよ。必定して涅槃經に謂ゆる諸佛世尊、眼に佛性を見ること、掌上の阿摩勒果を觀るが如しと云ふことを了知せん。剰へ祖師最後の因縁を徹見せん。此に於て初めて法窟の爪牙を挾み、奪命の神符を懸けて佛果に入り、魔界に遊んで釘を拔き楔を奪つて、大慈雲を敷き大法施を行し、大いに方來の衲子を利濟し、舊に依つて眼横鼻直、無事高閑底の一老僧、是れを眞正佛祖の兒孫、報恩底の人と爲す。爾に許す、茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては

㋭上座。梵語悉多毘羅、譯して上座、長老と爲す。

㋤廬山。江西省鄱陽湖の西畔にあり、一に匡山と稱す。後漢成帝の時、達摩多羅、此處に住す。又常總禪師此所に住し、盛に宗風を擧揚す。

㋶南堂。五祖演の法嗣、彭州大隨の南堂元靜禪師、後、道興と名づく。

飯を喫し、恬如として日を過すことを。無事も亦得たり、有事も亦得たり、佛祖も亦手を挾むこと得ず、萬兩の黃金も亦消得せん。若し今時に效ふて八識無智の暗窟を認め得て、自ら得たりと爲し、自ら悟れりと謂つて、亂に佗の別人の禮拜供養を受く。是れを未證・謂證・未得・謂得・増上慢の人と爲す。恐る可し。施主一粒の米、粒々鐵丸熱沙、施主一滴の水、滴々洋銅沸屎、施者一縷の袍、縷々鐵網熱鎖。嗟、出離を求めんが爲に剃髮染衣、錯つて邪師に惑亂せられて、一生錯つて胡亂の道人と爲る。眼を合すれば卽ち是れ㋰黃泉の人、生々舂磨の苦患に懲りず、再び三塗の舊里に歸つて、袈裟を掛けながら深く泥梨の底に沈んで永劫の苦輪を見ん。最も恐る可きは、邪師の誑惑なり。古、七賢女あり、㋒尸陀林に遊ぶ。一女、屍を指して諸姉に謂つて曰く、「屍は這裡に在り、人甚の處に向つてか去る。」中に一姉ありて云く、「作麼々々。」諸姉諦觀して各々契悟す。感じて㋼帝釋、花を散じて云く、「唯だ願はくは、聖姉何の所須か有る、我れ當に身を終るまで供給すべし。」汝看よ、今時の回避するが是ならば、古の諦觀するは非ならん。古の諦觀するが非ならば、帝釋豈に此の言あらんや。女曰く、「我が家㋨四事七珍悉く皆具足す、唯だ三般の物を要す。一には無根樹子一株、二には

㋰黃泉。よみぢ、彼の世、死後の世界を云ふなり。

㋒尸陀林。具には尸陀婆那、梵語(Śītavana)、寒林と譯す、昔中印度摩揭陀國王舍城附近にありて人を葬りし處、其の林陰深寒冷なるが故に、名づくと云ふ。尸林、安陀林、恐畏林、暗夜林は別稱、彼の世墓地の換語にも用ふ。

㋼帝釋。具には釋提桓因、釋迦提婆因陀羅、又は天帝釋とも云ふ、梵語(Śakradevnamlandra)釋は梵漢並べ擧げたる名稱なり。能天主と譯す、忉利天の天主喜見城に居り、四天佛主及び他の三十二天を領す、

無陰陽の地一片、三には叫べども響かざる山谷一所。」帝釋云く、「一切の所須、我れ悉く之れあり、三般の物の若きは我れ實に得ること無し。」女曰く、「汝若し此の物なくんば爭か人を濟ふことを解せん。」帝釋遂に同じく往いて佛に白す。君見ずや、賢女曰く、「汝若し此の物なくんば如何が人を濟ふことを得ん」と。今時は雜毒なりと爲して恐怖す、天冠地履杳かに殊なる者に非ずや。汝等瞻撥窮辛を喫し、參玄雪苦を嘗むることは、佗後大いに人を利濟せんと欲する者に非ずや。將た其れ此の物なくんば、少しく缺少する所あらん與。佛の言く、「憍尸迦、我が諸の弟子(オ)阿羅漢、悉く皆此の義を解せず、唯だ諸大菩薩のみあつて、乃ち此の義を解す」と。佛何ぞ恐怖せずして却つて此の言あるや。其れ將た未だ雜毒なることを知りたまはずと爲んか。熟佛心を量るに、帝釋をして此の義を了知せしめて、頓に(ク)四果三賢の漸次を越え、大(ヤ)菩薩乘の階位に到らしめんと欲する者に非ず哉。佛の言く、「我れに(マ)正法眼藏涅槃妙心實相無相の法あり、摩訶大迦葉に附屬す」と。此の語も亦大いに錯つて會する者多し。我れ昔日正受老人に逼拶せられて、答へ得て痛棒を喫すと雖も、實に未だ徹頭ならず、船上に在つて遠樹を見

---

佛法歸依の人を護る。

(ノ)四事。供養に用ふる四種のもの。飲食、衣服、臥具、湯藥。又房舍、衣服、飲食、散花燒香。又衣服、飲食、散華、燒香の四種を云ふ。七珍、金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、眞珠の稱なり。

(オ)阿羅漢。又は阿羅訶、阿黎訶、阿盧漢、略して羅漢と云ふ。梵語(Arhan.)、應供、應眞、殺賊、無生、不生、無學、離惡等と譯す。聲聞四果の一、又佛十號の一、又如來の親付屬を得て世間に出現し、佛法を守護し、衆生を救度する聖衆。又如來應現の德を表はす語、此の場合特に大阿羅漢と云ふ。

(ク)四果。小乘見道以後の證果の四位、一須陀洹果(預流果)、二斯陀含果(一來果)、三阿那含果(不還果)、四阿羅漢果(無學

るが如し。山野初め十五歳にして出家し、十六歳の時、自ら嗟悼すらく、師に随つて染衣剃髪すと雖も、未だ涓埃も佛法の靈驗を見ず。我れ聞く、法華は諸佛の本志にして、一代の經王なりと。是に於て把つて看讀すること一返す。一返し了つて卷を掩うて大息して曰く、「此の經大半、因縁を談ず。中間、唯有一乘諸法寂滅等の語ありと雖も、是れ彼の臨濟の謂ゆる、濟世の醫方にして表顯の說なり、寔に把るに足らず」と。既にして大いに力を失すること久し矣。後來、住院正に不惑に及ぶ比、孤燈を挑げて再び之を讀む。讀んで第三の譬喩品に到つて、從上の疑惑撲然として解け、經王の王たる所以、粲乎として目前に滿つ。涙痕連り飛ぶこと豆嚢の穿つて漏るゝが如し。覺えず聲を放つて涕泣す。初めて知る、從前悟得し證得する所の多少の因縁、大いに錯り了ることを。是に於て初めて正受老人、平生の受用を徹見す。及び大覺世尊舌根、兩莖の筋を欠くことを了知す。臨濟に和して好し三十棒を與ふるに。昔、(ケ)阿難、迦葉尊者に問ふ、「世尊金襴衣を傳ふるの外、更に何の法をか傳ふ。」迦葉曰く、「阿難、門前の刹竿を倒却し着せよ。」此の語極めて難透難解、恰も怒雷の石壁を劈くが如し。

果)をいふ。三賢、聲聞、緣覺、阿羅漢なり。

(ヤ)菩薩。菩提薩埵摩訶薩埵の略、梵語(Bodhisattvamahāsattva)譯して覺有情、大心衆、大士、高士、開士などといふ。大心を以て佛道に入れる人の稱。卽ち上は菩提の大道に向上し下は衆生の利濟に精進する悲智雙備二利具足の修行人のこと。又我が朝高僧の勅賜號として用ひたるは、聖武天皇の行基に給ひしに初まる。

(マ)正法云々。靈山に於て迦葉尊者に以心傳心し給へる佛心なり。

(ケ)此の公案は無門關に出づ。無門の頌に曰く、「問處何ぞ答所の親しき如くんば、幾人か之に於て眼に筋を生じ、兄と呼び弟應じて、家醜を揚げ、陰陽に屬せずして別に是れ春と。」

三賢魂蕩し四果眼眩す　而るを今時、無限禿奴の叢、公然として注解して云く、「刹竿は中間底の物なり、中間掃盡するときんば大事成辨す」と、是れを情識の凡解と名く。恰も㋑瞽者の五彩を調ふるに似たり。初祖大師の言く、「外、諸緣を息め、內心喘ぐことなし」と。是の語も亦往々に情に隨つて注解す。㋺第六代の祖師末後門人問うて云く、「此れより去つて早晚か回る可き。」師曰く、「葉落ちて根に歸す、來時口なし」と。恐る可し。萬里無底の黑火坑、鬼神も亦性命を全うすること能はず、徧界一隻の靑蓮目、切に忌む驚沙を撒することを。而るを今時多少伶利の癡人、抗々として註解して曰く、「根とは是れ㋩新州底、口なしとは來なく去なく、內なく外なき底の本分の閑田地」と。咄、瞎、註脚、死邪解、聞見する每に胸間常に嘔吐の氣を生ず。又問ふ、「何人か師の法を得たる。」祖云く、「㋥大庾嶺頭、網を以て之を取れ」と。鴆羽狼膽猫頭狐涎、一釜に錬り來つて面前に抛向す、如何が觜を下すことを得ん。言ふこと莫れ、祖師些の毒氣なしと、中に就いて大いに笑ふ可き者あり。㋭南嶽大師の云く、「譬へば牛に車を駕せんに、車若し行かずんば車を打つが卽ち是か、牛を打つが卽ち是か」といふ惡毒の言句を聞いては、則ち縱に情解して云く、「車は是れ形骸底、牛は是れ

---

㋑瞽者。盲目の人なり、莊子曰く、「瞽は以て文章の觀に與るなし」と。

㋺第六代の祖。大鑑慧能禪師なり。

㋩新州底。六祖大師出家以前、新州にあり、早く父を失ひ、每日薪を市に賣つて母を養ふと、故に六祖出家以前を云ふ。

㋥大庾嶺。六祖、五祖の衣鉢を領得して兩月大庾嶺に至る、時に慧明之れを奪はんとして追跡し、此所に來る、能曰く「行者々々我れ法の爲に來り、衣の爲に來らず」と、遂に慧明を度し去る。

㋭六祖大鑑禪師の法嗣、南嶽懷讓禪師なり。

中間底」と。噫是れ實に解し得て好し、㋚馬師の日面佛月面佛と言ふを聞いては、卽ち言ふ、「此れは是れ衆病到らざる底の自家一團の靈光なり」と。怪しい哉。今時、胡爲れぞ是の如く俊利なるや。取つて飯裡に和して林下に曝すこと千日すとも、鴉も亦顧みざる底の凡解なり。昔、甘蔗氏の子あり、後に金仙氏と道ふ。初め雪山の深處に入つて隱る、密に無絃の古瑟を抱いて、白盲に撫彈する者、大凡そ六百强、一朝、惡星の柱を照すを見て、乍ち魂飛び魄散じて、絃絕え琴碎く、少くあつて天環、奇聲を吐き地軸、妙音を發す。茲に於て、纔かに一指を按するときんば、一響衆妙を兼ね、音四生を度す。初め㋖鹿苑に在つて四柱の古絃を撫し、㋴十二雅韻を吐く。中ごろ㋱鷲嶺に在つて一乘の圓音を發し、後鶴林に入つて遺敎の哀韻あり。其の㋯樂府、大凡そ五千四十軸を得たり。纔かに絃を動ずれば乍ち曲を分つ者あり、之を㋛大龜氏と謂ふ。龜紋一爆して㋽四七の大絃を續ぐ、末後、㋪碧目紫髯の樂神を見る。偉なる哉、獅筋一掃して㋲六音、響を呑む。鸞膠八轉して神絃密に續ぐ。其の先、香至の人にして元王家の子なり、來つて㋝熊耳の林巒に依る。好んで無孔の鐵笛を吹く、人の腸胃を絕つこと能はず、却つて自家の㋜髓皮を分つ。七步にして錯つて一頭の瞎死駒を放出す。腕促り蹄高うして、

---

㋚馬師云々。馬祖道一禪師の公案、碧巖第三則にあり。

㋖鹿苑。鹿野苑の略、釋尊成道後、三七日の後、憍陳如等の五比丘を濟度し玉へる靈地なり。

㋴十二の雅韻。所謂十二部敎なり。

㋱鷲嶺。釋尊の法華を說き、又拈華し給へる地なり。

㋯樂府。漢詩の一體なり、司馬相如の作れる詩賦をとり、律呂を論じて八音の調に和すと見えたり。此所にては只だ釋尊の解き給へる經を指すなり、文章の脈絡上只だしか言

三百六十の骨節毒乳漲り飛び、八萬四千の毛竅血汗爭ひ湧く、大千を蹈碎し長空を蘄き裂く。百億の須彌走つて倒に立ち、六方の刹土碎けて隣虚と爲る。傳へて南泉山下に到つて、天鼓自然に鳴る。長沙趙州、妙指各和して、甚だ祕調を吐く。向來、大義渡口の老渡、好んで牌を敲いて、(イ)單于の調を鼓す。大いに雅樂を奪ふ、(ロ)象骨、餘韻を續ぐ、(ハ)萬舞、行を亂る。(ニ)羅疎の二山、古曲神に入る、格律高雅なり (ホ)首山(ヘ)石霜和するに(ト)黃鐘大呂の音を以てす。其の調、微にして嚴に、野鬼駭き走り、閑神遁れ潛む。最も苦きは吹いて廣南の光奉院裏に到つて、毒鼓倒に掛く。魂飛び膽裂けて、屍を伏すること八十餘軀、其の餘の口啞し耳聾する者、知んぬ幾許ぞや。(チ)聽は絃を(リ)縮ひて洞山に入り、(ヌ)顯は瑟を抱いて雪竇に據る。其の音、大いに震ふ。鐵獅、西河に吼えて木人腸落ち、芻狗、(ル)子胡に叫んで泥牛汗流る。眞人あり、鄧氏の子にして、綿州巴西の人なり、此れを東山老人と道ふ。昔、破頭山頭に在つて淸苦す、中ごろ白雲堆裏に來つて隱る。一朝、磨院に入つて、衣を褰げて破碓を遶ること一匝、布鼓嗔り吼ゆ、(ヲ)洋々焉たり、(ワ)殷々乎たり。雷神を傭ふて毒鼓を打つが如し。(カ)三

---



ひしのみ、

(シ)大龜氏。摩訶迦葉なり。

(エ)四七の大絃。迦葉より二十八轉するを云ふ。

(ヒ)碧目紫髯云々。即ち始祖達磨大師なり。

(モ)六音。般若多羅滅後、其の傳ふる處を離れ同學の者六宗を開く、達磨悉く之れを破ると。

(セ)熊耳云々。達磨滅後、之れを熊耳峰に葬る。

(ス)髓皮を分つ。達磨少林を去るに臨んで、弟子に各其の詣る所を陳ぜしむ、各之れを云ふに及んで、達磨評して曰く、「道副は我が皮を得たり、尼總寺は我が骨を得たり、道育は我が骨を得たり、獨り慧可のみは我が髓を得たり」と。

(イ)單于。匈奴の將の名なり、故に又匈奴を稱す、蠻夷の調を云ふ。

(ロ)象骨。雪峰義存禪師なり、雪

佛之が爲に氣を失し、一靜之が爲に膽を裂く。(ヨ)妙喜唱へて、聲、(タ)衡陽の浦に滿つ。(レ)佛鑑嘯いて、響、龍淵の底に徹す。林樹を震ふ者は(ソ)虎丘の長嘯するなり。行雲を遏むる者は黃龍の苦吟するなり。(ツ)曇華咸傑(ネ)崇岳普岩皆擊節して、衆妙を極むる者なり。四明に老圃あり、名けて息耕老夫と言ふ、常に鐵鋤を扣いて歌ふ。一日、大嶺の古光、壽塔を照すを見て、妙旨、指端に入る。響、二林を動し、聲、十刹に周し、餘韻飛んで扶桑に落つ。金鷄驚き報じ玉鰲悲み咽ぶ。陽春を横岳に廻し、白雲を(ナ)紫野に舞しむ。(ラ)瑞鹿奔つて閃電鈍く、眞珠轉じて寰海昏し、傳へて(ム)華圃に到つて八音乍ち啞す。(ウ)鼉鼓に毒を塗るが如し、聞者皆喪す。此に於て四柱乍ち分つて、(オ)大絃爽々たる者あり、小絃

---

峰山、一に象骨山といふによつて名くるのみ。德山宣鑑禪師の法嗣。

(ハ)萬舞。殷の湯王の始めし舞の名なり。

(ニ)羅疎。羅漢桂琛禪師、及び疎山匡仁禪師を云ふ。

(ホ)首山。首山省念、風穴禪師の法嗣なり、卽ち首山三句の公案にて名高し。

(ヘ)石霜。道吾法嗣、石霜慶諸禪師なり。

(ト)黃鐘大呂。漢土律呂十二律を十二月に配し、其の六呂の内十二月は卽ち大呂なり、陰聲なり、其の六律の內十一月は卽ち黃鐘、陽聲なり、因に黃帝伶倫に命じて竹をとり、十二箭を作らしめ、以て鳳凰の鳴を聽いて、其の雄の鳴六、雌の鳴六を以て黃鐘の宮に比し、六呂六律を生ずといへり。

(チ)聽。文珠應眞の法嗣、洞山曉聰なり。

(リ)緡。纏ふに同じ。

(ヌ)顯。智門光祚の法嗣、雪竇重顯禪師なり。

(ル)子胡。利蹤禪師、南泉に嗣ぐ。眞人云々。白雲守端の法嗣、五祖法演禪師、五祖山一に東山と云ふ、故に東山老人と云ふ。

(ヲ)洋々焉。自得の貌、又は自由の貌。

(ワ)殷々乎。盛なり。

(カ)三佛。佛果、佛眼、佛鑑。一靜は南堂靜禪師、五祖に嗣ぐ。

(ヨ)妙喜。圜悟克勤の法嗣、大慧宗杲禪師、著書に大慧語錄、大慧武庫、正法眼藏等あり。

(タ)衡陽。妙喜、晩年衡陽に屛居す。

(レ)佛鑑。五祖演法嗣、慧懃佛鑑禪師なり。

(ソ)虎丘。圜悟克勤の法嗣、大慧宗杲の法眷なり。

(ツ)曇華。應菴曇華禪師、虎丘紹

籔々たる者あり、宇宙に周く海外に徹す。悲しい哉、（ノ）大雅枯れて桑間涌き、古曲啞して鄭衞震ふ。君看よ、從上俊傑の祖師、那箇か今時に似たるや。往々に祖關透らず、宗旨徹せざるが爲に、心火熠々として死に到るまで休罷することを得ず、日を隔つる瘧疾の如し。五日坐し來つて、棄て了つて幾箇の佛を禮し、五日禮し來つて、棄て了つて幾卷の經を誦し、五日誦し來つて、棄て了つて一食卯齋す。恰も重痾の人の臥することも亦果さず、坐することも亦果さざるが如し、盲驢の足に任せて行くに似たり。是れ只だ最初（オ）莽鹵にして入處、痛快ならざるが爲なり。一般あり、三五七年辨道參禪すれども、工夫純ならず、精神一ならざるが故に、終に打發せず。歳月を重ぬと雖も、進むに寂滅の樂みなく、退くに生死の怖あり。此に於て專念稱名して、切に淨刹の託生を求む、參究の心乍ち廢し、辨道の心俄かに罷む。宋明の末、此の黨大いに興る、多くは是れ庸才惰弱の禪徒なり。自らの點額を飾り自らの敗露を補はんと欲して、動もすれば（ク）五祖の戒公、（ヤ）眞如の喆公、（マ）斷崖の義公、再生の事を引いて、參禪を以て益なしと爲す。殊に知らず、戒公の輩、專ら稱名念佛の人なること



陸の法嗣、咸傑は密庵咸傑禪師、曇華に嗣く。

（ネ）崇岳。密庵に嗣ぐ、普岩は運庵の號。

（ナ）紫野。興禪大燈國師の開山なる龍寶山大德寺を云ふ。

（ラ）瑞鹿。無學祖元禪師の開山なる瑞鹿山圓覺寺を云ふ。

（ム）華園。關山國師の開山なる正法山妙心寺なり。

（ウ）鼉鼓。鼉は音（タ）形は蜥蜴に似て長は丈餘、其の甲は鎧の如く、皮は堅くして厚く、鼓を張るべし、即ち鼉の聲に象りて作りたる鼓。詩經に「鼉鼓逢々」とあり、蓋し其の鋒芒の鋭きを云ふものか。

（ヰ）大絃。白樂天琵琶行に「大絃嘈嘈として急雨の如く、小絃切々として私語の如し」と、其の演法を云ふなり。

（ノ）大雅。大雅は詩經の先王の德

を。嗟、自家一旦の凡解を主張せんと欲して、一箇兩箇志願厚からず、見地瞥ならざる底の再生の老禿兵を拾ふて、從上多少の傳燈の賢聖を謗倒し、父子不傳の祕訣を刺害せんと欲す。㋘五逆も亦比するに足らず、彌漫たる罪累、懺悔を容るる所なけん。夫れ禪の外に淨刹なく、禪の外に心なく、禪の外に佛なし。曹溪は八十度の善知識、南嶽は三生藏の老僧、大寂滅海、大虛、痕を絕す、再生あり託生あり、化生あり不生あり、天堂地獄穢土淨土、一顆、盤に和して托出する底の眞如意寶、毫釐も繫念するときんば、癡人、夜塘に汲む。若し夫れ㋻願生の事を以て、佛法の極則と爲せば、祖師只だ二三行の書を漢土に贈つて足れらく而已。曰く、「專念稱名して淨刹に往生せよ」と。何ぞ許多の艱嶮を喫して、十萬里の波濤を淩いで、此の見性の法を傳ふることを用ひんや。儞知らずや、觀無量壽經に曰く、「佛身の長六十恒河沙倶胝那由多由旬」と。儞子細に諦觀して看よ、是れ則ち直心見性無上菩提の道に非ずして何ぞや。㋙慧心院の僧都曰く、「大信は大佛を見る」と。參禪は則ち了々分明に、這箇の古佛を見徹する者なり。此の外別に佛を求めば、總に是れ邪魔の種族なり。故に經に曰く、「若し色を

---

を頌詠したる上品の詩なり、桑間は昔衞君が濮水の上桑林の間に聞きしといふ琴の音にして、淫亂の聲なり。鄭衞も大雅に比しては鄙聲なり。

㋔莽鹵。心を用ふること粗略にして、事を爲す雜駁なることをいふ。

㋗五祖の戒公。雲門下三世、五祖師戒なり。

㋳眞如の喆公。潭州大潙慕喆眞如禪師なり。

㋮斷崖の義公。南嶽下、高峰原妙の法嗣、斷崖了義禪師なり。

㋘五逆。五逆罪のことなり、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。逆とは天理に違逆する義を云ふなり。

㋻願生。他生の佛果を願ふをいふ。

㋙慧心院の僧都。即ち慧心僧都源信なり、慧心院は比叡山三塔の一なる横川にありと。

以て我れを見、音聲を以て我れを求めば、是の人、邪道を行じて、如來を見上ぐること能はず」と。大凡そ一切の如來、三種の身あり、法身毘盧遮那、此には徧一切處と云ふ。報身盧舍那、此には淨滿と云ふ。化身釋迦牟尼、此には能忍寂默と云ふ。衆生の身中に在つては、卽ち寂智用の三なり。寂は是れ法身、智は是れ報身、用は是れ化身なり。達磨大師云く、「若し衆生常に善根を修すれば、卽ち化身佛現ず、智慧を修すれば、報身佛現ず、無爲を修すれば、法身佛現ず。十方に飛騰して、隨宜救濟する者は化身佛なり。斷惑修善雪山成道する者は報身佛なり。無言無說湛然常住なる者は法身佛なり。若し至理を論せば、一佛すら尙ほ無し、何ぞ三あることを得ん。此に三身と言ふは、但だ人智に上中下あるに據つてなり。下智の人は妄に福力を興して、妄に化身佛を見る。中智の人は妄に煩惱を斷じて、妄に報身佛を見る。上智の人は妄に菩提を證して、妄に法身佛を見る。上々智の人は內照圓寂、明心卽佛、心を待せずして佛を得。此に知んぬ三身と萬法と總に是れ不可取不可說なることを。」經に曰く、「佛、說法せず、衆生を度せず、菩提を證せず」と。其れ斯れを之れ謂ふか。黃檗大師曰く、「法身の說法、言語音聲形相文字を以て求む可からず」と。所說なく所證なく、只だ自性虛通のみ。故に曰ふ、「法の說く可きなき、是れを說法と名く。報身化身は、皆機に隨つて應現說法す、皆眞法に非ず。寔なる哉、報化は眞佛に非ず、又說法の者に非ず」と。須らく知るべし、諸佛縱ひ無量千萬億の隨類變現の大小の形量ありと雖も、畢竟此の三身の中を出でず。金光明最勝王經に云く、「此の

如き三身具足して、㊁阿耨菩提を成ず」と。報化の二身は假名にして、法身は是れ眞實常住なり。前の二身の爲に根本と作る。然るに經中分明に說く「佛身の長六十恒河沙㊂倶低那由多由旬」と。試みに道へ、是の如き廣大の身量、報身と爲んか、化身と爲んか、將た又法身と謂はんか。既に言ふ、報化の二身は應機利生すと。知らず那處廣博の世界に現じて、那箇大身の衆生を化するや。謂ふ莫れ、彼の淨刹の如きは衆生大身なるが故に、佛も亦大身を現ずと。若し果して然らば、彼の世界の大菩薩衆及び㊃四部衆等、幾恒河沙の身量ありと爲るや。彼の恒河の如きは、周匝四十里、其の沙細密にして微塵の如し。縱ひ一恒河沙、半恒河沙乃至方々丈裏の沙數と雖も、鬼神も亦數へ盡すこと能はず。況んや六十恒河沙をや。佛眼も亦量ること能はず、實に是れ不可數の數、不可量の量、此の義は經中難解の玄旨、無量壽尊黃金の骨髓なることを。若し强ひて論ぜば、六十恒河沙は是れ色聲等の六塵を指す者なり。大凡そ世間所有一切の諸法、六塵を超出する底、一箇も亦無し。彼の所有の六塵の諸法全く是れ無量壽佛黃金の全身なることを覺了せば、立地に生死の苦域を超過し、立地に無上正覺を成ぜん。此の時に當つて、㊄東方も亦蓮華刹土、南方も亦蓮華刹土、盡大千界八表四維卓錐の地も、亦別處な

㊁阿耨菩提。阿耨多羅三藐三菩提の略なり、無上正等正覺を云ふ、卽ち「さとり」の境涯なり。

㊂倶低那由多由旬。倶低は數量百億に當る、那由多も數の極度萬億と云ふ、唯だ無數無量に用ふ、由旬は距離を計量する名稱なり。或は三十里、或は四十里、或は十六里と、其の說一定せず。

㊃四部衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のことを云ふなり。

㊄東方云々。豈にたゞ西方のみを說かんやなり。

けん。是れを遍一切處毘盧大寂定軀と爲す。萬法を貫通し、群有を鎔融して長劫不變なる者是れなり。又經に大乘經讀誦の人を以て、上品・上生・最上の機と爲す。大乘經とは何ぞや。黄卷赤軸の謂に非ず、必定決定して自家本具底の佛心を指す者なり。而るに亂に參禪益なしと道つて可ならんや。然りと雖も、大慈㋖弘誓の賢聖、中下の機を攝せんが爲に、願輪に乘じ來つて、自ら淨業を修し、伊をして願生の心を決定して、㋴三心四修の勳果を成辦せしむる者は、閣いて論せず、唯だ禪門に在つて、純工に懶く進修に疎かにして、而して後に參禪益なし、精工驗なしと稱する者は、點檢せずんばあるべからず。是れ只だ及第の進士、㋱射策功なくして郎當流落、口を四方に餬して、鄙陋の資業を事とする者、指を僻地に折つて、兩箇三箇左遷配流の官人を數へて、官途賴なく、仕路危を蹈むと稱して、彼の狀元甲科の君子を輕賤する者の如し。是れ鉢盂を擧する能はずして、自ら餓ゑずと道ふ者に非ず麼。或人の曰く、「禪にして淨土を兼ぬるは、虎にして翼を挾む者なり」と。是れ何の掠虛の妄談ぞや。嗚呼、禪乎禪乎。爾が輩、夢にも曾て度量し及ばさん哉。纔かに撥轉するときんば、㋯三賢四果、心肝を驚落す。賢聖氣を失し、佛祖も命を乞ふ。恁麼に佗を添へ物を假つて、而して後に弼と爲る者に非ず矣。近世、浪華岸

㋖弘誓。弘大の誓願の意、一切の佛菩薩に通じて四箇の誓願あり、又如來の四十八願を云ふことあり、これ此の四十八願は他力成佛の誓願なれば、十方の衆生等しく其の利益を被むるがためなり。

㋴三心は一喜心、二老心、三大心。喜心は喜悅感謝の心、老心は慈悲愛憐の心、大心は不偏不黨の心これなり。

㋱射策。射御、對策を云ふなり。

㋯三賢とは聲聞の修むる處の位に七賢七聖と云ふ事あり、三賢は七賢位中の初の三を云ふ

時、一睡一千年、如來の出世に逢はざる底の老螺蛤、睡中纔かに此の語を聞著して、憤然として起き來つて、毒漚を吹くこと萬斛、大口を開いて曰く、「禪にして淨土を兼ぬるは、猫兒の眼を失するが如く、淨土にして禪を兼ぬるは牛背に帆を張るに似たり」と。暫時の譫語と雖も、亦是れ也太奇。二十年前、或人の曰く、「向後、二三百歳を經ば、禪徒盡く淨家に入らん」と。予が曰く、「禪家者若し參禪純工せずんば、其の人必ず淨家に入らん。淨家者若し專念稱名して、三昧發得することを得ば、其の人必ず禪に歸せん」と。或大德の曰く、「三四十年の前、二の上人あり、一を圓恕と云ひ、一を圓愚と云ふ。圓愚は何許の人と云ふことを知らず、姓氏も亦詳かにせず。平生稱名專修して頭然を救ふが如し。一日乍ち三昧現前、圓解煥發して、直に遠の初山に登つて、獨湛老人に見ゆ。湛問ふ、『爾は是れ何處の人ぞ。』愚云く、『山城。』湛問ふ、『何の宗をか修習す。』愚云く、『淨業。』湛曰く、『無量壽尊年多少ぞ。』愚曰く、『某甲と同年。』湛曰く、『即今何處にか在る。』愚即ち右手を握つて少しく擧ぐ。湛曰く、『爾は是れ眞の淨家の人なり』と。」是れ即ち予が向に所謂淨家若し專唱して三昧發得することを得ば、必ず禪門に入らんと、是れ其の證なり。恨むる所は、淨にして禪に入る底は、日裏に星斗を尋ぬるが如く、禪にして淨に歸する底は、晴夜に星斗を數ふるに似たり。近ごろ聞く、遠境の禪林、動もすれば礫盤を張り、伏鐘を㊂居ゑ、高聲

即ち(一)五停心、(二)別相念處、(三)總相念處、之なり、或は外凡の位とも云ふ。四果とは此處には四善根を指す、即ち七賢位中の後の四にして(一)煗法位、(二)頂法位、(三)忍法位、(四)世第一法位なり、或は内凡の位とも云ふ。

㊂居ゑは据ゑなり。

稱名、四境を驚す底間又之れ有りと。嗟、向に所謂三百年後、懸讖寔に恐る可し。江西浙北の諸聖再び出頭し來るに非ざるよりんば、輙く救ふこと能はず。予常に之が爲に、牙戰ぎ膽震ふ、忠勇奮玄の上士、薪に伏し膽を嘗めて、宜しく自ら策進すべし。法寶壇經疑問第三に曰く、「若し相の說を論せば、西方此を去ること十萬八千里とは、即ち身中十惡八邪なり」と。近代、大明萬曆の間、杭州㊀雲棲の袾宏なる者あり。彌陀經の疏鈔を撰す。疏中に曰く、「㊁壇經錯つて五天竺を以て、極樂國土と爲す。五天震旦同じく是れ娑婆穢土と爲す。何ぞ須ひん分別して東を願ひ西を願ふことを。極樂、此の娑婆を去ること十萬億土なり。蓋し壇經は皆學人の記錄なり、何ぞ訛なきことを保せん。壇經の如きは愼んで之を初機に示すこと勿れ。苟も非器に投せば、便ち狂魔に墮せん、嘆惜す可し」と。嗟、雲棲は胡爲る者ぞや。偏固の儒生か、小乘の敎人か、且つ淨家者流、觀經の深理を知らず、看經の眼を具せず、妄に自ら聖經を判識する者か。將た又㊂魔羅波旬の部屬、圓頂方袍の容を現じ、文字般若の衣を著け來つて、難遭微妙の聖言を呰言せんと欲する者か。大いに怪しむ可し。或人の云く、「然らず、熟顧ふに、宏公見性の眼なく、入理の力に乏しきが故に、進むに宿昔般若の正因なく、退くに來生流轉の患難あり。是の故に專念稱名、聖衆の迎攝を感得

㊀雲棲袾宏。杭州府仁和縣の人なり、明末佛法漸衰の時に生れ、禪を唱道する傍、念佛を信ず、即ち禪淨一致なることは、其の著書に明かなり。

㊁壇經。六祖法寶壇經の略、六祖大師の著なり。

㊂魔羅。梵語なり、能奪命と譯す、能く智慧の命を奪ふの因緣となる故に、石破壞善者とも譯す、波旬は掃裨、又は波卑夜と譯す、魔王の名なり。

して、以て佛果を成せんと欲す。偶々眞正直指の金文を披覽するに、大いに懷素に違し、俄かに所望を失す。是の故に憤然として彼の疏鈔を綴つて、以て鄙執を救はんと欲する者なり。儒に非ず、敎に非ず、魔羅波旬の部類に非ず、只だ是れ少しく文字を解する底の無眼の一僧のみ。宋明の末、此の黨麻の如し、何ぞ怪しむに足らん。」若し果して然らば雲棲が此の擧、甚だ良策に非ず。幸に惟れ ㋣大師の慈訓あり、盡ぞ恭敬し、尊信し思惟し熟讀して、佗の聖域に入らんと欲せざるや。妄に自ら文字の小伎を恃んで、佗の高明の至聖を謗倒せんと欲する者は何ぞ哉。自ら錯り了ることは是れ可なり、之を書に筆して、多少の後人を敎壞すること悲しいかな。大凡そ凡意に反するを以て、之を聖言と爲し、聖言に違するを以て、之を凡愚と爲す。聖言若し凡意に反すること無くんば、是れ凡語ならんのみ、何ぞ貴ぶに足らん。凡愚若し聖言に違すること無くんば、果して是れ聖者か、實に敬す可し。原ぬるに夫れ ㋦曹溪大師は傳燈過量の大導師、黃梅七百衆の中更に第二人なし。其の兒孫、四海に綿亘して碁の如く、布星の如くに列る。宏公の如きは、故紙堆中臆覺情解の一布衲、轡を並べて驅す可からず。爾識らずや、曹溪古鏡の中、天堂地獄淨刹穢土、總に是れ沙門の一隻眼、輪鎚開かず、㋑吹毛入らず、去なく來なく、生なく死なく、五須彌山の白 ㋺毫光、四大海の ㋩靑蓮目、㋥七重の寶樹、㋭八功德池、心上に煥爛として目前に的歷たり。

㋣大師。即ち六祖大師なり。
㋦曹溪大師。即ち六祖大師なり。
㋑吹毛。名刀、其の利、毛を吹くべしと。
㋺白毫。三十二相の一、佛の眉間に白玉の纖毛あり、之れを云ふ。
㋩靑蓮目。梵語に優鉢羅といふ

(ヘ)黑繩・衆合・叫喚・無間、總に是れ無量壽尊紫磨金の全身なり。或は喚んで東方瑠璃光土と作んも亦得たり。或は喚んで南方無垢世界と道はんも亦得たり。元是れ一箇の大圓覺海、人々本具の性、其の業感の強弱、福力の多少に隨つて、所見同じからず。地獄は之を見て鑊湯爐炭と爲す。餓鬼は之を見て火聚膿血と爲す。修羅は之を見て刀兵戈戟と爲す。凡夫は之を見て娑婆穢土と爲す。專ら荊棘の瓦石を見ては、之を厭ひて淨土を求む。(ト)諸天は之を見て瑠璃玻璃と爲す。二乘は之を見て方便有餘土と爲す。菩薩は之を見て(チ)實報莊嚴土と爲す。諸佛は之を見て常寂光土と爲す。知らず衲僧之を見て還つて什麼とか作す耶。須らく知る可し、天上の珠網、泉下の鐵網、直に是れ羅綺千重の衣、淨刹の美供、地獄の洋銅、全く是れ百味具足の食、盡乾坤大地、更に第二月なし。此れ庸常下劣の士の了知す可き所以に非ず。祖師門下參玄の(リ)上士、嶮崖に手を撒して、絕後に再び甦つて始めて此の三昧に入得す。此の時、理と智と冥し、心と境と泯す、之を眞正古佛の來迎、參玄上士の往生と謂ひ、之を名けて上品上生最上の機と爲す。宏若し一回、者般の淨刹に入得せずんば、縱ひ儞十萬億の刹

---

蓮華の一種にして、其の葉長くして廣く、青白文明にして大人の眼目の相となす、されば諸佛菩薩の眼目を形容するに、これを以てす。四大海は須彌山の四方にある海、此の四大海の外圍は鐵圍山なり。

(ニ)七重の寶樹。七重に幷位せる極樂の寶樹をいふ。阿彌陀經に極樂國土七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是四寶、周匝圍繞」とあり。

(ホ)八功德池。極樂淨土に存在して、彼の國の莊嚴となすものなり。稱讚淨土經に「一澄淨、二清冷、三甘美、四輕輭、五潤澤、六安和、七飲時除飢渴等過患、八飲已長養四大根とあり。如上は蓋し佛智眼の開けし其の偉大を云ふなり。

(ヘ)黑繩、衆合、叫喚、無間、何れも八大地獄の一なり。

(ト)諸天。所謂天部の諸神をいひ

土を抹過し、八千度の往生を歷盡すとも、總に是れ夢中の幻事にして、(ヌ)邯鄲枕上一炊の榮耀ならく而已。祖師分明に道ふ、「西方十惡八邪を隔つ」と。是れ至公至正の論にして、六方恒沙の刹土の如來、同時に出頭し來るも、一字子も亦移易すること能はず。我れ且く(ル)爾に向つて說かん。「西方此を去ること十八里、西方此を去ること十八肘、西方此を去ること一寸八分」と。是れ又至公至正の論なり。如何が手脚を著けん、那處の村里を指すとか言はん。擬議せば壁間に七尺の折朱杖あり。自家の所見に達するを始んで、願輪不朽の導師を捉へて、淨邦と竺土と辨別すること得ざる底の癡人に擬して可ならん哉。是れ佗なし、袾宏の意に竊かに謂らく、「大師の如きは寔に悟り得て甚だ好しと雖も、悲しむ所は元是れ南方の樵人、文字を知らず經典を讀まず、頑陋無智、實に彼の牧漁奴隸の輩に異なること無し」と。縱ひ其れ牧漁奴隸の輩と雖も、豈に淨刹と竺土とを辨得せざる底あらんや。今、三歲の孩兒と雖も、淨邦あることを尊信す。況んや難遭難遇、間出聖智の大導師をや。尊ぶ可し、曹溪大師諸聖の懸識に應する(ヲ)優鉢華眞正十力の聖者、願輪に乘じ來る者にして、從上の佛祖未だ曾て說き及さ

---

又印度に上界の諸神をいふなり。

(チ)實報。天台四土の一にして、實報土とは、菩薩の中道を證し無明を斷破したるものの居所なり、實報とは多劫の斷證に報いたるの謂なり。

(リ)上士。大士に同じ、菩薩の譯語なり。

(ヌ)邯鄲枕上。唐の開元七年、呂翁といへる道士、邯鄲を經しに、道上の邸舍に盧生と云へるもの來り逢ひて、自ら窘困を嘆じ、言訖りて睡らんとす、翁、青磁の枕を出して之れにさづけて、曰く「此れを枕とすれば、榮適、意の如し」と、此の時、主人黃粱を炊ぐ、盧生之れを枕としてやがて貴紳の女を妻とし、高位高官に陞りて、子孫多く榮えて年八十にて死すと夢む、欠伸して寤むれば、身に以前の盧

ざる底の秘訣を唱へ出すこと、恰も神龍の阿盧大海に入つて、苦鹹の海水を換轉し來つて、淸涼甘露の膏雨と作して、横に濺ぎ竪に灑ぎ、無礙自在にして、枯荒を洪旱に蘇するが如し。又世の大饒長者の大寶藏庫の裡に入つて、世間希有の雜寶、手に任せて撮し來つて、凍餒を救ひ枯急を賑すに似たり。意度に渉らず情解を容れず、今時、閑葛藤を攀緣し、臭糟粕を爛咬し、情卜意解して、胡亂に說き出す底と日を同じうして語る可からず。佛は說く、「十萬億土」と。祖は道ふ、「十萬八千里」と。大威神力大智力寔に龍象の蹴踏、獅子の哮吼、擬議せば㋻野干腦裂せん。然るを宏公、公然として判じて曰く、「壇經錯つて五天竺を以て極樂國土と爲す」と。又曰く、「蓋し壇經は皆學人の記錄なり、何ぞ訛無きを保せん」と。救ふに依稀として謗るに彷彿たり。肯窾に曰く、「地志を按ずるに、所謂、長安の西門より、西天㋕迦毘羅城の東門に至つて、凡そ十萬八千里なり。雲棲の疏中に壇經錯つて五天竺を以て極樂と爲すと曰ふ、良に據あるのみ」と。是れ何の閑妄想ぞや。嗟肯窾良に按じ得て好し。試みに言へ、㋵大禹より以來、那箇の地理志にか五天竺國十惡八邪を隔つと說き來る麼、可惜許。何ぞ地

---

生、邸舍の傍にあり、主人黄粱を炊ぎて飯未だ熟せず、生、謝して曰く、「先生之を以て我が欲を窒ぐ」と。

㋸偏に袾宏を指すなり。

㋾優鉢華。優曇華(うどんげ)、又具には優曇鉢羅華といふ。梵音(Udumbara)の音譯なり、瑞應華、又は希有といふ、此の華の現ずるや、芽出でゝ一千年、莟みて一千年、開きて一千年、合せて三千年に一度開く花なりと、此の華開けば世に轉輪王出づといひ、又世に佛在す時に此の華開くといふ、靈瑞希有なる花なり。書中多く希有、難値、難遇、メり難きこと等の譬喩として用ひらる。

㋻野干。又夜干と書く、[illegible]獸の名。梵語「悉迦[illegible]」と[illegible]ふ、[illegible]青黄にして狗の如し、群行して夜鳴し、其の聲狼の如し。

志を按する底の暇日を廻す來つて、謹んで壇經を熟讀し、子細に佛意を觀察せざる耶。觀じ去り觀じ來つて、忽然として佛意に撞著して、以て據と爲ば、覺えず手を拍して大笑せん。大笑する底是れ什麽ぞ。宏公眼なうして妄に聖言を判著す、寔に笑ふ可し矣。肯綮も亦同じく是れ葛藤窠裏の人、恰も矮子の戯を見るが如し、佗に隨つて上下す。譬へば兩箇の瞎波斯、一枚の梵文の貝葉を拾ひ來つて、背地裡に向つて相共に力を盡して判斷す。暗黯昏譯一字子も亦諦當ならず、卻つて笑を傍觀に取るが如し。勾下して論ずるに足らずと雖も、恐らくは多少の行人を害せん、所以に許多葛藤す。疏中に又曰く、「壇經は愼んで之を初機に示すこと勿れ、苟も非器に投ぜば便ち狂魔に墮せん、嘆惜す可し」と。是れ又甚ぞ愼まざるの麁言なり。我れは說かん、「壇經の如きは愼んで妄に判斷する勿れ、苟も暗鈍無智の小見を以て妄に之を判せば、便ち狂魔に墮せん、嘆惜す可し」と。原ぬるに夫れ番々出世の如來、衆生をして佛知見の道を開かしめんが爲の故に、世に出現す。是れ諸佛の本志なり。中間、㋟頓漸半滿、㋹顯密始終等の經卷ありと雖も、畢竟唯有一乘人々本具の自性に收歸す。曹溪大師も亦然り。行由

---

又野干は形小にして尾大なり、能く木に上る、枯枝を疑つて登らず、又狐なりともいふ。又狐に似て小なりと。

㋕迦毘羅城。卽ち聖父、首頭檀那淨飯大王の居城なり。

㋵大禹。夏王の稱、舜に次ぐの大聖。蓋し禹洪水を治め、九州の境界を正したるにより、地理志に因みある故に、玆にいだしたるものならん。

㋟頓漸。古來多く敎判の語として用ふ、禪門多く此の語を採用して、天台を解く意義を用ふ。卽ち佛成道の初に菩薩の爲に頓に說きし法、卽ち華嚴を頓敎といひ、小乘の機を漸次に大乘に進むる法、卽ち阿含、方等、般若を漸敎といふ。

㋹顯密。眞言宗にては釋尊一代の敎法を顯密二敎に分ち、眞言の法たる大日如來の敎たるを密敎とし、釋迦、彌陀等の

疑問定慧懺悔等の法門を設くと雖も、畢竟一乘見性の法を傳へて、四七二三の賢聖及び (ル)五家七宗の諸老をさへに、各々此の見性の法を傳へて、佛に代つて化を揚げ、專ら諸佛出世の本志を演ぶ。終に隻字も西方の事を談せず、片言も往生の事を説かず。後學の初機、間又竊かに壇經を把つて讀む、終に狂覺に墮する底一箇も亦無し、卻つて各々大器を成就す。請ふ宏、嘆惜することを休めよ。是の故に大元南海の宗寶曰く、「壇經は文字に非ず、達磨單傳直指の指なり。(ヲ)南嶽・青原の諸大老、嘗て是の指に因つて以て其の心を明め、後之を以て (ワ)馬祖・石頭諸子の心を明す。今の禪宗、天下に流布するは、皆是の指に本づく。今よりして後、豈に是の指に因ること無うして、心を明め性を見る者あらんや。」是れ亦叢社の公論にして、宏公僻見一人の私言と實に霄壤なり。蓋し根に利鈍あり、機に大小あるが故に、説も亦千般百種なり。譬へば世の良醫の胸中、初めより一方を貯へずと雖も、病者多種なる故に、方劑も亦多般なるが如し。夫れ願生淨土の一門の如きは、(カ)大醫王救苦者、(ヨ)韋提希獄中の患難を救ふて、其れをして唯心自性の淨土に歸せしめんが爲に、假に且く施設する底の善巧、

---



敎を顯敎となす。

(ル)五家、七宗。支那に於ける禪宗分派の總稱。五家は臨濟、潙仰、曹洞、雲門、法眼。七宗は五家に楊岐、黄龍の二宗を加へたるの稱なり。

(ヲ)南嶽。六祖の法嗣南嶽懷讓禪師なり、支那第七代の祖、青原は青原行思弘濟禪師なり。

(ワ)馬祖。馬祖道一禪師、南嶽の法嗣、石頭は石頭希遷、青原の法嗣なり。

(カ)大醫王救苦者。即ち世尊をさす。

(ヨ)韋提希。毘提希、吠提希とも記し、或は單に提希とも記す、思惟と譯す。摩訶陀國頻婆娑羅王の后妃にして、阿闍世王の母なり、后妃太子のために牢獄に幽閉せられ、深く厭世の心を起して法を求む。釋迦乃ち靈山の會座を沒して王宮降臨し、韋提のために説

暫時の一方なり。宏が如きは諸佛善巧の眞理に達せず、心外別に淨土ありと死執し、心外別に佛ありと妄想して、諸佛土なく前街後巷、總に是れ諸佛の刹土、諸佛身なく南隣北舍、全く是れ諸佛の全身なりと徹了すること能はず。十惡八邪、西方を隔つる等の眞正の說話を聞いては、自家の所望に違するを惡んで、強ひて排斥して他の聞見を塞がんと欲す。若し宏が意樂に任せて、壇經初機に可ならずして讀むことを容さずんば、華嚴・方等・法華・涅槃、其の餘の了義の諸經皆盡く初機に可ならじとせん。何が故ぞ、大師既に佛心の玄微に透徹し、教海の源底を窮決して、諸佛と同一舌に演べ、諸佛と同一口に唱ふるが故に。且つ華嚴合論に曰く、「一たび佛力を念じ戒を修し願力を發し淨土に生ぜば、是れ化佛の淨土なり、眞の淨土に非ず。見性に非ず、及び無明は是れ一切如來の根本智なりと了せざるが爲の故に。是れ有爲なるが故に。阿彌陀經の如き是れなり」と。宏若し一見せば、必定して初機に可ならずと爲して、之を書に筆せん。㊅合論何の幸ぞ哉、蓮池が瞎眼に觸るゝことを免れ得て、之を非器に投せば狂魔に墮せん等の批判を聞かず。棗柏大士、大寂定中多少の慶幸ならんか。大凡そ老幼貧卑、緇素賢愚、正眼に看來れば、如來の智慧德相を具有すること、分毫も欠少せず。初機なりと爲して棄廢す可き底、半箇も亦無し。然りと雖も、其の最初發足の日、辨道の利害を知らず、進修の急緩を辨ぜず、且く假に名けて初機と爲す。此に於て聖教を披閲し師友に隨順し、大事を了畢し

法し給へり、「觀無量壽經」卽ちこれなり、韋提希夫人は其の尊稱なり。

㊅合論云々。卽ち袾宏の瞎眼に觸るゝことを免れ得て、幸なるを云ふなり。

大器を成就し、大辯才を具し大法施を行じて、慧日を常夜に挑げ慧命を ㋒澆季に留む、之を名けて眞正報恩底の佛子と爲す。而るを彼も亦初機なりと爲して、强ひて壓へて其れをして念佛せしめ、此れも亦初機なりと爲して、强ひて壓へて其れをして念佛せしめば、㋼少室の謂ゆる此土大乘の根器、神俊の才を具へ棟梁の質あつて、佗後德山臨濟にし去り、馬祖石頭にし去る可き底の可畏の後生、半死の老爺に隨ひ、半生の阿孃に伴ふて、水邊林下白晝に日を收め、頭を低れて念佛せば、誰が家の子を傭ふてか佛の慧命を續がしめ、末代の ㋨蔭涼樹と作さんや。眞風乍ち地に墜ち、佛種永く斷滅せん。男兒大丈夫、請ふ其れ之を擇べ。此の時に當つて、㋔三部經典の外、㋗畢波窟中初機後學の爲に結集する底の諸大乘經、㋳三藏の金文盡く㋮無事甲中に歸し、空しく蠧魚の腹中に葬られて、深山の古廟裏累々たる舊紙錢に異なること無けん、何の用を爲すにか堪へん、寔に悲む可し。經中に所謂 ㋘上品上生、大乘經讀誦の人も亦土を拂ふて之れ無けん。自家の所執に反するを以て、譏害して之を廢せば袾宏が疏抄は ㋫始皇の焚書坑に非ずや。秦昔苛政を恣にして、大いに聖經賢典に違す。其の違するを始んで儒を坑にし書を焚く、其れ亦其の凶に庶からんか。願ふに ㋙三武

---

㋒澆季。末世を云ふ、澆季末法などと熟字す。

㋼少室。少室峰の略にして、少林寺の所在地なり、達磨面壁九年、二祖接得の處とす、故に達磨の代名詞にも用ふ。

㋨蔭涼樹。三伏炎を避けて涼をとること、煩惱を脱して涅槃に入るが如し、即ち佛徒の宿る所なり。

㋔三部經典。此には、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三經を云ふ。即ち淨土の三部經なり。外に法華の三部經あり、眞言の三部經あり。

㋗畢波窟。畢波羅窟を云ふ、釋尊滅後第一結集を行はれし所なり、又七葉窟とも云ふ、王

は顯に佛教を廢し、袾宏は密かに佛教を廢すと。亦然らずや。然らば則ち顯密品殊なれりと雖も、罪犯は將た一般ならん乎。是れ宏が罪には非ず、是れ宏が未だ眞正の導師に見えず、參玄の眼なきが致す所にして、見性せざるの靈驗なり。人の呼んで過現未來善知識の樣子、禪教律部大和尙の標題と稱することは、將た是れ何の心ぞ歟。熟々顧ふに、今時諸方の禪林、往々に此の黨太だ多し。寂默枯坐を死守して以て道と爲る底は、自家の所證に違するを嫌ふて、佛經を見ること寇讎の如く、人をして看讀せしむることを容さず、恰も野鬼の桃符を畏るゝに似たり。見聞覺知を痴執して以て禪とする底、自家の所見に違するを嫉んで、祖錄を見ること寃家の如くす。人をして披閱せしむることを許さず、恰も跛兎の惡虎を避くるが如くす。㋓淨人は嫌ふて譏刺し禪人は憎んで謗倒す、佛道の危嶮正に此の時なり。然りと雖も、是れ亦廣く經史を窮め、偏く㋢墳典を探つて、詩偈を玩弄し文字を耽嚼して、人我の列岳に培ひ勝佗の幔幢を樹てよと道ふには非す。縱ひ儞辯才、㋐滿慈に等しく、智力、㋚鶖子に過ぎたりと雖も、菩提の資糧に乏しく見性の正眼なくんば、終に憍慢の邪見、肺腑の間に入つて

---

舍城附近の毘波羅山にあり。

㋳三藏。即ち經、律、論をいふ。

㋮無事甲中。漢土重々の棚を作る、之れを甲乙丙丁と十干に配す、上段甲の部分は空にして物をのせず、故に空に譬ふる時に用ふ。

㋘上品上生。極樂に往生するをいふ。觀無量壽經に「若し衆生あり、彼の國に生ぜんことを願ひ、三種心を發すれば便ち往生す、何等をか三と爲す、一は至誠心、二は深心、三は廻向發願心、三心を具するもの、必ず彼の國に生ず、又三種衆生あり、當に往生を得べし、何等をか三と爲す、一は慈心、殺さず、諸戒業を具し、二は大乘方等經典を讀誦し、三は六念を修行し、廻向發願、彼の國に生ぜんことを願ふ、此の功德を具し、一日乃至七日即ち往生を得（中

乍ち佛種性を斷滅し、永く泥梨獄中の衆生と成らん。眞正の道流は即ち然らず。先づ須らく見性、掌上を見るが如くし去つて、間亦佛祖の言敎を把つて看過し來つて、心を以て古敎を照し、且つ眞正の導師に見えて、誓つて祖師最後の因緣を參決し、末期一箇半箇を打出して、以て佛祖の深恩を報答す。是れを當家の種草と爲す。謹んで㋖蓮池大師に告ぐ、僻地裏に向つて蓮實の念珠を搯り、頭を傾け目を收めて、稱名念佛して蓮華國裏の生を求むることは、是れ吾子が分の宜しきなり。朦朧たる瞎眼を張り、胡亂の文章を玩弄して、傳燈過量の大聖人を判斷することは、且た請ふ之を束ねて高く閣け。何が故ぞ神龍雲雨を行ず、㋴螺蚌の測度す可きに非ず。古人曰く、「夫れ西方とは衆生の心地なり。十萬億の佛土を過ぐるとは、衆生十惡の念を止め、菩薩㋱十地の階級を超過するなり。㋯阿彌陀此には無量壽と云ふ、是れ乃ち衆生の佛性なり。㋛觀音勢至等の聖衆とは是れ自性の妙用なり。衆生とは無明煩惱、慮智分別の多心なり。臨命終の時とは識情寂滅の時なり。識陰情念の寂滅すとは心地清淨なり。之を名けて西方淨土と道ふ。西方とは日月星辰の收る所なり。而るに衆生一切の慮智分別の心、

---

略）、諸佛前に於て次第授記、還つて本國に到り、無量百千陀羅尼門を得、是れを上品上生者と云ふ」と。

㋻始皇。秦の始皇、黎庶を愚にする爲に先王の書を集めて之れを燒く。

㋙三武。一には北魏の武帝、皇紀一一〇六年佛敎佛像を燒く、而して沙門を殺す、二には北周の武帝、同一二三四年、道佛二敎を廢し、寺觀四萬餘區を王公に賜ひ、僧、道、四萬餘人を軍民に編つ、三に唐の武帝、同一五〇三年佛寺四萬餘基を廢毀し、僧尼二十六萬人を還俗せしめたるをいふ。

㋓淨人。淨土門の人をいふなり、禪人といふは袾宏は禪人なり、故に之れをいふなり。

㋢墳典。三墳は典をいふ、漢土三皇の書及び五帝の書を云

一心地に收る。則ち一心不亂にして彌陀如來現在するが故に、自性を悟るとき八萬四千の煩惱轉じて、八萬四千の妙義と成る。這の妙用を觀音勢至等と名くるなり。迷へば妄心を穢土と名く。悟れば其の心淨き、之を淨土と名く。」所以に血脈論に云く、「過去の諸聖の修する所の念佛は、皆是れ外說に非ず、只だ心內を推す。若し佛を求めんと要せば、先づ須らく見性すべし。若し見性せざれば念佛誦經何の益かあらん。佛陀此には覺と云ふ。覺するときんば自心卽是れ佛。若し心を離れて別に有相の佛を求むれば、是れを名けて痴人と爲す。譬へば魚を求むる人の如く、先づ須らく水を見るべし。魚は是れ水の所成にして、水の外に更に魚なきが故に。若し人、佛を覓めんと欲せば、先づ須らく心を見るべし。佛は是れ心の所成にして、心の外に更に佛なきが故に。」問ふ、「既に是れ心外に佛なし、如何が自心を覺了して徹底なることを得去らん。」曰く、「恁麽に問著する底是れ心なりや是れ性なりや、鬼と爲んか神と爲んか、內外中間にありや、靑黃赤白なりや、自家に須らく究明すべし。立時に究明し、喫飯喫茶、語時默時但だ單單に窮め將ち去れ。切に忌む經敎文字の中に向つて求覓し、善知識の口頭

㋐滿慈。或は滿願子といふ、佛十大弟子の內卽ち富樓那を云ふ。

㋚鶖子。舍利弗をいふ。

㋖蓮池大師。假りて淨土門の師を總じて之れを云ふなり。

㋴螺蚌。蛤貝の類なり。

㋱十地。五十二位、卽ち十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の中の十地なり、これ衆生より佛迄の修行成道の段階を五十二に區分したるものなり。

㋯阿彌陀。阿彌陀又は彌陀は略稱にして、委しくは阿彌陀由須 (Amitāyus)、または阿彌陀婆 (Amitābha) と云ふ、阿彌陀由須は無量壽命と譯し、阿彌陀婆は無量光明と譯す、これ所謂阿彌陀佛の具名にして、この二梵名を合して、阿彌陀と通稱す、その他この佛

に向つて尋討することを。(ヱ)只だ心機盡き情量窮る處に到つて、猫兒の鼠を捉るが如くにし去り、鷄母の卵を暖むるが如くにし來れば、豁然として鳳金網を離れ、鶴籠を脫する底の時節あらん。縱ひ死に到るまで打發すること能はず、(ヒ)三二十年徒爾として光陰を送却し去るとも、誓つて諸方死郎當の老漢老婆の說話を認め來つて、以て得力の處と爲すこと莫れ。骨に著き皮に粘じて終に打脫すること能はじ。況んや祖師最後の因緣に於てをや。是の故に古人云く、「參禪は須らく(モ)三要を具すべし。一には大信根あり、二には大疑情あり、三には大憤志あり。若し此の一を缺けば、折足の鼎の如し。信根とは何をか言ふや。只だ是れ人々見得すべき底の自性あり、徹了す可き底の宗旨あることを信ずる是れなり。縱ひ是れ信ずと雖も、難透の話頭を疑着せざるときは、底に透つて徹了すること能はず。縱ひ是れ疑團凝結すと雖も、憤志以て相續せざるときは、疑團破れず。」是の故に言く、「懈怠の衆生の爲には、涅槃(セ)三祇に亘り、勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、只だ須らく切に精彩を著くべし矣。」參禪は燧を鑽つて火を取るが如し。唯だ一氣に進むを以て、賢なりと爲す。纔かに(ス)暖氣の生ず

---

には無量壽佛、無量光佛、盡十方無碍光如來等、種々の稱異稱あり、所謂他力往生淨土の法門の目標なり。

(シ)觀音。即ち慈悲圓滿の妙用を顯はす、これ即ち佛心の顯現なり。

(ヱ)只だ心機盡き。道盡き谷窮る所、一の旋天轉地的の明光を跳出するなり。

(ヒ)三二十年。河潤ふこと九里、瓜熟して蒂落ち、夫れ春籬の殘雪、叢裡の瓜、知らずして其の消長を見る、豈に其の早晩するを介せんや。

(モ)三要。臨濟禪師爲人の機關なり、即ち三玄三要の三要なり、委しくは人天眼目にあり。

(セ)三祇。三阿僧祇劫の略なり、菩薩が佛果を得る迄經たまふ修行の無數年時をいふ。

(ス)暖氣云々。燧を鑽るに譬へて

るを見て即ち休し去り、少しく煙氣の浮ぶを見て乍ち休し來らば、鑽つて三祇刧數を經盡すとも、終に星火を見ること能はず。吾が鄕、海濱に近きこと纔かに數百步、譬へば一人あり、未だ曾て海水の甘酸を知らざるを以て、憂と爲して自ら行いて之を嘗めんと欲す。纔かに百步にして歸り來り、十步にして却回せば、何の時か彼の苦鹹を辨得せん。縱ひ信甲飛濃の人と雖も、一氣に進んで退かざるときは、日ならずして海濱に到つて、纔かに一指端を染めて之を舐るときは、❶月支、眞丹、南濱北溟、世間所有の海水の甘酸、一時に頓に了知せん焉。參玄の上士も亦此の如し。自らの心上に向つて參究して、一氣に進んで退かざるときんば、自性・佗性・衆生性・煩惱性・菩提性・佛性・神性・菩薩性・有情性・餓鬼性・修羅性・畜生性、乍ち一念子の間に於て、一見に見徹して毫芒を留めず、大事を了畢し生死を透脫す、豈に快ならずや。謹んで參玄の上士に勸む、己事を究明することは須らく頭然を救ふが如くす。透過を求むることは、須らく要用底の物を尋ぬるが如くすべし。佛祖の言敎を見ることは、須らく❷生冤家の如くすべし。禪門には話頭を疑はざるを以て、自棄無賴の賤人と爲す。所以に言ふ、「大疑の下に大悟あり、疑十分あるとき證悟十分あり」と。謂ふ莫れ、塵務繁絮に

---

いふなり。

❶月支。主として、迦膩色迦王の領したる國を云ふ、西は今の波斯、東は中央亞細亞印度に、所謂揵䭾羅三國をいふ、然れども又印度の一名とす。西域記に、「天竺此の月と云ふ、佛日既に沒し、諸教、諸聖月の如し。」又印度の形月に似たるを以て、この名ありと。眞丹は又震旦と記し、漢土を云ふなり、印度にて稱する名なり。

❷生冤家。怨の骨髓に徹したる程の仇敵を云ふ。洞山錄に、「祖佛の言敎生冤家に似て參學の分あらん」と。須臾も念頭を離れざる意に用ふ。

して疑團を凝すに暇なく、思念紛飛して純工を下すに力乏しと。譬へば鬧鄽騷市の間、稠人廣衆の中に於て人あり、錯つて二三兩の黃金を遺落せんに、鬧處なりと爲して顧みず、塵中なりと爲して棄置する底は半箇も亦無けん。多少の人を推排し、許多の塵土を打飜して、淚を含んで尋逐して再び手に入らざるときんば、心頭平穩なること能はず。然らば髻中無價の大寶、自己本有の妙道、彼の二三片の黃金にだも如かざる可けんか。胡爲れぞ其れ容易なるや。東海に波臣あり、名けて㊅赤梢鯉と道ふ。大いに氣概を具す、鱗中の大丈夫なり。平生慨念して曰く、「我が此の鱗屬、知んぬ幾千萬種ぞ歟。蒼溟の廣大に誇り銀浪の洪渺を恃んで、波間に沈浮し藻裡に汨沒すと雖も、多くは釣餌の爲に獲られ、網羅の爲に挽かれて終に刀俎に罹つて人口に㊁膾炙す。骨は塵土に交り頭は野犬に餉す、山市の肺と爲り、店舍の備と爲る。一箇も其の終を全うする者を見ず、寔に悲む可し。」此に於て大いに憤發して誓つて言く、「我れ願はくは彼の龍門を透過し、彼の雷火に觸著して、凡鱗の聚隊を出でゝ神龍の班次に列り、永く此の患難を脫せん、永く此の垢辱を雪がん」と。既にして三月桃浪の節を待つて、直に禹門を望んで尾を擺つて進發す。若見すや、禹門は杳かに崑崙山頂より落つ。百千丈の狂浪漲り飛び、二

---

㊅赤梢鯉。又赤梢鱗とも云ふ、怜悧の衲僧に對する評語。傳說に禹門に三級の波あり、三月に至る毎に、桃花の漲滿る、魚能く水に逆ひ、躍つて波を過ぐるものは化して龍となり、風雷を起し其の尾を燒いて天に登ると。宗門にては、大悟徹底して大機用を活現するの意に用ふ、魚化龍、燒尾魚、赤梢鱗、透得三級波等の語皆これより出づ。

㊁膾炙。膾は「なます」、炙は「あぶる、やく」にて、食膳に上るを云ふ、轉じて又世人一般知悉の事にも用ふ。

三級の喩處側ち激す。丘山崩れ落ちて迅雷怒り吼ゆ。囘飈咽んで毒霧を捲き、閃電苦んで臭煙を驅る。巨靈も之が爲に氣を失し、㋭海若も之が爲に膽落つ。纔かに一滴に觸著するときは、巨鼇も背を裂き長鯨も骨仆く。是に於て鯉魚、錦鱗を張り、鐵牙を鼓して一氣に直に衝く。

嗚呼鯉魚か鯉魚か。渺茫たる海中つ片鮮にして、㋬小鮮を得て饑腸を救はば足れらくのみ。胡爲れぞ、其れ斯の如く猛利なるや。上頭には何の有る所ぞ。迅電巖を裂き、雷火天を焦して、鱗甲之が爲に打たれ、而尾之が爲に燒かれて、乍ち大死一囘す。一囘し起き來れば、鱗峻たる一枚の神龍雷神は先驅たり、火帝は殿後たり。㋣雨師を右にし、風伯を左にし、雲を挐ひ霧を飈んで、焦芽を荒旱に救ひ、正法を濁世に護す。若し彼の跛鼈に儔ひ彼の盲龜に隨つて、蜆を拾ひ蝦を飡して、一生を過して以て足れりとせば、㋠和修吉も救ふこと得ず。㋷摩那志も亦如何ともすること得ず、豈に此の盛事あらんや。盲龜とは何をか謂ふ乎。今時話頭を枝葉なりと爲し、參禪を施設なりと爲る底の杜撰の瞎流なり。彼れ些しき了解なきに非ず、徒らに門頭戸底を認めて言く、「自性天淨く、心源海深し。生死の捨つ可きなく、涅槃の求む可きなし。湛然寂默、空廓虛凝、是れ則ち人々本具底の大寶所、什麼の欠少する所か有らん」と。噫似たるこ

㋭海若。海神なり。楚辭に「海若をして馮夷を舞はしむ。」
㋬小鮮。小魚に同じ。而尾は頰の毛なり。
㋣雨師、風伯。雨神と風神とをいふ。韓非子に「風伯進みて掃ひ、雨師道に灑ぐ」と。蓋し之れに本づくか。
㋠和修吉。八大龍王の一なり、和修吉龍王は、多頭を護す、九頭龍にして水中に住す。
㋷摩那志。八大龍王の一なり、阿修羅海水を排して、喜見城を浸せる時、此の龍身を繞らして其の海水を歇めたりとの因緣によりてこの名あり。

とは甚だ似たり、如何せん途路都べて半點の力無くして、蝸牛の物に逢ふて頭角總に縮却するが如く、跛鼈の途に觸れて、㋦六處盡く隱藏するに似たり。氣を出すことも亦得ず。或は眞正の衲子に捋著せられて、彼の羊公が鶴の如く、首を回すことも亦得ず。彼の鮮魚の刀俎の上に在つて、一生萬死、㋸纖膾も亦佗に任せ、㋾大臠も亦佗に任せて泣くことも亦力無きに似たり。恁麼にして祖師門下の客と稱して可ならんや。恁麼にして欠少する所なしと言つて、心に快きこと有りや。古、眞正辨道の衲子の如きは、活爐鞴上に身財を擲ち、命根を忘れて纔かに一回撥轉するときは、彼の東鯉の精神を振つて龍門を透過し了つて、千態萬狀脫洒自在なるに似たり。豈に痛快ならざらん乎。寧ろ此れを爲せよ、彼を爲ること勿れ。神龍とは何をか謂ふ哉。古、眞參純工する底、眞正の活祖なり。嗟其れ人を以て魚にだも如かざる可けんや。死せずして何をか爲さんや。又一般邪魔の種族あり、其の部屬を率ゐて曰く、「佛道を成辨せんと欲せば、先づ須らく生滅の心を空ずべし。心生ずるが故に生死あり涅槃あり、天堂地獄、心の所生に依らずと云ふこと無し。是の故に汝が輩、單々に唯だ心を空却せよ」と。玆に於て各步を定めて其の心を空ぜんと欲す。如何せん竪に空じ横に空じて歲月を重ぬと雖も、長竿を掉つて煙霞を掃ふが如く、雙手を伸べて河流を遮るに似て、徒らに迷悶を增すのみ。譬へば一箇の豪家有らんに、錯つて賊兒の姦謀尤も巧なる者を揚げて、其れをして家事を保護せしめんに、倉廩府庫、日を逐

㋦六處。眼耳鼻舌身意を云ふ。
㋸纖膾。「なますの肉」を云ふ。
㋾大臠。肉の大切りなり。

ふて衰滅す。此に於て家眷の怪しき者幾箇を捉へて、彼の賊兒をして日夜點檢糺問せしむ。妻孥之が爲に憂愁し、㋨室家之が爲に窮困すと雖も、資產は舊に依つて隱沒す。是れ但だ錯つて賊を認めて附托するが故なり。須らく知るべし、彼の空却せんと擬する底の心、即ち是れ生死の大兆なることを。楞嚴經に曰く、「汝、無始より今生に至つて賊を認めて子と爲す、汝が元常を失す、故に㋕輪轉を受く。」疏に曰く、「功德の法財之に因つて表失す。之を名けて賊と爲す、迷ふて識らず、認めて眞常と爲す。將に謂へり、嫡生と期して世を嗣がしめんと欲す、反つて破喪に遭ふて、歷劫貧窮なり」と。眞正、生滅の心を空却せんと欲せば、箇の渾剛打就する底の難透の話頭に參ぜよ。忽然として命根に和して打失せん時、始めて永嘉の謂ゆる妄想をも除かず、眞をも求めざる底の玄旨を了畢せん。㋵妙喜曰く、「近世魔強く法弱くして湛入合湛を以て、究竟と爲る者勝げて數ふ可からず。」又云く、「近年以來、一種の邪禪あり、以て目を閉ぢ睛を藏して、㋟觜盧都地にして妄想を作すを之を不思議の事と謂ひ、亦之を威音那畔空劫以前の事と謂ふ。纔かに口を開けば、便ち喚んで今時に落つと作す。亦之を根本上の事と謂ふ。悟を以て枝葉邊の事と爲す。蓋し渠れ初め步を發せし時、便ち大いに錯り了れり。」（以上大慧の語）。今時も亦者般の魔

㋨室家。猶ほ夫婦と云ふが如し。

㋕輪轉。業緣によりて六道に輪轉するをいふ。

㋵妙喜。圜悟克勤の法嗣、臨安府徑山、妙喜大慧宗杲禪師なり。

㋟觜盧都。支那の俗語、不語の貌をいふ。正宗贊風穴章に、「遠村の梅樹觜盧都」とあり。

㋹繫驢橛。驢馬を繫ぐ橛なり、自由のきかぬことに云ふ。又役にたゝぬつまらぬものと云ふ意。

纔少しと爲ず。試みに問ふ、枝葉邊の事は且く置く、汝が秘重し珍藏する底の根本上の事、作麼生。恐らくは一片虚凝不動不搖底の(レ)繫驢橛ならんか、將た湛々たる黑暗の深坑ならん乎、寔に怖畏す可し。之を見地に墮すと謂ふ。是れ即ち世間多少の癡人を賺し來つて活埋する底の舊鬼窟、老狸窠。縱ひ汝、保護し秘重して僧祇劫數を歷るも、依然として一枚の舊棺木、此れを名けて(ノ)八識頼耶の暗窟と爲す。古人行脚、多少の艱嶮を喫し盡す者は、此の老屋を超過せんが爲なり。若し人眞參純工にして去つて、一回、者箇の舊窠を打破することを得ば、乍ち(ツ)大圓鏡智を見ん。四智俄かに煥發し、(ネ)五眼直に豁開せん。若し又今時の魔黨に欺誑せられて、者裡に坐在して家舍と爲し寶所と爲して、磨礱し去り拂拭し來るも、何の用を爲すにか堪へん。元是れ一片の含藏識、驢胎に入り去るも亦是れ彼れ、馬腹に入り去るも亦是れ彼れ。君に勸む努め力めて一刀を下さんことを要せよ。昔大覺世尊成道の日、三七日中(ナ)方廣・華嚴の本懷を演ぶ、之を珍御寶聚の衣と謂ふ。徒衆、聾の如く啞に似たり。此に於て中下の機を攝取せんが爲に、假に且く此の(ラ)暗宅を構ふ、之を化城と謂ふ。後來、此の窠窟を破せん

---

(ノ)八識頼耶。八識阿頼耶識を云ふ。阿頼耶は梵語(Ālaya)にして、藏、又は無沒と譯す、第八識を通稱すれども又他に九識をもいふ、藏と名くるは又三義あり、一に能藏とは、この心識の内、萬有の種子を貯藏するをいふ、二に所藏とは、前七識(眼、耳、鼻、舌、身、意、末那の七識)の爲に萬有の種子を藏し收めらるゝをいふ、三に執藏とは、第八識は無始以來常恒に相續し、常一の相あるにより、第七識の爲に我なりと執せらるゝによる。抑々阿頼耶識は吾人心識の根本にして、一切萬有の種子を含有し、緣に應じてこれを展開し、所謂、外界の根元たるものなりと說くを、法相宗の解となす、所謂一種の佛教唯心論なり。馬鳴の起信

が爲に、調御は內に在つて提携し、㋰淨名は外に在つて彈呵し、二乘の人を以て疥癩野干の身に比すと雖も、終に其の本根を拔くこと能はず。養息竊かに蕃滋して、月支に遍く神州に滿つ。石霜・眞淨・佛果・妙喜の諸老、臂を張り齒を切つて、强ひて力めて攘斥すと雖も、恰も手を拍して㋒碩鼠を驅るが如し。此に竄れ彼に現ず、陰々として常に祖師不傳の眞風を譏刺す、悲しい哉。我が日域㋼二十四流の賢聖、㋨承久・嘉禎・嘉曆・建武の間、軀命を鯨海に擲ち、身心を虎穴に投じて、此の難信の秘訣を傳へて、慧日を扶桑萬年の高枝に懸けて、寶炬を蓁洲累劫の暗衢に留めんと欲す。誰か知らん、此の默照の部屬、相似の禪徒に呰害せられて、纔かに未だ二三百歲を經ざるに、土を拂つて泯沒して死灰の如くにし去らんとは。最も深く悲しむ可き者は、此の澆末の衰頽なり。或は眞正の辨道の上士あつて、密參功積り純工力充つるときは、平生の心意識情總べて行れず。痴々呆々理盡き詞窮つて、參究底の心に和して一時に打失して、氣息も亦將に絕えなんとす。殊に知らず是れは則ち龜紋將に爆せんとする底の時節、戀穀將に脫せんとする底の時節、佛法將に入を得んとする底の好消息なることを。

---

論には、阿賴耶識を萬有開發の起點と爲し、眞如に無明の熏習するによりて、三細六麤、即ち萬有を開發すべき利法を說明せり。これを前の唯識論に比するに、彼は眞如に於て開展の力を認めざるに、これは眞如に其の點を置き、彼れはこの識を純生滅性となすに、これは生滅不生滅和合と解するが故に、彼れに對して之れを眞如緣起といへり。

㋡大圓鏡智。四智の一にして無漏の智なり。

㋧五眼。即ち肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼なり。

㋤方廣華嚴。大方廣佛華嚴經の略、大方廣は法界眞如を指す、華嚴は比喩にして、萬行の因華を以て佛果を莊嚴するの謂なり。

㋶暗宅。八識賴耶の暗宅をいふ。

惜む可し、大好善知識乍ち婆禪の心を起し、婦仁の情を縱にして、種々の道理を說いて、情量の窟宅に拽き知解の窠臼に推し、冬瓜の印子を以て一印に印定して曰く、「儞も亦是の如く我れも亦是の如し、善く護持せよ」と。呼嗟、護持することは儞が護持するに任す、爭奈せん祖庭猶は天涯を隔つることを。是れ甚だ之を憐むが如くなれども、其の實は之を害す。學人毒なることを知らず、頭を掉つて歡喜し、尾を搖して踊躍す。自ら謂らく、「祖師西來の秘訣、全く手に入り畢んぬ」と。豈に知らんや、祖關透らず棘林猶は深きことを。悲しい哉、棟梁の質あつて超逸の才を具ふる底の英靈の漢子も、此の弊風に吹倒せられて、半醒半醉終に一生擬議不來底の鈍漢と作り去ることを。叢林人に乏しきこと亦宜ならずや。若し其れ執著して根本上の事と爲さば、恐らくは覺えず、焦牙敗種の部屬に隨はん乎。古、㋔南岳禪師、馬師の庵前に在つて甎を把つて磨する者は、大寂をして此の意を了知せしめんと欲してなり。古人、一句難透の話頭を留下して、兒孫をして許多の精神を剿落せしむるは、汝をして者箇の窠臼を蹈飜せしめんが爲なり。所以に古人云く、「三十年餘吾れも亦住す、宜なる哉、多くは錯る舊狐

---

㋰淨名。維摩居士を謂ふ。

㋒碩鼠。大鼠の如し。

㋼二十四流。吾が朝後鳥羽天皇建久二年榮西禪師が吾が國に禪を傳來せしより、後村上天皇正平六年東陵永璵禪師が渡來せしに至る百六十年間に於ける禪の流傳に就いて、禪を二十四種に分類したるものを概稱して、之れを日本禪の二十四流といふ。

㋨承久、嘉禎、嘉曆、建武、皆建久及び正平の間にあり。

㋔洪州江西馬祖大寂禪師は南岳に來侍し、密に心印を受く、蓋し同參に拔んでて傳法院に住し、常日坐禪す、南岳是れ法器なることを知り、祖の所にゆいて問うて、曰く、「大德坐禪して箇の什麽をか圖る、」祖曰く、「作佛を圖る、」南岳乃ち一塼を採りて祖の庵前にてこれを磨す、祖問ふ、「師什麽

穴」と。寔に知る、參禪は甚だ容易ならざることを。五祖禪師暮年に喜んで東西の㋨廡に遊ぶ、且過に僧の一編を持して之を閱するを見て、祖之を觀るに、「今人多くは是れ个の身心寂滅、寂滅現前、前後際斷し、一念萬年にして休し去り歇し去り、古廟裡の香爐にし去り、㋳冷湫々地にし去ることを得て究竟と爲す。殊に知らず、此の勝妙の境界に自己を障蔽せられて、正知正見現前すること能はず、神通光明發露すること能はず」といふに至つて、卽ち卷を掩ふて手を以て揶揄して曰く、「奇なる哉、導師善く法要を說く」と。徑に㋮首座寮に往いて呼んで曰く、「奇特の事あり、奇特中の奇特なり。」卽ち㋘圜悟に付す。悟之を讀んで父子相與に鼓舞嘉嘆して自ら已むこと能はず。大慧禪師初め圜悟に見ゆ、且つ自ら計つて云く、「當に九夏を終ふべし。若し諸方と同じく我れを以て是と爲さば、我れ無禪論を著さん」と。汝が秘重する底の根本上の事、佗豈に識破せざらんや。若し之を鑽り之を仰ぎ、之を淘し之を汰せば、一生を錯り了らん、甚の好罵天をか見ん。果して自南の毒風に命根を吹滅せられて、前後際斷す。㋫佛果曰く、「也た易からず、僩但だ死し了つて活くること能はず、言句を疑はざる、

---

なかなす、」南岳曰く、「磨して鏡と作す、」祖曰く、「豈に鏡となすことを得んや、」南岳曰く、「坐禪豈に作佛を得んや。」祖曰く、「如何が卽ち是ならん、」南岳曰く、「牛に車を駕するが如き、車若し行かずんば、車を打するが卽ち是か、牛を打するが卽ち是か云々」と。

㋨廡。大なる家、又は「ひさし」廊下等の意に用ふ、此所は寺院又は叢林等の意なり。又山内の東西廡廊の僧衆を云ひしものか。

㋳冷湫々地。ひつそり泣き沈む樣な境を云ふ、卽ち死灰枯木の如き境涯なり、鬼哭啾々などと熟語す。

㋮首座寮。首座の起臥する寮なり、首座は禪頭、首衆、上座、座元などと同じく、一座大衆の頭目なり。

㋘圜悟。圜悟克勤禪師、卽ち五

是れを大病と爲す。豈に道ふことを見ずや、㋙嶮崖に手を撒して絶後に再び甦ると。須らく此の些の道理あることを信ぜんことを要すべし。」向來、「樹倒れ藤枯るゝ時如何、相隨來也」と云ふを聞いて、釋然として大悟す。悟則ち數段の因縁を擧して之を詰るに、酬對滯なく、徑山の最上層に端居して、千僧閣上、龍象を指令すること饑鷹の群兎を視るが如し。貴ぶ可し、祖宗門下、者般の靈驗あることを。遮莫あれ人の呼んで枝葉邊の事と爲すことを。儞が珍藏する底の根本上の事、萬兩の黄金を添へ得て擔ひ來るも亦貨ふ可からず。佛果曰く、「古人得道の後、茅茨石室折脚㋓鐺兒の内に野菜根を煮て、喫して日を過し、且つ名利を求めず、㋢放曠として一轉語を垂れて、佛祖の深恩を報いんと要す。」㋐卍庵顔和尙、南泉、山に上つて、作務する因縁を頌して云く、「珊瑚枕上兩行の涙、半は是れ君を思ひ半は君を恨む。」㋚大慧聞き得て侍者をして㋖牌を收めしめて曰く、「只だ者の一轉語、佛恩を報ゆるに足れり矣。」多少の人自ら香爐を張り茶湯を點じ、供具を羅列し華果を排布して多拜多禮し、六時行道し身臂指を鍊ると雖も、佛恩十分が一を報ゆるに分なし。而るに古詩一聯の斷葛藤丕いに佛恩を報ず

---

祖法演の法嗣なり。
㋫佛果。圜悟克勤禪師なり。
㋙嶮崖に手を撒して云々。即ち「百尺竿頭進一歩して、始めて眞正の妙境を得らるゝなり。
㋓鐺兒。猶ほ鍋といふが如し。
㋢放曠。自由恬淡の貌なり。
㋐卍庵。東福寺沙門卍庵和尙なり、南山和尙の印訣を受く。
㋚大慧。號は痴兀、伊勢の人なり、聖一國師に東福寺に謁し、歸服して其の弟子となる、即ち佛通禪師これなり。
㋖牌。即ち卍庵の位牌なり。
㋴一千七百衆。妙喜庵禪師、晩年張丞相魏國公浚の請に應じ、臨安府の徑山に住し、大いに宗風を擧揚す、玄學の參集するもの二千餘人と。
㋱巴陵三轉語。巴陵顥鑑禪師の三句、一に「僧問ふ、巴陵如何か是れ提婆宗、陵曰く、銀盌裏雪を盛る、」二に「問ふ、

ることは何ぞや。是れ寔に輕薄の論に非ず。妙喜は一代の龍門にして、一千七百衆の蔭涼樹なり、豈に荒唐の詞を吐かん哉。昔、㋱巴陵三轉語在り、雲門大師云く、「我が沒後、齋筵を設くること莫れ、只だ此の三轉語を擧せよ。」祖師豈に汝が謂ゆる枝葉邊の事を好んで、茶果珍饈に充つる者ならん哉。(已下百三十九字碧巖の評。)古德曰く、「者の中忽ち箇の出で來つて本來向上向下無し、參ずることを用ひて什麼をか作さんと道ふこと有らば、只だ伊に向つて道はん、我れも也た知る、爾鬼窟裡に向つて活計を作すことをと。」悲しい哉、後人多く道理の會を作して云ふ、麁言細語皆第一義に歸すと。若し恁麼に會せば且く去つて座主と作つて、一生多智多解を贏ち得んには。而今往々に道ふ、本悟處なし、箇の悟門を作して此の事を建立すと。若し恁麼の見解ならば、獅子身中の蟲の自ら獅子の肉を食ふが如し。見ずや、古人道く、『源深からざれば流長からず、智大ならざる者は見ること遠からず。』若し用ひて建立の會を作さば、佛法豈に今日に到らんや。」僧、長沙同參の會和尚に問ふ、「和尚、南泉に見えて後如何。」會默然たり。僧又問ふ、「和尚未だ南泉に見えざる以前作麼生。」會云く、「更に別に有る可からず。」僧因つて長沙に擧示す。沙卽ち偈を示して曰く、「百尺竿頭不動の人、然も得入すと雖も未だ眞と爲さず、百尺竿頭に須らく歩を進むべし、十方世界是れ全身。」後來㋵長沙眞禪師因

如何か是れ吹毛劍、陵曰く、珊瑚枝々月に撑着す、」三に「問ふ、祖意敎意、是れ同か是れ別か、」陵曰く、鷄寒うして樹に上り、鴨寒うて水に下る」と、是れなり、師の雲門此の語を聞いて曰く、「他日老僧が忌日には、此の三轉語を擧せば、老僧に供養するに足りぬ」といへりと云ふ。

㋵長沙岑禪師。南泉普願の法嗣、卽ち招賢大師なり。

に㋛三聖、秀上座をして問はしめて云く、「南泉遷化、甚麽の處に向つてか去る。」師云く、「石頭、沙彌たりし時六祖に見ゆ。」秀云く、「沙彌たりし時を問はず、南泉遷化、甚麽の處に向つてか去る。」師云く、「伊をして尋思し去らしむ。」秀云く、「和尚、千尺の寒松ありと雖も、且つ條を抽づる石筍なし。」師默然たり。秀云く、「和尚の答話を謝す。」師亦默然たり。秀囘つて三聖に擧示す。聖云く、「若し恁麽ならば臨濟に勝ること七步、汝看よ臨濟か長沙か。寔に佛海の蛟龍、祖庭の鳳麟、類を絕ち倫を離れて、遙かに物表に出づ。其の應緣步驟の間、大火聚の如く熱鐵橛の如し。鬼神も其の跡を窺ふこと無く、魔外も其の用を辨すること能はず。誰か其の涯際を測らん、誰人か其の㋽錙銖を別たん。」然るに三聖は臨濟に嗣ぐ者にして、却つて此の言あり、豈に其れ容易ならんや。須らく知るべし、汝か謂ゆる葛藤窩裡、少しき妙處あることを矣。

㋪石霜の諸禪師遷化す、衆、首座を請じて住持せしむ。時に㋲九峰の虔禪師、侍者たり、衆に白して首座に問うて云く、「先師の道く、「休し去れ歇し去れ、冷湫々地にし去れ、一條の白練にし去れ、古廟裡の香爐にし去れ、一念萬年にし去れ」と、甚麽邊の事を明す、會得せば卽ち住持せよ、會不得ならば不可なり。」首座對へて云く、「㋝一色邊の事を明

㋛三聖。臨濟の法嗣、慧然禪師なり。

㋽錙銖。銖は二分五厘、錙は六兩、又一說に八兩、而して錙銖は數量の極めて少きことに用ふ。其の勝劣の分際の毛厘なるによりて而か云ふ。

㋪石霜。青原下四世の祖、卽ち普會大師なり。

㋲九峰。石霜の法嗣、九峰道虔禪師なり。

㋝一色邊。具には向上一色邊といひ、一色那邊といひ、或は單明一色邊といふ、一色邊とは有無色空、迷悟得失の二見對待を超越したる修業の極地、卽ち清淨一邊の境界をいふなり。

す。」虔云く、「恁麽ならば先師の意を會せざること在り。」座云く、「但だ香を裝ひ來れ、香爐斷する處若し去り得ば、卽ち先師の意を會せん。若し去ること得ずんば卽ち會せず。」虔遂に香を焚いて、香煙未だ斷えざるに首座脱去す。虔、手を以て首座の背を打つて云く、「坐脱立亡は卽ち無きにはあらず、先師の意は未だ夢にだも見ざること在り」と。往々に辨道純工の人、年窮り臘逼り、孤燈獨照の時を以て最後嶮難の重關と爲す。既に是れ香煙絶ゆる處、恬然として化す、此の外更に何をか言はん哉。而るに其の背を撫でゝ云く、「先師の意は未在」と。大いに怪しむ可し矣。洪州雲居の㋦道膺禪師、嘗て侍者をして、袴一腰を送らしめ、一住庵の道者に與ふ。道者、㋑孃生の袴ありと曰ふて竟に受けず。師再び侍者をして問はしむ、「孃未生の時、箇の甚麽をか著く。」道者無語、後遷化して舍利あり、持して師に似す。師曰く、「直饒ひ死して八石五斗を得んより、當時一轉語を下し得て好からんには如かず。」吾れ聞く、舍利は定慧の薫果より出づと。所以に火浴の頃、粟粒芥顆の如くなるもの、纔かに一點を見るときんば、老幼奔波し、緇素競湊して、瞻禮尊重讃歎恭敬す。而るを言はずや、八石五斗を得んより生前の一句には如かずと。怪しい哉、生前の一句は胡爲る物ぞや。舍利に超過して是の如く尊貴なる哉 吾れ之を怪しむこと久し。

㋺破庵和尚、資福を退いて徑山㋩蒙庵の招に赴く、委ぬるに立僧首座の職

---

㋦道膺禪師。洞山良价の法嗣なり。

㋑孃。母を云ふなり。

㋺破庵。祖先禪師、蜀の廣安の人、羅漢院の德祥に從ひて出家し、德山、水庵等に見え、後密庵成傑に隨侍すると五年、遂に禪要を受けて蜀に歸る、後慧雲禪寺の第一世となる。

㋩蒙庵。蒙庵元聰禪師、晦庵慧

を以てす。寶上座と云ふ者あり、大知見を具す。住持首座の開堂に遇つては必ず㊁横機挺出す、鋒を迎へ勝つことを取る。一日破庵開堂、寶上座至る。破庵垂語して曰く、「乾坤の內宇宙の間、中に在り。」寶擬議す、打出せらる。其の時寶、破庵の語を擧し盡すを待つて、乃ち進語せんとす。中に有りと云ふ處に於て打出せらる。破庵故に我を攊くと以謂へり。衣單下に歸して脫去す。火後鄕人、舍利を收めて破庵に呈す。破庵拈起して云く、「寶上座饒ひ儞舍利八斛四斗有るも、之を一壁に置く。我に生前の一轉語を還し來れ」といひ、地に擲つて惟だ膿血を見ると。古人云く、「傳燈一千七百の善知識、㋭設利ある者十四人のみ。僧寶傳の中八十一人、設利ある者數人のみ。且つ吾が宗に重んずる所の者は、惟だ宗通說通に在り。向上の爪牙あつて、人の爲に粘を解き縛を去るを、傳法度生と謂ふ。餘は皆末事なり」と。吾が祖宗門下、難信難解、難透難入底の一著子あり。學者をして心死し意消して、凛然として變じ勃然として興らしむ。是れを法窟の爪牙と謂ふ。譬へば老虎の長嘯して林を出づるが如し、狐兎狸狢の輩、膽冷え股戰いで正しく立つこと能はず、全く視ること得ず、屎尿倶に下るとは何ぞや。彼れ鐵牙金牙の劒樹の如くなるを具ふればなり。若し此の物なくんば、亦狐兎にも亦異なること得ず。所以に古德曰く、「予、建中・靖國の初め、故人

---

光禪師の法嗣なり。
㊁横機挺出。縱横の宗機を擒出するを云ふ。
㋭設利。舍利に同じ、又室利羅といひ、骨身、又は靈骨と譯す、釋尊の入滅して遺し給へる骨分を佛舍利といふ、其の質頗る堅固にして、試みに之を鎚擊すれども碎けず、戒、定、慧の薰修によるものなれば、之れを得ること甚だ難しと。

の處にして、㋬洞山初禪師の語一編を獲たり。㋣福嚴良雅の集むる所、其の語言玄妙にして眞の法窟の爪牙なり」と。乾道の始め、瞎堂、國淸に住す。因に㋠或庵、㋷圓通の像を讃するを見るに、曰く、「本分に依らず、衆生を惱亂す。之を瞻之を仰ぐ、眼あり盲の如し。長安の風月今昔を貫く、那箇の男兒か壁を摸して行く。」㋦瞎堂驚喜して曰く、「謂はざりき此の庵に此の兒あらんとは。」卽ち遍く之を索む、遂に江心に得たり。固く稠人の中に於て、請じて第一座に充つ。吾れ聞く、人を見ること寔に難し、聖賢すら其れ猶ほ病めりと諸。而るを瞎堂、五七行の讃辭を見て、請じ來つて第一座と爲す、將た容易ならんや、將た暴卒ならんや、將た又見る所ありや、寔に怪しむ可し。㋸淨慈水庵の師一禪師、室中垂語して云く、「西天の胡子鬚髭なし。」僧傳へて或庵の處に至る。庵の云く、「餓狗、縴縭を喫す。」僧因つて水庵に擧示す。水庵云く、「此れは是れ五百人の善知識の語なり」と。㋾舒州の投子和尙の如きは、㋻大隋、佗に隨ひ去るの語を聞いて、香を炷いて遙拜して云く、「西蜀に古佛あつて出世す」と。君看よ明眼の宗師、一見して毫釐を殘さゞること、秦鏡の肺腑を照すが如し。㋕洞山の曉聰禪師、

---

㋬洞山初禪師。雲門文偃の法嗣、洞山守初禪師なり。僧曾て問ふ、「如何なるか是れ佛、」曰く、「麻三斤」と、此の話最も禪林に聞ゆ。

㋣福嚴良雅。洞山の初法嗣、潭州福嚴良雅禪師なり。

㋠或庵。台州護國寺、此山元の法嗣となり、鎭江府焦山に開法して、學徒を接得す、室中常に苕帚柄を擧して問うて、曰く、「依稀たり苕帚柄、髣髴たり赤斑蛇」と、衆皆下語するものなし。

㋷圓通。觀音を云ふ、圓は圓滿、圓成にして、通は神通を得、中に觀音菩薩は聞聲の上に圓通の境を得、卽ち耳根智の偈に、「五五圓通一念觀」とあり。

㋦瞎堂。圓悟克勤の法嗣、臨安府靈隱瞎堂遠禪師、眉山金流

初め㋵文殊の眞禪師に見ゆ。師、衆に示して曰く、「直鈎は㋟驪龍を釣り、曲鈎は蝦蟆蚯蚓を釣る、還つて龍あり麼。」良久して云く、「勞して功なし、龜毛寸寸長し。」師卽ち省あり、後雲居にあつて燈頭と作る。僧、泗州の大聖近ごろ楊州に向つて出現すと說くを見て、問を設くる者あり。曰く、「旣に是れ泗州の大聖、什麼と爲してか却つて楊州に向つて出現す」と。師曰く、「君子は財を愛す、之を取るに道あり。」後に僧擧して㋹蓮華峯庵主に示す。庵主大いに驚いて云く、「雲門の兒孫猶ほ在り」と。中夜に香を燒いて雲居を望んで之を拜す。吾れ聞く、庵主は雲門を祖とし奉先を父とす。其の機鋒卓絕にして、二十年人を試むるに終に其の機に契ふ者なしと。縦ひ六方恒沙刹土の調御師、同時に出頭し來つて、無量の大光明を放ち、無量の大神變を現じ、㋞四辯を逞しうし八音を恣にして、說法雨の如くなるも、總に顧みざる底の惡習の老骨檛なり。然るに只だ今纔かに五七言の閑語を聞いて、香を燒いて雲居を望んで禮拜する者は何ぞや、將た是れ何の意ぞや。此れ孔夫子の語にして、㋡魯論の中に載せたり。彼れ豈に初めより此の語を知らざらんや。今僅かに聽公の擧するを聞いて、大いに驚喜す。將

の人なり。

㋸淨慈水庵。育王裕の法嗣、臨安府淨慈水庵師一禪師、婺州馬氏の子なり。

㋾舒州の投子和尙。靑原下三世翠微無學の法嗣、舒州懷寧劉氏の子なり。

㋻大隋。大隋法眞、大潙和尙の法嗣、梓州の人、僧問ふ「劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か、」曰く、「壞、」「恁麼ならば卽ち他に隨ひ去るや、」曰く、「隨他去」と、蜀主欽慕して屢々使を遣はして徵せども、辭して遂に出でずと。

㋕洞山曉聰禪師。文殊應眞禪師の法嗣なり。

㋵文殊應眞禪師。雲門下二世、緣密圓明禪師の法嗣なり。

㋟驪龍。韵府に曰く、「河上の家貧しくして緯蕭して食す、其の子河に沒して千金の珠を

た狂すと爲んか、將た癲すと爲んか、將た又大いに貴ぶ可き所あるか、寔に怪しむ可し矣。㋧佛眼遠禪師、龍門に住す、時に一僧、蛇に咬まる。室中擧して云く「既に是れ龍門の僧、甚に因つてか蛇に咬まる。」衆下語すれども契はず。高庵悟曰く「果然として大人の相を現す。」師之を頷ふ。㋤圓悟、昭覺に在つて聞き得て、乃ち歎じて曰く「龍門に此の子あり、東山の道未だ寂寥ならず」と。試みに問ふ、昭覺指して以て寂寥と爲る者は、胡爲の事ぞ哉。將た其れ艱辛枯淡の謂か、將た其れ多衆閙熱の謂か。吾れ聞く、佛法は正に在つて盛に在らずと。然らば數十桶の白飯を擔ひ來つて、幾百枚の㋶無眼の葫蘆を放つて、伊をして狼貪蠶食し了らしめて、伊を驚し伊を策し、伊をして六時行道長坐不臥せしむと雖も、若し其れ一箇も抱道の衲子なくんば、昭覺は必ず言はん、枯淡なり艱辛なりと。縱ひ一箇と雖も半箇と雖も、陰僻陋巷上に漏り、下濕ふ底の三間の老屋裡に在つて、頸を縮め膝を屈して坐すと雖も、專一に宗旨を究明せば、昭覺は必ず言はん、富貴なり盛大なりと。然らば古人の寂寥と爲る者は今人の盛事にして、今人の盛事と爲る者は古人の寂寥なるに非ずや。何ぞ此の極に至るや。㋰黃

---

得たり、翁の曰く、珠は驪龍頷下に在り、子は其の睡りに遭へるなり、其れをして寤めさしめば、子當に齏粉と爲るべしと。」

㋹蓮華峰庵主。蓮華峰は天台山の異名なりとも云ひ、廬山の別名なりともいふ、庵主は祥庵主のことなり、青原下八世の孫にして、金陵の奉先道深禪師に法を嗣ぐ。

㋞四辯八音、佛の有せらるゝ四無礙辯と八種の好音とをいふ、四辯は、一に法無礙辯、二には義無礙辯、三には辭無礙辯、四には樂說無礙辯なり、八音は、一に極好音、二に柔軟音、三に和適音、四に尊慧音、五に不女音、六に不誤音、七に深遠音、八に不竭音、即ち如來一音の上に此の八音の特色を具するなり。

㋡啓論。啓論を云ふなり、即

龍慧南禪師、(ウ)慈明に嗣ぐ。初め泐潭の靈澄の印證を受けて、徒を領じて遊方す、氣を以て自負す。偶〻(ヰ)雲峰悅に會ふ。同じく西山に遊ぶ。夜話、泐潭授くる所の旨を問ふ、師其の要を言ふ。悅曰く、「澄公、雲門の後と雖も、然れども法道異なるのみ。」師異なる所以を問ふ、悅曰く、「雲門は九轉の透餅丹の如く、鐵を點じて金と作す。澄公は(ノ)藥汞銀、徒に玩ぶ可し、鍛に入らば卽ち流れ去らん。」(オ)師怒つて枕を以て之を投ず。明日悅、過を謝す。又曰く、「雲門は氣宇王の如く、死語を甘じて下さん乎。澄公は法あり、人に死語を授く、死語其れ能く人を活せんや」と云ふて卽ち背き去る。師之を挽いて曰く、「誰か汝が意に可なる者。」悅曰く、「石霜楚圓、手段諸方に出づ、子之を見んと欲せば、後る可からざれ。」師默計して曰く、「此れ實に行脚の大事なり。悅は翠巖を師とす、而るに我をして石霜に見えしむ。之を見て得ること有りとも、悅に於て何か有らんや。」卽日に辦裝す、汝看よ古人毫釐も相欺かざることを。今時の如く師承を恃み舊見を執し、氣を張り非を飾つて强ひて自ら欺かば、何の時か了日あらん。後、慈明に見えて其の論を聞くに、多く諸方を貶剝す、件々數ふるに邪解の者を以て



ち論語と一般なり、蓋し論語に三種あり、魯論語（二十篇）、第二齊論語（二十二篇）、第三古論語（二十一篇）にして、後漢の鄭玄に至り、魯論語に本づき、之れを齊古に考へ、以て篇章を定む、今の論語二十篇卽ち之れなり。

(ネ)佛眼遠禪師。五祖法演の法嗣なり。

(ナ)圓悟。克勤禪師なり、佛眼と共に五祖の法を嗣ぐ。

(ラ)無眼の茄瓠。借を云ふのみ、枚は猶ほ箇と云ふに同じ。

(ム)黃龍慧南禪師。卽ち黃龍派の祖なり。

(ウ)慈明。石霜慈明楚圓禪師なり。

(ヰ)雲峰悅。大愚芝の法嗣、南嶽雲峰文悅禪師なり。

(ノ)藥汞銀。水銀を云ふ。

(オ)師。卽ち黃龍慧南禪師なり。

す。皆泐潭密付の旨訣なり、氣索めて歸る。而して悅平日の語を念じ、飜然として改めて曰く、「大丈夫心膂の間、其れ自ら疑礙を爲す可けんや」と云つて、趨つて(ク)明の室に詣して曰く、「慧南、暗短を以て道を望むに未だ見ず。頃ごろ夜參を聞くに、迷行に指南の車を得るが如し。然れども唯だ大慈更に法施を行じて餘疑を盡さしめよ。」慈明笑つて曰く、「書記、徒を領じて遊方す、名叢林に聞ゆ。若し疑あらば衰老を以て卑棄せざれ、坐して商略は願ふに可ならざらんや。」侍者を呼んで榻を進めて且つ坐せしむ。公固く辭す、哀懇愈々切なり。明曰く、「書記、雲門の禪を學ぶ、必ず其の旨を善くせん。(ヤ)洞山三頓の棒の如きんば、喫す可きか喫す可からざるか。」師曰く、「喫すべし。」明、色莊にして言く、「棒聲を聞いて便ち喫す可しと言はゞ、旦より暮に到るまで、鴉鳴鵲噪、鐘魚鼓板の聲を聞いても、亦應に棒を喫すべし、何の時か當に已むべき哉。」(マ)南、瞠して卻く。慈明云く、「吾れ始め汝が師に堪へざらんことを疑ふ、今可なりと云つて拜せしむ。」南、拜起す。慈明、前語を理めて曰く、「脫し汝雲門の意旨を會せば、(ケ)趙州嘗て言ふ、臺山の婆子、我に勘破せらると、試みに其の勘す可き處を指せ。」公面熱して汗下る、答ふることを知らず、(ワ)慚懼して趨も出づ。明日又詬罵せらる。師慚ぢて左右を見て卽ち曰く、「政に解せざる

(ク)明は慈明を云ふなり。

(ヤ)洞山三頓。洞山始め雲門に參す、門問うて曰く、近離何の處ぞ。山曰く、査渡。門曰く、夏、甚麼の所にかありし。山曰く、湖南の報慈。門曰く、幾ばく時か彼の中を離る。山曰く、八月二十五日。門曰く、爾に三頓の棒を放す、參堂し去れ。洞山晩間に入室し、親近して問うて曰く、某甲過什麼の處にかある。門曰く、飯袋子、江西湖南便ち恁麼にし去る。洞山言下に大悟す。

(マ)南。慧南禪師なり。

を以て決を求むるのみ。罵ること豈に慈悲ならんや、法施の式ならんや。」慈明笑ふのみ。是に於て旨を悟つて失聲して曰く、「瀏潭は果して是れ死語。」則ち頌を獻ず、叢林に傑出す。是れ趙州老婆勘破、來由あり。四海如今清くして鏡の如し、行人道を以て讎と爲ること莫し。時に南三十五、汝看よ古人參禪甚だ辛苦することを。恰も鵰鶚の臭卵を踏破して、玉鳳乍ち躍出するが如し。是に於て㊀楊岐黄龍の二派、燕尾の如くに別る。㊁眞淨和尚初め香城に往いて、上藍の順和尚に見ゆ。順問ふ、「甚の處よりか來る。」師云く、「黄龍より來る。」曰く、「黄龍近日何の言句か有りし」と。汝看よ、若し今時に似たらば、黄龍近日幾灶の香を守り、幾卷の經をか誦し、何の佛を禮し何の戒をか持つと問ふ可きに、打頭に何の言句か有りしとは何ぞや。師曰く、「黄龍近日州府委して、黄檗の長老を請す。」垂語して曰く、「鐘樓上に念讚し牀脚下に菜を種う、語を下し得て契はゞ便ち往いて住持せよ」と。又見ずや、古、百丈大師因に司馬頭陀、湖南より來つて師に見えて曰く、「㊂潙山は奇絶なり、千五百衆を聚む可し。」師曰く、「吾が衆中一轉語を下し得て出格ならば、當に與へて住持せしむべし。」卽ち淨瓶を指して



㋾趙州勘婆。因に僧、婆子に問ふ、台山の道甚れの處に向つて去る。婆云く、驀直去。僧纔に行くこと三五步、婆云ふ、好箇の師僧、又恁麽に去る。後僧あり、州に擧似す、州云ふ、待て我れ去つて儞が與に、這の婆子を勘過せん。明日便ち去つて亦かくの如く問ふ、婆も亦かくの如く答ふ、州歸つて衆に謂つて曰く、臺山の婆子、我れ儞が與に勘破し了れりと。

㋻慚惶。恥づるなり。

㊀楊岐。石霜楚圓禪師の法嗣、楊岐派の祖なり。

㊁眞淨和尚。黄龍南の法嗣、克文禪師なり。

㊂潙山。支那湖南省長沙府寧鄕にあり、周圍百四十華里、潙水の源をなす、靈祐此の山に住す、故に又潙山と號す。

問うて曰く、「喚んで淨瓶と作すことを得ざれ、汝喚んで甚麼とか作す。」時に華林第一座たり。則ち曰く、「喚んで木楔と作す可からず。」師肯はず。時に潙山靈祐禪師、㋐典座たり。則ち問ふ、「祐、淨瓶を踢倒す。」師笑つて曰く、「第一座、山子を㋚輸却せり。」祐遂に往く。若し今時をして一員の長老を擇ばしめば、姓氏如何、出生如何、負擔の重輕如何、親族の貧富如何、詩は如何、文は如何、何某は面具好けれども長少しく低し、何某は長高けれども面具宜しからず、彼は筆墨佳し、此れは辯才足らずと道つて、許多の無明を長ぜん。而るに如上の屎尿を打せず、直下に一句子を見る、寔に貴ぶ可し。時に勝首座曰く、「猛虎路に當つて坐す。」黃龍紱に去つて黃檗に住せしむ。」順覺えずして曰く、「勝首座一轉語を下し得て、便ち黃檗の住を得たり、佛法は未だ夢にだも見ざること在り。」師言下に於て大悟して方に黃龍の用處を知る。古、參玄の衲子は寺門の繁興を逐はず、多衆の圍繞を尋ねず、此の大事を以て懷と爲す。今時は奴郎辨ぜず玉石分たず、何某の和尚は衆を憐むこと赤子の如く、何某の長老は佛を禮するを以て眼目と爲す。彼は日中一食、此れは長坐不臥、寔に肉身の古佛なりと。可惜許、昔、㋖密庵咸傑禪師は閩人なり。初め嶺を出でゝ婺州の智者に至る。偶々暄を負ふ次で老宿あり、問うて云く、「上座此の行、何の處にか去る。」云く、「四明の育王に㋜佛智和尚に相見し去る。」老宿曰く、「世

㋐典座。六知事の一、衆僧辨食を掌る役。
㋚輸却せり。即ち第一座華林は潙山靈祐に潙山の山を差し上げたと云ふ程の意なり。
㋖密庵。應庵曇華禪師の法嗣なり。
㋜佛智和尚。圓悟勤の法嗣、明州育王佛智端裕禪師、紹興府の人なり。

衰へたり、後生家行脚例そ耳を帶びて眼を帶びず。」傑曰く、「何の謂ぞ。」老宿云く、「今、育王に一千の來衆あり、長老日に接陪を逐ふて暇あらず、豈に工夫着實の汝が輩の爲に機を發すること有らんや。」傑、淚を下して曰く、「若し此の如くならば、某今何の處にか往かん。」老宿云く、「此去つて衢州の明果に華匾頭あり、後生と雖も見識超卓なり。汝宜しく之に見ゆべし。」傑敎に依つて華に往く。四年にして千聖の命脈を窮め盡す。今時、粥飯の濃厚を逐ひ、寮舍の穩便を尋ね、生死、懷に掛けず、參玄念と爲さす、㋱麞の行くが如く、蟻の聚るが如くなる者と天地懸隔す。五祖演和尙、衆に示して云く、「某、十有餘年、海上に參尋して數人の尊宿に見ゆ。自ら謂へり、了當すと。㋯浮山圓鑑の會下に到るに及んで、直に是れ開口不得、後白雲門下に到つて一箇の鐵酸豏を咬破す、直に得たり百味具足することを。且く道へ、豏子の一句、作麼生か道はん。」乃ち道く、「華發いて㋛鷄冠早秋に媚ぶ、誰が人が能く染む紫絲頭、有る時は風動いて頻に相倚る、堦前に向つて鬪ふて休せざるに似たり。」言ふことを聞かずや、自ら謂へり既に了當すと。佗若し自ら了當すと爲して、圓鑑の室內に入り、白雲の膝下に侍るにあらずんば、殆んど一生を誤り了らん。貴ぶ可し、明眼の宗師、人天の大寶聚なることを。今時自ら了當すと爲して、一生を誤り了るも亦未だ知る可からず。五祖初め浮山遠禪師に參ず。遠一日師に語つて云く、「吾れ老いんたり、恐らくは虛しく子が光陰を度ら

㋱麞。大鹿なり。

㋯浮山圓鑑。南嶽下十世の祖、葉縣歸省禪師の法嗣、浮山法遠圓鑑禪師なり。

㋛鷄冠。鷄冠華、又雁來紅とも云ふ。

ん、往いて白雲に依る可し。此の老、後生にして吾れ未だ面を識らずと雖も、但だ其の㋥臨濟三頓の棒の話を頌するを見るに、人に過ぐる處あり、必ず能く大事を了せん。」師潛かに然りとす、禮辭して白雲に到る。於戲大なる哉、圓鑑の㋪私照なきこと寔に敬ふ可し。今時、一片の死法を授與して、一印に印殺して曰ふ、「汝も亦是の如く、我も亦是の如し。死に至るまで護持して、必ず移易せしむること莫れ。」學者も亦禮拜頂受して、堅に守り横に守つて空しく一生を過し了る、是れ何の顏ぞ哉。彼れ指して白雲に見えしむる者は、門庭の鬧熱を好まず、偏に眞風の地に墜さざらんことを欲すればなり。演祖、始め磨院に在せし日、僧あり、磨の轉ずるを見て、遽に指して以て師に問うて曰く、「此れ神通なりや、此れ㋲法爾なりや。」師、衣を褰げて磨を旋ること一匝す。僧、無語、未だ幾ならざるに、白雲到り來る。師に語つて云く、「數禪客あり、廬山より來る、皆悟入の處あり。伊をして說かしむるに、亦說き得て來由あり、因緣を擧して伊に問ふに亦明め得たり。伊をして下語せしむるに亦下語し得たり、祇だ是れ未在。」師是に於て大いに疑ふ。私に自ら計つて曰く、「既に悟り了る、說くことも亦說き得たり、明むることも亦明め得たり、如何が卻つて未在なる。」遂に參究すること累日、忽然として省悟す。從前の寶惜しく一時に放下す、走つて白雲に見ゆ。雲爲に手舞ひ足踏む。師亦一笑する而已。師後に云く、「吾れ茲れに因つて一身の

㋥臨濟三頓。黃檗禪師に三棒を喫するなり。

㋪私照。自我又は自己に吝ならざることをいふなり。

㋲法爾。本來天地自然の法則に從ふを云ふ、即ち本然、自然不動などに同じ。

白汗を出す、便ち下截の淸風を明め得たり。」貴ぶ可し、演祖纔かに累日の苦吟にして、乍ち三賢四果の堦漸を超え、四七二三の玄蹟に徹す。其の樂說無碍の辯、答ふるときは人意の表に出で、問ふときんば學者氣を喪す。願ふに是れ大丈夫兒、萬夫に傑出する者の懷とする所にして、庸才惰弱の士の望を其の際に斷つ所以の者なり。昔、㋝大禹、四百州の患難を洪水に掃除すと雖も、三五載、多少の人力を費役す。昔、㋜漢高、四百年の洪基を草昧に隆興すと雖も、四十年、許多の生命を傷害す。彼は有漏世間の功業、此れは無漏出世の勳果、天淵杳かに殊なる者に非ずや。有般底の杜撰は、七八輩の部屬を集めて、矯の眸、虎の如く、杭れる鼻、象の如く、公々乎として告げて曰く、「何某の長老の如きは寔に住し、詩は李于鱗に入り、文は袁中郎に効ふ。且つ常住の豐饒なること當時無雙なり。二時の粥飯、三時の點茶點心の席、未だ卷かざるに藥石の板又鳴る。其の授與する所の宗旨は專ら直指の法にして、人をして悟入せしむるゝ寔に芥を拾ふが如し。㋑張三も亦立ろに悟り去つて、李四も亦直に會し歸る。士に農に工に商に、及び屠沽負販の人をさへに、纔かに門閫に入り來つて打徹せざるは半箇も無し。知らず天壤の間、那箇の叢林か之に勝らん。行脚若し此の門に入らずんば、一生錯つて參學の事を廢せん」と。嗟、汝は是れ何の處の㋺墦間の

㋝大禹。舜の攝政たること略二十年、苗族討伐に從ひ、之れを擧退し、舜の崩殂するや王位に昇る。

㋜漢高。漢の高祖なり、蕭何、張良、韓信は皆其の臣なり。即ち秦の三世を亡ぼして天下を一統す。

㋑張三、李四。張氏の三男や李氏の四男の義で、平々凡々の人といふこと、即ち權兵衛、太郎兵衞と云ふが如し。

㋺墦間。墓間、塚間と同じ。

乞兒ぞや。汝が謂ゆる直示は、誰が家の曲調ぞや。芥を拾ふが如く、胡為れぞ其れ易きや。嶺南の秘訣か、濟北の宗要か。此の事若し說き得て足り、敎へ得て成せば、豈に佛祖不傳の妙と道はんや。昔㋩香嚴智閑禪師、潙山に參ず。山問ふ、「我れ聞く、汝百丈先師の處に在つて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと、此れは是れ汝が聰明靈利、意解識想、生死の根本なり。父母未生の時試みに一句を道へ看ん。」師、一問せられて、直に得たり茫然たることを。寮に歸つて平日看過する底の文字を將つて、從頭一句を尋ねて酬對せんと要すれども、竟に得ること能はず、乃ち嘆じて曰く、「畫餅、饑に充つ可からず。」屢々潙山の說破せんことを乞ふ。山曰く、「我れ若し汝に㋥說似せば、汝已後我れを罵り去らん。我が說く底は是れ我が底、終に汝が事に干らず。」師遂に平昔看過する底の文字を將つて燒卻して曰く、「此の生に佛法を學せじ。且つ箇の長行粥飯の僧と作つて、心神を役することを免れん」と云つて、乃ち泣いて潙山を辭す。直に南陽を過ぎて㋭忠國師の遺跡を視る、遂に憩止す焉。一日草木を芟除す、偶々瓦礫を拋つに竹を撃つて聲を作す、忽然として省悟す。遽に歸つて沐浴し、香を燒いて遙かに潙山を禮して讃して曰く、「和尚の大慈恩、父母に逾えたり。當時若し我が爲に說破せば、何ぞ今日の事有らん」と。儞看よ從上の宗師、點滴も亦施さゞることを。是れ法を惜しむに非ず、其の實は人を惜んでなり、今時往々に

㋩香嚴。潙山の法嗣なり。
㋥說似。說示に同じ。
㋭忠國師。南陽慧忠禪師なり、唐の肅宗上元二年勅を奉じて千福寺の西禪院に住す、盛んに四衆を化す、大暦十年十二月九日寂す、勅して大證國師といふ。

頑賤無智一縷の香にだも堪へざる底の癡鈍の漢子を捉へて、提携教示、牛頭を按じて草を喫せしめ、腋を鑽つて翼を出し、許多の屎尿を打し畢つて、印定許可する底と霄壤遙かに異なる者に非ずや。若し人あつて、我れ能く法を說いて人をして悟入せしむと言はゞ、須らく知るべし、斯の人眞正の導師に非ず、斯の人本より是れ參究底の人に非ざることを。縱ひ汝鶖子の智あつて滿慈の辯才を具ふるも、從上の宗師、父子不傳の妙如何が觜を下すを得ん。古、慶喜尊者の如きんば、佛の親戚にして髫齔より佛に隨つて出家し、如來の常隨侍者たり。其の親近薰炙する者、大凡そ幾許年ぞ、其の開示教諭豈に淺近ならんや。然りと雖も、終に打發すること能はず、世尊入滅の後、大龜師兄の所に在つて、初めて喪身失命す。願ふに其れ上古は大いに難く、近世は大いに易きことは何ぞや。蓋し上古は根鈍く人薄くして、近世は人利に根熟すと道はんか、將た復た其の提携教示の巧妙、近世に及ばずと爲んか。神光は其の臂に刃し、石霜は其の股に錐す、脇、席に着けざるあり、足、閫を越えざるあり、何ぞ其れ難き耶。若し其れ近世の易きが是ならば、上古の難きは非ならん、上古の難が是ならば近世の易は非ならん。大丈夫兒透過せずんば則ち已まなん。若し其れ大口を開いて透過すと道はゞ、縱ひ艱辛刻苦して三四十年を經るも、須らく必定決定して、古人所證の田地に到らんと要すべし。何ぞ容易に汝が芥を拾ふが如くなる底の輕薄の凡解を恃んで、一生錯つて半醒半醉にし去らん耶。是れ齊人の墦間に走つて、

◯髫齔。幼年時代を云ふ、髫は頂後に垂れる髮、齔は齒のぬけ變るを云ふ。

速飽を計る底の窮兒に非ず麼。是の故に寶藏論に云く、「夫れ進道の由、中に萬途あり、困魚、灘に止り、病鳥、蘆に棲む。其の二の物、大海を識らず、叢林を識らず、人の小道に趨る、其の義も亦然り。此れ謂つ可し、久切中止の如理に達せず、大を捨て小を求めて、半路に依止し、少しく安じて自ら安を以てし、大に安じて安きに及ばずと。」謂ゆる大とは何ぞや。眞正見性、大法の淵源に徹底する底の透過の道流なり。小とは何ぞや。見聞覺知を認得する底の相似の禪徒なり。於乎、肇公の如き誠に眞正大乘の法器なり。姚秦の時、祖師未だ西來せず、禪道未だ東漸せざるに、渺茫たる教海の中流に獨立して、至大至正の高論を立つ。今時の禪徒に比するに、金鍮奴郎遙かに殊なる者に非ず歟、寔に敬しつ可し矣。石霜の淸素侍者は閩の古田の人なり。晩に湘西の鹿苑に遁る。閑淡を以て自ら牧す。(ト)兜率の悦公、時に未だ出世せず、之と室を隣る。客あり(チ)生荔支を惠む、悦、素に命じて曰く、「此れ乃ち老人が鄕菓なり、同じく飽す可し。」素慨然として曰く、「先師世を去つてより之を見ず矣。」悦從つて之を問ふ、「師は誰とか爲る耶。」對ふるに慈明を以てす。悦乃ち閑に乘じて客を致して其の緒餘を欵く。素因に問ふ、「子曾て何人にか見ゆる。」悦、眞淨文和尚を以て之に告ぐ。素曰く、「文又誰にか見ゆる耶。」悦曰く、「黃龍南禪師。」素曰く、「(リ)南匾頭、石霜に在ること久しからざるに、其の道盛なること此の如し。」悦益々駭異す、尋で香を袖にして咨扣す。素曰く、

(ト)兜率の悦公。南嶽下十二世寶峰克文の法嗣、贛州氏の子、從悦眞寂禪師なり。
(チ)生荔支。龍眼肉(植果)なり。
(リ)南匾頭。慧南禪師を云ふ、匾頭なるが故に、しか云ふか。

「吾れ福鮮く緣寡し、豈に人の師たる可けんや。但だ子が見解試みに吐露せよ看ん。」悅即ち具に陳ぶ。素曰く、「只だ佛には入る可くも魔には入る可からず。須らく知るべし、古德の謂く、「末後の一句始めて牢關に到る」」と。悅對へんと擬す。又遽に問ふ、「無爲を以て如何が說かん。」悅又對へんと擬す。素忽ち高笑す。悅恍然として得ることあり。數月にして素乃ち印可す。仍つて之を戒めて曰く、「(ヌ)文、子に示す者は皆正知正見なり、然れども之を離るゝこと太だ早うして、其の妙を盡すこと能はず。吾れ今、子が爲に點破して子をして受用して、大自在を得せしむ。佗日切に吾れに嗣ぐこと勿れ。」師後に眞淨に嗣ぐ。後來(ル)無盡、兜率に見ゆるに末後の句の事を擧す。相を罷るに逮んで歸宗を過る。(ヲ)夜話、此れに及ぶ、眞淨輙ち怒つて曰く、「是れ何の嘔血の禿丁ぞ、脫空謾語す、豈に信受す可けんや。」遂に語を終らず。崇寧三禩に逮んで、寂音尊者、無盡に峽州の荆溪に謁す。語つて曰く、「惜しいかな眞淨之を知らず。」音曰く、「相公は只だ淸素末後の句を知つて、眞淨の眞藥現前するに及んで覺むること能はず。」盡驚いて曰く、「果して此れありや。」曰く、「疑はば參せよ。」盡、言下に於て頓に師の用處を見る。遂に香を炷いて歸宗を望み悔謝す。即ち家に藏むる眞淨の肖像を取つて、展拜して讃を其の上に題して以て寂音に授くと。噫、悅能く素に扣いて其の轍跡を忘るゝこと能はず、無盡從つて其の中に墮することを致す。寂音、眞淨瞑眩の藥を發す

(ヌ)文。眞淨文和尙を云ふなり。
(ル)無盡。無盡居士、張商英なり、嘗て佛果圜悟禪師を請じて雪竇頌古百則の評唱を爲さしむ、今の碧巖集是れなり。
(ヲ)夜話此れに及ぶ。即ち素者と悅公との前話をいふなり。

るに非ずんば、何ぞ能く無盡膏肓の疾を愈さんや。信に宗師の爲人各々惠利あり、豈に其の涯際を測り易からんやと。予謂く、「是は則ち是、可惜許。眞淨瞑眩の眞藥、寂音に點出せられて、其の能恐らくは敗鼓の皮にだも及ばざること在らん乎。」嗚呼、居士の如きは間出の君子にして、官、宰補に登り、壽、百齡に近し。君信じ臣貴び士敬し民懷く。智鑑高明識量寬大、實に王佐の才なり。寂音も行いて見え、妙喜も遙かに尋ぬ、何の不足の處あつてか眞淨詬罵惡發の音を聞いて、星夜に歸宗を望んで焚香禮拜し、悔謝することは何ぞ哉。須らく知るべし、我が祖宗門下、大いに怪しむべき事あることを。(ワ)百丈大師は馬祖に鼻端を捏住せられて、乍ち安身立命の處を失し、濟北は檗嶠に打着せられて家國喪亡し、(カ)風穴は南院に折挫せられて面門を打失す。象骨は(ヨ)巖頭に一喝せられて膽魂驚落す。雲門は左脚を逼折せられて魂飛び魄散じ、(タ)香嚴は片瓦竹根に觸れ、(レ)石霜は汾陽に口頭を掩却せられ、(ソ)翠巖は死片に壓倒せられ、佛果は艶詩を讀んで涙落ち、大原は笛聲を聞いて心死し、妙喜は南風の毒熱に觸る。此れ各々調御、雪山に在つて惡星に照殺せらるゝ底の消息を打失す。其の得力の處、魔外も窺ふこと能はず。(ツ)踈山和尚初め香嚴の言發、聲に非ず、色前、物に非ずと道ふを聞いて、自ら謂く、「底に徹して了當す」と。辭す

(ワ)百丈大師云々。碧巖五十三則にあり。

(カ)風穴。南嶽下第七世の孫、南院慧顒の法嗣、風穴延沼禪師なり。

(ヨ)巖頭。泉州の人、少時靑原の誼公を禮して落髮す、後、長安の寶壽寺にありて具戒習、後、雪峰義存(象骨)、欽山文邃等と友たり、後、德山宣鑑に嗣法す。

(タ)香嚴。潙山靈祐の法嗣。

(レ)石霜。道吾圓智禪師の法嗣。

(ソ)翠巖。雪峰義存の法嗣、湖州

るに及んで約するに師兄住處あるを待つて、來つて薪水を見んと。一旦㋧明招に觸破せられて、初めて祖師門下の事あることを知る。歸り來つて香嚴の示衆を聞くに、貴介公子の田夫の說話を聞くが如くにして、即ち嘔吐の聲を作す。初めは香嚴を以て、此の中に人ありと爲して、師資の約を爲し、纔かに宗旨を知るに及んで、大いに奮時に異なれり。須らく知るべし、吾が祖宗門下に參禪、換骨の靈驗あることを。彼れ若し初め懶安の苦藤を攀づるに非ずんば、何ぞ大器を成ずることを得ん。昔、㋤龍牙、臨濟に打着せられて、即ち言く、「打することは打するに任す、要且つ祖師西來意なし。」㋶翠微に打着せられて又言く、「打することは打するに任す、要且つ祖師西來意なし。」是れ他の見處、上諸佛なく下衆生なく、頭、天を戴かず、脚、地を踏まず、盡乾坤大地一箇無孔の鐵鎚。是の故に明覺之を名けて能所共に泯する底の一枚の瞎龍と爲す。恨むる所は夢にも曾て臨濟を見ること能はず。是れ即ち佛祖も醫し難き底の大病、往々に此の一塊の屎丸を得るときは、祖師の面目と爲し、衣內の寶珠と爲す。可惜許。知らず是れは此れ㋰韶陽、平生人の爲に拔卻する底の不淨の釘楔なることを。縱ひ



の人、明州の翠巖に止り、大いに法席を張る、後に永明大師と諡す。

㋡疎山和尚。洞山良价禪師の法嗣、吉州新淦の人、身相短陋、而も禪機鋭俊、時人呼んで矬師叔、矮闍梨といへり。

㋧明招。羅山濟閑の法嗣、明招德謙禪師なり。弟を化するに敏捷、當る者なし。

㋤龍牙。龍牙居遁、洞山良价の法嗣、撫州南城の人なり、龍牙山の妙濟禪苑に住す、證空大師の號を賜ふ。徒衆集まるもの五百人と。

㋶翠微。丹霞天然の法嗣、翠微無學禪師なり。

㋰韶陽。雲門文偃禪師の別名、雲門は韶州の地にあるを以ていふ、大明一統誌に「韶陽山は韶石山の南に在る故に名づく」と、即ち地名を以て人名にしたるなり。

釘楔なることを覺知し、漫に之を除去せんことを欲すと雖も、彼の波旬、幾多に挂着せらるゝ底の死狗の㋒華鬘の如し。波旬初め幾多に挂着せらるる時、自ら謂らく「莊嚴光明、梵釋も亦羨むに足らず」と。載ち歡喜し載ち踊躍し、歸り來つて天宮に入る。時に宮妃嬪御、鼻を掩うて走り㋼顙を皺めて避く。此に於て初めて人狗蛇の三屍なることを了知す。臭爛穢惡、氣索き魂蕩して憤悶憂惱す。學人も亦此の如し。初め宗師に說破せられ、授與せられ、許可せられ、印定せらるゝ時、自ら謂らく「志願成辨し大事了畢して、佛祖と雖も羨むに足らず」と。如何せん日往き月深うして、見處偏枯動靜矛盾して、暗頭は明となるに似たりと雖も、明頭、半點の力を得ず。鐵枷金鎖狐窟鬼窟、正眼に看來れば、滿地一場の愁にして、祖師門下の事は㋨驢年にも曾て夢にだも見んや。覺えず彼の焦芽敗種の部屬と爲んや。是れ寔に死狗の華鬘に非ずして何ぞ哉。走つて一四天下を遶ると雖も、徒に臭穢を增長する而已。何の時か脫下し去らん。之を爲さんこと如何。若し人從上の諸老新證の田地に到らんと欲せば、豈に其れ難からん哉。先づ須らく㋔狗子佛性の話に參ずべし。歲月を重ねて梁跟せずんば、必ず得力の處あらん。捨て了つて箇の難透の話頭を見よ、必定、古人受用の處、悟解了知の間に在らざることを見得せん。息耕老師初め

㋒**華鬘**。天人の頭上に頂ける華美なる髮飾、また金屬にて作れる扁平なる輪に蓮華等の造花を綴りて、垂れたる佛前の飾具なり。

㋼**顙**。額を云ふなり。

㋨**驢年**。十二支になき年にして、蛙年、蚯年と云ふに同じく何時迄立つても來ぬ年故、俗に云ふ太陽が西から出た時といふに同じ。

㋔**狗子佛性**。趙州、狗子に就いて佛性の有無を裁判せし有名なる公案なり、無門關第一則にあり。

古帆未掛の話を了悟す、以て足れりと爲す、壽塔の話を看ること四年、初めて大器を成就す。大地も載せ起さざる底の見地に留住せば、茫々たる死水裏、鴉も亦顧みざる底の一塊の臭爛屍。誰か請じて十刹の大宗匠と爲ん哉。玆に最後向上の秘訣あり、從上錯つて傳する底甚だ多く、胡亂にし去る底少からず。㋨宗峰妙超大師云く、「朝に眉を結び、夕に眉を交ふ、我れ何似生。」此の語極めて難信難解なり。大定聖應國師云く、「㋳柏樹子の話に賊の機あり。此の語極めて難透難入なり。貴ぶ可し㋮兩僚慈、此の換骨の祕要を留めて以て有力の兒孫を待つ。寔に眞正法窟の爪牙なり。若し人、參窮して一回白汗流れば、爾に許す息耕東海日多の孫と稱することを。若し又擬議不來ならば言ふこと莫れ、我れは是れ華鳩國師の兒孫なり」と。今時諸方往々に道ふ、「言句は是れ奴子婢子の事なり、我れ彼の奴子婢子の事を要せず」と。錯錯。二大老若し其れ奴子婢子ならんか、我れ亦奴子婢子ならん而已。我れ爾が貴介公子なることを把らず、爾が奴子婢子なることを嫌はず。既に是れ二大老の兒孫、若し二大老の說話を透過せずんば、何の憑據あつてか正法海裏の片鱗と稱することを得ん。未透底の士は爾が得力不得力、純一非純一を管することを莫れ。唯だ單々に話頭を擧揚して、間斷なからんことを要せよ。譬へば十圍の樹を伐るが如し、一斧斤にして倒るゝ所以の者に非ず、刀々怠らざるときは其の倒るゝ

㋨宗峰妙超大師。大德寺の開山、俗姓は紀氏、播磨の人なり、延元元年十二月示寂、朝廷大慈雲匡眞國師を加賜す。大定聖應は妙心關山をいふ。
㋳柏樹子。趙州柏樹子の公案なり、僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來の意、州曰く、庭前の柏樹子と。
㋮兩僚慈。兩僚宿に同じ。

ことを欲せざるも、俄然として倒る。其の倒るゝ時に當つて、其の近遠の子弟を傭ふて、力を勠せて之れを拒がんと欲すと雖も立つ可からず。六尺の身を棄つるが如し、一不善にして亡ぶる所以の者に非ず、行々休せざるときは其の亡ぶることを好まざれども、卒爾として亡ぶ。其の亡ぶる時に當つて、上下の神祇に向つて涙を含んで救ふと雖も、及ぶ可からず。一則の話を窮むるが如し、一擧起にして了ずる所以の者に非ず。參々廢せざるときは、則ち了ずることを要せざれども、忽爾として了ず。其の了ずる時に當つて、十方の波旬に命じて障礙せしめんと雖も、窺ふこと能はず、豈に快ならざらんや。若し彼の樵者の如き、纔かに一二刀を下して、其の倒れざることを憂へて張三に問ひ、纔かに三四刀を下して、倒れざることを憂へて李四に尋ぬれば、何の日か彼の木の倒るゝことを見んや。學道も亦異ならざらんか。吾れ今己見を誇り人我を逞しうするに非ず。三十年前正受老人、嗟悼し慨念する所の件々なり。此の事を開示する毎に、老淚數行、衣襟を濕して、吾れ今、其の附託の丁寧を追憶するにあらずといふことなし。身の置く所なきが如し。心肝を傾け盡して諸君に告報する者は、願はくは努力再び祖庭孤危の眞風を挽回し、永く禪門最上の宗趣を隆興せんことを。老來を待つて予が滿地一場の愁を說くに慣るゝこと莫れ。久立大衆伏して惟れば珍重。

元文第五庚申歲㋐孟正下浣

㋐孟正。孟春正月のことを云ふ、孟は始め、又は大なり。下浣は下旬を云ふ。

# 息耕錄評唱剩語

息耕錄第一報恩光孝禪寺語錄冬至小參に云く、「擧す。五祖演和尙、衆に示して云く、『但只だ菓子を喫せよ、誰ぞ樹の曲彔を管せん。』師云く、『者の無厭生の老翁、與麽に來處を知らざることを得たり。報恩は菓子の貴賤、價數の高低、也た諸人一々知得せんことを要す』」と。鵠林曰く、『兩箇の惡情悰、一箇は碧瞳胡、板齒を齩くことを知つて、黃面老母胎に臨むことを會せず。一箇は巖頭笑底に似て、㋑玄沙の道ふ底に如かず、點檢し看來れば共に是れ㋺膰俎を大夫に致さず』と。」息耕錄第二寶林錄中に曰く、「㋩首山省念禪師綱宗の偈に云く、『咄哉巧女兒、梭を擲つて織ることを解せず。看よ佗の鬪鷄の人、水牛も也た識らず。咄哉拙郞君、巧妙人の識る無し。鳳林關を打破して、靴を着けて水上に立つ。』今時、諸方異解紛々たり。或は五位を執つて配合し、賓主を引いて粘着す。一箇も把るに足らず、大いに後人の智眼を瞎却す。中に就いて龍抄と稱する者あり、恣に自家の盲解を運出して、之を書し之を梓にす、甚だ人の悟門を妨

㋑玄沙云々。達摩東土に來らず、二祖西天に往かず、又盡十方世界是れ一顆の明珠等の語、玄沙道ふとして叢林に知らる、是等を云ふか。

㋺膰俎。膰は「ひもろぎ」にて燒肉なり、宗廟に供する火熟せる肉なり、俎はまな板にて、庖厨の役を大夫に致さしむるにて、筋違なるを云ふなり。

㋩首山省念禪師。風穴延沼の法嗣、萊州の人なり、首山に開法して第一世と爲る、大衆常に千指に餘る、宋の淳化四年寂す。

ぐ。予、從頭一筆に勾下して、後人をして隻字も照顧せしむることを欲せず。且つ又大いに怪しむ可き者あり。汾陽の註解と稱する者數十字、句每に之を履穿せしむる者あり。看來れば、龍抄と一狀に領過す可き者に似たり。顧ふに是れ汾陽和尚未だ首山に見えざる以前に註する者か。將又後人譌に竊註して、名を汾陽に假る者か。原ぬるに夫れ汾陽善昭禪師は首山の鍾愛、石霜の㋥恃怙、智鑑高明、識量寬大、時に西河の獅子と稱す、豈に容易ならん哉。師若し首山の三指を握つて註せば、星夜に香を炷いて西を望んで大展九拜して以て罪を謝せん。師若し首山の兩指を握つて註せば、㋭長沙道ふ底。息耕云く、『首山自ら謂へり、臨濟の正傳を得たり』と、却つて野干鳴を作して、天下の兒孫をして箇々拕泥帶水ならしむることを致す。予一見して覺えず寒毛卓竪す。是れ大いに子房が遙かに沛公を目送し了つて、歸り來つて竊かに棧道を燒却する者に似たり。然りと雖も、夢にも曾て首山を見ることを得んや。何が故ぞ、首山は是れ黃檗の第六世なればなり。」

息耕錄第八解夏小參に云く、「風を呼び指を嘯く、傍若無人、百數群を成して王化に屬せざる。言薦賞勞するに及んで、便ち暗中に物を取るが如し。其の間一箇半箇あり、因を知り果を識る底、額角頭上に頂在して、敢て妄りに走作することあらず、驀然として蹉却す。一箇の蟻子を蹈殺せば、乃ち話

㋥恃怙。又は怙恃と熟語す、兩字共「たのむ」と訓ず、父母の異稱に云ふ。詩經に「父無し何ぞ怙まん、母無し何をか恃む」とあるに本づく。

㋭長沙道ふ底。長沙景岑和尚偈あり、曰く、「學道の人眞を識らず、只だ從來識神を認むるが爲に、無始劫來生死の本、痴人喚んで本來の人となす。」

頭圓かならず、只だ西天の廣額屠兒、屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりと云ふが如し。又作麼生。出で來つて一轉語を下し得ば、別に香を炊くことを管取せよ。」風を呼び指を嘯くの四字、諸鈔及び古今の註解紛然たりと雖も、各々諦當ならず。是の故に古來、息耕錄中最後の難處と爲す、宜なるかな。先軍倅けずんば後陣知る可し。上頭莽鹵なるが故に、下文轉た莽鹵なり。予讀んで此に至つて苦吟する者一夜、爆然として見徹す。恰も竹を劈くこと三節、節々及を待つが如し。下面數行の難處、煥乎として掌上を見るに似たり。歡喜に堪へず、書して以て諸子に授く。是れ佗なし、從前の諸老、國字の板點に欺誑せられて、見得透すること能はず。謂ゆる呼風嘯指とは呼喚風詠、嘯歌指揮の義なり。言く、諸方の叢林一員の宗匠あり、法幢を建てゝ眞施を行ずるの日、百數、群を成し、萬指、頭を聚む。其の初め(へ)保社に入る時、肅容規步(ト)油を擎ぐるが如く、氷を蹈むに似て、眞正參禪、生死を以て念と爲し光明を以て懷と爲る者に齊し。既にして纔かに月餘に向として徐に少く、寮舍の廣陜鍋釜の大小を知るときんば、乍ち敖放管脫、縱橫不羈、庭階を涉つて呼喚し、廊塔を遶つて風詠し、松根に傍ふて嘯歌し、廊廡に立つて指揮し、規に循はず矩を守らず、王化に屬せず、傍若無人。知

(へ)保社。仲間、組合といふが如し、克賓維那の語に「道の保社に入らず」とあり、又舊唐書志の「四家を隣とし、五隣を保とし、保に長あり、以て相禁約す」と、即ち是れなり。

(ト)擎油。涅槃經二十二に、此の譬喩委しく出でたり、即ち油鉢の油の滴らぬ樣、身命にかけて護持することにて、俗に云ふ後生大事にすることをいふ。

(チ)盤山。盤山寶積、南嶽下第二世の祖、馬祖道一禪師の法嗣なり。

ん ぬ他は是れ凡か是れ聖か。掣風掣顛、(チ)盤山の風標あり、(リ)普化の體裁あり、甚だ痛快なり。悲しむ所は尅期聚證、言薦賓勞の日に到つて、俄かに首を低れ肩を窄めて、平生の高笑濶論、毫釐も使ひ得ること能はず。戰戰栗々、半點の氣力なく、悚々惶々、暗中に物を取るが如し矣。於、息耕纔かに四字の葛藤を下し得て、一箇輕薄の衲子を模寫して、束ねて諸人の面前に拋出す、寔に妙ならず哉。息耕面前、儞が縱横不羈を取らず、儞が綿々密々を要せず、只だ眞正透過底の漢子を求む。是の故に、此の一段の嶮處を擧す。時の人錯つて看過する底甚だ多し。既に是れ屠兒廣額、屠刀を放下して云く、「我れは是れ千佛の一數なり」と、又作麼生。謂ふこと莫れ、此れは是れ修證に渉らず悟明を假らず、人々本具實成久遠の道理を說き來ると。若し果して者般の見解ならば、屠兒は且く置く、刀子も亦見ること能はず。何が故ぞ、臍堂自ら千均の弩を養ふ。枉げて虞人鼻孔の長きことを恐る。

息耕錄第六黃檗噇酒糟の漢。鶴林云く、「黃檗大師、五羊の皮を綴つて以て千狐の腋を擬す。者般の僧、信越が才有りと雖も、如何せん兩處に功を見ざることを。何を將つてか驗と爲ん。(ヌ)力、山を拔き

(リ)普化。盤山和尙の法嗣、常に一鐸を振りて曰く、「明頭來也明頭打す、暗頭來也暗頭打す」と。

(ヌ)力云々。楚の項羽の詩に、「力山を拔き、氣世を蓋ふ、時、利あらず、騅逝かず、騅の逝かざるは奈何すべき、虞や虞や汝を奈何せん」と。項羽は天下の英雄、漢の高祖と戰ひ、百戰九十九勝、夫れ最後の一戰に於いて、一敗地に塗みれ、名馬騅も行かずして、遂に九十九勝も空しくして自刃す、修行は百尺竿頭進一歩の所、須らく一隻眼を着するを要す。

氣、世を蓋ふ。雖行かず雖行かず。虞子々々爾を如何せん。」

息耕錄續輯龍抄第八。師、靈隱の鷲峰塔に在つて、世諦を杜絶して、衲子請益すれば、遂に三問を立てゝ、各々着語せしむ。

一には己眼未だ明かならざる底、甚に依つてか虚空を將つて布袴と作して着く。

二には地を劃して牢と爲す底、甚に因つてか者箇を透り過ぎざる。

三には海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ。

鵠林曰く、「息耕老師末後、三行の毒涎を吐出して、以て命を負ふ底の兒孫を待つ。恰も ㋸武侯が預め八陣を敷いて以て巴蜀を護るに似たり。」謂つ可し親切なりと。右問の三章、章毎に二句。予、彼の錄中を一見するに、各章の左邊に於て、下語に類する者三十字、朱字以て之を書して、後生に附する者在り。或は曰く、「是れ近世、何某の宗匠講錄の次で、註解する所の者なり。江湖瞻撥の龍象、記寫して以て之を秘重す」と。予、此に於て覺えず大息して曰く、「嗟、已んぬるかな、息耕東海日多の兒孫、既に今、土を掃つて滅絕す。譬へば ㋾龍泉大阿の如き冷焔、膽を照し祥光 ㋻斗を

㋸武侯。諸葛武侯、卽ち孔明亮なり。蜀の後主を助け、涙を振つて出師の表を呈し、消長の理を解き、丹心の忠誠を披瀝す、八陣は世に謂ふ羽鱗鶴翼の陣法を云ふ。

㋾龍泉大阿。支那名劍の名なり、故事は晋書列傳にあり、大意に曰く、「初め吳の未だ滅びざる時、此の氣ありて斗牛の間を射る、雷煥之れを相し、銘劍の氣なりと、便ち煥を豐城の令となり、其の獄の基を掘り、石函を得たり、果して中に雙劍を得たり、一を龍泉と名づけ、他を大阿と稱せり」と。禪書殺活の機用を說くの論として用ふ。

㋻斗。北斗星なり。

射て、群妖悲しみ走り、閑鬼驚き潜むも、乍ち野人奴隷の手に落つるときは、柴を刈り篁を劈いて霜刄折れ碎け、終に柴刀にだも及ばず。是れ寔に世に劍を知る人無きの謂乎。者箇三箇の問頭、其の峻しきこと九虎の關に過ぎたり。若し恁麽にして透過し、分ありと爲ば、跛鼈、禹門を望む者なり。恐らくは關吏の腹を抱へて大笑する有らんか。我れ今、諸方を輕忽するに非ず、只だ恨む此の文の喪盡せんことを。參玄の上士、請ふ焉を顧へ。」

國譯白隱禪師息耕錄開筵普說　終

# 息耕錄開筵普說印施解

寛保第三癸亥臘八之齋後、有客、告軾曰、鵠林近有普說印施、諸方往往以師爲釣利名者、謗熖妬火、將炙師、果而然乎、將又別有端由乎、盍作說救此蹇焉、軾曰、嗟有其事、遭世罔極、師獨離此咎矣、師若有者般醜態、豈其住庵八十箇燕領虎頭、仰望遺世者哉、孰爲敬事執饑寒矣、是從頭軾所識破者也、居吾語儞、師元文第五庚申之春、依江湖諄請、擊節息耕擊壤古曲者一場、其前年己未冬十月、少林忌齋後、四顧住庵數十肩破袈裟、勠力定籌、預營辨一會備老屋傾側者扶起、古井塡渴者鑿開、戶牖敗落者釘釘着、梁棟朽頹者懸掛着、澤徹沙嵩諸子、振精神困苦、休走遐方化菽麥、忠廻近里乞菜蔬、其餘更憩而互相輔翼、晝間夜陰、作務紛絮、師且避之、携純與航、走遁白水、淹留者旬餘、次轉藤皐、入石氏之隱處、留滯旣向月餘、其中間趣請接客之外、喚枕甘睡、鼻雷囂囂屋壁振搖、梁塵飛廻、恰如巴蛇飽肉偃臥時、來客皆驚異矣純・航二子患之、哀求曰、忠兄有附託、大師願爲策進後學、唱普說一編、書而歸示同火、以慰此間勞倦、師微笑頷之、雖頷不果、二子更懇求、而如赤子責、於此師恬如、而收目唱者、或五行或十行、隨唱航筆記之、純訂正之、師任心所浮唱之、不顧次序、航又隨唱書而不倦、師貪共忘合殺、卷到石氏隱處、終得五十來紙、居士曰、我聞、萬菴法語、妙喜長書、佛眼普說、爲天下三絕、不知、從上諸老、有添枝牽蔓、如此叨叨緉緉底麼、萬庵法語乎、妙喜長書乎、相倶拍手大笑而已、

既而仲冬書雲前、一日師卽歸院、開茶筵慰勞、諸子羅圍、茶話怡悅、純・航二子並坐、燈下讀之、
諸子信受、勸踊忘蹈舞者累日、海會正向散筵頃、闔衆羅拜請梓之、師急呼丙丁童、諸子恐畏
卷而懷矣、向後每得閒暇、從臾者若干次、師總不顧者、蓋三年于玆矣今歲寬保癸亥秋、忠譯
二上座、入室曰、如普說者梓之、則師有二患矣、不梓之則道有一害、蓋試論之、夫抱道士者、愛
道所存、而不見有文字、文字人者點檢文字刁刀、總不知道所存、必惹魚魯譏、是向所謂所以
爲師患一也、吾聞、樹秀于林、則風必摧之、行高于人、衆必憎之、今若梓之、師其抽一頭地於衆
者也、衆必接踵切齒妬害之、是向所謂所以爲師患二也、若夫不梓之、則後生晩輩爭傳寫之
制不休、各舐筆墨、遂棄廢道業、是向所謂所以道有害一也、上頭二者、師且忍受則是可也、後
頭一者、疲役多少後昆、戕賊許多道情、必惹譏於識者、自初不說止矣、我輩爲師大所嘆惜之
大故也、譬如輓推於車、刻之功還孰若妙喜一炬焉、師曰、予亦知之、雖然睡後暫時破讒語、有
諸記失、有焉馬謬、必見笑於大方、是亦所予不忍也、待佗日歷博達高明師電眸一瞬、而後塞
諸君需矣、於此諸子大得力、東胡再筆記之、澄譯竊訂正之、挾忠庵主訪遠野氏、行袖野氏隨
喜而激之、遂去扣濃東桂林丈室、展拜悉演所求、丈室固辭讓不可、三止四請、果而得序辭與
正鑒、恰似艘驪珠於頷下、又走逝京師、中路而奇遇隣驛書肆紀藤子、精告終始、藤大隨喜而
抛資財扶之、不日板印成、忠卽放羽翰、東告我同火、諸子各焚香、杳望濃東合掌、嗚呼忠微藤、
廻京師縱百千匝、不能成此光義、藤微忠、徒逐聲色尋花柳、不能結此正因、忠・藤兩箇縱有多
少丹悃、不歷明師高鑑、不能懷此編走京師、寔四美並者歟、師遙聞知此事、驚怖者累日、欲遣

使去制之、我輩相議云、京洛數日程況長安十萬家風煙、指何處為忠所在制之哉、於師命令、似、初不聞者、師慨然而歎曰、悔昔日客中錯且止航啼、今其為咬臍、嗟知我罪我者其唯普説乎、是軾在師傍、所聞見大略也、客曰、此編未成、譏刺將競起、吾子盍記其始末以救之、軾曰、不願軀命寶護師者、是侍者任也、我豈辭之哉、終記之、記以備解嘲云爾。

寛保第三暦癸亥杪冬

佛成道齋後　侍者　玄軾炷拜記焉

侍者大庾謹書

# 白隱禪師息耕錄開筵普說序

夫普說也者、根據乎大覺世尊在華嚴會上日、而肇始於眞淨祖師居洞山歸宗時也、爾來宋元明清暨本邦禪林、往往而在焉、大意廣說古人直截爲人處、而切要俾學者痛自省發爾、是以息耕老子、告香普說、深有所警、學者不可不知焉、茲有駿陽松蔭白隱老禪師、早參正受老人、徧探引賾、多歲行脚、到處叢林無如他何矣、後來一夜不合、徹見正受老人直截爲人用處、而接人常用向上鉗鎚也、是故胡攢亂攧、而輕受諸方許可者、每每望崖而退矣、先是元文庚申春夏之交、迫于輿請、評唱息耕十會語要、四遠蠢侶爭先至者、不知其幾枚也、丁乎開筵日也、提海學者、有普說一篇、頭禪師輪下禪客、遠持斯卷來曰、吾曹二三子、將命剞劂氏布于京師也、然而師不曾許而言、這般陳爛葛藤、盡早投一炬乎、二三子曰、吁、否、如斯篇也、師直截爲人、激勵呵罵、不假文華而力根實、則知、皆是師之苦心熱腸也、請爲吾曹參禪警語、以公同好者、則報恩足矣、縱世雖十百其喙、何慊之有哉、師不獲已而應焉、今請、校閱而加之一語云、予確辭曰、禪師掣電之機、奔雷之舌、大發古今未發口、而普說佛祖不說法、雖片言隻字、斯咸超佛越祖談也、豈世之絺句繪章、抽黃對白之比哉、通篇一任其本色而可也、何況加之拙語、予恐埋沒光彩去、客曰、高論難容議、只書其論於簡首、諄諄請意自再至三也、於是乎、予肅然應之曰、然者請、各先參意而後參句也、晝參夜參、由是參焉而弗懈、疾覩堯於羹牆也必矣、當其

時也、果知、意句俱不相干、則一任糊窓縵缶也、且謂普說也者、不說也、一句子、千佛萬祖說不說、千人萬人會不會、若有箇漢、向未繙斯卷以前、會取不會底、則不辜負禪師不說說、徹困之恩也乎哉、否之則劍去久矣。

旹寛保癸亥八月二十九日

濃東桂林嗣祖沙門禪祚天啓焚香拜書

# 白隱禪師息耕錄開筵普說

侍者　東胡　錄
參學　原　譯校

昔佛果和尙、南宋建炎初、住澧州夾山靈泉禪院時、把明覺大師百則葛藤、評唱者數次、佛鑑責以書、其苦諫辛爭、實過骨肉、佛果領而休、寔可貴矣、山野今復舐息耕十剎狐涎、張厚面皮、設高廣座、公然而秉麈拂、輕忽滿堂諸老者何哉、予享保初、被業風吹、住此破院、單丁者二十年、其中間江西雲衲、湖南海衆、于經于錄、請評唱、覓講議、或裁數百衆名簿、或綴數十行請疏、妨予瞌眠者、大凡向三十度、其中間有志氣憤然者、訟西東諸老、報近遠檀信、欲强力折之、欲隨命塞需、常住枯白、庫間艱酸、東極奥羽、西際肥築、誰則不知、復恐近世道微法衰、不羈晩進、無賴後生、其始到時、閑雅態度寔可愛、善順志氣寔可貴、將謂、念生死、求透過底眞正衲子也、旣而未經一月、泥視龜鏡、塊看鴻規、引伴結黨、横放縱逸、涉庭階喚呼、立廊廡諷詠、宗師不能伏、耆舊制不得、或截斬井索、推落鐘鼓、窺虎關出、穿狗竇入、環列堂前野舞村歌、蛾聚山後雷同浪拍、栽菜刀於暗路、積水瓶於步廊、鋸厠上之板、令人陷墜屎坑、洒竈下之柴、令人困苦晨爨、逞醜態於茶店、盡鄙陋於酒肆、在叢社中、精錬刻苦者、雖千百人、九旬不越門閫、故人無見其光儀、趨街市外、縱逸醜惡者、雖兩三輩、多日在露地、故誰不知其黑業、噫忿麁放者七八箇、

而蒙瑕玷者幾萬箇哉、玉石共燒、金鐵皆爛、於此善信男女、賤沙門如泥猪、蔑僧儀如癩狗、罹行人詞鋒、銘處士口碑、悲哉、佛道嚴威作落、法門德輝俄滅、八千夜叉拂汝迹、多少諸天側汝籍、將謂、行無遮法施、隆興古佛遺敎、誰知、聚不祥凶徒、傷害乃祖古風、寔可悲矣、千態萬狀、如在亂軍場、似見群鹿野、飛廉爲之膽冷、惡來爲之牙戰、七憍慢八狂亂、輕蔑先輩、凌侮後昆、踏倒法幢、分離淸衆、而後如他足者、是名剃頭闡提、是稱方袍外道、謂肉身魔羅乎、爲地行波旬乎、縱汝死得、墮叫喚衆合黑繩無間中、受盡無量苦楚、終無所容懺悔、汝師長父母、與許多鞋錢、放汝行脚、若見汝今醜態、將喜乎將悲乎、屬者予同火兄弟七八輩、爲成辨法會、拽石搬土、水薪菜蔬、經盡饑寒、喫盡艱嶮、拂霧出、戴星入、寮舍井竈、浴室東司、幾千辛懃、幾萬苦懃、見者肌汗、開者淚浮、顧夫何處叢林、無此勞倦、豈其容易哉、而汝輩不沾手脚入來、打多少猥藉、是什麼心行、龍天悲哭、地祇嗔恨、古來見者般流類、無一箇全終者、不有人禍、必有天刑、三叉路口、豈其遠哉、寔可恐矣、我平生憎此等輩、欲捉得必裂殺、者般惡賊、縱日打殺七八箇、有何過、是只爲祖庭荒蕪、法苑凋枯、我祖宗門下、有可透過重關、有可超出棘林、夢曾不知也、諸方高德諸老、罷參宗師、領數百衆、不屑晦跡韜光、自臘扇去、自蒭狗去、縱有眞正辨道衲子、極百端懇禱哀求、不容、甘枯淡忘饑寒、徒爾而過一生了、衰朽丘壑、寔宜也、蠹害法幢、戕賊眞風者、此等部類也、予亦惡之、不顧久矣、頃遐方碩德、近隣諸老、同志定籌、辱見責予緩怠、於此四垂龍象、大得力蜂起蟻攻、或有如赤子求母者、或有似黑吏劫民者、辭之無策、拒之失力、舉措無決、進退維谷、熟顧予平生、無可惜聲名、無可貴操履、詩亦不知、禪亦不會、百懶千懶、放蕩蘊直、恣

懵眠、起來亦春睡、一箇無似宗師態、一滴無擬後昆範、雖予亦知之常甚愴之、無手脚可著、這般醜惡破瞎禿、見今時魔黨障碍、七支八離、破夏分散了、傭人掃除其迹了、關龍講齋、依舊懵眠而已、有何所患、若復依舊參諸君輔翼、全一夏惟可也、是又不足強爲喜、評唱亦非吾願、高牀亦非吾願、所欲諸方碩德、同參諸老、不被卑棄予放懶、得兩箇三箇見影向、相俱拾薪煎茶、偸閒靜打舊話、一月二月共樂枯淡而已、且又對江湖參玄衲子、有可告報事一兩件、吾始瞻撥時、見魑魅引、見魍魎導、入飯顆山頭檮澤深林、見一箇破庵主、號道正受老人、老人諱祖端、祖大圓、父無難、眞正惡毒瞎老漢也、平生垂語云、我此禪宗、南宋末衰廢、傳到大明拂底滅絕、餘毒殘雖在日域、纔如日裏見斗、汝輩臭瞎禿破凡夫、夢曾知之哉、又云、汝等相似漢、似禪禪亦不會、似敎敎亦不果、似律律亦不成、似儒儒亦不得、總似箇什麼、衣架飯囊、又云、玆有一箇重關、關吏列坐、各試其所能、而後令其透過、有稱輪扁者、斲輪推出卽去、有稱畫工者、拂戲畫一紙、推出卽去、妓兒高歌一聲去、淨家高聲念佛去、特稱禪徒者、被問作麼生是諸佛頂上禪、目瞪口呿、茫然柴立、只見兩腋汗、於是爲胡亂賊奴、終爲關外窮鬼、寔可悲矣、又云、汝輩佗時爲一員長老、赴請於檀家、領衆隨徒、重幾枚團蒲、列幾種珍膳、公公然而坐、抗抗乎而飡了、高談朗笑、有一箇把衲僧皺眉底話頭、輕輕拶著時、如何祇對去、恐胸喘肌汗、見滿地一場愁、然則在禪門、不參禪苦學、非種恥辱於暗地裏者哉、何時逢此患難、未可知、寔可恐矣、又云、近世衲子、把狗子佛性話、實參純工者、一箇半箇無不得透過、纔少透過則、爲自得爲自悟、高談大口、是只生死大兆、而栽培己見、增長我見、如何祖庭猶隔天涯、欲到眞正安樂田地、轉悟轉擧、

博了博參、果見祖師最後因緣、如見掌上、何故燈下不剪爪、又信陽有富家、累代富歷國司、鐘鳴鼎食、時時見貴賓高客來往而已、常寥寥而不知胡爲家業、近日添奴增婢、水磨列鳴、轂車轟過、其繁與十倍前日、開日釀酒萬斛、有一老人曰、已哉、富家其不久乎、是不祥兆也、內裏則外必張、轂肆亦設乎、藥店亦開乎、不久而其賣乎、師聞慘然云、噫有其事乎、宋明末、祖宗衰禪徒成衆態、今其似何歟、言畢淚痕落、平生怒罵呵咄、其餘所嗟悼慨念數段因緣、憶持記持者、大略記之、乾峯和尙示衆云、法身有三種病二種光、汝等諸人還委悉麼、時雲門出衆曰、庵內人爲甚麼不知庵外事、峯呵呵大笑、門云、猶是學人疑處、峯曰、汝是甚麼心行、門云、和尙亦要委悉、峯曰、汝恁麼而可始得穩坐地、若人欲見息耕錄、先須參此話、二大老說話見徹分曉、許汝親見息耕老人、許汝稱參玄衲子、若不然、縱汝諳得五派七流秘訣、透過千七百箇玄旨、閑妄想死學解、堪爲何用、況取諸方死郎當老漢之妄談臆解、而抄錄記寫、及塗糊彼錄中、逞口辯恣胸臆哉、近歲大明崇禎間、有鼓山元賢・永覺大師杜撰判斷、但非蹉過乾峯、卻屈辱雲門、諸方講錄阿師、揑合息耕頌中以爲蠧、書以授諸子、江湖瞎眼諸子、是不知埋沒己靈泥土、傷害慧命戈戟、爭傳寫藏秘、不使人見、或記寫此於小箋、粘著彼錄中、以爲情解助、寔可笑、予偶得彼小箋一見、禪餘內集第四臘八普說云、乾峯云、法身有三種病二種光、更須知有向上一竅、老僧今日不惜眉毛、爲諸人註破、凡山河大地、明暗色空、一切萬象、窒礙眼光、皆爲法身之障、是謂一種病、或見諸法空、隱隱地見有法身理、是謂法執不忘、亦是一種病、或雖透得法身、備點將來、或覺無可依倚處、或覺無可主張處、或覺無可指示處、亦是法執不忘、是謂最後一

種病、前一種病是一種光、不透脫、後二種病亦是一種光、不透脫、學者若能透向上一竅、則三種病二種光、不消一捏而破、始謂之參學事畢也、鶴林云、嗟吁、是何閑學解哉、是何妄分別哉、讀到此不覺掩卷驚疑、閉眼悲恐、恁麼瞎註脚、爲詳解得諦當、雲門大師曰、庵內人爲甚麼不知庵外事、是又說甚麼道理、如何註解去、莫謂乾峰底透過著、雲門底會不得、二大老說話、一雙倚天長劍、如惡虎牙、如鴆鳥尾、如象王鼻、如獅子乳、如塗毒鼓、如大火聚、纔擬議則髑髏遍野、是名法窟爪牙、是道奪命神符、須知萬古叢林榜樣也、吾聞、永覺大師者壽昌無明和尙的嗣、洞上英豪而大中興新豐宗旨、專扶起曹溪眞風、今人聞其名則正襟改容、寔一代龍門也、何圖、其說話如是醜陋、如是麁野焉、若內集果而出永覺手、永覺得處可怪矣、顧夫杜撰禪和、亂自鈔錄胸臆凡解、借名於永覺、欲取信於後昆、竊添入彼錄中者乎、嗟其以者般情識妄解、爲參學事了畢者、夢會見乾峰老人及雲門大師哉、恁麼而稱善知識可乎、莫謂、不消一捏、千捏萬捏千百億捏、亦空勞力而已、悲哉、把祖師血滴滴示衆、令不及教家初心談論、寔可悲也、古不落兩字五百生墮在野狐窟裡、若以一句子話、錯註解了、瞎卻參玄衲子眼目、罪過勝出十方諸佛身血、吾今非逞人我恣胸臆、所恨多少情識邪解展轉流行、妨碍佗後昆悟門、染汚古人眞正宗旨、叢林衰弊、祖庭荒涼、一依此等邪說、是何心哉、吾聞、大明國裡、禪苑敗蕪、眞風滅絕、信哉、吾日域宗門頹朽、既亦至此極、寔可恐矣、謹白參玄上士、乾峯示衆、大難大難、不生容易見、不涎如上狐涎、但單單參究、一旦不合喫著、通身白汗流、爆然見乾峰說得徹困、覺雲門和得高古、了息排頌得諦當、知永覺解得妄誕、頌鶴林判得親切、豈不快哉、古人云、舊參宿

將、發足超方、爲打頭不遇惡辣手段底宗匠、坐在見地、縱雖甘心枯志忘形、鑽之仰之、淘之汰之、但裝重己見而已、不能脫去鶻臭布衫、一旦時緣成稔、出來爲人、取與之間、應機未妙、蓋從殊勝境界中得、被人蓋覆將來、便乃辨佗不出、此語爲此等人設乎、今時諸方被一片湛寂死水裡浸殺、即言、莫看話頭、話頭是埋沒自性泥土、莫顧文字、文字是縛殺己靈葛藤也、怪哉、汝所謂自性胡爲物哉、既是被縛殺、將是類狐兎者歟、怪哉、汝所謂己靈胡爲物哉、既是被埋沒、將是似芋栗者歟、不知、誰家滯貨、何處舊肆上、求得者般奇怪物來哉、顧是將爲長沙所謂認得識神底窮鬼子乎、將應庵所謂爲深山古廟裏無轉知大王乎、有佗日不顧危亡底衲子、把一句子話頭、拋向面前云、是甚麼道理、此時汝作泥土得麼、作葛藤得麼、只恐瞋亦不瞋果、泣亦不泣果矣、今時有一般世智辯聰種族、敎其部屬曰、從上佛祖大恐言句何哉、浸殺汝惠命底爛漫雜毒海岸也、彼參決話頭、究明宗旨、五葉分離後、七花開敷頃、權施設底門庭說話也、實非佛祖堂奧玄賾矣、於此頑陋無智無賴禿奴族、大開嘉運、奴郎不辨、玉石不分、碌碌而聚頭、堆堆而列眠、以爲高蹈風標、而睨視佛祖、幷吞諸方也、鸞鳳飢彷徨、鴟鴉飽腥膻焉、儞若無見性眼、點滴亦不消、盡是地獄衆生、所以道、爲僧不通理、反身還信施、汝不知、五千四十八卷一字字、雜毒海岸、四七二三賢聖、一箇箇雜毒全身也、其毒浪浸天、雖日月亦呑輝、星宿亦失光、照照目前、而汝聾不了知覺得、如鴟鴉晝出瞋目不見大山、大山豈惡鴟鴉隱身者哉、罪在鴟鴉而已、汝縱掩耳鎖眼、避此毒焰、行雲流水、墜葉飛花、如何得迴避、縱汝備彼捷疾夜叉、恣吏、傲與錢、跨彼背後、遶盡天下兩三匝、寸土無藏身處矣、所願者、有一箇半箇宿挾靈骨底癡

鈍漢子、憤然歸來、向彼毒熘裡、放身投入、作大死一回焉、一回起來、擔過量大杓頭、遶四天下、見眞正衲子時、張臂唾手、展大杓頭、酌將毒熘來、驀頭卽灑、灑使伊放身捨命、則豈不痛快哉、有一般平生垂語曰、諸子莫錯向外馳求、但一向無念無作去、不修不證去、無念無作頓證之直諾、不修不證實相之眞理、是故十力調御、稱之爲無上正等正覺矣、於是徒侶、盡妨意除情念、誓欲成無作、殊不知、此是多少造作、若人不見性、探經卷、訪師友、作種種行業、總是妄情所爲、生死大兆也、終日學無作而終日打造作、終日求無爲而終日打有爲、若又一回見性去、終日行有爲、卽是無爲、終日打造作、直是無作、如蛇牛喫一器水、乳毒遙殊、是故血脈論曰、若不見性、一切時中擬作無作想、是大罪人是大癡人、落無記空中、昏昏如醉人不辨好惡、若擬修無作法、先須見性息緣慮、若不見性、欲成無爲、無有是處、東林常總昭覺禪師嗣黃龍、尋常垂語曰、晦堂眞淨同門諸老、祇參得先師禪、不得先師道、大慧曰、蓋昭覺以平常無事、不立知見解會爲道、更不求妙悟、卻將諸佛諸祖德山・臨濟・曹洞・雲門・眞實頓悟見性法門、爲建立、楞嚴經中所說、山河大地、皆是妙明眞心中所現物、爲膈上語、亦是建立、以古人談玄說妙爲禪、誣謂先聖、聾瞽後昆、眼裡無筋、皮下無血之流、隨例顚倒恬然不覺、眞可憐憫、圓覺經曰、末世衆生、希望成道、無令求悟、唯益多聞、增長我見、又云、末世衆生、雖求善友、遇邪見者、未得正悟、是則名爲外道種性、邪師過謬、非衆生咎、豈虛語哉、所以眞淨和尚小參云、今時有一般漢、執箇平常心是道、以爲極則、天是天、地是地、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗、大盡三十日、小盡二十九、並是依草附木、不知不覺、一向迷將去、忽若問佗我手何似佛手、使道、是和尚手、我腳何似

蹉脚、便道、是和尚脚、人人有箇生緣、那箇是上座生緣、便道、某是某州人事、是何言歟、且莫錯會、凡百施爲、祇要平生一路子、以爲穩當、定將去合將去、更不敢別移一步、怕墮落坑塹、長時一似生盲底人行路一條杖子、寸步拋不得、緊把著憑將去、(以上眞淨和尚之語、晦堂和尚謂學者曰、儞去廬山無事甲裏坐地去、而今子孫如死灰、良可歎也、南堂靜禪師曰、見性須如見掌上、了了分明、一一田地穩密、勸儞參玄上士、大丈夫兒要猛著精彩一回見性、纔得見性分明、捨去參決箇難透話頭、必定了知涅槃經所謂諸佛世尊眼見佛性、如觀掌上阿摩勒果、剩徹見祖師最後因緣、於此初挾法窟爪牙、懸奪命神符、入佛界、遊魔界、拔釘奪楔、敷大慈雲、行大法施、大利濟方來衲子、依舊眼橫鼻直、無事高閑底一老僧、是爲眞正佛祖兒孫報恩底人、許儞、逢茶喫茶、逢飯喫飯、恬如過日、無事亦得、有事亦得、佛祖亦挾手不得、萬兩黃金亦消得、若効。今時、認得八識無智暗窟、自爲得自謂悟、而亂受佗別人禮拜供養、是爲未證謂證・未得謂得・增上慢人、可恐、施主一粒米、粒粒鐵丸熱沙、施主一滴水、滴滴洋銅沸屎、施者一縷袍、縷縷鐵網熱鎖、噓爲求出離、剃髮染衣、錯被邪師惑亂、一生錯爲胡亂道人、合眼卽是黃泉人、不戀生生春磨苦患、再歸三塗舊里、掛袈裟深沈泥梨底、見永劫苦輪、最可恐邪師誑惑也、古有七賢女、遊尸陀林、一女指屍謂諸姉曰、屍在這裡、人向甚處去、中有一姉云、作麼作麼、諸姉諦觀各各契悟、感帝釋散花云、唯願聖姉有何所須、我當終身供給、汝看、今時之回避是、則古之諦觀非也、古之諦觀非、則帝釋豈有此言哉、女曰、我家四事七珍、悉皆具足、唯要三般物、一無根樹子一株、二無陰陽地一片、三叫不響山谷一所、帝釋云、一切所須我悉有之、若三般物、我

實無得、女曰、汝若無此物、爭解濟人、帝釋遂同往白佛、君不見、賢女曰、汝若無此物、如何得濟人、今時者爲雜毒恐怖、非天冠地履杳殊者哉、汝等瞻撥喫霜辛、參玄嘗雪苦、非欲佗後大利濟人者哉、將其無此物、則有少所欠少歟、佛言、憍尸迦、我諸弟子阿羅漢、悉皆不解此義、唯有諸大菩薩、乃解此義、佛何不恐怖、卻有此言也、其將爲未知雜毒歟、熟量佛心、非欲使帝釋了知此義、頓越四果三賢漸次、到大菩薩衆階位者哉、佛言、我有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相法、附屬摩訶大迦葉、此語亦大錯會者多、我昔日見正受老人逼拶、雖啓得喫痛棒、實未徹頭、如在船上見遠樹矣、山野初十五歲而出家、十六歲時自嗟悼、雖隨師染衣剃髮、未見涓埃佛法靈驗、我聞、法華諸佛本志而一代經王、於是把而看讀一返、一返了掩卷大息曰、此經大半談因緣、中間雖有唯有一乘諸法寂滅等語、是彼臨濟所謂濟世醫方、而表顯說也、寔不足把、旣而大失力久矣、後來住院、正比及不惑、挑孤燈再讀之、讀到第三譬喩品、從上疑惑撲然解、經王之所以爲王、粲乎滿目前、淚痕連飛如豆囊穿漏、不覺放聲涕泣、初知、從前所悟得證得多少因緣、大錯了矣、於是初徹見正受老人平生受用、及了知大覺世尊舌根欠兩莖筋、和臨濟好與三十棒、昔阿難問迦葉尊者、世尊傳金襴衣外、更傳何法、迦葉曰、阿難、倒卻門前刹竿着、此語極難透難解、恰如怒雷劈石壁、三賢魂蕩四果眼眩、而今時無眼禿奴輩、公然注解云、刹竿中間底物也、中間掃盡則大事成辨、是名情識凡解、恰似瞽者調五彩、初祖大師言、外息諸緣、內心無喘、是語亦往往隨情注解、第六代祖師末後門人、問云、從此去早晚可回、師曰、葉落歸根、來時無口、可恐萬里無底黑火坑、鬼神亦不能全性命、徧界一隻青蓮目、切忌撒鷺沙、

而今時多少伶利癡人、抗抗而註解曰、根者是新州底、無口者無來無去、無內無外底本分閑
田地、咄、瞎註脚死邪解、每聞見、胸間常生嘔吐氣、又問、何人得師法、祖云、大庾嶺頭以網取之、
鴆羽猥膽、猫頭狐涎、一釜鍊來、抛向面前、如何得下嚥、莫言、祖師無此毒氣、就中有大可笑者、
聞、南嶽大師云、譬牛駕車、車若不行、打車即是、打牛即是、惡毒言句、則縱情解云、車是形骸底、
牛是中間底、噫是實解得好、聞言、馬師日面佛月面佛、即言、此是衆病不到底自家一團靈光、
怪哉、今時胡爲如是俊利、取和飯裡、騾林下千日、鴉亦不顧底凡解也、昔有甘蔗氏之子、後道
金仙氏、初入雪山深處、隱密抱無絃古瑟、白盲撫彈者大凡六白強、一朝見惡星之照、柱作魂
飛魄散、絃絕琴碎、少焉天環吐奇聲、地軸發妙音、於茲纔按一指、則響兼衆妙、音度四生、初在
鹿苑、撫四柱古絃、吐十二雅韻、中在鷲嶺、發一乘圓音、後入鶴林、有遺教哀韻、其樂府大凡得
五千四十軸、有纔動絃作分曲者、謂之大龜氏、龜紋一爆、續四七大絃、末後見碧目紫髯樂神、
偉哉、獅筋一揺、六音吞響、鸞膠八轉、神絃密續、其先香至人、而元王家子也、來依熊耳林樹、好
吹無孔鐵笛、不能絕人腸胃、卻分自家髓皮、七步而錯放出一頭瞎死駒、腕促蹄高、三百六十
骨節毒乳濺飛、八萬四千毛竅血汗爭湧、蹈碎大千、嘶裂長空、百億須彌走倒立、六方剎土碎
爲隣虛、傳到南泉山下、天鼓自然鳴、長沙趙州抄指各和、甚吐祕調、向來大義渡口老渡、好敲
牌鼓單于調、大奪雅樂、象骨續餘韻、萬舞亂行、羅疎二山、古曲入神、格律高雅、首山。石霜和以
黃鐘大呂音、其調徹而嚴、野鬼駭走、閑神遁潛、最苦吹到廣南光孝院裏、毒鼓倒掛、魂飛膽裂、
伏屍八十餘軀、其餘口啞耳聾者、知幾許哉、聽綰絃入洞山、鼎抱瑟據雪竇、其音大震、鐵獅吼。

西河、木人腸落、鷄狗艸子胡、泥牛汗流、有眞人、鄧氏子而綿州巴西人也、此道東山老人、昔在
破頭山頭清茜、中來白雲堆裏隱、一朝入磨院、褰衣遶破碓一匝、布鼓噴吼、洋洋焉殷殷乎、如
傳雷神打毒鼓、三佛爲之失氣、一靜爲之裂膽、妙喜唱、聲滿衡陽浦、佛鑑嘯、響徹龍淵底、震林
村者、虎丘長嘯也、遏行雲者、黃龍苦吟也、曇華・咸傑・崇岳・普岩、皆擊節極衆妙者也、四明有老
圃、名言息耕老夫、常扣鐵鋤歌、一日見大嶺古光照壽塔、妙旨入指端、響動二林、聲周十刹、餘
音飛落扶桑、金鷄驚報、玉鶯悲咽、廻陽春於横岳、舞白雪於紫野、瑞鹿奔閃電鈍、眞珠轉寰海
昏、傳到華圃、八音乍啞、如鼉鼓塗毒、聞者皆喪、於此四柱作分、有大絃爽爽者、有小絃數數者、
周宇宙、徹海外、悲哉大雅枯桑間涌、古曲啞鄭衞震、君看、從上俊傑祖師、那箇似今時哉、往往
爲祖關不透、宗旨不徹、心火熠熠到死休罷不得、如隔日瘧疾、五日坐來、棄了禮幾箇佛、五日
禮來、棄了誦幾卷經、五日誦來、棄了一食卯齋恰如重痾人臥亦不果、坐亦不果、似盲驢任足
行、是只爲最初莽鹵而入處不痛快也、有一般、三五七年辨道參禪、而工夫不純、精神不一故、
終不打發、雖重歲月、進無寂滅樂、退有生死怖、於此專念稱名、切求淨刹託生、參究心作廢、辨
道心儀罷、宋明末、此黨大興、多是庸才情弱禪徒也、欲飾自點額、補自敗露、動引五祖戒公・眞
如喆公・斷崖義公・再生事、以參禪爲無益、殊不知、戒公之輩、專稱名念佛人也、嗟欲主張自家
一亘凡解、拾一箇兩箇志願不厚見地、不瞥底再生老禿兵、欲謗倒從上多少傳燈賢聖、刺害
父子不傳祕訣、五逆亦不足比、彌漫罪累無所容懺悔、夫禪外無淨刹、禪外無心、禪外無佛、曹
溪者八十度善知識、南岳三生藏老僧、大寂滅海、大虛絶痕、有再生、有託生、有化生、有不生、天

堂地獄、穢土淨土、一顆和盤托出底眞如意寶、毫釐繋念則礙人沒夜塘、若其以願生事爲佛法極則、祖師只贈二三行書於漢土足而已、曰、專念稱名往生淨刹、何用喫許多艱嶮、淩十萬里波濤、傳此見性法、爾不知乎、觀無量壽經曰、佛身長六十恒河沙俱低那由多由旬、儞子細諦觀看、是則非直心見性、無上菩提道而何、慧心院僧都曰、大信者見大佛、參禪者則了了分明、見徹這箇古佛者也、此外別求佛、總是邪魔種族也、故經曰、若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如來、大凡一切如來有三種身、法身毘盧遮那、此云徧一切處、報身盧舍那、此云淨滿、化身釋迦牟尼、此云能忍寂默、在衆生身中、即寂智用三也、寂是法身、智是報身、用是化身、達磨大師云、若衆生常修善根、即化身佛現、修智惠、報身佛現、修無爲、法身佛現、飛騰十方隨宜救濟者化身佛、斷惡修善雪山成道者報身佛、無言無說湛然常住者法身佛、若論至理、一佛尚無、何得有三、此言三身者、但據人智有上中下、下智人妄興福力、妄見化身佛、中智人妄斷煩惱、妄見報身佛、上智人妄證菩提、妄見法身佛、上上智人內照圓寂明心即佛、不待心而得佛、此知、三身與萬法、總是不可取不可說、經云、佛不說法、不度衆生、不證菩提、其斯之謂與、黃檗大師曰、法身說法、不可以言語音聲形相文字而求、無所說、無所證、只自性虛通而已、故曰、無法可說、是名說法、報身化身、皆隨機應現說法、皆非眞法、寔哉報化非眞佛、又非說法者、須知諸佛縱雖有無量千萬億隨類變現大小形量、畢竟不出此三身中、金光明最勝王經云、如此三身具足、成阿耨菩提、報化二身假名、而法身是眞實常住、爲前二身作根本、然經中分明說、佛身長六十恒河沙俱低那由多由旬、試道、如是廣大身量、爲報身乎、爲化身乎、將

又謂法身乎、既言、報化二身應機利生、不知現那處廣博世界、化那箇大身衆生耶、莫謂、如彼淨刹、衆生大身故、佛亦現大身、若果然彼世界大菩薩衆、及四部衆等、爲有幾恒河沙身量耶、如彼恒河周匝四十里、其沙細密而如微塵、縱雖一恒河沙半恒河沙、乃至方方丈裏沙數、鬼神亦不能數盡、況六十恒河沙哉、佛眼亦不能量、實是不可數數、不可量量、此義經中難解玄旨、無量壽尊黃金骨髓、若强論者、六十恒河沙、是指色聲等六塵者也、大凡世間所有一切諸法、超出六塵底一箇亦無、覺了彼所有六塵諸法、全是無量壽佛黃金全身、立地超過生死苦域、立地成無上正覺、當此時、東方亦蓮華刹土、南方亦蓮華刹土、盡大千界八表四維卓錐地、亦無別處、是爲遍一切處毘盧大寂定軀、貫通萬法、銷融群有、長劫不變者是也、又經以大乘經讀誦人、爲上品•上生•最上機、大乘經者何哉、非黃卷赤軸謂、必定決定、指自家本具底佛心者也、而亂道參禪無益可哉、雖然大慈弘誓賢聖、爲攝中下機、乘願輪來、自修淨業、使伊決定願生心、三心四修勳果成辨者、閣不論、唯在禪門、懶純工、疎進修、而後稱參禪無益、純工無驗者、不可不點檢、是只如及第進士、射策無功、郎當流落、餬口於四方、事鄙陋資業者、折指於僻地、數兩箇三箇左遷配流官人、稱官途無賴、仕路蹈危、輕賤彼狀元甲科君子者、是非不能擧鉢盂、道自不饑者麼、或云、禪而兼淨土者、虎而挾翼者也、是何掠虛妄談哉、嗚呼禪乎禪乎、爾輩夢曾度量及哉、纔撥轉則三賢四果、驚落心肝、賢聖失氣、佛祖乞命、非所以恁麼漾佗假物、而後爲獨著矣、近世浪華岸畔、一睡一千年、不逢如來出世底老螺蛤、睡中纔聞著此語、憤然而起來、吹譁漚萬斛、開大口曰、禪而兼淨土、如猫兒失眼、淨土而兼禪、似牛背張帆、雖暫時謂

語、亦是也太奇、二十年前或曰、向後經二三百歲、禪徒盡入淨家、予曰、禪家者若不參禪純工、其人必入淨家、淨家者若專念稱名得三昧發得、其人必歸禪矣、或大德曰、三四十年前、有二上人、一云圓恕、一云圓愚、圓愚不知何許人、姓氏亦不詳、平生稱名專修如救頭然、一日乍三昧現前、圓解煥發、直登遠初山、見獨湛老人、湛問、儞是何處人、愚云、山城、湛問、修習何宗、愚云、淨業、湛曰、無量壽尊年多少、愚曰、與某甲同年、湛曰、即今在何處、愚即握右手少舉、湛曰、儞是眞淨家人也、是即予向所謂淨家、若專唱得三昧發得、必入禪門、是其證也、所恨淨而入禪底、如白晝得星斗、禪而歸淨底、似晴夜數星斗、近聞、遠境禪林、動張礫盤居伏鐘、高聲稱名驚四境底間又有之、嗟向所謂三百年後、懸讖寔可恐、自非江西濟北諸聖再出頭來、不能概救、予常爲之牙戰膽寒、忠勇參玄上士、伏新嘗膽、宜自策進、法寶壇經疑問第三曰、若論相說、西方去此十萬八千里者、即身中十惡八邪、近代大明萬曆之間、有杭州雲棲袾宏者、撰彌陀經疏鈔、疏中曰、壇經錯以五天竺爲極樂國土、五天震旦同是爲娑婆穢土、何須分別願東願西、極樂去此娑婆十萬億土、蓋壇經皆學人記錄、何保無訛、如壇經者、愼勿示之初機、苟授非器、使頂狂魔、可噫惜、噫雲棲者胡爲者乎、偏固儒生歟、小乘敎人歟、且淨家者流、不知觀經深理、不具看經眼、妄自判讀聖經者歟、將又魔羅波旬部屬、現圓頂方袍容、著文字般若衣來、欲警害難遭値妙聖言者歟、大可悲、或人云、不然、熟顧、宏公無見性眼、乏入理力故、進無宿昔般若正因、退有來生流轉患難、是故專念稱名、欲感得聖衆迎攝、以成佛果、偶披覽眞正直指金文、大遺憤恚、恨失所望、是故憤然而綴彼疏鈔、以欲救部執者也、非儒非敎、非魔羅波旬部類、只是

少解文字底無眼一僧而已、宋明末、此黨如麻、何足怪矣、若果然、雲棲此擧甚非良策、幸惟有大師慈訓、盡恭敬尊信、思惟熟讀、欲入佗聖域乎、妄自恃文字小伎、欲誇倒佗高明至聖者何哉、自錯了是可也、筆之於書、敎壞多少後人、悲夫、大凡以反凡意、爲之聖言、以違聖言、爲之凡愚、聖言若無反凡意、是凡語耳、何足貴、凡愚若無違聖言、果是聖者乎、實可敬焉、原夫曹溪大師者、傳燈過量大導師、黄梅七百衆中、更無第二人、其兒孫綿亘四海、碁布星列、如宏公、故紙堆中臆覺情解一布衲、不可並轡驅、儞不識乎、曹溪古鏡中、天堂・地獄・淨刹・穢土、總是沙門一隻眼、輪鎚不開、吹毛不入、無去無來、無生無死、五須彌山白毫光、四大海靑蓮目、七重寶樹、八功德池、煥爛于心上、的歷于目前、黑繩・衆合・叫喚・無間、總是無量壽尊紫磨金全身也、或喚作東方瑠璃光土亦得、或喚道南方無垢世界亦得、元是一箇大圓覺海、人人本具性、隨其業感強弱福力多少、所見總不同、地獄見之爲鑊湯爐炭、餓鬼見之爲火聚膿血、修羅見之爲刀兵戈戟、凡夫見之爲娑婆穢土、專見荊棘瓦石、厭之求淨土、諸天見之爲瑠璃玻璃、二乘見之爲方便有餘土、菩薩見之爲實報莊嚴土、諸佛見之爲常寂光土、不知衲僧見之還作什麼耶、須知、天上珠網、泉下鐵網、直是羅綺千重衣、淨刹美供、地獄洋銅、全是百味具足食、盡乾坤大地、更無第二月、此非庸常下劣士所以可了知、祖師門下參玄上士、嶮崖撤手、絕後再甦始入得此三昧、此時理與智冥、心與境泯、謂之眞正古佛來迎、參玄上士往生、名之爲上品上生最上機、宏若不一回入得者、般淨刹、縱儞抹過十萬億刹土、歷盡八千度往生、總是夢中幻事、而邯鄲枕上一炊榮耀也而已、祖師分明道、西方隔十惡八邪、是至公至正論、而六方恒沙刹土如

來、同時出頭來、一字子亦不能移易也、我且向儞說、西方去此十八里、西方去此十八肘、西方去此一寸八分、是又至公至正論也、如何著手脚、言指那處村里、擬議壁間有七尺折朱杖、姤遮自家所見、提願輪不朽導師、擬淨邦與竺土、辨別不得底癡人可哉、是無佗、袾宏之意竊謂、如大師寔雖悟得甚好、所悲元是南方樵人、不知文字、不讀經典、頑陋無智、實無異彼牧漁奴隸輩、縱其雖牧漁奴隸輩、豈有淨刹與竺土不辨得底耶、今雖三歲孩兒、尊信有淨邦、況難遭難遇、間出聖智大導師、可尊曹溪大師、應諸聖懸讖、優鉢華眞正十力聖者、乘願輪來者、而唱出從上佛祖未曾說及底秘訣、恰如神龍入阿盧大海、換轉苦鹹海水來、作清涼甘露膏雨、横濺豎灑、無礙自在、蘇枯荒於洪旱、又似世大饒長者入大寶藏庫裡、世間希有雜寶、任手撮來、救凍餒賑枯急、不涉意度、不容情解、與今時攀緣閑葛藤、爛咬臭糟粕、情卜意解、胡亂說出底、不可同日語矣、佛說、十萬億土、祖道、十萬八千里、大威神力大智力、寔龍象蹴踏、獅子哮吼、擬議野干腦裂、然宏公公然判曰、壇經錯以五天竺爲極樂國土、又曰、蓋壇經者學人記錄、何保無訛、依稀于救彷彿于謗、肯窽曰、按地志、所謂自長安西門至西天迦毘羅城東門、凡十萬八千里也、雲棲疏中曰、壇經錯以五天竺爲極樂、良有據耳、是何閑妄想乎、嗟肯窽良按得好、試言、大禹以來、那箇地理志、說五天竺國隔十惡八邪來麼、可惜許、何迴按地志底暇日來、不謹熟讀壇經、子細觀察佛意耶、觀去觀來、忽然而攎著佛意以爲據、不覺拍手大笑、大笑底是什麼、宏公無眼妄判著聖言、寔可笑矣、肯窽亦同是葛藤窠裏人、恰如矮子見戲、隨佗上下、譬如兩箇瞎波斯、拾一枚梵文貝葉來、向背地裡相共盡力判斷、瞎飜昏譯、一字子亦不諦當、卻取。

笑於傍觀也、雖勾下不足論、恐害多少行人、所以許多葛藤、疏中又曰、壇經者愼勿示之初機、苟投非器、便墮狂魔、可嘆惜、是又甚不愼之麁言也、我說、如壇經者、愼勿妄判斷、苟以暗鈍無智小見妄判之、便墮狂魔、可嘆惜、原夫番番出世如來、爲令衆生開佛知見道故、出現於世、是諸佛本志、中間雖有頓漸半滿顯密始終等經卷、畢竟收歸唯有一乘入人本具自性、曹溪大師亦然、雖設行由疑問、定慧懺悔等法門、畢竟不出一乘見性法門、四七二三賢聖及五家七宗諸老、各傳此見性法、代佛揚化、專演諸佛出世本志、終不隻字談西方事、不片言說往生事、後學初機、間又竊把壇經讀、終墮狂魔底一箇亦無、卻各成就大器、請宏休嘆惜、是故大元南海宗寶曰、壇經非文字也、達磨單傳直指之指也、南嶽青原諸大老、嘗因是指以明其心、後以之明馬祖石頭諸子之心、今之禪宗、流布天下、皆本是指、而今而後豈無因是指而明心見性者耶、是亦叢社公論、而與宏公僻地裏一人私言實霄壤也、蓋根有利鈍、機有大小、故說亦千般百種、譬如世良醫雖胸中初不貯一方、病者多種故、方劑亦多般、夫如願生淨土一門者、大醫王救苦者、爲救韋提希獄中患難、令其歸唯心自性淨土、假且施設底善巧、暫時一方也、如宏不達諸佛善巧眞理、死執心外別有淨土、妄想心外別有佛、不能徹了諸佛無土、前街後巷、總是諸佛刹土、諸佛無身、南隣北舍、全是諸佛全身、聞十惡八邪隔西方等眞正說話、惡違自家所望、强排斥欲塞佗聞見、若任宏意樂、壇經不可初機、不容讀華嚴・方等・法華・涅槃其餘了義諸經、皆盡不可初機、何故、大師既透徹佛心玄微、窮決教海源底、與諸佛同一舌演、與諸佛同一口唱故、且華嚴合論曰、一念佛力修戒發願力生淨土、是化佛淨土、非眞淨土、爲非見性、

及不了無明是一切如來根本智故、是有爲故、如阿彌陀經是也、宏若一見、必定爲不可初機、筆之於書、合論何幸哉、免得觸蓮池之瞎眼、不開投之非器、墮狂魔等批判、紫柏大士大寂定中多少慶幸乎、大凡老幼尊卑、緇素賢愚、正眼看來、具有如來智慧德相、分毫不欠少、爲初機可棄廢底半箇亦無、雖然、其最初發足日、不知辨道利害、不辨進修急緩、且假名爲初機、於此披閱聖教、隨順師友、了畢大事、成就大器、具大辯才、行大法施、挑慧日於常夜、留慧命於澆季、名之爲眞正報恩底佛子、而彼亦爲初機、強壓令其念佛、此亦爲初機、強壓令其念佛、少室所謂此土大乘根器、具神俊才、有棟梁質、佗後可德山臨濟去、馬祖石頭去底可畏後生、隨半死老爺、伴半生阿孃、水邊林下白晝、收目低頭念佛、傭誰家子、令續佛慧命、作末代蔭涼樹耶、眞風作墜地、佛種永斷滅、男兒大丈夫、請其擇之、當此之時、三部經典外、畢波窟中爲初機後學結集底諸大乘經、三藏金文盡歸無事甲中、空葬蠹魚腹中、無異深山古廟裏累累舊紙錢、堪爲何用、寔可悲、經中所謂上品上生、大乘經讀誦人、亦拂土無之、以反自家所執、譏害廢之、袾宏疏抄、非始皇焚書坑耶、秦昔恣苛政、大違聖經賢典、妬其違坑儒焚書、其亦庶乎其凶也、顧三武顯廢佛教、袾宏密廢佛教、不亦然乎、然則雖顯密品殊、罪犯將一般乎、是非宏罪、是宏未見眞正之導師、無參玄眼所致、而不見性靈驗也、人呼稱過現未來善知識之樣子、禪教律部大和尙之標題、將是何心歟、熟顧、今時諸方禪林、往往此黨太多、死守寂默枯坐、以爲道底、嫌達自家所證、見佛經如寇讎、不容令人看讀、恰似野鬼畏桃符、癡執見聞覺知、以爲禪底、嫉達自家所見、見祖錄如寃家、不許令人披閱、恰如跛兎避惡虎、淨人嫌譏刺、禪人憎謗倒、佛道危

驗正此時也、雖然是亦非道、廣窮經史、徧探墳典、玩弄詩偈、耽嚼文字、培人我列岳、樹勝佗幔幢、縱雖備辯才等滿慈、智力過鶖子之菩提資糧、無見性正眼、終憍慢邪見、入肺肝間、乍斷滅佛種性、永成泥梨獄中衆生、眞正道流、卽不然、先須見性如見掌上去、間亦把佛祖言敎看過來、以心照古敎、且見眞正導師、誓參決祖師最後因緣、末期打出一箇半箇、以報答佛祖深恩、是爲當家種草、謹告蓮池大師、向僻地裏、掐蓮實念珠、傾頭收目、稱名念佛、求蓮華國裏生、是吾子分之宜也、張朦朧瞎眼、玩弄胡亂文章、判斷傳燈過量大聖人、且請束之高閣、何故、神龍行雲雨、非螺蚌可測度、古人曰、夫西方者衆生心地也、過十萬億佛土者、止衆生十惡念、超過菩薩十地階級也、阿彌陀此云無量壽、是乃衆生佛性也、觀音勢至等聖衆者、是自性妙用也、衆生者、無明煩惱慮智分別多心也、臨命終時者、識情寂滅時也、識陰情念寂滅則心地淸淨、名之道西方淨土、西方日月星辰所收、而衆生一切慮智分別心、收一心地、則一心不亂、而彌陀如來現在故、悟自性時、而八萬四千煩惱、轉成八萬四千妙義、這妙用名觀音勢至等也、迷則妄心名穢土、悟則其心淨名之淨土也、所以血脈論云、過去諸聖所修念佛、皆是非外說、只推心內、若要求佛、先須見性、若不見性、念佛誦經有何益、佛陀此云覺、覺則自心卽是佛、若離心別求有相佛、是名爲癡人、譬如求魚人、先須見水、魚是水所成、而水外更無魚故、若人欲覓佛、先須見心、佛是心所成、而心外更無佛故、問、既是心外無佛、如何覺了自心、得徹底去、曰、恁麽間著底、是心麽是性麽、爲鬼歟道神歟、在內外中間麽、靑黃赤白麽、自家須究明、立時究明、坐時究明、喫飯喫茶、語時默時、但單單窮將去、切忌向經敎文字中求覓、向善知識口頭尋討、

只到心機盡情量窮處、如猫兒捉鼠去、如鷄母暖卵來、忽然而有鳳離金網、鶴脫籠底時節、縱到死不能打發、三二十年徒爾送却光陰去、誓莫認諸方死郎當老漢老婆說話來、以爲得力處、著骨粘皮、終不能打脫、況於祖師最後因緣、是故古人云、參禪須具三要、一者有大信根、二者有大疑情、三者有大憤志、若缺此一、如折足鼎、信根者何言哉、只是信人人有可見得底自性、有可徹了底宗旨、是也、縱是雖信、不疑着難透話頭、則不能透底徹了、縱是雖疑團凝結、不憤志以相續、則疑團不破、是故言、爲懈怠衆生、涅槃亘三祇、爲勇猛衆生、成佛在一念、只須切著精彩矣、如參禪鑽燧取火、唯以一氣進爲賢、纔見暖氣生即休去、少見煙氣浮作休來、鑽經盡三祇劫數、終不能見星火、吾鄉近海濱纔數百步、譬有一人、以未曾知海水甘酸爲憂、欲自行嘗之、纔百步而歸來、十步而却回、何時辨得彼苦鹹、縱雖信甲飛濃人、一氣進不退、則不日到海濱、纔染一指端舐之、則月支・眞丹・南濱・北溟、世間所有海水甘酸、一時頓了知焉、參玄上士亦如此、向自心上參究、一氣進不退、則自性・佗性・衆生性・煩惱性・菩提性・佛性・神性・菩薩性・有情性・非情性・餓鬼性・修羅性・畜生性、作於一念子間、一見見徹不留毫芒、了畢大事、透脫生死、豈不快乎、謹勸參玄上士、究明己事、須如救頭然、求透過、須如尋要用底物、見佛祖言敎、須如生冤家、禪門以不疑話頭、爲自棄無賴賤人、所以言、大疑下有大悟、疑有十分、證悟有十分、莫謂塵務繁絮、無暇疑凝團、思念紛飛、乏力下純工、譬於閙鄽騷市間、稠人廣衆中、有人錯遺落二三兩黃金、爲閙處不顧、爲塵中棄置底、半箇亦無、推排多少人、打翻許多塵土、含涙尋逐、不再入手、則心頭不能平穩、然則譬中無價大寶、自己本有妙道、可不如彼二三片黃金乎、胡

爲其容易也、東海有波臣、名道赤梢鯉、大具氣概、鱗中大丈夫也、平生慨念曰、我此鱗屬、知幾千萬種歟、雖誇蒼溟廣大、恃銀浪洪渺、沈浮波間、汨沒藻裡、多爲釣餌獲、爲網羅拽、而終罹刀俎、膾炙人口、骨委塵土、頭餉野犬、爲山市脯、爲店舍備、一箇不見全其終者、寔可悲、於此大憤發、誓言、我願透過彼龍門、觸著彼雷火、出凡鱗聚隊、列神龍班次、永脫此患難、永雪此垢辱、既而待三月桃浪節、直望禹門、擺尾進發、君不見、禹門者杳自崑崙山頂落、百千丈狂浪漲飛、二三級嶮處側激、丘山崩落迅雷怒吼、回飈咽捲毒霧、閃電苦驅臭煙、巨靈爲之失氣、海若爲之膽落、纔觸著一滴、則巨鼈裂背、長鯨骨碎、於是鯉魚張錦鱗鼓鐵牙、一氣直衝、嗚呼鯉魚乎鯉魚乎、渺茫海中片鱗、而得小鮮救饑腸足而已、胡爲其如斯猛利哉、上頭何所有、迅雷裂巖雷火焦天、鱗甲爲之被打、而尾爲之被燒、乍大死一回、一回起來、鱗峻一枚神龍雷神爲先驅、火帝爲殿後、右雨師、左風伯、挐雲騰霧、救焦芽於荒旱、護正法於濁世、若儔彼跛鼈、隨彼盲龜拾蜆飡蝦、過一生以爲足、則和修吉救不得、摩那志亦不得、如何豈有此盛事歟、盲龜者何謂乎、今時話頭爲枝葉、參禪爲施設底杜撰瞎流也、彼非無些了解、徒認門頭戶底言、自性天淨、心源海深、無生死可捨、無涅槃可求、湛然寂默、空廓虛凝、是則人人本具底大寶所、有什麼所欠少、噫似則甚似、如何途路都無半點力、如蝸牛逢物頭角總縮卻、似跛鼈觸途六處盡隱藏、出氣亦不得、或見眞正衲子撈著、如彼羊公鶴回首亦不得、似彼鮮魚在刀俎上、一生萬死、纖膾亦任佗、大臠亦任佗、泣亦無力、恁麼而稱祖師門下客可乎、恁麼而言無所欠少、有快于心乎、如古眞正辨道衲子、活爐鞴上擲身財、忘命根、纔一回撥轉、則似彼東鯉振精神、透過龍門了、

千態萬狀、脫洒自在、豈不痛快乎、寧爲此勿爲彼也、神龍者何謂哉、古眞參純工底眞正活祖也、嗟其可以人而不如魚乎、不死何爲、又有一般邪魔種族、率其部屬教曰、欲成辨佛道、先須空生滅心、心生故有生死、有涅槃、天堂地獄無不依心所生、是故汝輩單單唯空却心、於茲各定、步欲空其心、如何離豎空橫空重歲月、如掉長竿掃煙霞、似伸隻手遮河流、徒增迷悶而已、譬有一箇豪家、錯揚賊兒姦謀尤巧者、令其保護家事、倉廩府庫、遂日衰滅、於此提家眷怪者幾箇、令彼賊兒日夜點檢糺問、雖妻孥爲之憂愁、室家爲之窮困、資產依舊隱沒、是但錯認賊附托故也、須知、彼擬空却底心、卽是生死大兆也、楞嚴經曰、由汝無始至今生、認賊爲子、失汝元常、故受輪轉、疏云、功德法財、由之喪失、名之爲賊、迷不識認爲眞常、將謂、嫡生欲期嗣世、反遭破喪歷劫貧窮、眞正欲空却生滅心、參箇渾剛打就底難透話頭、忽然和命根打失時、始了畢永嘉所謂不除妄想、不求眞底玄旨、妙喜曰、近世魔强法弱、以湛入合湛爲究竟者、不可勝數、又云、近年以來有一種邪禪、以閉目藏睛、觜盧都地作妄想、謂之不思議事、亦謂之威音那畔空劫以前事、纔開口便喚作落今時、亦謂之根本上事、以悟爲枝葉邊事、蓋渠初發步時、便大錯了、(以上大慧之語、)今時亦者般魔黨不爲少、試問、枝葉邊事且置、汝秘重珍藏底根本上事作麼生、恐一片虛凝不動不搖底繫驢橛乎、將湛湛黑暗深坑乎、寔可怖畏、謂之墮見地、是卽賺世間多少癡人來、活埋底舊鬼窟・老狸窠、縱汝保護秘重、歷僧祇劫數、依然一枚舊棺木、此名爲八識賴耶暗窟、古人行脚、喫盡多少艱嶮者、爲超過此老屋、若人眞參純工去、得一回打破者箇舊窠、乍見大圓鏡智、四智俄煥發、五眼直豁開、若又見今時魔黨欺誑、坐在者裡、爲

家舍爲寶所、磨礱去拂拭來、堪爲何用、元是一片含藏識、入驢胎去亦是彼、入馬腹去亦是彼、勸君、努力要下一刀、昔大覺世尊成道日、三七日中演方廣・華嚴本懷、謂之珍御寶聚衣、徒衆如聾似啞、於此爲攝取中下機、假且構此暗宅、道之化城、後來爲破此窠窟、調御在內提携、淨名在外彈呵、雖以二乘人比疥癩野干身、終不能拔其本根、養息竊蕃滋、遍月支滿神州、雖石霜・眞淨・佛果・妙喜之諸老、張臂切齒、强力攘斥、恰如拍手驅碩鼠、寘此現彼、陰陰而常護、剌祖師不傳眞風、悲哉、我日域二十四流賢聖、承久・嘉禎・嘉曆・建武間、擲軀命於鯨海、投身心於虎穴、傳此難信秘訣、欲懸慧日於扶桑萬年高枝、留寶炬於蓁洲累劫暗衢、誰知被害此默照部屬相似禪徒、纔未經二三百歲、拂土泯沒如死灰去、最可深悲者、此澆末衰頽也、或有眞正辨道上士、密參功積、純工力充、則平生心意識情、總不行、痴痴呆呆理盡詞窮、和參究底心一時打失、氣息亦將絕、殊不知、是則龜紋將爆底時節、鸞轂將脫底時節、佛法將得人底好消息矣、可惜大好善知識、乍起婆禪心、縱婦仁情、說種種道理、挾情量窟宅、推知解窠臼、以冬瓜印子、一印印定曰、爾亦如是、我亦如是、善護持、吁嗟護持任爾護持、爭奈祖庭猶隔天涯、是甚如憐之、其實害之、學人不知毒、掉頭歡喜、搖尾踊躍、自謂、祖師西來秘訣、全入手畢、豈知、祖關不透、棘林猶深、悲哉、有[illegible]質、具超逸才底英靈漢子、被此弊風吹倒、半醒半醉、終一生作擬議不來底鈍漢去焉、叢林乏人亦不宜耶、若其執著爲根本上事、恐不覺隨焦芽敗種部屬乎、古南岳祖師在馬師庵前、把甎磨者、欲敎大寂了知此意也、古人留下一句難透話頭、敎兒孫剿落許多精神者、要敎汝蹈飜者箇窠臼也、所以古人云、三十年餘吾亦住、宜哉多錯舊狐穴、寔

知、參禪甚不容易、五祖禪師暮年喜遊東西廡、見且過僧持一編閱之、祖覷之、至於今人多是得个身心寂滅、寂滅現前、前後際斷、一念萬年休去歇去、古廟裡香爐去、冷湫湫地去、爲究竟、殊不知、被此勝妙境界障蔽自己、正知正見不能現前、神通光明、不能發露、即掩卷以手挪揄曰、奇哉導師善說法要、徑往首座寮呼曰、有奇特事、奇特中奇特、即付圓悟、悟讀之、父子相與鼓舞嘉嘆、不能自已、大慧禪師初見圓悟、且自計云、當終九夏、若同諸方以我爲是、我著無禪論、汝秘重底根本上事、佗豈不識破哉、若鑽之仰之、淘之汰之錯一生了、見甚好罵天、果被自南薰風吹滅命根、前後際斷、佛果曰、也不易、儞但死了不能活、不疑言句、是爲大病、豈不見道、嶮崖撒手絕後再甦、須要信有此些道理、向來聞樹倒藤枯時、如何相隨來也、釋然大悟、悟則舉數段因緣詰之、酧對無滯、端居徑山最上層、千僧閣上指令龍象、如饑鷹視群兎、可貴、祖宗門下、有者般靈驗、遮莫人呼爲枝葉邊事、儞珍藏底根本上事、添得萬兩黃金、擔來亦不可貨、佛果曰、古人得道後、茅茨石室折脚鐺兒內、煑野菜根、喫過日、且不求名利、放曠垂一轉語、要報佛祖深恩、卍庵顏和尚、頌南泉上山作務因緣云、珊瑚枕上兩行淚、半是思君半恨君、大慧聞得、令侍者收牌曰、只者一轉語足報佛恩矣、多少人自張香燈點茶湯、羅列供具、排布華果、多拜多禮、六時行道、雖錬身臂指、無分報佛恩十分之一、而古詩一聯斷葛藤、丕報佛恩何哉、是寔非輕薄論、妙喜一代龍門、而一千七百衆之蔭涼樹也、豈吐荒唐詞哉、昔巴陵三轉語在、雲門大師云、我沒後莫設齋筵、只舉此三轉語、祖師豈好汝所謂枝葉邊事、充茶果珍饈者哉、已下百三十九字碧巖評)古德曰、者中忽有箇出來道、本來無向上向下、用參作什麼、只向伊

道、我也知、偏向鬼窟裡作活計、悲哉、後人多作道理會云、麁言細語、皆歸第一義、若恁麼會、且去作座主、一生贏得多智多解、而今往往道、本無悟處、作箇悟門、建立此事、若恁麼見解、如獅子身中蟲自食獅子肉、不見、古人道、源不深者流不長、智不大者見不遠、若用作建立會、佛法豈到今日哉、僧問長沙同參會和尚、和尚見南泉後如何、會默然、僧又問、和尚未見南泉以前作麼生、會云、更別不可有、僧回擧示長沙、沙即示偈云、百尺竿頭不動人、雖然得入未爲眞、百尺竿頭須進步、十方世界是全身、後來長沙岑禪師、因三聖令秀上座問云、南泉遷化向甚麼處去、師云、石頭爲沙彌時見六祖、秀云、不問爲沙彌時、南泉遷化、向甚麼處去、師云、敎伊尋思去、秀云、和尚雖有千尺寒松、且無抽條石筍、師默然、秀云、謝和尚答話、師亦默然、秀回擧示三聖、聖云、若恁麼勝臨濟七步、汝看臨濟乎長沙乎、寔佛海蛟龍、祖庭鳳麟、絕類離倫、遙出物表、其應緣步驟之間、如大火聚、如熱鐵橛、鬼神無窺其跡、魔外不能辨其用、誰測其涯際、誰人別其錙銖、然三聖嗣臨濟者、而卻有此言、豈其容易、須知汝所謂葛藤窩裡、有少妙處矣、石霜諸禪師遷化、衆請首座住持、時九峰虔禪師爲侍者、白衆問首座云、先師道、休去歇去、冷湫湫地去、一條白練去、古廟裡香爐去、一念萬年去、明甚麼邊事、會得即住持、會不得不可、首座對云、明一色邊事、虔云、與麼不會先師意在、座云、但裝香來、香煙斷處若去得、即會先師意、若去不得即不會、虔遂焚香、香煙未斷、首座遂脫去、虔以手打首座背云、坐脫立亡即不無、先師意未夢見在、往往辨道純工人、以年窮臘逼、孤燈獨照時、爲最後嶮難重關、既是香煙絕處恬然化、此外更何言哉、而撫其背云、先師之意未在、大可怪矣、洪州雲居道膺禪師、會令侍者送袴一

腰、與一住庵道者、道者曰、有孃生袴、竟不受、師再令侍者問、孃未生時著箇甚麼、道者無語、後遷化有舍利、持似于師、師曰、直饒死得八石五斗、不如當時下得一轉語好、吾聞、舍利自定慧薰果出、所以火浴頃、如粟粒芥顆、纔見一點則老幼奔波、緇素競湊、瞻禮尊重、讃歎恭敬、而不言乎、自得八石五斗、不如生前一句、怪哉生前一句者、胡爲物哉、超過舍利如是尊貴哉、吾怪之久焉破庵和尚退資福、赴徑山蒙庵招、委以立僧首座職、有寶上座者、具大知見、遇住持首座開堂、必橫機揵出、迎鋒取勝、一日破庵開堂、寶上座至、破庵垂語曰、乾坤之內、宇宙之間、中有、寶擬議、被打出、其時寶待破庵擧語盡、乃進語、旣於中有處被打出、以謂被庵故摧我、歸衣單下脫去、火後鄕人收舍利呈破庵、破庵拈起云、寶上座、饒儞有舍利八斛四斗、置之一壁、還我生前一轉語來、擲地惟見膿血、古人云、傳燈一千七百善知識、有設利者十四人而已、僧寶傳中八十一人、有設利者數人而已、且吾宗所重者、惟在宗通說通、有向上爪牙、爲人解粘去縛、謂傳法度生、餘皆末事也、吾祖宗門下、有難信難解、難透難入底一著子、使學者心死意消、凛然變、勃然興、是謂法窟爪牙、譬如老虎長嘯出林、狐兎狸狢之輩、膽冷股戰不能正立、不得坌視、屎尿俱下何哉、彼具鐵爪金牙如劒樹也、若無此物、將狐兎亦不得異、所以古德曰、予建中靖國之初、故人處獲洞山初禪師語一編、福嚴良雅所集、其語言宏妙眞法窟爪牙、乾道始、瞎堂住國淸、因見或庵讃圓通像曰、不依本分、惱亂衆生、瞻之仰之、有眼如盲、長安風月貫今昔、那箇男兒摸壁行、瞎堂驚喜曰、不謂、此庵有此兒、卽遍索之、遂得於江心、固於稠人中、請充第一座、吾聞、見人寔難、聖賢其猶病諸、而瞎堂見五七行讃辭、請來爲第一座、將容易耶、將暴

卒耶、將又有所見耶、寔可怪、淨慈水庵師一禪師、室中垂語云、西天胡子沒鬚髭、僧傳至或庵處、庵云、餓狗喫繂繉、僧因擧示水庵、水庵云、此是五百人善知識語也、如舒州投子和尚、聞大隋隨佗去之語、炷香禮拜云、西蜀有古佛出世、君看明眼宗師、一見不殘毫釐、如秦鏡照肺腑、洞山曉聰禪師、初見文殊眞禪師、師示衆曰、直鉤釣驪龍、曲鈎釣蝦蟆蚯蚓、還有龍麼、良久云、勞而無功、龜毛寸寸長、師即有省、後在雲居作燈頭、見僧說泗州大聖、近在楊州出現、有設問者、曰、既是泗州大聖、爲什麼却向楊州出現、師曰、君子愛財、取之有道、後僧擧示蓮華峯祥庵主、庵主大驚云、雲門兒孫猶在、中夜燒香望雲居拜之、吾聞、庵主者祖雲門父奉先、其機鋒卓絕、而二十年試人、終然契其機者、縱六方恒沙刹土調御師、同時出頭來、放無量大光明、現無量大神變、逞四辯恣八音、而說法如雨、總不顧底惡習老骨檛也、然只今纔聞五七言閑語、燒香望雲居禮拜者何哉、將是何意哉、此孔夫子語、而載魯論中、彼豈從初不知此語耶、今俄聞聰公擧、大驚喜、將爲狂與、將爲癲與、將又有所大可貴與、寔可怪矣、佛眼遠禪師住龍門、時一僧被蛇咬、室中擧云、既是龍門僧、因甚被蛇咬、衆下語不契、高庵悟曰、果然現大人相、師頷之、圓悟在昭覺聞得、乃歎曰、龍門有此子、東山道未寂寥、試問、昭覺指以爲寂寥者、胡爲事哉、將其艱辛枯淡之謂乎、將其多衆閙熱之謂乎、吾聞、佛法在正不在盛、然則擔數十桶白飯來、放幾百枚無眼茄瓠、使伊狼貪蠶食了、雖警伊策伊、敎伊六時行道長坐不臥、若其一箇無抱道衲子、昭覺必言、枯淡也艱辛也、縱雖一箇雖半箇、雖在陰僻陋巷上漏下濕底三間老屋裡、縮頸屈膝坐、專一究明宗旨、昭覺必言、富貴也盛大也、然則非古人爲寂寥者今人盛事、而今人

爲盛事者古人之寂寥哉、何至此極哉、黃龍慧南禪師嗣慈明、初受泐潭澄印證、領徒遊方、以氣自負、偶會雲峰悅同遊西山、夜話、問泐潭所授之旨、師言其要、悅曰、澄公雖雲門後、然法道異耳、師問所以異、悅曰、雲門如九轉丹砂、點鐵作金、澄公藥汞銀、徒可玩、入鍛卽流去、師怒以枕投之、明日悅謝過、又曰、雲門氣宇如王、甘死語下乎、澄公有法授人死語也、死語其能活人哉、卽背去、師挽之曰、誰可汝意者、悅曰、石霜楚圓、手段出諸方、子欲見之不可後也、師默計曰、此實行脚大事也、悅師翠岩而使我見石霜、見之有得、於悅何有哉、卽日辨裝、汝看、古人毫釐不相欺矣、如今時特師承執舊見張氣飾非強自欺、何時有了日、後見慈明、聞其論、多貶剝諸方、而件件數以邪解者、皆泐潭密付旨訣、氣索而歸而念悅平日語、翻然改曰、大丈夫心膂間、其可自爲疑礙乎、趨詣明之室、曰、慧南以暗短望道未見、頃聞夜參、如迷行得指南車、然唯大慈更行法施、使盡餘疑、慈明笑曰、書記、領徒遊方、名聞叢林、若有疑、不以衰老鄙棄、坐而商略顧不可哉、呼侍者進榻、且使坐、公固辭、哀懇愈切、明曰、書記、學雲門禪、必善其旨、如洞山三頓棒、合喫不可喫、師曰、可喫、明色莊而言、聞棒聲便言合喫、從旦到暮、聞鵶鳴鵲噪鐘魚鼓板聲、亦應喫棒、何時當已哉、南瞠而卻、慈明云、吾始疑不堪汝師、今可矣、使拜、南拜起、慈明理前語曰、脫汝會雲門意旨、則趙州嘗言、臺山婆子被我勘破、試指其可勘處、公面熱汗下、不知答、懊惱趨出、明日又遣詬罵、師慚見左右、卽曰、政以不解求決耳、罵豈慈悲法施之式哉、慈明笑、於是悟旨、失聲曰、泐潭果是死語、則獻頌偈出叢林、是趙州老婆勘破、有來由、四海如今清如鑑、行人以道莫爲讎、時南三十五、汝看古人參禪甚辛苦、恰如踏破鵙鴞臭卵、玉鳳乍躍

出於是楊岐黃龍二派、如燕尾別、眞淨和尙初往香城、見上藍順和尙、順問、甚處來、師云、黃龍來、曰、黃龍近日有何言句、汝看若似、今時、令問黃龍近日守幾炷香、誦幾卷經、禮何佛、持何戒、打頭有何言句者何哉、師曰、黃龍近日、州府委請黃檗長老、垂語曰、鐘樓上念讚、牀脚下種菜、下得語契、便往住持、又不見、古百丈大師、因司馬頭陀、自湖南來見師曰、潙山奇絕、可聚千五百衆、師曰、吾衆中下得一轉語出格、當與住持、卽指淨瓶問曰、不得喚作淨瓶、汝喚作甚麼、時華林爲第一座、則曰、不可喚作木楔、師不肯、時潙山靈祐禪師爲典座、則問、祐踢倒淨瓶、師笑曰、第一座輸卻山子也、祐遂往、若令今時擇一員長老、道姓氏如何、出生如何、負擔重輕如何、親族貧富如何、詩如何、文如何、何某面具好長少低、何某長高面具不宜、彼筆墨佳、此辯才不足、長許多無明、而不打如上屎尿、直下見一句子、寔可貴、時勝首座曰、猛虎當路坐、黃龍終令去住黃檗、頗不覺曰、勝首座下得一轉語、便得黃檗住、佛法未夢見在、師於言下大悟、方知黃龍用處、古參玄衲子、不逐寺門繁興、不尋多衆圍繞、只以此大事爲懷、今時叔郎不辨、玉石不分、何某和尙憐衆如赤子、何某長老以禮佛爲眼目、彼日中一食、此長坐不臥、寔肉身古佛也、可惜許、昔密庵咸傑禪師閩人也、初出嶺至婺州智者、偶負暄次有老宿問云、上座此行何處去、云、四明育王見佛智和尙去、老宿曰、世衰、後生家行脚、例帶耳不帶眼、傑曰、何謂、老宿云、今育王一千來衆、長老日逐接陪不暇、豈有工夫着實爲汝輩發機、傑下淚曰、若如此某今往何處、老宿云、此去衢州明果有華蓬頭、雖後生見識超卓、汝宜見之、傑依敎往華、四年[illegible][illegible]盡[illegible]墮命脈、今時與逐粥飯濃厚、尋寮舍穩便、生死不掛懷、參玄不爲念、如[illegible]行、如[illegible][illegible][illegible]入[illegible][illegible]

隔、五祖演和尚示衆云、某十有餘年、海上參尋見數人尊宿、自謂了當、及到浮山圓鑑會下、直是開口不得、後到白雲門下、咬破一箇鐵酸豏、直得百味具足、且道、蘇子一句、作麼生道、乃道、華發鷄冠媚早秋、誰人能染紫絲頭、有時風動頻相倚、似向堦前鬪不休、不開言、自謂既了當、佗若爲自了當、不入圓鑑室內、侍白雲膝下、殆誤一生了、可貴明眼宗師、人天大寶聚也、今時爲自了當、誤了一生、亦未可知、五祖初參浮山遠禪師、遠一日語師云、吾老矣、恐虛度子光陰、可往依白雲、此老雖後生吾未識面、但見其頌臨濟三頓棒話、有過人處、必能了子大事、師潸然、禮辭到白雲、於戲大哉、圓鑑無私照、寔可敬、今時授與一片死法、一印印殺曰、汝亦如是、我亦如是、至死護持必莫教移易、學者亦禮拜頂受、竪守橫守、空過一生了、是何顏哉、彼指教見白雲者、不好門庭鬧熱、偏欲眞風不墜地也、演祖始在磨院、一日、有僧、見磨轉、遽指以問師云、此神通耶此法爾耶、師褰衣旋磨一匝、僧無語、未幾、白雲到來、語師云、有數禪客、自廬山來、皆有悟入處、教伊說、亦說得有來繇、舉因緣問伊、亦明得、教伊下語、亦下語得、祇是未在、師於是大疑、私自計曰、既悟了、說亦說得、明亦明得、如何卻未在、遂參究累日、忽然省悟、從前寶惜一時放下、走見白雲、雲爲手舞足蹈、師亦一笑而已、師後云、吾因玆出一身白汗、便明得下載清風、可貴演祖纔累日苦吟、乍超三賢四果堦漸、徹四七二三玄賾、其樂說無礙辯、答則出人意表、問則學者喪氣、願是大丈夫兒、傑出萬夫者之所懷、而庸才惰弱士之所以斷望於其際者也、昔大禹雖播除四百州患難於洪水、三五載費役多少人力、昔漢高雖隆興四百年洪基於草昧、四十年傷害許多生命、彼有漏世間功業、此無漏出世勳果、非天淵杳殊者乎、有般底杜撰、

集七八輩部屬、憍眸如虎、杭鼻如象、公公乎而告曰、如何某長老者寔佳、詩人李于鱗、文效袁中郎、且常住豐饒當時無雙也、二時粥飯、三時點茶點心席、未卷藥石板又鳴、其所授與宗旨、專直指法、而令人悟入、寔如拾芥、張三亦立悟去、李四亦直會歸、于士于農于工于商、及屠沽負販人、纔入門閫來、不打徹半箇無、不知天壤之間、那箇叢林勝之、行脚若不入此門、一生錯履參學事矣、嗟汝是何處墦間乞兒耶、汝所謂直示、誰家曲調耶、如拾芥、胡爲其易耶、嶺南秘訣乎、濟北宗要乎、此事若說得足、教得成者、豈道佛祖不傳妙哉、昔香嚴智閑禪師參溈山、山問、我聞、汝在百丈先師處、問一答十、問十答百、此是汝聰明靈利、意解識想、生死根本、父母未生時、試道一句看、師被一問、直得茫然、歸寮將平日看過底文字、從頭要尋一句酬對、竟不能得、乃自嘆曰、畫餠不可充饑、屢乞溈山說破、山曰、我若說似汝、汝已後罵我去、我說底是我底、終不干汝事、師遂將平昔看過底文字燒卻曰、此生不學佛法也、且作箇長行粥飯僧、免役心神、乃泣辭溈山、直過南陽、覩忠國師遺跡、遂憩止焉、一日芟除草木、偶拋瓦礫、擊竹作聲、忽然省悟、遽歸沐浴、焚香遙禮溈山、讚曰、和尚大慈恩逾父母、當時若爲我說破、何有今日之事、儞看、從上宗師、點滴亦不施、是非惜法、其實惜人也、與今時往往捉頑賤無智、一縷香不堪底癡鈍漢子、提携教示、按牛頭喫草、鑽腋出翼、打許多屎尿畢、印定許可底、非霄壤遙異者耶、若有人、言我能說法使人悟入、須知斯人非眞正導師、斯人從本是非參究底人、縱汝有鶖子智、具滿慈辯才、從上宗師、父子不傳妙、如何得下觜、古如慶喜尊者、佛親戚而自髫齔隨佛出家、爲如來常隨侍者、其親近薰炙者、大凡幾許年、其開示教諭、豈淺近哉、雖然終不能打發、世尊入

滅後、在大潙師兄所、初喪身失命、顧其上古大難、近世大易何哉、蓋道上古者根鈍人薄、而近世者人利根熟乎、將復爲其提携敎示巧妙、不及近世乎、神光及其臂、石霜錐其股、有脇不着席、有足不越閫、何其難耶、若其近世之易是、則上古之難非也、上古之難是、則近世之易非也、大丈夫兒不透過則已、若其開大口、道透過者、縱雖艱辛刻苦經三四十年、須要必定決定到古人所證田地、何容易恃汝如拾芥底輕薄凡解、一生錯半醒半醉去耶、是非齊人走播間計速飽底窮兒變、是故寶藏論云、夫進道之由、中有萬途、困魚止濼、病鳥棲蘆、其二物不識於大海、不識於叢林、人趨乎小道、其義亦然、此可謂、久功中止不達如理、捨大求小、半路依止、以小安而自安、不及大安而安、所謂大者何哉、眞正見性、徹底大法淵源底透過道流、小者何哉、認得見聞覺知底相似禪徒也、於乎、如肇公誠眞正大乘法器也、姚秦時祖師未西來、禪道未東漸、獨立渺茫敎海中流、立至大至正高論、比今時禪徒、非金鍮奴郎遙殊者歟、寔可敬矣、石霜清素侍者閩古田人也、晩遁湘西鹿苑、以閑淡自牧、兜率悅公時未出世、與之隣室、有客惠生荔支、悅命素曰、此乃老人鄕菓、可同飽也、素慨然曰、自先師去世、不見之矣、悅從而問之、師爲誰耶、對以慈明、悅乃乘閑致客、歎其緒餘、素因問子曾見何人、悅以眞淨文和尙告之、素曰、文又見誰耶、悅曰、黃龍南禪師、素曰、南匾頭在石霜不久、其道盛如此、悅益駭異、尋袖香咨扣、素曰、吾福鮮緣寡、豈可爲人師、但子之見解、試吐露看、悅即具陳、素曰、只可入佛、不可入魔、須知、古德謂、末後一句始到牢關、悅擬對、又遽問、以無爲如何說、悅又擬對、而素忽高笑、悅恍然有得、後數月而素乃印可、仍戒之曰、文示子者、皆正知正見、然離文太早、不能盡其妙、吾今爲子

點破、使子受用得大自在、佗日切勿嗣吾、師後嗣眞淨、後來無盡見兜率、擧末後句事、逮能相、過歸宗、夜話及此、眞淨輙怒曰、是何嘔血禿丁、脫空謾語、豈可信受、遂不終語、逮崇寧三禩、寂音尊者謁無盡峽州荊溪、語曰、惜乎、眞淨不知之也、音曰、相公只知淸素末後句、及眞淨眞藥現前、而不能覺、盡驚曰、果有此耶、曰、疑則參、盡於言下頓見師用處、遂炷香望歸宗悔謝、卽取家藏眞淨肖像、展拜題讃於其上、以授寂音、噫悅能扣素而不能忘其轍跡、致無盡從墮其中、非寂音發眞淨瞑眩之藥、何能愈無盡膏肓之疾耶、信宗師爲人、各有惠利、豈易測其涯際哉、予謂、是則是、可惜許、眞淨瞑眩眞藥、被寂音點出、其能恐不及敗鼓皮在乎、嗚呼如居士者、間出君子、而官登宰補、壽近百齡、君信臣貴、士敬民懷、智鑑高明、識量寬大、實王佐才也、寂音行見、妙喜遙尋、有何不足處、聞眞淨詬罵惡發之音、星夜望歸宗炷香禮拜、悔謝何哉、須知、我祖宗門下、有大可怪事焉、百丈大師見馬祖捏住鼻端、乍失安身立命處、濟北檗嶠見打着、家國喪亡、風穴南院見折挫、打失面門、象骨見巖頭一喝、膽魂驚落、雲門見逼折左脚、魂飛魄散、香嚴片瓦觸竹根、石霜見汾陽掩卻口頭、翠巖見瓦片壓倒、佛果讀艶詩淚落、大原聞笛聲心死、妙喜觸南風毒熱、此各打失調御在雪山、見惡星照殺底消息、其得力處、魔外不能窺、疎山和尙初聞香嚴道言發非聲、色前非物、自謂、徹底了當、及辭約待師兄有住處來見薪水、一旦明招見觸破、初知有祖師門下事、歸來聞香嚴示衆、如貴介公子聞田夫說話、卽作嘔吐聲、初以香嚴爲此中有人、爲師資約、纔乃知宗旨、大異舊時、須知、吾祖宗門下、參禪有換骨靈驗、彼若初非攀懶安苦藤、何得成大器、昔龍牙見臨濟打着、卽言、打則任打、要且無祖師西來意、見翠

徵打着、又言、打則任打、要且無祖師西來意、是他見處、上無諸佛、下無衆生、頭不戴天、脚不踏地、盡乾坤大地、一箇無孔鐵鎚、是故明覺名之、爲能所共泯底一枚瞎龍、所恨夢曾不能見臨濟、是即佛祖難醫底大病、往往得此一塊屎丸、則爲祖師面目、爲衣內寶珠、可惜許、殊不知、是此韶陽、平生爲人拔卻底不淨釘楔、縱雖覺知釘楔、漫欲除去之、如彼波旬被魍多挂着底死狗華鬘、波旬初被魍多挂着時、自謂、莊嚴光明、梵釋亦不足羨、載歡喜載踊躍、歸來入天宮、時宮妃嬪御掩鼻走皺額避、於此初了知人狗蛇三屍、臭爛穢惡、氣索魂蕩憤悶憂惱、學人亦如此、初宗師被說破、被授與、被許可、被印定時、自謂、志願成辨、大事了畢、雖佛祖不足羨、如何日往月深、見處偏枯、動靜矛盾、雖暗頭似明、明頭不得半點力、鐵枷金鎖、狐窠鬼窟、正眼看來、滿地一場愁、而祖師門下事、驢年曾夢見哉、不覺爲彼焦芽敗種部屬、是寔非死狗華鬘何哉、走雖遠一四天下、徒增長臭穢而已、何時脫下去、爲之如何、若人欲到從上諸老所證田地、豈其難哉、先須參狗子佛性話、重歲月不染跟者、必有得力之處、捨了見箇難透話頭、必定見得古人受用處、不在悟解了知之間、息耕老師初了悟古帆未掛話、以不爲足、看壽塔話四年、初成就大器、留住大地載不起底見地、茫茫死水裏、鴉亦不顧底一塊臭爛屍、誰請爲十刹大宗匠哉、玆有最後向上秘訣、從上錯會底甚多、胡亂去底不少、宗峰妙超大師云、朝結眉夕交眉、我何似生、此語極難信難解、大定聖應國師云、柏樹子話有賊機、此語極難透難入、可貴兩尊慈、留此換骨秘要、以待有力兒孫、寔眞正法窟爪牙也、若人參窮、一回白汗流、許儞稱息耕東海的兒孫、若又擬議不來、莫言我是華瑀國師兒孫焉、今時諸方往往道、言句是奴子婢子事、我

不要彼奴子婢子事、錯錯、二大老若其奴子婢子乎、我亦奴子婢子而已、我不把儞貴介公子、不嫌儞奴子婢子、既是二大老兒孫、若不透過二大老說話、有何憑據、得稱正法海裏片鱗、末透底士、莫管而得力不得力、純一非純一、唯單單擧揚話頭、要無間斷、譬如代十圍之樹、非所以一斧斤而倒者、刀刀不怠、則不欲其倒、俄然而倒、當其倒時也、雖傭其近遠子弟、勠力欲拒之不可立、如棄六尺身非所以一不善而亡者、行行不休、則不好其亡、卒爾而亡、當其亡時也、雖禱上下神祇、含涙而救不可及、如窮一則話、非所以一擧起而了者、參參不廢、則不要其了、忽爾了、當其了時也、雖命十方波旬障礙、不能窺、豈不快乎、若如彼樵者、纔下一二刀、憂其不倒、問張三、纔下三四刀、憂不倒、尋李四、何日見彼木倒哉、學道亦不異乎、吾今非誇己見逞人我、三十年前正受老人、所嗟悼慨念件件也、每開示此事、無不老涙數行滴衣襟、吾今追憶眞附託丁寧、如無身所置、傾盡心肝、告報諸君者、願努力再挽回祖庭孤危眞風、永隆興禪門最上宗趣、莫慣待老來、予說滿地一場愁、久立大衆、伏惟珍重。

元文第五庚申歲孟正下浣

# 息耕錄評唱剩語

息耕錄第一報恩光孝禪寺語錄冬至小參云、擧、五祖演和尚示衆云、但只喫菓子、誰管樹曲彔、師云、者無厭生老翁、得與麼不知來處、報恩菓子貴賤、價數高低、也要諸人一一知得、鶴林曰、兩箇惡情悰、一箇知碧眼胡闕板齒、不會黃面老臨母胎、一箇似巖頭笑底、不如玄沙道底、點檢看來、共是不致勝狃於大夫、息耕錄第二寶林錄中曰、首山省念禪師綱宗偈云、咄哉巧女兒、擬梭不解織、看他鬪鷄人、水牛也不識、咄哉拙郎君、巧妙無人識、打破鳳林關、着靴水上立、今時諸方異解紛紛、或執五位配合、引賓主粘着、一箇不足把、大瞎却後人智眼、就中有稱龍抄者、恣逞出自家盲解、書之梓之、甚妨人悟門、予從頭一筆勾下、不欲使後人隻字照顧、且又有大可怪者、有稱汾陽註解者數十字、每句令履穿之者、看來似可與龍抄一狀領過者、顧是汾陽和尚、未見首山以前註者乎、將又後人謾竊註、假名於汾陽者乎、原夫汾陽善昭禪師者、首山鍾愛、石霜特估、智鑑高明、識量寬大、時稱西河獅子、豈容易哉、師若握首山三指註、星夜炷香望西、大展九拜以謝罪、師若握首山兩指註、長沙道底、息耕云、首山自謂、得臨濟正傳、卻作野干鳴、致令天下兒孫箇箇拕泥帶水、予一見不覺寒毛卓竪、是大似于房遙目送沛公了、歸來竊燒卻梭道者、雖然夢曾得見首山哉、何故首山是黃檗第六世。

息耕錄第八解夏小參云、呼風嘯指、傍若無人、百數成群、不屬王化、及乎言薦賞勞、使如暗中

取物、其間有一箇半箇、知因識果底、頂在額角頭上、不敢妄有走作、驀然蹉卻、蹈殺一箇蟻子、便乃話頭不圓、只如西天廣額屠兒、放下屠刀云、我是千佛一數、又作麼生、出來下得一轉語、管取別甑炊香、風呼嘯指之四字、諸鈔及古今註解雖紛然、各不諦當、是故古來為息耕錄中最後難處、宜哉、先軍不碎、後陣可知、上頭莽鹵故、下文轉莽鹵也、予讀到此、苦吟者一夜、爆然而見徹、恰如劈竹三節、節節待刃、下面數行難處、煥乎而似見掌上、不堪歡喜、書以授諸子、是無佗、從前諸老、被欺誑國字板點、不能見得透、所謂呼風嘯指者、呼喚風詠、嘯歌指揮之義也、言、諸方叢林、有一員宗匠、建法幢行眞施之日、百數成群、萬指聚頭、其初入保社時、肅容規步、如攀油似踏氷、齊眞正參禪以生死為念、以究明為懷者、既而纔向月餘少、知寮舍廣陜鍋釜大小、則乍敖放瞥脫、縱橫不羈、涉庭階呼喚、遶廟塔風詠、傍松根嘯歌、立廊廡指揮、不循規不守矩、不屬王化、傍若無人、知他是凡乎是聖乎、擊風擊顚、有盤山風標、有普化體裁、甚痛快也、所悲者、到尅期取證、言薦賞勞之日、俄低首窘肩、平生高笑濶論、毫釐不能使得、戰戰栗栗、無半點氣力、懞懞懂懂、如暗中取物矣、於息耕纔下得四字葛藤、模寫一箇輕薄衲子、束抛出諸人面前、寔不妙哉、息耕面前不取儞縱橫不羈、不要儞綿綿密密、只求眞正透過底漢子、是故擧此一段險處、時人錯看過底甚多、既是屠兒廣額、放下屠刀云、我是千佛一數、又作麼生、莫謂、此是說不涉修證、不假悟明、人人本具實成、久遠道理來、若果而者般見解、屠兒且置、刀子亦不能見、何故臍堂自養千均弩、枉恐虞人鼻孔長。

息耕錄第六黃檗噇酒糟漢、鶴林云、黃檗大師綴五羊皮、以擬千狐腋、雖者僧有信越才、如何

兩處不見功、將何爲驗、力拔山、氣蓋世、雖不行、雖不行、虞子虞子如爾何。

息耕錄續翶龍抄第八、師在靈隱鷲峰塔、杜絕世諦、衲子請益、遂立三問示之、各令着語。

一者、已眼未明底、依甚將虛空作布袴着。

二者、劃地爲牢底、因甚透者箇不過。

三者、入海算沙底、因甚針鋒頭上翹足。

鵠林曰、息耕老師、末後吐出三行毒涎、以待負命底兒孫、恰似武侯預敷八陣以護巴蜀、可謂親切也、右問三章、每章二句、余一見彼錄中、各於章左邊、類下語者三十字、朱字以書之、附後生者在、或曰、是近世何某宗匠講錄之次、所註解者也、江湖瞻撥龍象、記寫以秘重之、予於此不覺大息曰、嗟已哉、息耕東海日多兒孫、既今拂土滅絕、譬如龍泉大阿、冷焔照膽、祥光射斗、群妖悉走、閑鬼驚潛、作落野人奴隸手、則刈柴劈篾、霜及折碎、終不及菜刀、是寔世無知劍人之謂乎、者箇三箇問頭、其峻過九虎關、若恁麽透過爲有分、跛鼈望禹門者也、恐有關吏抱腹大笑乎、我今非輕忽諸方、只恨此文喪盡、參玄上士、請顧焉。

白隱禪師息耕錄開筵普說　終

國譯禪學大成奧付

昭和五年十月十五日印刷
昭和五年十月二十日發行

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
宮下軍平




印刷者　東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本茂人

印刷所　東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本印刷所

發行所　東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番
二松堂書店